有島武郎全集　第四巻

「死と其の前後」舞臺面（大正十年九月有樂座上演）

「御柱」舞臺面（大正十年十月新富座上演）

第四卷目次

戲曲

目次

ホヰットマン詩集

第二輯

有島武郎全集 第四卷

戲曲集

(附) ホヰットマン詩集

老船長の幻覺

老船長
水夫長
老船長の孫娘
兩替商のシンハリース人
A B C ｝難破船より救はれし人々 ｝幻像
醫師の娘

Topsail（トプスル） Schooner（スクーナー） の船尾なる船長室。狹き室内には諸國の寫眞記念品など所狹きまで飾りあり。中央の卓上には大なる海圖（チャート）と兩脚器（コンパス）と置かる。
船窓（ボート）の彼方には、刻々に移らふ暴風（しけ）模樣の空の色見やらる。
幕開く。老船長獨り。

船長寢床の上に横はりてあり。暫くして頭を擡げ、海圖を眺め、兩脚器を取り上げて距離を計らんとせしが、懶（もの）うげにそ

を擲ちて、仰向けに床上に横はり、一つの寫眞を取り上げて眺めながら默想に沈む。風の音。

暫くして孫娘戸を開きて顔だけ出し、

孫——お祖父様……お祖父様つてば……船は出さないんでせう。

老——(沈想に耽りながら)うむ、出すのだ。

孫——出さないんでせう。

老——(返事せず)

孫——だつて水夫長がさう云つてゐましたもの。(部屋に這入り來りて海圖の前に立ち)今何處にゐるのこの船は。

(船長の默せるを見て)まだお頭が痛むの。

老——痛いな。……水夫長はゐるか。

孫——えゝ、ゐてよ。

老——呼んで來てくんな。

孫娘退場。

暫くしてA、B、C、突然室内に現はる。Aは老人。Bは若き商人。Cは世帯染みた中年の婦人。三人の云ふ事は老船長にのみ聞こえ、姿は老船長にのみ見ゆ。

A——今度の航海はおやめなさりませ。

B——屹度暴風ますぜ。

C——あゝ思ひ出しても怖い事。

C
B
A
}——風が！（強風の舷をかすめる音聞こゆ）

A——風がまた出て來ましたよ。もう音だけ聞いてもいやだ。

C——あの時も檣がこんなに鳴つて、炭がはねるやうに折れましたわ。あなたのお船さへ來なからうもんなら、今頃私達はまあどんなになつてゐたでせう。

A——御出帆は是非おやめなさいまし。

水夫長入り來る。A、B、C、のあるのを知らず。

水——御用でしたか（傍の椅子に腰を下ろし、間を置いて）……出すとしても病氣が直つてから出す方がいゝね。

B——此度又暴風ますぜ。

老——暴風てもいゝ、出すよ。

水——さあこの様子ぢや、たんと暴風もしまいが、御病氣ぢやしかたがないね。一體今度は何處に行くんです。

老——この海圖には出てゐないて。こいつの西の方になるんだが……水路部ではまだ出しとるまい。

C——そんな地圖もない處にまあ。而して何の御用でいらつしやいますの。

老——今度の目的ばかりは自分でもはつきりは判らんがね。……

水——それは一寸をかしなもんですな。兎に角病氣の癒るまで延ばしたらいゝでせう。

この時突然醫師の娘現はる。その言葉は老船長にのみ聞こえ、姿は老船長にのみ見ゆ。

醫——まあ息苦しいつたらない。澤山見舞人がありますのね。窓を開けませうね。

老――（暫く沈默の後）さう……

水――それが宜う御座いませう。

　　自然に窓開き烈風吹き込む。

醫――はゝゝ（高く笑ふ）……こんな日だつたぢやないの。（老船長の寢床の脇に腰かける。船長面をそむける）

水――これぢや風過ぎませう。

老――うむ。

水――閉めませうか。

醫――閉めちやいけない……閉めるんぢやありません。

老――暫くそのまゝにして置かうよ。……風といふと兎角事が起りたがる。なあ水夫長。何時か烏島の噴火の時、難破船があつて、三人救つた事があつた。あの時も今日見たいな吹き廻しの激しい東南風だつたな。

　　この時孫娘入り來り、默したるまゝ水夫長の膝に上る。老船長はその頭を撫でんとする如く手を延ばす。屆かずして醫師の娘のさし出す掌の上にその手をおく。

こいつが病らつたので、死ぬ程心配して介抱したのもこんな日だつたと覺えてゐるし、それから……（ぢつと醫師の娘の顏を見る）

水――あの醫者の娘の騷ぎのあつたのも……（老船長の眼思はずたじろぐ）

醫――さうよ、さうよ。

水――今日見たいな日でしたぜ。何んでもあの娘は餘程變者でしたね。あの齡の若い男振りのいゝ軍人の金モールより、船長の白髮の方がいゝつてんだからな。はゝゝゝ。

今まで水夫長の膝の上にて海圖に見入りつゝありし孫娘突然首を上げ、

孫——お祖父様——醫者の娘つて誰。

水夫長ぎよつとして口をつぐむ。

老——それはな、お祖父さんもよくは知らん人だ。

孫——何故、その人は知りもしないお祖父様が好きなの。

老——その人の嫌ひな旦那さんとお祖父さんが喧嘩をしたからだ。

孫——喧嘩？

老——おう。

孫——お祖父様が？

老——うむ。

孫——まあ、……何故喧嘩なんぞなさつたの。喧嘩をしちや、いけないんでせう。……何方が勝つて。

醫——（孫娘を尻眼にかけて）これは何處の子？　どうして子供つてものはかう五月蠅いんでせう。こゝにゐる男と一緒にあつちにやつて下さいまし。

老——水夫長、お前は暇を取りたいと云ふんださうだが……

醫——勝手におさせなさいましな。水夫の一人や二人。

水——さうです、その……

老——（苦しげに頭を押へながら）又頭痛がして、頭の中ががんがらかり出して來た。……氣の毒だが水夫長、暫くの間この子を連れて出てゐてくれんか。よくなつたら又呼ぶから。

水――はあ、それはいけませんね。それぢや又……さあ孃ちやん、行きませう。玉が甲板で待つてゐるよ……曹達水か何か持つて來ませうか。

老――いや別に欲しくはないから。

水夫長、孫娘退場。

醫師の娘徐ろに立ち上りて水夫長の出て行くのを見送り、きつと船長に向き直り、

醫――さあ醫者の娘の云ふ事をお聞きなさいまし。

A、B、C、も亦老船長の傍に迫る。老船長それを見て苦しげに頭を押へる。

A――船長、あなたを見す〱お殺し申したくないからこんなに申すのです。

B――一體全體目的もないやうな、そんな不理窟な航海をなさると云ふ法はないぢや御座いませんか。

醫――決心の出來るやうに思ひ出して御覽なさい、そら、あの時の事を。（身をすり寄せて）……あなたの血を若くしてあげたのは誰（老船長の額に手をあてゝ）で御座います。……丁度今日のやうな暴風日でした。

C――どん〱暴れまさつて參りますよ。

老船長――さうだ。

醫――あなたの胸の奧の奧底に、私の良人の手から私を奪はうといふ執念が、陶物竈の火のやうに燃えてゐたのを私はよく知つてゐますよ。私はあなたをさうやつて燒いてゐながら、仕舞にはその火の色に見とれてしまひました。

老――俺は頭が痛むのだ。

A――さうでせうとも。それだから……

醫――(Aの言葉をおつかぶせて)え〻私は不貞腐れで御座いませう。それにしても、お二人がピストルを持つて甲板にお立ちなさつた時までは、私でもやつぱりあの人に未練がありました。

老――俺はもう何も考へたくない。

A――それがよう御座いますとも……

醫――(Aの言葉をおつかぶせ　)けれどもあなたが、見事にあの人の腦天を擊貫いて、びくともなさらずにいらつしやるのを見ると、私は始めて男の力といふものを知りました。而してあなたと二人ぎりで、この船で、人の知らない遠い所に行かうと思つたのに、あなたは急に港に船を着けて、――ぢれつたいたらない――私の手一つ握らずに上陸させてしまつて、……あなたはそれでも氣息をして生きていらつしやるお積り？……

老――俺の死は近いのだ。

B――だから申さぬ事ぢやありません。

C――(Bと同時に)そんな緣起でもない事を仰しやつて。

醫――殺生をしながら、半殺しでもうおびえてしまつて、わな〳〵慄へて見ていらつしやる……それが道德堅固といふものですつて？

C――(恐ろしげに)風が(風の舷をかすめて去る音。A、Bも亦顏色をかへる、老船長も耳を傾く)

醫――何をそんなに聞耳なんか立て〻いらつしやるの……風位が何んです、波位が何んです。

老――(妄想を拂ふが如く醫師の娘の載せたる額の手を拂ひながらや〻起き直り)うむ、風でも嵐でも凌いで見せようが、俺は一體どう行くんだ。(再び兩脚器を取りて海圖の上にあてがふ)

A、B、C、その傍に集まる。

醫――から行くんです。（老船長の手を持ち添へて兩脚器を海圖の外に出す）

A――それ、そんな事をなさるから危ないと申すのです。

C――そんな地圖もない所にいらしつて、海が暴れたらお身體に大事が出來るでは御座んせんか。私共のやうに助けられゝば好う御座いますが、その邊には屹度船なんぞはゐないに違ひ御座いませんよ。

B――さうだ、可愛いゝお孫さんもいらつしやるのに……失禮ながらそれはどうしても思ひ返していたゞかなければ私達は默つてゐられません。こりやまあ何んといふひどい風になつたもんだ。

窓を通して吹きこむ風に亂るゝ髪をなでつける。

B――一體何んだつて海の上の御商賣などを未だになさるのです。私達には第一それからが判りませんな。あなたは現在、私達が死にかけた所をまざ／＼と見てお出でになりながら、この恐ろしい海の上に、やつぱり寢起きをなさらうといふ、全く判りませんよ。

A――どうか私共の出來ますだけの御恩報じはしますから、もう船乘商賣は……お齡でもありますから……

醫――（舌打ちしながら）そんな小さな兩脚器で測れますものか。捨てゝおしまひなさいまし、そんなものは。よ。

老船長斷念したる如く兩脚器をはたと床の上に擲ち、仰向けに枕に倒る。同時に甲板にてけたゝましき音。

C――そら大變！

A、B、共に極度の恐怖の色を現はす。

醫――はゝゝゝ。（狂へる如く笑ふ）

孫――（戸より顔を現はす）お祖父様大變よ。

水夫長入り來る。老船長始めて眼を開き、

老――何んだつた、今の音は。
水――何ね 前檣の 定索 が一本切れたんです。直ぐ修繕するやうに云つときました。……如何ですお加減は？

老――さあ格別。（云ひながら醫師の娘の手を取る。醫師の娘身をかゞめて、己れの顔を老船長の顔に接せんばかりになし強き語氣にてさゝやく）

醫――さ、決心をなさいまし……今まで如何云ふ心持で航海をなさつたの？……何時でも……何時でもあなたの脚許には、地獄の釜の蓋が開いてゐたのですよ……それを百も承知なさりながら、悪びれもせず、舵輪を握つて、見事にこの船を操つていらしつたではないの……海の彼方に……ね……行きませう……さ、行きませう……そこも海ですわ……船さへあれば行かれる筈よ……海圖がない？……航海すればこそ海圖が出來るんですわ……海圖なんぞのありやうのない……船のキールが一度も波を切らない……彼方の海に行きませう……死んでも死骸が人の眼にかゝらない處まで……

老船長の衰へたる眼には希望に似たる輝き滿ち溢る。宛ら夢みる如く醫師の娘を見据ゑながら水夫長に云ふ。

老――水夫長、先刻話した醫者の娘な。
水――はあ。
老――上陸してから如何なつたか知つとるか。
水――すぐ男をこしらへましたよ。
老――（驚きの色）何！
醫――はゝゝゝ。

水――それがね船長、變なんですよ。今まで默つてゐましたがね、その娘の男といふのは、この船にゐた、それ何んとか云ふ名の、質の惡い眼付をした三十恰好のボーイでね。何んでも上陸してから三日目かにその女に殺されちやつたんだ。

醫師の娘、險しき眼色して水夫長を睨む。老船長は熱心に水夫長の語る所に耳を欹てる。

老――何んだつてやつゝけたんだ。

水――それが變だつていふものは、そのボーイがあなたの寫眞を持つてゐたんだが、殺された後にいつて見ると、その寫眞だけがなくなつてゐたんですとさ。

老船長寫眞を取り上げて眺める。

それからつてものはその娘の影も消えたやうに亡くなつてしまつたんですとさ。これですねあの娘は（云ひながら船長から寫眞を受取りて眺め入る）全く凄い顏をしてゐますね。美しいから餘計凄いや。この女に見込まれたら成程助かりさうもないね。（氣味惡げにあたりを見廻す）船長、どうもこんな大きな圖體をしてゐて、こんな事を云つちや恥かしいんですが、私はこの話を聞くとこの船にやあやかしがついてるやうで、どうも氣が落着かなくなつたね。だから昨日船長が途轍もなく船を出すと云ひ出しなさつた時、私は上陸させて貰ひたいと願つたんです。永年お世話になつてゐて、こんな時こんな事を云ひ出しちやすみませんが、馬鹿を云ふやうだが如何してもけちが憑いちまつたんだから、私が乘つてると、いゝ事はなからうとさうも思ふんです。

C――まあ怖い。

B――あなたはそんな物のお解りにならない方ではない筈ぢやありませんか。

水――船長、あなたもこんな事を聞かされちや寢覺めがよくないでせう。それだから今度は……御病氣でもある

し……おやめなすつたらと云つたんですが、如何(どう)してもいらつしやいますか。

醫――(魔の如く再び近寄りて)よ、決心!

A――いらつしやつちやいけません。

B――あなたには魔がさしてゐますぜ。

醫――よ、決心!

C――どうぞ〳〵お思ひなほしになつて……(涙聲になる)

醫――よ、決心!……よ!

老船長の眼、異様に輝く。その眼の光はさながら醫師の娘の眸の中に吸ひ込まるゝが如し。

老――(決然として)行く!

A、B、C、驚きて後しざりす。醫師の娘は凝然とし石立。

水――いらつしやる?

A――(水夫長と同時に)ほんとうに?

老――行く!

C――いらつしやる?

醫――いらつしやる!

老――うむ行く!

水――そりや然し。

A――(水夫長と同時に)いけません。

B――（Aと同時に）そんな亂暴をなさつて。
醫――いらつしやる！
老――うむ、行く。俺は行くと決めたんだ。
醫――はゝゝ、
　A、B、C、忽然として影をかくす。
　孫娘入り來る。
老――お前一寸こつちに來い（孫娘を引きよせる）……今度お祖父さんの行く所はな（孫娘、老船長を見つめながらうなづく。以下同じ）……遠い〳〵海の上でな、圖もないのだ。この前、船の着いた所には、色々な綺麗なものや、面白いものがあつた。
孫――えゝあつてよ。バナ、が木に熟つてゐてよ。それから他人の塀の上を孔雀が歩いてゐてよ。それから西洋人のお婆さんが、私の頰ツペに接吻したわ、厭ねえ（接吻の跡を思ひ出して掌にて拭ふやうに撫でる）……お祖父様の歡迎會もあつてよ、ねえ。えらい人が澤山來て演說して、お祖父様も演說なさつたわ。何故？
老――（暫くは少女の言葉に他を忘れて）あれはな、あの島に日本の船が始めて行つたからだ。
孫――それでは今度も歡迎會があるの？
老――いや今度はない。歡迎會は愚か人一人ゐないとも限らぬ。今度行く海には山のやうな波が立つて、どんな恐ろしい魚がゐやうも知れぬのだ。
孫――鯨のやうな！
老――鯨は愚かだ。それでお前はな、今度は水夫長と一緒に陸にゐて待つてゐるのだ。

孫――お祖父様は？
老――お祖父さんは行つて來る。
孫――船は？
老――この船にお祖父さんが乘つて行くのだ。
孫――而して私は行かないの？
老――さうだ。お前はの、好きな水夫長と一緒に殘るのだ。いゝか。
孫――いや……いや／＼……お祖父様いやよ……いや、いや……
老――さう無理を云ふものではない。いゝか、この前の時も海が荒れて、お前は醉つたらう。吐して苦しがつたな。お前がお祖父さんを恨んで「お祖父さんを殺してしまへ」といつたではなかつたか。今度のはそれよりももつと酷いぞ。
孫――いゝえ、醉つてもいゝ。
老――いや／＼醉つてはならん。それにお前も大きくなると是非一度はそこに行かねばならぬ時が來る。その時まで待つてゐるんだ。
孫――私も行く時が來るの？
老――きつと來る。
孫――お祖父様と一緒に？
老――それは分らん。
孫――何故？

老――その頃にはお祖父さんは死んどらうも知れんからよ。
孫――いや、お祖父様いやよ（かじり付きながら）死んぢやいや。いやですつてばようお祖父樣（しく／＼泣く）
老――これさう泣くんではない。さうむづからずに水夫長と待つてゐれば、お祖父さんは屹度死なずに目出度く歸つて來る。屹度來るぞ。
　孫娘尚泣き續く。
醫――（ぎり／＼と齒がみして憤ろしげに）えゝ、うるさい子だこと！　この子は！　彼方にやつて下さい。あなたもあなたねえ。海の事なんぞがこの子に判るもんですか。もう日が暮れかゝつて來るのに早くしないとおそくなりますよ。こんなに愚圖々々してゐて……
老――さあ云ふ事を聞いて早くお前の部屋に行つて支度をするんだ。
孫――いや。
老――水夫長、お前連れていつてくれ。
水――ぢや私にもお暇を下さるんですか。而して如何あつてもお出かけなさるんですか。
醫――きまつてゐます。
老――さうだ。お前には暇をやるからこの子を賴むぞ。
水――どうしてもね。それぢや船長、御無事でいつていらつしやい。さあ孃ちやん行かう。船長はどうしても行くんだとよ。それ船首で玉やが、孃ちやん／＼つて鳴いてるよ。行きませう、さ。（孫娘を抱かんとす）
孫――いやよ……馬鹿（水夫長を睨みしが、ごまかすやうに）玉、馬鹿！
老――（怒、心頭に發して）行けと云つたら何んだつて行かぬのだ、甘つ垂れてばかりゐる。……水夫長、連れて行

け。もう何んにもしてくれんでいゝ……而して早く端艇(ボート)を下ろして上つちまへ陸に。

水——さあ孃ちやん、船長は病氣がよくないんだから、そんなに心配をかけちやいけない。ね、よつく云ふ事を聞いて玉ん所に行きませう。

孫——お祖父様怒つちやいやよ……もう私、怒らないからよう。（おろ／＼聲になりて泣き出す）

老——（落雷の如く）泣くな。（孫娘驚きて眼を見張る）しつこい奴だ。

水——船長そんなに怒らなくつてもいゝでせう。さ、孃ちやん、立派に手々を揃へてお辭儀をするんだ。何、陸にだつて面白いものがあるよ。活動もあるしさ。さ、立派にお辭儀をおし。

孫娘觀念して、泣きじやくりしながら、なよ／＼と辭儀する。水夫長孫娘を介抱しつゝ退場。

老船長涙を拭ひ、つと醫師の娘の寫眞を取り上げそれを見つむ。

醫——あなた！　（老船長愕然として首を擡ぐ）もうあなたと二人きりよ。

老——あゝ。

室内暗くなる。

醫——さあもつとよく私を御覽なさいまし。

老——見えない。

醫——もつとよく。（室内益〻暗く、殆んど綾目をわかず）

老——見えない。

この時突然上より垂れたる電燈の灯ともる。醫師の娘の影は消えて、老船長はその寫眞を見つめつゝあり。

舞臺外にて端艇に乘らんとする水夫長と甲板にある水夫等との間の問答の聲聞こゆ。

水――（端艇内より）それぢや大事にやれよ。今度は骨が折れるぜ……お爺さんの氣が暴れてるから甘く舵を取れよ。

他の聲――（甲板にて）宜候。水夫長……上つたらあいつに宜しくね。

他の聲――（甲板にて）おい錨綱は如何するだい。

水――（端艇にて）そろ〳〵卷いちまへ。もう出してもいゝんだ……それぢやグールバイ。

他の聲――（大勢甲板にて）グールバイ、孃ちやんグールバイ。

　突然兩替商のシンハリース人眞黒き皮膚に奇怪なる印度人の服裝して室内に入り來る。づか〳〵と卓の傍に來り、下手な日本語にて。

兩――旦那さん金替へないか。高く替へるよ。

老――（憤怒の色すさまじく）You damn'd son of bitch! Get out there!

　兩替商平然として老船長より醫師の娘の寫眞を取り上げ、打眺め、ぽんと卓上に投げ出し、老船長を見入りつゝ白き齒を現はして皮肉に笑ふ。

　錨綱を卷く音、風の吹きしきる音。

――幕――

（一九一〇年七月、「白樺」所載）

奇蹟の詛ひ

その日の一年前

A――さうです、生れた時からです。

甲――それはお氣の毒な事ですね。それでは私達が見せていたゞいてゐるやうなこの莊嚴な美しい世界は、遂ぞ御覽になつた事がないのですね。

A――全くその通りです。私から思へばBの足の惡い位は何でもない事です。

甲――ほんとで御座いますね。それにしても情けないのは、聖マルチン樣の御尊像がこの町におもどりにならない事ですね。もう何年になりませう、あの向うに見える山――と申してもあなたにはお見えにならないのですね――あの山の頂はいつも雲に隱れてゐます。そんなに高いんですが、あの山に御尊像が移されてから、さあ、あなたはお何年（いくつ）？　さうで御座いますか、四十五だと仰しやると、もう五十年の餘にもなりませうね、デーンの海賊共がこの町に來ましたのは。

A――さうです、五十年には十分なります。私の五つ六つの時に親達が私を交（かは）る〳〵にだきかゝへて町の中を逃げて歩いた事を今でもまざ〳〵と覺えてゐますからね。あいつらが攻め込んで來る勢といつたら物凄いものでした。聖マルチン樣の御尊像は私の生れる十年前にその山に移されたと聞いてゐますよ。

甲――さうでせうね、つい昨日の事のやうに私達は思つてゐますが、縱令（たとひ）町は燒かれて一軒殘らず灰になつても、

御尊像だけは燒いたり海賊の手に渡したりしては冥加にはづれるといふので、市長はじめ長老の方々が、ある晩そつとお寺からお連れ出し申して、闇にまぎれてあの御山にお移し申したのです。何しろこの町にとつては父とも母とも魂とも命とも尊んだ御尊像がもう町にはおいでにならなくなるのですから、人々の歎きといつたらありませんでした。お寺から町はづれまで眞黑に人が集まつて、泣くやら、すがるやら、氣絶するやら、中には氣が變になつた人さへありました。

A――さうだつたさうですね。然しその時、お見送りをした人は、盲目でも、跛者でも、啞者でも、何んでも一人殘らず癒つたといふぢやありませんか。

甲――ほんとで御座いますよ。あんまりあらたかで薄氣味が惡いやうでした。だからその當座は町中の人は一人殘らず達者で若がへつて、海賊が寄せて來ても、以前には見せなかつた程の勇氣を出して、防戰をしたものです。御尊像が此の町になくなつてから、あなたがお生れなさつたといふのは何んといふ不幸でせう。本當に心から信心してお願ひさへすれば、あの御尊像はきつと驗を見せて下さるのでしたから、あなたのお眼位はすぐ明いたにちがひないのですのにね。

A――さうですね。これも何か神の詛ひを受けた身だからでせう。是非もない事です。

甲――そんな譯でも御座いますまい。

A――然し私は詛ひを詛ひで返すやうな事はしませんよ。神樣は如何なるものも無益にはお造りにならないのですからね。それは私も血氣な時には、どうして私だけこんな人間の仲間はづれに生れついて、不自由な不愉快な思ひをしなければならないかと、しみ／＼不平がましい心持になつた事もありはします。けれども今から考へて見ると若氣の至りです。達者な人の持つものを私は持つてゐないが、達者な人の持たないものを私は澤山

持つてると氣が付いて見ると、今は却つて達者な人達が氣の毒のやうにさへ思へます。
甲——まあそれ程までに落ちついた考へによくおなりになつたものです。私共には、あなたがなさるやうな術は縱令出來ないでも、眼の見える方がどれ程いゝかわかりませんがね。
A——然し眼で見える所はどれだけです。あなたには、私の顏がわかつても、私の心はわかりますまい。御尊像のある山は見えても、これだけ離れると御尊像はもう見えますまい。所が私には、あなたの顏こそははつきりとは見えませんが、想像の力が非常に强くなつてゐますから、何んとなく察する事が出來ます。然しそんな事は結局大切な事ぢやありません。私に大切なのはあなたの心が手に取るやうに判る事です。又私には御尊像の安置してある山こそは見えませんが、御尊像はちやんと胸の中に——昔この町のお寺に宿つていらつしつたやうに、宿つてゐます。これを思ふと私の肉に降つた神の詛ひは結局私の靈には祝福なのです。
甲——さう仰しやれば本當で御座いますね。
A——私が人の身の上を判斷したり、禁厭で病氣を直したりする力を得たのも盲ひてゐればこその事です。如何ですこの間の占斷は中りませんでしたか。
甲——そのお禮をするのをつひ忘れてゐました。ほんとに恐ろしいやうに中つてをりました。あの寶石は成程仰しやる質屋から出て參りました。お恥かしい事で御座いますが娘が知らない中に持ち出してゐたので御座います。……でも娘はその事を私に白狀致す前にあなたに申し上げてしまつたのだと申しますが。
A——それは仰しやいました……仰しやいましたが、私の方から圖星をさしたからの事です。私はその前からちやんと承知してゐたのです。これは內祕ですが、あなたはあの跛者のBに用心なさらないといけませんよ。あの男はあんな片輪でゐながら、女達をたらかす事にかけては驚いた腕を持つてゐますからね。お宅で一番大切

になさる寶石を、若い身そらのお孃さんがだい〳〵しく持ち出すには、何か後ろに智慧を貸した者のあつた位はお考へつきにならねばならぬ筈です。

甲――まあ何んと仰しやいます？　それではあの娘は……。

A――寡婦暮しをなさると色々な御心配がありますね、お察し申します。眼の見えない私には幸か不幸か眼の見える人より廣く深く物が見えるのです。Bといふ男は片輪をいゝ餌にして人の情を無闇矢たらにひつたくつて生きてゐるおほそれた男です。あんなものにかゝり合つてゐると、あなたの財産はおろか、お孃さんまでどんな目に遇ふか判りはしません。さう〳〵私の心の眼にははつきりとあなたのお家の未來の有様が見えて來ました。Bの奴がだん〳〵お孃さんにもたれかゝつてお孃さんの心をたらかしてゆきます。何んにも知らないお孃さんは、仇情と哀れさとにほだされて、あなたも家も頭にはなくなつてしまひます。あなたはお苦しみになります。然し世の中は恐ろしい人間ばかりです。御相談相手になるものといつては、盲目でこの世に何んの慾もない私位なものです。所がまつすぐな人間は兎角人からそねまれるもので、いまに色々な噂をあなたは耳になさるでせう。あなたの財産に私が眼をかけてゐるとか、あなたと私とが親し過ぎるとか、私はあなたと親しくしながらお孃さんまでねらつてゐるとか……。そんな事をいひはやす時がきつと來るでせう。……世の中といふものはどうして是れほど罪の淵に沈みはてたか、實に歎いても餘りある事です。

甲――まあ恐ろしい事が……。

A――眼の見えないお蔭で私は人情の裏表をすつかりと味はされてゐます。あなた方御丈夫の方々の苦しみといひ、悲しみといひ、喜びといひ、憚りながら私の味つたものに比べて見ればまるで生活の上澄のやうなものです。人間の本當の味は片輪でなければ分るものではありませんよ。お坊ちやんと苦勞人とのちがひですね、ま

あ。

甲――さうであらうとなからうと、今のやうなお話を伺つた私にはどうでもよう御座います。娘がそんなに墮落したり、私が夢にもそんな噂を立てられたりしては、全く立つ瀨が御座いません。私は一層死んでしまつた方がましだと思ひます。

A――そ、それだから丈夫な人の心持は淺いといふのです。私を御覽なさい。私はこれまでどれ程の惡名を着せられて來ましたか。又どれ程の不幸を忍て來ましたか。親共は私を不信者だ罰あたりだといつて家から追ひ出しました。ある者は私の事をとてつもない嘘つきのくせに占者とは事をかしいといひます。私が婦人達とのあらぬ噂を謳はれたのは幾度でしたらう。それはあなたもよく御承知な筈です。この憐れな盲目の正直者を相手にしてさへ、世の中はそんな無慈悲な事をするのですからね。私はその間をどれ程深い忍耐と謙讓とで過して來たか一寸あなたには考へられますまい。聖マルチン樣のおいでにならないこの町は、いはゞ主人の留守な家のやうなものです。兎角いろんな惡戲が湧き出ようとします。丈夫な人間達はそれ〳〵の慾に渇いて他人の事なんか思つてはゐませんよ。さういふ時に私のやうな片輪者が役に立つのです。私は神樣の爲めにはどんな惡名も忍び、どんな誤解も氣にせずに、神樣の賜はつた力の限りを盡して、守護聖者のお歸りの日を待つ決心をしてゐるのです。神樣は私をお苦しめになつた。その酬いとして人の見得ないものを見る力を賜はつた。その力をつかつて少しでもこの町の人達の役に立たうとするのに、詐僞師だ、いかさま屋だ、女たらしだと罵られるのです。けれどもね、世の中はこんなものだと思つてゐさへすれば腹も立ちません。

甲――本當を申すと私さへ一時はそんな事を思つた事が御座いました。お恥かしう御座います。

A――今でもあなたは心の底には、私に對して不安を持つていらつしやるね。私にはよく判りますよ。何、さう

お驚きにならんでもよござんす。然しいまに判る時が來ます。まあ、だまかされると思つて私をお信じなさい。あなたの未來は、私の豫言にさへたよつていらつしやれば、必ずいゝ方に向きますから。人が何んといつてもうつかり乘せられたり信じたりしてはいけませんよ。

甲――はい。ほんとに御親切にありがたう御座います。おや、お前お歸りだね。

乙――お母さん唯今。今そこでB樣にお遇ひしたのよ。いつものBさんの袋の中には大勢の人が色々なものを投げ込んでゐましたわ。

甲――お前まあA樣に御挨拶でもなさいね。

乙――今日は。いらつしやいまし。

A――あなたは一日々々といふより一時間々々々に美しくおなりだ。……何をさうお笑ひなさる……眼あきのやうな事をいふからですか。私の心の眼にはあなたがはつきり寫つてゐるのだから仕方がない。そんなに氣味を惡がらずと宜しい。私にかゝつてはどんな物でも隱れおほせはしませんよ。ましてお孃さんのやうなあでやかさがどうして。

乙――まあA樣。

甲――お前、一寸行つてお酒を持つて來て差し上げるといゝ。

A――いえ、そんな物はいたゞかない。私は堅く戒行を守らねばならぬ體です。お孃さんはゐませんな。あの寶石の事は何んにもお孃さんに仰しやらないがよござんすよ。過去の事は繰り返しても無駄ですからね。それでは又お目に懸ります。

甲――まあ宜しいでは御座いませんか。どうしてもお歸りで御座いますか。まだ色々占つていたゞいたり、御相

談に乘つていたゞく事が御座いますのに……それでは是非近い中にお出でを願ひます。ちよつとお待ち下さい、これはほんの少しばかりで御座いますが。

A――何んですこれは大層重いがお金ですな。これは法外です。いたゞく譯はありません。

甲――さう仰しやられるとお恥かしう御座いますが、ほんの御禮心に……。

A――いやいたゞきますまい。それから一寸申しますが、今お孃さんの噂に出たBの奴がきつとお宅に來て何か云ひがゝりをしますから、取り合つてはなりませんよ。今一寸さういふ神の御告げを受けました。私の事についてBのいふ事なぞを髮の毛程にもまにうけてはいけませんよ。では左樣なら。

甲――左樣なら。

A――又一寸もどつて來ました。今下さつたお金は矢張りいたゞいて置きませう。今戸口を出たら突然お告げがありました。その金は甲の心からの淨財だからそれを持つていつて貧しい者等に施(ほどこ)してやるがいゝと仰せられました。

甲――まあ左樣で御座いましたか、難有い事で御座います。御不自由なあなたがそんな事をなさるのはお氣の毒で御座いますね。それでは兎に角これだけ差し上げます。

A――また一層重くなりましたね。あなたの上に神樣の祝福を祈ります。

甲――アーメン。

乙――お母さん、あなた何かあの人におやりになつて？

甲――いゝえ別に……。

乙――おやりになつたわ、今一寸見てよ。何んだつてあんないやな人におやりになるの。同じ片輪でもBさんの

方がどれ程しとやかで可哀さうだか知れやしませんわ。

甲――それはBさんも可哀さうでないとは私はいはないよ。けれどもお前片輪でもなんでも若い人にあんまり近しくするのは娘らしくない事ですよ。

乙――まあ誰があんな半分乞食見たいな人に近しくなんぞするもんですか。でもあの人はほんたうに可哀さうなんですもの。そして家柄ももとはよく、學問もある人なんですつてね。

甲――そんな事を……おや戸口を敲く音がするよ。

B――基督の御名によつて脚のなえた憐れむべき若者を受け入れて下さい。

甲――何んです御用は。

B――私は今日から又御山にお詣りに參るのです。

甲――それで施しをしろといふのですね。

乙――お母さん、そんなに沒義道に物を仰しやるもんぢやないわ。

B――いゝえ私はさういふ風に物をいはれるだけの罪人です。どうか私を思ふ存分辱かしめて下さいまし。それだけ私の罪が滅びるでも御座いませう。世の中の人達は私のした位のあやまちは氣にさへる程のものではないと仰しやるかも知れませんが、私にはどうしてもさうは思へません。神樣が私を跛者になさつたのも全くその爲めです。よく生きながら地獄に落ちなかつたもので御座います。どうか御慈悲に私を鞭つて下さい。鞭の一打ちはそれだけ私の罪を輕くするかも知れませんから。

乙――お母さん、Bさんの犯したと仰しやる罪は私が考へてもさゝやかなものなのよ。妹御をたぶらかさうとした男を斬り殺しなさつたのですつて。

B——もう〳〵云はないで下さいまし。云はないで下さいまし。私の胸は裂けさうになります。
甲——まあさう泣かずといゝではありませんか。それで今日は何んの御用でいらしつたんです。
B——お邪魔をしてゐたのをお許し下さい。私は一年に一度づゝあの御山に上つて聖マルチン様に懺悔を致すのです。毎年何分かの御同情を受けて參つてゐます。私の懺悔の誠が通りましたら、この跛者も屹度なほると存じます。さうしたら報謝の爲めに身を粉にしても人の爲めに盡したい覺悟で御座います。齡もまだこの通り若いのですから。それでもこの頃は町の方々も私の心を諒として下さいまして、私にお託しになつて色々な獻物を尊像になさいます。この袋を御覽下さい。私が往來を歩いてゐる中に方々のお賴みものがこれだけになりました。私はこれだけの重みを背に背負つてこゞしい山坂を登るのです。あの嶮しさはこゝからでも御想像が出來ませう。途中には勿論人家一つ御座いません。懺悔文を唱へながら登つて參りますと餘りの靜かさ寂しさに心が氷るかと思はれるやうな事が御座います。この足であの御山を登る——嘘だらうとお思ひなさりはしますまいか。御無理も御座いません。然し神様は照覽まします事で御座います。神様の御威光でデーンの海賊共がこの町を攻める事が無くなる時が參りまして、御尊像が御山からおもどりになる時が來ましたら、市長はじめ長老の方々はBの心づくしの程を眼のあたり御覽下さる事で御座いませう。そこには私が毎年この足で持つて上つた金銀財寶が山のやうに積み重ねられて御座います。御尊像をお迎へ申す費用はそこにある寶物だけで事足る程に積み重ねられて御座います。さあその時が何時參ります事か。多分はこの憐れな私の肉體が死と申すお恵みによりまして、あなた方のお眼汚れにならなくなる後かも存じません。多分さうで御座いませう。その時に町の方々は少しは私を哀れと思召す事も御座いませうか。
　無駄な事を申して、申すべき事を申さずにしまひました。かね〴〵お孃様には殊更御同情に預つてをります

ので、お宅でも何か御山にお上げになるものが御座いましたら、持たしていたゞきたく、せめて御恩返しの一端とも致したいと存じますので御座います。私の罪滅ぼしにもなる事で御座いますし。
甲――ほんとにあなたはあの御山に登られるのですか、その足で。
B――それはどなたもよくお疑ひになります。
甲――あなたはA様を知つてお出でゝせうね。
B――存じてをるどころでは御座いません。
甲――あなたはA樣に顔の向けられない事をなさつてはゐませんか。
B――私はどなた樣にも顔向けの出來るやうな義人では御座いません。
乙――まあお可哀さうにさうお泣きならずと宜しう御座いますわ。御迷惑で御座いませうが私一つお願ひが御座いますから、御尊像にお納め下さいまし。
甲――餘計な事をせずとようござんすよ。お前のものつてものが一つでもある事か。
乙――お母さん……あなたのお心はどうしたの。不自由な體といふだけでも何かして上げていゝのに、そんな情けない事を仰しやつて。
甲――お前まで泣くのかい。
乙――誰だつて町の方でこの方に同情しない方はありませんわ。お母さん一人ですわ。屹度Aさんが何か云つたのね。
甲――仰しやつたともね。あの方位神樣の御心のよくわかる方はないんですからね。お前の知つて〔ゐ〕る事なんか皆んな御存じですよ。Bさん、お氣の毒ですが私の所には何んにもお願ひするものはありませんから歸つて下

さいまし。

B――左樣で御座いましたか。失禮致しました。この町で占者として大層尊敬されてゐるAさんが、[illegible]について何か仰しやつたのなら是非も御座いません。それではお暇いたします。憚りながら神樣の祝福を祈らせていたゞきます。

乙――お母さんあんまりですわ。あんまり可哀さうですわ。私はどうしても何か上げて來るからいゝ。どこの家だつて上げない家はありませんわ。

甲――お前はあの人の魔術にかゝつてゐるのですよ。用心おし。

乙――お母さんこそあのAの誘惑にかゝつていらつしやるわ。私どんな事があつてもあの方をあのまゝ返す事は出來ません。

甲――お前は何を持ち出すのだい。それはお父樣の大切になさつた寶石函ですよ。

乙――それだからこれを上げるんです。お父樣の功德にもなりますわ。私もかなへていたゞきたいお願ひがありますわ。

甲――おほそれた何んのお願ひです。お待ちなさいつていへば。おや、もう行つてしまつた。

その日の午後

乙――私はこんな立派なお部屋は初めて拜見します。

A――私のやうな行者はこんな贅澤な家を欲しくは思はないのだが、誰にでも云つてるやうに御尊像がお歸りになつた節、このまゝこれをお寺に獻げようと思つてゐるからだ。この宮殿は私が神樣から惠まれた力で、皆ん

なの淨財を集めて造つたものだ。盲ひた眼には宮殿も伏屋もかはりはないが、これは聖マルチン樣の爲めにしてゐる事だ。

乙――お許し下さいまし、私は長い間あなたをお疑ひ申してをりました、あなたの遊ばす豫言が皆んな中つて、この町の人達がお蔭で仕合せになりましたり、殊更私共の母も私もこの頃貧しいながら安心して暮して參れますのも皆んなあなたの不思議なお力のためで御座います。

A――見るがいゝ、私の毎日の祈禱もとう／＼神樣のお耳に達いた。デーンの海賊共も去年以來ちつともこの町は襲はなくなつた。聖像がこの町にお歸りになるのも近い事であらう。

乙――まあ、あなたの豫言はほんとに恐ろしいやうで御座います。

A――何んだ豫言とは。

乙――でも唯今の豫言がしつかり中つてをりますから。

A――中る？　何を私が今豫言したな。

乙――仰しやつたでは御座いませんか。まあ私とした事がこんな事を申していゝので御座いませうか。

A――何んだかお前のいふ事は少しも解らない。お前の家がだん／＼貧しくはなるが仕合せになると豫言した、それが中つたとでもいふのか。さうだ富むのばかりが仕合せではない。お前の家といはず此の町は感心によく私等片輪を憐れんで施しをした。殊にお前達は私のやうに神樣から特別の力を授かつたものを尊敬し布施する事を知つてゐた。お前の家が貧しくなつたのは、それだけ神樣のお眼がねに叶つた譯だ。感謝するがいゝのだ。

乙――いゝえそんな事では御座いません。お判りになつていらつしやるので御座いませう。わざと私に隱していらつしやるので御座いませう。けれども私はひよんな事からそれを知つたので御座います。

Ａ――お前は私に隱し立てなどをしてはならんぞ。もつとはつきり云つて見るがいゝ。

乙――あなたの前に何がお隱し出來ませう。あなたは人の心の中を隅々まで御覽になれるんで御座いますもの。その事といふのは唯今仰しやつた聖マルチン樣のお歸りの事で御座います。

Ａ――その事か。聖者はその中にお歸りになる。

乙――いゝえ、あの、もうぢき。

Ａ――何!!

乙――御存じないので御座いますか。

Ａ――私が知る知らないよりも、お前はどうしてそんな事をいふのだ。

乙――昨朝早く市長だの長老の方々だのは、皆んなで祕密でお迎へにお山にお登りになつたのださうで御座います。一つにはデーンの賊共にお迎への事が知れないため、一つには御尊像が町にお這入りになるすぐ前に市民に知らして、人々の喜びを五倍にも十倍にもする爲めに、わざと祕密になさつたのだと申す事を、母から誰にも知らせるなといつて漏らされたので御座います。あなたの事でいらつしやるから疾うに御存じと存じました。

Ａ――聖像が歸る！　……何日歸るのだ。

乙――今夜で御座います。

Ａ――何、今夜。嘘だらう。

乙――嘘で御座いますか、本當で御座いますか、あなたが一番よくお判りになつてゐる筈で御座います。

Ａ――おい、さうぢらすものではない。本當か。

乙――私は母からたしかに本當だと聞きました。

A――おゝ破滅だ。おい誰か來い。Bはどこにゐる。早く使をやつて呼べ。
乙――まあどうなさつたので御座います。
A――詛はれた日め!!!
乙――まあ、そんなにお召物をずた〳〵にお裂きになつて。
A――Bだ、Bだ。Bを呼べといふのに。誰も來なければ私が行くわ。
乙――そんなによろけて。あぶない。そこは戸で御座いませんよ。まああぶない。どう遊ばしたのだらう。

＊　＊

B――私も去年まではAといふ人をえらい人だとは思ひながらどこか山師らしいと存じてゐました。然しこの頃遇つて見ますと見上げた人で御座います。この町中であの人を尊敬しないもののないのも尤もです。私はあの人の使命を助けるためには、どんな苦勞も厭はない積りでございます。
甲――一時はあの方のために私も色々ないやな噂を立てられましたが、この頃になつて見ると、何んだか私に先見があつたやうで御座いますよ。それにしてもあなたをあんなに疑つてゐた私は何んといふ馬鹿でせう。先頃A樣からあなたのお立派な方であるのを保證していたゞくまでは、失禮ばかりして過して來ましたね。嘸お腹立ちでしたらうね。
B――何んの奧樣、私は罪人で御座いますから、さう云ふ待遇を受けますのが當り前で御座います。お孃樣は今日はどちらに。
甲――A樣の所に伺つてゐます。
B――するとお孃さんももうあの人を嫌つていらつしやらないんですね。結構な事です。……お孃さんはどこか

御結婚の御約束がおありなのですか。

甲——御存知の通り家が段々貧乏になりますので、どうも緣が遠くて困ります。然し娘はあなたには大層尊敬を持つてをりますから、この後とてもお力添へを願ひます。

B——あなたがAさんの爲めに淨財をどん／＼喜捨なさるのは町中の評判です。そして感心してゐないものはありません。お孃さんがそれ程私を信じて下さるのは難有過ぎます——私のやうな憐れな片輪……を。

甲——それはさうとあなたは毎年あの御山に町中の獻納品を持つてお登りになつてゐるのですね。

B——今年もさうして登らしていたゞきました。私の外にはよう登る方がないのですから誰方もお存知はないのですが、やがて市長やその外の方々がお登りになる時にはと思つて樂しんでゐます。

甲——そんな時が早く來たら嘸ぞお喜びでせうね。

B——それはまあ私が死んでから後の事です。

甲——若しあなたの生きてる中に來ましたら。

B——私は嬉しさの爲めに氣が違ふかも知れません。何しろ聖マルチン樣が町にお歸り下さるのが大變な事です。

甲——えゝ申してしまひませう。嬉しい事は云はずにゐられませんものね。私の親類の中に長者をしてゐるものがあるのですよ。誰にも云ふなと云つて聞かされた事ですがね、あなたのやうな信仰の篤い方だから申してしまひますわ。あなたがどれ程お喜びになるかと思ふと默つてゐられないんですもの。聖者樣は今晩御山から町におもどりになるのです。

B——何んですと!!

甲——市長と長老達は昨朝早く町の人達には內所でお迎へに出かけたのです。今晩お寺の鐘が鳴るのを相圖に御

布令が出て、町の人達には知らせる事になつてゐるのです。……どうかなさいましたか、お顏の色が青くなつて。それはそのお驚きも尤もですわ。私でさへが嬉しさに胸がどき〳〵し續けですもの。聖者樣が町にお歸りになる喜びばかりぢやない。あなたの長い御苦心が皆んなの眼の前に現はれるばかりぢやない。あなたの御不自由も今夜限りでおなほりになるんですものね。娘もどんなにか喜びませう。……おや、ほんとにどうかなさつたの、唇が恐ろしく震へてをりますよ。

B――水を一杯下さい水を。……いえ、よう御座います。私はかうしてはゐられません。私は一寸Aさんの所まで行つて來ます。ちよツ！　デーンの奴等は何をしてゐるんだ。

甲――そんなに慌てゝあなた危なう御座いますよ。あぶない。杖ですか。それは杖ぢやありませんよ。こゝにあります。まあ何んといふ慌て方だらう。信心の深い人はあの位私共と違ふんだねえ。

その日の夜。

A――誰だ〳〵。

B――俺だよ〳〵。眼の見えないのに慌てゝしまつて耳まで聞こえないと見える。俺だよ、Bだよ。

A――Bだ。惡魔！　とう〳〵破滅だ。俺達の運の盡きだ。

B――それぢやお前はもう知つてるのか。

A――知つてるかつてお前知つてるのか。

B――今甲後家から聞いたんで魂消てしまつて、お前の所に行つたらゐないだらう。何しろお前に知らしたいばかりに、この足がくだけるかと思ふほどゐざり廻つてゐたんだ。

A――俺あ俺であの後家の娘から聞かされたんだ。聞かされた途端に眼が見えるやうになつたかと思ふ程驚いてしまつた。何しろお前に遇ひたい許りに家を飛び出して來たんだ。杖一つ持つてやしない。どうしたらいゝんだ兄弟。

B――地獄が口を開いたのだ。百年目だ。

A――あのあらたかな聖者の像にもどられては、見る〳〵俺の眼はあいちまはあ。

B――俺の足だつて跛者ではゐつこないや。

A――俺は俺の片輪を看板にしてやつて來てゐたのに、この眼に癒られちやほんとに百年目だ。

B――俺だつてこの足が立つちや立つ瀬がなくなる。おまけに町の人達の寶物を山に積んで置いたといふ噓がばれゝば、石か何かでなぐり殺されるにきまつてゐる。

A――俺も寡婦や迷信家から搾り取つた金で建て上げたあの宮殿を、聖像に捧げるのだと云ひふらしてゐたばかりに、盲目といふ商賣道具がなくなるばかりか、今までの儲けは片なしになるといふもんだ。

B――それでもお前は命だけはつながつて行けるんだ。

A――片輪だけを自慢にしてやつて來た俺には、眼が開いて見ろ、飯の喰ひやうがなくなるんだ。お前は殺されれば一と思ひだが、俺はいはゞ五分切りに遇ふやうなものだ。

B――何んだか町中が騷がしくなつて來たぞ。見ろ女子供まで家からぞろ〳〵出だして來た。

A――さういへば布令の聲が聞こえるぢやないか。ぐづ〳〵してはゐられなくなつた。おい俺を早くこの町から連れて逃げてくれないか。

B――さうだ。この町ばかりに陽が照るんぢやない。聖マルチンの野郎がこの町に這入り込まない中に早くこの

町を出てしまはう。

A――おい手を引いてくれ。もつと急がないと間にあはないよ。

B――べら棒め、急げといつたつて俺の足でさう急げるものか。

A――そらもう寺の鐘が鳴り出したぞ。無氣味な音だ。がしん〳〵と頭の眞中に釘をうちこむやうに響いて來る。こゝは何處だ。

B――町の門が向うに見える。さう俺をそつちに我無拾(がむしや)に引つぱつたつて、それぢや見當違ひだ。もつとこつちだ。

A――早く癒りたい〳〵と泣き事を云つてゐた片輪の奴等は、俺等とちがつて、嘸ぞ今頃は有頂天(うちやうてん)になつてゐるだらうな。

B――今更そんな愚痴をいふもんぢやない。

A――お前の足は馬鹿に早くなつて來たな。何んだあの大きな聲は。

B――讃美の歌だ。

A――地獄に行け。畜生！

B――おい炬火(たいまつ)が見え出した。

A――炬火が？　それはどつちだ。あつちの方ぢやないか。

B――さうだ。

A――何？　それぢや俺の眼は少しづゝ見え出したやうだぞ。おや、あれが火の光といふものかな。見てゐると眼の心(しん)が痛い。

Ｂ――俺の足が樂になつたと思つたのもそれぢやいよ〳〵癒り出したのか知らん。

Ａ――門はまだか。

Ｂ――まだ中々だ。

Ａ――あの喜び狂ふ聲はどうだ。

Ｂ――あの人ごみを見たゞけで俺は死んじまひさうだ。

Ａ――――

Ｂ――――俺達はほんとにどうすればいゝんだ。

（一九一七年九月二十日）
（一九一七年十月、「東方時論」所載）

死と其の前後

登場人物

「死」
影人（くろんぼ）　若干人
夫
妻——A子
醫師
看護婦
婆や
一人の男
學生　三人
刑事係
其の他

序幕

幕開く。舞臺中央の奧まりたる所に一箇の焰かすかに燃ゆる外凡て暗黑。かくて時過ぐる事五分。

死――時の流れに漂ふ小さな泡がまた一つ、小さな音を殘してはじける時が來た。その用意をして置けよ。

焰のあたりより感情のこもらぬつぶやく如きこの聲きこゆ。沈默。

死――また一つの命に永劫開く事のない錠前をかける時が來た。錠前はいゝか。鍵はよくあふか。錠前も鍵も銹びてはゐないか。その用意をして置けよ。

焰のあたりよりつぶやく如くこの聲きこゆ。又沈默。その間に舞臺やゝ明るくなり、焰を前にして坐せる「死」の姿灰色の背景中に現はる。舞臺の明るくなると共におもむろに薄れ行く焰の周圍には影人若干人半圓狀にうづくまり居る。

死――その用意をしておけよ。（影人等しく點頭く。以下同じ）悲しみや苦しみや悶えの聲が又ひとしきり時の流れを小さくかきみだすだらう。たゞ今度のは耳にもさはらぬほど小さなものだ。兩手の指の數にも足らぬ人間の足なみが亂れるばかりだ。人間全體はふりむきもせずに、毎時のとほり的もなく急ぎきつてその側をすりぬけて行くだらう。（やゝ暫く沈默）だが、小さくとも大きくとも同じ事だ。――小さくとも大きくとも同じ事だ。やがての果てには、天體の奏でる大音樂の聲も、赤兒のさゝやかな產聲も、靜かになる時が來る――無くなる時が來る――絕え果てる時が來るのだ。凡ては同じ事だ。（沈默）錠前と鍵はいゝか。小さくとも命は命だ。金輪際かきがねがはづれてはならぬのだぞ。過ちなく、急ぐ事なく、この焰は薄れてゆかねばならぬのだ。（沈默）凡そ世にあるかぎりの凡ての焰が消え果てる時――凡そ動くものが動かなくなる時――俺が俺自身を忘れをは

る時、その時の來るのを、靜かに、氣永に、冷やかに、待たねばならぬのだ。この焰も凡ての焰と同じ運命をうけて消えねばならぬ。その用意をしておけよ。（やゝ暫く沈默。焰しきりにゆらぐ）見ろ、焰が悶える。

妻の聲――あゝ熱いあつい。

夫の聲――苦しいだらう。俺が煽いでやらう。

妻の聲――いゝえ。

影人夫妻の聲をきいて立ち上らんとす。

死――靜かに（妻の呻く聲きこゆ、影人又立ち上らんとす）靜かに。お前達は命にそれほど氣を置くのか。哀れな者共だ。最終を考へて見ろ。凡ての命のゆきつく先をしつかりと見つめて見ろ。慌てるには及ばない事だ。（沈默）と云つて、お前達は威嚴をよそほふこともいらない。必ず勝つものには威嚴の要はない。慌てないで命の命ずるまゝにその用をつとめてやれ。（沈默）

夫の聲――ほんとに煽いでやらう。

妻の聲――いゝえ、ほんとうにいゝの。貴方がおきていらつしやると寢られませんから、早く寢て下さいまし。

死――慰め合ふ事のできる間になぐさめ合ふがいゝ。時はとゞまらずに過ぎて行く。（影人に向ひ）お前達は行つて死なうとするものゝ用をたしてやれ。俺はこゝで靜かに焰の戯れを見つめてゐるのだ。（やゝ暫く沈默）明日の朝、萬物に命を與へると云ふ太陽が、新しい光で東の空から眞夏の山や海をかゞやかしく照し始める時、凡てのものが喜び勇んで命を讃美するその眞唯中で、その若い女の小さな焰は燃えつくすだらう。凡ては同じ事だ。明日の朝の七時。お前達は明日の朝の七時を忘れるなよ。

舞臺もとの如く暗くなる。焰しきりにゆらぐ。やゝ暫く沈默。

老婆の聲――奥樣、唯今。
夫の聲――何んだ、何んて仰しやつた。
老婆の聲――あの院長樣はもうおやすみになりましてすから、明日朝八時頃までに伺ひますと仰しやいまして御座います。
妻の聲――さう。御苦勞よ。
夫の聲――來るならもつと早く來てくだされぱいゝのになあ。
死――（恐ろしき暫くの沈默の後）凡ては同じ事だ。
幕しづかに下る。序幕終り。

第一場

海岸保養別莊の一室。庭には小松三四本と朝顏の鉢十あまり。緣側には羽蒲團にて被へる籐椅子一脚。室の中には年若くやせ衰へたる妻呼吸苦しげに白き床の上に仰臥して團扇（うちは）をつかふ。その側に一人寢の蚊帳つりあり。雨戶はあけ放し、軒には岐阜提灯をつる。病室に隣り、腰窓にて庭に面せる一室には、眼鏡をかけたる看護婦看護服を脫ぎすて、就寢の用意をなしつゝあり。夜。波の遠音と蟲の聲のみきこゆ。幕あく。暫くして時計十時を報ず。

妻――看護婦さん。

看護婦――（面倒くさゝうに、然し聲はやさしく）はい。

妻――あなた寢る前にもう一度氷嚢を取りかへて置いて下さいな。

看護婦不承不精に返事して看護服をぬいだまゝ臺所の方へゆく。氷を割る音。

蚊帳より夫出で來る。

夫――（舌打ちしながら小聲に）來る奴〱しやうのない奴ばかりだ。又そんな事を怠つてるのかい。

妻――あなたまだおみおきていらしつたの？

夫――うと〱はしてゐたよ。いやにむし暑い晩だね。俺はやつぱり起きてゐる方がいゝ。寢ると夢ばかり見つちまうんだ。

妻――でも今うつたのは何時？　十二時でせう？

夫――うむ、まだ十時だ。

妻――まだ……夜の長い事。

夫――（同情して）ほんとにつらいね。（額際をなでゝやる）この汗はどうだ。（側にあるハンケチにて拭はんとす）

妻――いけません〱そんなに近くいらしつちや。あなたはあんまり無神經すぎるからいやですわ。感染したらどうなさつて？

夫――馬鹿な。

妻――馬鹿ぢやありません。あなたまで若し結核にでもなつて御覧なさいまし、子供達をどうなさるの。

夫――そんな消極的な事ばかり考へてゐるより、お前が治つたら子供達はどんなに喜ぶだらうと考へる方がずつと確かでそしていゝ事だよ。

妻――又そんな氣やすめばかり。

夫――氣やすめなもんか。

妻――氣やすめですとも。（むつとした樣子にて顏をそむける、暫くしてやさしき聲にて）もうお怒りにならないで頂戴ね。私はもうぢきに死ぬのにきまつてゐるんですから、これからは死ぬまで怒りつこなしにしませうね。（會話の間に時々力なき咳をして痰を吐く。以下同じ）

夫――馬鹿だなあお前は。怒つたのはお前ぢやないか。

妻――さうでしたわね。（暫くして）でもお怒りになつてはいやですよ、私氣休めを云はれるとほんとうに腹が立つんですもの。この頃は、死ぬつて云ふ事がはつきりわかると、言葉のうそほんとが氣味の惡いほどはつきりわかるやうになりますからね。あなたまでが心にもない事を仰しやつて私を慰めるつもりでいらつしやると思ふと……私は淋しくなるんです。ですからね……

この時看護婦氷嚢を五つかゝへて入り來る。話途切れる。

看護婦――たつたさつき代へたばかりですから、まだゞと思つてましたら、もう解けまして。

夫――（妻の頭の氷嚢に手をかけて見ながら）この通りだ、よくあたゝまつてゐますよ、煎茶くらゐ飲めさうだ。

看護婦氷枕をとりかへ、頭胸の氷嚢全部をとりかふ。

看護婦――序にお體溫を拜見しませうね。

妻――苦しくつて面倒だからやめて下さいな。

看護婦――でもちよつとのまですから。

夫――（いらいらしながら）一度位いゝぢやないか、やめといて下さい。

この時格子の開く音す。靴をぬぐけはひに醫師なりと氣づき、看護婦慌てゝ次室に去る。入れ代りて醫師登場。一同簡單に挨拶。醫師病床に近より患者を熟視しつゝ、

醫師――どうです。

夫――（妻に代りて）私も二日程東京に用があつて來られなくつて、今日夕食前に來たんですが、今夜は大分苦しいやうです。非常に暑がつて呼吸が御覽の通り困難です。氣分はいつもの通りではつきりしてゐますが……看護婦さん病床日記は。

看護婦次室にて返事はしながら、鏡に向つて顏をなほしなどしてゐる。

醫師――何、よろしう御座います。（靜かに脈を取り）食慾はおありになりませんか。

夫――夕方何を思ひ出したか、北海道のものが喰べたいと云つて干鮭を少しと昆布茶と重湯とを喰べました。林檎も喰べて見たいと云ひましたけれども、まだいゝのが出てゐませんし、不消化ではないかと思つてひかへさせたんですが。

醫師――宜しう御座いませう、すこしなら。（妻に向ひ）召し上りたいものは何んでも召り上つてかまひません。あなたは胃はお惡くはないのですから。いかゞでした鮭と昆布茶は。さう、それはよう御座いました。北海道の味がなさいましたか。（笑ふ）

看護婦看護服をつけて出で來り、殊勝げに病床日記などわたす。

先程院長にとのお使ひでしたが、丁度もうやすまれた後だつたもんですから、明日の朝早くには見えられるでせう。で、どんな御鹽梅かと私が取りあへず上つたんです。

今つけたばかりの氷嚢を取り去り、背腹共に打診聽診す。妻の呼吸益ゝ逼る。醫師の眉ひそむ。足の方を探りて、

醫師――足の方に惡寒（さむけ）がなさりはしませんか。惡寒がなさるやうだつたら湯タンポを入れて上げて。（看護婦うなづく）いや、別にかうと云つてお變りは御座いません……せんが、成るべく氣を落着けて靜かになさらなければいけませんですよ。もう一度注射をして置きますから。

注射の用意をなし注射せんとす。

妻――今日のお藥は匂ひがちがひますのね。

醫師――二年も病氣していらつしやると御病人の方が私共より巧者になりますね。さうです、今日は少しちがへてやつて見ませう。

診察を終へ挨拶して立ちぎはに醫師夫に眼くばせす。妻に氣を取られたる夫は同じく醫師に意味ありげな眼くばせはしながら共に立たんとはせず。醫師已むを得ず玄關に出づ。見送りたる看護婦歸り來り、

看護婦――あの醫長樣が院長樣からおことづけがありますさうで。

夫――（はつと思ひ當りしが妻の手前素知らぬ態をして）あ、さう。

立つて次室に行く。看護婦殘る。

醫師――御容體が非常に險惡ですよ。御用心なさらなけりやいけませんな。

夫――……（默つて醫師を見戍る）

醫師――何か御生前おきゝになつておく事でもありますなら今の中に。

夫――わかりました。

看護婦――（次室の話聲を紛らさんとして）奥樣、私がさつき院長樣の所に行きます途中にね、あの犬が……こゝにも來るでせう、あの犬が……。

妻――（きびしく）そんな話後にして。

看護婦――でもほんとに面白いつたらないんですもの。その犬の眼の上にね何處かの小僧が……

妻――（小さく鋭く）默つてゐて下さい。（少し頭をもたげて聽く）

醫師――お知らせなさる所にもお知らせなさつておく方がいゝですな。

夫――夕方手紙は出しておきました。それから子供達ですが、妻が決心してもう一年も遇はないでゐるんですが、どうしたもんでせう。

醫師――さうですなあ。……これは殘酷にきこえるかも知れませんが、奥さんが遇ひたいと仰しやるのでなければ、お遇はせにならない方がよろしいでせう。お遇ひになればどうしてもいゝ結果はこの場合想像する事が出來ませんからなあ。そのまゝなら萬一の機會が殘される事になります。醫師としては人の生命を最後の瞬間まで守らなければならない責任を感じますから、私はさう申し上げるのです。まあお遇はせにならない方が得策でせうな。尤もそれも……

夫――わかりました。もうわかりました。

醫師――それがです、お遇ひになつた所が、謂はゞ御不幸の色を一層濃くするやうな……

夫――醫長さんわかつた。もうわかりました。

醫師――申し過ぎたかも知れませんが……それから唯今少し御安眠の出來る注射をしておきましたから暫くは御安靜になるでせう。又御容體に變化が來ましたら何時でもお使を下さい、直ぐ參ります。何しろ御心配な事で誠にお察し致します。

夫――難有う。永々御世話になつたのに壽命がなかつたのです。

醫師――（少し聲を大きく）で、院長からはそれだけの事を申し上げて置いてくれろとの事でしたから。その藥を使つて見たら或は存外特異な効果を見るかも知れません。

夫――（少し聲を大きく）色々ほんとうに御同情を難有う御座いました。

醫師去る。夫病室に來る。

夫――看護婦さん、お休み。氷が解けたら僕あなたをおこします。

看護婦――いいえ、よう御座いますんですよ。

夫――よかない、明日がある。僕は明日晝間ゆつくりやすむから、あなた寢て下さい。……あ、それから寢る前にね、隣に行つて電話を借りて八百屋から林檎を持つて來さして下さい。今夜はもう駄目かも知れないけれども明日は早く持つて來るやうに云つといて下さい。

看護婦去る。次室の腰窓をしめて就寢する。暫く沈默。妻、夫の方に向きなほる。

妻――看護婦は寢ましたか。

夫――寢たやうだよ。どうだい注射してから少しは樂になつたかい。

妻――近頃にない程氣分も呼吸も樂になりましたわ。だけど汗がなほ〱ひどく出て。何んて暑いんでせう。暑いのも苦しいものね。

夫――ほんとうに今夜はむし暑い晩だ。（空をすかして見て）降りさうで降らないからだ。

妻――死にさうで死なゝいのも苦しいものですのよ。

夫――何を云つてるんだい。（沈默）

妻――あなた。

夫――何んだ。

妻――醫長さんは何を仰しやつたの。

夫――藥の事で院長から傳言があつたんださうだ。

妻――大分長いお話でしたのねえ。

夫――そんなでもなかつたぢやないか。

暫く沈默。

妻――あのね。

夫――え。

妻――子供達ね。

夫――うん。

妻――やつぱり遇はない方がいゝんですつてね。

夫――(ぎよつとしながら)誰がそんな事を云つたんだ。何時でも遇ひたければ連れて來るよ。遇ひたくなつたかい。

妻――いゝえ。……(暫く沈默)もう虛言のつきつこはよしませうね。

夫――(感じたらしく)うむよさう……ほんとうだ。

妻――では私もあなたに下らない事をお尋ねするのももうやめますわ。死ぬか生きるかは自分が一番よく知つてる事なんですからね。

夫――……

妻――私はあなたをこんなにして看病してあげたかつた。

夫――冗談ぢやない。俺はそんな病氣になるのは御免だよ。（無理に笑ふ）
妻――ほんとうにねえ。（妻も笑ふ）
夫――然し萬一さうなつたら、俺がお前にした十倍も以上に俺を看護しないと腹を立てるよ。
妻――又あなたは心にもない虚言を仰しやるの？　隨分あなたは虚言つきですね。
夫――虚言つきぢやないさ。

妻、非常に氣をそこねたらしく長き沈默。

夫――おいA子俺がいけなかつた。然し俺は誰が何んと云つてももう一度お前をなほしてやりたいのだよ。虚言を云ふ俺の口を俺の耳は信じようとするんだ。
妻――（感じて）いゝえ。怒つたりして私こそ惡う御座いました。あなたのお心持はよくわかつて居るんですけれども……もうどうぞ私の覺悟に未練を起させるやうな事は仰しやらないで下さいましね。それよりお藥で氣持のいゝ中に、樂しいお話を少ししませうね。いゝでせう。
夫――然しお前は眠らなければ……（自分に氣付き舌打ちして）俺は何んと云ふ間にあはせ屋だ。……さうだ。一晩中でも話をしよう。
妻――まあうれしい。（いかにも樂しげに）何かお話して頂戴な。
夫――さうだなあ、何の話をしようか。（沈默）話と云へば結婚したてには毎晩寢てから一つづゝお話をさせられたつけが。
妻――でも一ケ月ほどで種切れにおなりになつてね。
夫――一ケ月續いたのはえらい中さ。お前は隨分慾ばりだつたからな。トルストイの「復活」なんぞは始めから

仲舞まで一晩がゝりで話させてしまふんだもの。話しながら自分の方で興奮した俺も可なり馬鹿だつたがお前も無考へな女だつたよ。だから一ケ月で種も身も盡きたのさ。でもそのお蔭でお前はいゝ加減物識りになつた筈だ。

妻――ほんとに色んな事を覺えさせていたゞきましたわ。あの頃ほどどん〳〵心の育つたのは前にも後にもありませんでしたわ。それから又段々と馬鹿にあともどりしてしまひましたのね。

夫――一つは俺も段々不熱心になつたからな。（笑ふ）どうだい雨戸をしめてやらうか。あんまり夜氣が來すぎはしないかい。

妻――いゝえ、やつぱり開けておいて下さい。暑いばかりぢやないの、締めると氣息が苦しくなりさうで。（戶外に眼をやり）曇つてゐますのね。星はどこにも見えませんか。

夫――（空をすかし見つゝ）風もないのにあの雲の走りやうは如何だ。八月と云ふとやはり何んとなく荒れ立つて來るね。あゝ、あすこにたつた一つ見える。見えるかい。

妻――えゝ。

夫――もう隱れてしまつた。

妻――（獨語のやうに）星にもお別れが出來たし……（沈默）うそよ。冗談ですのよ。私こんなに色んなものが可愛かつたり、なつかしかつたりするやうでは迚も死ねませんわ。ほんとにこの世の中はいゝ世の中だつた事。苦しかつた事も悲しかつた事も皆んな美しくばかり思ひ出されます……だから私治りませうね。屹度治りませうね。

夫――さうだ、ほんとうに治らうね。（暫く沈默）お前の苦しく思つた事も悲しく思つた事も、世の中の人に云は

せれば、……俺の大嫌ひな、酸いも甘いも知りぬいて、感激の種切れになつた人達に云はせれば馬鹿々々しいものであるかも知れないが、俺としてはやつぱりそれがうれしかつた。尤もその時分は隨分うるさいと思つたがね。（少し强ひた笑ひ方をする）何しろ俺の性格にも仕事にも眼鼻のつかない中にお前に死なれては俺の方が浮ばれないよ。俺もいつまでもかうやつては居ない。お前が病氣になつたのでこの二年間遊んで居る中に段々見當がついて來た。遊ぶと云ふ事も惡い事ばかりぢやない。今までは唯無暗に齷齪してばかりゐた。それがいけなかつたんだね。考へて見れば今まで仕事らしい仕事といへば、何一つしなかつたのによくもお前は俺に辛抱して來たもんだ。つまりお前は餘程甘く出來てゐるんだよ。

妻――澤山仕事はなさつていらつしやいますわ。

夫――失敗に終つた仕事はいくらあつても、しなかつた以上に惡い仕事なんだ。

妻――でもあなたは學生たちから賴みにされていらつしやいますわ。

夫――駄目だ〳〵。迷つてる羊は迷つてる羊を導く事なんか出來はしない。俺なんぞはほんとうを云ふと、默つてもつと自分だけを見戍つてゐなければならない男なんだ。こんな意氣地のない事をお前に云ふのは少し恥かしい事だけれども。

妻――まあいやな方。そんな事を仰しやると私はなほ〳〵死にたくなります。……あのねえ。

夫――え。

妻――私の手帳ね。

この時婆やあたふたと登場。寢衣のまゝ。

婆――旦那樣、こんななりを致してをりまして御免下さいまし。

夫――どうしたんだ今頃起きて來て。

婆――またお笑ひ遊ばしますかも存じませんが唯今ひよんな夢を見ましたもので御座いますから。

夫――又御夢相か。もういゝ寢ろ。

婆――左樣で御座いませうか、奥樣はおやすみでいらつしやいませう。

夫――おきてるよ。用かい。

婆――へえ。それでは又。

婆ゝ退場。暫く沈默。

妻――あなたにどうしても見せて上げなかつたあの手帳ね。お分りになつて、水色の表紙の分ですのよ。

夫――うん。

妻――あれはあの袋戸棚の下の方に入れさせておきましたからね……いゝえ、まだ御覽になつてはいや……お手を貸して頂戴。（夫の手を取り、もう一つの手にて輕く撫でながら）私がね……私が若しか死んでしまひましたらね……御覽遊ばせ。私きつと治りますけれどもね。而して今度こそはお邪魔ばかりしてゐないでせつせと私も働きますわ。ね、いゝでせう。

夫――……

妻――そんなにお怒りになつてはいや。

夫――（殆んど同時に）何を怒る。

沈默。

夫――お前はほんとに治らなければいけないんだぞ。その積りなら最後の瞬間までも命を大切にしなければいけ

ないよ。疲れるといけないから……然しもつと話さうか。まだ話す事があるかい。
妻――何んにも。
夫――そんなら寢て見たらどうだい。
妻――はい。その代りあなたもおやすみなさいましよ。
夫――俺はいゝよ。それに蚊帳をつらないでゐてはお前は蚊で眠られやしないよ。煽いで上げるからかまはないでお寢。
妻――あなたがおやすみにならなければ、私は眠れませんもの。
夫――頑固屋。それぢや俺も寢るさ。
妻――どうぞ。あなたもほんとにお體を大事になさいましよ。御機嫌よう。

夫蚊帳に入る。妻は呼吸困難になりながら雄々しく自ら團扇を執つて煽ぐ。催眠劑の効あらはれ、苦眠に入り團扇を手より落す。夫蚊帳より出で妻の傍に來り、團扇を取り上げて妻を煽ぐ。婆や再び竊やかに登場。

婆――旦那様、奥様は……
夫――(うるさゝうに) 寢たから……
婆――旦那様、私は先程の夢を見ましたからどう致してもやすまれません。まざ〳〵とした夢で御座いました。神様が、旦那様、奥様をお召しになりましたので御座います。それが、旦那様、神様のおみお顔が旦那様そつくりでいらつしやいまして。
夫――何をくだらない事を云ふんだ。早くいつて寢ろ。
婆――それに、……私は何んだかこはいやうで御座いますが……

夫――もういゝ、早く寢ろと云ふのに。

婆――恐れ入りまして御座います。旦那樣「神を信ずるものは幸なり」と申しますが……

夫――說教は明日にしてくれ。俺は考へる事があるんだから。さ、いゝから早くお寢。

婆――(不承不精に)左樣で御座いますか。では御免蒙ります。

婆や退場。夫、妻の寢顏を凝視す。

舞臺そのまゝ暗くなる。

ダーク・チエンヂ。

第二場　夢の場

妻の夢。

序幕と同じ舞臺。始めは明滅する焰の外暗黑。漸次明るくなる。

焰の前には死のみ默坐す。

舞臺の一方に椅子によりて夫讀書し、他の一方に坐して妻と婆や、縫物をして居る。

婆――何んと云ふきびしいお暑さで御座いませう。北海道くんだりにをりましてこんな暑さにあひましては蛇蜂取らずと申すもので御座います。こんな日には餘計お苦しう御座いませうね。氷はまだ解けませんで御座いますか。看護婦は一たい何處に參つたので御座いませう。暇さへあればお隣に話に出かけてしまひまして、しやうが御座いません。奧樣、私一寸氷嚢をつくつて參ります。

妻――婆や、お前何を云つてるの。氷嚢だなんて何するつもりなの。

婆――奥樣こそそんなおむづかりを仰しやつてはこの婆が困りますでは御座いませんか。この御病氣ばかりは御養生一つでどうにでもなるものだと伺つてをりますから、何んでも我慢遊ばしてせつせとお胸をお冷やしになりませんぢや。第一おみ起きになつていらつしやるのがお惡う御座いますよ。お床でもおのべ申しませうか。

妻――お前ほんとにどうかしてゐるよ。私はこの通りぴん〳〵してゐるぢやないか。をかしな人ねえ。

婆――でも御氣分どほりに遊ばしてはよく御座いますまい。いくら熱にお慣れ遊ばしたつて、やつぱり三十八度もおありになりますので御座いますから。

妻――幾度云つて聞かしても分らないのね、婆やは。私はまだ病氣なんぞになりはしないのよ。私はね、あと五年たゝなければ病氣になりはしないんぢやないか。そんな事がわからないの。

婆――おや左樣で御座いましたかね。お、さう〳〵、さうで御座いましたね。又耄碌を致してしまひまして御座いますよ。

何か非常にをかしいやうに笑ひ出す。妻も釣りこまれる。突然二人とも恐ろしき衝動を受けたるやうに笑ひやむ。極度の不安。

妻――どうしたんだらう。あゝ暑い事。

婆――通り魔で御座います。

妻も婆やも再び仕事をはじめる。

夫――（讀書をやめて遠くの方に耳をすます）おいA子、お前の好きな郭公（カツクー）が鳴いて居る。聞こえるだらう。

妻――さう、ほんと。（耳をすます）聞こえますわ。（暫くして）いゝ鳥ですのねえ。

夫再び讀書す。妻時々鳥の聲に聞き入りながら産衣を縫ひつゞける。

妻――あなた。

夫――(讀書しながら)う?

妻――この柄はおきらひ?

夫――うむ。

妻――おすき?

夫――うむ。

妻――まあいやな方。どつち?

夫――さう、どつちかなあ。

妻――まあ、……よござんすわ、そんな不熱心な方。

夫――(始めて書物より眼を放ち)俺が折角熱心になりかけて居ると、お前が不熱心にしてしまうんぢやないか。いやな方も何もあるもんかい。ほんとうにうるさい奴だ。

妻――でもあなた不熱心なんですもの。そんな方私大きらひ。

夫――ふん、さうか。(又讀書す)

妻――本ばかり讀んでいらつしやれば着物の事なんかどうでもいゝのね、あなたは。

夫――やかましい奴だな、着物がどうしたと云ふんだい。

始めて立ちて妻の方にき、産衣を見て珍らしげに見やる。

夫――何んだそれは。

妻――何んでもよう御座いますのよ。

夫――よかあないよ、赤坊の着物だらう。もうそんなもの作つて置くのかい。一寸お見せ。

妻――いゝえよう御座います。あなたはたんと御本を御覧なさいまし。

夫――(妻のわきに坐りて)ふむ、割合にいゝ模様だ。だが、ちつと赤すぎるね。男の子が生れてもこれでいゝか知らん。

妻――(恥かしげに)いやな方。男の子なんか生れやしないからいゝ。ほんとに男の方なんてわからず屋なんですもの。

夫――おい婆や、お前には子供があるんだつけかな。

婆――御座いますが、子供などゝ申しますとをかしいやうで御座います。息子が三人と娘が一人御座いますが、末の息子がもう、旦那様、三十になりまして御座いますよ。

夫――それはいゝねえ。

婆――よくでも御座います事か旦那様。一人々々やくざなもの許りで御座いまして、私のやうでは何んの爲めにお產を致しましたか、さつぱり譯が分らなくなつてしまひます。一人なんぞは、奥様、暗い所に入れられますし、娘は娘で私の申します事なぞはこれつぱかりも(針を眼の前に出す)聞き入れは致しませず、それにおやぢがのんだくれで御座いましたから、今日様がおでになるたんびに考へます事と申しましたら、どうかせめて今日一ぱいは災難が御座いませんやうにと申す事だけで御座います。女の罪障で誰でもお產は苦しいと申しますが、子を育てる苦しさにくらべますれば、まるでお話になんぞなるものでは御座いません。もう〳〵世の中は、いやなもので御座います。人間と申す者はどれもこれもねつから賴みにも的にもならないもので御座います。皆

んな人の隙ばかりねらつてをりまして、奥樣、やゝともすれば、つかみかゝらうと致しますので御座いますか
らね。早くこんな世の中はお暇に致して、神樣のお側に參りたいもので御座います。

妻――そんな事を云ふものではないわ婆や。世の中には惡人もゐるだらうけれども、いゝ方もいらしつてよ。

婆――それが奥樣……

妻――だつてお前は神樣を信じてゐるんだらう。

婆――それは神樣を信じさせていたゞいてをりますお蔭でやうやくかうやつて生きてる空も御座いますので御座
います。

妻――その神樣がお作りになつた人間ぢやないの。神樣がお惠み深ければ、人間にだつて惠みぶかい所があつて
いゝわけだわ。

婆――ところが、奥樣、人間の御先祖のアダムとイブとが罪を犯して神樣にお叛き申しましたので御座いますか
ら駄目で御座います。取りわけ男などゝ申しますものは、こなたの旦那樣などは別でいらつしやいますが、そ
れはおほそれた虚言つきで御座います。

妻――そんなにひがんでは自分の心までひがんでしまふわ。

婆――だから聖書にも「蛇の如く慧かれ」と御座います。意地の惡いほど氣を附けて居りませんと、周圍のもの
に罪をつくらせるばかりでは御座いません、飛んでもない損な日に遇ひますもので御座いますからね。それも
旦那樣のやうに教會でも飛びはなれて信仰のお堅い方。

夫――（物を考へてそこらを歩きまはり居りしが）おい婆や、俺は四五日前に教會を退會したのだよ。

婆――え、何を仰しやいます。まあほんとうで御座いますか。

妻――えゝ、ほんとうなのよ。

婆――あの、旦那樣が……まあ怖い事で御座います。でも奧樣、それもこれも下世話で申します「榮譽の餅の皮」で、徒然のお慰み位なもので御座いませう。誠に結構なお身分でいらつしやいます。私共のやうに體をへらしへらし生きてをりますものには思ひもよらない事で御座います。結句この世の中は何と申しましてもいやな苦しい世の中で御座います。

夫――婆や、お前が苦しい〳〵と云ふ時には何んだか嬉しさうな樂しさうな顏をしてゐるぜ。それだけでもお前は世の中を仕合せだと思ふ筈だがな。それより、話に氣を取られて、婆やはまた氷嚢を忘れやしないかい。もう疾うに解けた時分だぜ。

婆――おや左樣で御座いましたねえ。

婆や慌てゝ立たうとする。

妻――氷嚢をどうなさるの。

夫――知れた事ぢやないか。そんなに不養生をすると又熱が出るぞ。さう云へば體溫も計らないんだらう。

妻――今日はあなたも婆やもほんとに變ねえ。五年たゝなければ病氣にはならないのだと今も婆やに云つたばかりですのに。

夫――お前、ほんとうに病氣ぢやないのか。

妻――この通りぢやありませんか。

夫――さうか。（非常に喜ばしげに）さうだつたんだねえ。

三人聲を立てゝ笑ふ。突然衝動の如く笑ひやむ。

婆――通り厭で御座いますよ。

妻――婆や、臺所に行つて湯を沸かしておくれ。もう御飯のお支度をしなくちや。

婆や去る。夫は再び書に向ふ。妻は裁縫を片付けはじむ。影人一人の男を連れ來る。凡て舞臺に現はるゝ人物は首を垂れ眼を閉ぢ、よき所に來りてはじめて眼ざめたる如くなる。

夫――まだ郭公が鳴きつゞけてゐる。（男を認め）お、君か、何時の間に來たんだい。ちつとも知らなかつた。

男――呼んで見たけれども返事がなかつたから勝手に這入つて來たんだ。奥さん、今日は。

妻――まあいらつしやいまし。お暑う御座います。

男――またあいつが來たつて？

夫――うむ。

妻――ほんとにいやなんですのよ。はじめて來た時はほんとにをかしかつたんですのよ。

夫――僕の留守中にやつて來てね、婆やに「私は高等の方をやつてるんです」と云つたんださうだ。黑眼鏡の後ろからあの物凄い眼を光らしたんだから驚いたらうさ。僕の歸るまでの間妻と二人でさんぐ考へた擧句高等小學の先生と云ふ事にきめたんださうだ。

男――高等刑事とはちよつと氣が附くまいからな。何んにでも高等のくツつく世の中だね。この間來た時は何と云つたんだ。

夫――あなたの主義に對して御意見を伺つて來いと云ふ命令を受けて參りましたといやに底氣味惡く下手から人を見詰めながら云ふんだ。

男――ふうん、で。

妻――わきで聞いてゐてもひや〱するやうな事を仰しやるんですもの、私ほんとうに怖(こは)う御座いましたわ。
夫――おい、お茶はどうしたんだい。
影人(くろんぼ)茶器を運び來る。妻疑はしげに見る。影人(くろんぼ)馬鹿丁寧に辭儀をして退場。
妻――(夫の方に寄り添ひ影人を見ながら)變な人ねあれは。
夫――ちつとも變ぢやないぢやないか。
妻――今度新しく雇つた人ですの?
夫――をかしな女だなあ。あいつは昔から働いてる男ぢやないか。
妻――(自分の思ひ違ひを恥づる如く)おやさうねえ。でも何んだかをかしいわ。私いやですわ、あんな人。婆やはどうしたんだらう。
夫――晩飯の支度でもしてゐるんだらうさ。(男に向ひ)所謂高等につけねらはれては教員と云ふ僕の位置はもうおしまひだよ。
男――何、そんな事もあるまいが、君が教育界を退(ひ)くのはまあ一寸惜しいな。失望する學生もすくなくないだらう。君の評判は中々いゝからな。
夫――「評判がいゝ」か。僕は教育の出來るやうな男ぢやないよ。自分の事もわからないで人の世話をやく事なんざあ出來やしないさ。然し學生の中にはいゝ青年が居るね。畏ろしいやうな青年が居るね。あいつ等との交渉がなくなるのは少し淋しいよ。
男――君は教會も退會したさうだね。
夫――あゝ。……熱い湯がほしいな。

影人又現はれ藥鑵を持ち來る。妻再びおびえる如くこれを見やる。再び茶を入れて出す。

夫――僕が教會をやめたのが自然の成り行きだつて云ふ事は君には分つてゐる筈だが、妻には突飛な出來事だつたと見えてね。昨日妻の父から手紙が來たから讀んで見たら、此奴（妻を意味す）は僕の事について嘗て父に相談がましい事をしたためしはなかつたのに、今度は非常に心配をして相談してよこしたが、一體どうした譯だと云つて來たよ。お前はまだあの手紙を見ないだらう、こゝにあるよ。（妻に手紙を渡す）教會に這入つた時は君も知つてる通り勘當までされそこなつて這入つたんだから、出るにつけても僕は相當に苦しんだ。然し思ひ切つて出たのは結局よかつたと思ふんだ。

妻――それでもあなたは神樣はお信じになるんでせう。

夫――お前は例へば飯の味がほんとにわかるかと聞かれてはつきり判ると答へられるかい。神を信じないと云ふのは恐ろしい事だ。神を信ずると云ふのも恐ろしい事だ。

妻――あなたはいつでも切羽つまると曖昧を仰しやるのね。

夫――さうか知らん。

妻――私にはあなたのほんとうのお心がわかりませんわ。

夫――段々わかつて來るだらうさ。而していやになるさ。

男――君が何か女の事で墮落した爲めに教會を捨てたと評判するものがあるさうだよ。

夫――さうか、それは無暗にほめ上げられるのよりどれ程いゝか知れないよ。

男――ふん、全くだ。……君も結婚してからもう一年になるが、結婚生活はいゝものだから是非結婚しろと人に勸めるだけの自信ができたかい。

夫――人の細君をわきに置いて相變らず無遠慮な男だなあ。それはいゝ事もあるし、惡い事もあるしさ。こいつなんぞもこいつだけの煩悶はして居るやうだよ。僕は結婚するとすぐ第一に妻に與へたものは自由だつた。妻から要求したものも自由だつた。つまりお互に離れたくなつたら勝手に離れる條件が成り立つてゐる譯だ。

男――そこいらが Neo-Romanticism と云ふんだらう。（笑ふ）

夫――然し事實それより仕方がないぢやないか。この事は眞面目に考へて眞面目に實行する積りだ。

男――何しろ君の未來を見守つてるのは一寸興味があるよ。今夜は勿論會に行くだらうね。それぢや夕飯後僕が寄るからつれ立つて行かう。左樣なら。（男退場）

妻――（男を見送りて）隨分な方ねえ。默つて這入つていらつしやるかと思ふと挨拶も碌々なさらずにお歸りなさるんですもの。（暫くの間茶器をかたづける）私、家に歸つてしまはうか知らん。

夫――何を云つてるんだい。

妻――だつてその方があなたのお氣に入るんでせう。あなたはお心の底の方で結婚なさつた事を悔いていらつしやるのね。

夫――そんな事もある。と同時に若し結婚でもしてゐなかつたら、どれ程苦しかつたらうと思ふ時もあるんだ。……見ろ、俺のまはりからは友達が一人へり二人へりして幾人も殘つてやしない。神樣も敎會ももうないんだ。この上學校の方でも追ひ出されゝば俺の心は煤掃きをした空家のやうなものだ。そこにお前ばかりが殘つて居るんだ。

妻――そして私は折角綺麗になつたお家に一つだけこびりついた塵のやうですのね。……あの方さへあなたの良樣になつていらつしやれば、あなたもこんなにお淋しくはないでせうのにね。あの方もおかあいさうね、病氣

ばかりしていらしつて。私は小さい時から片意地でなか〳〵泣かなかつたものですから、母などからもこんな可愛氣のない子はありはしないとよく云はれましたわ。私も世の中つてものは何んだか淋しい冷たい所で痩我慢で押し通す所のやうに思つて育つて來てゐたのに、あなたにお遇ひ申して心をゆるめたのがほんとうに私の落度でした。それにしてもあなたは何故あの方と結婚なさらなかつたの。

夫――俺は始めからあの女と結婚する心持なんぞはなかつたんだ。

妻――でもあなたはお父様に、結婚する位ならあの方としたいと仰しやつたのね。

夫――それは全く見も知りもしないものを俺にあてがはうとなさるからさ。そんな結婚をする位なら氣心を知つてるだけでもあの女と結婚する方がましだと云つたゞけなんだ。あの女はかあいさうな女なんだ。俺は深い同情はしてゐた。然し俺は戀をしてゐた覺えはない。

妻――でもあの方が結婚なさつた時にはあなたは御病氣におなりになつたんですつてね。

夫――もう度々そんな事を聞かされるのはおれは閉口だ。一體俺の何處がお前の氣に喰はないんだ。はつきり云つてくれ。なほせるものならなほしてやる。ちく〳〵と針でつツつくやうなやり方はしないでほしいな。

妻――あなたはこのお話にはすぐお怒りになるのね。

夫――俺はおこりやしないさ。おこつてるのは癇癪の蟲だよ。

妻――どうせあなたはお口がお上手ですわ。……あなたは何故教會をおやめになつたの。一言の御相談もなかつたのね。それは私どうせお力になれないのは知れてゐますけれども。いやな評判までたてられてもおやめになるには何か深い譯がおありになりますわね。

夫――それはあの場合に殊更お前に話さなかつたにしても、不斷云つてる事ぢやないか。俺にはまだ基督のやう

な嚴肅な生活は出來ないのだ。しようと勉める事さへ、敢てし得ないのだ。そんなものが教會に居るのは教會を墮落させる事だよ。

妻――それではよくない評判をお立てられになつても仕方がありませんわね。

夫――全くだ。俺は十分それに値するんだ。

妻――あなたはすぐさうおひがみになるからいや。男らしくもない。

夫――ひがむのはお前だ。俺はいまにお前に凡てを告白しなければならない時が來るだらう。

妻――もうそんな皮肉を仰しやつてはほんとにいやです。私が餘計な事を云つてしまつたのが惡う御座いました。

夫――お前は人の言葉を皮肉だと云ひながら巧みにもその言葉の裏に皮肉を持たせようとするな。何んとでも云へ。兎に角俺はモウパツサンの小説に出て來る主人公のやうな間拔けはしないからな。さん〴〵不貞を働いて歿くなつた細君の墓石にあらゆる讃美の言葉を彫り附けるやうな馬鹿はしないよ。

妻――おや、あなた何を仰しやるの。

夫――(自分を辱かしめ罵る如く)何を云つてるんだい。

妻――結婚の時からあなたには自由が差し上げてありますから勝手におつかひなさいまし。

夫――自由はお前にもやつてあるね。どの位使ひへらしたい。

妻――よう御座いますわ。あなたはほんとにひどい。(袖にて顔を被ふ)

婆や登場。

婆――旦那樣、またあの高等とか云ふ方が參りまして是非お目にかゝりたいと申してをります。

夫――夕飯前でゐますから又來て下さいと云つてくれ。

婆――私、旦那様、氣をきかした積りでさう申しましたらちよつとの間でいゝからお遇ひ申したいと申すので御座います。

夫――よし、つれて來い。

妻――あなた、よろしくつて？

夫――よくなくつたつてしやうがないさ。

高等刑事登場。黒眼鏡の奥より四方を見まはし、與へられもせざるに椅子に腰かけ、妻を見つめたりなどす。妻は婆やと共に夕食の用意をなす。夫は一寸挨拶したるまゝにてそこいらを歩きまはる。

刑――今夜も研究會にお出でゞすか。

夫――さうです、行きたくなつたら行きます。……刑事君、僕は餘計な事を云ふ男かも知れないが君はその職掌をおやめになつたらどうです。自分でも非常に不愉快ではないんですか。始終人を疑ひ通してゐると云ふのはたまらないと思ひますがね。これが君に相當な職業だとは思ひたくありませんよ。

刑――それは私の考へやう一つにある事ですから。

不愉快なる沈默。

刑――研究會では今夜どう云ふお話をなさるのです。

夫――むかうに行つてから考へ出すんです。

刑――然し大抵御腹案が。

夫――(殆んど同時に) 然しそれは君に云ふ必要はない。

刑――然し私はそれを伺ふべき義務を持つてゐます。權利も持つてゐます。

夫――所が僕の方から云はせるとそれを君に發表すべき權利はあるとしても義務はありませんよ。而して權利の方はこの場合放棄する事にしますから。僕の說を聞きたいと云ふなら官廳にだつて相當の人も相當の方法もある筈だ。

不愉快なる沈默。

刑――あなたは白耆藝者屋だの料理屋に出入なさるさうですな。

夫――深夜出入するよりはましでせう。

刑――それに失禮ですがあなたは或る有夫の女と通じていらつしやるさうですな。

夫――（默したるまゝ步きまはる）……

刑――あなたの學校の校長は餘程寬大だと見えますね。然し社會と云ふものもありますから少し警戒なさつたら宜しいでせう。

是れより少し前より、先程訪れ來れる男現はれ二人の對話を聞きをる。

夫――君は少くとも君の職掌だけに忠實であればそれですむんだ、それは決していゝ事ではないけれども。

刑――ふむ、それならあなたの云はるゝ通りに職業を忠實にやりませうか。令狀を執行します。警察へお出でなさい。

男――（中に割つて這入る）そんな亂暴はないぢやないか。君はこの男（夫を指し）の主義の內容も行跡も實否を確めてはゐないんだ。考へて見たまへ、この男が拘引されて職業を失へばすぐ生活にひどくばかりぢやない、新婚の家庭もこはれゝば、懷姙してゐる細君も氣の毒ぢやないですか。少しその邊も考へてやつたらいゝでせう。

刑――私は職務だけの事をすればいゝんだ。私は令狀を執行する命令を受けてゐるのですぞ。（夫に向ひ）さ、直

ぐお立ちなさい。

男――そんな事つてがあるか。

刑――餘計な事をする貴樣こそ何んだ。（懷中のふくれて居るのに眼をつけ）何を入れてるんだ。出せ。（突然懷中に手を入れてつかみ出す）兇器でも持つてゐるんだらう。けしからん奴だ。（濡手拭の中からは石鹼入れと楊枝が出て來る）

男――僕は今錢湯から來たところなんだ。刑事君、この男を引つ立てゝ行つた所で、叉警察で今と同じやうな馬鹿な目に遇ふぜ。やめたらどうです。

刑――やかましい默つとれ。さ、お立ちなさい。

夫――君はほんとうに連れて行くつもりなのかい。さうか。それぢや行かう。A子一寸行つて來る。行く所に行けばすぐわかる事だからぢき歸つて來る。心配しないでおいで。では君後を賴むぜ。

妻――あなた私も御一緒に行かして下さいまし。（刑事に向ひ）どうぞ私もお連れなさつて下さい。

刑事取りあはず。そこにありし書狀入りの手箱二箇及び書籍一册を證據物件として押收し夫を拘引し去る。妻泣く。婆やは唯おろ／＼する。男は眉をよせて步きまはる。

男――亂暴極まる奴だ。然しとう／＼あなたの御主人にも革命の時が來たんだ。これからはあなたも今までのやうに新婚の樂しみにばかりは浸つてはゐられませんぜ。

妻――それは私もかねての主人の言葉から覺悟はしてをりました。でもあんな理不盡な事つたらありませんわ。あなたどうかしていたゞく事は出來ませんでせうか。私、ほんとにどうしたらいゝでせう。

男――おまけにあの刑事はいま／＼しい事を必要もないのに云ふ奴だ。藝者屋に行つた、それがどうしたと云ふ

んだ。

妻――それは主人が家に預かつて居ります放蕩な書生がこの間姿をかくしたものですから、それを探すためにそんな所に度々參つたのですわ。それにしても夫のある女と……聞くもいやな事ばかり云つて……あんな事を云はれたら私ならびし〳〵云ひ返してやりますのに、主人は默つたまゝでゐるんですもの……人が疑ひますわ。

男――(笑ふ) 馬鹿な。あんまり馬鹿らしいので默つて居たんですよ。何しろあなたはあの人を腹のどん底から信じてやらなくつてはいけませんよ。淋しい人ですからね。他人の思ひもよらないやうな事を考へて獨りで苦しんでゐる人ですからね。

妻――ほんとうに私が惡う御座いました。その心はよく判つてゐる癖に、どうして私はこんなに子供らしく我儘だつたので御座いませう。

男――刑事の持つて行つた手文庫に、もし日記や、會の人達からやつた手紙なんかゞはひつてはゐませんでしたか。

妻――ゐました〳〵、みんなさうなんで御座います。私どうしませう。

男――何心配する事はありません。然し……玄關に誰か來たやうだが。

妻――ほんとに……婆やお前行つて見ておくれ。

婆――(しりごみして) 私で御座いますか。私でわかりますで御座いませうか。

妻――早くお出でなね。澤山いらつしやつたやうだよ。

男――僕が行つて見ませう。

男退場。二人の學生を伴ひて登場。學生妻に不愛想な會釋をする。

學一――先生はお出でゞすか。

妻――いゝえ、唯今ちよつと出かけました。

學一――さうですか。（他の學生に向ひ）どうしよう。

學二――云つた方がいゝぢやないか。（妻に向ひ）私達は總代に擧げられて今日は少し不愉快な使命を齎しに來たのです。今倶樂部で學生會を開いてゐるのですが、先生に御自身で說明していたゞきたい事があるのです。

妻――（きつとなり）それはどんな事で御座いますの。

學一――おい、先生が歸られてからにしたらいゝぢやないか。

學二――先生はどこにおいでなのか分らないのでせうか。

妻――わかりませんの。（呼吸段々苦しげになる）

學二――先生が平生自分達に敎へて下さる事と先生のこの頃の素行との間には自分達に理解し得ない所が出來たのです。それを說明していたゞきたいのです。

男――餘計な口を出すやうだがそんな事は何も先生の夫人に云ふ必要のない事ぢやありませんか。僕は君等の先生の親友として承らうが、一體先生の言行不一致とは何を指すんです。

學一――お歸らう。そして先生の歸られるのを待たう。

學二――こゝで待つてればいゝさ。言行不一致ですか。それは明らさまに云へば先生と或る婦人との關係が日頃のお言葉とちがふと云ふんです。

男――君等かその事實を握つて居るのなら先生を待たないでも問題は決定してゐますよ。かまはずに決議をしたらいゝでせう。

學一――たしかな事實は判らないのです。判らないからこそ先生に伺はうとするんです。

男――それでは何を根據にそんな事を云ふんです。

學二――あなたはまだ昨日の夕刊を御覽にならないのですか。

男――見ましたよ。然し君等は君等の先生以上に――少くとも同樣に、新聞を信ずるのですか。君等は隨分先生と云つてた人達ぢやありませんか。時々私は君等にこゝでお目にかゝつたやうだ。それが新聞の記事と多少の流言位でぐらつくんですね。

學一――それですからゆつくり先生のお口から譯を承らうと云ふのです。

男――そんな事はわかつてるさ。學生會たあ何んだ。君等に若しほんとうの愛に燃えた心があるなら何故君等はそつと先生の所に來て靜かに先生の意見をたゝかうとはしないんだ。始めから君等には先生に對して眞實の理解も愛もないんだ。

學二――それほどの理解と愛とを Inspire し得ないのは先生に責めがあるんだ。

男――そんなやくざな先生なら、何んだつて今頃さう騷ぐ。胸糞の惡い僞善はやめ給へ。

他の學生現はる。

學三――どうした、先生はゐないだらう。

學一
學二 ――居られない。

學三――その筈さ、先生は拘引されたんだ。

學生一及び二驚く。

學二――さうだらう。然しかうなつては學生會にも及ばない事だ。歸つて凡ての報告をしよう。

三人――お邪魔をしました。

三人退場。妻の呼吸益〻苦しくなる。

男――おや奥さん、どうかしましたか。

妻――何んだか暑くつて……氣息がつまりさうで……

男――(舌打ちして)それはいけない。心配する事はないんですよ。皆んな捏造沙汰だから。それよりあなたの健康が大切です。氣を落着けなさいよ。僕は醫者の所まで行つて來ますから。おい婆やぼんやりしないで床でも敷いて上げるといゝ。それぢやちよつと行つて來ます。(退場せしが又もどり來り)婆や誰が尋ねて來ても決してよせつけちやいけないぞ。(退場)

妻――(婆やの肩によりさめ〴〵と泣く)

婆――さうお泣きになつてはこの婆やが困つてしまひます。お氣をたしかにお持ち遊ばしませ。ほんとに世の中はこれで御座いますからねえ。(祈る)神樣、どうかあなたにお叛き申した一人の僕をお許しなさつて下さいまし。アメン。

妻――婆や、旦那樣にかぎつてどうしてもあんな事はありはしないわ。

婆――左樣で御座いますねえ。

妻――さうは思はないかえ。

婆――ほんとにいゝ旦那樣では御座いますが、神樣からお離れ遊ばしては……。

妻――婆や、お前まで疑ふの。……疑ふのかい。……そんな人は早くこの家から出ておくれ。お前には用はない

私はこれから警察に行つて來る。

婆――飛んでもないそんなお體で。死んでおしまひになります。

妻――死ぬものか(不氣味げに「死」の方に眼をやる)死ぬものか。旦那様を潔白にして上げるまで私は死ねやしない。(又恐ろしげに「死」の方を見やる)提灯をおくれ。

影人提灯を持つて登場。婆や影人より提灯を奪ひ妻に渡さぬやうにする。

妻――早く、早く、その提灯をおくれと云ふのに。

婆――これをさし上るげとおもてにおでになりますから、さし上げられません。

妻氣息せき〳〵婆やを追ふ。その中に舞臺漸次暗くなる。

妻――(暗黑の中にて)早くおくれと云ふのに。あゝ苦しい、氣息がとまる。灯を早く。……

幕しづかに下る。

第三場

第一場と同じ舞臺。

夏の夜はしのゝめならんとす。

妻、眼をさまし何處を見るともなく見つめて氣息をはずませ居る。夫その傍にあり。

夫――提灯は何んともなつてやしないよ。(軒の岐阜提灯を指す)灯は消えたやうだけれども、もう夜があけるからいゝだらう。

妻――あなたはいつお歸りになりましたの。
夫――俺は何處にも行きはしなかつたんだよ。夢でも見たんだらう。提灯だの灯だのと囈言を云つてゐたよ。
妻――いやな夢を見ましたのよ。夜があけますか。
夫――お前の大きらひな夜ももう明けるよ。それでもゆうべは割合によく寢たね。思ひの外夜が短くてよかつたね。あれから二度程看護婦に氷嚢を取りかへて貰つたが、お前は半分夢中でゐるやうだつた。あれだけ寢られたら少しは氣分もよくなつたらう。
妻――夢を見ないで寢られたら少しは……休まるかも……あゝ、苦しい。もつとそつちに……そつちにどいて下さい……氣息がつまる。
夫少し離れる。妻吸氣のみ激しくなり苦しみのあまり身をもがく。
妻――氷嚢を取つて……胸が……胸をあけて……
夫近よらうとする。妻手もて拂ひのけるやうにし、
妻――いや、いや……氣息がつまる。酸素……酸素吸入。
夫――あ、さうだつた。すつかり忘れて居た。(立つて次室とのへだての襖の所に來り)看護婦さん。……おい、看護婦さん。(舌打ちする)看護婦さん。
看――(とつ拍子もない大きな聲にて返事し)はい。氷で御座いますか。
夫――病人の呼吸が大變苦しくなつたから、酸素吸入をしてやつて下さい。
看――はい。(半分寢ぼけたとつ拍子もない大きな返事。容易には起き上らず)
夫――早く起きて下さい。(臺所の方に行き)婆や、婆や、もう夜が明けるぞ。

婆――はい、もう眼はさましてをりまして御座います。唯今起きます。

夫そこいらを片附け岐阜提灯をはづしなどす。やがて看護婦やうやく起き來り寢衣のまゝ婆やに手つだはせて臺所より壓搾酸素筒その他を持ち出す。

妻――そーつと、そーつと。……暑い〳〵。……團扇を……

夫煽いでやらんとす。妻手まねにて團扇を取り上げ自分にて煽ぐ。看護婦酸素吸入を施す。その間に夫次室の雨戸を開け電報三通を大急ぎにて認む。そつと婆やを呼ぶ。

婆――大分御容體がお惡いやうでいらつしやいますねえ。

夫――惡い。それでね。

この時、時計五時をうつ。

夫――もう五時か。（自分の時計を出して見る）あれは七分ほど進んでゐる、今丁度五時七分前だ。六時にならなければ電報は取りあつかはないから六時がうつたらお前は忘れないでこれを出しに行つてくれ。それから湯をたくさん沸かしておいとくれ。（病室に入り來り）どうですい、やうか知らん。

看――大分呼吸がお樂におなりのやうですよ。（妻に向ひ）この位に致しておきませうか。（妻うなづく）又少し間をおいてしまひませう。（吸入をやめる）

妻――（夫に）看護婦さんに……看護婦さんに起きてゝもらつて、あなたお休み遊ばせ。看護婦さん……そんなに……そんなに近くにゐては苦しい。あゝ、暑い、暑い。

夫――よし〳〵寢るよ。お前も樂になつたらよく氣を落着けてお休みよ。（夫蚊帳の中に這入る）

暫くの後看護婦居睡りをしはじむ。妻看護婦を呼びながら寢がへりをうつ。

妻――看護婦さん。

看――(驚いて眼をさまし)はい。

妻――子供の寫眞……あすこにある子供の……子供の寫眞を……もつと近くに持つて來て見せて……下さい。

看護婦立ちて、寫眞を取り來り自分先づゆつくりと眺め、妻の眼の前におく。

看――ほんとにお可愛いゝお坊ちやんがたですわねえ。三人いらつしやるんですね。どんなにかまあお子さん方の方でもお母さんのよくなるのを待つてらつしやるでせうねえ。

暫くして看護婦再び居睡りはじむ。臺所よりは婆やのありふれたる讃美歌の鼻歌聞こゆ。やがて看護婦ばつたり前に伏して寢倒れる。妻寫眞を見つゝ泣く。

妻――あなた。

夫――(直ぐ答へる)よし、何んだ。(蚊帳より出で來る)

妻――やつぱりあなた……あなたがついていらしつて……いらしつて下さいまし。而して……そして看護婦をあつちに……あつちにやつて。

夫――おい、看護婦さん。あなたむかうに行つてゝよござんす。昨夜頼んだ林檎の電話はかけてくれたでせうね。

看――あんまり遲う御座いましたから、今朝早くにしようと思つてゐましたんです。

夫――そんなら今朝早くかけておいて下さい。

看――はい。(時計を見)お藥をさし上げておきませう。

妻――もういゝ……

夫――飮んでお置き、最後まで體を大事にしなければいけないんだからね。

妻――はい。それなら飲みます。

藥を飲む。

看――お體溫を……

夫――よし〳〵それは僕がする、おいといて下さい。

看護婦次室に退く。婆や次室に來る。

夫――さ、今朝は一つ體溫を取つて見よう。まだ暑いかい。

妻――えゝ。

夫――どれ。（檢溫器をかく）

看――婆やさん、お前さんお隣に行つて林檎の事を賴んで下さいな。

婆――いやだよ、それはお前さんが賴まれた事ぢやないか。（病室の方を見やりながら親指を出して）お天氣が惡いだらう。

看――いやになつちまふよ。

婆――これ（小指を示し）さへよければ、そんなでもないんだけれども、わるいとなるとやつあたりだからねえ。どうだらう。

看――もう駄目よ、かあいさうに。

婆――さうかねえ。そりや何んにしてもお氣の毒な事だねえ。

看――それぢや私ちよつと行つて來ますからね。

看護婦退場。婆やは次室を片づけ看護婦の小箱の中、葉書など見たる後退場。

妻――子供を齒醫者にやつて……下すつて？

夫――うむ、昨日の朝兒きを連れて行つてやつた。痛がつて困るだらうと心配したら案外勇ましくしてゐたつけ。もう體溫はいゝだらう、どれ。（檢溫器をあらためて）六度八分だ。熱はないんだがなあ。（暫く沈默）齒醫者でエンヂンをかけられたのさ。初めてなもんだから驚いてゐたつけが、ロの中を自動車が通ると云つたんでお醫者まで笑ひ出したよ。（暫く沈默）呼吸が少しは樂になつたやうだね。なつた？　さうか。汗が出てる、玉のやうに。拭くよ。（暫く沈默）おゝ、朝顏が綺麗に咲いた。（緣を下り朝顏の鉢三つほどを妻の枕許に持ちこむ）美しいねえ。（暫く沈默）「昔見しはかなき夢のゆくへにも似てあはれなり朝顏の花」――お前が作つた歌だぜ、覺えてゐるかい。（沈默）

妻――ほんとうに夢のやうね。

夫――（妻の意味する所は氣附きながらわざと氣附かぬ風に朝顏を見やりて）さうだなあ。

妻――あなた。

夫――何んだ。

妻――たつた一つ……一つだけ伺つておきたい事があるの。

夫――何んだい。

妻――私、私は……あなたを信じ切つてゐてよう御座いますか。

夫――（男らしく）いゝとも。俺はこの一言をはつきりお前に云ふ事が出來るために、他人が知らない程俺の迷ひ易い心と戰つて來た。而して俺は幸ひにも勝ちぬいた。俺はそれを自分ながらいさぎよく思ふんだ。安心して俺を信じ切つていゝよ。俺もお前を心の底から愛する事が出來るのをありがたく思ふ。（涙して）俺たち二人は

ほんとに幸ひだつた。

妻――うれしう御座います。もう……もういつ死んでもいゝ。

夫――さうだ。お前はそこで生きてるより俺の心の中で餘計生きてゐる。俺の心はお前を吸ひ取つてしまつたんだとさへ思へる。然し今お前を失ふのは――俺がやつとお前の夫らしくなつた時にお前を失ふのは苦しいからな、出來るならなほつてくれ、いゝかい。(妻ぅなづく)

俺の血管の中にはお前が想像も出來ない程毒血が流れてゐるんだ。結婚してからもいくたりの女に誘惑を感じたか知れなかつた。ある時は運命がお前以外の女に俺を結び附けてるなと思つた事さへあつた。然し俺はそのたんびにたつた一人でお前にさへも打ち明けられない戰をたゝかつたんだ。而して血みどろになりながらも一つ〳〵勝ちぬけて來た。一つ勝つたんびにお前の俺に對する愛と、俺のお前に對する愛とがはつきりわかり出して、それが力に變つて來たんだ。A子、俺は俺たちの淋しい道を悔いないよ。わかるか。俺たち二人は無駄には生きなかつた。一つの力となつて生きて來たんだ。わかるね。(妻ぅなづく) これは俺たちが感謝すべき事だ、誇るべき事だ。謙遜な心で誇るべき事だ。

妻――もうほんとに天國もいりません。ほんとうにうれしくつて涙がこぼれます。私は死んでも、もつと生きてますのね。

夫――さうだ、お前は死んでも生きてる人の一人だ。だがお前は肉體的にも死んではいけない。

妻――生きられるだけ……生きられるだけ勇ましく生きます……もう何んにも云ふ事はありません。(暫く沈默)

足の方が寒くなりました。湯たんぽを…… お醫者樣を。

眼をとぢて、氣息(いき)ます〳〵せはし。

夫——看護婦さん、看護婦さん。

婆や臺所より走り出る。

婆——看護婦はまだお隣から歸つてまゐりませんので御座いますよ。ほんとにしやうのない人で……

夫——餘計な事は云はなくともいゝ。早くありつたけ湯たんぽを作つて來てくれ。それから看護婦に……居ないんだつけな。病院に行つてもらひたいんだから迎へに行つて來てくれ。湯たんぽは俺がする。

婆——ちよつとお待ち遊ばして下さいまし。ぢきお湯を沸かしますから。

夫——馬鹿！　さつきあんなに言ひつけておいたのをどうしたんだい。（妻の脚をさはつて見る）冷たい。今まで暑い〳〵つて云つてたのにこんなに冷えて居る。おい藥罐か何かに少しでも沸いてはゐないのか。

婆——左樣で御座いますね、ひよつと致したら土瓶に。（臺所に去る。やがて土瓶と湯たんぽを持ちて登場）これだけ御座いまして御座います。（湯たんぽに湯を入れかゝる）

夫——それつぱかりの湯をそんな大きなものに入れて……こつちによこせ。而して早く隣に行つてくれ。

婆——お隣に參りまして何んと申上げますので御座い……

夫——（舌打ちして）看護婦を呼んで來るんぢやないか。

婆——おや左樣で御座いましたね。では一寸いつて參ります。

夫、藥瓶の藥を庭に捨てそれに土瓶の湯をうつし自分のハンケチに卷きて妻の足もとに入れ、心配げにその顏を見やる。

夫——どうしたと云ふんだ。まだ歸つて來やしない。A子、寒いか。

妻——（驚きたるやうに眼を開き、手まねにて夫を遠ざける）氣息（いき）が苦しいから、もつとあつちに……そこいらに在るものを……みんな……みんなあつちに……

夫――これか。

妻――みんな……みんな……

夫立ちて朝顔の鉢を庭に捨て、枕許にあるものを臺所に移し居る。看護婦、婆やと共に登場。

夫――看護婦さん、すぐ病院に行つて誰かに來てもらつて下さい。

看――どんなです。（近寄りて脈を見んとす）

夫――あなたより醫者の方がたしかだよ。すぐ行つてください。

看――どなたをお願ひしませう。

夫――そんな事を……誰でもいゝぢやないか。婆や、湯は沸かしてゐるか。

婆――はい〳〵唯今。（看護婦、婆や去る）

妻――（再び眼を開き）掛物も何もみんな……部屋をきれいにして……

夫――うむ、わかつた。

凡てのものを臺所に移し子供の寫眞も片づけんとす。

妻――（再び眼を開き）いゝの……それは（夫を恐ろしく睨む）……それから……それからあなたと……あなたゞけ……こゝに……こゝに……寒い。

夫――今湯たんぽを持つて來るよ。その中にお父さんもお母さんも見えるから、氣をしつかり持たなくては駄目だよ。わかつたか。

妻――（かぶりをふり）あなた……あなた。

夫――俺はどこにも行きはしないよ。安心しろ。

醫者來る。簡單に挨拶して第一場の如く注射す。

醫――電報はお出しなすつたでせうな。

夫――出した筈です。

醫――こゝ二時間とはおもちになりますまいと私は思ひます。

夫――どうかして兩親の來るまで……

醫――その手あてはしましたが、どうも……（脈を見る）結滯がひどいですから……（爪を見る）

妻――（眼を開き）あなたゞけ……こゝにはあなた、あなたゞけ……

醫――それでは私は隣のお部屋に行つてゐます。

夫――さうですか。恐れ入りますが湯たんぽをどうか。

醫――畏りました。

醫師次室に去る。妻又眼を開き繁々と部屋を見廻す。婆や湯たんぽを持ちて入りこの様を見て心當りありげにうなづく。

醫師次室にて看護婦より容體を聞き病床日記に書きこみ居る。婆や臺所の方より次室へ入り來り、

婆――先生、奥様がね、唯今からうやつて部屋中をしげ〳〵と御覽になつていらつしやいましたが、どなたでもおなくなりになります前に遊ばす事で御座いますねえ……ほんとに何んと申上げてよろしう御座いますやら……いゝ御親切な奥様でいらつしやいましたが……

夫、妻を見戍りながらこの言葉を聞き眼を拭ふ。

そのまゝにて舞臺暗くなる。

ダーク・チエンヂ。

第四場　夢の場

妻の夢。

序幕と同じ舞臺。始めは明滅する焰の外暗黑。漸次明るくなる。

焰の前には「死」のみ默坐す。

五つと三つ程の子供戯れ居り、傍の搖籃には乳兒寢かしある。妻いそがしく働く。

妻――さあ片づいたからこゝにいらつしやい。よくおとなしく二人で遊んでゐましたね。どれ。（一人づゝかき抱きて接吻してやる）まあ、あなたのキスの甘いこと。今のお菓子がどつさりお口のまはりについてゐますよ。（手拭を出してふいてやる）赤ちやんにももう御馳走を上げる時分だから、ちよつとお待ちなさいよ。（妻、牛乳を調合す）

長子――マヽ、ちやん、パヽ、ちやんはまだ？

妻――もうぢきお歸りでせうよ。それまで婆やと一緒におんもにいつて遊んでいらつしやいな。でも戸外（そと）は寒いか知らん。婆や。婆や。

婆や登場。影人（くろんぼ）に導かれて來る事前の如し。

妻――あの戸外（そと）がさう寒くなかつたらお庭に連れてつて遊ばしておくれ。

婆――畏りまして御座います。さあ坊ちやまがた。

二人の子供、婆やに連れられて去る。

妻――（牛乳を乳兒に與ふ）そらお待遠ほさま。おいしうござんすか。その眼がよ……笑つて。

學生二登場。

學二――奧さん行つて參りました。大變喜んで御禮を云はれました。

妻――さう、御苦勞さま。下田さんはどんな御樣子でした。

學二――どうもよくない風です。下田さんが何んだかやつれてお出でゞした。

妻――おかあいさうねえ。

學二――盆と帛紗（ふくさ）は何處におきませう。

妻――さうね。その棚にでも置いといて下さいまし。

學生二、棚の所に來り、

學二――下田さんではいつ奧さんが死なれたんですか。

妻――去年です。去年ではない、もうをとゝしになりますねえ。

學二――下田さんは奧さんから結核が感染したんでせうね。この頃でも時によると二時頃まで勉強するんださうですが、その翌朝（よくあさ）はきつと腸から血が下るんだと云ひました。學校に出ても暇の時間は宿直室にぶつ倒れてゐて、授業時間が來ると、敎室に出て、例の通り熱辯を振ふものですから、前の方にゐる生徒は唾（つば）が飛んで來さうで生きた心地はないと云つてゐるさうです。學校の衞生から考へると隨分問題ですね。

妻――ほんとに自分の子でも預（あづか）つていたゞいてるとすると怖（こは）う御座んすね。けれども、下田さんの方から考へると、たまらない程御同情が出來ますわ。お母さんはあの通りのお齡（とし）なのに奧さんのお殘しになつたお子が二人もおありでせう。それがばつたり俸給から離れておしまひになれば、右にも左にも動けはしませんわ。下田さ

んが時々いらしつてね、あすこの醫者に試驗をしてもらつたけれども少しも徴候がないとか、こゝの醫者はピルケの反應を認めたけれどもその反應はさつぱり的になるものではないと云つたとか、云つていらつしやるのを聞いてゐますと、お氣の毒でならなくなりますよ。どうかして御自分の病氣が傳染性のものではない事を證明して御自分の良心を安心させたいと思つていらつしやるのですわね。あんな勉強家な、中學校の先生にしては勝れて實力のある方ですのに、惜しい方ですのね。

學二——さうです。少し世の中を見ると、不公平なことばかりですね。それから思ふと先生の御境遇はお仕合せです。

妻——さうですのよ。ほんとに私共は勿體なくつて恐ろしい位です。主人も始終さう云つてをりますよ。

學二——然し私は……もう五年前になりますねえ……先生に喰つてかゝつて、學校から先生をやめさせるやうにしたあの時の事を思ひますと今でも背中に冷汗が出ます。それなのに先生はかうやつて私をお家において下さるんですから、私は時々實際たまらなくなるんです。あの頃は先生は隨分お苦しみになつたでせう。

妻——いゝえ主人は割合に平氣でしたの。私こそ餘計な事を……馬鹿だつたものですからね……餘計な苦しみをしました。

學二——お詫びのしやうがありません。

妻——いゝえあんな事があつたんで私も少しづゝ眼があいて來たんですもの、……今でも御禮がしたい位ですわ。……ほんとうですのよ。その代りあなたも少しは修業をなさいましたわね。

學二——さうですとも。あの時先生の仰しやつた言葉は私、忘れる事が出來ません。

妻——何んと云つたんです。

學二――私はあれから總代になつた二人と倶樂部に歸つて、先生が拘引されなさつた事を報告し、先生の抱かれてる主義の立場から考へれば有夫姦位の事はありがちの事だし、主義そのものが日本の國體や政體と一致しないと云ふ事を極力主張して、たやすく先生排斥の決議を成り立たせたんです。そして先生はすぐ學校を退かれました。先生のやり口があまり執着がなさ過ぎるので、一部のものは似而非物の本性がます／＼現はれたと云ふし、一部のものは生活に餘裕のある人間の遊び半分さが見すかされると云つて笑つてゐました。けれども私には唯笑つてばかりすまされない事が起つたのです。それは先生が一通りの取調べの後で證據不十分で歸つて來られたからです。かうなると私の先生に對する非難の根據が丸崩れになる譯ですからね。そればかりでなく、先生が一度も自分を辯解なさらなかつた事が不思議に思はれてならなかつたのです。お寒いんですか。

妻――えゝ何んだか寒う御座んす。子供たちは戸外で大丈夫でせうか。

學二――子供は風の子です、大丈夫ですとも。それから私は苦しみ出しましてねえ。とう／＼こらへ切れなくなつて先生の所に一人で伺つたのです。

妻――さうだつたんですか。丁度あの頃私は一番目の子のお産の時でしてね。

學二――さうでしたね。

急に賑やかになり夫子供等と戯れつゝ登場。

妻
學二 ――お歸りなさいまし。

夫――あ、雪になつたよ。坊主共は二人きりで雪の中に犬ころのやうになつて遊んでゐた。

妻――婆やは？
夫――女中部屋に小さくなつて居た。
妻――あんなに賴んで置くのにね。
夫――（肩より亞麻製の大袋を下し）馬鈴薯と玉葱はこれだけあれば當分いゝだらう。雪が大分深くなつてるから掘り出すのに骨が折れた。今日は君廐肥を畑中に播いて來たんだがね。
學二――それは早過ぎませんか。あれは雪解け前後でいゝんでせう。
夫――何、それだつて少しきゝめが薄くなる位のものだらう。おい、坊主ども來い。（大手を開いて子供を呼ぶ。子供かけよる）この雪は。（拂つて抱き上ぐ）
妻――あなたこそ一ぱいですよ。（夫の肩を拂つてやる）
夫――ベビーはどうした。寢てゐるな。さ、もういゝからお前達は婆やの所にいつてストーヴでこれを烙つてもらひ。おいしいよ。
子供等父の手より馬鈴薯を受取り、「婆や」と呼びながら退場。
學二――御本人がいらしつたから私のお話の先は先生からお聞き下さい。
夫――何の話。
學二――先生の懺悔です。
夫――（陰鬱になる）そんな事は一度でもういゝ事ぢやないか。俺の傷をさうあら〳〵しく撫でないでくれ給へ。A子、下田さんのお婆さんに途中で遇つた。あの年で小さい方の子をおぶつて、雪の中を步きにくさうにして居られた。病院に藥を取りに行く處だつて云つてたが、いろ〳〵お前に禮を云つて居られたよ。馬鈴薯を分け

るやうに云つて置いたから後で婆やに持たしてやつて置けよ。

學二――先生……

夫――いつまでも先生は困るな。もう百姓になつてから五年たつよ。

學二――外に一寸呼びやうがないもんだから……それぢや私から奧さんに一應お話していゝでせう。私がこちらに御厄介になつた譯を奧さんはまだ御存知がないのですから。

夫――女は好奇心の强いものだな。そんなら話したまへ。俺は讀み物をする。（机の處に至り）A子、こゝにこんな手帳があるよ、お前んだらう。（水色の手帳を示す）

妻――さうです。（急いで受取る）

夫――お前の祕密な手帳だ。こんな所に置いとくと俺が讀む氣にならないとも限らないよ。

妻――（笑ひながら）さうですね。（棚にしまふ）

夫讀書す。學生二、妻と語る。妻は棚にある風呂敷と盆とを片附けながら、

學二――私は何しろこの通りの性質ですからね、何故あんなひどい評判を立てられて辯解が出來ないんですと正面からお尋ねしたのです。さうしたら先生が意外にも辯解が出來ないからしないのだと云はれるのでせう。一縷の望みを抱いて來た私はがつかりしてしまひました。それからです、先生が懺悔をなさつたのは。……何んだか話しにくゝなりましたね。かうです、先生は奧さんと結婚なさつてからも竊かに心をよせた婦人達があると云ふのです。その事は御承知でせう。その婦人の中の一人には殊に心を牽かれたんださうです。而してその婦人は夫のある人だつたんださうです。而してゞすね。ちゞめて云へば、先生は運命と云ふものにでも引きずられるやうになつて、或る夕方ふら〳〵とその婦人の家の方に行かれたんださうです。

妻――然しとう〳〵その誘惑には打ち勝つたのでせう。

學二――さうです。

妻――それぢや立派に辯解が出來る筈ぢやありませんか。

學二――然し先生はさうは考へられなかつたのです。基督の言葉の、女に對して心を動かしたものは姦淫を犯したものだと云ふあれをきびしく御自身の上にあてはめられたのでせう。

夫――さうぢやないんだ。さう云ふ譯ぢやないんだ。（室中を歩きまはる）僕は君が來た時までは幸にも一つ〳〵誘惑に打ち勝つてゐた。然し僕の中の毒血はなくなつては居なかつたんだからね。僕は自分の未來に對して自分の心を保證することが出來なかつたんだ。何時どんなつまづきをするだらう、さう思ふと僕は默るより外にしやうがなかつたのさ。退校の處分にきまつた學生を僕の家に引き取つたのも、云はゞ自分の心を憐れんでした事だつた。この心は學生を動かす事が出來るとも思つてゐたのだが、世の中はそろばん通りに行くものではないね。その學生は僕の所に來てからます〳〵墮落してしまつたよ。

學二――私は兎に角その時先生の心に觸れたんです。この言葉が僭越なら、觸れたと思つたんです。そして先生は寛大にも先生の敵を容れてくれたんです。

夫――さ、敵と云へば敵だが、味方と云へばこの上もない味方だ……何しろお互に一寸づゝでも五分づゝでもいいから、偉くなつて、よくなつて、行きたいもんだ。人生の可能性を具體的に證據立てるほどいゝ仕事はないからね。

學二――さうです。

夫――（妻に向ひ）俺が辯解をし得なかつた譯はお前も解つたらう。俺が學校をやめたのも學生のためによかつた

んだ。俺のやうな危險人物は下田さんの病氣よりもつと學生には危險だからな。
學二――その事はどうかもう云はないで下さい。私は非常に苦しう御座います。……何か外に用事はおありになりませんか。
夫――何んにもない。部屋に行くならこの袋を婆やの所に持つて行つて、それから郵便函を見て來てくれ給へ。
學生二退場。
夫――下田さんに今日も何か上げたのか。
妻――あつめものとあの藥を少し上げましたの。あの藥は大變きくやうだつて仰しやつてゞしたつて。
夫――さう信じられゝばきくだらう……あの藥と云へば、結婚してすぐ二人で東京からこゝまで旅をした時の事を覺えてゐるかい。
妻――さうでしたねえ。お父さまが何にでもきくからつてあの藥を下さつたのを、私があんまり飲み過ぎたもんで、頭痛を起したり鼻血を出したりしてしまひましたつけね。
夫――もう一つあるんだが。
妻――何んでしたかねえ。
夫――倶知安(クッチャン)あたりから俺達の隣りに夫(をっと)と一緒に乘つた婦人が汽車に醉つて苦しんでゐると、お前がそれを見て、懷中からあの藥を出したもんだ。
妻――そんな事がありましたか知らん。
夫――あつたさ。何をするかと見てゐると自分で一粒のんでまた引つこめてしまつた。
妻――さうでしたかねえ。

夫――さうかと思ふと又出したつけ。そして又引つ込めてしまつた。思ひ出したらう。そんなにしてお前は何度出したり引つこめたりしたか知れやしなかつた。そしててれかくしに時々自分で飲みたくもないのに一粒づつ口に入れたよ。

妻――うそですわ。

夫――うそなもんか。而して札幌に汽車が着きさうになつて隣りの奥さんがいそ〳〵と降りる支度をする頃に、やう〳〵大勇猛心を起してその奥さんの所に藥を持つて行つてやつたぢやないか。奥さんは迷惑さうに紙切れにつゝんで帶の間にしまつてしまつたさ。

妻――うそでせう。

夫――あの頃からすると大分お前の面の皮も厚くなつたよ。そんな事も一つ話になるまでになつた。然しこゝまでに來るにはお互ひに危い難所を通つて來たつけな。

學生二登場。一枚の郵便を夫に渡す。

夫――噂をすれば影だ、お父さんから來たんだ。（手紙を讀みながら）俺は幾度むしや〳〵して來て家庭なんぞたゝき壞はしてしまはうかと思つたか知れなかつた。お前も時々自分の生活が眞暗になつたつけね。

妻――そんな事はありませんわ。

夫――無いとは云はさないよ。お前の心の隅に……と云ふより女の心の隅に根づよく隱れてゐる華美好な、いたづらものがお前の愛を幾度も眼隱ししたんだ。そればかりぢやない。どんな柔順な女でも、イヴ以來男に對して持つてる恨みが頭を持ち上げる時のあるものだ。お前は氣が強いだけに可なりそれで苦しんだのを俺は知つてゐる。東京も寒いさうだ。然しみんな丈夫だとさ。頭の冷えるお母さんが又眞綿帽子をかぶんなさる時が來

たらう。花が散つて實がなつた。これから俺達はうんと腹をきめて靜かに熟してゆけばいゝんだ。お父さんもおだやかになられた。（手紙を妻に渡す）今月は金を送る所にはみんな送つたかい。

妻――えゝ送りましてよ。（手紙を讀む）ほんとですのね。いゝ方ね。私お父様の笑顔を拜見すると世の中が急に明るくなるやうに思ひますわ。

夫――心の底の綺麗な方だからな。もとはよく無鐵砲に喧嘩をしたもんだが、この頃はなつかしくばかり思つてしまふ。どことなく俺にたよつて來られるやうな所が見えたりすると、あの勝氣な方も齡のせゐだと思つて俺はしんみりした心になる。何しろ長いきしておもらひしたいものだ。然し俺のして來た事が絶えずお父さんの心に不安を與へてるのは苦しい事だ。こればかりはしかたがないけれども。

妻――妙な事がこゝに書いてありますのね。追書に。

夫――そこは讀まなかつた、何が書いてあるい。

妻――（讀む）「追て序ながら申上置候。老生萬一の後の事は遺言に作り母上に預けおき候間、その時期來らば母上と同座にて御披見なさるべく候」ですつて。

夫――そんな事が書いてあるんか。

妻――えゝ。

沈默。

妻――私も遺言が出來てゐますよ。

夫――何、馬鹿。

妻――人はいつ何時死ぬかわかりませんからね。

夫――俺は今日何と云ふ事ばかり聞かされるんだ。馬鹿な事を云つてくれるな。

妻――さうです、あなたはお聞きにならなければなりません。（水色の手帳を出す）

夫――それに書いたのか。

妻――さうですわ。まあ椅子に腰かけて下さいまし。そして氣を落着けて下さいましよ、讀みますから。（讀む）

「あなたに手紙を差上げたいと思ひましても、手紙を書けばきつとこの頃の私の心持が現はれませう。それは私にとつては何でもない事で御座いますが、あなたや皆様には悲しい事と存じますので、こんなに始終私の事を案じてゐて下さる上に、猶お悲しめ申すのが私には堪へられない苦しみです。そんなら一人でたゞ思つてゐればよさゝうなもので御座いますけれども、それも何だか淋しいので、あなたに手紙を差上げる代りにこゝに認めておきます。私が死んで後、（何となく恐ろしげに「死」の方を見やる）御覽になりませう。けれど決して悲しんで下さいますな、私の爲めには。後に殘られたあなたや子供達御兩親樣の爲めに泣いて下さい。

「死が忍びやかに（恐ろしげに「死」を顧みる）近づいて參ります。私にはそのひゞきを聞くことが出來ます。あなたには聞こえないと仰しやいましても。私は自分の爲めに悲しみません。

「あなたは私が失望しすぎると仰しやいますが私はさう思ひません。皆様にはお氣の毒で御座いますが、もういけません。いつかは死が參ります。そしてその死がもう近づいてゐるのを私は知つてゐます。（「死」の方を顧みる）

「私は死を少しも恐れまん。かうして筆を執つてゐましても涙さへ浮びません。人らしい事をしないで死ぬと云ふ事が殘念で御座いますけれども、死そのものは悲しくも恐ろしくも何んとも御座いません。こんなにひどくなつてしまつてはどうせ全治しないのですから、生きてゐるのは名のみで、唯ぶら〳〵してゐるよりも死ぬ方が、すべての爲めによくはないかと思ひます。全快して生きられるならこんな嬉しい事は御座いませんけれど

も、今はもうそんな事は願はれもしない事となつてしまひました。
「この十日ばかり私の心は死といふ事ばかり思ひつゞけました。さうして今では死を思ふ事は樂しみのやうになりました。戀人の上でも思ふやうに死ばかり思つてゐます。
「それから私はあなたの御事業の御成功を見ないで死ぬのが殘念で御座いますけれども、必ず御成功遊ばす事を信じてをります。凡ての事に打ち勝つて御成功遊ばして下さい。
「それから皆樣にお願ひ申して置きたい事は三人の子供達の事で御座います。弱い私の子供達だからやつぱり身弱であらうなどゝ云ふ考へは決して〳〵どなたもお持ち下さいますな。ほんとうに、いつも申上げます事ですが、人の精神の力は恐ろしいもので御座います。私に似ず父親に似て三人の子等は丈夫だと云ふ事をお信じ下さいまし。さうかと云つて丈夫にまかせて病氣の時手おくれなどはさせないやうにしていたゞかねばなりません。あゝ私の一念は三人の子供達を立派な丈夫な人にしないではおきません。必ず立派に致します。
「死ぬ時は誰にも知られずに一人で靜かに死にたいと思ひます。最後の苦しみの樣を人樣から見られる事は一入の苦しみです。親子兄弟に遇ふのが普通では御座いますが私はどなたにもお目にかゝりたく御座いません。
「子供達には私の死と云ふ事を知らさないやうにして頂きたいと思ひます。お葬式などには參列させないで下さい。小さい清い子供心に死とかお葬式とか云ふ悲しみを殘させるのはほんとうに可哀さうで又惡い事で御座います。ほんとうにどうぞ知らさないやうに、御葬式の日などには何處かへ遊びにやつて下さい。大きくなつて知る時が參りませう。それまでは病氣と云ふ事にしておいて下さい。
「あなたはこんな何一つとりえのないものをよくも愛して下さいました、導いて下さいました。ほんとに心の底の底から私は難有いとも、うれしいとも、もつたいないとも思つてをります。あなたのやうな方を夫に持つた

と云ふ事が短い生涯の中の唯一つの誇りで御座います。この誇りの爲めに私は淋しい中にもよろこんで死ぬ事が出來るので御座います。

「ほんとにこんな病氣で若死しやうとは思ひもかけない事で御座いました。あとにお殘りになるあなたと子供達の爲めに私は涙を惜しみません。（こらへ切れずして涙をのみつゝ泣く）（手帳を捨て、輝きたる顏になりて夫の方に近づき）この頃の私の心は美しう御座います。かう云ふ時にこそエデンの園が見られるので御座いませう」

この間に影人（くろんぼ）出て來て家具一切を運び去る。

夫――どうしたと云ふんだ。お前は本氣でそんな事を書いてゐるのか。

妻――運命で御座います。もう永く〳〵お別れする時が來たやうです。たつた今まであなたのお顏にあつた笑ひも私の顏にあつた笑ひも逃げてしまひました。皆んな逃げてしまひました。

夫――俺には何もかもわからなくなつた。

妻――笑ひ許りぢやありません。私共の暖かつた家も、婆やも、學生の方（かた）も、お友達も見えなくなつてしまひました。御覽なさいまし、この廣い野を。

夫――何んと云ふ淋しい景色だ。

妻――何んにも見えませんね。

夫――淋しい。

妻――寒い〳〵雪がふつてる許りです。

影人（くろんぼ）、籠の中に雪紙を滿たし來りそれを舞臺にまき退場。雪紙やがて上より降り來る。

夫妻相抱く。

妻――私はあなたの懐の中で靜かに眠ります。子供達に遇はして下さい。

影人子供三人を連れ來る。

妻――寒いだらうね。さあ、私の所にいらつしやい。さ、あなたも。さ、あなたも。みんないゝ子ですね。あたためて上げませうね。でもマヽはね、自分が寒さにふるへてゐるのだから、どうして上げやうもないわね。可哀相に。どうして上げたらいゝだらう。（見まはす。「死」の前に明滅する焰あるを見出す）あ、あすこに私の火が燃えてゐる。あの火が燃えてるかぎりはあなた方もパヽさんもあたゝめて上げますよ。御覽、あすこに坐つていらつしやるをぢさんは怖いをぢさんだから決してあの方を見てはいけませんよ。あの方はあなた方をどうもなさりはしないんだからね。（夫に向ひ）あなたもあれを御覽になつてはいけませんよ。

妻、子供をいたはりながら焰の處に近づき手を翳す。

夫――火が消えて行くではないか。

妻――その時に私は死ぬのです。

夫――あれは何んだ。（「死」を指す）

妻――私はあの方の顏を永い間見つめましたからもう怖くはありませんけれども、あなたが御覽になつてはいけないものです。さ、もう火が消えます。寒い〳〵暗黑が來ます。あなたは子供を連れて早くこゝから逃げて下さいまし。

夫――お前もおいで。俺はお前を連れずにどうして此處が立ち退けよう。

妻――私も一緒に參りたいのですけれども、もう駄目です。（泣く）さ、早く逃げて下さいまし。

影人(くろんぼ)來り夫と子供達とを强ひて焰より遠ざける。夫抵抗しながら退場。妻いつまでも〳〵あとを見送る。

妻――（接吻をなげ）もう見えない。（泣く）

時計七時をうつ。影人等妻を取りかこむ。

「死」――（左手に持てる砂時計を高くかゝげ）砂はまだ殘つてゐる。お前達はさう慌(あわ)てる事はいらないのだ。

妻その聲に戰慄して焰の上に倒れかゝる。

舞臺急に暗黑となる。

靜かに幕。

第五場

第一場と同じ舞臺。

午前七時七分前。

妻、靜かに横はる。夫、妻の手の脈を見つゝその顏を注視す。

次室には醫師と看護婦よき所に坐して各〻雜誌を讀みつゝあり。

夫――（小さき聲にて）A子、何を見詰めてゐるの？（ふと驚きし樣子、醫師を呼ばんとする如く顏をもたげしが、思ひかへして手を妻の眼に翳(かざ)す、眼瞬(まじろ)がず。驚き）A子！　A子‼

次室の醫師と看護婦、雜誌を捨てゝ立ち上る。

夫――醫長さん。

醫師、看護婦病室に入り來る。

夫――瞬(またゝ)きをしません。脈を見て下さい。

醫師脈を見る。

夫――眼をふさぎましたね。脈はまだありますか。

醫――ありません。おい看護婦、水を用意して、水を。

看護婦臺所に入り水の入りたるコップと杉箸の先きに脱脂綿を附したるを持ち來る。

看――これで水をおあげなさいまし。

夫、末期の水を妻に與ふ。婆や泣きながら出で來る。

夫――今になつて泣いたつてしやうがない。そんなに取りみだしてはいけない。お前も水をあげてくれ。

婆――さう仰しやいますけれども、旦那樣、これが泣かずにをられませうか。(聲を立てゝ泣く)

夫――しいツ。靜かに。

婆――まあ喘(あへ)いでいらつしやいますよ。神樣、奥樣をお助け遊ばして下さいまし。

醫――申し憎う御座いますが、お縡(こと)ぎれになつたやうです。(妻の胸に聽診器をあて、やがて夫の方に向きて嚴かに)
殘念で御座いました。

夫――……(たゞうなづく)

醫――(時計を出して見て)丁度七時ですな。

看――(同じく)さやうで御座います。

醫師看護婦末期の水を與ふ。

婆――奥樣、とう〳〵あなたは神樣のところへいらつしやいましたか。私も、奥樣、おツつけ參つてあちらでお目に懸らせていたゞきます。（末期の水を與へて）アーメン。

暫く沈默。

醫――（看護婦に）後の事は手落ちなくして上げるがいゝ。何か必要なものがあつたら病院に云つておいで。私が歸つたらすぐ車夫を一人よこしておくから。（夫に向ひ）御愁傷はお察しゝますが、これぱかりは還らぬ事ですから、お諦めが御大事です。それでは私は一先づ御免を蒙ります。

夫――御禮の申しやうもありません。いづれ後程。

醫師立ちて襖を開けんとし、

醫――何か外に御用はありませんか……電報でも。

夫――電報を願ひませう、私の兩親と妻の兩親にあてゝ。

醫――畏りました。普通の文句でよう御座いますな。

夫――「今朝七時A子靜かに逝く」としていたゞきます。

醫――承知しました。（退場）

看護婦と婆やかはる〴〵悔みを述ぶ。

夫――永い間お世話になりました。あなた方を叱りつけたり、亂暴に取りあつかつた事を許して下さい。非常に失禮をしました。（暫く放心したやうに妻を見つむ）口のきけなくなつた妻に代つて御禮を云ひます。

看――恐れ入ります

婆――（同時に）恐れ入りまして御座います。

夫――（看護婦に）これから何をすればいゝんです。

看――左様で御座います、おからだを浄めて上げませうか。

夫――それをして下さい、二人にまかせるから。

二人準備に去る。夫、妻の額に軽く接吻す。

二人準備をとゝのへて入り來る。夫先づ妻の顔をふきやる。看護婦と婆や他の部分を浄めはじむ。夫、袋戸棚の所に至り水色の表紙の手帳を取り出し、縁側に來る。不思議さうな面持にて空の様、庭の様子など打ち眺め、やがて縁に腰かけて手帳をめくり讀みはじむ。

暫くして後ろをふり向き、婆やが妻の髪をつかね居るを見、

夫――婆や、その髪の毛を少し切りとつといてくれ。

婆――畏りまして御座います。美しいおぐしで御座いますのに。

鋏の音高くひゞく。夫わが身を切られたる如き表情をなす。

婆やがて半紙の上にのせたる遺髪を夫の所に持ち來る。

婆――どこにお置き申しませう。

夫――そこにおいとき。

婆――お縁側の上にで御座いますか。

夫――さうだ。

暫く沈默。突然臺所の方にて威勢よき八百屋の聲聞こゆ。婆や臺所に赴く。暫くして林檎を盆に盛りて登場。

婆――旦那様、今朝頼みました林檎をもつて參りまして御座います。

夫――さうか。そんなら奥さんの枕許に置いてあげろ。

看護婦と婆や默りしまゝ働く。夫は手帳を讀みつゞけつゝありしが、感にたへかねて潛かに泣き、やがて傍にありし遺髮を取り、額にあてゝ默禱する如き形をなす。

幕しづかに下る。

終幕

序幕と同じ。但し焔は消え去りて亡し。始め暗黑。漸次明るくなる。「死」を圍繞して影人(くろんぼ)若干うづくまる。

やがて舞臺また暗くなり行く。「死」の獨白はその間に行はる。

「死」――小さい焔はみじめにもたやすく消え果てた。錠前(かけがね)はたしかにかけたな。金輪際(こんりんざい)錠前の外づれるやうな事があつてはならないぞ。

沈默。何處かにてすゝり泣きの聲聞こゆ。以下同じ。

人間全體は、何事も知らずに、ふりむきもせず、毎時(いつも)のとほり的(あて)もなく急ぎきつてその側をすりぬけて歩いて行く。

沈默。

夫や親たちの悲しみもやがて消えるだらう。

沈默。

然しあの男はまだ苦しむのがいゝのだ。まだ苦しませるのがいゝのだ。そのためにあの男の父はまた死なねば

なるまい、錠前はいゝか。鍵はよくあふか。錠前も鍵も銹びては居ないか。

沈默。

その用意をしておけよ。

恐ろしき沈默の後。

凡ては同じ事だ。

幕しづかに下る。

（一九一七年五月、「新公論」所載）

大洪水の前

「アダムその妻エバを知る。彼孕みてカインを產みて云ひけるは、我エホバによつて一個の人を得たりと。彼また其弟アベルを生めり。

「彼等野にをりける時カイン其弟アベルに起ちかゝりて之を殺せり。

「カイン、エホバの前を離れて出でエデンの東なるノドの地に住めり。……カイン邑を建て、其邑の名を其子の名に循ひてエノクと名けたり。

「(カインの末裔)レメク二人の妻を娶れり。一人の名はアダと曰ひ、一人の名はチラと云へり。アダ、ヤバルを生めり。彼は天幕に住みて家畜を牧ふ所の者の先祖なり。其弟の名はユバルと云ふ。彼は琴と笛とをとる凡ての者の先祖なり。亦チラ、トバルカインを生めり。彼は銅と鐵の諸ろの刃物を鍛ふる者なり。トバルカインの妹をナアマといふ。レメク其妻等に言ひけるは、アダとチラよ我聲を聽け。レメクの妻等よわが言を容れよ。我わが創傷のために人を殺す。わが痍の爲めに少年を殺す。カインのために七倍の罰あれば、レメクの爲めに七十七倍の罰あらん。

「アダム百三十歲に及びてその像に循ひ己に象りて子を生み其名をセツと名けたり。

「(セツの末裔)ノア、セム、ハム、ヤペテを生めり。

「人地の面に繁衍はじまりて女子之に生るゝに及べる時、神の子等人の女子の美しきを見てその好む所の者を取りて妻となせり。……時に世神のまへに亂れて暴虐地に滿盈ちたりき。神世を視たまひけるに視よ亂れたり。……神ノアに言ひ

けるは、諸ての人の末期わが前に近づけり。……我彼等を世と共に剪滅さん。汝、松木をもて汝の爲めに方舟を造り……汝と汝の家皆方舟に入るべし。我汝がこの世の人の中にて我が前に義を視たればなり。……今七日ありて我四十日四十夜地に雨ふらしめ、我造りたる萬有を地の面より拭去らん。

(創世紀より拔萃)

時

アダム生れてより七千二百二十五年目の二月。

處

エデンの園の東方ノドの地方及びアララット山の麓。

人

ノア――敬虔なるセツ族の首長、非常なる老年。荒布の灰色の衣。

セム――ノアの長子。頭髪鬚髯共に澀し。黒熊の裘を着たり。

ハム――ノアの次子。背丈け低き脂肪質の體格。野猪の裘を着たり。

ヤペテ――ノアの三男。均整を得たる男性的の姿持てる青年。純白なる羊の裘を着たり。

ノアの妻

セムの妻

ハムの妻

甲。丙。その他の男女。(以上セツ族の人々)

レメク――荒淫なるカイン族の首長。相當の老年。黄色の絹の衣。

アダ――レメクの第一の妻。
ヤバル――レメクとアダとの間に生れし長子。牧者。山犬の毛皮もて飾りせる衣。
ユバル――アダと天使との間に生れし若者。女と思はしきまで都びたる容姿。琴と笛とを執るもの。豹の裘を着たり。
チラ――レメクの第二の妻。
トバルカイン――チラとレメクの間に生れしもの。噪狂なる多血漢。刃物を造るもの。
ナアマ――チラと天使との間に生れしもの。カイン族の中にありても立ち勝れたる才色。眞紅の練絹を着たり。
盲目の群れ
乙。その他の男女。（以上カイン族の人々）
サミアサ――天使。
その他。

第一幕　アララット山の麓

遠くアララット山の空際に聳ゆるを見る。山上には噴煙立ちのぼれり。雲一つなきまでに空は晴れたり。舞臺右方に建て上げられたる方舟の舳首見え、その四邊には船材の屑取り散らされたり。ノアの子ハムとヤペテ瀝青にて船側を塗り、甲、乙、丙その他大勢の男女見物せる所にて幕開く。

甲――隨分長くかゝつたが漸く出來上るなあ。出來上つて見ると何だか本當に大洪水でも來さうな氣がし出した。
乙――（空を見上げて）さうさな。この天氣ではいまに大水になるよ。

丙――本當かい。
乙――空を見ろ。今にも大雨になりさうな模樣だらう。
丙――何んだい、人を馬鹿にしてゐるのかい。
乙――馬鹿になんぞするものか。天氣の時に限つて雨は降るものだ。丁度齡を取つて耳が遠くなればなる程エホバの御聲が聞こえて來るやうにね。お前の族のノアもいゝお年頃になつたから、エホバの御言葉の聞こえ出したのは無理はない。もし御總領のセム、お親父さんはおいくつでしたかね。（セム答へず）聞こえませんか。ぢやあなたもやがて神樣のお言葉だけが聞こえるやうになりますね。ぢや御次男のハム、お親父さんはおいくつでしたね。
ハム――（うるさゝうに）二十や三十なら年も覺えてゐられるが、私の父のやうになると、私なんぞには覺えてはゐられないのだ。
セム――（ハムに）ハム！　言葉を愼まないか。カインの族の者などには口をきくのさへが汚れなのだ。エホバの憤りが眼の前に近づいてゐるのを忘れてはならない。カインの族の者共の爲めにセツの族はどれだけ侮りと迫害とを忍んで來たか考へて見るがいゝ。（ハム侮蔑的に默す）
甲――それにしてもノアとあなた方三人の兄弟が氣を揃へて、こんな廣大もない大きなものを造り上げなさつた所を見ると、滿更謂はれのない狂言とは思へなくなり出しましたよ。こんな大きな船は御先祖のアダム、エバ以來見た事も聞いた事もない。親子兄弟が氣を揃へて……
ハム――私は氣を揃へてゐる譯ぢやない……
セム――ハム！
ハム――（セムの詰責を上の空に）この中には私達親子と妻達と諸ての肉なるものが一配偶づゝ這入る筈なのだ。

乙――ふむ、あなた方は隨分念の入つたしやれを考へついたものですね。洪水が來て俺達が泥水にあぶ〳〵してゐる間に、あなた方は船の中で婚姻の酒盛りでもしようと云ふのだな。

甲――では私達はこの船に乘るお裾分けはさせて下さらないのですか。

セム――父上の警告を侮り笑つたお前達にそんな事を今更云ふ口が何處にある。

甲――けれども獸物や鳥までが乘せて貰へるのに……

セム――獸物や鳥は神の御言葉を侮り笑つた事はないのだぞ。

丙――俺達は乘れないのかなあ。

乙――知れた話だ。乘らないのだ。

丙――洪水が來ると云ふのに……

乙――成程から天氣が續くと全く心配になるからな。

丙――心配になるかね。何時來るだらう。

乙――來る時が來れば來るのさ。

丙――又かつぐのかい。(一同笑ふ)

セム――默れ無禮者！　貴樣達はその卑しい笑ひの一つ〳〵に罪を重ねて、エホバの審判(さばき)の日を一日々々と縮めてゐるのを知らないのか。貴樣達はエノクから來たカインの族(やから)だらう。貴樣達の顏にはカインの印誌(しるし)が刻まれてゐる。貴樣達はエホバを畏(おそ)れる事を知らないで、夜となく晝となく御心に背く事ばかりを企てゝゐる。さうしてエホバの御言葉を馬鹿にしようとしてゐる。馬鹿に出來ると思ふならして見るがいゝ。軈(やが)て思ひ知る時が來るばかりだ。今日あつた通りが明日もあると思ふのは間違ひだぞ。今空が晴れてゐると云つて、明日の晴の

豫言にはなりはしない。

乙――エホバを一人で背負つて立つたやうな事を云ひますね、あなたは。ぢや伺ひますがエホバはあなたに何んとお告げがあつたんです。

セム――エホバは父上のノアに……

乙――さうだらう、なんぼエホバでもあなたのやうな人間に物を仰しやる譯がない。あなたのやうな人間はエホバとかおやぢとかを笠に被ないぢや人前に押し出せない人間なんだ。成程私はカインの族のものだがそれが如何したと云ふんです。あなたの御存知の通り私達の先祖のカインは弟のアベルを殺したに違ひはないが、憚りながら大御先祖のアダムとエバとがエデンの園にお出での時、エバのお腹に宿つた子と云ふのはカインばかりなんですからね。あなた方の先祖のセツはどうだ。アベルが死んだので、アダムもエバも悲歎の涙にくれてお仕舞ひなさつて、急に百も二百も一度に齡をとつたやうになつてから、粃のやうな子が出來た、それがあなた方の先祖のセツと云ふ意氣地なしなんだ。

セム――六日の後を待つてその高慢な口はたゝけ。

乙――今日の事は棚に上げておいて明日々々と仰しやる所はさすがにセツの末裔だけあると云ふものだ。

群衆中のセツの族――（今までの乙の皮肉に笑じ興じつゝありしが、急に乙に對して反感を現はし）人殺しを先祖に持ちながら出過ぎた事を云ふな。

手前達の來る所ぢやない。早く穢らはしいエノクに歸つてうせろ。（など口々に云ひ罵る）

群衆中のカインの族――セツの族の能なし猿。粃の末裔。（など罵り返す）

ノア立ち騷ぐ群集を押し分けて出場。

ノア——何をさう騷ぐ。靜かに。靜かに。（群集各〻の族に別れて立ち、鎭まる）お前達はどうして畏れをのゝく事を知らないのだ。今はカインの族、セツの族と隔てなぞを附けて騷ぐべき時ではない。靜かに。靜かにせいと云ふのに。……お前達は麻の衣を着、頭から灰を被つて、エホバの憐れみを願はねばならぬ時に臨んでゐるのだ。お前達のする事は一つ〳〵エホバの憤りを増すばかりだ。私は皆んなの前で明らさまにその事を幾度繰り返して證言したか知れないのに、心の頑なになつたお前達は耳を假さうともしなかつた。その報いはもう近よつてゐる。今日は二月の十日だ。今日から七日を過さず、エホバの仰せによつて、大淵の源は潰れ、天の戸は開けて、大水があのアララットの山の嶺をも隱すであらう。人間が創られて以來一時も絶えずに立ち昇るあの煙も、大地をつゝむ水に消されて立ち昇らなくなるだらう。その日の爲めにお前達は何んの備へをしてゐる。空しい言葉と淫らな行ひ……。靜かに。お前達はエホバの御業を奪はうと企らんでゐる。殊にカインの族の中にはエデンの園に似せて牛羊を飼ひ、セラビムの歌に擬ふ笛と琴とを造り、生命の樹を守る天使の焰の劍に型どつて武器を鍛へ出すものまで出來た。又セツの族の中には、エホバに祈りと燔祭とを捧げる事を忘れて、一生を夢と懶惰と飮食とに投げ與へるものが殖えた。別けても女の心のみだりがはしさは、エホバの憤りを火のやうにする。カインの族の主なるレメクは二人の妻を持つてゐる。而してそれを恥としない。エホバによつて人間が創られてから、まだ聞いた事のない恐ろしい僻事だ。なべての女は自分達が人間であるのを恥ぢでもするやうに、容姿を天使に似せ强ひて男の心をそゝり立てるばかりか、天使をすら試みようとしてゐる。女達！ お前達は何故このノアにそんな惡意を持つた眼を向けるのだ。お前達にはいとしい良人はないか。又その胸にかき抱くべき幼兒はないか。お前達のその寶がお前達の眼の前で見す〳〵滅びようとしてゐるのを何んとも思はずにゐられるのか。エホバのお眼の屆かぬ隈はない。このノアの老いたる眼にさへ眼にあまるものを……エホバ

は凡てを齎はした。さうしてこのノアに――セツの主なる、何んの取柄もない卑しいこのノアに、その恐ろしい憤りの御姿をお現はしになつた。お前達はまだ笑ふのか。笑ふなら笑ふがよい。お前達の滅亡はその笑ひの中に猶豫なく近づくのだ。

乙――どうせ亡びる者なら泣いたつて始まらないからな。

ノア――終りまで笑ひ通せると思ふなら笑つてゐるがいゝ。ノアはお前達の心をエホバに向はせる事の出來ないのを悲しく思ふ。

甲――俺は恐ろしくなつて來た。

丙――本當に洪水が來るやうに思はれて來た。俺は死ぬのはいやだ。

ノア――（甲丙に）お前達はセツの族の者達だな。

乙――粃の族の者達ですよ。おい、カインの人達もういゝ加減に歸らう。馬鹿と耄碌とが移りさうになつて來た。

カインの族の者共嘲笑と罵詈とを殘して退場せんとす。其者共の中に交りてナアマあり。ハム素早く其處女に眼をかけ、

ハム――（舞臺には見えず方舟の上に働き居るヤペテの方を向き）ヤペテ！　お前は見ないか。お前のナアマが先刻からこゝに來てゐるぢやないか。ナアマ待て、待てと云ふのに。（カインの族を逐ひ拂ふやうに威脅し、ナアマのみを引き留めて）お前は大天使ラファエルの變姿になつても不足のない女だ。見ろ、あすこにお前のヤペテがゐる。それ。お前は俺の弟のあのヤペテに……。おいヤペテ！　お前のナアマの美しさを見ろ。ナアマ、まあゆつくりして行くがいゝ。

悒　な面持にて徐ろに方舟の上に立ち現はれしヤペテ、ナアマの姿を認むるや、思はず方舟を飛び下りてこれに近づく、

ヤペテ――ナアマ！

ナアマ――（殆んど同時に）ヤペテ！

二人は互の魂まで見入るが如く見交はす。

ノア――ヤペテ！（セツの族に）セツの人達。お前達も銘々の幕屋に歸つて深く考へて見るがいゝ。お前達が本當に悔い改めたら、それがエホバの憤りを喰ひとめる堤になる事が出來るかも知れない。ぐづ〳〵してゐる暇はもうない。お前達は冬ごもりする蛇のやうに心を鈍くしてゐてはならない。早く行け。

丙――あれがノアの祕藏息子の花嫁にならうと云ふのか。ではあの處女も方舟に這入るんだな。カインの族のものでも美しければそんな仕合せな目に遇ふのに、俺は洪水が出たらどうすればいゝんだ。

その他いろ〳〵に云ひわめきながら群集退場。

ノア――ヤペテ、お前は私の云ふ事を聞かないのか。お前は私達の族の前でどんな忌はしい行ひをしたかを知つてゐるか。

犇とナアマの手を取りゐたるヤペテはこの父の言に始めて周圍に眼の開けたる如く、

ヤペテ――私がナアマを擇んで惡い譯が私には合點が行きませんもの。

ノア――ナアマはカインの族の娘ではないか。しかも妻を二人まで持つレメクの生ませた娘ではないか。エホバの呪ひを二重に受けて生れたものゝ顏の美しいのは、それだけ心の醜いのを裏切りしてゐるのだ。

ヤペテ――父上！　もうそんな激しい言葉をこの處女のたわやかな胸に投げつける事はやめて下さい。それは狼に小羊を襲はせるよりも酷い事だ。正しい美しさを持つた胸の中には正しい美しい心が祭られてゐるに違ひないのだ。

ノア――お前はそんなにその娘をいたはる事はいらないのだ。

ヤペテ――美しいもの、かよわいものはいたはられるやうに造られたのです。
ノア――薊の花の美しさをいたはるものは刺に襲はれる。
ヤペテ――薊はあざむきの花だ。この處女はあざむきをしない。
ノア――誰がそれを知つてゐよう。あゝエホバ！　あなたの日は來ようとしてゐます。躓かうとするものゝ膝骨を強めて下さるやう。
ヤペテ――エホバは私達の心を憐はす。
ノア――エホバは鬱はす。(突然暫く放心したる如くなりて眼を空に向けてありしが、恐るゝ如く跪き、良ありて畏みながら立ち上り)お前達は今エホバを見奉つたか。

三人の兄弟は不安らしく首を振る。

エホバが又もや私にお現はれになつた。私の心はいつくしさに慄く。(ナアマに向ひ)娘よ。お前の心は恐ろしい心だ。お前は天の使サミアサに及びもつかぬ戀をしてゐるな。見ろ、お前の顏は雪を積み乘せた雲のやうに白く變つた。お前は震へてゐる。何故私がエホバをかしこみ畏れるかを今こそ思ひ知つたらう。エホバの御前には凡ての事が餘り明らさまに現はれるのだぞ。今お前のその顏その姿の美しさが何んの誇りになる。……呪はれた女！　引きすざれ！
ヤペテ――(ナアマの容貌の急に變れるを見て興奮する)私は眼の前に何んと云ふ恐ろしい夢を見ねばならぬのだ。ナアマ！　あなたはエホバの御前にをのゝかねばならぬ女なのか。嘘だ〳〵。あなたは怖れるには及ばない。あなたの純潔はシロンの野花のやうだ。それを誰が疑ひ得よう。
セム――お前は父上とエホバとを疑つてもこの罪に孕まれた一人の處女を庇はうとする積りなのか。

ヤペテ――いや〳〵疑へるならカインとセツの族が一人殘らず疑つて見ろ。私一人は疑はない。父上、あなたはエホバの御名を假りてこの無垢清淨な處女を陷れようとなさるのです。

ノア――お前は私の末の子だ。さうしてエホバと私との心に適つた若者だ。然しお前の今の言葉はエホバを穢す由々しい言葉だ。地獄から來る毒氣のやうに顏向けも出來ぬ。お前は恐ろしい罪の淵に臨んでゐるのだぞ。

セム――私は今の言葉でヤペテの兄であるのを恥ぢる。お前の日頃の勇氣と氣高さとは何處に捨てゝしまつたのだ。

ハム――（半ば獨白）あの娘の美しさは天の使にでも罪を犯させるに違ひない。

ヤペテ――（ナアマに近寄りその肩に手をかけ）ナアマ、あなたの純潔を言ひ張つて下さい。（ナアマ、伏眼になりしま答へず）言ひ張つてくれ、さ。空の明るく晴れてゐるやうに私の心も晴らしてくれ。……答へられないのか。それでは……（唇を嚙む。更に氣を取りなほして）答へられないでどうする、さ。……答へる事が出來ないと云ふのか。

ナアマ――（毅然として）答へる事が出來ます。

ノア――答へが出來る。それでは聞かう。お前は天の使サミアサを戀してはゐないのか。

ナアマ――戀しないではゐられません。

一同驚きの色。ナアマ、苦しげに涙ぐむ。

ヤペテ――嘘だ。あなたはこんな時にそんな心にもない事を……ではあなたは……本當に……私を捨て果てようとするのだな。

ナアマ――（恨めしげに）捨て果てる事さへ出來たらと思ひます。

ヤペテ――ではあなたは私を捨てないと云ふのか。
ナアマ――おゝヤペテ！　そんな愚かしい問ひを……
ノア――それなら天の使サミアサへの誓ひをどうする。
ナアマ――エホバ！　私は自分を存じません。誰も私を知らない。私の心を知る事は出來ない。この苦しむ心を。
ヤペテ――ナアマ。私もか。
ナアマ――私を愛して下さるあなたは猶更の事……

ノア父子、茫然としてナアマを見守る。

ハム――成程二人の妻を持つレメクの娘だけあるな。
セム――奸婬を犯しながら、二つの心に事へながら、その穢らはしさを言葉にまで現はす憎い女！　ハム！　その女を石で搏て。搏つて殺してしまへ。（手頃の石を取り上げて立向ひかゝる）
ヤペテ――待て！　この女は私の劍で貫かれねばならぬ。（遠くに立ち退きてナアマを見やりながら）女！　自分を傷け、血を流し、命までも滅ぼさうとする……女！　カインの腕は一人の命を奪つたゞけだつた。お前の心はお前自身を殺し、もう一人の命をも奪はうとしてゐるのを知つてゐるか。……行け。安らかにして行け。お前の兄のトバルカインの所に歸れ。トバルカインは劍を造る名人だ。あの心の荒れた男は、縱令妹のであれ、水月から脊骨までぐさと刺し通す兩刃の劍を造るのを拒みはしまい。行つてトバルカインにお前が今吐き出した血なまぐさい言葉をもう一度繰り返すがいゝ。トバルカインの劍は、雷火が罪の家を求めるやうに、お前の胸を求めて飛びかゝるだらう。行け。
ノア――行け。

セム――エホバの呪ひの凡てを受けるがいゝ。

ナアマ、何事かをヤペテに云はんとす。

ヤペテ――（舞臺の左を指し）行け！

ナアマ、すご／＼と退場。

ノア――時は私達を待ち合はしてはゐない。洪水の時は隼のやうに近づいて來る。セム、ハム、ヤペテ、早く方舟の工事を終へてくれ。船の胴から水の漏るやうな事はないか。

セム瀝青を塗り始む。ハムも物憂げに立ち上る。ヤペテ仕事に立たんとして急に工具を地にたゝきつけ、

ヤペテ――父上、私はもういやです。

ハム――（ヤペテにならひ）私ももう倦き／＼した。

ノア――お前達は何を云つてゐるのだ。

ハム――洪水の來る事なんぞを信じてゐるのは、世界中で父上とあすこにゐる兄さんだけです。まるで夢のやうな事に四ケ月も働き續けた擧句、水でも出ない事になつたら……四人のした事はこの上なしのいゝ笑ひ草です。カインの族の奴などは、今までにも増してこの族のものを侮るでせう。天の使さへ地に降つて人間の女に戯れかゝる時節に、洪水が地の上にばかり起るとは、片手落ちなお審判と云はなければなりません。さつきカインの族の者達の云つた言葉には理窟がある。こんな天氣續きに大水の心配をするのは、取越苦勞でなければ出來ない事です。それは父上を私が生みはしないかと恐れる程の事です。それよりは方舟の中の葡萄酒を出して來て、小羊を屠るのがましではありませんか。

ノア――私はお前の爲めばかりにも、もつとエホバの前に義とせられるやうにならなければならぬ。お前は他人

の信仰のお蔭で救濟に這入る事の出來る慘めな者だ。私の老いた肩の骨は子等の重みの爲めに折れんばかりに痛む。……こゝにも私の重荷はある。ヤペテ、お前はまだあの呪はれた女を思ひ切る事が出來ないのだな。

ヤペテ――私には出來ません。思ひ切る氣もありません。

セム――愚かな奴だ。

ハム――愚かではない中々。愚かでもそれは羨ましい愚かさだ。

ノア――お前の深い迷ひは年老いた私を悲しませる。

ヤペテ――父上、それは私の悲しみのどれ程深いかを表はすものです。私の胸の中の、底深い頑丈な杯が、悲しみの酒を盛り切れなくなつた時、溢れ出た悲しみの雫が一番親しい胸の杯にそゝがれるのです。私の胸は若く、強く、堅い。悲しみですらが微笑んで跳りめぐる餘地はあると思つてゐた。然しこの悲しみばかりは餘りに深く大きい。私は父上の方舟を造る爲めに、淋しさを堅く胸に祕めて、この四ケ月、ナアマに遇ふ事もせずに過した。愛し合ふものが離れてゐるには餘りに長い四ケ月だつた。然し一旦愛したものが愛を忘れるには餘りに短い四ケ月だ。あゝ私の胸は張り裂ける。私の心と一つになつた女の心が私から叛いた。踏み躙られた誇りがエホバとサタンとの名によつてナアマを地獄にまで呪ひます。

ノア――さうだ、お前はあの女の名を呪ふべきだ。あの女はエホバにさへ叛いたのだ。

ヤペテ――然し私の心の傷口は唇を大きく開いて聲を限りに「ナアマよもう一度この胸に還れ」と叫びます。

セム――男の誇りを忘れて未練がましい事を云ふな。

ヤペテ――未練を知らない男の心は地獄にまで、地獄のいや果てにまで呪はれるがいゝ。

ノア――さう空しく心を騷がしてゐるものではない。サタンはさう云ふ心を探し歩いてゐるのだ。女の逃げ出し

た心の戸口は、悪魔の潜み込む屈竟な入口だ。まあ落着いてそこに坐るがいゝ。

セム――私は今そんなお話を聞いてはゐられません。時は私達を待つてはゐない。ハム、來て私を手傳へ。

ハム――父上のお話は私にも參考(をしへ)になりさうだ。

ノアの脚下にハムとヤペテと蹲る。ハムは暫くすると眠入つてしまふ。

ノア――私共の先祖のアダムとエバとがサタンの誘ひにかゝつて智慧の果を喰ひ、赤裸(あかはだか)を恥ぢるやうになつてエホバの憤りを蒙り、永久にエデンの園から追ひやられたのはお前達も知つてゐるだらう。その時エバの胎にはカインが孕まれてゐたのだつた。この地の上の生活はエデンとは違つて苦しい生活であつた。カインが青年になると弟のアベルと野に出て、兄は地を耕やし、弟は家畜を牧(か)つたが、カインは心のねぢけた若者で、エホバがアベルの燔祭ばかりを顧み給ふのを意趣に思ひ、いきなり立つてアベルを打ち殺したのだ。この大地が口を開いて人の血を吸つたのはその時が始めてだ。人の命が絶たれたのもその時が始めてだ。アダムとエバとは子に先立たれた。さうして人の世の一番深い悲しみを味はれたのだ。二人はそれからアベルの事のみを思ひつゞけてセツを生んだ。そのセツといふのが私達の遠つ親に當るのだ。カインは長子ではあつたが、流離人(さすらひびと)となつて父母を離れ、エデンの東にあたるあのノドに落着いて今だにその子孫はそこに住み續けてゐるのだ。私はセツから九代目のセツの族(やから)の主だ。だからセツの族はアダムの誇りで、又手を血で穢さないものゝ子孫なのだ。然しながらアダム、エバがエデンを逐はれなさつてから、人の子は地の上に敷衍(ふえ)さかえて、ひとりでに罪も作れば非望も起すやうになつた。セツの族は人が粘土から創(つく)られて又粘土に還るのを忘れずに、土にしがみついて活きるのを滿足してゐるが、カインの族は僅かばかりの智慧才覺を頼みにし、一度味はつた智慧の果をもう一度味ふ程の非望を抱いてゐる。女は女で、優しい姿形(すがたかたち)を餌(ゑさ)にして、男の心を空しい譽れに釣つて行く。その増

長の果てには天の使を迷はし、その道ならぬ交りから、人とは思へぬ程の勇士や勝れた女をも生み擴めた。エホバの憤りが日に／＼昂ずるのも無理のない事だ。

ヤペテ――父上、然しながら一度智慧の果を味はつたものにどうしてそれが忘られませう。

ノア――けれども人の幸福は、一度味はつた智慧の果を、知らぬ前のやうに忘れるそこから生れ出るのだ。

ヤペテ――何故です。

ノア――「何故」と云ふ言葉はエホバの御言葉だ。人の使ふべき言葉ではない。

ヤペテ――でも私は「何故」と云ふ言葉を知つてゐます。又「何故」と考へる事も知つてゐます。

ノア――それは少くとも私が教へた言葉ではない。お前はそれを何處で何時覺えたのだ。

ヤペテ――それはナアマを始めて見た時に覺えました。ナアマの眼がぢつと私の眼を迎へてくれた時、その眼から不思議な力が私に流れ込みました。さうして私はすぐ「何故あの處女は私の胸にこんな痛みと喜びとを與へるのだらう」と思つてゐました。

ノア――お前は脆くもサタンの羂にかゝつたのだ。サタンは同じ仕方で御先祖のアダムとエバとに呪ひの輪をかけた。お前もその呪ひを受けてしまつたのだ。お前は力を盡してそれを忘れなければならぬ。それでなければお前はナアマを忘れる事が出來ないのだ。ナアマの姿を見ろ。あれは屹度墮落した天の使が生ませた女だ。

ヤペテ――あれはカインの族の主レメクの娘です。

ノア――レメクが縱令あの美しい妻のチラと床を一つにしても、ナアマのやうな美しい娘を生ませる事は出來はしない。あの娘には人間とは思へぬ所がある。チラは屹度良人の眼を窃んだのだ。だから私はナアマは二重にも三重にも呪はれた女だとお前に云つて聞かせるのだ。お前の夢はそれでもまだ覺めないのか。

ハム――（驚いて假睡より覺め）私はこれから働く所です。（ノア、ヤペテ苦々しげにハムの立ち行く姿を見やる）

ヤペテ――（深く呻吟したる後）夢ならばいつか覺める時が來るでせう。それは覺めて欲しくない夢だ。けれども私は夢をたよりにはしない。夢ならば覺めてしまふがいゝ。夢ならば……父上。カインの族の事は云はないとして、セツの族の有樣を御覽なさい。父上が、私が、その族の一人と生まれた事を私は恥ぢずにはゐられません。地を這ふ蟲のやうに、日の光を恐れる梟のやうに、銘々の汚い幕屋に起き臥しゝて、口癖のやうに心にもなくエホバを讃美し、喰ふ爲めに喰ひ、寢る爲めに寢、生む爲めに生み、火と水とに恐ぢ怖れて、親は子に、子は孫に、その慘めな生活の重荷をそのまゝ傳へて行く。その生活に何んの尊さがありませう。私達は人間だ。野の獸物ではない。又空の鳥ではない。エホバの御業の誇りなる人間なのだ。それだのにセツの族の者達は人間の誇りを何處に置き忘れてしまつたのだらう。今日もです。私はこゝに來る道で一人の男に遇ひました。その男は私を見るとそつと裘の下から大きな砂金の袋を出して私の手に握らせようとします。さうして若し洪水が起つたら、忘れずにその男を内所で方舟に乘せてくれと頼みます。私は驚いて何故お前はそれを私に頼んでエホバに願はないのだと云ひました。その男は、罪を犯してゐるからエホバは聞き入れて下さるまいと答へるのです。何故それなら悔い改めないのだと詰りますと、悔い改めるには持物を有る限りエホバに捧げなければならないからと云ふのです。丁度その時盲者の群れがそこにさまよつて……

ノア――盲者の群れとは。

ヤペテ――それは父上がまだお存知のない憐れな者共です。その群れがさまよつて來たので砂金の袋をその人達に與へようとすると、その男は矢庭に惡魔のやうな形相になつて、袋を受取つた年老いた女をいきなり打ちのめして地に倒し、殘る者達までを散々にエホバの名によつて恥しめました。私はそれを見るとその男を唯一ふ

みに踏みにじりたいやうなもどかしさを覺えました。思ひ出しても私の腕の肉は音を打てゝ鳴らうとします。

この時ノア、セム、ハムの妻食物を持ち慌てゝ登場。物に怖ぢたる如き姿。

セムの妻――またあの穢らはしい群れに襲はれようとしました。

ハムの妻――恐ろしい惡魔達！

ヤペテ――姉さん方はその良人に食物を運ぶ事を一度もお忘れにならない。一度位はお忘れになつたらと私は思ひます。大事な事がその外にも私達には與へられてゐる。

ノア――お前の心には人間が持つてならぬ傲慢が眼覺めたやうだ。何よりもエホバの喜び給ふのは、從順にその御心に從ふばかりなのだ。

ヤペテ――それは私にも分るやうです。父上の遜つた嚴かなお心持を尊ぶ事を私は忘れやしません。父上がその爲めに人知れぬ重荷をお心に背負つてをられる事も、又その爲めに人の知らぬ聖い喜びを持つてゐられるのも、よくお察し申す事が出來ます。然し私の心は、父上を滿たしたものだけでは如何しても滿たされません。罪ふ、罪でないか、兎にも角にも私は滿たされるものを持つてゐません。私は喘ぎます。悶えます。求めます。

ノア――それはお前がカインの族の者達と交つた爲めに播かれた罪が芽ばえたのだ。

ヤペテ――カインの族も人です。人の持つものを私も持たうとするのです。カインの族の中に生れた勇士達を私は何故誇りとしてはならぬのでせう。その人々の中に生れた美しい娘達を私は何故榮えとしてはならぬのでせう。人の持つものを私も持たうとするのです。

ノア――カインの族はエホバの呪ひを受けた人々だ。彼等は取りも直さずサタンに屬けるものだ。

ヤペテ――サタン……サタンは美しいものを持つてゐる。

ノア——ヤペテ!!

この時流離して食を求め歩く盲者の群れ、ノアの妻達の後をしたひて出場。ノアそれを見て驚き立ち上る。

ノア——ヤペテ、あの群れは何んだ。日の下には住むとも思へぬ醜い影だ。

盲者の群れ默したるまゝ聲する方に物ほしげなる手を延ばす。

ヤペテ——父上の御覽になるものではありません。それは父上の悲しみに悲しみを積み乘せます。あれは父母を離れ、子を捨て、幕屋から幕屋に憐れみを求めて歩く盲者の群れです。

ノア——盲者とは。

ヤペテ——二つの眼が光を失つたのです。

ノア——光を? 眼が? 私はこの齡になるまで眼が光を失ふといふためしを見た事も聞いた事もない。死んだものゝ眼ですら、樂園か地獄かを見る力があるのに、彼等はこの地の上に呼吸しながらエホバの御業を見る事が出來ないと云ふのか。恐ろしい事だ。エホバは光をすら我等から隱さうとはなさるのだ。私は私の族のもの達に迫つて來る不幸を見てはゐられない。エホバの嚴かな命令さへなかつたら私は族の者達と一緒に洪水に私を任せたであらう。ヤペテ! 私が生き殘つてお前が死ぬのを私は忍んでゐる事が出來ない。お前の傲慢を、神の憤りがお前の上に降らない中に、悔い改めろ。

ノアの妻——ヤペテお前どんな正しくない事を父上の前に仕でかしたのだらう。私達の命が長くないのをお前は忘れるやうな子ではないではないか……。おゝ、エホバ! 凡ての事が惡くなつて參ります。

ヤペテ——(セム、ハムの妻に) 姉さん、あの憐れな盲目の群れにその食物をやつて下さい。あの人達の眼は唇の求めに應ずる事が出來ないでゐるんです。御覽なさいあの盲ひた眼を。眼が口に代つて聲を限りに叫んでゐるで

はありませんか。おゝお前達はこの先き六日生きてゐるのが幸福なのか。今呼吸が絶たれるのが幸福なのか、私には判らない。然し私の心は矢張りお前達が生きるようにと願はずにはゐられないのだ。

セム――エホバを畏れないのかヤペテ。エホバの審判はもう逼つてゐるのだ。エホバの呪ひを受けたものに施しをするのは、御心を踏みにじるのに等しい恐ろしい罪だとは知らないのか。（盲群に）お前共のさし出したその手を控へろ。エホバの深い呪ひを受けた醜い者共、一時も早くそこを立ち退けい。こゝはエホバの思召しに從つてノアが方舟を造る聖められた場所だぞ。近づいて見るがいゝ。さうしてその穢らはしい足跡をこの土の上に殘して見ろ。私はエホバの憤りをこの兩腕に現はして見せるから。

セム、ハム、盲群を追ひ立てる。盲群退場。

ハム――醜い奴等だ。醜さが私の眼を鞭つ。

セム――ヤペテ！　お前は義と不義とを見分ける正しい力を薄く授かつてゐると見えるな。サタンの誘ひにかゝらぬやう用心するがいゝ。

ヤペテ――兄さん達のなさる事考へる事がエホバの思召しに叶ふのなら、私は本當に用心しなければならない。兄さん達のやうに考へられない私は不幸だ。私は或は本當にサタンの呪ひを受けてゐるのではないのか。私はどうすればもつとエホバの御心に叶ふ僕となる事が出來るのだらう。私は自分が憎くもある。かう云ひながら私は心の中で自分のする事考へる事を善しと認めてゐるのだから。

ノア
セム――恐ろしい事だ。

ノア――お前が誘惑の手から遁れたいなら、エホバの思召を疑はずに、父の蒙つた命令をかしこんで、我等に委

ねられた仕事を成し遂げる外にはない。神は働く。悪魔は考へる。さあハム、兄にならへ。ヤペテも働け。

ハムとヤペテ工具を取り上げんとす。セムとハムとの妻達、遠き音を聞きたる如く耳をそばだつ。

セムの妻――おゝあの聲は。

ハムの妻――澄み渡つたあの音樂は。

ノアの妻――私には何も聞こえない。

ヤペテ――(同じく暫し耳を傾けて半ば獨白) 天國に何んの喜びがあるのか。絶えて響かなかつた天の使達の美しい樂の音がほのかに聞こえる。

ハムの妻――ほんにあれは天から來る。

セムの妻――あれは天の樂のやうだけれども、天から來るのではないらしい。顏をうなだれて御覽、なほよく聞こえるから。

人々暫く惚れ／＼と聞き入る。

ノアの妻――私にはもうその美しいと云ふ音は聞こえなくなつた。

セム――それはいゝ事です母上。あれは天の使の樂の音ではないのだから。あれはレメクの息子の一人なるユバルが、エホバの御業を奪はうとするおほそれた惡企みです。あの者共の心は何時まで僞りの幸福に眠りこけようとするのだ。

ヤペテ――(知らず／＼工具を取り落して樂の音に聞き惚れてありしが) 父上! 私を許して下さい。あの樂の音を聞くにつけてナアマが又もや私の胸に馳せよつて來ました。ナアマの兄のあの音樂はナアマの言葉のやうだ。今の私にはナアマが凡てだ。ナアマが私の胸に歸らぬのなら、私は雙手を擴げて洪水の口づけを待つばかりだ。私

に方舟が何んの用があらう。あゝ、あの樂の音が私を醉はす、狂はす、有頂天にする。私はもう私を知らない。

ヤペテ狂へる如く人々の遮ぎるのを押しのけて退場。

ハム――（セムに）兄さん、私はヤペテを追ひかけて連れ戻して來ます。

ノア――ハム待て。お前は自分を詐つてゐる。お前はヤペテに事よせてあの樂の音にしたひ寄らうとしてゐるのだ。お前の不義は義の假面を被つてゐるのだ。止まれといふのに。失はれた小羊は捨てゝ置くがいゝ。（長い沈默の後）失はれた小羊は捨てゝ置くがいゝのだ。……私はエホバに祈りを捧げずにはゐられなくなつた。お前達も心を盡して私の爲めに祈つてくれ。

一同跪いて祈る。ハム隙を窺ひて忍び足に遁れ出でんとす。セム祈りをやめて立ち上り、ハムの後ろより怒り叫ぶ。

セム――ハム！

ハム――兄さんは祈りは？

云ひながら立ち止りて激怒せるセムと顏見合はす。

第二幕 エノクへの途上

荒れたる草原。盲目の群れ默したるまゝ片隅に踞る。ヤペテと乙、石に腰かけて語る。

第一幕より六日目の後。洪水の前日の夕暮。

乙――それは無理もありませんよ、ナアマはカインの族の寶玉のやうなものだから。それに……

ヤペテ――私は自分の幕屋をぬけ出してから、食ふ事もせず、眠る事もしないのだ。けれどもナアマは私の前に

姿を現はしてはくれぬ。

乙――誰が大切な睿玉を見さかひなしに人に見せるものがありませう。それに……

ヤペテ――それにナアマは天の使に戀されてゐると云ふのだらう。

乙――そんな内所事は私は知りませんよ。天國の事などは御先祖のアダム、エバがエデンの園を追ひ出されてからこのかた、私達には關係のない事だ。ヤバルが眼をかけてゐるんだ、あの處女には。

ヤペテ――ヤバルはナアマの兄ではないか。

乙――母が違ひまさあ。

ヤペテ――けれどもヤバルもナアマもお前達の主レメクを父としてゐるのではないか。

乙――表向きはさうです。

群盲の中より皮肉な卑しき笑ひ聲。

ヤペテ――表向き？　私には分らない言葉だ。

乙――私にも分らない言葉ですよ。……だがナアマは全く人間離れのした美しさ氣高さを持つた處女ですよ。その同じ腹の兄のトバルカインとは似もつかぬ姿です。姿ばかりぢやない心まで、片方が水なら片方は火だ。片方が薔薇の花なら片方はその刺だ。片方は天から生れたと云つていゝし、片方は地から湧き出したやうなものだ。ふむ、あなたの族の方にもこんな不思議が現はれますか。

ヤペテ――私と兄達とは矢張り違つてゐる。

乙――然しあなた方は何んと云つても人間から生れたには相違ないでせう。あなたのお母さんは操の正しい方だから。人並みな生れだと操は守り通し易いものだ。

群盲の中より笑ひ聲。

ヤペテ――(思ひ當る所あるものゝ如く)それではナアマの父はレメクではなくて、天の使だとでもお前は云はうとするのか。

乙――そんな内所事は私は知らない。けれどもさうだとすると、ヤバルとナアマとは兄妹であつて、兄妹でなくなる譯だ。

ヤペテ――ヤバルは本當にナアマに思ひをかけてゐるのだな。そんな事が……

乙――この頃のやうに天と地とが近くなると物事がこんがらかつて譯が分らなくなりますよ。やれ、今日もいゝ日の暮れになつた。明日がいよ〳〵洪水の日ですね。空を見ると雲一つないが、一體大水は天から降るといふのですか、地から湧くと云ふのですか。

ヤペテ――お前はさう輕々しく物を云ふものではない。

乙――輕々しく云つても重々しく云つても、來るものは來るし、來ないものは來ないだけだ。なあに。……それにしてもあなたはこんな所にうろ〳〵してゐて方舟に乘りそこねはしませんか。

ヤペテ――私にはもう方舟はない。……おゝ父上！……私は自分の命を蔑みしてまで人の知らないものに憧れる。

乙――人の知らない？　(笑ふ)それは云ひ過ぎでせう。ナアマは私の見てゐる前で瞬きもすれば欠伸もする、そんな所は人間並みな娘ですよ。

ヤペテ――お前には私の心持は分らない。ナアマの胸の扉を開く事さへ出來たら、私はそこから天に經登る力をさぐり出す事が出來るのだ。

群盲の中より笑ひ聲。

乙――しいツ……あすこにヤバルとトバルカインとが來た。羊牧ひの杖を高々とついて、野羊の群れを生擒りにした狼のやうに、あすこにやつて來るでせう、それあの荒野の果てを。あなたがこゝにゐるのはよくない。早く幕屋の方に忍んで行つて御覽なさい。今夜はユバルが音樂の集りをすると云つてゐたから、そこでナアマに邂逅ふ事が出來ないとは限らない。……然し一番安全なのは……早くおはづしなさい……安全なのはおとなしく今夜の中に方舟に歸る事ですぜ。

乙のこの言葉の間にヤペテはヤバルに物を云ひかくべきか否かを惑ひたる後、決心するものゝ如く急ぎ舞臺を去る。やや暫くしてヤバル及びトバルカイン登場。

ヤバル――（盲群に眼をつけ）サタンに行け！　サタンが過ぎたものならセツの族に行け！　セツの族こそは鳥獸物にも劣つたお前共のいゝ話相手になるだらう。地にしがみ付いて、エホバに諛ふ外には能のないセツの族に行け。醜い煙のやうな奴等だ。（牧杖を上げて打ち拂はんとし）杖が汚れる。（乙に）お前行つてあのもの共を追ひ拂へ。二度とはエノクに足を踏み入らせるな。行け！

乙――行きますが……。

トバルカイン――（劍を振り上げ）早く行け！

乙――行きます。今行きます。が、エノクにはあの盲目の群れよりもつと汚れたものが這入りこみました。

ヤバル――何んだと。

乙――ヤバル！　ノアの末の息子のヤペテが……

トバルカイン――ヤペテが？

乙――セツの末裔でありながら、あなたのお妹御におほそれた横戀慕をしてゐるヤペテが這入りこんで……

ヤバル――トバルカインの妹……ナアマに戀をしてゐると云ふのか。

乙――それは紛れもありません。ヤペテは方舟を捨てゝしまつて、ナアマを慕つて先程こゝにやつて來ました。私はこの眼で確かにそれを見ました。さうしてあいつの心を上手に唇の所まで釣り出しました。あれはセツの末裔に似合はない眉目形の勝れた若者だから……ヤバル、あなたの道には蹉きの石がころがり出たやうなものです……

ヤバル――(乙の言葉を矢庭に遮つて)行け！　早く盲目の群れを逐ひ立てろ。お前の舌の力を手足に籠めるがいゝ。もういゝ、つべこべ云ふな、私はもうあの汚い煙のやうな群れを瞬く暇も身近に置く事を許してはゐられない。

乙命ぜられるまゝにあり合ふ木の枝を取って盲群を驅り立つ。盲群泣き聲を立てながら混亂して乙と共に退場。

トバルカイン――蹉きの石がころがり出た……あの男は奇怪な事を云ふ奴だ。

ヤバル――トバルカイン！　蹉きの石はそこら中にころがつてゐるではないか。私達の周りは大波に洗はれる荒磯のやうに嶮しくなつてゐる。そこにもこゝにも劍のやうな巖が頭を擡げてゐるのだ。心の歩みを一つ踏みたがへれば、この命は瞬きする暇もなくゲヘナの谷間を走り去つてしまふだらう。近く來い。私は父上を本當に憐れに思ふのだ。私が若し父上であつたら、遠の昔に狂ひ死をしてゐたかも知れない。お互の母上等は、二人とも、父上によつてお前と私とを生んでから、恩知らずにも墮落した天の使の心に從つてしまつたのだ。それはお前も知つてゐる。私の弟のユバルは、私に取つては父の違つた兄弟には當るけれども、お前に取つては赤の他人だ。又お前の妹のナアマは同じやうに私に取つては赤の他人だ。而かも私の母のアダもお前の母のチラも、申し合せたやうに天の使によつて生み落した者共ばかりを愛してゐる。婬らな女の常として密夫の情に溺れるのは知れた事だ。あの女等は父上を涙の淵に誘ひ落した憎むべき婬婦だ。

トバルカイン――天ではこの地上の榮えを妬んでゐると見えるな。信心深いノアとその息子等は洪水の豫言で脅すし……

ヤバル――人間の力で地上にこれ程まで榮光を築き上げたカインの族の中には、間諜のやうな征服者を竊かに天から送つてよこす。人間の中の美しいものは殘らず天に奪ひ去られようとするのだ。……呪はるべきものは人間か天國か。……呪はるべきものは……お前の劍は出來上つたか。

トバルカイン――（怒りに身を震はせつゝ）これを見てくれ。（劍を差し出す）この劍が生れ出る爲めには、私の命は半分減らされねばならなかつた。この劍は肉さへ見れば嚙みつかうとする。これを持つものは持つもの自身が氣をつけてゐないとあぶない位だ。畜生！　あはよくば私は天の使をも殺してくれる。死ぬ事を知らない天國の者共に、死ぬといふのは、どれ程悲しいか苦しいかを思ひ知らしてくれる。サタンの服にかけて私は誓ふ。呪はれた者共の喉や乳房にこの劍が喰ひ入らなかつたら、私はカインの呪ひを倍にして受けて見せよう。

ヤバル――大言は仕事が濟んでから云ふがいゝ。

トバルカイン――（ヤバルの手を執りてもどかしげに打ち振りながら）私の云ふ言葉を疑ふなら、今この場でお前の胸を刺し貫いて見せようか。

ヤバル――それもいゝだらう。然しお前の母のチラの胸の血をこの劍が吸ひ取つても……お前は悔いないと云ふのだな。

トバルカイン――母のチラ？

ヤバル――私の母をお前に與へてゐるではないか。

トバルカイン――私は私を孕んだ胎に刄を貫くのを許す事が出來ない。

ヤバル――成程お前は大言をいふだけある。……聞け！　お前はまだ女と云ふものゝ男に及ぼす力を知らない。御先祖のアダムがエデンの園を逐ひ立てられたのは誰の爲だ。エバの爲めではないか。女は弱い。弱いから强い。父上の眼はやがて父上に裏切つた女達の爲めにくらまされるだらう。お前には見えないか、ユバルとナアマは今ですら父上と母達の寵愛を私達から奪つてしまつてゐるではないか。私達二人がカインの族を嗣ぐ事も出來ずに流離の民となつて、蛇に踵を喰ひ破られながら逃げ廻らなければならない時が來ないと誰が請合ふ事が出來る。お前の劍は一人や二人の血で飽き足るとでも云ふのか。

トバルカイン――千人の血にも萬人の血にも飽き足らうとはしないのだ。

ヤバル――お前の母の血は萬人の血にも勝つて濃いのか。チラはお前を捨ておいてナアマに溺れ切つてゐるではないか。

トバルカイン――ナアマの乳房にこそはこの劍が慕ひよるだらう。

ヤバル――ナアマは風のやうに脆い。ナアマはたやすく死ぬだらう。けれどもチラの胎はサタンのやうに强い。そこから第二のナアマは生れ出るだらう。……母を殺せ、トバルカイン誓へ！……誓へ！

トバルカイン――(苦しげに呻吟したる後)私は誓はない。けれども劍が……この劍の血の叫びが、私よりも聲高く誓ひを立てる。サタンの名によりて吸へ、有る限りの血を。

ヤバル――お前の劍が血に飽き足るまで父上の前には出ぬがいゝぞ。父上の喜びが一度にお前を祝福するまで、お前は蔭に潛んで蝙蝠のやうに振舞ふがいゝ。今夜はまたユバルが琴と笛とを取つて音樂の集りをするだらう。ユバルはあの優美な姿と、女のやうなやさしげな天性とで人々の心をとろかさうとしてゐる。そこにはお前の劍の慕ひよるべき者共も集まるにちがひない。……もう月が出る時刻になつた。父上が野羊を見廻りに來

られるだらう。どこまで平らに見渡されるこの野路にお前の姿を高々と現はさぬがいゝぞ。

トバルカイン――私は夜の來るのなぞを待つてゐない。

トバルカイン退場。ヤバル牧杖にて己れの脚を二度三度續けさまに打つ。

ヤバル――（獨白）凡てが僞りだ。エホバさへが僞る。月が出た。何處に洪水の徴があるかい。（又牧杖にて自分の腕を打つ）痛い！　私は私を僞りはしないぞ。……ヤペテ……ヤペテ……ふむ。

レメクと乙と連れ立つて登場。

乙――私が何んで自分の族の主なるあなたに僞りを云ひませう。たしかにこゝで……こゝで（そこに踞るヤバルを發見し）おゝ、こゝにヤバルがお出でゞした。

レメク――こゝで遇つたと云ふのか。

乙――たしかにこゝで、狂氣のやうに氣の荒れだつた憔れたヤペテを見かけましたのです。その事はヤバルにも……

レメク――ヤバル！　お前もこれから聞いたか。

ヤバル――聞きました。

レメク――おほそれた若者だ。セツの末裔でありながら、カインの族の幕屋に紛れ込むとは前代未聞の事だ。

乙――この頃は色々なものが紛れ込みますよ。

ヤバル――それはお前の云ふ通りだ。ヤペテはナアマに思ひをかけて、大膽にも一人自分の幕屋を拔け出て來たのです。

レメク――ヤペテからして洪水が明日來るなどゝは信じてゐないのだ。僞善者奴！　（乙に）お前はこれから幕屋

に走つて行つて有る限りのものに私の命令を傳へろ、ヤペテを見出したものは、見付け次第にその首と胴とを引き離せと。

乙――はい〳〵。ヤバル、あなたの躓(つまづ)きの石が……

ヤバル――しつ！　お前は人の間に爭ひを起して面白がらうとするな。早く行け！

乙、皮肉な眼付をして退場。

ヤバル――父上、エホバさへが僞りを云ひます。世界を滅ぼすと云ふ洪水が、あの月の輝く間にどうして起り得ませう。

レメク――だから私はエホバを呪ふのだ。若しエホバが洪水を下すと云ふなら、私は祈りの力でサタンを呼び起し、地獄の火でその水を燒き乾かして見せる。

ヤバル――おゝ父上！　サタンには叛かれ、殘る天の使には欺かれる程に、耄碌したエホバに何んのはか〳〵しい業(わざ)が出來るものですか。呪ふべきものはもつと手近にあるのだ。父上はそれを御存知ない。

レメク――お前は隱し言葉のやうな事を云ふではないか。

ヤバル――餘りあらはな罪を私の口は噂(うはさ)さへし得ません。

レメク――誰の罪だ。

ヤバル――トバルカインです。（云ひ終つて悔いたる如き顏付）

レメク――何、トバルカイン？　トバルカインはお前の兄弟ではないか。

ヤバル――さうして父上の寵愛の息子です。こんな事を口走つた私は愚かでした。

レメク――本當にお前は愚かだ。然しお前は馬鹿正直だ。まあ思つてる事を云つて見ろ。

ヤバル躊躇する如く裝ふ。レメク忽ち氣分を損じ怒氣を含む。

ヤバル――野羊はまだ放してありますが、今直ぐ檻に追ひこみます。

レメク――云へと云つたら云へ。

ヤバル――(決心せるもの丶如く)私は父上の命のよい護り手でなければならない。その爲めには……では云ひます。父上はトバルカインがあのやうに劍や槍を造るのを何んの爲めだと思つてお出でゞす。

レメク――あれは狂暴なあの男の物好きだ。

ヤバル――(羊の檻を按排しながら)さうでせうあれは隨分凝つた物好きをやつてゐる。毎晩々々、人々が寢鎭まつて、肉を漁る夜の獸がその洞穴を這ひ出る時刻に……こんな孔を開けておくと狼が機會を造る……這ひ出る時刻に、彼奴の幕屋に耳があつたら、その耳は恐ろしさにつぶれてしまふだらう。(羊の群れの方に向いて角笛を吹く)月の光で羊共はまだ檻の方に歸つて來ようとはしない。燒けたゞれた鋼鐵の上(このあたりから緊張した姿になりてレメクの側にすり寄りつ丶語る)に一つの金槌が打ちおろされる度毎、彼奴の口から吐き出される呪文を聞いた人は私の外にゐないのだ。一つ(牧杖にて鐵砧を打つ眞似し)レメクの世嗣ぎなるヤバル呪はれよ。二つ(又眞似す)ヤバルの弟ユバル呪はれよ。三つ(同上)男、女を生み出すべき二つの胎二重に呪はれよ。レメク、凡ての呪ひの數に七十七倍して呪はれよ。蛇の舌と、梟の眼と、冬の靈と、サタンの氣息と、凡ての呪はれたるもの丶呪ひ彼等の上にあれ。さう云つてゐるのを私の外には誰も知らないのです。カインの族の主とならう爲めには、彼奴には父も母も兄弟もないのだ。

レメク――(ヤバルの喉をしめるやうにし)その荒れ狂つた言葉を何處からさぐり出した。サタンに乘り移られたか愚か者！　來い、お前の胸から惡魔の靈をしぼり出してやるから。

ヤバル――(手もなく父の手を拂ひのけ)戯れはよして下さいこの大事な時に。私は正直な素直な牧羊者として今日まで生ひ立ちはしませんでしたか。セツの族のものでもしさうな男らしくないこの仕事の爲めに私は一度でもつぶやきましたか。憐れな父上、あなたの智慧は年と共に銹びました。

レメク――お前はお前の言葉に何を賭ける。

ヤバル――トバルカインが今夜の中にあなたの心を驚かさなかつたら、私はゲヘナの谷にひた走ります。

レメク――お前の言葉が正しかつたら、カインの族は孤孩まで滅びるとも、トバルカインに族を統べる力は讓らない。トバルカインの劍はやがて彼奴自身の喉笛を嚙み破るであらう。

ヤバル――トバルカインは戀を知つた七人の若い女を屠り殺して、その血を盛つた瓶の中でその劍を洗つた。さうして七人の血の恨み、レメクの肉を喰らへと云ひました。

レメク――ヤバル!　私の祝福をお前に與へる。私の血は血に渴く。お前の言葉をエホバの耳にも漏らすなよ。さうして……

この時、トバルカイン突然血に塗れたる劍を提げて登場。

トバルカイン――ヤバル!　ヤバル!　おゝヤバル!　そこにゐたか。(レメクのヤバルと共にあるのを見、恐怖の極)何んだあれは。あの恐ろしい幻影は何んだ。あれは私の眼が見るのか、そこにゐるのか。おゝ父上――父上だ。トバルカインは殺した、人を!　人を!　父上に叛いた女を。おゝこのトバルカインは先祖のカインの心を知つた。私の心は落ちて行く、落ちて行く……何處までも。おゝ父上!　祝福を……あなたの祝福を……それなしには私の氣息は絕える。父上!　あなたに叛いて天の使に身を賣つたあなたの妻は二人とも罰せられたのだ。罰せられたのです。祝福して下さい。

レメク——おゝアダとチラ！　私の言葉を聞け。レメクの妻達！　私の言葉を容れてくれ。……トバルカイン、お前はお前を孕んだその女を……

トバルカイン——父上の爲めに。父上、父上の爲めに。

レメク——（劍を指し）それは何んだ。（血みどろなる手を指し）それは何んだ。

トバルカイン——（異常の恐怖）見てはいけない。見てはいけない。父上！　あなたの後ろに在るその二つの眼は、その恐ろしい眼はエホバの眼ではないのか。おゝヤバル——　お前は何故さう恐ろしい眼を私に向けるのだ。

（ヤバル眼を伏せる）

レメク——その劍を私に渡せ！　えゝトバルカイン！　お前のした事をお前は知つてゐるのか。その劍を渡せ。

（トバルカイン劍を渡さんとして父の顏を見、その顏に殺意を感じて驚き劍を隱す）劍をよこせ！　その劍で私はお前を祝福しようといふのだ。

ヤバル——その劍を父上に渡せ。

トバルカイン——父上！　私は誓ふべきものをもう持つてはゐない。けれども私はあなたを愛してゐます。私の命の宮なるこの胸にかけて誓はう、さうだ、この胸にかけて誓はう。あなたの爲めに私はあなたに背いて天の使に從つた女達を……私の母までをあなたの爲めに殺したのだ。この脚は誓ひを立てる前に裂けようとしてゐる。憐れんで下さい。私を祝福して下さい、そのふるへをのゝくあなたの手で。私は父上の爲めに、先祖の呪ひの上に、二重にエホバの呪ひを受けてしまつたのだ。恐ろしい眼を私に向けないでくれ。何んと云ふ明るい晩だ。木が見る。草が睨める。大地が私の足をよろめかす。

ヤバル——その劍を父上に渡せ。

トバルカイン――（狂怒してヤバルに向ひ劍を振り上ぐ）ヤバル！　何故（なぜ）お前は母のアダのために泣かないのだ。穀物を殺す霜のやうなその冷やかな顏は……何故泣かないんだ。おゝ私だけが何故呪はれなければならないんだ。何故歎かねばならないんだ。サタン！　先祖のカインは弟を殺した。トバルカインは兄を殺さぬとは限らないぞ。私の心の泣き聲に答へて泣く心は何處にもないのか。

レメク――トバルカイン！　私の心は泣くぞ。いゝからその劍を捨てゝ私の胸に來い。

トバルカイン思はず劍を捨て、レメクの所に走りよる。

トバルカイン――（父の手を自分の肩に感じながら）空の鳥、野の獸、私は殺すことをした。然し人！　父上私は恐ろしい。私は始めに自分の母のチラを殺した。チラは私を見ると兩手で抱かうとした。然し私の眼を見ると飛び退いた。劍が、あの劍がふくよかさをまだ失はないあの胸に近づいた時、チラは張り裂けるやうに父上の名を呼んだ。その聲は今でも聞こえる。劍が、獸ではさうは行かない、熟（う）れ切つた林檎にさゝるやうにさゝつた。傷口が父レメクと叫んだ。さうして血が苦しげに呼吸（いき）をついた。その血が一滴々々チラの命を奪ひ取つて行つた。おゝその悶え。その苦しみ。父上もヤバルも殺されて死ぬものゝ死の谷にまろび込んで行くその酷さすさまじさを知らないんだな。あゝ私はそれを知つてしまつた。父上！　私は死ぬのは恐ろしい。殺したものだけがその恐ろしさを知つてゐます。

レメク――チラは私の名を呼んだのだ！

トバルカイン――呼んだ、私がチラの罪を疑ふほどの悲しい聲で呼びました。

ヤバル――さうして私の母はどうした。

トバルカイン――お前はどうしてさう落着いてゐる事が出來るのだ。私は後悔してゐた。けれどもあの劍が……

レメク――（劍を拾ひ上げ）この劍が……

トバルカイン――その劍が私をぐん／＼アダのゐる所に引張つて行つた。私は然しもう私の眼をアダに見せようとはしなかつた。アダは（ヤバルに向ひ）、お前の弟のユバルを探して森の果てに出て、夕日に向つて一人で立つてゐた。私は豹のやうに滑らかに靜かにその後ろに步み寄つた。この胸の鳴る音がアダに聞こえなかつたのはサタンがアダの耳を押へてゐたに違ひない。私は後ろから唯一打ちに……打つた。又打つた。又打つた。おゝ打つて打つて打ち續けた。

レメク――（悲憤を强ひて支へながら）アダの傷口は叫ばなかつたか……

トバルカイン――「あつ」と叫びました。さうしてアダを逼れ出た命が遠くの方でレメクと叫んだ。その聲……その聲はもう死なゝい。今でも聞こえる……しーツ！　今でも聞こえる。

レメク――アダも私の名を呼んだのだ！

トバルカイン――靜かに。それは聞こえる、今でも。そら……

レメク――聞こえる。

トバルカイン――カインの末裔は又呪はれた。けれども私は死ぬ事の恐ろしさを知つた。私はこの大地にかじり付いても死にたくない。

レメク――サタンに行け！

突然地に屈まつたトバルカインを斬る。トバルカイン大なる叫びを立てゝ倒る。レメク狂者の如くその上に掩ひかゝる。

レメク――おゝアダとチラ！　私の言葉を聞け。レメクの妻達！　私の言葉を容れてくれ！　私は心の創傷に堪へかねて少年を殺した！　カインの爲めに七倍の罰があるのなら、私の爲めに七十七倍の罰があれ！　おゝト

バルカインお前はもう死んでしまつたのか……。笑へ。笑へ〳〵。ヤバル！　笑へ。お前がさう默ると三人の血を啜つて喜ぶサタンの笑聲が……その笑聲が地獄の底から聞こえて來る。笑へ。私達の笑聲でサタンの笑ひ聲を踏み躙れ。（狂氣の如く笑ふ）

ヤバル――（共に笑ひながら）サタンが笑ふ！　サタンはまだ血に飢ゑてゐるんだな。

笑ひながら徐ろにレメクの捨てたる劍を拾ひ上げ、後ろよりレメクを斬るべき用意をなす。

――幕――

第三幕　エノクの幕屋に近き所

第二幕と同日の夜。

美しき半熱帶植物の林苑、樹間に遠くアララット山見やらる。隈なき月光。

ユバル、樂人等と樂を奏し居る。處女二人ほど樂につれて靜かに舞ふ。

ユバル――（ナアマの默したるまゝ悒鬱に坐せるを見て笑ふ）ナアマ！　あなたはどうしてこの頃そんなに物思はしい顏付をしてゐるのだ。この月の光を御覽。あれは私達に歌ふ事と微笑む事を敎へないだらうか。永久に春のやうなエノクの地にも、際立つて春めかしい香ひが漂ひ始めた。あなたはそれを感じないのか。

ナアマ――痛みなやむ心は春にも春を知る事が出來ません。ましてまだ世は冬です。……けれどもこの暖い土地は冬を知らないやうな顏をしてゐる。さうして樹の梢はもう若芽で重くなりかけてゐる。それだのに明日はセツの族の主ノアにエホバの約束なさつたその恐ろしい日に當ります。あなた方がかう樂しく歌つていらつしや

る間に、エホバのお怒りが地の果てにまで臨まうとしてゐるのですね。

乙――ノアの洪水の豫言は明日には違ひありませんがあの月の澄んだ光を御覽なさい。昨夕の日にも負けない明るさだ。

ユバル――私にはエホバの御心は知る由もない。けれども人は樂しめる間に樂しむ外はない。苦しむべき時に、人は樂しんではゐられないのだから。

乙――思惑違ひのあの大きな醜い方舟の上にも今夜の月の光がぽかんと射してゐるのだらう。今頃はセムもハムもおやぢの言葉を信じてあくせく働いたのを後悔してゐるだらう。（笑ふ）こんなをかしい事は一寸ないな。

ユバル――（ナアマに）あなたがそんなに打ち沈むと、月の光さへが物思はしげに見える。歌を聞かせておくれナアマ。天の使の奏でる音樂の調べがエデンの園から聞こえて來なくなつてから、さうでなくてさへ呪はれた淋しい人の世は、殊更に物すさまじくなつてしまつた。人の心は潤ひを失つて、水に渇く土のやうに傷だらけになつて行く。エホバの憤りがなかつた前には、今夜のやうな空の美しい晩には、空の星々が靜かに舞ひながら樂しく歌聲を合はせたものだつたが……せめてはと思ふ天の使の羽根の音さへ私の耳にはもう屆いては來ない。大空は口をつぐんでしまつた。こんな淋しい人の世を生きる爲めには、エデンの面影を自分の力でこの世の中に築く外はない。

ナアマ――私が幼い時聞き慣れた天の使の樂の聲は本當に魂を醉ひたゞらかすやうだつたが……今はもうこの世が老いほうけてしまつた。

ユバル――然し私達はまだ若いではないか。若い命を盛り入れた私の心は、一刻も歌はないではゐられない。歌つたらいゝぢやないかナアマ。天國を逐はれたものは、この荒くれた土の上に、天國の面影を造り出して慰む

のがせめてもの心やりだ。ノアの豫言が本當なら明日はもうない命だ。死ぬまで若い心を失ふまい。樂の聲に樂しく醉ひながらゲヘナの谷を笑つて過ぎよう。ナアマ、女の誇りなる私の妹……

ナアマ――（恐ろしげに耳を塞いで）女の誇り！　私はもう女達の誇りであるとは云はれなくなりました。

ユバル――あなたは本當にどうかしてゐる。琴と笛の音に命の燈をかき立てる私達は樂の音の力を尊ばう。あなたの歌は失はれた天國をあなたに思ひ出させるだらう。あなた自身の聲によつて心の重荷から救はれるに違ひない。さあ歌ふといゝ。

群衆――歌つて聞かせて下さい。

天にも響く淸いいつもの聲を擧げて。

女の誇りなるナアマ。

男の心の宮なるナアマ。

その外種々の聲ありてナアマに歌を促す。ナアマ、心に恐るゝものある如く耳を掩ひて人々の視線を避く。

ナアマ――私には歌へない。踊れない。許して下さい。何か恐ろしい事が近づいてゐる。私はそれをしつかりと感じます。恐ろしい事が……

乙――ノアのやうな物の云ひまはしが流行るやうになつて來た。それはいゝ事ぢやない。さあこゝに出て……（强ひてナアマを群集の中央に引き出す。樂の音又起る。）

ナアマ――（已むを得ず歌ふ）

「うつし世の　あらしに

絲を絕え　わが琴

かなでなす　調べの
あやもなく　みだるゝ。
絲はたえぬ。　わが調べ　みだれぬ。
絲は　たえぬ。たえし　この　一すぢ」

群集更に歌はん事を求む。ナアマ已むなく繰り返し半ば程に達せる時、一人の男けたゝましく登場。

一人の男――地獄が貪慾な口を大きく開いた。先祖のカインが又もや姿を顯はした。おゝ私の股は股とぶつかり合ふ。

ユバル――（琴を捨てゝ）お前は惡鬼にでも魅かれたのか。何事が起つたと云ふのだ。

一人の男――おゝあなたはユバルだな。私の眼は少しうろたへてゐるが、あなたはユバルですね。あなたの母上のアダが死んだ。殺された。あすこに……あすこの森の片隅で……打伏になつて……左の手をかうして、……さうしてあたりの土が存分にその血に飽き足つてゐる……おゝサタン、私はあんなものを見る爲めに母の胎を出て來はしなかつたのだ。

ユバル――（長き沈默の後）本當にこの世の破滅は近づいたやうだ。一人の天の使が墮落するよりも母上の死は傷ましい。母上はそれ程人間の中のよい人間であつたが。ナアマ！　おゝやさしい心のナアマ！　あなたの眼は私の眼より先きに私の爲めに泣いてくれてゐる。兄上のヤバルは何處にゐる。お前は母上の側にその姿を見出さなかつたか。（男かぶりを振る）私はそこに行かう。

やにはに走り出でんとす。その時舞臺に駈けこみ來れる一人の女とぶつかり女倒る。

一人の女――（僅かに起き直りてユバルに）惡魔の子！　私をまで傷けようとするのかい。ナアマ！　ナアマ！　ト

バルカイン！　皆んな聞いて下さい。私の眼は何を見たと思ふ。私が今、夕餉の器を洗ひにトバルカインの廣い幕屋に這入ると、誰もゐなかつた。月の射し入る所だけが明るく、その外は陰府のやうに暗い片隅に一人の女が臥てゐました。それがチラでいらしつた。私がその眠りを覺さうとすると、手に……この手に駱駝のくるぶしの脂のやうに粘つたものがついた。その方の皮膚は芭蕉の葉のやうに冷たかつた。かうして……私は手をかうしたまゝ月の光の射す所まで戻つて來ました。月の光で、これは熟した葡萄の色をしてゐるけれども……皆んな眼を集めて見て下さい……血だ……血です。私の魂は人の血で汚れてしまつた。私……物を云ふ事が出來ない。

ナアマ一聲の叫びと共に昏倒せんとす。ユバル逸早くナアマを胸に支へ抱く。

ユバル――ナアマ！　こゝに私の胸がある。私の若々しい心さへこの災に勝てさうには思へない。けれどもお互に忍べるだけ忍ばなければならない。私達に取つて、天國は祈りが屆かぬ程遠く、地獄は手先きが觸る程近くなつてしまつた。けれども……けれども、私達は天國に捨てられても地獄を拾つてはならない。私達二人の心はそんな卑しい、さもしい望みを哺ます事は出來ない。あなたの美しい胸もそれを拒むだらう。

ナアマ――エホバは人間を見捨てゝおしまひになりました。……私は鳥獸を羨みます。凡ての望みは虹のやうだ。晴れ渡つた空の端に現はれて、それが消えると淋しい雨になつてしまひます。

乙――私はこの災ひの大根が何處にあるかを知つてゐる。ユバル、あなたはノアの末子のヤペテがエノクに潛み込んだのを御存じではありますまい。あいつは今、この森の小蔭に隱れてゐないとも限らないのだ。

ユバル――ヤペテはセツの族の寶だ。あれはエホバに呪ひを受けてもサタンに加擔するやうな若者ではない。

乙――然し戀は若者に種々な智慧を授けます！　或る時にはサタンの持つ智慧までも。

ナアマ――（乙に）空しい言葉を愼しむがいゝ。……せめてはヤペテがこゝにゐて下さつたら……

ユバル――私は行つて來る。けれども、あなたの清い眼は呪はれたものを見てはならない。（ふと森蔭にヤペテの潜めるに眼をつけ）ナアマ！　エホバの慰めは永久にあなたの氣高い心の上にある。私が行つた後の淋しさは……あなたは來てはならない……こゝに殘るがいゝ。私が行つた後の淋しさはエホバのつかはし人によつて慰められるだらう。それを疑つてはならない。（群集に向ひ）人々お前達は幾手にも組に分れてくれ。一組は私とアダに行け。一組はチラに行け。他の組のものは父上を探し出せ。又他の組のものは兄上のヤバルとトバルカインとを探し出せ。ヤバルは羊の檻の近くで野羊等に夜の食物を與へてゐられるだらう。チラの亡骸は幕屋の中にある一番練りのよい麻布で包んであげろ。

群集――私はアダに行く。

私はチラに行く。

私はレメクを尋ねる。

乙――私はヤペテを探し出してやる。さうして人の血を流したその手の指の一つ〳〵を裂き割つてやる。呪はれた奴め！

群衆――さうだ私も行く。

私も行く。

私も行く。

ユバル――靜かに！　悲しみの前にお前達は愼しみ深く口をつぐむ事を忘れたのか。行け！　夜の影の中を忍びやかに行け。

群集悉く退場。ユバル、ナアマ手を握り暫く悲歎に暮れて佇立。

ユバル――ナアマ！　ヤペテではない。それはヤペテではない。エノクの中にこそ恐ろしいものが隱れてゐる。それは先祖のカインの血だ。この族（やから）はいゝ者も惡いものもエホバに呪はれてゐるのだ。然しヤバルは……私は何も云ふまい。ヤバルは何と云つても私の兄だ。さうして私は音樂に秀でようとする外には何の望みも持つてゐない。私は呪ひに滿ちたエノクにゐても安全だらう。若しあなたの前にあなたを慰めるものが現はれたら、私のこの上衣を着せるがいゝ。この上衣はサタンの黑い眼を防ぐ護符（まもり）となるのだから。

ユバル上衣を脫ぎナアマに渡し、忍びやかにヤペテを見やりて退場。

ナアマ――（ユバルの去るを見送りつゝその上衣に接吻し）ユバルがカインの族に生れたのは、狼から羊が生れたやうです。けれどもユバルも私も本當は半分天國の子供なのだ。けれども私もユバルも墮落した天の使の血を稟（う）けて生れたからには、エホバの呪ひを殊更に深く受けたも同然なのだらう。私はこゝにかうしてゐる事すら恐ろしい。

ヤペテ靜かに森の中より姿を現はし、小聲にてナアマの名を呼ぶ。

ナアマ――（驚きて月光にてすかし見ながら）あなたは……おゝヤペテ！　戀しいヤペテ！　悲しみの淵の底に沈んだこの處女を憐れんで下さいまし。私の胸は張り裂けようとします。（走り近づかんとして思はず躊躇し）私は呪はれた女です。あなたの父上のノアが凡てをあなたの前に明らかになさいました。何故にこんな危い所に忍んでお出でなさつたのです。早くあなた御自身を方舟（はこぶね）に救つて下さいまし。

ヤペテ――私はあなたと一緒に水に溺れて死ぬために來ました。誰があなたを愛してゐようと、……縱令（たとひ）それが天の使であらうと……私はそれ以上にあなたを愛してゐるのだ。あなたなしにこの世に生きて何の望みがありませう。

ナアマ――空しい夢を捨てゝ下さいまし。人の命を美しくする爲めにはあなたは永く〳〵生きて下さらなければならない方です。私は罪によつて罪に孕まれた女です。どれ程の愛もヱホバの呪ひから私を洗ひ淨めて下さる事は出來ません。おゝヱホバ！　あなたは何故私に愛する事を敎へては下さつたのです。いゝえ、私は立派に諦める事を私の胸に敎へます。エノクには今惡魔が放されて、あなたのお命は殊更におびやかされて居ります。これを着て早く、早くあのアララット山の麓に歸つて下さいまし。

ヤペテ――さうだ、私は水に溺れて死ぬ事をしまい。さうしてあなたも水に溺らせはしない。私と一緖にいらつしやい。私は父に私の命を賭けて歎きます。私はどうしてもあなたを妻として方舟に這入る。

ナアマ――カインの族を乘せた方舟は沈むでせう。

ヤペテ――その時には私とあなたと一緖に死ぬだけの事だ。あなたと一緖に死ぬのは生きる事です。

ナアマ――私はあなたばかりを愛してはゐません。

ヤペテ――ナアマ！　あなたは私の愛の深さを感じてはくれないのか。

ナアマ――早くこゝを去つて下さい。私の力に及ばない力が、あなたのお心を躙るやうな恐ろしいものをあなたに見せる時が近づいて來ました。何も云はずにこれを着て早く。

ヤペテ――あなたの云ふ事は判らない。

ナアマ――私には悲しみが喜びになりました。喜びが悲しみになりました。母上の死に遇つた悲しみ。あなたにお遇ひした喜び。それだけでも私の心は狼の爪でかきむしられるやうに痛むのに、それが見る〳〵跡方もなく崩れて行かうとしてゐます。母上の死を悲しむ私は、明日はもう洪水に飮まれて死ぬのでせう。あなたにお遇ひした喜びは唯一と目あなたを見上げたその時だけ。私は……あの月がもうあの森の一番高い梢を離れようと

してゐます。昨夜（ゆうべ）も丁度あの頃でした。月があの梢を離れる頃には、あなたは眼の前にあなたを震ひをのゝかすものを御覽にならなければならないのです。おゝ私の命は今絶え果てさうだ。私は苦しう御座います。……而かもこんなに苦しみながらも私は心の隅でその忌（いま）はしい罪を恐る〳〵待つてゐるのだもの。…　ヤペテ！　私はあなたを心の底から愛してゐます。私の眼にかけて、心にかけて、命にかけて。だから、今、たつた今、こゝを立ち退いて父上の許に歸つて下さいまし。

ヤペテ――あなたは天の使によつて孕まれたのを恥ぢてゐるのだな。私はそれを恥とはしない。縦令墮落しても天の使は天の使です。あなたの神々しい美しさはそこから來てゐるのだ。私は天國にあこがれる。あこがれる。そのあこがれが私にあなたを愛させるのです。

ナアマ――（ヤペテの最後の言葉と同時に）二心の女です私は！　私を憎んで下さいまし。若し仕合せにもあなたのやうな正しい方（かた）にも出來るなら、私をあなたの手で殺して下さいまし。あなたが私を本當に幸福にして下さらうとなら……

ヤペテ――洪水で淨められた新しい世の中に……ナアマ。私を信じて、私に依賴して、……

ナアマ――とう〳〵時が來てしまつたやうだ。あなたはあんまり殘虐です。あなたは私の恥を御覽になるのですか……　私はあなたを憎みます……

云ふ中にナアマ痙攣を起したる如く全身震へ出し、眼を閉ぢたるまゝ夢遊病者の如く茫然として佇立す。

ヤペテ――（小さき聲にて）ナアマ！　ナアマ！　あなた震へてゐる。寒いのか。（慌てゝユバルの上衣を取り着せやる。肩に手をかけ）ナアマ！　この六日の間私は食はず眠らずあなに近づかうとして夜が來ると幕屋のほとりを歩き廻つた。ナアマ、あなたは答へてくれないのか。（肩に今一度手をかけんとして電氣を受けたる如くたじろぐ）ナア

マ、あなたは死んでゐるのか。ナアマは神に召されようとするのか。私の願ひは、訴へは、祈りは全く踏み躙られたのだ。私はどうすればいゝんだ。

天使の羽音聞こゆ。ヤペテ驚いて身をすくむ。

天の使の羽音だ。あゝ、東明が瞼を開いたやうに、エデンの空が裂けて光がほどばしる。（ふと決心したやうに）あの天の使こそはナアマに思ひをかけた天の使ではないか。悪魔にせよ、天の使にせよ、私はナアマを守つて見せよう。

ヤペテ、ナアマの身邊に立ち身構へする。やがて眼くるめき、手足をもだえしが、一聲高く叫びてはたと倒る。

天使サミアサ降臨。靜かに手をナアマの方にさし延ばして「ナアマ」と呼べば、ナアマの眼おのづから開け、醉ひしれたるものゝ如くなりてその前に跪く。

サミアサ――ナアマ！

ナアマ――いと高きもの。（天使の手に口づけす）

サミアサ――お前は私を愛さねばならぬのだ。

ナアマ――心の限り、命の限り。

サミアサ――永久に愛するか。

ナアマ――私の族は永久といふ事を存じません。私はやがて土に歸ります。主は永久に永らへさせられます。それを思ふと私の小さい胸は張り裂けます。私は永久に生きたう御座います。あなたの御胸に參れる爲めばかりにも永久に生きたう御座います。

サミアサ――お前は私の胸の中で永久に生きるだらう。

ナアマ――主は私の胸の中で程なくお死にゝなるので御座います。悲しう御座います。いと高きもの、主は私の童貞(をとめ)を思ひ出させて下さります。いと高きものゝ上に榮光あれ。

サミアサ――ナアマ來い！

ナアマ夢中にサミアサに近づき、その膝に身を投げて震へ伏す。サミアサ靜かにナアマの髮に口づけす。

サミア――ナアマ。

ナアマ――いと高き者。

サミアサ――ナアマ。

ナアマ――いと〳〵高き者。

云ひ交はし居る中、天使やうやく地を離れ見えずなる。

ナアマ――（暫く惘然として天を見上げ居りしが、ふと我に歸り驚きつゝあたりを見廻し）私は何時の間に私の幕屋から母上を置きざりにしてこゝに來たのだらう。……天の使が又私をお召しになつたのだ。あゝ、私は美しい美しい夢のやうにあつた事を覺えてゐる。（眼も輝くばかり喜びの色に滿ち空を見上げ祈る形になりて）私は永遠を抱きました。私は天國が戀しう御座います。私の胸は焰で刺し貫かれたやうに痛みます。嬉しさに、誇りに、悲しさに、淋しさに、その凡てを集めても云ひ現はす事の出來ない樂しい恐ろしい思ひに痛みます。あゝエホバ！　私は拭ひ淨(きよ)める事の出來ない罪を犯して居ります。けれどもその罪の甘さ……人の世は荒野になつてしまひました。……ヤペテ！　（突然ヤペテに思ひ到りて遣るに由なき苦悶に身をもがきながら）私は……私は……人の世が戀しい。おゝ私の苦しみは天の使も知らない、人も知らない。（ふと振り向きてそこにヤペテの倒れをるを見）ヤペテ！　人の世の唯一つの光、私の心の宮なるヤペテ！　（抱き上げ）ヤペテ、ヤペテ！　私の唇に愛をこめる。愛の凡てを

こめる。私の唇よ！　ヤペテの唇に愛の氣息(いき)を覺えさせてくれ。（ヤペテを強く口づけす）ヤペテ還つて下さい。
もう一度私の愛の胸に還つて下さい。

ヤペテ――（僅かに人心地になり）私は御前に跪きます。いと高きに在(いま)すエホバの御使よ。私は卑しい土塊(つちくれ)に過ぎません。あなたを垣間見(かいまみ)た事を許して下さいまし。ナアマを私に返して下さいまし。人の命は淋しう御座います。

ナアマ――ヤペテ！　氣をしつかり。私です、私はあなたのナアマです。

ヤペテ――私はナアマを命ほど深く、死ぬほど強く愛してをります。

ナアマ――私の胸は嬉しさに張り裂ける。ヤペテ、眼をお覺(さま)しなさい。私は天の使ではありません。

ヤペテ――（漸く正氣づきてしげ／＼とナアマを見やり）おゝナアマ！

ヤペテ――私は異象(まぼろし)を見てゐたのか。

ナアマ――天の使が……私をお召しになつたのです。

ヤペテ――私は眼を信じていゝのか、心を信じていゝのか。こんなにいつくしい畏ろしい事が世にあり得るのだらうか。あなたは永遠の命に抱かれたのだ。では私は――土に歸る塵の子なる私はあなたの裳に觸れる事さへ出來ないのだ。

ナアマ――私はどうしていゝか知りません。唯私はお側にゐると心の底までが慕はしさと嬉しさに震へるのを知つてゐます。

ヤペテ――私があなたの側にゐる時の心持を、あなたの口は私に云つて聞かせてゐる。

ナアマ――でもあなたの外に私は天の使に愛されてゐます。

ヤペテ――私には解らない事だ。

ナアマ――私の父は天の使です。私の母は土塊です。

ヤペテ――父上の言葉が思ひ當る！……よし、ナアマ、私は天の使にまで自分自身を鍛へ上げる。私はあなたの良人にふさはしいものにならずにおかない。どうか今、墮落した天の使からあなたの心を切り放して下さい。早く私と一緒に來て下さい。あなたなしには私の信仰も、望みも、力も、樂しみも、流れる水のやうに流れ去つてしまふのです。ナアマ！　私はあなたを愛してゐる。あなたは私を愛してゐる。その外にあなたは何を求めるのです。……あなたは天を、永遠を……呪はるべきだ。私は今天の使ではない。憐れむべき人の子に過ぎないのだ。私の大言が何んの役に立たう。

ナアマ――あなたは私を御存知ない、いゝえ御存知ない。カインの族はエホバの呪ひを受けたものです。私はエホバの妬みをさへ受けてゐます。私は方舟を汚します。……あゝ、私は、あなたを憎む。早くこゝを立ち退いて父上に、方舟に還つて下さい。……御覽なさい、空が曇つて來ました。アララット山の方にわだかまつた雲は雷霆を積み乘せて、見る／＼大空に擴がつて來ます。知つてゐます。知つてゐます。今夜恐ろしい事の來るのを私は自分の心と體で知つてゐます。おゝ月、お前の最後の清い光。それはもう隱れようとするのか。

ヤペテ――エホバの憤りの時は逼つた。物凄い風が吹き出して來た。

　この時ヤバル血に塗れた劍を提げ暴々しく登場。唯一打ちにユバルの上衣を纏へるナアマを斬る。

ヤバル――ユバル！　サタンに行け！　父上を裏切つて天の使に通じたお前の母アダの後を追ふがいゝ。ヤバルは父上に代つてカインの族の血を淨めるのだぞ。

ナアマ――あゝヤペテ！　私の寶、私の宮！　私の時が來ました。（遂に絕え入る）

ヤバル――（ヤペテに向ひ）誰だ、そこにゐるのは？

ヤペテ――(不意の凶變に氣を呑まれしが猛然として)ヤバルかようこそ! お前の呪はれた血がお前にさせた事を見て見るがいゝ。そこに倒れたのはユバルではないぞ。お前の淫らな心が慕ひ求めてゐたナアマだとは知らないのか。憎むべき毒蛇の末裔。

ヤバル――(驚きてナアマに近づきその顔を見て吃驚す)おゝナアマ! ナアマ!! ナアマ!! お前がこの世にゐる間、お前を私の胸に抱かうとしてゐた間、私の心には神々しい火が燃えてゐた。私は情けの甘い悲しさを知つてゐた。……けれどもサタンはその望をすら絶つてしまつたのだ。ヤペテ! 私が今何になつたかをお前は思ひ知るだらう。ナアマのない私は人間ではないぞ。毒蛇! お前はよくも名付けた。毒蛇には心はない。毒の牙があるばかりだ。天と地との呪ひの限りから私は力を汲み取つて見せる。この毒の牙に刃向へるなら刃向つて見ろ。(劔を取り直してじり〳〵とつめよる)

ヤペテ――(有り合ふ木の枝を拾ひ上げしが、思ひ直してナアマの死骸の側に立ち胸を擴げ)その牙をこゝに刺せ。私の傷口はナアマの血を口づけするのだ。

この時大雨大風大いに至り、轟然たる雷鳴起る。ヤバル天地の猛勢に恐れをなし、足すくみてヤペテに近寄る能はず、ヤペテ自若として立つ。人々大雨の中を右往左往す。

――幕――

第四幕　水面

豪雨、雷電、狂風。

大洪水の前

見渡す限り濁水漲りて、舞臺の一角に僅かに高地の突角を現はすのみ。
演伎の進むに從ひ、その突角も亦漸く水中に沒し行く。その突角の巖に取りつかんとして男女の群れもがき狂ふ。ヤペテ及びユバルその巖上にあり。
やがて方舟の舳首他の一端より現はる。ノア立ちたるまゝ天を仰いで祈る。女等は跪きて泣き且つ祈る。ハムも打ち伏して哀訴の聲をしぼる。セムは舷側に立ち、手槍を以て船に攀ぢ上らんとする男女を突き落す。

セム——(ハムに)ハム！　立ち上れ。胸を打つてエホバの憐れみをお願ひする時はもう過ぎた。立ち上つてその艣を取れ。野蜜につく蟻のやうにこの船に慕ひ寄る罪人等を私一人では防ぎ切れない。その艣で、泳ぎ寄る醜い頭を土塊のやうに打ち摧け。

ハム——(祈る)エホバ、エホバ！　私をお責めにならないで下さい。私はあなたの前にもう詐りはいたしません。エホバの仰せはどんな事でゞも背きますまい。

セム——だから立ち上つて艣を取れといふのだ。(ハムおづ／＼立ち上り艣を取りて船に近づく人を打つ。雷鳴を聞く毎に死せるが如く耳を蔽ひて伏す)

ノアの妻——ヤペテ！　私の末子なるヤペテはもう私の胸には歸つて來ないのか。エホバの御許しがあるならば私は、この胸から泣きやまぬ心をゑぐり出して捨てゝしまひたい。私の今までの凡ての幸福もこの一つの災の前には塵のやうに輕く思はれます。

ノア——妻よ、亡はれた小羊は捨てゝおくがいゝのだ。

突角にある男女舟の來れるを見て口々に救ひを求む。その時ヤペテ疲れながら泳ぎ來りて突角に這ひ上る。ユバルも亦。
ヤペテ、ユバルを救ひ上げ、疲れたる己れを休める暇もなく、突角に取りつきたる男女を救ひ上ぐ。男女はヤペテを命

の索(つな)とすがりつく。

ヤペテ――（男女に）失望するな。ヤペテはお前達を捨てはしない。ヤペテが死ぬまではお前達も死なせはしない。

或る男――ヤペテ！　私はもう死にます。この子を、この子を助けて下さい。ユバル！　その女はあなたが助けて下さい。お前こゝから上れ。お前も。お前は傷を受けた。

他の男――この子にも私の苦しみを味はせないで下さい。

ヤペテ――（二人の幼き子を受取って）サタンもこの嬰兒(みどりご)には牙を向けかねるだらう。あゝエホバ。あなたの義(たゞ)しさは人の子をつまづかせようとします。

ノア――（ヤペテのあるのを見出し）ヤペテ！

ノア、セム、ハムの妻達――ヤペテ、ヤペテ！

ノア――セム！　ハム！　早くこの方舟(はこぶね)を彼處に（ヤペテの方を指し）やれ。早く〳〵。女達も身づくろひして男等に力を添へろ。エホバの名によつて！　ヤペテを救ひ上げてくれ。

セム――亡(うしな)はれた小羊は捨てゝおくのがいゝのだ。

ノア――お前は涙の償(あたひ)を知らない。

セム――私はエホバの約束の重いのを知つてゐる積りです。

ハムの妻――あゝ土が崩れた。

セムの妻――おゝ濁水が罪人等を呑み込んだ。

ノア
ノアの妻 ｝――ヤペテ。ヤペテ。

ノア――セム、方舟を漕げ、早く。彼處に。見る間に水は増して來る。

船の上なる人々立ち騷ぐひまもなく、大波に煽られて、突角見る〳〵崩れ去る。男女は枯葉の如く水の上に散る。

ノア――エホバ!!

ノアの妻――ヤペテがゐる。あすこに見える。

ノア――おゝ居る。ヤペテ！　心を弱めるな。雄々しく泳げ。

ノアの妻――早く助けて、セム、ハム。セムは何故働いてくれないのだ。

セム――エホバの義しさを曲げて、弱い心になるのは罪を犯すのです。

ノアの妻――もうすぐだ、ヤペテ。命の限り泳いでおくれ。

ヤペテ人々に助けられて船に上る。その腕には二人の嬰兒を抱きたり。ノアの妻駈けよりてヤペテを犇と抱く。

セム――ヤペテ！　お前の腕に燒きついたその罪の蘖を水に投げ捨てろ。

ヤペテ――これを！　私はこの二人の爲めに船に泳ぎついたのです。ユバル！　ユバルはどうした。（呼ぶ）ユバル……ゐない。あの氣高い心のユバルさへエホバの呪ひを受けねばならぬのか。

セム――ハム！　お前がエホバの慈愛にあづかる仕事がそこに現はれた。その二人の嬰兒をヤペテの胸からもぎ取つてしまへ。

セム、ハムの二人ヤペテより二人の嬰兒を奪ひ、呪ひの言葉を浴びせつゝ、二人を水中に投ず。ヤペテ又水に入らんとしてノア等に押へらる。

ヤペテ――死なして下さい。地獄に行かせて下さい。

ノア――老い疲れた私でさへエホバの御名によつてまだ生きねばならぬのだ。私は人々のこの苦しみを見てゐる

よりは死ぬ方がどれ程幸ひであるか知れないと思ふ。けれども生きねばならぬ。さうしてお前も生きねばならぬのだ。セムにはセムの行く道がある。ハムにはハムの行く道がある。お前にはお前の行く道がある。洪水の後に現はれる新しい人の世はお前を待ち望んでゐるのだ。

ヤペテ――私には妻はない。私の末裔(すゑ)は永久に絶えるでせう。

ノア――エホバの思召(おぼしめし)は人の子の計り知る所ではない。

ヤペテ――エホバは私から凡てを奪つてしまひました。私には何んにもない。

ノア――お前にはまだ命がある。

ヤペテ――命がある。虚(うつ)ろな……命が。(やゝ長く沈思せる後、涙して舷側に歩みより)古き人の世よ。私が歩いて行く道があると云ふのか。滅び行く土塊(つちくれ)よ。(遠きものを見る如く眼前を見やり)ナアマよ。……エホバよ。

ノアの妻しづかにヤペテを抱く。

――幕――

(一九一六年一月「白樺」所載(未定稿))
(一九一九年十月、完稿)

サムソンとデリラ

――神婦に言ひたまひけるは我が大に汝の懷姙の劬勞（いたはり）を增すべし……（創生紀）――

（舊約聖書士師記十三、十四、十五、十六の諸章參照）

場所　パレスタイン國イスラエル、ペリシテ地方。

時　太古。

人物　サムソン――ダンの族（やから）のナザレ人。（神に身を獻げし者）

デリラ――ペリシテの族の妖婦。

テムナテの處女――サムソンと婚約せる處女の妹。

サムソンの父

少年――サムソンの侍童。

ペリシテの群伯（きみたち）。ダゴンの神殿の祭司。使者。兵士。群集。

第一幕　ペリシテ人の政廳

ペリシテ人の首都ガザにある政廳の一室。群伯四人ダゴン神殿の祭司と密議す。時は盛夏の晝。

群伯甲――（小司（こもの）に）今日も暑さがひどくなつて來た。あすこの帷（とばり）を擧げて海の風を呼び入れろ。

群伯乙――（小司に）而して奴隸の女達に羽根扇を持つて來て煽がせるがいゝ。

小司、帷を開く。澄み渡れる地中海の青空、海及び市街の一部現はる。奴隸の女達、長柄の羽根扇を持ち來りて人々を煽ぐ。

群伯甲――サムソンはデリラがこゝに呼び寄せられたのを何とか思ひはしないだらうか。

群伯丙――小賢しいデリラの事だからサムソンを疑はせるやうな事はしまい。それにしてもソレクの谷からこゝまで來るには往復で八日はかゝる。サムソンがその間を留守するのは容易い事ではあるまい。愛する婦の留守をするのは、一時を千年にして待ち暮らす程長いものだから。

一同笑聲。

群伯丁――サムソンがこのガザの都を朝まだきから騷がせたのは昨日のやうだが、もう二年前になる。あの時も今日のやうに晴れ渡つた眞夏であつたが……

群伯乙――眞夏ではあつたが空は確かに曇つて居つた。あなたの齡があなたを忘れ易くしたと見えるな。

群伯丁――老人こそは過去の思ひ出にまめやかなものだ。あなたはサムソンがデリラの許に通つた日と、あなた自身が通つた日とを取り違へてゐるのではないかな。私はよく覺えてゐる、その朝の事は。私の果物圃は城の外にあるが、その日は未明からぎら〳〵と空が光る程晴れてゐたので、農夫が水をやり忘れてはならぬと思ふて、早起きの私は城の門まで普段着のまゝで歩んで行くと、そこに町の者や兵士達が物々しく立ち並んで門を堅めてゐたので、始めて前の夜の會議の事を思ひ出したのだ。だからその日は晴れてゐた。

群伯乙――晴れた晴れぬはどうでもいゝ。然し二年前にはあなたも若かつたと見えるな。前の夜の會議の事を忘れてゐた位だから。（笑ふ）

群伯丙――もうデリラがやつて來てもいゝ時刻だが……まだ宿にゐて化粧に暇を費してゐるのだらう。

群伯丁――あのあでやかさを更にも美しくしようとするその慾深かな女の心が弱味といふものだ。

その時小司登場、一封の書を群伯甲に渡す。

群伯甲――(開封默讀したる後)又訴への書狀が舞ひ込み居つた。讀み上げて見ろ。

小司――(書狀を受取りて讀む)

「ペリシテ人のいと大いなる神ダゴンの祭司。並びにペリシテ人を治め、その民を安からしむる爲めに黄金の座を占め給ふ群伯、

「我等の祖先が武勇の矛もて切り從へたるダンの族のナザレ人サムソンは今もソレクの谷に住みてその故郷に歸らず。そは宛らに餓ゑたる狼を放ちて我等の間におくが如し。我等の日一時も安き事なし。彼サムソンの力は驢馬の腮骸をもて一千人を撃殺すに足り、その怒りは油の傍に炬火を置けるが如し。さゝやかなる一陣の風はその油を火となすべし。彼サムソン一度怒らば、ペリシテの野はまた收穫を見る事なからん。民を安からしむる爲に黄金の座を占め給ふ群伯。民を安からしめ給へ。祭司も亦ダゴンの神威を以て彼サムソンを國の境より遠け、又は雷霆もて打ち殺し給へ。若しこの事成し遂げられずば、人の心離れ亂れて、租税をだに納めざるに至らん。

「ペリシテ人の衰へ近づけり。國を治むるもの眼ざめずば、我等はこの國を離れて又エジプトに歸り行くべし。祭司。群伯。深く自らの責任の重きを省み給へ。

アシケロンとガザとに住む凡ての商人及び工業者」

群伯甲――から云ふ訴への書狀は毎日これ程の束になる位到來するのだ。ペリシテ人がサムソンを恐れてゐる程度は私達が推察するより物々しい。

群伯丁――早くその命を取り上げなければ私達の身の上が危い……ペリシテ人の身の上が危い。

群伯丙――デリラがうまくその羂（わな）にサムソンをはめ込み得ようか。

祭司――私もそれを危ぶむものだが……デリラが若し心からサムソンを愛してゞもゐたら、この計畫は――今の書狀の文句ではないが――一陣（ひとふき）の風の役をしないとも限らない。

羽根扇にて煽ぎつゝありし奴隷の女達、窓の方に首をさし延べ、眼付にて語り合ふ。

群伯丙――（逸早くそれを認め）お前達は自分の仕事をおろそかにして何を見てゐるのだ。云へ。

群伯甲――物云ふ事を許すから云つて見ろ。

奴隷の女の一人――デリラが町を通つてこちらに參ります。

群伯甲――來たか。

同　乙――來をつたか。　（同時に）

同　丙――どれ何處に來た。

群伯乙、丙の二人立つて窓の方に行く。群伯丁と祭司と顏見合せて皮肉な笑ひを交はす。群伯甲は威儀を整へる爲めに座を立ちなどす。

群伯乙――ふむ、私達が町中を行く時よりも人々はあの婦（をんな）一人の爲めに興奮してをる。

群伯丙――今あの女は誰かに顏を向けて微笑（ほゝゑ）んだが、誰に向けたのか。

群伯乙――（座にある人に）こゝに來て見るがいゝ、妓女（あそびめ）もあの女ほどになると威嚴が加はるやうだ。（奴隷の女達に）どうだ、お前達もあの女のやうになりたいか。

群伯丁――女の威嚴などを喜ぶのはあなたの年頃が丁度適當だ。

群伯乙――(甲に)あなたも(丁に)あなたも、見たいものを何も遠慮する事はないよ。(祭司に)あなたには一寸勸め憎い事だが。

群伯丙――云ひ附け通り兵士等が群伯に對すると同樣な敬禮を捧げてゐる。

群伯乙――門を這入つてしまつたな。兵士共が我も〳〵と見送つてをるわい。

群伯乙丙座につく。暫くして小司登場。

小司――デリラが御命令によつて登廳致しました。

群伯甲――すぐこゝに案內しろ。(奴隸の女達に)お前達はもう下つてよろしい。

奴隸の女達退場。デリラ登場。鷹揚に人々を見廻した後、祭司の前に進みて奴隸の禮を爲す。

デリラ――ダゴンの大神に事へ給ふ聖なる聖者。卑しい者がお眼汚しになるのをお許し下さい。(次に群伯達に普通人の禮)わが族の尊い群伯にも卑しい者が跪いて御挨拶を申上げます。

群伯甲――今日はあなたは卑しい者ではない。私達と同樣の座に着いて貰ひたい。こゝに。(と云ひながら設けおきたる黃金の座を示す)

デリラ――それは思ひも寄らない事で御座います。

群伯乙――まあいゝ、その理由は後で判る。その座に着いてくれなければ話が出來ない。ふむ、あれからあなたはづゝとソレクの谷にゐたのか、少しも變つてゐないな。旅の疲れもなかつたか。

群伯丙――まあこの座に着いてくれるがいゝ。

デリラ設けの座に着く。小司、群伯甲の傍なる卓の上に又一束の書狀を持ち來る。

祭司――デリラ。ペリシテ人の大神なるダゴンの託宣によつて、お前は今群伯と座を分つべき光榮を受けた。今

ペリシテ人の上には國難が蔽ひかゝつてゐる。お前のか弱い腕の力で――お前が望むなら――この國を亂れと災ひとから救ふ事が出來るのだ。而してお前は大神から一番高い祝福を受けるだらう。

群伯甲――ペリシテ人もあなたの勳功に向つては爲し得る限りの報酬を怠りはしまい。

デリラ――それは私がサムソンの心を捕へてあの若い牡獅子の様な力を容易く軟げてゐるからで御座いますか。

群伯乙――それもある。……が一體あなたはサムソンに愛を捧げるのはペリシテ人として疚ましくない事と思ふのか。

デリラ――サムソンに愛を捧げる？　私がこのガザの都――私が生れて育ち上つたこのガザの都を見捨てるやうにしたのは誰だとお思ひになります。それはサムソンの仕業で御座いました。私がサムソンに愛を捧げる！

群伯丙――それはさうだ。あの朝ガザの市民がサムソンから受けた恥は大きかつた。サムソンがあなたの所に一夜を過さなかつたら、ペリシテ人はあんな恥は受けなかつたのだ。

デリラ――而して私もガザを逐はれるやうな事はなかつたので御座います。

群伯丁――私があの朝果物圃に行かうと思つて城の門に來ると、町の者達も兵士達も犇々と門を堅めてゐた。ダンの族の亂暴人のサムソンを今日こそは捕虜にする。……私も亦その日こそは出來ると思うた。

群伯乙――何しろ唯一人ペリシテ人の首府に乘り込んで來て、而かもデリラの家で酒びたりになつて夜を徹したその朝だから、縱令どれ程强力のサムソンでも、あの時こそは身動きが出來まいと私も思うてゐたよ。

群伯丁――所が私のこの眼で見てゐる所に、サムソンがすがりつく捕手をレバノンの香柏が秋の木の葉を拂ひ落すやうに拂ひのけて門の所に進んで來た。

デリラ――ではあなたはあなたのお眼でサムソンの荒びを御覽になつたのですか。

群伯丁――見たとも、この眼で見たのだ。

群伯丙――乂私達はその物語りを聞いてゐねばならぬのか。

群伯丁――まあ聞くがいゝ。まだその時は夜の瞼が開き切らない黎明だつたが、人々をたゞ一拂ひに拂ひ退けて、今あれに見えるあの門より巖丈であつた當時の門の二つの柱に手をかけ、閂もろともそれを引き拔き、安々と肩に載せて、あのヘブロンの向ひに見える小山の巓に負ひ登つてしまつたのだ。そこにゐ合はした人々は唯驚き惘れて固唾を吞むばかりだつた。

デリラ――それをあなたの眼が……

群伯丁――その事は決して言ひ傳へではない。

群伯丙――いやあなたの眼があなたの口に云ひ傳へたのだらう。

群伯甲――それから町の人々はあなたを怒り始めた。凡ての人は自分達の力の足らぬのを思ひも見ずに、あなたがサムソンを宿らした事を責めに責めた。私達も遂には人々の訴へをどうする事も出來なくなつたのだ。

群伯乙――あゝ町の人達が云ひ募ると一と先づあなたをこの町から立ち退かせねば、あなたの身の上が危ぶまれたのだ。それはあなたにも分るだらう。

デリラ――(皮肉に)よく分ります。私がサムソンを宿らしたので妬みに驅られた人々もあつたとは聞きましたけれども。

祭司――その極惡人のサムソンは今でもお前の家にゐるか。

デリラ――居ります。

祭司――お前はあの不思議なサムソンの力の祕密をもうさぐり出したか。

デリラ――どうしてもサムソンはその祕密を打ち明けようとは致しません。
群伯丁――あなたはサムソンに餘り優し過ぎるのだらう。
デリラ――憎んでをります。なつかしい私の誕生の土地に住み續け得ないやうにしたばかりか、私を謀叛人でもあるやうに肩身狹くしてしまつたサムソンを私は憎みます。
群伯乙――所でサムソンは今でもあなたに溺れ切つてゐるのだな。
デリラ――さうも見えます。ダンの族をペリシテから獨立させよう計略（はかりごと）の爲めに私を手なづけてゐるやうにも見えます。……それだから私の憎しみは募るばかりです。
群伯丁――ふむ憎む。憎むと云ふ時には男は憎む。憎むと云ふ時、女は時とすると愛してゐる。
デリラ――（群伯丁が「愛してゐる」と云ふと同時に）憎みます。……まあお聞き下さいまし。サムソンが故鄕のゾラにゐてダンの族のナザレ人であつた時……
群伯丁――ナザレ人とは何の事だ。
デリラ――ダンの族の神はエホバと申します。その族の民はエホバの外は拜みません。サムソンはその異邦の神の召しによつてナザレ人（びと）となつたので御座います。ナザレ人（びと）とは神に身を獻（さゝ）げたものと云ふ心……この國での祭司と群伯とを兼ねた身分で御座いました。……そのナザレ人であつた時、テムナテに下つてペリシテ人の娘と契りました時、七日續くその披露の宴に一つの隱語（なぞ）を申したのです。客人はダン人（びと）の隱語をペリシテ人が解き得なかつたら恥辱になると云つて、サムソンと契つた婦（をんな）に強ひてその隱語の心を聞き出させようと致しました。その女は七日の間サムソンの膝許に泣き續けたのでサムソンは隱語の心を明かしてしまひましたと申します。それだのにこのデリラには、自分の力の祕密を今だに打ち明けてくれようとは致しません。どれ程の誘惑

もサムソンの口を開かせる事が出來ません。サムソンがその婦を愛するやうに私を愛してゐるのなら、……さう思ふと私はサムソンの愛を疑ひます。

群伯乙――それはデリラともある者の恥ではなからうか。

デリラ――私を愛しないものを私は動かす事は出來ません。

群伯丙――動かす事の出來るやうにあなたを愛させるがいゝではないか。

デリラ――(侮蔑を以て)サムソンはあなたのやうに婦にやさしい男では御座いません。

群伯甲――こゝにこれ程ペリシテの町々村々から訴狀が集まつてゐる。人々がどれ程あなたを恨んでゐるか……

例へば(書狀を選り出して讀む)「ペリシテ人の心を失ひ果てしデリラの上に呪ひあれ! 惡魔に身賣りせる婦に呪ひあれ! 卑しむべき屬國の若人と床を共にする淫らなる獸物に呪ひあれ! 國法を以てデリラを薪の上に燒けよ。さらばサムソンはペリシテを離れてダンに歸り行かん。デリラの生くるは香ばしき餌もて猛き獅子を庭の中に誘ひ入るゝが如し」

又(更に他の書狀を讀む)

「デリラを愼しめよ。彼デリラはサムソンの力を賴みてペリシテの群伯に逆らひ、ダンの族を立てゝペリシテをその脚に踏み躙らんとす。我等はやがて異邦人の神エホバの前に跪くべし」

又(更に他の書狀を讀む)

「この訴狀をデリラに示すべし。妓女の中最もみめよく最も恥なき女よ。汝は異邦の男に情を賣りてガザを逐はれたり。灰を蒙りてダゴンの大神の前に罪を悔うべきに、なほありし恥を續けて今に至らんとするか。汝の行によりてペリシテ人穢されたり。我汝を見ば立どころに汝の命を惡魔に與ふべし」

デリラ――（誇りを傷けられし憤激に顔面蒼白に變りつゝも、なほ泰然として黃金の座に身をゆるがさず）ペリシテ人の爲めに、その榮えの爲めに私が生きて來なかつたら、私は恥に堪へかねて今この場に死倒れたかも知れません。私が何故ダンとペリシテとの境なるソレクの谷に住居を構へたか、何故サムソンを禁厭のやうな誘惑でそこに呼び寄せたか、……それは皆樣が知つて下さつてゐらつしやいます。あなた方が莫大な賞與をかけてそれを私にお命じになつたのです。ペリシテの榮えの爲めに、私はどれ程の恨みも誤解も喜んで受けようと存じます。……唯私はまだサムソンのあの不思議な力の祕密をさぐり得ないのを心苦しう存じます。

群伯甲――まだかう云ふ訴狀もある。（更に他の書狀を讀む）

「デリラ遂に女の誇りの座より落ちたり。サムソンの力デリラの胸をひしぎ盡したり。デリラはサムソンの前に赤兒たるのみ、奴隸たるのみ。柔順なる牝牛たるのみ。……

デリラ震へんばかりに激昂し思はず座を立つ。

「彼デリラの美は捕虜となりたり。彼デリラは世の常の女となれり。汝の胎に孕み、汝の乳房もて哺み、汝の美の衰へ盡すまで永らへて、塵の如く空しく死せよ。サムソンは汝を征服し盡してなほ汝を愛し續くべきや。愚かなる……」

デリラ突然座より立ち上り、群伯甲より書狀を奪ひて、寸々に切り裂く。

デリラ――もう半ケ月を、十五日を私に貸し與へて下さい。私は力の祕密をさぐり出します。而してサムソンを必ずあなたの方の手にお渡しゝます。……ダゴンの大神！　デリラが牝牛であるかないか……それは十五日の後を待つて罵るなら罵るがいゝ。

群伯丁――十五日を十倍しても私達は構はないが……

デリラ――十五日……唯十五日。私はそれより一刻も延ばしていたゞくのを拒みます。私はその時サムソンの力の源をつきとめて、その泉を涸らして御覧に入れます。若い牡獅子のやうなサムソンを小羊よりも力なくしてお目に懸けます。

群伯丙――私には疑はしい。

群伯乙――私はデリラを信じようと思ふ。

デリラ――（群伯甲の前に跪き）私を信じて下さい。ダゴンの大神に命をかけて私はそれを誓ひます。

祭司――ダゴンの大神の榮光と、ペリシテ人の平安の爲めに……お前は誓ふといふのか。

デリラ――さうして私の誇りの爲めに。

群伯甲――私達の唯一人の友。私達の戰ひの前衛。あなたの譽はペリシテ人の榮となるだらう。

デリラ――その譽れの爲めにペリシテ人は何を私にして下さるでせう。

群伯乙――私達が銀千枚づゝを贈らう。

デリラ――その外に。

群伯甲――その外にあなたは何を求めるか。

デリラ――サムソンの命を奪はないで下さい。さうしてペリシテ人の群がる前でサムソンと私とを對ひ合つて立たせて下さい。その時私はサムソンとペリシテ人とに私がどんな婦であるかを明らかに知らせてやります。

群伯丙――サムソンを生かしておくのは許さるべきでない。

祭司――その願ひは叶へてやる。

デリラ――（祭司の前に奴隷の禮を取り）私はダゴンの大神を讃へ奉ります。私がサムソンに溺れてゐるか、サムソ

ンが私に溺れてゐるか……サムソンが私に溺れてゐるその證據を握るまで、私の眼は眠りを知りますまい。

突然、市中に騷擾の聲起る。小司多數の訴狀を持ちたるまゝ登場。訴狀はら〳〵とその手よりこぼれ落つ。

小司――サムソンがデリラを逐つて參りました。早くこの座をおはづし下さい。

群伯甲――（慌てつゝも）デリラ早く私達とこの部屋を退出するがいゝ。（小司に）サムソンはどちらから近づいて來るのか。

小司――逃げ廻る人波ではサムソンがどちらから近づくとも判りかねます。人々は唯右往左往して居るばかりで御座います。

他の群伯達は取るものも取り敢へず部屋を出づ。

群伯甲――あなたは老いて居る。早くあれへ。

祭司――私は惡魔なりとも恐れはしない。私はこゝにゐてサムソンの來るのを待たう。

群伯甲――デリラ早くこゝを避けないか。

デリラ――サムソンが私に溺れてゐるか、私がサムソンに溺れてゐるか……

群伯甲已むを得ず二人を殘して退場。サムソン登場。祭司もデリラも思はず其猛威に打れて鞭を防ぐ時の如く身を縮む。

サムソン――（デリラのあるを見て急に優しくなり）デリラ！　お前はこゝにゐたのか。而してお前は私を恐れずに一人で私の來たのを迎へるのか。（近づきてその顏に手をそへて見入りつゝ）お前のたをやかさはこの四日の間に少しも損はれてゐなかつたな。……そこにゐる老人はあれは何だ。（祭司威儀を作りてサムソンに物云ひかけんとす。サムソンは頓着なく）あれでもその胸には氣息が通つてゐるのか。貧しい土で造つた偶像のやうな奴だ。デリラ。私はお前を尋ねてこの四日の間、傷いた獅子のやうにテムナテからマレシヤの山や谷間を駈けて廻つたのだ。

けれどもお前はそこにゐなかつた。犬に逐はれた小兎は死の間際にその親の穴に走り込むものだ。お前も生れた所に來てはゐないかと思つたのだ。而してこのガザに來た。道で遇つた第一の男の喉輪を締めてお前のありかを尋ねたら、こゝにゐると云つた。私はその男を土に打ちつけて殺した。第二の男も第三の男もお前がこゝにゐると云つた。第二の男は海の中に、第三の男は家の屋根に投げつけた。その男達は醜くも小さなこの世の命から救はれたに違ひない。

祭司――サムソン。お前はダゴンの大神の祭司に挨拶を送るのを忘れてはゐないか。

サムソン――エホバのナザレ人への挨拶はどうするのだ。

祭司――お前の神のエホバはダンの族をその敵から救ひ得たか。

サムソン――小賢しい事を云ふな。だがサムソンに言葉を返したのはペリシテ人の中ではお前が始めてだ。ふむ、お前もこの世の命に厭きたのだな。然し生きてゐるのは死んでダゴンの神に行くのよりは少しは樂しい事だらう。もう少し生きてゐるがいゝ。

祭司――お前の荒びた力は私を打ち殺し得ても、私の魂まで打ち殺す事が出來ないのだ。

サムソン――お前には何處か殊勝な所があるやうだ。それがお前の樂しみなら、思ふまゝに空しい言葉を風に播き散らすがよからう。（デリラに向ひ）デリラ、お前は私の接吻以上のものをこゝに見出し得たとでも云ふのか。玆に來い。私はお前を左の手の上に乘せてソレクの館に歸らう。お前が四日の旅で行く處を、私は明日の旭が照り出でぬ前に歸りついて、お前を軟らかな臥床に横たへてやらう。

デリラ――私はあなたを厭ひ憎むやうになりました。

サムソン――お前が愛すると云ひ憎むと云ふのはこの男（祭司を指し）のやうな男に向つて云ふ言葉ではないの

か。お前が私を憎むと云ひ愛すると云ふとも、どちらの時にも私を愛せずにはゐられない筈だ。

デリラ――それはあなたの高慢な心があなたに云はせる囈言(うはごと)で御座います。

サムソン――私は高慢であり得た事がない。どれ程慢(たかぶ)つてもサムソンはそれ以上に偉大なのだ。

祭司――ダゴンの大神の御名によつて命ずる。デリラを殘しておけ。さうしてペリシテの屬國なるダンに手を空しくして歸るがいゝ。お前の命の此處にあるのは、ナイル河の氾濫の前に一莖の野の草があるのと同樣だ。

サムソン――（祭司の言葉などには頓着せず卓上の訴狀を繰り擴げて讀む）ペリシテ人はサムソンを恐れ、恨み、憚(はゞか)つてゐるな。ペリシテ人はダゴンの大神の祭司(つかへびと)より少し賢いやうだ。サムソンは何時かペリシテの野を沙漠のやうにして、ダンの族をその治者(をさめびと)としてやるから。デリラさあ來るがいゝ。（否應なしにデリラの手を取る。デリラ抵抗力を失へる如くサムソンに引き寄せらる）

祭司――（慌だしくサムソンに近づき）呪はれよサムソン！　デリラはペリシテ人の娘であるぞ。

サムソン――お前はそれ程この世に永らへるのを厭ふのか。それならダゴンの神に歸るがいゝ。

サムソン猛威を振つて祭司を打つ。祭司立どころに倒る。デリラ思はず恐れをなして堅くサムソンに寄り添ふ。

サムソン――（奧に向つて叫ぶ）黄金の座には一人の主もゐないのか。ペリシテ人の政廳は空しくなつたぞ。盜賊(ぬすびと)に氣をつけるがいゝ。

サムソン、デリラを伴ひて退場。舞臺暫く空虛。やがて群伯等恐る〳〵登場。

群伯丁――（窓に近づき帷(とばり)の蔭より下を見おろし）見ろ！　サムソンがデリラを左の肩の上に乘せて、人影のない市の中を悠々と歩いて行く。

群伯乙――（祭司に近づき）祭司がペリシテ人の爲めにその老體を犧牲にした。

群伯丙――空しい死方をしたものだ。

群伯乙――これを空しくしてはならない。（小司に）お前はこれから直ぐダゴンの神殿に行つて烽火を擧げるがいい。人民が集まつて來たら、群伯の名によつて聲の限りにかう宣べ傳へろ。「ダゴンの大神の老いたる祭司は大神の託宣を被つた。耳あるものは聞け。今日から十五日を出ないで、サムソンはペリシテ人の捕虜となる。その時人の中で最も卑しめられたものは最も高められるだらう。ガザの市民達よ。お前達の望を堅く群伯の上に置け。彼等群伯はお前の力の藏、望の宮である。それを疑ふ者の上には大神の憤りが時を過さず落ち下るであらう。是等の託宣を被つた祭司は大神の火に打たれて神々しく神の懷に歸られた」さう宣べ傳へるのだ。さうして銀と白い絹の布とで飾つた臥床の上に横たへられた祭司を人々に示すがいゝ。

小司かしこまりて退場せんとす。群伯甲これをとゞめ、

群伯甲――待て！「十五日目を過ぎるまではペリシテ人は一人もソレクの谷に近づいてはならぬ。近づいてサムソンを濫りに怒らしてはならぬ」それから「サムソンの捕手に向ふものは申出ろ。銀百枚づゝを取らせるから一とも宣べ傳へろ。（小司去る）今はたゞデリラの焰に油をそゝぐ外には道がない。（乙と丁に）あなた方二人はソレクに下つて潜かにデリラの智慧袋となつては下さるまいか。

群伯丁――それはいゝが祭司の後を嗣ぐものを誰にすればいゝのだらう。群伯の中で一番老いたものが祭司となるのが慣はしと聞いてゐるが。

群伯乙――それは必ずしもさうとは限らない。群伯の中で才覺の勝れたものを選ぶべきではないか。

群伯丁――（乙に）才覺はあなたが一番勝れてゐると自信してゐるのだらう。

群伯乙――それは人民の輿論が定める事だ。

群伯甲――奴隷達！　お前達は輿を持つて來て祭司を抱き乘せるがいゝ。私達はこの勇ましい愛國者に眞底から弔ひの心を寄せよう。

奴隷等輿を持ち來りて祭司を抱き乘す。

群伯丁――サムソンはもう見えなくなつてしまつた。

群伯丙――(同じく窓より外を見やり)サムソンに恐れをなしたのか、町は死んだやうに靜まり返つてゐる。

群伯丁――祭司の亡骸(なきがら)が通るにはしめやかでよからう。祭司はいゝ時に命をひき取つたものだ。

奴隷等祭司を輿に乘せて擔ぐ。群伯等わざとらしく敬禮の態度を示す。群伯乙一度跪きしが直ちに起きなほり。

群伯乙――これで人民の不平を暫くはおさへつける事が出來るだらう。この男は少からぬ金銀を溜めてゐたに違ひないが、私が祭司になつたらそんな事はしない。

群伯丁――(むつとして)それ程なりたければあなたがなるがいゝ。(輿の出て行くあとを見送りて)私達は結局損な時節に生れて來たのだ。

人々祭司の退場を見送る。

――幕――

第二幕　デリラの住家

ソレクの河邊に立つ華麗豪奢なる廣間。窓より河を隔てゝ北の方、ゾラの村、エタムの懸崖など眺め得べし。室の隅に帳を遶らしたる臥床あり。

サムソンの侍童なる少年廣間の一隅にありて竪琴を彈ず。

晩夏の夕暮。

サムソンの母靜かに登場。

サムソンの母――お前はそこにゐたのかい。琴の音が聞こえるのでそれを便つて私はお前を見つけ出す事が出來た。サムソンはどうしてお出でだ。

侍童――（琴を捨て立ち上りて敬禮し）只今臥床で休んでゐられます。

サムソンの母――（臥床を指し）そこのかい。

侍童――はい。眠りつくまで竪琴を彈きつゞけろと私にお申しつけになりました。

サムソンの母――それでは眼を覺ますまで私はこゝで靜かに待たして貰はう。縱令自分の獨子でも私はサムソンに敬ひと憚りとを持つてゐなければならぬ。

侍童サムソンの母に座をすゝめ、靜かに琴を奏で始む。

サムソンの母――デリラは？

侍童――デリラも高樓のお部屋に休んでをられます。（暫くして）昨夕の驟雨でソレクの河の水嵩は增してはゐませんでしたか。

サムソンの母――ゾラを出る時に家の人々もさう懸念してくれたが、徒渉りの出來ぬ程ではなかつた。それに私はテムナテから來た一人の處女と一緒であつたから、色々と世話をしてもらひました。

暫く言葉絶ゆ。

侍童――テムナテと云へば思ひ出す事が多う御座います。

サムソンの母――さうだね。お前はあの時からサムソンに隨つてゐるのだから。お前は若しやテムナテでサムソンが娶らうとしたあの處女の妹を知つてはゐませんか。

侍童――知つて居ります。その時はまだ童女でしたが、その姉の方にも增して姿が優れてお出でのやうでした。

サムソンの母――その娘の左の眼の下には二つの黑子が際立つてゐはしなかつたか。

侍童――ゐました。さうして髮の毛が優れて黑く、夏の朝露のやうな眼を持つた處女でした。

サムソンの母――（獨語の如く）それなら間違ひがない。サムソンがその處女を見て美しかつた昔の戀を思ひ出してくれゝばいゝが……

暫く言葉絕ゆ。

侍童――デリラがゐられますから……

サムソンの母――デリラはお前をきびしく待遇ふのかい。

侍童――私がデリラを憎み卑しんでゐるからで御座います。サムソンの愛し給ふものを私が憎むのは悲しい事ではありますけれども、私は憎まずにはゐられないので御座います。……こゝにお出でになる度每に苦い涙をお泣きにならねばならぬあなたに、私は心の底から御同情申上げます。

サムソンの母――サムソンのしてゐる事がエホバの思召しに叶つてゐるのなら、私は自分の悲しみなどに涙を許しはしないのだけれども……

暫く言葉絕ゆ。

侍童――（獨語の如く）サムソンの初戀を踏み躙つたものが惡いのです。

サムソンの母――敵人の婦に心をかけたサムソンは自分で播いた種子に相當する收穫をしたのです。誰を怨み得

よう。

侍童――それにしてもあの時のサムソンのお心のなやみは空恐ろしいばかりで御座いました。サムソンの憤りでペリシテの野はこの邊までも火の海になつてしまひました。

サムソンの母――サムソンはそんな事にエホバから賜はつた尊い力を使ひへらしてしまつたのだ。サムソンはどうしてその負債をエホバにお戻しゝようと思つてゐるのだらう。

侍童――青々と短くなつた日が暮れようとします。燈臺を用意して參ります。（侍童靜かに琴をおいて立ち、退場）

サムソンの母臥床の方を顧み、悲しげに跪き祈る。

サムソンの母――おゝ私の命はその日を見ないで消え失せてしまひさうだ。エホバの御使が、野にゐた時母に現れて「汝は石婦にして子を生みし事あらず。然れども孕みて子をうまん。その頭に剃刀をあつべからず。その子は胎を出づるよりして神のナザレ人たるべし。彼ペリシテ人の手よりイスラエルを拯ひ始めん」とお告げになつた時から、私は今の今まで葡萄酒や濃い酒を飲む事をせず、穢れたものを食べずに、サムソンの爲めに心の誠を盡して來たのに、おゝエホバ！　私は悲しい日を見、恨めしい夜を過さねばなりません。サムソンはエホバの御心を裏切りました。エホバの天罰が只今彼の上に落ちましても、誰がエホバのなされ方を非難致す事が出來ませう。けれどもエホバ！　イスラエルの守護神なるエホバ！　こゝに跪く一人の母をお憐れみ下さい。唯一人の子の爲めに凡ての愛を燃やし盡した一人の母をお憐れみ下さい。さうしてあなたがサムソンに降し給ふ呪ひを老い先きの短い私の上に降して下さいまし。……叶ふことなら私の祈りによつてサムソンの心を慧くし、大いなる最後の躓きからサムソンをお救ひ下さいまし。

侍童燈臺を持ちて登場。その物音にサムソン眠りよりさむ。

サムソン――（帷の中にて呼ぶ）物音を立てゝ私の眠りを覺したのは誰だ。（帷を排して臥床より出づ）今は夕暮れか曉方か。おゝ母上！　あなたは何時からこゝにゐられたのです。（歩みよりて母を抱きその額に接吻す）

サムソンの母――夕日が夜の帷をかゝげかけた時に來たのだ。お前は私が度々此處に來るのを五月蠅いと思ふだらうね。

サムソン――（母の頭を撫でゝ）あなたはどんな瞬間にもこの家に喜んで迎へられるでせう。この地の上で私を一番愛して下さるのはあなたであるのを私は心から知つてゐます。

サムソンの母――おゝ、お前は私のたゞ一人の息子です。（間）けれどもお前は愛するものを如何あつかつていゝかを知らないと見える。

サムソン――（ごまかすやうに）もう今日は私を許して下さい。デリラを呼び寄せて樂しい夕餐を共にしませう。デリラの眉目の美しさはあなたのお心を樂しませはしませんか。

サムソンの母――お前は何故に私の心をさう誤り見てゐなければならないのだらう。

サムソン――はゝゝ母上！　母上の眼と私の眼とが共にエホバから與へられたものなら、私の眼が美しいと見るものは母上にも美しくなければならぬではありませんか。

サムソンの母――私の眼が醜いと見るものをお前も醜いとは見てくれない。

サムソン――デリラが醜い?!

サムソンの母――サムソン！　お前はエホバのナザレ人であるのを忘れたのか。

サムソン――私はそれを誇つてすらゐるのです。それがデリラを愛してならない譯にはなりません。

サムソンの母――デリラはペリシテ人の婦であるばかりか、男の心をたぶらかす妓女ではないか。お前はデリラ

に溺れて、エホバに立てられてナザレ人となつたのを忘れ果てゝゐるではないか。ダンの人々はペリシテ人から牛馬のやうにあつかはれ、重い租税の下に喘ぎ苦しみ、その娘達はペリシテ人の玩弄物になつてゐる。お前が一目故鄕の人々の慘めな樣子を見たならば……さうしてダンの人々は今でもお前を唯一人の救主と思つて、お前がイスラエルをペリシテ人の手から救ひ出すのを今日か今日かと祈りながら待つてゐるのです。私はその人達の哀れな姿を見るとお前の恥の爲めに生きるのが厭はしくなる。サムソン！　お前は私の獨子だけれども又エホバのナザレ人です。だから私はあなたを敬つてあなたに跪いて願ひ歎きます。エホバの奇蹟を一日も早く私達の前に見せて下さい。

サムソン――エホバにはエホバの時がありますよ母上。あなたは性急過ぎます。お立ち下さい。（侍童に）お前は行つてデリラを呼んで來い。さうして夕餐の支度を急げと厨のものに命じて來い。

侍童退場。

サムソン――エホバは五年前にテムナテの處女を私に與へようとなさつたやうに、今はデリラを與へ給うたのです。デリラまでが私から奪はれる時が來たら、サムソンはこの世に望を絕つてナザレ人の役目を果しもしませう。母上、事業は年老いた人をも待つてゐる。歡樂は若い胸でなければ凭れかゝらうとはしません。

サムソンの母――あなたはそれ程エホバを蔑ろにし奉らうとするのかい。

サムソン――エホバかエホバでないか、私は淸い氣高い初戀を故もなく踏み躙られたのだ。女！　女はナザレ人を裏切つた。ナザレ人はペリシテ人を罰する前に女を罰せずにはゐられないのだ。まあお聞き下さい。五年前、忘れもしない五年前、私はマハネダンの村の入口でまざ〳〵とエホバの御顏を拜んだ。その時から私は自分の力を堅く信ずるやうになつた。さうして私の事業を助ける配偶者を見付け出す爲めにテムナテまで行つて一人

の處女を見てそれが心に適つたのです。父上も母上も割禮を受けぬペリシテ人の中から妻を迎へようとするのはダンの族の中に女がゐないとでも思ふのかと私をお責めになつた。然しその時私にはエホバの御心が知れてゐた。私はペリシテ人に近づいてその隙を窺はうと企らんでゐたのです。同時に私はその處女を心の限り愛してゐました。父上も母上も遂には私の望を納れて下さいました。まあお聞き下さい。處女の親達もそれを許しました。あれは春だつた、私が父上と母上の後から土產物の小羊を肩にかけて處女の所に出かけたのは。（暫く當時を回想する如く）その時私の心は若かつた、自由だつた。エンハツコレの泉のやうに淸かつた。さうして限りなく幸福だつた。

侍童、會話の間に燈臺を持ちて登場。室內急に花やかになる。

サムソンの母——（懷舊の情に釣り込まれて）私達もお前の喜びの盃から分けて飮んだ。お前は步きながら小歌を口ずさみ通しに口ずさんでゐたね。空は春の光に滿ちて、葡萄圃の葡萄がそのつゝましい花を枝と云ふ枝に咲きほころばしてゐたね。

サムソン——さうでした。さうして私はその圃の中に潛んで私達をねらつてゐた稚い獅子が吼え哮つて向つて來た時、武器もなくて山羊羔を裂くやうに裂いて捨てた程、私の力は活々と五體の中を跳りめぐつてゐたのです。

サムソンの母——それだのに七日の間の婚姻の宴會の時……

サムソン——その時あの處女は、立會ひのペリシテ人三十人にそゝのかされて、私が彼等にかけた戲れの隱語の心を私から聞き出して、その三十人に打ち明けてしまつた。エホバのナザレ人なる私はその處女のお蔭で敵人の前に恥をかゝされた。そればかりではない……

サムソンの母——（サムソンの痛く激昻せるを見て）さあもういゝサムソン。過ぎ去つた事を徒らに憤るのは、明日

の事を空しく喜ぶよりも愚かな事なのだ。

サムソン——然し母上、その年の收穫時に私がその處女の家を訪れた時は、その處女は處女ではなかつた。而かも私の誠をこめた愛を踏み躙つたその女は立會人の中の一人に嫁いでゐたのだ。……過ぎ去つた事であらうとあるまいと私の憤りは常に新しい。

サムソンの母——けれどもその女は父と共にペリシテ人に燒き殺されてしまひました。

サムソン——私はその女を私の手で地獄に送るまで生かしておきたかつたのです。母上、あなたは寛大過ぎます。あなたはこの思ひ出でに怒る事が出來ないのですか。サムソンの心はその時から苦い呪ひを以て滿されたのです。神のナザレ人はこんな恥辱に遇つても、神のナザレ人でゐなければならないのですか。私に酒を持つて來い。(侍童躊躇す)——葡萄から搾つた濃い酒を持つて來い。持つて來ないか。さうしてデリラに酌をしろと云へ。あゝ、エホバに祝福されて生れ、私に呪はれて私の肉體の中で悶えるこの力をどうしろと云ふのだ。

サムソンの母——(侍童にさゝやく)デリラをもう暫くこの部屋から遠ざけておいておくれ。お前が酌をして上げておくれ。

侍童退場。

サムソンの母——サムソン。

サムソン——何んです。

サムソンの母——お前は私の一生の願ひを無駄にしはしまい。私は何時死んでしまつてもいゝ。唯私はお前を本當に幸福にして上げたいのだ。お前の曲つた道は一足ごとにエホバの御業を成し遂げる事をむづかしくしてゐるのに、エホバは堅く約束を守らせ給ふのですよ。エホバの約束はいつまでもすたる事はありませんよ。お前が

エホバの重い負債を負ひながら、淵の深味に沈んで行くのを私は唯憐れに思つて泣くばかりです。私が今一人の處女をお前の前に連れて來るから、若しそれがお前の心に適ふなら、その處女をお前の配偶者にしてはくれないだらうか。私はもうお前が強い葡萄の酒に醉ひ倒れるのを見てはゐられない。私は月の光を便りに唯一人ガザに歸つて行くであらう。さうして一人でお前の爲めにエホバに許しの祈りを祈つて夜を明かしませう。サムソン。お前の心が素直になつてエホバと和らぐ事が出來るやうに……私はもう行きます。

サムソン――（急に心和らぎ）母上！　私はあなたを苦しめ過ぎはしませんでしたか。許して下さい。あなたの髮には白髮がふえた。さうしてあなたのお顏には苦勞が深々と刻まれた。こんな不孝な子に私は何故なつてしまつたのだ。母上！　あなたをよく〳〵見ると私はたまらなくなります。あなたは私のたつた一人の母上。

サムソンの母――お前は私のたつた一人の愛兒。

サムソン――私は今夜あなたにお別れがしたくない。

サムソンの母――私に代つてお前を慰めるものがこの部屋に現はれるだらう。お前の老いたる母の祝福を……

サムソン跪き、母祝福を與ふ。母退場。サムソン默したるまゝ沈思、侍童登場。

侍童――濃い酒を持つて參りました。

サムソン――（夢より呼び覺まされたる如く侍童を見）濃い酒を！　それを誰が云ひつけた！

侍童――あなたが。

サムソン――（侍童を見やり）お前は憐れな不幸な奴だ。お前は少し痩せたな。この五年の間忠實に私に事へながら、お前はこの頃サムソンから犬よりも酷く追ひ廻されてゐる。お前はそれを恨まないか。

侍童――私はあなたの影よりもあなたに近いもので御座います。

サムソン――（默したるまゝ侍童の頭を撫で）母上はもう行かれたか。
侍童――はい。
サムソン――さうか。……酒を持つて來たと云つたな。（盆を取り上げ）さあ注げ。……（盃を乾し）さあ注げ。（盃を乾したる後そを捨てゝ更に大いなる盃を取り）注げこれに！　何を躊ふのだ。醉ふのは私が醉ふのだ。お前ではないのだぞ。何を躊ふのだ、注げ……（思ひ出して）デリラはどうした。
侍童――やがて見えられます。
サムソン――（怒、心頭に發して足ふみならし）やがて!?　お前の手から注がれる酒は酒ではないぞ。醉ふ事などが出來るかい。（盃を床の上に烈しく抛つ）

この少し以前よりテムナテの處女登場し、片隅に恐れ〳〵佇み居る。サムソンふとそれに眼をつけデリラと誤りこれに近づく。

サムソン――デリラ！　（人違ひなりしに氣付き）この處女は何んだ。
處女――（跪き）サムソン！　私の聖宮！……若い牡獅子のやうに強く、葡萄の花から集めた峰蜜のやうに惠み深いサムソン。私はあなたの妻の妹で御座います。
サムソン――「あなたの妻」！　私には妻はない。（近づいて處女の顎に手をかけつく〴〵とこれを見やり）お前の美しさは鎖した花園のやうだ。……何んの爲めに來たのだ。
處女――私の姉があなたに背きました時、お怒りになつてペリシテ人の麥畑にあなたが火をおかけになりました。その折の野火で燒け死んだ私の父の命令のまゝに參りました。
サムソン――眞直に云へ。サムソンは廻りくどい言葉か嫌ひなのだ。

處女――父は姉の代りに私を妻に差上げるとあなたに申上げました。

サムソン――お前の姉が私に背いた時、私は收穫時のペリシテの野に火を入れて、お前の家までも燒き捨てたのを覺えてゐるのか。

このあたりよりデリラ登場。帷の蔭に隱れて窺ふ。

處女――尾と尾と結んで、それに炬火を縛りつけた一とつがひづゝの山犬の群れをあなたはペリシテの野にお放しになりました。私は幼いながらによく覺えて居ります。おゝそのすさまじい吠聲！　シュルの沙漠に起る旋風そのまゝの野火の煙。ナイル河の夕燒けのやうな焰の色。身震ひせずにはそれを思ひ出す事が出來ません。

サムソン――その焰でお前の父と姉とは燒き殺されたのだぞ。お前はそれを恨みには思はないのか。

處女――父はペリシテ人に迫られて私の姉をペリシテ人に與へたので御座います。それだのにかの野火が起ると、ペリシテ人は父と姉とを恨んで、その火の中に二人を追ひ込んだので御座います。私はあなたを恨み申すより自分の國の者達を恨んで居ります。鳥の行方も風の來る路も明らかにお察し遊ばす智慧に滿ち〳〵た私の聖宮！　親もなく寄邊もない處女の身を憐れみ下さいまし。

デリラ――（嫉妬に身を震はしながらサムソンを押しのけ、處女に迫り近づき）ダゴンの大神！　この魔性の女の舌を呪はれた蛇のやうに三つに裂いて下さいまし。お前の舌は茵蔯にも增した苦い毒を盛つてゐるのだ。お前がサムソンの妻、神のナザレ人なるサムソンの妻だとかい。

サムソン――待てデリラ！

デリラ――（サムソンに耳傾けず）その貧しげな頭の飾り、その田舍じみた麻衣、その泥に塗れた素足、面帕を知らぬ日に燒けたその顏、沒藥に淨められないその膚、神の呪ひを現はす眼の下のその二つの黑子。お前が神のナ

ザレ人なるサムソンの妻?!（嘲笑）。お前はサムソンには、正しい妻のあるのを知らなかつたのだらうね。（サムソンに向ひ處女を指しながら） 男はあれを初々しさと云つて可愛いゝものに見るのでせう。あのはにかんだ身のこなしに、あの憐れげな眼の表情に、あのおぼこらしい頸筋の曲線に、男は他愛もなく憐れみといとしさとをそゝられるのでせうね。嘘です。僞りです。見せかけです。この頸飾の玉の一つにさへ執着しようとする男心にこんな事を云ふのは無駄ですけれども、この肌の滑らかな陰險な狼は、その心に隱れた陰謀を持たずにゐられませうか。父と姉とを燒き殺されたこの女の膽はどれ程苦しいかを考へて御覽なさいまし。羂を鼻に刺し通して牛を動かす術は知りながら、假初の淫らな抱擁に自分の心の捕へられるのを男は知らずに過してゐるのです。

サムソン――お前はこの處女を罵る事によつて、女の凡てを罵つてゐるとは悟らないのか。

デリラ――（處女に向ひ） サムソンの妻が見たいのかい。さあ御覽！ （誇らしげに處女の前に立ちサムソンを抱く）

處女――ダゴンの神樣！ この空怖ろしい夢から私の眼を覺して下さいまし。

サムソン――（デリラを拂ひ退けて處女に近寄り） 驚くな。怖れるな。女の中にお前があるのは、林の中に林檎があるやうだ。懸崖の匿所に怯ぢ隱れた牝鳩よ。私にお前の顏をもう一度見せろ。さうしてお前の聲をもう一度聞かせろ。お前の聲は愛らしく、お前の眼は美しい。お前こそは女だ、處女だ。あゝエホバ！ 私の全身は若い歡喜にわなゝき震へる。私はお前を死ぬばかり接吻してやらう。（デリラのあるのを忘れて處女に近づき、その手を取らんとして突然立ち佇る）……女……女……女！……行け。高い泉の水は瀧になつて低い谷に落ちる。美しく見える女ほど男を強く殺すものはない。お前の姉もお前に劣らぬ程私の心を喜ばした。お前の姉はエホバの神慮にも叶つてゐた。然るにその女は……神慮に叶つたその女は、始めて女を知らうとする私の心に、口を開いて叫

びやまぬ深い傷を殘しをつたのだ。（突然）行けつ！　（つかみかゝらん計りになり）行け！　私はお前の命を取りたくない。だから私の腕の屆く所から遁れて行け。私の脚は私の怒りよりも更に早いのだぞ。デリラ！　この處女を早く私の眼の屆かぬ處に連れ出すがいゝ。お前自身がサムソンのこの腕で一と塊の肉醬となるのを恐れるなら、雷霆の轟かぬ間に早くこの處女を私の眼から引き放せ。早く……早く。

處女――（屹となつて）祭壇に捧げた贄のやうに、あなたの前に投げ出された、一つの汚れぬ魂をお殺しなさつて……大事な機會をお見過しにはなりませんか。

サムソン――機會?!　弱い人間には一つの機會でも捨て難い寶だ。強い人間は百の機會千の機會も、レバノンの山が落葉の一ひらを思ふやうにも思ひはしない。強い人間はその人自身が機會であるのを知らないのか。早く……デリラ早く……

デリラ――サムソンの御命令はダゴンの大神の命令よりも私には重う御座います。

處女――サムソン……ダゴンの神樣助けて……（デリラ鞭を執つて處女を亂打す。處女動かず。デリラの合圖により屈强の男四五人登場、否應なしに處女を拉し去る）

サムソン――（獨語）女……あの處女はその姉を思ひ起させた。それがあの女に私を牽きつけた。而して又私を引き放さした。あの處女の眼は、純潔を殘りなく物語つてゐる。それが私をわなゝかせる。エホバの御業を現はすべきこの力は私の爲めに空矢のやうに費されるばかりだ。……サムソン！　貴樣は……（自分の髮をかきむしる）……――（ふとデリラに眼をつけて呼びかく）女！　女！　お前は有つて無いものゝやうに私の前に跪かねばならぬぞ。

デリラ從順に跪きてサムソンの足を抱く。

お前は私の足の塵に接吻する氣があるか。

デリラ從順にその爪先きを吸ふ。

好し。それもお前には過ぎた恩惠だ。あの處女はどこに行つた。

デリラ答へず、さめ〴〵と泣く。

泣くな……笑へ！

デリラ泣きながらサムソンを見上げて笑顏を示す。

おゝデリラ。（思はずその微笑に心解けんとせしが、再び激怒を發し足蹴にしながら）永久にエホバの呪ひを受けたエバの末裔、惡魔の種。泣きながら笑ひ得るお前の面皮の裏に書かれた呪ひの字を讀め。お前の虛僞を殘らず捨てゝ仕舞へ。私は虛僞を知らない。私の知らないものをお前が知つてゐるのは僭越だ。（半ば獨白）美しいものを醜くし、大きなものを小さくし、强いものを弱くするのは女の持つて生れた罪業だ。エバのやうに凡ての女は男の力を食んで生きようとする。女の智慧と美しさは、男の知らぬ虛僞と陰謀とを隱した幕屋だ。その幕屋の中から力のない所に釀し出される凡ての不幸は生れ出るのだ。

女よ！　男の笞はお前の額に痛いか。私は女の虛僞と陰謀とを心の奧まで受けたから、それを惡み卑しむ事を忘れてはゐないぞ。あの處女はどうした。

デリラ蹴倒されたるまゝ泣き續く。

泣け勝手に。お前達女等が男の力を引き下げたその罪障の消え去るまで泣き續けるがいゝ。

デリラ――（突然起き上りてサムソンの胸にしがみつきながら）サムソン、サムソン、虛僞はあなたにある。男にあります。かほどまで私をお呪ひになるあなたのお口は、昨日、デリラの耳に、女は可愛いゝと囁いて下さいました。

サムソン――（自分に悄れたやうに）おゝ噺いた。私はたしかに噺いた。私は何時女から虛僞を習ひ覺えたのだ。……さうではない。お前を可愛いゝと思ふのも誠なのだ。いゝや私は女を憎む。憎むのだぞ。（デリラを振り放つて）私の力は女に煩はされなかつたら、どれ程成長したかを私はよく知つてゐる……然し何んと云ふ巧妙なエホバの呪ひだ……女なしには、私は自分の力がどれ程衰へ萎むかをも知つてゐるのだ。

デリラ――それも虛僞です。あなたは一人の女を愛し、一人の女を憎んでいらつしやるのです。一人の女からは力が加はり、一人の女からは力が消えると思つていらつしやるのです。あなたは私を憎んで、たゞ一と目御覽になつたばかりのあのテムナテの處女を愛していらつしやるのです。

サムソン――デリラ……

デリラ――さうです。さうです。あゝ私は何故レバノンの香柏でこの床を造り、ナイルの紅鷺の羽でこの布團を造り、タイルの紫でこの帷を染め、ナルドの香油でこの髮を櫛り、東方の沒薬でこの身を淨め、神に事へる祭女のやうに、私を慕ふ凡ての男から離れて、あなたと幾夜の枕を交はしたのでせう。あなたの力強い腕が、鴿のやうに喜びに戰く私の小さい胸を、あなたのお胸に埋めて行つた時、私の虛僞があなたの虛僞よりも淺薄で小さかつたのを唯私は口惜しく思ひます。男とはあなたが仰しやる通り私より強いものでした。女の科は虛僞のある事ではないのですね。虛僞の小さく弱かつた事なのですね。男の愛にすがらう爲めに、頰に頰紅をさし、頸に珠を飾つたのが惡かつたので御座います。男は大きな虛僞を隱しておいて、小さな虛僞だけを女にお譲りになつたのです。女の名によつて、凡ての女の名によつて私は泣きます。私は戀の爲めには喜んであなたの奴隷とも犬ともならうとしました。いゝえ、さうなるのがあなたの女王となり獅子となるよりも本望だと思ひました。それ程の心盡しをあなたは一と目御覽になつたばかりの處女の爲め

に踏み躙らうとなさいます。戀の爲めに戀をするのが私の命で御座います。それだのに……

サムソン――戀の外に行く道のないのが女の戀の呪ひだ。それが男の力を引き下げる魔の力だ。

デリラ――戀をしながら妄想に耽るのが男の戀の呪ひで御座います。それが女のひとむきな心を凍らせてしまひます。

サムソン――妄想！　神のナザレ人に使ふ言葉を愼しまないで、エホバの冥罰を蒙るなよ。私には虚僞と共に妄想はない。私の力は妄想によつて生れたのではない。妄想の生み出す唯一人の子は妄想のみだ。私は小羔を割くやうに若い牡獅子の顎を割いた。驢馬の腮骨一つを取つて一千人を立どころにほふり殺した。又ガザでお前の家に宿つた時は、城の門を引き拔いて山に移した。妄想がかゝる力を生むと思ふか。私はこの力がエホバのものであるのを堅く知つてゐるのだ。

デリラ――（この間サムソンの言葉に魅せられたる如くサムソンに近づき）おゝその力、その力！　私はその雄々しいあなたのお力にあこがれうめきます。私は矢張り女の中で祝福されたものです。憎まれながらも私はその力にかき抱かれた。……私はどうしてもその力の祕密が伺ひたう御座います。

サムソン――又それを云ふのか。もうやめないか。

デリラ――（氣色を損じて）はい、もう伺ひますまい。あなたがそれを私に敎へて下さらない譯が分りましたから。

（酒器を持ちて立たんとす）

サムソン――待て。お前はまだ私を疑つてゐるのだな。お前のやうに執拗い奴はない。

デリラ――でもあなたは先刻こゝに來た處女の姉に大事な隱語の心を打ち明けておやりになりましたのね。その女はあなたをペリシテ人の前に恥しめようとしてそれを伺つたのでせう。けれども、私があなたの不思議なお

力の祕密を伺つたとて何んの役に立ちませう。私はたゞあなたを隈なく知り盡して滿足したいのです。先程の處女の事を少し思つたゞけでも、私の心は半分血の色を失ひます。私はいつまでも〳〵（云ひながらサムソンに酒盃を渡し酌をなす）あなたの爪先きに口づけする犬でゐたいので御座います。獵の犬はその主人の狩場を隈なく知つて居ります。私があなたのお力の祕密を知りたいと願ふのに何の不思議が御座いませう。女に取つて、移り氣な男の心を握るには、その方の大事な祕密を摑む外には道が御座いません。男の方はさうして女に縛られるのを……暖かく愛の繩で縛られるのを快くはお思ひになりませんか。あなたに些かの愛がおありになるなら、さうして信用がおありになるなら、その位の祕密を漏らして下さるのに、何んの骨が折れませう。あの女は七日の間にあなたから隱語の心をもぎ取つたと云ふのに……死んだ人ながら妬ましい……私はもうあの月が……あゝ、美しい夜になつてしまひました。

サムソン――肉を漁る獸物が山の隱棲を這ひ出る時刻になつた。

デリラ――さうして太陽が月に玉座を讓る時刻になりました。（間）あの燈はゾラの燈で御座いますね。

サムソン――（見入りて）さうだ。ゾラはあすこにあたる。私を生んだゾラだ。……故鄕の名は失はれた戀のやうだ。日が經つにつれて悲しく淸く高くなる。あすこには母上が……（急に母を思ひ出し侍童に向ひ）母上はどうした。

侍童――半晌ばかり前にお歸りになつてしまひました。

サムソン――何、お歸りになつた？　私は何か考へ事をしてゐたと見える。誰がお伴した。

侍童――お一人で……

サムソン――愚かな小豚！　母上一人で、この夜道を……走れ！　お前の罪を償ひ得る程の早さで走つて母上に

追ひすがれ。さうして母上を安全にお護りするのだ。走れ！
　侍童恐る〳〵サムソンに挨拶して退場。
母上は猛き獸に遇はれなかつたか。おゝ母上！　あなたはあすこで唯一人その子が罪を悔いて歸つて來るのを待つてゐられるのですね。ゾラ……ゾラ……私はソレクの河添ひの谷でアダムのやうに自由に育つた。私の夢はあの谷間の風に帆の如く張り滿ち、私の脚はあすこの土の上に檜の如く立ち、その草と木とは私と戲れ、その獸と鳥とは私の爲めに氣息をひそめた。私は先づあの谷間で王であつた。私の力はあすこで生れた。
デリラ――さうしてそのお力を貯へた庫は？
サムソン――お前はうるさい女だ。
デリラ――あなは氣樂さうにお笑ひになつていらつしやる。私の眼からは雨を孕んだ雲のやうに、涙があふれようとして居ります。戀ひ慕ふその方から一つの祕密もつかみ出せない女の弱さを悲しく思ひます。これまであなたは私の願ひを弄んでばかりお出でゞした。乾いた事のない新らしい七條の繩で縛れとか、新らしい索で縛れとか、髮毛七束を機に織り込んだ紐で縛れとか……私が御言葉通りにあなたを縛つて上げても、あなたは日頃よりも强いお力でそれを引きちぎつておしまひになります。男心の酷らしさを誇りがに示すかのやうなその僞りのお言葉……もう私はいつまでも戲れを受けてゐたくは御座いません。今夜こそは屹度打ち明けて下さいまし。
サムソン――お前は執拗すぎる。
デリラ――もつと執拗くして上げても足らないあなたです。……後世かけてのお願ひです。
サムソン――（立ち上つて避けのがれながら）あの月が滿ちてから滿ちるまで、お前は夜も晝も私をおち〳〵寢かし

もせずにせめたてる。お前は私の力の祕密を探り出す前に、力の限りを搾り取つてしまふだらう。

デリラ――(蠱惑的にまつはり附きながら) えゝ仰しやらなければ取り殺してあげます。呪つてあげます。巫女(みこ)の手に渡してあげます。あゝどうすればこの厚い胸の奥に隱れてゐる心臟に、私の愛を教へてやる事が出來るのだらう。(ふら〳〵とよろけサムソンにすがりより) 私は醉ひました。眼が廻ります。助けて下さい。

サムソン――(輕々とデリラを抱きて臥床に寢かし) デリラ。か弱いデリラ！　私は激しい言葉で、お前の弱い花瓣を傷けはしなかつたか。デリラ。私の力はエホバが賜はつたものだ。神の祕密は人に傳へる事が出來ないのだ。分つたか。

デリラ――でも……

サムソン――私はエホバのナザレ人(びと)だ。

デリラ――(皮肉に) あなたが？

サムソン――(笑ひながら) さうだ。エホバのナザレ人は生れてから頭に剃刀(かみそり)をあてないのだ。

デリラ――(暗示を得たやうに勢ひこみ) 剃刀をあてないあなたの髮の美しさ。(髮に接吻する)

サムソン――美しいか。美しいものは力だ。私はこの髮の毛をエホバの御名にかけて大切にせねばならぬ。

デリラ――この細い髮の毛一本々々は本當に力のやうに美しい。(一本を拔かんとす)

サムソン――デリラ！　お前は何をしようとするのだ。(大事に髮を後ろにかき撫づ)

デリラ――(いよ〳〵確信を强めてサムソンにすり寄り)、今こそあなたは私の盾、私の王、私の神、私の凡て(サムソンを抱きて接吻し、臥床に橫はらせ、己れはその端に腰かけ)、私は勝つた、おゝ遂に勝ちおほせた。私はもうテムナテの處女も恐れない。サムソンも恐れはしない。私は凡てあなたのもの。あなたは凡て私のもの。

サムソン――私は眠くなつた。お前は私の眠りを護つてくれねばならぬぞ。

デリラ――お丶私の眼睛、私の心の臟、こ丶にあなたの枕があなたのお頭を待ちこがれて居ります。（自分の膝をす丶める）あなたは私の愛の宮、エホバのナザレ人。

サムソン――さうだ、私はエホバのナザレ人だ。

デリラ――（皮肉な殘酷な笑ひ）女は私の名の爲めに誇るがい丶。あなたはエホバのナザレ人ペリシテ人の怖れなるダンの族の主サムソンね。

サムソン次第に深き眠りに陷る。デリラ竊かにサムソンより離れ、靜かに帷を閉ぢ、極度の誇りと憎しみと喜びとに身を震はす。

デリラ――とう〳〵……とう〳〵……私はお前に勝つてしまつた、私はお前を私一人のものにせずにはおかない。……サムソンが私一人のものになる……胸が、この胸が誇りの爲めに張り裂けようとする。けれども待つておくれ、私にはこれから有り餘る胸の仕事が殘つてゐる。お丶騷ぎ立つ胸よ。最後の凱歌迄口をつぐんでゐておくれ。

デリラ、サムソンの寢息に耳を傾け、窓際に至りて合圖をなす。群伯乙及び丁、兵士夥多登場。

群伯乙――今日が約束の最後の日だが……

デリラ――靜かに！　今日がお約束の最後の日です。さうして私はそのお約束を果しませんでしたらうか。

群伯丁――では……

デリラ――その報酬をもう一度私にお誓ひ下さい。

群伯乙――こ丶に銀五千枚がある。（袋を見せる）

デリラ――さうして……

群伯丁――そのほかに……

デリラ――銀五千枚は乞食にでもお與へ下さい。私の所望はそれのみでは御座いません。サムソンの命を私に與へて下さいまし。さうしてペリシテの人々の前で私とサムソンとを對ひ會つて立たせて下さい。私は黄金の座に、さうしてサムソンは捕虜の座に……

群伯乙――私達はそれを約束しよう。

デリラ――ダゴンの大神にかけて。

群伯乙丁――ダゴンの大神にかけて。

デリラ――（決心し）私がサムソンの後頭の毛を剃り落してあの帷を出るのを御覽になつたら、その時サムソンは赤兒のやうに弱くなつたとお思ひ下さい。

人々默頭く。デリラ化粧臺の中より剃刀を取り出し先づ自分の後頭の髮の毛を剃り試みたる後、ひそやかに帷の中に入る。やがてサムソンの髮一束を左に掴み昂奮して帷を出づ。

デリラ――（獨語）勝ち誇つたものゝ接吻の甘さ！　今になつて私の心は躊ひなやむ。あの神々しいまでに力强いサムソンが捕虜に……私は……私はどうしても勝たねばならないのだ。（大聲を發して呼ばはる）サムソン！　サムソン！　サムソン！　ペリシテ人が攻め寄せました。起きてあなたの力を……力を……（獨語の如く）おゝ力よサムソンを見捨てないでくれ……

サムソン蹶然として帷を破つて出で來る。デリラの手に己が頭髮のあるのを見て野獸の如き嘆聲を漏らしながらもペリシテ人にをどりかゝる。ペリシテ人多勢を恃みてサムソンを組みしく。

群伯乙――サムソンの命を取るな。

群伯丁――サムソンの兩眼に劍をさし通せ。

サムソン虚ろなる大聲を立てゝ白痴の如く呻く。デリラ茫然自失したる如く頭髮と剃刀とを手より落す。

――幕――

第三幕　ダゴン神殿

ペリシテ人の首都ガザに立てる神殿。舞臺前方には大なる入口を持てる石壁屹立し入口より神殿中の大演技場見やらる。至聖所(しきよきところ)には人頭魚尾の海神ダゴンの神像を安置す。その前には海陸の祭物山の如く捧げあり。群集演技場の座席に充滿し、入口の外にも人々集ひ居る。

時は陽春。

甲――(入口の外にて)　それから如何(どう)した。

乙――(同上)それから私はとう〳〵あの女を見ない。

丙――(同上)どんな風をしてゐたの。矢張り妓女(あそびめ)に似合はしい派手な姿でしたか。

乙――人さへ見れば恐れ呪ふやうな顏付をして、衣物と云つては乞食のやうだつた。

甲――(同上)さうだらう、デリラを見返る奴は眼がつぶれ兼ねないのだから。

丙――デリラに情けをかけるとダゴンの大神の罸があたると祭司樣からお觸れがあつたんですからねえ。

乙――手に髮の毛のやうなものを持つてゐたが何んの積りだか……

丁――(同上)それが赤眼のサムソンの髮の毛だ。あいつは今だにサムソンに未練を持つてゐると見える。私が遇

つた時も矢張りそれを持つてゐた。

戊――（同上）餘つ程執着の强い女と見えるのね。

丙――本當だねえ。

甲――けれども髮の毛を切つてサムソンを捕虜にしたのはデリラの功績だと云ふ者もある……

丙――そんな事がありますかね。それ程ペリシテ人を愛する女なら、半年の餘もサムソンの髮の毛を手放さないでゐる譯が分らなくなりますわ。

甲――それもさうかな。第一功績があれば役人もそれ相當の事はする筈だから。

丁――この頃の役人（聲をひくめ）のする事が當てにでもなる事か。何んでもデリラはサムソンを愛してゐたのだが、役人達が、忠義の爲めだ、神の爲めだ、サムソンの力の祕密を探り出せ。かう云つて責めたのだとも云ふぜ。

甲――さうだ、私もそんなに聞いた。さうして甘い汁を自分達が嘗めよう爲めに、功績は自分達の事にして、デリラと云ふ女はサムソンをかくまつておいたから國賊も同樣な奴だと布令させたとか云つてゐたが。

戊――そんな事があるものですが。妓女なぞに忠義が判つてたまるものか。

甲――それもさうかな。

丁――さう一概には物は云へなよ。

乙――兎に角その姿を見てゐるとひとりでに氣の毒になるよ。美しい女だし。

丙――そんなに汚れてゐても……

乙――あゝ美しいと、汚れ位は苦にならない。

丁――私は赤眼のサムソンを見ても何んだか氣の毒になるよ。
丙――本當にねえ。眞紅につぶれた眼をして驢馬と一緒に毎日大きな石臼をひかせられてゐるのですもの。
乙――碌々物を喰はないでよくあんな力が出るものだな。
甲――それは剃り落された髮の毛が段々伸びて來たからだらう。

一同笑ふ。

然しそれは本當にさうありさうな事だ。
戊――さうですともね。
乙――何んでも今日散々見物人の前で見せ物にしておいてから、都の門の所……それサムソンが何時か扉もろとも引き拔いたあの門の所で燒き殺すんだと云ふが。
甲――それもさうありさうな事だ。
丁――祭司や群伯が來るのではないか……遠くでラツパの音がするが……
乙――それに相違ない。私達も中に這入つて見物しよう。
丁――（演伎場を覗き）駄目だ。一杯で足の立て所もありはしない。三四千人もつまつたか知らん。私は屋根に登つて見物する。
乙――それがいゝ。もうあんなに登つてゐる。
丙――私はどうしたらいゝでせう。私には登れません。
甲――女は何處か中に席があるだらう。そこにお出でなさい。

男達は險しき階子を登り、女達は場内に入る。ラツパの聲近く聞こえ、やがて祭司群伯等威儀を整へ登場。設けの座に

つく。

群伯甲――（使者に）サムソンは今日も牢獄の中で驢馬と一體に磨を挽いてゐるか。

使者――仰せの通りに致して居ります。

群伯丙――達者でゐるだらうな。

使者――今日の演伎は勤め得ようと存じます。

群伯甲――それならばすぐ牢獄に行つてサムソンを連れ出して來い。而してダゴンの大神の前に餘興の爲めに演伎を致せと申し付けろ。

使者叩頭し去る。デリラ頭より被を被り窃かに登場。入口の外なる石垣に身を寄せて内部の樣子を窺ふ。

祭司――（もと群伯乙なりし男。ダゴンの神像に禮拜をなし、立ち上りて群集に）ペリシテの男女。老いたるもの幼き者。耳を傾けて聞け。我等の先祖がエジプトの河口から船を乘り出してクレテ島に渡り、更にパレスタインに上陸して威武を輝かし、國々を切り從へて、到る處に我等の都を建て連らねたのは、祖先の武勇忠義も固よりではあるが、ダゴンの大神の冥護によるのを忘れてはならぬ。大神は又その稜威を現はし、我等の屬國ダンの族のものにして、我等の地を荒し、我等の民を害ねたるサムソンを我等に附して下さつた。この後とても、ペリシテの民は大神の守護のもとに永久に榮え行くであらう。我等は今日、この輝かしく闌な春の日を選んで、ダゴンの大神の爲めに國の祭を執り行ふのだ。萬民よ。聲の限り大神を讃め奉り、心の限りその御榮えをたゝへるがいゝ。ダゴンの大神の祭司がペリシテ人にこれを命ずる。

感謝の聲堂をゆする。

群伯甲――（立ち上り）ペリシテの民達に群伯が布令する。聞け。ダゴンの大神の冥護により、我等は我等の敵サ

ムソンの力の祕密を發き出して、彼サムソンを捕虜となし、民達の恐怖を拭ひ去つた。民達は今年から心を安くして野を耕し、牛羊を牧ふがいゝ。さうして喜んで豐かな租税をダゴンの大神の御前に供へ奉るがいゝ。我等の敵にして民達の恐怖であつたサムソンは眼の光を奪はれて、驢馬よりも力なき者になつた。民達は今日彼サムソンが演伎を神前に演ずるのを見て笑ひ樂しむであらう。

ペリシテの民達。ペリシテの群伯が更に民達に警めの言葉を與へる。サムソンをペリシテの國境の中に住はせ、己れの家にかくまひ、これに暖き臥床を與へ、食物と飲物とを供へた、卑しき妓女デリラは、その心を敵に付した罪科によつて、恥辱のあらん限りを味はゝさせん爲めに、ペリシテ人たるの名を奪つてこれを野に放つた。若し彼デリラに道に遇ふものは、民達の好むまゝなる屈辱を與へるがいゝ。さうして國を敵人に賣るものゝ見せしめにするがいゝ。末代まで彼デリラの名を辱かしめるために、歷史はその汚れたる名を忘れぬであらう。

この間入口の外にては遲れて見物に來れる人々デリラのあるに氣付けるは皆侮蔑を極めて唾を吐きかけなどす。デリラ身も世もあらず悶えなやむ。

（小司に）使者はまだ歸らないのか。

小司——先程歸つてこゝに控へて居ります。

群伯甲——サムソンは何處にゐる。

使者——申上げます。サムソンは驕り傲つた態度で出場を拒んで居りまする。ダンの族の拜する神エホバは嫉みの神である。異邦の偶像の前に跪き、又その前に演伎をなすなどはあるまじき瀆れである。さう云ひ傳へろと申し張つて御命令に從はうとは致しません。死刑を以て脅かしましたが、お前の怖るゝものは却つて私の喜ぶ

ものだと申して居ります。

群伯甲――無禮な奴！

「サムソン餘興」「サムソン餘興」の聲かしましく起る。

もう一度行け。さうして如何樣にしてゞも引つ立てゝ來るがいゝ。（小司に）サムソンが來るのを待つ間に定められた餘興を進めろ。

餘興始まる。やがて「サムソン〳〵」の呼聲の中にサムソン登場。髮ふり亂し、穢き囚衣を纏へるまゝ少年に手を引かる。全く盲目。殆んど同時にサムソンの母、四五人のダン人に伴はれて入口の外に登場。デリラ影の如くその人々を避く。

サムソン――（祭司群伯の前に出で）盲ひた者には東明（しのゝめ）の瞼の開ける方（かた）も、夕日の影の沈んで行く方（かた）も唯一つだ。ダンの族の主（しゆ）、エホバのナザレ人なるサムソンが、ペリシテ人の祭司群伯に挨拶を送る。（わざとあらぬ方に向いて辭儀す。笑聲起る）

群伯甲――ダゴンの大神の冥罰によつて盲ひとなつた捕虜（めしうど）なるサムソン、先づダゴンの大神の祭壇に向つて拜を致せ。

サムソン――（始めて群伯の方に向き直り默禮す。群集より拍手起る）始めて使者が迎へに來た時、サムソンは自分の力を危ぶんでゐた。それ故ダゴンへの禮拜も演伎（たはむれ）をも恐れたのだ。今サムソンは自分の力に對して自信を得た。（その自信を確める如く長く延びたる後頭の髮に觸れて見る）誠こそは力だ。サムソンの首がダゴンに對して折れ曲つた時、サムソンの胸に宿つた誠が何を拜しゐたかエホバは知ろし召すであらう。

「サムソン餘興」の聲起る。

ぺリシテ人の中には劍の舞をするもの、假裝の舞をするもの、物眞似をする者、唱歌をする者、竪琴と笛とを合せるものがあると聞いた。……サムソンは力の舞をして見せよう。我等の神エホバがペリシテ人の手からダンの族を救ひ出さん爲めに、サムソンに賜はつた聖なる力を振ひ起して、力の舞をして見せよう。(間)(群伯の方に向ひ) 狼もその子を哺む事を知り、毒蛇もその子を庇ふと聞いてゐる。サムソンが演伎をすると聞いて、その母が尋ねて來たと、この侍童が私に告げ知らせた。一期の思ひ出にサムソンが老いたる母に會ふのを拒みはしまい。(答なし) 許すとも許さぬともないのか。それではサムソンの思ふがまゝにするぞ。

　サムソン侍童に導かれて入口の外に出で來る。母これに近づく。

サムソン――(手を延ばして母を撫でまはし) これが母上か。あなたの獨子を御覽下さい。サムソンはエホバの答を存分に受けました。泣かないで下さい。あなたの涙の鞭は私に痛過ぎる。エホバの御業の祕密を、私は偶像を拜するわが族の敵人におめ／＼と漏らしてしまひました。さうしてエホバの惠深い賜物なる眼の光を失つてしまひました。母上をさへ今は見ることが出來なくなりました。私はもう一度見たい。母上が二度までも「不思議」と名乘る天の使にお遇ひになつて、私が生れた時、私を神のナザレ人に育てあげる爲めに、凡ての愼しみを守り、私の髮を御告のまゝに大事にして下さつた。そのサムソンがこんな姿になり果てようとは思ひも設けなさらなかつたでせう。悔い改めるものゝやうに髮をふり亂し、麻の衣をまとつたこのみじめな男を見て下さい。

サムソンの母――サムソン! サムソン! お前は私の獨子……私の唯一つの慰め……

サムソン――痛い! 私の心は痛む。……私は力を覺りました。然しその力をどう用ひればいゝのか。今の今まで知らずに過してゐました。私は蹉きました。倒れました。神に背いて神の力を幾度邪まに使ひましたらう。力強いが爲めに却つて弱く、氣高いが爲めに醜かつたのだ私は。……今までの私の經て來た道を考へて見ると行

く所を知らぬ風のやうでした。シュルの沙漠に立つ旋風でした。又シナイの嶺に生える荊棘でした。私のエホバに犯した罪は深い。私の心は奥底から悔悛の爲めに悶えなやみます。敵人が私の眼をつぶさずとも、私の涙はこの眼を盲ひにしたにちがひありません。

私は脆くも神の力を女に賣りました。私の眼の光は覿面に消されました。あゝ光。エホバが天と地とを創られた時、眞先に生み出された神の慈子なる光が奪はれた時のサムソンの悲しみを誰が知り得よう。母上。その時私は恐れ戰いてエホバから逃れようと藻搔きました。然しエホバの運命は呪ひのやうに執念く私を離れません。譬へば水を雲につみ搭載せ、電光の雲を散らす祕密を知り盡すともエホバの御心は更に知り難う御座います。母上、あなたはこれ程までに成り果てた私を見て、エホバの約束をお疑ひにはなりませんか。

サムソンの母――私はそれを疑ふ事が出來たらと思ふのだ。さうしたら私はこんなに苦しみはしないだらう。お前の曲つた道は一足ごとにエホバの御業を果しそこねて行かうとするのに、エホバは露ほども約束を曲げようとなさらぬ。私はエホバの重い債目を背負うて罪の深みに沈まうとするお前を見て憐れさに泣くばかりです。

サムソン――母上！

サムソンの母――けれどもお前は恐れてはいけない、迷つてはいけない。お前の氣息の絶えぬ限りお前はエホバのナザレ人です。私は敬ひを以てあなたの前に跪く。

サムソン――おゝ母上！　大事な母上。（決心せる如く侍童を招きて、母と侍童との肩に手をかけ）　母上、三人の義人の祈る所にはエホバは必ず耳を傾けて下さると云ひ傳へてあります。神が祈りを聽いて下さるかどうか、私の爲めに祈つて下さい。

三人祈る。演伎場の中よりは「サムソン〳〵」の聲聞こゆ。サムソン決　を示して立ち上る。

サムソン――母上！　私は知りました。知りましたこの力の何んであるかを。エホバは私を見捨て給はぬ。サムソンはサムソンになつた。私は牡獅子のやうに振ひ立つ力を心に感じます。こゝは敵人の間です。安全な場所ではありません。私の演伎を母上が見られるのも私は忍ぶ事が出來ません。そこにゐるダンの人達！　私の母を私の牢屋の近所まで連れて行つて貰ひたい。

サムソンの母――お前は人々の前に見すぼらしく見える。これは私がお前の爲めに縫つた白絹の上衣です。お前にはその雪のやうな色は見えまい。けれどもこの滑らかさを觸つて御覽。

サムソン――(涙ぐみ) これは王が着るにもふさはしい上衣です。私にそれを着せて下さい。

母それを着せる。同時に髮を撫でつけんとし、

サムソンの母――おゝお前の後頭の髮は元のやうに延びた……

サムソン――しつ！　(母の言葉を遮る)　私は自分自身の力を、しつかり知つてゐます。私は母上を恥しめますまい。

サムソンの母――お前はそれを知つてくれた。私はエホバに感謝する。サムソンそれでは別れませう。

サムソン――エホバの裕かな祝福をお受けなさいまし。

母、ダンの人々と退場。サムソンいつまでもその去りし方を向きて跫音に耳傾けながら佇立する。デリラ突然サムソンに近づく。

デリラ――サムソン！

サムソン――(間) デリラ！

デリラ――おゝサムソン！　私をかこむ盾、私の宮！　あなたは私の聲を忘れずにゐて下さつた。

サムソン默したるまゝ點頭く。

憎しみの爲めに覺えてゐて下さつた。私は嬉しい喜ばしい。

サムソン——私は憎んでゐはしない。

デリラ——憎んで下さい。呪つて下さい。打ちすゑて下さい。踏み躙つて下さい。私はあなたを裏切りました。盲ひにしました。それを思ひ出して下さい。私のこゝにゐるのを見て下さい……こんな哀れな姿になつて。おおあなたの眼は……

デリラ狂氣の如くサムソンににじりよる。サムソンはたとデリラを地に打ち倒す。

サムソン——（暫くの間憐憫に滿ちた面持ちにて佇みたる後）女よ！

サムソン侍童に伴はれて入口より入り、鐵槌を取つて演伎をなす。やがてその鐵槌を放げ捨て、

サムソン——疲れた。さうして渴いた。

祭司祭壇より杯に葡萄酒を持ちてサムソンに來る。

祭司——こゝにダゴンの大神の供物となつた葡萄の酒がある。愚かな心にこれを瀉ぎこんで智慧に目ざめるがいい。

サムソン——あなたは誰です。

祭司——ダゴンの大神の祭司だ。

サムソン——サムソンの眸が輝いてゐた時には心が盲ひだつた。眼が醜く光を失つた今、サムソンの心の眼はエホバの御心をも見る事が出來る。ペリシテ人が永い歲月の間ダンの族を虐げなやましたその罪をダゴンの祭司は今サムソンの前に悔い改めねばならぬ。

祭司——祭司はサムソンに慈悲を施してゐるのだ。お前の神エホバは慈悲の行ひにも悔悛を求めると云ふのか。

サムソン——一杯の葡萄酒で黑く染まつた靈魂を洗ひ落す事が出來るとあなたは思ふのか。それが出來るか出來ないか、酒造りの主に聞いて見るがいゝ。

祭司——渇くと云ふのなら、虚ろな言葉を吐く代りにこれを飲むのが賢い事だ。

サムソン——サムソンはお前の杯からでも飲まう。聖められたものには凡てのものが聖くなる。

サムソン杯を受ける。祭司座に復す。

春になつた。さうして去年の秋の葡萄は暗い窖室に醸されて酒に變つてゐる。エホバの御惠みを感謝して飲まう。(杯より飲む)……(侍童に)私にお前を觸らせてくれ。お前はこの五年の間、困難にも、試練にも、私のさもしい墮落にもお前は渝る事のないサムソンの伴侶であつてくれた。サムソンはそれを嬉しく思ふ。サムソンの祝福を受けてくれ。(その額に接吻する)私はお前をこの汚れた場所から離れさせてやりたいが、私の哀れな眼はそれを許さない。……さうではない、お前は矢張りこゝを去るがいゝ。お前の命は脅かされてゐる。

侍童——私は死ぬまであなたと一緒に居りたいので御座います。

サムソン——お前はサムソンと一緒に殘つてゐても構はないと云ふのか。

侍童期する所あるが如く點頭く。

サムソン——お前の暖い心は、沙漠のやうに荒れ果てたサムソンの生涯に求め得た唯一つの寶だ。この殿堂には大屋根を支へる二本の柱があると聞いた。サムソンをそこに導いて休ませてくれ。

少年に導かれて柱の間に行き、暫く佇みて祈れるものゝ如くなりしが、やがて兩腕を柱にかけ、生れ代れる如き猛威を振ひて大いに呼ばはる。

サムソン――ペリシテの祭司、群伯、凡ての男と女等よ。我等の神エホバは今こそこの僕(しもべ)によりてその憤りを現はし給ふのだ。死の呪ひは石より重くお前達の上に下るであらう。サムソンは今神に上げられる。サムソンと諸共(もろとも)にお前達は行くべき所に行かねばならぬのだぞ。エホバ！　私を覺え給へ。エホバ！　私を強くし給へ。

群集事の急を悟つて右往左往すれども皆徒らなり。デリラ狂氣の如くなりて入口より駈け入り侍童と共にサムソンの足下に跪き伏す。サムソン強く柱を押す。柱軸かたむき倒れ、殿堂の一時に崩れ落つる大音響。群集の大叫喚。

――幕――

（一九一五年九月、白樺所載（未定稿））
（一九一九年十月、完稿）

聖餐

――われ誠に爾等に告げん。天の下いづくにても此福音の宣傳へらるゝ處には、此婦のなしゝ事もその記念の爲めに宣傳へらるべし。……（馬太傳）――

場所――ユダヤ

人――イエス・キリスト
ペテロ
ヤコブ
ヨハネ
イスカリオテのユダ
その他の弟子
シモン――マルタの良人
ラザロ――マルタ及びマリヤの兄
パリサイ人甲及び乙
パリサイ人の弟子
その他

マルタ――シモンの妻

マグダラのマリヤ――マルタの妹

その他

時――紀元三十年より三十二年

エルサレム神殿の前の廣場。石確なるその廣場の一部。右手寄りには神殿の階段見え、前面の堅固なる低き石欄の彼方にはヨルダン兩岸の磽确なる砂原を越えて、空際にモアブの山脈を見渡す。

幕張りの祭（秋の收穫をエホバに感謝する祭）の終りたる日の翌朝昧爽。

大祭に地方より參詣に來りし人々神殿に拜をなして各〻家路に就かんとし、早朝にも似ず多少の往來あり。

イスカリオテのユダ石欄に倚りて考へ居る。

暫くして舞臺の左方喧騷になると思ふ間もなく、美しき寢衣を纏ひて髪振り亂したるマグダラのマリヤ、羅馬の兵卒、パリサイ人、その他市民に取りまかれ、抵抗しつゝ登場。

パリサイ人甲――こゝまで來てもなほいさくさ云ふのか淫（みだ）らな女め！　さああの階段（きざはし）を登るのだ。（マリヤを突き飛ばす）

パリサイ人乙――こつちではないそつちに行くのだ。（又マリヤを突き飛ばす）

羅馬の兵卒――さう亂暴をしてはいかん。マリヤ。お前ももつと素直（すなほ）に歩くがいゝ。

マリヤ――私を何處に連れて行かうと云ふのです。

パリサイ人甲――行けと云ふ處に行けばいゝのだ。

パリサイ人乙――言譯は……

マリア――私は言譯はしてはゐません。放して下さい。私は家に歸ります。

パリサイ人乙――お前のしてゐた事を考へて見るがいゝ。こゝはエホバの神殿だぞ。

突き飛ばし〳〵パリサイ人、兵士、マリヤ階段より退場。後ろに跟き來れる市民達兵士によつて階段より逐ひ退けらる。

甲――あの女は惡い女だ。散々懲らしてやるがいゝ。

乙――どうしたと云ふんだ、私はゴラニテスの者で途中からくつゝいて來たんで様子が判らないが……

丙――何。此の頃は此の都によくある事だが姦淫を犯してゐる所を見つけられたのださうだ。

甲――然しあの女は全く身持の惡い奴なのだ。私は近所に住まつてゐるものだが、見れば眼のけがれ、聞けば耳のけがれとなるやうな事ばかりしてゐるのだ。あの女は。

丙――然し貧乏でゞもあれば……

甲――あの寢衣を見るがいゝ。あの女は羅馬の士官達や、サドカイの富豪に操を賣つてしこたま贅澤に暮してゐるのだ。

乙――ふむ、贅澤にね。女といふものはいゝものだな。

イスカリオテのユダ人々に近づく。

ユダ――あの女は何處の女だ。

甲――（しげ〳〵とユダを見て）お前さんはあの神の御子なるイエス様のお弟子ですね。あれは羊の門のそばのベテスダの池ね……いつだつたか、イエス様が三十八年盲だつたといふお爺さんの眼を癒して、學者やパリサイ人と大議論をなさつたあすこの近所にゐるんです。兎角あの池のやうな奇蹟の行はれる土地の近所には、あゝ云

つた女が巣を喰つて困るんです。

乙――だがあの時は不思議だつたな。

甲――今考へてもあの奇蹟には身の內がぞつとするよ。

丙――どんな事が持ち上つたのだ。

甲――持ち上つたと云つて、あすこは……お前さんは知つてゐまいが、天の使が天から降つてその池の水におさはりになると、ぶく〳〵と泡と湯氣とが立ち昴るのだ。その時を見すまして第一番にその池に飛び込んだものは、どんな難病でも卽座に治つてしまふのだ。

乙――そこには癩病人と云はず、瞽盲と云はず、跛者と云はず、衰へた者と云はず、氣味の惡い程うよ〳〵と集まつてゐて、呪文を稱へながら天の使のお降りを待つてゐるのだ。……それが癒るたんびにお賽錢をたんまり神殿に上げるから、云はゞあすこは祭司達の金山のやうなものだ。

丙――イエスと云へば私の所からヨルダン川をへだてゝ遠くもないナザレと云ふ村の大工の息子ださうだが……

甲――ダビデは羊牧ひだつた。サムソンは百姓だつた。大工だらうが何んだらうがイエス樣は今は生神樣だ。

乙――さう話をわき道にそらしちやいけない。そこに瞽盲で三十八年も池のそばに辛抱して天の使のお降りを待つてゐた爺さんがあつたのだ。何しろ眼は見えず、體はきかず、そら今だと云ふ時でも立ちおくれてしまふのだ。

甲――その歎きをイエス樣が御覽になつて、「起きるがいゝ、さうして床を上げて歩いて御覽」と仰しやると、どうだ……その三十八年間風雨にさらされて、エジプトのミイラのやうになつてゐた爺さんの眼が開いて、歩き出したのだ。私は怖れの爲めに顏を地面に埋めてしまつた。

丙――そんな惠み深い事をするイエスを何んで又學者やパリサイ人が責め立てたのだ。

乙――あゝ樂に病氣が癒つては、祭司の懷ろにお賽錢が這入らないからな。

甲――さうではないんだ。安息日にイエス様があんな奇蹟をなさつたからだ。安息日はエホバの大神ですらお休みになる日なのだ。安息日に働いてならぬといふのはこのユダヤの國の堅い御法度だ。それをイエス様が平氣でお破りになつたからいけなかつたのだ。……私もあれは學者やパリサイ人の云ふのが正しいと思つた。

乙――けれどもあの時イエスは何んと仰しやつた。「わが父なる神は今に至るまで働き給ふのだ。だから私も働くのだ」と仰しやつた。

ユダ――お前達にはまだ本當にわが主の御心が判つてゐない。學者やパリサイ人はイエスがやがてユダヤの王となつて、あの暴逆なヘロデ王(この時聲をひそめ)を倒し、高慢な羅馬人を國外に追ひ出し、このユダヤを世界一の國になさるのを恐れてゐるのだ。その時になると、祭司も、學者も、パリサイ人ももう用はなくなるのだ。その時にはお前達が祭司や學者の座に坐る事が出來るのだ。ヨルダン河の向岸で我が主が說教をなさつた時「心の貧しき者は幸なり。天國は卽ちその人のものなればなり」と仰しやつたのを覺えてゐよう。お前達は心の貧しい人達だ。さうして天國とは、やがて我が主が知ろし召すユダヤ王國の事なのだ。

甲――「哀しむ者は幸なり。その人は安慰を得べければなり」とも仰しやつたと云ふ事だ。

ユダ――その通りだ。我が主は又牢屋の中にゐた洗禮のヨハネに言葉を送つて「瞽盲は見、跛者は歩み、癩病人は潔まり、聾者は聞き、死にたるものは復活され、貧者は福音を聞かせらる」とも仰しやつたのだ。貧者は福音を聞かせられるのだ。祭司や學者は聞かせられないのだ。

丙――それは本當にいゝ福音だ。

甲――若しそれが本當なら、私は迷はずにどこまでもイエスの後に跟いて行くが……

ユダ――迷ふ事はない。私を見るがいゝ。主の十二人の選ばれた弟子の中十一人までは主と同じ國のガリラヤ人だが、私はユダヤのカリオテの生れでありながら進んで主に從つたのだ。お前達も心を空くして主に從ふがいい。やがてお前達は天國に於て大なる者となる事が出來るだらう。
丙――あなたは何んと仰しやるのです。
ユダ――私はカリオテの生れだからイエスの人々からイスカリオテのユダと呼ばれてゐる。
乙――イスカリオテのユダ……あなたのお名は立派な響きを持つてゐます。
ユダ――私は然しイエスの人々の會計役をしかしてゐないのだ。
乙――それはいゝ役目ではありませんか。
ユダ――神の命じ給ふものに惡いものはない。私の預つてゐる金袋は常に貧しい。然し私は仕事をどう成し遂げて行くべきかを知つてゐる。神を信ずるものは逸つたり急いだりしてはならないのだ。……だが神殿に參詣する人達が大分疎らになつた。幕張りの祭は昨日で濟んだのだつたな。
丙――さうです。祭も七日間無事に濟んだから、今朝は起きぬけにもう一度お名殘りのお詣りをして國の方に歸らうと思つて町の中を歩いてゐるとあの騷ぎに出つくはしたのです。
ユダ――あの女はどうも見た事があるやうに思ふが……
甲――あの女は頭の髮の豐かで長いのが自慢で、美々しく粧つた上にいつでも髮を後ろに垂れてゐるから一度見た者は忘れません。
乙――それでなくてもあの女は何處か男の心をぐん〳〵と引き付ける所を持つてゐる。あの眼でぎゆつと見こまれたら男の心はすくんでしまふに違ひない。

ユダ――あの女はエルサレムの生れだらうか。

甲――マグダラから來たんです。名はマリヤと云ひます。

丙――イエスのお母さんと同じ名前だ。

乙――さうか。

ユダ――さうであつたか。それで分つた。我が主は人々の迫害を避ける爲めに三度マグダラの方に行かれた事がある。その時……さうだその時に違ひない。わが主が立つて說教をされる度毎に、あの女は遠くの方にゐて、主をさげすみ果てた眼付で、睨むやうにして見詰めてゐたのだつた。

甲――あの女は近頃エルサレムに來たのです。元は何をしてゐた女だか誰も知りません。

ユダ――あの女なら私が知つてゐる。あれはマグダラにゐる時から生れ付いたやうな妓女(あそびめ)だつたのだ。イエスの人々の中にも、あの女の爲めに信仰を失つて墮落したものが數多くゐたのだ。イエスは或る時弟子達を集めて女を見て心を動かすものは姦淫を犯したも同様だ。そんな人達は見る眼を失つて瞽盲(めしひ)になつた方が幸ひであるかも知れない、と激しいお言葉で警(いまし)められた程だつた。それ程人々を迷はしたのがあの女だつたのだ。

乙――全くあの女はどんな罪でも犯しさうな奴だ。けれどもその顏を見てゐると唯もう吸ひ寄せられてしまふ。

甲――モーゼの律法(おきて)に從つて石で打ち殺していゝ女だ、全く。私が老年であの女を相手に出來ないから云ふのではない。

丙――どうしてあんな女は……淫(みだ)らな事を平氣でする女は奇妙に男を牽きつけるのだらう。

ユダ――女は女だ。エバの末裔(すゑ)だ。毒蛇(まむし)が絶えずその踵に牙を立てゝゐるのだ。お前達はそれを憎まなければならない。私は女に牽き付けられた覺えがない。私はそれをエホバに感謝する。

乙――そんな事が出來るものでせうか。
ユダ――私には出來る。少くとも女のする事を見て見るがいゝ。我が主は女の人達から特別の尊敬を受けて居られるけれども、母上のマリヤに對してさへ「私はあなたと何んの關係もありませんよ」と云はれたのが一度や二度ではない。女のする事云ふ事は何時でも私を不快にさせる。理窟もなく盲從するか、理窟もなく反抗するか、女にはその二つの道の外にはないのだ。
丙――ではイエスはあの女の爲めにひどい目に遇つた譯ですね。
ユダ――さうだ。優れたいゝ弟子達が少からずあの女の爲めに主を裏切つたのだ。
甲――ではあれはイエス樣がユダヤにいらつしやるやうになつたので、マグダラからエルサレムにやつて來たのかも知れませんね。
ユダ――私もふと今さう考へてゐた所だ。私はこれから神殿に行つて……
　ユダ神殿に這入り行く。
甲――（後を見送りて）あの人はイエスの高弟でありながら平氣で神殿に這入つて行つたが、パリサイ人にでも殺されはしないだらうか。
乙――さあ何んとも云へないが……然しあれはいかにも男らしいはき〳〵した人だな。女にふり向きもしないと云ふのもあの人の口から聞くと尤もらしいな。
甲――變だな、神殿に……誰か祭司の中に親類でもあるのかな。
丙――こゝにいつまでかうやつてゐてもきりがない。私はこれからお參りをして國に歸るとしよう。
乙――どれそれでは私達も歸つて朝飯でも食はうか。

甲――つまらぬ事に暇を潰した。今日も亦この脂氣のない骨をがつ〳〵云はせて働かなければならないのか。エホバに十分一稅を納める。ヘロデ王に納める、羅馬に納める。あとには自分に納める稅がなくなつてしまうわ。

丙は神殿に、甲乙は舞臺下手に向つて去る。ユダやがて二人のパリサイ人と共に登場。

パリサイ人甲――私達はイエスの弟子などには用はない筈だ。

パリサイ人乙――何んの爲めに押し切つて神殿へ這入つて來たのだ。

ユダ――あなた方が血迷つてゐる、それを知らせて上げる爲めです。

パリサイ人甲――お前こそ自分の血迷ひを省みるがいゝ。ユダヤの國はお前の主とあがめる卑しい大工の子のために搔き亂されてゐるのだぞ。モーゼがシナイの山でエホバから蒙つた律法も何も踏み躪られてゐるのだぞ。

パリサイ人乙――私達も始めは彼奴が、羅馬人に媚びへつらつて、口先ばかりの哲學と、奢りを極めた日暮しで、國の運命などは夢にも考へて見ないサドカイ人等に反抗し、ユダヤのために、救主なる神の子の降臨のために、一かどの働きをするものと思ひ違ひをしてゐたが、それは紅海の蜃氣樓のやうに空賴みな事だつた。

パリサイ人甲――空賴みだつたばかりか、イエスは私達パリサイ人を目がけて惡罵の限りを盡してゐるではないか。「災ひなるかなパリサイの僞善者共」さう彼奴はほざくのだ。お前はその弟子であるのだぞ。お前は誰の前にゐるかを考へて見るがいゝ。

ユダ――けれどもあなた方はわが主のまはりにわが國民がどれ程の熱意で吸ひつけられてゐるかを考へて見ないのですか。

パリサイ人甲――そんな賤民共がどれ程の數にならうとそれを怖れるパリサイ人と思ふか。

ユダ――然しユダヤの國民はパリサイ人の中に救主なる神の子を見出さずに、イエスにそれを見出したと云つて、

凡ての希望をイエスの上においてゐるのです。

パリサイ人乙――そんな理不盡な事はない。

ユダ――理窟よりも事實だ、大切なのは。あなた方の前には日の光のやうな事實があるのです。それを見過すものは亡びの道を行くものです。……まあお聞きなさい。あなた方パリサイ人は正義の味方であり、愛國の志士ではありませんか。ユダヤを羅馬人の壓制から救ふ爲めには、あなた方の血を流しても、命をしぼり出しても悔いない方々ではありませんか。あなた方が少し智慧を働かして我が主をあなた方の味方にさへすれば、ユダヤの民心はその瞬間に統一が出來るのです。さうしてダビテの時のやうに、ソロモンの時のやうに、いや、それより以上にユダヤは世界の前に輝く事が出來るのです。羅馬にはもう腐敗の種がおろされてゐる。羅馬は今その繁榮の頂天にゐるのです。滅亡の惡魔はその足許に這ひ寄つてゐます。

パリサイ人甲――然しイエスはパリサイ人を惡魔のやうに憎み始めてゐる。私達とイエスとを繫ぐべき橋の橋桁は落ちてしまつたのだ。

パリサイ人乙――今は唯二つの道が殘つてゐるばかりだ。パリサイ人が倒れるか、イエスが死ぬか……

ユダ――ユダが兩方を生かして見せませう。イエスの十二人の弟子の中私だけが唯一人のユダヤ人です。私は神によつて立てられて、ガリラヤとユダヤの橋にならねばならぬのを感じます。

パリサイ人甲――それでは私達の誇を傷つけずに、イエスと和らぐ道があると云ふのか。

ユダ――ない事はない。例へば我が主の前に、先刻あなた方が神殿に引き立てゝいらしつたあの姦淫を犯した女を連れて行つて御覽なさい。主は何物にも增して正義を尊ぶ方だから、その女を惡魔の如く責め呪はれるに違ひない。その點で既にあなた方とわが主とは結び付く……あの騷ぎは何んだ。

この時、石欄の下方にて群集の叫び聲「キリストなるイエス」「ユダヤの救主、ユダヤの王」「もう一度あなたの祝福を」「私にも近寄らして下さい」「貧しいものを惠んで下さい」「私の病を治して下さい」など、夥しき男女の聲聞こゆ。

ユダ――(石欄のほとりに歩み寄り見下ろして)我が主が又神殿にお詣りになる。あの哀れな人達は。ユダヤは思ひの外不幸な人達に滿ちてゐる。來て御覽なさい、我が主の人望を。

パリサイ人甲――お前の主は何をしに又こゝに來ようとするのだ。

パリサイ人乙――又祭司やパリサイ人を衆人の前に辱かしめようとしてだらう。

ユダ――あなた方が心を頑なにしてをられるからそんな結果になるのです。もつと空しい心で我が主を見て御覽なさい。それは無垢な小羊のやうに柔和な方なのです。柔和過ぎる位柔和な……(下を見て)人々のあの喜びの顏! まるで氣違ひだ。子供は踊つてゐる。さうして婦は泣いてまでゐる。あれを見てゐると滅多に動かぬ私の心までが、不思議にも搖ぎ動かされる。天國が近づいたのだ。義人がエホバの前に高められる時が來たのだ。

この時廣場の隅に坐し居りし病人達、神殿より走り出でたる丙その他、石欄によりて下を見んと爭ふ。

丁――あすこにペテロが……主に押しよせる人波を防ぎかねてゐる。

戊――それあれが主の愛する勇ましいヨハネだ。女のやうに美しく若いが、あれが雷の子と主に名づけられたヨハネだ。

丙――どれ〳〵、どれがヨハネだ。

戊――それあすこに、ヤコブの側に、母を背負つて階段を登つて來るあれがヤコブ、その側にゐるのがヨハネだ。ヤコブの弟なのだ。

丙――あの騷ぎはまるで一揆のやうだな。

丁――一揆どころか、まるでシュルの沙漠の旋風(つむじかぜ)のやうだ。

病者甲――おゝ我等の神エホバ！　救ひの日を私にもお見せ下さいまし。

病者乙――（介添の者に）今日こそは私を主の側まで連れて行つてくれ。さうしてその裳に觸(さは)らせてくれ。

ユダ――もう主は表門の所まで來られた。（パリサイ人等に）人々は有頂天になつてゐます。あの狂暴な様子では

あなた方にどんな失禮をしようとも限らない。暫く神殿に避けてゐて下さい。私が機を見て……

乙走りて入場。パリサイ人等退場。

乙――（ユダに）あなたの主がこゝに來ますよ。私も說教を聞かうと思つて途中から引きかへしたのです。

ユダ――お前も私に力を貸してくれ。主のまはりにあまりひどく人だかりがしないやうに。（病者達に）おいそこにゐる病める者達、お前達は我等の主イエスを煩はし過ぎないやうにしてくれなければいけないぞ。もう少し先方(むかう)に行つておとなしく坐つてゐてもらひたい。

病者等構はずイエスの來らんとする方にうごめき寄らんとす。

ユダ――聞き分けのない人々だなお前達は。食ひ飲みには食ひ飲みの時がある。病の癒えるには病の癒える時がある。さうせき込んではいけない。

乙に手傳はして病者等を階段の隅に追ひやらんとす。この時イエス弟子達及び群集と共に登場。ユダ、イエスに近寄る。

ユダ――我が主！

イエス――ユダか。今朝はあなたがゐなかつたので、何處に行つたかと噂してゐた。私の周(まは)りにはもうあの通り人々が追ひすがつてゐる。

ユダ――あまりに思ひやりのない人々です。おゝペテロ、ヨハネ、お早う。少しこの人達に退(ど)いて貰はうではな

いか。

ペテロ――さうせめ寄せては我等の主はお話も出來はしない。もう少し離れて貰ひたい。

ユダ――お話が聞きたければ……（病者の近寄るを見）お前達はあすこに行つていゝ機を待てと云つて置いたのに何故云ふ事が分らないのだ。

群集のやゝ靜まれる時、大勢の子供達跳りさわぎながらイエスに近寄る。

ユダ――（子供達に）うるさい奴等だ。聞き分けのない者達だ。お話も分らない癖に。お前達は後ろに行つてゐるがいゝ。（强ひて子供達を追ひやらんとす）

イエス――（子供達をかばひて）そのまゝにしておけ。おゝお前達は、今朝は少し寒くはないか、早くから起きて來て。（頭を撫でゝやりながら）本當にお前達は天國にゐる人々のやうだ。ユダ、私達は生れ代つてこの子供達のやうにならなければ、天國に行く事は出來ない。さうではないか。（人々に）あなた方はこの小さな人々の一人でも賤しめる事がないやうしてほしいと思ふ。この子供達が一人でもあなた方の行ひで惡くなれば、それは天に在すあなた方の父の御心を苦しめるだらう。

イエス子供達と共に小高き石の上に坐す。子供の一人が持てる木の枝を取りて弄びながら、

イエス――さてあなた方は何を私に求めるのだ。

諸々の聲
――淨めを與へて下さい。
――私の眼を癒して下さい。
――ダビデの子キリスト樣、早く御國を來らせて下さい。
――私はなやみ苦しみます。福音を聞かせて下さい。

ペテロ――さう一度に云はずに一人々々云つたらよからう。

パリサイ人甲乙その他纔かに群集にまぎれて聞きゐる。

一人の男――主よ聞いて下さい。私は勞働者です。私の妻は十三年血漏を病んで臥たきりで御座います。私は朝から晩まで勞役に苦しんでゐます。子供は饑ゑに泣いてゐます。どうすればいゝのですか。

イエス――勞役して、重荷に苦しんでゐるあなたは私に見習つてくれるがいゝ。柔和にへり下つた心で私と共に軛を擔ひ分けてくれるがいゝ。空の鳥には巢がある。野の狐には穴がある。然し人の子なる私は枕する所さへない。けれども私の軛は易く、私の荷は輕い。私は私の喜びをあなたにも分けてやりたいのだ。神は私にあり、私は神にある。それで十分だ。私は何物をも持たないけれども凡ての物を持つてゐる。私はこの命を感謝せずには生きる事が出來ない。それが私の軛だ。……然しあなたは日用の糧にも不足してゐるのだらう。ユダ、あなたの財布には金があるだらうか。（一人の男にユダを指し）この人が私達の會計を司つてくれてゐる。私達の金は私を信じてくれる人々が喜捨したものだ。だからその金を受取つたら神に感謝の祈りを捧げて貰ひたい。

一人の男イエスに謝しユダより金を貰ふ。

一人の女――ダビデの子、キリストなるイエス樣！　私はあなたが神の御子であるのを信じます、信じます。私を憐れんで下さいまし。私の良人は私を虐げます。私の姑は私をその爲めに攻めます。私はそれを忍ぶのをさうつらいとは思ひません。けれども私の子が惡い行ひの爲めに段々私から離れようとして居ります。私の眼の前は眞暗で御座います。この先きどうなるのでせう。神は私をお呪ひになりました。

イエス――友よ何で神がお呪ひにならう。神は愛なのだ。昔の豫言者が「目の代りに目、齒の代りに齒」と云つたのをあなたも覺えてゐよう。けれどもその言葉は正しくない。豫言も亦すたる時があるのだ。あなたは決して

惡に敵對してはいけない。あなたは思ひ煩つて明日はどうなる事かと案じてゐる。神を信ずるものはさうあつてはならない。野に行つて百合の花がどう育つかを見て御覽。百合の花は格別働きもせず紡ぎもしない。けれどもソロモンの榮華の極みの時でも、その粧ひはこの花の一莖にも及ばなかつたではないか。今日野にあつて明日は爐に投げ入れられる野の草すら、神はそれ程美しくし給ふのに、況してあなた方を捨てゝおかれようか。あなたの今日々々の惱みを神の御手にお任かせするがいゝ。さうして先づ神の愛とその義しさとを求めるがいい。明日の事を憂ひ慮ふには及ばない。今日の事は今日で澤山だ。一番惡いのは信仰の薄い事なのだ。分つてくれたらうか。

一人の女――それでも私の子が未來にはどんな惡い者に……

イエス――さう信仰が薄くてはいけない。二羽の雀はたつた一錢で賣り買ひされてゐるではないか。それ程いやしい小鳥でも神の許しがなければ一羽とても木から落される事はないのだ。大きい心で、信じて、神と人とを信じて生きて行くがいゝ。私もさうして生きてゐる。あなたは私がどれ程苦しめられ、迫害され、命さへ窺はれてゐるかを知つてゐよう。然しあなたは私の顔から喜びの消えたのを見た事はない筈だ。私の兄弟は私の事を惡鬼につかれたものだと云つてゐる。私の母も私に關係があると云はれるのを怖れ避けてゐる。然し私はその爲めに神を疑つた事はない。悲しまされる者は幸ひだ。その人は慰められるからだ。私の慰めの言葉があなたの悲しみよりも大きくあつてくれるやうに。

一人の女――おゝ主よ！　私の胸は不思議な淨めを受けて喜びに破れようとします。私は凡ての重荷を主に擔つていたゞきます。それはあまり勿體ない事ですが。

イエス――和睦を求めるものは幸ひだ。その人達は神の子等と稱へられるだらうから。又謙遜るものは幸ひだ。

天の御國はその人のものとなるであらうから。

一人の若き男――（美服を纏へる者）　先生、天の御國に入つて限り無き命を得るには、どんないゝ事をすればいゝのですか。

イエス――どんないゝ事？　本當にいゝ事の出來るのは神の外にはない。あなたが命を得ようとするなら先づ律法を守るのがいゝだらう。

一人の若き男――律法とは羅馬の律法の事ですか、ヘロデ王の律法の事ですか、それとも……

イエス――昔からユダヤ人が知つてゐるモーゼの律法だ。「人、殺す勿れ。姦淫する勿れ。盜む勿れ。虛僞の證明を立つる勿れ。爾の父母を尊敬へ。自己の如く隣の人を愛すべし」それを守るがいゝ。

一人の若き男――それは皆んな私は守つてゐる積りです。それでもまだ天の御國には這入れないのですか。

イエス――あなたの所有物を殘らず賣つて貧しいものに施し、私に從つて生活なさるがいゝ。主よ〳〵と私を呼ぶものが悉く天の御國に這入れる譯ではない。人々の眼に見えるやうに正義をした所が天の御國に這入れる譯ではない。自分の眼がよく見えると思ふ人は、どうかすると瞽盲よりも憐れな盲目な事がある。

一人の若き男――モーゼの律法には所有物を殘らず賣つて貧しいものに施せとは書いてない。先生は先生だけの律法を私に强ひようとなさるのだ。そんな亂暴な事はない。

イエス――あなたは家に歸つてからよく考へなほして見る方がいゝ。

一人の若き男半ば誇りがに半ば打ち沈みて退場。

イエス――（長く若者の後を見送り）金でも心でも、富んだ者が天國に這入るのは駱駝が針の目を通るよりむづかしいのをあなた方は覺つたらう。（子供達に）お前方は本當に私を信じ私を愛する事を知つてゐる。それは譯のな

い事なのだけれども、それが分らない人がある。私はそれを悲しむ。

パリサイの人その弟子にさゝやく。

パリサイ人の弟子——主よ、主はいつか山上の御說敎の時「饑ゑ渴くやうに正義を慕ふものは幸ひである」と仰しやつたが、それは謙遜るのと同樣に幸な事でありませうか。

一人の男——私達にはそんなむづかしい理窟は役に立たない。

他の男——さうだ〳〵。そんな事はこのエホバの神殿の奥のサンヘドリユムの會議の席で爭ふがいゝ。

病者——主よ、私の永い病を癒して下さい。

パリサイ人の弟子——私はお前方に物を尋ねてゐるのではないのだ。わが主イエスにお尋ねしてゐるのだ。主よ、先程の若い青年は正義を愛するものだと思ひますが、あの青年は人も殺さず姦淫も犯さず……

イエス——こゝにゐる小さな子供の心一つでも虐げるよりは、挽舂を首にかけて海に投げ込まれた方がまだ幸ひだらう。婦女を見て色情を起すものは心の中で旣に姦淫を犯してゐるのだ。右の眼が躓かしたら右の眼を、左の眼が躓かしたら左の眼をゑぐり拔いて捨てた方がまだ幸ひだらう。姦淫を犯さないと云ふだけではその人の正しい證據とはならない。

ユダ竊かに階段の所に至りイエスの言葉を聞きながらパリサイ人を促して、マグダラのマリヤを連れ出させんとす。

パリサイの弟子——それなら何が證明となるのですか。

イエス——（空を見て）あなたは今日の天氣を證明する事が出來ると思ふか。

パリサイ人の弟子——（空を見て）こんなに早くから朝燒けがしてゐます。夕燒けの時は次の日が晴れるし、朝燒けの時はその日が曇ると云ふから今日は曇るでせう。

イエス――あなたは空の徵候（しるし）をそれ程明らかに辨（わきま）へてゐながら、自分の心の徵候を人に尋ねようとするのか。

この時祭司パリサイの人等極力反抗するマグダラのマリヤの兩手を堅く捕へて神殿より出で來り群集を押し分けてイエスの前に突き傳がす。

マリヤ――（恥辱と憤怒との爲めに絕望的になり）何をなさるんです。私は十分あなた方から辱かしめを受けてゐるのに……この乞食のやうな貧しい人達や、片輪者や、氣違ひや、あの獨りよがりの神の子の所にまで私を連れ出して、この上何んの恥をかゝさうとなさるのです。恥！　辱かしめを知らない間こそ恥はある。辱かしめを知つたものには恥はない。出來るならどんな恥でもかゝして見せるがいゝ。……晝の光にも私は怖れてはゐまい。太陽の光よ、さあ私を御覽。私はお前よりも美しいんだよ。……さあ、そこにうよ〳〵と集まつた人間の屑、私を辱かしめられるなら辱かしめて見るがいゝ。

人々の中に憤激の樣子見ゆ。羅馬の兵士等物々しげに警戒す。僅かに事なし。イエス眼を定めてマリヤを見、ヤコブ、ヨハネ、その母に子供達を渡し安全なる所に連れ去らしむ。

パリサイ人甲――（恭しく挨拶し）先生、あなたは饑ゑ渴くごとく正義を愛する方だと聞き及んでゐます。私達はパリサイ人ではありますが、正義を愛する點では人に讓らない積りですから、先生に尊敬を捧げたいと思ひます。それをお許し下さい。

パリサイ人乙――この女は昨夜姦淫を行つてゐる時捕へられたものですが、モーゼの律法の中に「かくの如きものは石にて打ち殺すべし」と明らかに書いてあります。私達はこの明文をどう解釋したらいゝでせう。

群集――打ち殺せ！

打ち殺せ！

石で打ち殺せ！

乞食だと云つた。

わが主を獨りよがりの神の子と罵つた。

打ち殺せ。

姦淫を犯した女をモーゼの律法通り打ち殺せ。

パリサイ人の弟子――先生はたつた今姦淫の心を起したものは、縦令姦淫を犯さずとも、眼をゑぐり拔いて捨てしまふがいゝと仰しやいましたね。

群集――さうだ、私も確かに聞いてゐた。

我等の主はいつでも正しい。

さうだ、本當に正しい。

乙――あの女は羊の門のそばに住んでゐて、贅澤な暮しをしてゐた女だ。

群集――私達貧民を輕蔑し切つた女だ。

主よ一言仰しやつて下さい。私達は祭司や羅馬の兵士を待たないであの女に姦淫の罪を思ひ知らせてやります。

女達――男をたぶらかす魔性の女。

羅馬人に媚び諂ふ妓女！

この手で引き裂いてやりたい位だ。

パリサイ人甲――人々は暫く鎮まつて先生のお言葉を待つがいゝ。先生はお前達の勇ましい、正義に燃え立つ心

を嘉し給ふだらう。先生、時は過ぎます。群集はあの通り騷ぎ立ちます。猶豫は無益です。

パリサイ人乙――正義を以てユダヤの國を水が蔽ふやうにしていたゞきたい。先生の一言はユダヤの國法より重いのです。

ヨハネ――（イエスに近付き）あの女をよく御覽なさい。あれはマグダラで主の大事な弟子を數多く迷はし墮落させたその女です。……劍を執つてあの女を打ちませうか。

　　將に劍を拔かんとす。イエス、ヨハネの肩に手をおき、

イエス――（弟子達を見渡して）あなた方は人を裁いてはいけない。あなた方も亦裁かれるだらうから。（パリサイ人の弟子に）あなたは兄弟の眼にある塵を見て、自分の眼に在る梁木を覺らないのはどう云ふ譯なのだらう。

　　かく云ひてイエスは嘆息し子供から受取りたる木の枝にて蹲みながら地の上に字を書く。

ペテロ――（ヨハネに）私は字が讀めないが、何んと書いてをられるのだ。

ヨハネ――（地上を見て）よくは讀めない。然しいつか敎へて下さつた祈禱の言葉のやうだ。「主よ、我れを試煉に遭はせず惡より救ひ出し給へ」さう書いてをられるのではないか。

ペテロ――若しや……そんな事はない。

ヨハネ――何んだ。

ペテロ――何んでもないのだ。

パリサイ人甲――先生、あなたはこの女を許さうとでもなさるのですか。

パリサイ人乙――あなたはこの女に特別な親しみでもお持ちなのですか。これほど明らさまな罪であるのを。ぐづ／＼してゐるとエホバの大庭が穢される。こゝに集まつた人々、お前達は先生に生死を誓つた信者達だ。先

生のお心持が分らぬ事はあるまい。先生の口が云ひ出されぬ所を、お前達の手で云ひ出すがいゝ。エホバは妬み給ふ神だ。神に選ばれたユダヤ人なる私達の正義の心が鈍つたら、誰がエホバの御旨をなし遂げる事が出來よう。

ヨハネ――あなたは何故默つてお出でなのです。人々はあなたのなさり方に迷を抱いてゐるではありませんか。

パリサイ人甲――よし、私はもう待つてはゐられない。私はどうかしてあなたの義人であるのを見出さうとしてこれまで心を盡して見た。あなたが私達パリサイ人を罵られるにも係はらず、忍んであなたと和らがうとした。然しもう無益だ。人々よ、お前達の先生は不幸にも私達を滿足させてくれない。私は今日、今、お前達の先生を疑ふ事を宣言する。私はお前達の先生には頼らない。ダビデとヨセフとアブラハムの祖先なるモーゼの律法の名によつて私は人々に命ずる。エホバの榮えの爲めに、ユダヤの正義の爲めにこの女を石で打て。

群集忽ち擧つて立ち上り、石を拾ひ上げて狂犬の如く狂ひつゝマグダラのマリヤに迫る。マリヤ思はず極度の恐怖に戰慄しつゝイエスの足許に轉ばる。

マリヤ――おゝ惡魔！　私は殺される。

イエス――（決然として木の枝を捨てゝ立ち上り、マリヤに近づく群集に鋭き眼を與へ、嚴かに呼ぶ）待て！　あなた方の中で罪のないものが先づこの女に石を投げるがいゝ。

群集思はずイエスの威嚴に壓せられて、息氣を呑み、動かんとするものも、云はんとするものもなし。喧騷の後の極度の沈默。マリヤの啜り泣く聲のみ聞こゆ。イエスによりて見入られたものは知らず〳〵拾ひたる石を地上に捨つ。やがて少しづつ人々マリヤより離る。イエスは再び蹲みて地に字を書く。パリサイ人を始めとし、人數次第に減少し、遂には弟子のみイエスの傍らに殘る。

イエス――（やゝ怒りを帶びて弟子を顧み）あなた方は試練に遇はぬやうに神に祈るがいゝ。（殊にユダに向ひ）あなた方はイエスの心をまだ本當には理解してくれないらしい。いゝ事をしようと思ふ時、惡魔は兎もするとあなた方を捕へるのだ。さう云ふ時に私達は殊にへりくだつた心にならなければならない。エホバの宮に感謝を捧げたらあなた方は橄欖山に行つて私を待つてゐるがいゝ。

弟子退場。イエス涙ぐましき樣子にて後手しつゝあたりを逍遙ふ。やゝ暫くして、

イエス――（靜かにマリヤに向ひ）女よ。あなたを訴へた者達は何處にゐる。

マリヤ――（泣きつゝ）何處にも居りません。

イエス――（やゝ程經て）誰もあなたを罪に定めなかつたのか。

マリヤ――主よ！

イエス――私も亦あなたを罪に定めまい。……早く歸つて行くがいゝ。……さうしてもう二度と罪を犯してはいけない。本當に罪を犯してはいけない。

マリヤ感激のあまり地に伏して泣く。イエスは靜かに伏目に逍遙ふ。

――幕――

第二幕　ベタニアのラザロの家

エルサレムより歩程一時間半ばかりなる樹木多き小山の半腹に在るベタニア村の一軒。質素なれども清潔なる家居。

第一幕より一年後の晩秋。晝過ぎ。曇れる日。ラザロの家の入口と座敷と前庭。マグダラのマリヤその義兄たるシモン

と語りをる。

シモン――マリヤ、いくら歎いてももう駄目だ。あきらめるより仕方がない。

マリヤ――本當にさうですね。（尙泣き續く）

シモン――本當にさうですねと云ひながら、まだ泣き續けては困るではないか。癩病のシモンと云はれて、世の中に顏出しの出來ない私の方が生き殘つて、あの達者だつたラザロが死ぬとは思ひもかけない事だ。けれどもソロモン王ですらが人の世の有樣の空しい事は云つていらつしやる。……その中には然し我等の主のイエス樣もお出でになるだらう。今日のやうな淋しい曇つた天氣でもイエス樣がお見えになつたら少しは晴れ〴〵とするかも知れない。

マリヤ――縱令イエス樣がお出でになつても、もう凡ては無駄です。

シモン――それはさうに違ひないが然しマリヤ……

この會話の間にも村の人々入口より出入りしてイエスを迎へる用意などなし居る。マルタも時々姿を現はす。

マリヤ――それよりもイエス樣がこんなエルサレムの近くまでお出でになつて、又何かお身の上にあぶないやうな事が起りはしないかと思ふと、矢張りヨルダン川の彼岸にゐて下さる方が安心です。

シモン――主のお心は私達には分らない。イエス樣には又お考へがあるのだらう。

マリヤ――主は私達兄弟をどれ程愛してゐて下さるか分らないのですね。

シモン――難有過ぎて淚がこぼれる程だ。

マリヤ――本當に。（淚を拭ふ）

マルタ出で來り、シモンとマリヤの泣けるを見。

マルタ――葡萄を少し自家の庭から採つて來ていたゞきたいのですがね、あなた。マリヤ、あなたのやうにさう悲しみにばかり浸つてゐては自分の體を惡くしますよ。

シモン――マルタ、誰か賴む人はゐないのか。

マルタ――あなたも私も留守になるので葡萄圃に鍵をかけて來ましたからあなたでなければ開けられないのですもの。私は今煮物をしなければなりませんし。

シモン――さうか。それなら私が今行つて來よう。

マルタ――どうぞ。マリヤ、こゝはあなたの家で私には勝手が知れないが、乳を入れる壺は二つしかないのですか。

マリヤ――姉さん二つで間に合はしておいて下さいましな。

マルタ――さうね、それではさうしようね。（竊かに淚を押し拭ひ）何んだか心が亂れてゐると、する事が思ふやうに行かない。（退場）

シモン――それでは私は一寸家まで行つて來る。全く薄ら寒い日だ。

マリヤ――待つて下さい、こゝにラザロの外套がありますから。（去つて別室より外套を持ち來りシモンに着す）兄さんはあなたよりずつと大きかつたのですね。（泣く。さうして外套の襟に接吻す）これなら暖かいでせう。

シモン――難有う。これで暖かい。

マリヤ部屋の中を片付け、庭に來り草花を摘まんとしてかしこゝ見まはせども、大概枯れ果てゝなし。

マリヤ――（獨白）花はもう一つもなくなつてしまつた。……兄さん、神樣の懷ろで美しくお眠りなさい。おゝ寒い、惡寒がし出して來た。……本當に今日は淋しい日だこと。

マルタ登場。

マルタ――シモンはもう行つて下すつて。

マリヤ――えゝ今。姉さん私はどうしても淋しくつて仕方がありません。兄さんの病氣がお惡いと知らして上げた時、何故イエス樣はすぐに來ては下さらなかつたのでせう。もう兄さんが死んでから四日にもなるのに……

マルタ――私達の家族のやうに、世の人達からさげすまれてゐるものゝ所ばかりをイエス樣は顧みてはお出でになれないのだよ。主はあり餘る程の仕事をお持ちになつてお出でなのだから……

マリヤ――私はどうしてあんな事をして過してゐたのでせう。兄さんが死んでから殊更に私は自分の過去の罪が悲しく思はれますよ。

マルタ――あなたの故(せゐ)ではない、家(うち)が貧乏だつたのが惡かつたのです。貧乏故に、あなたの大事な最初の戀が裏切られたのが惡かつたのです……それにしてもあなたと云ひ私と云ひ……私の良人(をつと)は癩病だと人々に云はれるし……

マリヤ――でもシモンは本當にいゝ方ですね。

マルタ――良人の美しい所を知る事が出來たのも全くイエス樣のお蔭です。それまでは私は自分の生きるのを呪つた程だつた。癩病人と云へばエホバの呪ひを受けた罪人だと、このユダヤの人達は思つてゐるのだから。

マリヤ――でも私がマグダラからこゝに越して來て姉さん御夫婦のお世話になるやうになつたのは本當によい事だつたと思ひます。マグダラにゐたら、私は罪の思ひ出ばかりでも今頃は死んでしまつてゐたでせう。

マルタ――そんな事ばかり思ひつめてゐるからあなたはいけない。少し私を手傳つて働いて見るといゝのにね。

マリヤ――ぼんやりしてばかりゐて、私は姉さんに濟(す)まないと思ひます。

マルタ――そんな氣持で云つたのではないのですよ。あなたの體の爲めを思つてね。

マリヤ――姉さん本當に難有う。私は餘り感じ易くなつてしまひました。私はどうして人を呪つて生きねばならぬやうな女になつてゐたのでせう。人をいやしみ、人からはいやしめられ、それを自分の誇りでゞもあるやうに思つて、イエス樣の大事なお弟子まで羂にかけては墮落させ、それで自分の力が確められたやうに思つて暮してゐた去年までの事を思ふと、まるで恐ろしい夢のやうです。私は肉を裂かれても骨を摧かれてもまだ罪から淨められたとは思へません。私の姿に迷つた人達は今でも……この今でも何處かで怒つたり、悲しんだり、苦しんだりしてゐるのですのに……

マルタ――あなたがそんなに泣くと私まで悲しくなるではないか。折角飮みこんでゐた淚が……おゝ部屋が綺麗に片付いてね。何か飾る花はないだらうか。

マリヤ――主は花がお好きだからと思つて探しましたが……

マルタ――もう無いのね。冬になるからね。……けれどもあなたがイエス樣にお遇ひ申して本當にいゝ事をしたのね。私達が見放し切つてゐたあなたが私達に歸つて來てくれたばかりでなく、あなたのお蔭で死んだ兄さんも私の家も、日の光のやうなイエス樣のお友達になれたのですものね……

マリヤ――イエス樣はいゝ方です。誰が何んと云つても私はそれを本當に知つてゐます。私のやうな、地獄に落ちても及ばない罪人にはそれがよく分ります。私の嬉しさはそのまゝ私の悲しみです。心が水のやうに澄み切ると本當に悲しいものですのね。

マルタ――けれどもその悲しみは又そのまゝ嬉しさではないの。

マリヤ――感謝しても〳〵足りない嬉しさです、本當に。この體は汚れ果てゝゐますけれども……心だけは少し

づゝ光の方に向いて行きます。私にはそれがよく分ります。私は私と同様に汚れた人達をみんな抱きしめて上げたくなります。……さうしてその人達と一緒に泣けるだけ泣きたい……その人達は本當に誰か泣いてくれる人の胸にすがり付いて思ふまゝ泣きたいのですものね。けれども世の中の人はさうだとは思つてゐないんです。だから眼にたまりかゝる涙を無理にも押し拭つて……この世の中は本當に、姉さん、淋しい所ですのね。

マルタ――マリヤ、あなたはそんなにしてゐては全く體にさはりますよ。

マリヤ――私は懺悔する度毎に肉まで少しづゝ淨まります。

マルタ――あなたは私より幸ひね。

マリヤ――許して下さい姉さん。私は本當に幸ひ過ぎます。私はそれを濟まなく思ひます。

マルタ――ちつとも〳〵。それを聞く私の方があなたよりどれだけ幸ひだか知れない。私達は全く生れ代つてしまつた……だが、かうしてはゐられない。もし使ひの人でも見えたら、あなた會つて下さいよ、私はもう少し臺所でしておく仕事があるから。（退場）

マリヤぼんやりして考へに沈みをりしが、何事をか思ひ出し、再び涙を催しながら跪きて祈る。パリサイ人の弟子二人パリサイ人甲と共に服裝を變じて入口に近付き、あたりの樣子を窺ふ。シモン登場。

シモン――（こだはりなくパリサイ人等に向ひ）何か御用ですか。今日は取り込みでつひ取次もしなかつたと思ひますが……

パリサイ人の弟子――いゝえ、外でもありませんが、イエス様が今日この村にお出での噂を聞いたものですから、嬉しさの餘りに……

マリヤ――（入口に人の聲を聞き使の者ならんかと走り出づ）兄さんどなた？　主からのお使ひでは……

シモン——さうではないエルサレムからの方のやうだ。(パリサイ人等に向ひ)さうでせう。

マリヤ——(思はず柱を楯に取る)どなたです。

パリサイ人等マリヤを見るや否や急ぎ退場。

マリヤ——(後を見送りて)エホバ!　私を迫害した人達だ。兄さん、恐ろしい人が……あれがパリサイの學者の一人です。

シモン——(後を見送りて)あれが!　油斷のならない事だ。……あれが去年の秋のあの時にお前を召捕つた男なのか。

マリヤ——その通りです、あの人達が私を死ぬ程恥しめ罵つたのです。……おゝ、私は又もや心の傷を發かれます。

シモン——どうぞして主に大事がなくて濟めばいゝが……エホバよ主イエスをその敵より守り給へ。

マリヤ——本當に何か恐ろしい事が近付いて來るやうですね。

シモン——義しいものは凡て主の味方だ。主はやがてユダヤの王となられるだらう。さうしてダビデよりも勝れた王として萬民に平和と繁榮とを與へて下さるだらう。……私達のやうな賤しいものが憂ひわづらふ事ではない。……では一寸この葡萄をマルタの所に持つて行つて來るよ。

シモン退場。やがて使のもの走り來る。

使の者——誰かゐますか。(マリヤ出迎へる)主イエスがお出でになるさうです。いまイスカリオテのユダとヨハネとが先きにこゝに見えます。

マリヤ——さうして主イエスもすぐに……

使者――さうです直ぐに……私はこれから村中に觸れて廻ります。一人にでも知らせずにおくと私は怨まれますから。（走り去る）

マリヤ――（殆んど有頂天）姉さん、兄さん！主が、イエスがお出でになつて下さるのです。今日の日こそは祝福された日だ。私の悲しみはどこに影を隱してしまつたのだらう。おゝこの胸が跳り上る。

シモン、マルタその外登場。

シモン――どれ何處に見えた。

マルタ――どこまでいらしつたの。

マリヤ――今ヨハネとユダとが先きに――さうして主はその後から。

シモン――それならまだ暇があつてよかつた。

マルタ――早く作つてしまひませう。マリヤ、若しユダとヨハネが見えたら、あなたがどうぞもてなして上げて下さいよ、用が濟むまで……

皆々退場。

マリヤ――おゝいゝ日〳〵。……けれども主はあれ程ラザロを愛してお出でになつたのに……イエス様はさぞお悲しみになるだらう。けれどもそれが勿體ない。

ユダ及びヨハネ登場。

ユダ
ヨハネ ――神の祝福、この家に豐かならん事を。

マリヤ――難有う存じます。私にはそれ以上申上げる力がありません。
ユダ――御姉妹方の悲しみをお察しゝます。然し主が仰しやつたやうに「死にし者をして死にし者を葬らしめよ」です。あなた方はいつまでも悲しみに浸つてゐてはなりません。エホバの思召しをつぶやいては濟みません。本當に「死にし者をして死にし者を葬らしめよ」です。

マリヤ點頭す。ヨハネ眼をかゞやかしたるまゝ何事も云はず。

マリヤ――主イエスはもう何處までお出でになつたでせう。
ユダ――ケデロンの谿間の出口あたりでせう。主イエスはあなたの知らせを受けられてから二日の間は出で立たうとなされなかつた。あれ程日頃愛し給うたラザロが大病であるのにと私達は怪しんでゐた。主の云はれるにはラザロの病はラザロを死なせはしない。さうして三日目にやうやく私達を從へてヨルダン河をお渡りなされたのだが、途中でとう〳〵亡くなられたのを聞いて驚きました。
マリヤ――ラザロは死んでしまひました。使を出すとぢきに亡くなつてしまひました。
ユダ――主は出發の時鞋を結びながら「ラザロは眠つてゐるのだ。これから行つて眼を覺してやらう」とさう少し戲談のやうに仰しやつた。
マリヤ――眠つてゐるのなら私でも覺すことが出來ませうけれども……
ヨハネ――この頃この邊には主を迫害しようとするらしい樣子はありませんか。パリサイの人や學者達は祭司を煽動してどうあつても主の命を滅ぼさうと企んでゐるらしいが、……だから私は言葉の限り主にユダヤの地に來られる事をおとめ申したのに、主はお聞きにならない。さうして笑つて「晝の間は躓く事はない。夜が來るまでは私は安全だ」と仰しやつた。然しこれから歸つてヨルダンを渡るまでには日が暮れるに決つてゐる。

それだのにユダ、お前は頻りと主をうながし立てたではないか。

ユダ——それは主がどれ程ラザロを愛して居られたかを思ひやつたからだ。さうしてマルタやマリヤの爲めにも、この場合、主のこゝに來られるのは必要なのだ。

マリヤ——あなたは私達の心をよく知つていらつしやる。

ユダ——だから私は死を覺悟してこゝに來てゐる。トマスも「私達も行つて主と共に死なう」とさへ云つた。

マリヤ——けれども主イエスのお命に……おゝ主だ、主がいらしつたのだ……あの人聲……マルタ、マルタ！主がお近付きになりました。

マルタ、マリヤの聲を聞くや、涙を眼にためて入口より走り出す。マリヤは光に打たれたる如く部屋の一隅に身をかくす。イエス群集と共に登場。マルタその足許に身を投げ出す。

マルタ——主よ！　あなたが若しこゝにさへお出で下さつたら、私共の兄は死なずに濟みましたらうに。主が神にお願ひ下さる事は神がお許し下さると私共は知つて居ります。

イエス——(憐れみを催して)　あなたの兄のラザロは甦る。

マルタ——主の末の日の復生の時には、兄も甦るでは御座いませうが……

イエス——私が復活であり生命である。私を信ずる者は死ぬとも生きるだらう。あなたはそれを信ずる事が出來るか。

マルタ——主よ信じます。私はあなたが神の子キリストでいらつしやるのを堅く信じ申します。私は歎いてはなりません。

雄々しく涙を打ち拂ひつゝ部屋に入りマリヤにさゝやき、やがてイエスを內に案內す。マリヤ、イエスの前に泣き崩れ

てひれ伏す。

マリヤ——私の救主なる主よ！　あなたの愛するラザロは死にました。死にました。あなたがこの家にいらしつたなら、兄は死なゝかつたでも御座いませう。死にました……兄が……あなたの愛する者が……私はたゞ一人淋しくこの家に殘されました。主よ私は悲しう御座います。どうしても悲しう御座います、

人々マリヤの悲しみに同情して皆涙を流す。キリスト深く心を動かし、

イエス——何處にラザロは置いてあるのだ。（涙を流す）

男——主が泣いてゐられる。

他の男——どれ程かラザロは愛せられたのだ。

マルダ——ラザロは洞穴に埋めてからもう四日になります。悪い臭氣が致します。

イエス——洞穴の口の石を除かせておけ。

マルタ——けれども……

イエス——あなたが若し私を信ずるなら、あなたは神の榮えを見る事が出來るのだ。人の見たい不思議を見る事が出來るのだ。疑はずに私をそこに案内してくれるがいゝ。

マルタ、マ・ヤその他の人々イエスを案内して退場。ヨハネ又從はんとす。ユダ引き留む。

ユダ——ヨハネ。

ヨハネ——何んだ。

ユダ——少し聞きたい事がある。昨日主のお話が濟んでから、お前達兄弟とお母さんとが主に何かお願ひをすると、主が激しい言葉で返事をして居られたがあれは何事だつた。

ヨハネ――全く主は何か氣を障へてゐられるやうだ。

ユダ――ガリラヤに居られる時はシヤロンの野を吹く春の風のやうに隱し立てのない快活な方だつたが、この頃は人間が少しお變りになつた。

ヨハネ――私は時々主に近づくのが恐ろしいと思ふ事さへある。どうしてあゝなられたのか譯が分らないので猶更おど〳〵する。

ユダ――ユダヤの人達はガリラヤの人のやうに單純でもなし無學でもないから、主のお言葉を素直に受け入れないのも一つの原因らしい。

ヨハネ――全くユダヤと云ふ所は沙漠のやうに潤ひのない所だから、私達ガリラヤの生れの者には樹の姿や草の形まで物足りない。

ユダ――然しこゝからダビデのやうな優れたこの國の救主は生れたのだ。やがて來るべき救主もユダヤから生れ出るとちやんと豫言がされてゐる。

ヨハネ――ではお前は主は來るべき救主ではないと思ふのか。

ユダ――だから主は「豫言も亦すたる時がある」と度々云はれるのだ。主は豫言以上の事を考へて居られるのだらう。……何を昨日主はあんなに云はれたのだ。

ヨハネ――それをお前達に白狀するのは少し恥かしい事だが……私達の母は子の可愛さからだらう、主がユダヤの王となられる時の事を考へてゐるのだ。母はこんな乞食のやうな姿になつて主に從つて東や西に彷徨ひ廻つてゐる私達を見てゐるのがもどかしいと見えるのだ。さうして昨日はとう〳〵我慢が出來なくなつて、主が神の國を開かれる時が來たら、私の子供達を玉座の右と左に坐るのを許して下さるでせうかとお尋ねしたのだ。

ユダ――サロメと云ふ女は中々に思ひ切つた事を云つたものだ。さうしたら主は……

ヨハネ――恐ろしい眼をして母を御覽になつた。さうして情なさゝうに私達兄弟をぢつと眺められた。

ユダ――ふむ。……さうして何んと云はれた。出過ぎた事を云ふものではないと云はれたらう。

ヨハネ――さうだつたら私は云ひ返して上げる積りだつた。私が殊に主に愛せられてゐると云ふ理由でかう云ふのではないが、私達兄達は主がまだ洗禮のヨハネのお弟子であつた時分から主に從つて、片時もお側を離れずに心を盡してゐるのだ。主が王となられる時、その右左に坐る資格は私達二人の外にはない筈ではないか。

ユダ――それはどうでもいゝ、主は何んと仰しやつたのだ。

ヨハネ――主のお言葉は意外だつた。「來るべき神の御國はお前達の考へてゐるやうなものでない。そこでは高い位のものは低められ、低い位のものが高められるのだ。お前達にはまだそれが解つてはくれないのか」と云はれてさびしさうな顏をなされた。

ユダ――それはその通りではないか。今この世に時めいてゐるヘロデ王の家來やサンヘドリュムの祭司達は奴隷より低いものにされてしまはなければならないのだ。さうして生れるとからこの世の難み苦しみ、不公平の限りを苦く味つたものが高められるのだ。人は不公平であつてもエホバは常に公平だから。

ヨハネ――主のお言葉の意味は少しそれとは違ふやうだ。

ユダ――意味ではない、云ひ現はし方が違ふだけだ。

ヨハネ――母はそれを聞いて失望してしまつた。

ユダ――お前達も殘念に思つたらう。

ヨハネ――私の心は熱し易いから……

ユダ――それはその筈だ。

ヨハネ――然し私はその位な事で主を離れる事は出來ない。一體を云ふと何故主はこの頃神の御國とかユダヤの王とか云ふやうな言葉を何かと云ふと用ひられるのだらう。私はガリラヤにゐる頃伺つたやうな、魂がやさしい指でぢつと摑まれるやうな聖い言葉ばかりを聞いてゐたい。

ユダ――それは覺めながら夢を見てゐるのだ。私達はいつまでもそんな圓かな夢の中に眠り續けてはゐられないのだ。主が人々に認められてお出でになればなる程、味方も敵も殖え、從つて私達の生活が公けになつて行くのは已むを得ない事なのだ。さうしてそれはつまりいゝ事なのだ。

この時、家の後ろにて騷々しき人聲。

ヨハネ――(聞耳を立て)何か間違ひが起きたのではあるまいな。ユダヤに足を踏み込んだら少しの油斷もならない。

ユダ――こゝはエルサレムではない。主のお側には主を慕ひあがめる者ばかりが集まつてゐるのだ。それにしてもどうも大勢さうな人聲だな。

ヨハネ――ベタニヤの村の人ばかりではあんな騷ぎは起るまい、又何か云ひ合つてゐる。私は心配になつて來た。私は行つて見る。

ユダ――まあも少しこゝにゐろヨハネ。……お前達は私が會計を司つてゐるのを何んとか思つてはゐないか。

ヨハネ――何んとも。

ユダ――私一人がユダヤ人である事も。(ヨハネ顏にて否定する)さうか。私はレプタ一枚でも自分勝手に費ひ果した事はない。私は主の信用に報いるだけの事はしてゐる積りだ。

ヨハネ――それを誰も疑つてゐるものはない。
ユダ――然しこの財布がからいつも空では神の國は愚かな事、この小さなベタニヤの村を村らしくする事すら出來ない。
ヨハネ――主は金よりも人の心に頼つてゐられるのだ。いつかエルサレムの神殿で貧乏な寡婦が二レプタを賽錢箱に投げ入れてゐるのを見られて、涙を流さんばかりに喜んでをられた。
ユダ――その心懸けは云ふまでもなく大事な事だ。私達は何よりも先づエホバの御前に誠を誓はなければならない。然しエホバの思召しに叶つた御國を築き上げるには信仰ばかりが大事なものではない。「主よ〳〵と呼ぶものが悉く天國に這入れるのではない」からな。
ヨハネ――お前は主のお心持を知つてはゐないやうだ。子供のやうな無邪氣な素直な心になつて、エホバの御旨に頼らなければ神の御國は來ないと思つて居られるのだから。
ユダ――ヨハネ。どうしてガリラヤ人はそんなに空想ばかりで生きてゐられるのだ。さう云つてはいけないかも知れないが、主イエスにもさうした傾きがある。主は殊に柔和なのだ。あまりに柔和過ぎるのだ。
ヨハネ――けれども主の些かな怒りは私達を心から顚倒させるではないか。神殿から物賣りを繩切れで追ひ出された時などは、私はその威光に恐れをのゝいて口をきく事すら出來なかつた。それはレバノン山の頂の古い香柏のやうに神々しかつた。
ユダ――けれども祭司や學者と問答をされる時にはどうしてあゝ言葉を濁してしまはれるのだらう。何か深い意味の有るやうな無いやうなあのお言葉は、あれはもどかし過ぎる。何故その場であの高慢無禮な慾張りな祭司共を責め拔く事はされぬだらう。

ヨハネ――さうだ、私もあの態度はもどかしいと思つてゐた。然し主は「私の擧げられる時はまだ來ない」と云つて居られる。

ユダ――私達はもう躊つてばかりはゐられないのだ。祭司や學者やパリサイ人はあの呑氣な金持のサドカイ人までをかたつて、主を捕へようと折を窺つてゐるのだ。一日控へてゐれば主は一日危いのだ。

ヨハネ――主が衣の裾の塵を拂つて思ひ切つて立ち上られるのを私も心では待ちに待つてゐるのだ。

ユダ――この上は祭司達がもつといら立つて本氣に主と主の信者とを迫害してくれゝばいゝのだ。主はその時になつても尻ごみをされるやうな弱い方ではないのを私は知つてゐる。

ヨハネ――虐げられた哀れな人々が、そこにもこゝにも、野の草のやうにゐるのを見ながら、ぢつと忍んで居られる主の忍耐は驚くばかりだ。あの聲はどうだ。このベタニヤの谷中の樹と云ふ樹が人になつてもあんなすさまじい叫びは立てまい。私は行つて見る。

「ラザロが甦つた」「死んだものが生き返つた」「私達は死を踏み躙つた」「キリスト、イエスは本當に救主キリストだ」「ホザナ〳〵」「もうこの世に恐るべきものは一つもない」などの叫び聲高く聞ゆ。

ヨハネ――（思はず地に伏して）エホバ！　私は何んと云ふ事を聞くのだ。ラザロが、死んだラザロが生きた！

ユダ――（何かにて面を打たれし如く）おゝ！　待てヨハネ！　あり得ない事だ。

ヨハネ――主を信じなかつたら……私もそれを疑ふだらう。

この時狂氣の如く興奮せる村人部屋の中に亂入し來り、ラザロの衣服を携へて後庭に行かんとす。

男甲――どこにあるんだ衣物は……

女甲――それは女の……マリヤの衣物だ。

男乙――何處だ〳〵早く〳〵。死が踏みにじられた。地獄が滅び失せた。
女甲――こゝではないか知らん。
女乙――こゝだらう。

マリヤ登場。泣きながら笑ふ。

マリヤ――こゝです〳〵。こゝを開けて……私の手は震へて私の云ふ事を聞かない。
ヨハネ――マリヤ！
マリヤ――おゝヨハネ！　（感極まつてその肩にすがり泣く）
男甲――こゝなのか。（中より衣類を出し）マリヤどれだ。
マリヤ――（男甲の方に走り寄り）おゝそれです。
男甲――どれだ。
マリヤ――私には見えない。一番いゝのを、一番白いのを、一番美しいのを。（云ひながら後庭に人々と駈け込む）

ヨハネ、マリヤの後を追ひつゝ退場。

ユダ――（歡喜しつゝ）私は選ぶべきものをあやまたず選んだ。イエスを主として事へた私は矢張り間違つてはゐなかつた。ユダヤはイエスによつて救はれるだらう。もう一歩だ。もう一と走りだ。ヨハネ待て。私も一緒に行く。（退場）

舞臺暫く空虛。パリサイ人甲及び乙深く覆面して入口に出で來る。

パリサイ人甲――私達は打ちくだかれた。
パリサイ人乙――イエスはとう〳〵神になつてしまつた。

パリサイ人甲――あの氣違ひじみた喜びの聲はどうだ。
パリサイ人乙――あすこにゐると私まで捲き込まれてイエスの前に跪きたくなつてしまふ。然しこんな奇蹟を私は見た事がない。
パリサイ人甲――それが安息日に麥の穂をしごいて食つたり、僭上して自分から神の子と名乘つたり、祭司を僞善者と罵つたりするイエスの仕業なのだ。この世の中の道理の光は消されてしまつた。
パリサイ人乙――あの勢ではこのベタニヤから恐ろしい一揆が起らないとも限らない。

パリサイ人の弟子登場。

パリサイ人の弟子――恐ろしい有様になりました。人々は惡鬼にでも魅かれたやうに、イエスの前に一人々々罪を悔いてひれ伏してゐます。イエスがどれ程立ち上れと云つても聞きません。
パリサイ人甲――さうして何んと云つてゐる。
パリサイ人の弟子――イエスを輿に乘せてエレサレムに上り、エホバの宮に感謝を捧げようと云ふものもあります。祭司達を神殿から追ひ出してイエスを神の祭司としろと叫ぶものもゐます。人の熱心であすこはまるで焔のやうです。（聲する方を指して）あの通りです。
パリサイ人乙――行け。行つてなほ様子を探つて來い。……これをこのまゝにして置いたらユダヤ中の人々は一人殘らずイエスを信ずるだらう。
パリサイ人甲――さうして大きな一揆でも起したら、羅馬人はこゝぞいゝ折と、いらざる干渉立てをしてユダヤを滅ぼさうと計らないものでもない。
パリサイ人甲――ユダヤの國中が亡びない爲めには私達はどうしてもあの男を犧牲にする覺悟でかゝらなければ

ならない。

パリサイ人乙――さうだ、こゝまで來ればその外に道はあるまい。イエスに取つてはそれは自業自得だ。然しあれだけの人望のあるイエスを捕へたら人民は默つてはゐまいが……

パリサイ人甲――イエスは時々人を離れて一人になる。その機會に手早く捕へて手早く死刑に處するのだ。

パリサイ人乙――然し……

この時ユダ登場。パリサイ人のあるを見、これに近付く。

パリサイ人乙――（眼早くユダを見付け言葉を切り）お前の主は驚くべき奇蹟を行つた。昔も今も聞かない事だ。

ユダ――本當にわが主は驚くべき事をされる。あなた方はどうしても主に一歩を讓つて主と和らがなければなりません。

パリサイ人甲――それはもう出來る事ではない。イエスはパリサイ人を惡魔にも勝つた敵と心得てゐるのだから。

ユダ――（長く默想したる後）それはさうかも知れない。

パリサイ人甲――然し私達はエホバに誓ふ。私達の持つてゐる學問と、勢力と、愛國心との續く限りはイエスの敵となつてどこまでも戰ふから……

ユダ――（長く沈默したる後決意する所あるものゝ如く）私も實はそれを望んでゐるのだ。イエスは自分の愛する弟子に、國王となつた時には大臣の座を與へると約束しておきながら、このユダには……ユダヤの生れだと云ふその事ばかりで、何んの約束もしようとはしてくれないのだ。縱令イエスが神の御國を建て上げても、このユダは忘れられてしまふに極つてゐる。私は報酬を求めてゐる譯ではない。然しながら偏りのある政治の下には如

何なる國でも榮える事が出來ない。私の待ち望むのは眞の王國です。今の場合私がイエスに阿つてゐるのは一番安心な事に違ひは……

パリサイ人の弟子――（登場し、おびえたる如く）先生、村のもの共はもう立派な暴徒になりました。隣の庭であの有様を覗いてゐた羅馬人を見つけると、イエスのとめるのも聞かず、垣根を破つて隣りに侵入し、異邦人を打ち殺せと叫んでゐます。

パリサイ人甲――私達は祭司に訴へを立てなければならない。祭司の主カヤパスの心をどうあつても動かさなければならない。縦令パリサイの徒が滅び盡すとも、ユダヤ國の爲めには、イエスを敵として戰はねばならない。お前はそれをイエスの許に行つて云ひつけるがいゝ。

ユダ――（沈默の後）私はあなた方に同情します。イエスは自分の說く所を國の大事よりも重く見てゐます。

パリサイ人乙――イエスの說く所……それは高がユダヤの愚民や奴隷や税吏を煽動するだけの說に過ぎないのだ。私達から見るとイエスの說く所は狂人の囈語に過ぎないのだ。

パリサイ人甲――けれども愚民や奴隷の數は多い、さうして彼等は正しい道理を辨へてゐない。今ユダヤ國が羅馬帝國の爲めにどれほど危くされてゐるか、そんな大きな問題は考へても見られないのだ。力で壓倒する外に彼等を沈默させる道はないのだ。……ユダ、お前は今夜竊かにカヤパスの館まで來たらどうだ。私達はお前がユダヤ國を救ふくさびとなり得るのを知つてゐる。

パリサイ人乙――よく夜が來るまでの間に考へて見るがいゝ。國を破壞するのはいと易い。イエスがしたければそれをして見るがいゝ。エルサレムのあの神殿を三日で建て上げて見せると廣言して憚らないイエスには、破壞したユダヤの國を三日もたゝずに又建て上げる自信があるのかも知れない。然し人間の歷史を少しでも學ん

だ私にはそれを信ずる事は出來ない。

パリサイ人甲――人々が近付いて來るやうだ。ユダ、私達は今夜、智慧に勝れた一人の義人が私達の間に加はるのを待ち望んでゐるぞ。

パリサイ人等退場。

ユダ――(獨白)面白い。事は急になつて來た。これ程の迫害に遇つてはいかにイエスでも怒りを起さずにはゐられまい。わが主の爲めに……早く御國を來らせる爲めに、私はあらゆる策略をめぐらさねばならぬ。

マリヤ登場。

マリヤ――ユダ！

ユダ――(ぎよつとして)何んです。

マリヤ――あなたは今誰と話をなさつてゐたのです。

ユダ――それはあなた方女の知る事ではない。

イエス人々に圍まれて登場。

イエス――(殆んど狂人の如く周圍にまつはる人々に向ひ)靜かな心でゐてくれなければいけない。このイエスには、天の神なる父の思召しがなければ何事も出來ないのだから。若しあなた方が今見た事だけでそれ程驚くなら、末の日に復活のラツパが鳴り渡る時が來たら、どれ程驚かねばならぬだらう。その時には凡て死んだものが、その墓の中から生き返つて來るだらう。眼のあたりそれを見ないでそれを信ずる事の出來る人達は幸ひな人達だ。マリヤ、あなたはそれを信ずる事が出來るか。

マリヤ――私の救主なるイエス樣、私にはその誓言ははつきりと判りかねます。

イエス――あなたは甦らされたではないか。
マリヤ――それは兄の、こゝにゐるラザロで御座います。
イエス――あなたもだ。
男甲――(傍人に)マリヤも一度死んだ事があるのかな。
イエス――(その男の言葉を聞き)人は一度死なゝければ新たな命に生れ代る事は出來ない。一度死なゝければ……さうだ。一度死なゝければ新たな命を得る事は出來ない。一粒の麥が地に落されて死ねばこそ、幾十倍の麥が秋のみのりとなる事が出來るのだ。
他の男――イエス様、私にも死を踏み躪る力を授けて下さいまし。
イエス――(歎息し)命を得ようとするものはこれを失ひ、これを失ふものゝみが誠の命に至るのだと云ふ事があなたには分らないだらうか。今生き代つたこのラザロもやがては肉の亡びる時が來るだらう。昔モーゼによつて蛇が上げられたやうに人の子も上げられる時が來るだらう。……けれども私の云ふ命はそこにあるのではないのだが……(弟子達に)人々を家に歸らせて貰ひたい。マリヤの所では迷惑だらうから。(人々に向ひ)時が來たらあなた方にも私の心持が分るやうになるだらう。どうぞ靜かな心で家に歸つて貰ひたい。さうして私のした事を事々しく言ひ觸らさないやうにして貰ひたい。(ラザロに)ラザロ、あなたはまだ疲れてゐる。あなたの信仰があなたを救つたのだ。この感謝を私にせずにニホバに捧げるやうに……。(マルタに)マルタ、あなたはラザロを靜かな所で休ませてやるがいゝ。
ラザロ――(未だ夢幻の境にゐて)一體こゝは何處です。イエス様が私をこゝまで連れて來て下さつたのに、今イエス様は何處に居られる。どれがイエス様だ。(近寄れるマルタに倚り添ふ)何處に……

マルタ――ラザロ、これはあなたの妹です、マルタです。私の胸は奇蹟を見た驚きに張り裂けさうです。
ラザロ――イエス樣は……
イエス――（ラザロの頭に手をおき）神をお求め。
マルタ――兄さん、さあ行きませう。

ラザロを介抱しつゝ退場。人々もそれと共に退場。イエス人々の去りし後急に悒鬱になり、

イエス――（弟子達に向ひ）人々はさゝやかな天の徵候を見て魂を消すまでに驚いてゐるけれども、イエスが與へようとする心の徵候を見て驚かうとするものは一人もない。笛を吹いたり、太皷をたゝいたりすると、それに合せて踊る人をよく往來で見かけるが、私が笛を吹いても、あなた方は踊つてくれようとはしないのだね。
マリヤ――どうしてあなたはこの喜びの眞最中にそんな悲しい事を仰しやるので御座います。
イエス――あなたも亦私を疑ふ時が來るだらう。
マリヤ――イエス樣、そのお言葉は私の心を無殘にさし貫きます。私は死んでも主をお疑ひ申すことは出來ません。
イエス――人は誓ひを立てるものではない。
ユダ――主は今の奇蹟をパリサイの人達が隱れ〳〵に見てゐたのを御承知ですか。
マリヤ――本當に……去年私を捕へたその人がたしかにこゝに來て居りました。
イエス――それはどうでもいゝ事ではないか。
ユダ――彼等は主のお命を危める決心を致しました。それを確かに私は自分の耳で聞きました。日頃から彼等が恐れてゐた事が今日いよ〳〵眼の前に起りました。主を無いものにしなければ自分達は滅びるばかりだと云ふ

事をしつかり考へ定めました。もう一刻も猶豫をしてゐる譯には行きません。神の御國を來らせる爲めに、主の力を現はしていたゞく可き時機は來ました。一刻の躊躇はその時機をおくらせてしまひます。御覽下さい、こゝには主の爲めには肉も魂も惜し氣なく捧げようとしてゐる私共が居ります。又眼のあたり大なる奇蹟を見て主の御力を本當に知つた人々がゐます。「起て」と唯一言仰しやつて下さい。私達は狩場の犬のやうに勇み立つでせう。私はこれ以上にユダヤの國が罪と不幸とに淵深く沈んで行くのを傍觀してはゐられません。……何んと云ふ不幸な國民！　ヘロデ王の爲めには重税を課せられてなやみ苦しみ、羅馬帝國の爲めに屬國同様の取りあつかひを受けて、その恥辱を雪ぐ道もないでゐるこの國民を私は毎日眺めてゐなければならないのですか。……毎日々々その不幸に深入りして行くのを忍んでゐなければならないのですか。

イエス――（ペテロに向ひ）ペテロ、あなたはどう思ふ。

ペテロ――私は一人の漁夫に過ぎません。そんな大きな事はどう考へていゝのか……。

イエス――（ヨハネに）ヨハネは？

ヨハネ――ユダの云ふ事には道理があります。私は主とユダヤの國王とを離して考へる事が出來ません。

イエス――（いよ〳〵悒鬱になり）あなた方は今劍の用意でもあると云ふのか。

ペテロ――（敢然として）こゝに一と振りあります。

ヨハネ――（同じく）こゝにもあります。

ユダ――私も兼々用意してゐます。

イエス――それだけか。（答へなし）それで澤山。それだけあれば何事でも出來るだらう。（沈默の後獨白の如く）劍のお蔭で勝つたものは、又劍のお蔭で滅びねばならぬのだ。……私の魂は痛んで悲しむ。私はこれ以上何を云

はう。神よ、これ程恐ろしい時を早く過ぎ去らして下さいと祈つたものであらうか。……さうではない。私はこの時の爲めに備へられてゐるのだ。……さうだ私は今になつて恐れてはならない。祭司にでもパリサイ人にでもしたい事をさせておいたがいゝだらう。あの人達は自分で何をしていゝかを知らないのだ。然し知らないのはあの人達ばかりではない。（弟子達に向ひ）あなた方は古い革袋に新しい酒を盛らうとしてはいけない。その革袋は程なく破れて、折角の新しい酒が流れ出てしまうから。……（氣を換へて）あるがまゝでいゝ、私はもう何時までもあなた方の心を私の悲しみで悲しめる事をしまい。夕餉の用意が出來るまでの間、歌でも歌ひながら橄欖山までそゞろ歩きをして來よう。ユダ、あなたはこゝに殘つて買物の支拂ひをして貰ひたい。これだけの多人數の食事をシモンとラザロに賄はせるのは餘りに荷が重過ぎる。

イエス立ち上りて弟子等と共に退場。

ユダ——主は又私だけ一人を群れから引き離さうとなさる。私がユダヤ人であるからと云ふのか。それとも私の諫言が出過ぎた諫言だからとでも云ふのか。

マリヤ——イエス樣はそんな事で人を彼れ是れなさる方ではありません。然しこの頃の主のお顏はどうしても只事ではない。何か深く思ひ煩つていらつしやるのが私にははつきりと分ります。

ユダ——それは主の優柔不斷がさせる業です。この場合たゞ一言「起て」と仰しやつて下さりさへすれば、主がかねがね私達に敎へられる神の御國はこの地上に出來るのです。主が決心さへなされば、主の爲めに、神の御國の爲めに命を捨てゝエホバに事へようとする者がユダヤ中には到る處にゐるのです。それを主は何故か躊つてゐられるのだ。……私は矢張りユダヤの救主を選び損なつてゐるのだらうか。……然し私はまだ失望はしない。あの小羔のやうに謙遜過ぎる主は、もつと形勢が迫つて來なければ最後の決心をなさらうとはしまい。……

私は何處までもこの國の幸福の爲めに主に決心を促さう。けれども……
マリヤ――（ユダを恐るゝ如く離れたる所より見やりて）あなたはイエス樣のお心と違つた道を歩んでおいでになります。
ユダ――主が私達主を信ずるものゝ心と違つた道を歩まうとしてゐられるのだ。
マリヤ――「笛を吹いてもお前達は踊らない」と悲しさうに主の仰しやつたお言葉が今になつて私には分ります。
ユダ――主は私達が踊り得るやうな笛の調べをかなでようとはなさらない。
マリヤ――「一度死なゝければ人は神の國に生れ出る事が出來ない」とたつた今仰しやつた主の御心が私には判ります。
ユダ――神の國に生れるものは義人だけです。
マリヤ――神の國に生れるものは罪人だけです。……私にはあなたのお心持が悲しまれます。……イエス樣はただ獨りでいらつしやる……。おゝ淋しいそのお姿！
マリヤその場に膝をつきて顏を被ふ。ユダいぶかしげにマリヤを見やる。

――幕――

第三幕　シモンの家

ベタニヤなるシモンの家の食堂。ラザロの家よりは富裕なる廣間。廣間につゞきてそれに通ふ廊下あり。

時は第二幕の翌年の四月二日の夕。卽ち逾越の節の前の日。イエスの捕へられたる夜はこの夕べに續きて來るなり。

イエス廊下の所にてマリヤと談り、廣間の方にはマルタ、シモンその他の人々出入して食卓を整へ居る。

マリヤ――（永き間の沈默の後徐ろに打ち沈みたる顔を上げ）それでは何處にいらつしやるので御座います。

イエス――私はあなた方の爲めにわが父なる家に所を備へに行くのだ。所を備へたら又あなたの所に歸つて來るだらう。

マリヤ――それはいつの事で御座います。私は主から一時でもお離れ申してゐるのが淋しう御座います。

イエス――淋しいのはあなたばかりではない。

マリヤ――主はこゝを去つて何處ぞへいらつしやるのが宜しう御座いませう。本當に主のお命は危う御座います。祭司やパリサイの人達はラザロや私達の命をまで覗つてゐるのださうで御座います。ラザロが生きてゐる間は主のなさつた奇蹟がいつまでも人々に記憶されるから、ラザロを無いものにするのだと云つてゐるのださうで御座います。

イエス――私の爲めにあなた方まで苦しむのを私は氣の毒に思ふ。けれども私の爲めに苦しむと思つてはいけない、私の爲めに苦しむのは神の爲めに苦しむのだから。

マリヤ――私は何んでそれを苦しい事と存じませう。……私にはそれが本望以上で御座います。……けれども若しや主のお命に……この間、エルサレムの神殿で主が危くパリサイ人におつかまりになりかけたと聞きました時などは私は思はず恐ろしさに跳り上りました。さうして主がエルサレムにお出でになつたあの日、羊の門の所で、うれしさのあまり棕梠の葉を振りながらホザナ〳〵とお祝ひ申した輕はずみを後悔致しました。

イエス――然しあなた方がそれを叫ばなかつたら石が叫んだらう。……私が行つてしまつたら人々はあなた方を會堂から追ひ黜けるだらう。さうしてあなた方を殺した者は神の御意に從つて立派な事をしたと思ふ時が來る

だらう。然しあなた方はその人達をも責めてはならない。その人達は父と私とを知らないのだから……私は祭司やパリサイの人達を責めに責めた。それはどうかしてあの人達に私の父を知らせたいと思つたからだ。けれども私の行かねばならぬ時が近付いた。私はもう誰をも責める事はしない。……今私の眼にはその人達が一番可哀さうな者として映る。

マリヤ――私も本當にさう思ひます。……はつきり聞かせて下さいまし。主はどちらにいらつしやるのです。それはどれ程遠い所で御座います。

イエス――明日の朝になつたら自然に分るだらう。今それをあなたに話しても無益だ。誰にもそれは分らない。

マリヤ――誰にも… 私にも……

イエス――あなたは美しい心を持つてゐる。

マリヤ――美しい心などは持たないでも宜しう御座います、私は主のいらつしやる所を知りたいので御座います。何か恐ろしい事が起るのを私の心は……

この時食堂を整理しつゝありしマルタ窓より廊下を見、

マルタ――マリヤ、イエス樣のお邪魔にならないやうになさいよ。あなたの好きな仕事をさして上げるから。庭に行つて少し花を集めて來て頂戴な。

マリヤ――はい。去年兄さんが甦つた時には秋の末で何處にも花がなかつたのに、今日は又何んとあなたのお庭は美しいのでせう。

マルタ――いよ〳〵明日から逾越の節が始まるのだもの、今が春の眞盛りですわ。

マリヤ――さうですのね。

マリヤ靜かに立ち上り庭に下り立ち花を摘む。イエス考へ深く花園を見やる。

マルタ――（シモンに）まだラザロは來ませんか。

シモン――（食卓を整へつゝ）まだ見えない。誰か人がついて來るのだらうな。

マルタ――とても一人では駄目です、この間のやうな事が又起つたら大變ですから。

シモン――全く危い事だつた。

マルタ――あの人達は兄さんをうまくだまして橄欖山の降り口まで連れて行つたのださうです。兄さんが何か怪しいと思つて森蔭を見ると、兵卒らしい男が幾人も待伏せしてゐたので、いきなり連れて行つた男のとめるのを振りちぎつて駈けて歸つたのださうです。

シモン――これはかうでいゝだらうか。そこの蒲團が曲つてゐるな。それ程までにエルサレムの祭司や役人たちはイエス樣を憎んでゐるのかな。私達も氣をつけてイエス樣に御迷惑がかゝらないやうにしなければならない。私達に怪我があつてもイエス樣の御迷惑になる。

マルタ――今夜のお食事などもあまり人に知らせたくないものですね。

シモン――人々が無遠慮に押しかけて來ないやうにする爲めだけにもそれは大切な事だ。よしそれはこつちから受取らう。

マルタ――（一人の女に）もう二つ程蒲團を持つて來て下さいな、その時になつてお客樣がふえるかも知れないから。

マリヤ――（花を摘みながらも時々物案じ顏にぼんやり佇みなどしてありしが）イエス樣、明日は逾越の節のお詣りにエルサレムにお出でになるので御座いますか。

イエス――何んと云ふ美しい花だ。私の生れ故郷のナザレにも春は來た事だらう。

マルタ――（窓より庭を覗きて）マリヤ摘めて？

マリヤ――えゝ。けれどもまだ少し。

マルタ――それが濟んだら一寸來てこつちを手傳つて下さいな。まだ皆さんはお見えにならないかしら。（一人の男に）あなた門の所に行つて一寸見て來て下さい。

マリヤ――はい（と返辭せる時にはマルタの顏既に窓にあらず）。（イエスに）私はもう花などを摘んでゐるのがいやになりました。胸がたゞわく／＼して私は何事も手につきません。（ほろ／＼と摘みたる花を地に捨つ）靜かな春の夕暮れだこと。

イエス――マリヤ。

マリヤ――はい。

イエス――（思ひ返したる如く）何んでもなかつた。……その捨てた花を集めてこゝに持つてお出で。

マリヤ花を集めてイエスの傍らに持ち來る。

イエス――そこに坐るがいゝ。部屋の中にはまだ誰かゐるだらうか。

マリヤ――（部屋を見）誰も居りません。

イエス――あなたは本當に私が何處に行くかを知りたいのか。

マリヤ――私には主のいらつしやる所が朧ろげに分つたやうな氣が致します。不思議に痛み悲しむ私の心がそれを私に知らせるやうに思ひます。

イエス――何處に行くと思ふのだ。

マリヤ――私はそれを申すのを憚ります。主のお口から承(うけたまは)りたう御座います。

イエス――私はゲヘナの谷間を通つて死の國に行くのだ。

　マリヤは自分の竊かに危ぶめる所が的中せるを驚きもし恨みもするが如く、答へもなく思はずイエスにすり寄る。

イエス――（靜かな威嚴を以て）然し天なる父の懷ろに歸るのだ。……驚く事はない。又悲しむ事もない。私が行つた後にはあなたを慰めるものが天から送られるだらう。……さうしてこの事をあなたの兄のラザロにも姉のマルタにも漏らしてはならない。殊に私の弟子達に告げてはならない。弟子達は私が死の杯を飲み盡すまで私の心持を素直に理解する事が出來ないのだから……

マリヤ――ラザロを甦らせて下さつた主が……何故主は御自身をお救ひになる事が出來ないので御座います。主のお出でにならないこの世の中を考へますと私は生きる空が御座いません。

イエス――私の行くのはあなた方の爲になるのだ。生きる事の尊い時がある。死ぬる事の尊い時がある。私は愼んでこの世の生を樂しんだ積りだ。私は又愼んで死への旅を喜ばねばならない。……人々は私の死ぬのを見て凡ての望みを失ひ、牧人(ひつじかひ)を失つた羊の群れのやうになるだらう。然しあなたゞけは望みを失つてはならない。永生(かぎりなきいのち)を持つたイエスは、私が死んだ後にあなたに遣(つか)はされて、いつまでもあなたの伴侶(とも)となるだらう。……あなたの心には愛が滿ちてゐる。だから私の云ふ事がおぼろげながら分るのだ。けれども私の弟子達の心はこの世の事の爲めに煩はされて昏(くら)んでゐる。若し私が今夜祭司の手に渡されて、十字架にかけられるのを知つたなら、弟子達は徒(いたづ)らに騷ぎ立つて私が受くべき大事な運命を微塵にくだいてしまふだらう。弟子達は私の行く所を知つてはならぬのだ。

マリヤ――主は本當に孤獨な淋しい方でいらつしやいます。

イエス――孤獨ではない。天の父は常に私と共にいますのだ。さうしてあなたが私には與へられてゐる。

マリヤ――おゝイエス様！　それは餘りに勿體な過ぎます。

イエス――凡ての人々が失望する間にあなたゞけは失望してはいけない。私が留守の間にあなたはそのかよわい、やさしい手で天と人とを結びつけてゐてくれなければならない……それは苦しい仕事だ。私はそれを知つてゐる。けれども天の父はそれをなし遂げる愛の力をあなたに送つて下さるだらう。

マリヤ――私は主と共にゲヘナの谷間に參ります。どうぞお連れなさつて下さいまし。

マルタ登場。食堂を見まはりてマリヤのある所に來り。

マルタ――マリヤ、一寸來て臺所を手傳つて下さいな。

マリヤ――（涙を押しかくして）はい。姉さんすぐ參りますから。

マルタ退場。

イエス――（マリヤより花を受取りつくづくと眺めて）美しい花だな。……（半ば獨白の如く）いか程思ひ煩つても人の壽命は寸陰も延べる事が出來ない。又いか程思ひ煩つても人の命は寸陰も縮める事が出來ない。マリヤ。あなたの生きてゐるのがこの世の爲めになるならば、どれ程の苦しみにも、どれ程の悲しみにも、あなたは勇んで生きねばならぬ。父を信ずるものはつぶやいてはならぬ。

マリヤ――私の小さな信仰をお憐れみ下さい。

イエス――マリヤ。

マリヤ――わが主よ。

二人の間にしめやかなる沈默。マルタ登場、マリヤの所に來り、

マルタ――マリヤ、マリヤ。今兄さんが來て、お弟子の方々がもうお着きになると云つてゐます。あなたは何故今日はさう働きもしないでぼんやりしてゐるのだらう、私たちはこんなに忙がしがつてゐるのに。イエス様、妹に少し働くやうに仰しやつて下さいまし。

イエス――マルタ、マルタ。あなたは家の事ばかりに心を煩はして、一番大事な一つの事を見のがしてゐる。あなたの妹はそれを知つてゐるのだ。……（マリヤに向ひ）もういゝ、あなたは立つてマルタを助けるがいゝ。私は獨りでこゝにゐたいから。

マリヤ――私は主に何をして差上げればいゝので御座いませう。

イエス――私と弟子達の爲めに短い間の別れの備へがしてほしい。

マルタ、マリヤ共に退場。イエス立ち上り右手に花を持ちながら靜かに庭をさまよひ、やがて廊下の人目に立たぬ所に坐す。暫くして弟子達食堂に登場。

ペテロ――踰越（すぎこし）の節（いはひ）もいよいよ明日になつた。ガリラヤからも知つた人達が大勢上つて來るだらう。

ヤコブ――主は又明日エルサレムに行かれるだらうか。

ユダ――それは、ヤコブ、云ふまでもない事だ。主が居られなければ、今年の踰越の節は意味をなさない。神殿の廣場に溢れる程集まつた人々が、狂氣のやうに主を迎へて「ホザナ、ホザナ、神の名によりて來る小羔（ひつじ）は幸なるかな」と歌ふのを聞くのはうれしい事だ。この三年の間主に從つて艱難を嘗め盡（な）した私達の心づくしは報いられる時が來たのだ。

ヨハネ――然しヘロデ王の徒（ともがら）や祭司達はこの折を窺つて主を危（あや）めようと企（たくら）むに決（きま）つてゐる。

ペテロ――然し主に心からの信仰を捧げてゐる大勢の參詣人の前で、何事をし出かし得ようぞ。

ユダ――油斷はならぬ。祭司やパリサイ人達は主を捕へるまでは安々とは眠るまいといふ程の意氣込みを持つてゐるのだ。（聲を低くして）私達は主を促がしてこちらから彼等を魁けるやうにしなければならないのだ。主は餘りに謙遜過ぎる。私達の熱心でその謙遜を突き崩さなければならないのだ。

ペテロ――主はお前の考へてゐる以上を考へて居られるのだ。

ユダ――さうでない。餘り生一本な主の性格はこの世の經驗で補はれなければならない。私達は主の云はれるなりに服從してゐる場合ではない。

ヤコブ――それはさうだ。

ユダ――さうであるどころか、私達は今夜心を盡して主を諫めなければならない。天の御國がこの地の上に成るか成らぬかは今夜の中に決する事だ。

ペテロ――主のお心がお前の云ふ通りになつたら、私の命はその爲めに捧げても惜しくはない。私は何處までも主に從つて行く。

ヨハネ――それにしても主は何處に居られるのだらう。

ラザロ出場。

ユダ――やあラザロ。あなたは先程の話を委しく主に申上げるがいゝぞ。

マルタとマリヤ出場。

マルタ――（歩きながらマリヤに）あなたは何故さう悲しさうな顔をしてゐるの。私の家はイエス樣を始めお弟子の方々を迎へて天國のやうに樂しいのに。

ヨハネ――（二人に）イエス樣は何處においでゞす。

マルタ――今までその廊下に休んでいらつしやいましたが……（廊下の方を見廻して）あすこにいらつしやるではありませんか。

ヨハネ――さうか……

ヨハネをはじめ廊下の方に到らんとす。イエス今までの悒鬱に似ず輕く立ち上り、弟子達を迎ふるやうに食堂に入り來る。

一同――主よ。

イエス――私は今夜はあなた方の主でもあるまい、先生でもあるまい。あなた方と同じ人の子になつて樂しく最後の晩餐を取らう。

ペテロ――最後の晩餐とは……

イエス――それはいまに分る。

弟子達の中に不安の色。

イエス――シモンはどうした。

マリヤ退場。直ちにシモンを伴ひて登場。

シモン――（イエスに）主よ、あなたが私のやうな罪人の家を顧みて下さつた事を心から難有く思ひます。何んの設(まう)けもしてはありませんが、ゆつくり一夜をお過(すご)し下さい。

イエス――私達はあなたの志を難有く思ひます。それでは……

人々ユダヤの習慣に從ひ、草鞋を脫ぎ脚を洗ひて食卓に就く用意を始む。マルタ、マリヤ整へある水盤を持ち出す。

ペテロ――主よ。どうぞお洗ひ下さい。

イエス——あなた方から淨めるといゝ。私は今日は洗ひ役にならう。

上衣を脫ぎ、手巾を腰に卷きて、水盤の前に身を屈め、弟子の來りて脚を洗ふを待つ。

シモン——勿體ない、それは主人の役目です。

イエス——(頓着なく)さあユダ。あなたから始めよう。

ユダ——主は天の御國の王であられます。

イエス——それではヨハネ。あなた來るといゝ。來てくれと云つたら來てもいゝだらう。

ヨハネ恐る〳〵水盤の前の腰かけに坐してイエスに脚を拭つて貰ふ。他の弟子もやがては事に慣れて嬉しげにイエスの介抱になる。ペテロのみは容易にそれを肯はず。

ペテロ——主よ、主はどうしても私の脚までお洗ひなさるのですか。いけません。洗つていたゞくのは勿體な過ぎます。

イエス——洗はしてくれないと、もうあなたとは關係がなくなるよ。

ペテロ——(急ぎ腰かけに坐し)それなら、主よ、脚と云はず、私の手も首も洗つて下さい。

イエス最後にペテロの脚を洗ひ立ち上り。

イエス——手や首まで洗ふには及ばない。さあこれであなた方は淨くなつた。然し(と云ひながら殊にユダに眼をそそぎて)あなた方の凡てが淨くなつた譯ではない。けれどもそれでいゝ。シモンとマルタが私達の爲めに設けてくれた淨められた食卓につかう。

イエスは自ら簡單に己れの脚を拭ひて弟子及びラザロと共に食卓につく。マルタ、他の女達と共に食物を運び來る。一同食前の祈りをなす。この時マリヤ美しき石の瓶を盆の上に載せて恭しく持ち來り、イエスの足許に坐し、その瓶の口

を破り、ナルドの油もてその脚を沾し、潤澤なる己が髮の毛にてこれを拭ひ始む。ユダを始め弟子達その芳烈なる薫りに驚きて首を擡ぐ。

ユダ――何んだらうこの氣高い香ひは。

ヨハネ――（イエスの傍に坐してありしが身をかへしてマリヤの爲す樣を認め）マリヤ、あなただつたのか。お、それは本當のナルドの油ではありませんか。而かもあなたは寶石の瓶の口を割つてしまつたのですね。

ヤコブ――私は今日始めてその香ひを嗅いだ。一斤で銀三百枚の價がすると云ふだけあつて、これはいゝ匂ひだ。

ペテロ――（マリヤに向ひ）それをあなたの身分で惜しげもなく使ひ果してしまふのですね。

弟子達の間にマリヤに對して一種の不快を感じたる色あり。

ユダ――（殊に氣色を損じ）ナルドと云へばその五六滴で、貴人の頭が淨められる贅澤な品だ。それを脚に……それを賣れば銀三百枚にはなります。その賣り高を貧しい人達に施したらどれ程の惠みになるか知れないのだ。私のお預りしてゐる金袋は始終空しいのです。主よ……

トマス――實際私達の周圍には不幸な人や貧しい人があり餘る程ゐるではないか。サロメが舞ひをして、あの正義の豫言者ヨハネの首をヘロデ王に斬らせた、その時の宴會でゞもあつたらこれは似合はしい事かも知れないが……

ヨハネ――マリヤ！　あなたは又昔のあなたに立ち歸らうとでもするのか。あなたと雖も私達の主を迷はす事は出來まいよ。

ペテロ――それは私達がさせておくものか。

イエス――マリヤのする事はマリヤに任せておくがいゝ。マリヤは葬りの日の爲めに、この油を蓄へておいたの

だ。それを今使ふのに不思議はない。……貧しい人達は常にあなた方と一緒にゐるだらうけれども、私はいつまでも一緒にはゐないのだ。一緒にはゐないのだ。私はあなた方に告げておく。私のあなた方に教へ傳へた事が傳へられる所には、何處でもマリヤのしてくれた事も永久に宣べ傳へられるだらう。（マリヤに向ひやさしく）私はあなたの厚い志をうれしく思ふよ。私の脚は最後の晩餐の用意の爲めにあなたの涙とナルドの油とで淨められた。天の父はそれを嘉し給ふだらう。（弟子達に向ひ）あなた方はこれから互に分れ爭ふやうな事をしないでくれないか。私はあなた方に今例を示した積りだ。私はあなた方の脚を洗つた。私のした事をあなた方も互の間にし合つて貰ひたい。この廣い世の中に私達のやうに天に向はうとするものゝ數は少い。その少い數の人達が互を尤め合つたり、憎み合つたりしてゐては、どうして失はれた羊の群れを檻の中に集める事が出來よう。

ラザロ――さうです、私達はいやが上にも睦まじくかたまつてゐねばなりまん。

ユダ――さうして惡の力に打ち勝つ構へをしなければなりません。現にラザロは……ラザロあなたが直接にお話をするといゝ。

ラザロ――主がエルサレムで人々からホザナとの歡迎をお受けになつたその日の夕方です。このベタニヤの村の稅吏の人が二人私の所に來て、イエス樣が橄欖山で私をお召しになつてゐると知らせましたから、私は取るものも取り敢へず、その二人と共に家を出ました。

マルタ――全くラザロは何事を思ふ暇もなく、丁度その時居合はした私達にも一言も云はずに家を出たので御座います。

ラザロ――すると橄欖山の上には主はおいでになりませんでした。稅吏は、それでは多分エルサレムへ下る道の

方だらうと云つて、私をそつちに連れて行きました。その時ふと私の心に疑ひが起りました。その稅吏の人達は私が日頃からあまり信用をしてゐない人達ですし、死から主によつて甦らされた私を殺さうと祭司やパリサイ人が覗つてゐると知つてゐましたから、歩きながらも氣を配つて居りますと、果して森蔭に怪しい人影を幾人も見付け出しました。私は稅吏の手を振り切つて家まで走り歸つて僅かに一命を落さずに濟みました。主を信ずる人達が多くなればなる程、それが正しい道だからと思はずに、あの人々は主に迫害を加へようと思ひ募つてゐるのです。

ユダ――若しこの形勢を見す〱默つて過してゐると、今まで主を信じてゐたものも段々主から離れて行くに相違ありません。

イエス――それを私もどうする事も出來ない。

ユダ――出來るのを主は敢へてなさらないのです。主が一度起つて「私が天の御國を嗣ぐべき王である」と明らかに宣言なされば、それでユダヤの王國は新しい命を取り返すのです。主を信ずると信ぜざるとに係はらず、ユダヤの國民は渴くやうに救主の出現を待つてゐるのです。豫言が充たされるのを望んでゐるのです。明日の逾越の節の時に……

イエス――私は度々それを宣言したではないか。

ユダ――然し主は一度でもその宣言の實行をしようとはなさらないのです。

イエス――ユダ！　あなたは何故地の事ばかり思ひ煩つてゐるのだ。私達は天についたものではないか。

ユダ――天國を先づこの地の上に築かなければ……

イエス――（一同に向ひ）私はこれまであなた方と麪麭を分ち合つて食つて來たが、さうして麪麭を分ち合つてゐ

る人の中に、私を敵に賣り渡さうとするものがある。

弟子の中に驚きの色。弟子達互に不安げに物云ひ交せる暇に、イエス麪麭をさきてユダに與ふ。マリヤそれを見て豫覺を得たる如く顏色を變ず。

ヨハネ――(ペテロに何か囁かれ、イエスに向ひ) 主よ、それは誰ですか。

イエス――私と麪麭を分ち合つて食ふものゝ一人だ、(ユダに向ひ) さあ、あなたはこれから行つてあなたのすべき事をして來たらいゝだらう。もうすつかり夜になつてしまつた。今夜の中に事は成し遂げられなければならない。

ユダ――主は私にそれをお命じになるのですか。

イエス――命じなくてもあなたは何時かそれをせずにはおくまい。

ユダ決心せる面持ちにて突然座を立ち、金袋を携へたるまゝ廊下の方より退場せんとす。

トマス――(廊下の近くに坐してありしがユダに) 渝越の節の買物にでも行くのか。

ユダ――さうではない。

トマス――貧しい人に施しでもしに……

ユダ――お前達はやがて主とユダとどちらが正しかつたかを知るだらう。(退場)

ユダの去りし後不安の氣食堂に滿つ。イエス嚴かにしめやかに語り出づ。

イエス――あなた方は心に憂へる事はない。神を信じ又私を信じてくれるがいゝ。わが父の家には第宅が多い。私はあなた方の爲めに所を備へに行つて來る。それは私のゐる所にあなた方もゐて貰ひたいからだ。

トマス――私には主の行かれる所が何處だかその道さへ知りません。

イエス――私がその道だ。私に由らなければ父の許に行く事は出來まい。
ペテロ――主よ、私達に天の父を知らせて下さい。
イエス――ペテロ。私はかほど久しくあなた方と一緒にゐたのにまだ私を知つてはくれないのか。私を見たものは父を見たのだ。私があなた方に語つた言葉は私自身の言葉ではない。私は私と共にあられる父の行ひをなしたまでなのだ。父が私を愛して下さつたやうに私はあなた方を愛してゐる。どうかあなた方も私の愛に抱かれて貰ひたい。又私があなた方を愛するやうに、あなた方も互に愛し合ふがいゝ。友の爲めに自分の命を捨てる程大きな愛は外にはない。凡て私があなた方に語つた言葉を守つてくれるなら、それは誰であらうと私の友だ。私はその友の爲めに喜んで死にもしよう。この世の人が若しあなた方を憎むなら、あなた方より先きにその人達は私を憎んでゐるのだ。あなた方が若し今の世に屬するものであつたら今の世はかうまであなた方を苦しめ攻める事はしまい。然しあなた方は今の世のものではない。私があなた方を今の世から選み取つたのだ。だから世の中はあなた方を憎むのだ。
もう少し私の言葉を聞いて貰ひたい。婦（をんな）が子を產まうとする時には憂ふるだらう。然しすでに產み終れば前の憂ひは忘れてしまふ。この世に一人の人の子が現はれ出るからだ。見ればあなた方も今不思議な不安と憂ひとに沈んでゐる。然し私があなた方と別れ去つても、又再びあなた方に會ふ時が來る。この事は記憶してゐて貰ひたい。その時が來たらあなた方の心は喜ばずにゐられないだらう、私はもう二度と別れる事なくあなた方と一緒にゐるだらうから。その時の喜びを奪ひ得るものは何處にもないのだ。
ヨハネ――主は今夜こそ譬言を用ひずに凡てを明らさまに云つて下さいます。私は今にして主が明らかに神より出で給へるを信じます。

イエス――あなた方は今それを信じてくれるか。私はそれを嬉しく思ふ。さうなら私が今まで云つた言葉を守り且つ覺えてゐて貰ひたい、私は自分の言葉が誠であるのを知つてゐるのだから。然しもう時が近寄つた。もう時が來た。あなた方は散り〳〵になつて私だけを孤獨に殘すだらう。然し私は全く孤獨ではない。父が私と共にゐられる。さうして……(云ひつゝマリヤを顧みる)あなた方は世にある間は迫害の限りを受けるだらう。然し懼るゝには及ばない。私は既に世に勝つた。さあこれからケデロンの河を渡つてゲッセマネの園の方に散歩に行かう。私が待ち設けられてゐる所に行かう。

イエス立ち上る。弟子達も亦。

マリヤ――(イエスに近寄り)イエス樣、私達兄妹(きやうだい)のものもお連れなさいまし。

イエス――もう夜もおそい。私達の行く所はあなた方の行くべき所ではない。シモン、ラザロ、マルタ、マリヤあなた方はよい人々だ。イエスはあなた方を永く覺えてゐよう。あなた方の上に天の父の祝福を。

イエス祝福を與へたる後竊かに弟子達と共に退場。四人の兄妹名殘り惜しげに人々を見送る。イエスの一行の歌ふ讃美の歌遠く聞こえやがて聞こえずなる。

マリヤ――ユダなのだ。

シモン――何が……

マリヤ――ユダなのだ!

マルタ――マリヤ! あなたは今夜は全くどうかしてゐる。

マリヤ――どうかしないでゐられませうか。(急に食堂をかけ出でんとし)行つてはいけないのだ。誰も行つてはいけないのだ。(又部屋に歸り來り)おゝあなた方は何んにも知らないんです。あなた方は幸福です。

ラザロ――マリヤ、さあ家へ歸らう。お前は頭を使ひ過ぎてゐるやうだ。何もそんなに氣にする事はないではないか。今夜の晩餐もシモンが思つた通り滯りなく行つたのだし。

マルタ――あなたはその命よりも大事にしてゐたナルドの油を……瓶までこはしてしまつて……

マリヤ――シモン！　イエス樣が……イエス樣のお命が……

シモン――イエス樣のお命が？

マリヤ――（ラザロにしがみつき）そのお命が危いのです。今夜です。今です。おゝ私は、何もかも云つてしまつた。

ラザロ――（笑つて）愚かではないか、お前は。このラザロを死から甦らして下さつたそのイエス樣のお命が危い……お前は何んと云ふ愼みのない囈言を云ふ女なのだ。

シモン――（眞面目に）マリヤ！　お前は何か聞きこんだのか。何かイエス樣に大事が起らうとしてゐるのか……何故答へない。何故はつきりと云はない……えゝお前はそんな大事を知りながら何故今まで云はずにゐたのだ。ラザロ、マリヤの樣子はどうしても只事でない。私はかうしてはゐられない。私は主の後を追ひかける。

ラザロ――さう云へばイエス樣の今夜のお言葉には淋しい響きがあつた。それにしても死をさへ踏み躙つたイエス樣が……よし、私もお前と一緒に行かう。

二人せき込んで部屋を出でんとす。マルタとマリヤこれをとゞむ。

マルタ――まあお待ちなさい。もう少しよく考へて下さい。マリヤの心は亂れてゐるのです。何を云ふか分りはしません。

マリヤ――（何ほ出で行かんとするシモン、ラザロを舞臺中央に押しかへし）噓です私の云つたのは皆んな噓です。私は

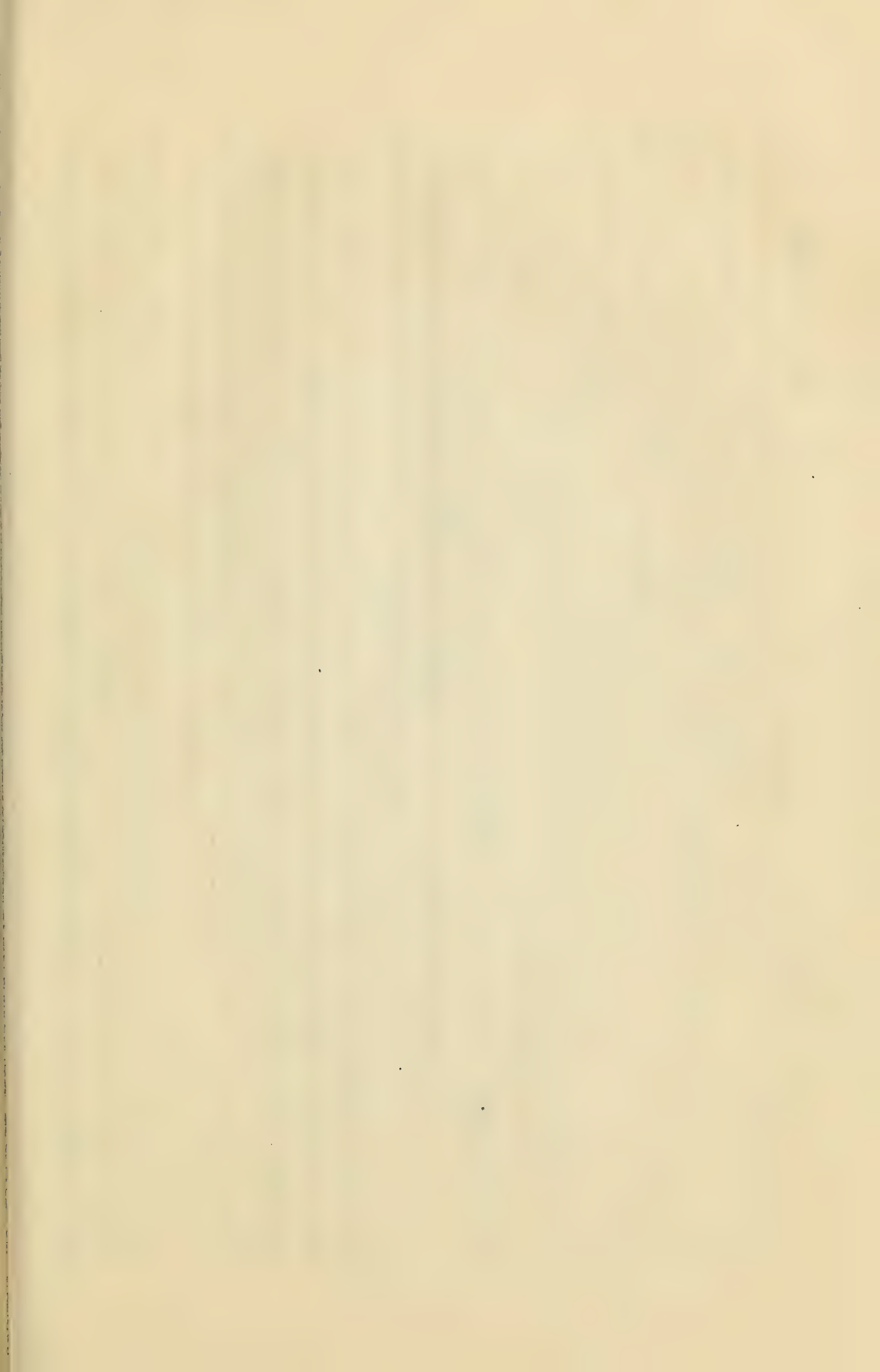
何を考へて何を云つてゐたのでせう。兄さんたち！　どうか氣を落着けて下さい。おゝ恐ろしい事だ。ラザロ！あなたの云ふのは正しい。イエス様は死を踏み躙られたのです。イエス様は限りなき命の持主でいらつしやる。もう大丈夫です。何事もないのです。落着いてゐて下さい。

マルタ――あなたが一番落着いてゐないではないか。

マリヤ――今私も落着きます。少し待つて下さい。……世に勝つたとはつきり仰しやつたイエス様が……私は何を信じたらいゝのだらう。……けれども主は信じろと仰しやつた。（この頃よりマリヤは他の兄妹等の凝視の中に全く孤獨なるものゝ如くなり、宛ら荒野の眞中に立てるが如く獨白す）主よ、信じさせて下さいまし。あなたが限りなく生き給ふ事を信じさせて下さいまし。……靜かに……靜かに……もつと靜かに……若し見る事が出來なければ……凡てが聞こえるやうに……おゝ世界が闇になつて行く……

マリヤ居のみ動かせども言葉出でず。他の三人の兄姉は唯あきれてマリヤを見やる。極度の靜寂。

――幕――

（一九一九年十月三十一日）

ドモ又の死　（禁無斷興行）

（これはマーク・トウェインの小話から暗示を得て書いたものだ）

人物

花田

澤本（諢名、生蕃）

戸部（諢名、ドモ又）

瀬古（諢名、若様）

青島

（若き畫家）

とも子　モデルの娘

處

畫室

時

現代　氣候のよい時節

澤本と瀬古とがとも子をモデルにして畫架に向つてゐる。戸部は物憂さうに床の上に臥ころんでゐる。

澤本――（瀬古に）おい瀬古、ドモ又がうなつてゐるぞ、死ぬんぢやあるまいな。
瀬古――僕も全くうなりたくなるねえ、死にたくなるねえ。……ともちやん、お前もおなかゞすいたらう。
とも子――もう物をいつてもいゝの、若樣。
瀬古――いゝよ。おなかゞすいたらう。
とも子――そんなでもないことよ。

戸部うなる。

どうしたの、戸部さん、あなた死ぬとこなの。まだ早いわ。
瀬古――ともちやんはこゝに來る前に何か食べて來たね。
とも子――えゝ食べてよ、おはぎを。
澤本――默れ〳〵。あゝ俺はもう駄目だ。（腹をかゝへる）唾も出なくなつちまひやがつた。
瀬古――ふうん、おはぎを……強勢だなあ、いくつ食べたい。
とも子――まあいやな瀬古さん。
瀬古――さうしておはぎはあんこのかい、きなこのかい、それとも胡麻……白狀おし、どれをいくつ……
澤本――瀬古やめないか、俺は本當に怒るぞ。飢じい時にそんな話をする奴が……あゝ俺はもう駄目だ。三日食はないんだ、三日。
瀬古――澤本は生蒂だけに藝術家としての想像力に乏しいよ。僕が今こゝにおはぎを出すから見てろ――ぢやない聞いてろ。ともちやんが家を出ようとすると、お母さんが「ともや、こゝにこんなものが取つてあるから食べておいでな」といつて、鼠入らずの中から、ラーヴェンダー色のあんこと、ネープルス・エローのきなこと、

あのヴァラスケスが用ひたといふプァーリッシ・グレーの胡麻……

戸部うなり聲を立てる。

澤本――だから貴樣は若樣だなんて輕蔑されるんだ。そんなだらしのない空想が俺達の藝術に取つて何んの足しになると思つてるんだ。俺達は眞實の世界に立脚して、根强い作品を創り出さなければならないんだ。だから……俺は殘念ながら腹がからつぽで、頭まで少し變になつたやうだ。

とも子――生蕃さんは普段あんまり大喰ひをするから、こんな時に困るんだわ。……それにしてもどうしてこゝにゐる人達の畫はこんなに賣れないんでせうねえ、

澤本――わかり切つてゐるぢやないか。俺達が立派なものを描くからだ……世の中の奴には俺達の仕事が解らないんだ……あゝ俺はもう駄目だ。

瀨古――ともちやん、そのおはぎの舌ざはりは一體どんなだつたい……僕には今日はおはぎがシスティン・マドンナの胸のやうに想像されるよ。ともちやん、お前のその帶の間に、マドンナの胸の肉を少しばかり買ふ金がありやしないか。

とも子――なかつたわ。私隨分長い間何にも貰はないんですもの。

瀨古――許しておくれ、ともちやん、僕達はお前んちの貧乏もよく知つてるんだが……

澤本――惡い〳〵。そんなに長く何にも君にやらなかつたかい。俺達は全く惡いや。待てよ、と。ない。無い筈だ。今頃やる物がある位なら遠の昔にやつてゐるんだ。

戸部――お母さん怒らないか。

とも子――偶にいやな顔はしてよ。

戸部――ぢや君は、もうこゝには寄りつかなくなるね。(うなる)
とも子――そんなこと……餘計なお世話よ。私のしたいやうにするんだから。
澤本――瀨古の若樣がひかへてゐる間は大丈夫だが……
とも子――人聞きの惡い……よして下さい。

戸部うなる。

瀨古――ともちやん、賴むから毎日來ておくれ。賴むよ。僕達は一人殘らずお前を崇拜してゐるんだ。お前が歸ると、この畫室の中は荒野同樣だ。僕達は寄つてたかつてお前を讃美して夜を更かすんだよ。尤もこの頃は、餘り夜更かしをすると、なほのこと腹が空くんで、少し控へ氣味にはしてゐるがね。
とも子――何んて讃美するの。ともの奴はおかめつ面のあばずれだつて。
瀨古――だが收入が無くつちやお前んちも暮らせないね。
とも子――知れたこつてすわ、馬鹿々々しい。
深本――ぢや矢張りドモ又がいつたやうに、君は何處かに岸をかへるんだな。
とも子――さあねえ。さうするより仕方がないわね。私は一體畫伯とか先生とかのくつ附いた畫かきが大嫌ひなんだけれども、……いやよ、本當にあいつらは……何んていふと、お高くとまる癖に、ひとの體にさはつて見たがつたりして……けれどもお金にはなるわね。あなた方見たいに食べるものもなくなつちや私は半日だつてやり切れないわ。大の男が五人も寄つてる癖に全くあなた方は甲斐性なしだわ。
戸部――畜生……出て行け、今出て行け。
とも子――だから餘計なお世話だつてさつきも云つたぢやないの。いやな戸部さん。(悔しさうに涙を眼にためる)

戸部うなる。

云はれなくたつて、出たけれや勝手に出ますわ、あなたのお內儀さんぢやあるまいし。

戸部！——俺達の仕事が認められないからつて、裏切りをするやうな奴は……出て行け。

瀨古——腹がすくと人は怒りつぽくなる。戸部の氣むづかしやの腹がすいたんだから、謂はゞペガサスに惡魔が飛び乘つたやうなもんだよ。お前、氣を惡くしちやいけないよ。

とも子——だつて戸部さん見たいな解らず屋つてないんだもの。畫なんてちつとも賣れない畫かきばかりの、こんな穢ない小屋に、私もう半年の餘も通つてゐてよ。餘程難有く思つてい丶譯だわ。それを人の氣も知らないで……

戸部——貴樣は（瀨古を指し）こいつの顏が見たいばかりで……

とも子——燒餅やき。

戸部——馬鹿。（うなる）

澤本——あゝ俺はもう駄目だ。死ぬ位なら俺は畫をかきながら死ぬ。畫筆を握つたまゝぶつ倒れるんだ。おい、ともちやん、惡態をついてるひまにモデル臺に乘つてくれ。……それにしても花田や靑島の奴、どうしたんだ。

瀨古——全くおそいね。計略を敵に見すかされてむざ〳〵と討死したかな。一體計略々々つて花田の奴は何をする氣なんだらう。

澤本——おい、ともちやん……乘るんだ。君は俺達のモデルぢやないか。若樣も描けよ。

瀨古——うん描かう。一體計畫々々つて……おい生蕃、ガランスをくれ。

澤本——その色こそは余が汝に求めんとしつゝあつたものなのだ。貴樣のところにも無いんか。

とも子――ドモ又さんもお描きなさいな。人つてものはうなつてばかりゐたつてお金にはならないわ、自動車ぢやあるまいし。
澤本――ドモ又ガランスを出せ。
戸部――（自分の畫箱の方に這ひずつて行つて中を捜しながら）無い。
瀨古――ペガサスの腰ぬけはないぜ。お前も起き上つて描けよ。花田の畫箱はどうだ。（隣りの部屋から畫箱を持ち出して捜しながら歌ふ）
「一本のガランスをつくせよ
空もガランスに塗れ
木もガランスに描け
草もガランスに描け
□□もガランスにて描き奉れ
神をもガランスにて描き奉れ
ためらふな、恥ぢるな
まつすぐにゆけ
汝の貧乏を
一本のガランスにて塗りかくせ」
村山䰟多も貧乏して死んだんだ。あゝあ、あいつの畫箱にもガランスは無かつたらうな。描き奉つてしまつたんだから。

「天にまします我等の神よ」途中はぬかします。「我等に日用の糧を今日も」ぢやない「今日こそは與へ給へ」。序でに我等にガランスを與へ給へ。あとは腹がへつてゐるからぬかします。「アーメン」。えゝと我等にガランスを與へ給へ。ガランスを與へ給へ。我等に日用の糧を與へ給へ。（銀紙に包んだものを探り出す）我等に（銀紙を開きながら喜色を帶ぶ）日用……糧を……我等に日用の糧を……（急に跳り上つて手に持つた紙包をふりまはす）……

……ブラボー〳〵ブラビッシモ……おゝ太陽は登つた。

　一同思はず瀨古の周圍に走りよる。

澤本――食へさうなものが出て來たんか。

戸部――ガランスか。

瀨古――澤本、お前はさもしい男だなあ、なんぼ生蕃と諢名（あだな）されてゐるからつて、美術家ともあらうものが「食へさうなもの」とは何んだね。

澤本――食へさうなものが出て來たんかといつたゞけで、何んでさもしい。あゝ俺はもう駄目だ。食へさうなものなんて云つたら駄目になつた……畜生、俺は畫を描く。ガランスが無けりや血で描くんだ。

　畫架の方に行きかける。

瀨古――いゝ覺悟だ。そこでともちやん、これを何んだと思ふ。これは勿體なくもチョコレットの食ひ殘りなんだ。

　澤本と戸部と勢込んで瀨古に逼る。

戸部――俺によこせ。

瀨古――これはガランスぢやないよ。

戶部――ガランスかつて聞いたのは、ガランスだと困ると思つてさう聞いたんだ。俺はガランス位ほしくはない。それは俺のだ。俺によこせ。

澤本――ガランスが無けりや、俺だつて食へさうなものを辭退する譯ぢやないぞ。ドモ又いゝ加減をいふな。これは俺んだ。

瀨古――さうがつ〳〵するなよ。待て〳〵。今僕が公平な分配をしてやるから。（パレットナイフでチョコレットに筋をつける）これで公平だらう。

澤本――四つに分けてどうするんだ。

瀨古――（澤本と戶部にチョコレットを食ひかゝせながら）最後の一片は勿論僕達の守護女神ともちやんに獻げるのさ。僕は何んといふ幻滅の悲哀を味はねばならないんだ。このチョコレットの代りにガランスが出て來て見ろ、君達はこれほど眼の色を變へて熱狂しはしなからう。ミューズの女神も一片のチョコレットの前には、醜い老いぼれ婆に過ぎないんだ。（今度は自分が食ひかく）ミューズを老いぼれ婆にしくさつたチョコレット奴、藝術家が今復讐するから覺悟しろ（ぼり〳〵と甘さうに食ふ。とも子の方に向け最後の一片をさし出しながら）ともちやん、さあ。

とも子――まあいやだ、誰がひとの食べかいたものなんか食べるもんですか。

瀨古――（驚いた樣子をしながら）え、食べない。これを。食べないとはお前偉らいねえ。お前の趣味がそれ程ノーブルに洗練されてゐるとは思はなかつた。全くお前は見上げたもんだねえ。お前は全くいゝ意味で貴族的だねえ。レデイのやうだね。それぢや僕が……

澤本と戶部とが襲ひかゝる前に瀨古逸早くそれを口に入れる。

瀨古――來た〳〵花田達が來たやうだ。早く口を拭へ。

花田と青島登場。

花田――（指をぽきん〳〵鳴らす癖がある）お前達は始終俺のことを俗物だ〳〵といつてゐやがつたな。若様どうだ。

瀬古――僕は汚されたミューズの女神の爲めに今命がけの復讐をしてゐるところだ。待つてくれ。（口をもが〳〵させながら物を云ふ）

花田――貴様、俺のチョコレットを喰つてるな。この畫室にはそのほかに食ふものはない筈だ。俺はそれを昨日畫箱の中にちやんとしまつておいたんだ。

澤本――隱し食ひをしておきながら……貴樣はチョコレットで畫が描けるとでも思つてるんか。神聖なる畫箱にチョコレットを……だから貴樣は俗物だよ。

花田――何んとでもいへ。然し俺がゐなかつたら、お前達は飢ゑ死にをするより仕方ないところだつたんだ。

澤本――まあいゝから、貴樣の計畫といふものゝ報告を早くしろ。

花田――さうだ。愚圖々々しちやゐられない。おい青島、堂脇は九頭龍の奴と一緒に來るといつてたか。

青島――そんなことをいつてたやうだ。何しろ堂脇のお孃さんていふのには、僕は全く憧憬してしまつた。その姿に見とれてゐたもんで、おやぢの言葉なんか、半分がた聞き漏らしちやつた。

澤本――馬鹿。

青島――あの娘なら藝術が本當にわかるに違ひない。藝術家の妻になるために生れて來たやうな處女だ。あの大俗物の堂脇があんな天女を生むんだから皮肉だよ。さうしてかの女は、藝術に對する心からの憧憬を踏みにじられて、遂には大金持の馬鹿息子のところにでも片付けられてしまふんだ……あんな人をモデルにつかつて一度でも畫が描いて見たいなあ。

瀨古――そんなか。
青島――そんなだとも。
とも子――今日はもう私、用がないやうだから歸りますわ。
戸部――俺に用があるよ。くだらないことばかりいつてやがる。俺が描くから……
とも子――又うなりを立てゝ、床の上にへたばるんぢやなくつて。
戸部――いゝから……こいつら、うつちやつておけ。

戸部ひとりだけ、とも子をモデルにして描きはじめる。その間に次の會話が行はれる。

花田――全くともちやんに歸られちや困るよ。青島、貴樣餘計なことをいふからいかんよ。……兎に角皆んな氣を落ちつけて俺の報告を聞け。ドモ又もともやちんも、そこで聞いてるんだぜ……待てよ。(時計を出して見ようとして、無くなつてゐるのを發見) 時計もセブンか。セブンどころぢやないイレブン位だらう。もういそがないと間に合はない。今朝俺は青島と手分けをして、青島は堂脇んちの庭に行き、俺は九頭龍の店に行つた。迚もたまらない奴だ。はじめの間は、中々取りつく島もなかつたが、とう〳〵利を以ておびき出してやつた。名は今一寸いへないが私共の仲間に一人、圖拔けてえらい天才がゐる。油でもコンテでも全然拔群で美校の校長も、黑馬會の白島先生も藤田先生も、凡そ先生と名のつく先生は、彼の作品を見たものは一人殘らず、唯驚嘆するばかりで、是非展覽會に出品したらといふんだが、奴、旋毛曲りで、うんといはないばかりか、てんで今の大家なんか眼中になく、貧乏しながらも、默つてこつ〳〵と畫ばかり描いてゐた。だから世間では、俺達の仲間の外に、奴のことを知つてるものは一人だつてゐやあしない。
澤本――うん全くそれはその通りだ。

花田――ところがその男が貧に逼り、飢ゑに疲れてとう〳〵昨日死んでしまつた。

澤本――馬鹿をいふない。俺は兎に角まだ生きてるぞ。

花田――誰が死んだのはお前だつてさういつたい。……ところで俺達は實に悲嘆に暮れてしまつた。一體俺達が、五人揃つて貧乏のどんづまりに引きさがりながらも、鼻歌まじりで勇んで暮してゐるのは、誰にもあづけておけない仕事があるからだ。その仕事をし遂げるまでは、縦令死神が手をついて迎へに來ても、死神の方をたゝき殺す位な勢ひでやつてゐるんだ。その中でもがんばり方といひ、力量といひ、一段も二段も立ち勝つてゐたのは奴だつた。東京の隅つこから世界の美術をひつくり返すやうな仕事が出るのを俺達は彼に於いて期待してゐた。だのに、餘りに勝れたものは神も妬むのだらう。奴は倒れてしまつた。奴は火だつた。焰だつた。奴の燃えることは奴の滅びることだつたんだ。

戸部――貴様さういつたか。

花田――うむ。

戸部――よくいつた。

花田――俺はまだかうもいつた。奴には一人の弟があつて、その弟の細君といふのが、心と姿との美しい女だつた。さうしてその女が毎日俺達の畫室に來てモデルになつてくれた。俺達のやうな、物質的には無能力に近いグループの爲めに盡してくれるその女の志は美しいものだつた。奴は竊かにその弟の細君に戀をしてゐた。けれども定められた運命だから如何することも出來ない。奴は苦しんだ。而してその苦しみと無限の淋しみとを、幾枚もの畫に描き上げた。風景や靜物にも素晴らしいのはあるが、その女の肖像畫に至つては神品だといふより外に言葉がない。

瀨古——おい〳〵それは誰の事だい。ともちやん、お前覺えがある。

花田——まあ、あとでわかるから默つて聞け。……ところで、奴が死んで見ると、俺達彼の仲間は、奴の作品を最も正しい方法で後世に遺す義務を感ずるのだ。ところで、俺は九頭龍にいつた。苟もお前さんが押しも押されもしない書畫屋さんである以上、書畫屋といふ商賣にふさはしい見識を見せるのが、お前さんの譽れにもなるし沽券にもなる。一つお前さんあれを一手に引受けて遺作展覽會をやる氣はありませんか。さうしたら、九頭龍の野郎、それは耳よりなお話ですから、私も一つ損得を捨てゝ乘らないものでもありませんが、それ程先生方がお讃めになるもんなら、展覽會の案内書に先生方から一言づゝでもお言葉を頂戴することにしたらどんなものでせうといやがつた。

瀨古——僕はいやだよ、そんなのは。僕等の藝術に先生方の裏書きをして貰ふ位なら、僕は野末でのたれ死をして見せる。

とも子——えらいわ若樣。

瀨古——ひやかすなよ。

花田——全くだ。第一俺達のやうな頸骨の固い謀叛人に對して、大家先生達が裏書きどころか、俺達と先生方と何のかゝはりあらんやだ。……ところで俺はいつた。そんなら、こちらでお斷りする外はない。奴の畫はそんなけちな畫ではない。大手をふつて一人で通つてゆく畫だ。さういふものを發見するのが書畫屋の見識といふものではないか。さういふ見識から儲けが生れて來なければ、大きな儲けは生れはしない。

澤本——俗物の本音を出したな。

花田——俺がそんなことでもして大きな儲けをしたら俗物とでも何んとでもいふがいゝ。融通のきかないのをい

い事にして仙人ぶつてるお前達とは少し違ふんだから。……ところで九頭龍が大分頭を縦にかしげ始めた。まあ來て御覧なさいといつたら、それではすぐ上りますといつた。……ところで、これからが本當の計略になるんだが、……おい皆んな嚴粛な氣持で俺のいふことを聞け。お前達の中誰でも、この場に死んだとして、今まで描いたものを後世に遺して恥ぢないだけの自信があるか、どうだ。生蕃どうだ。

澤本――無くつてどうする。

花田――よし。瀬古はどうだ。

瀬古――僕は恥ぢる恥ぢないで畫を描いてるんぢやないよ。僕は描きたいから描くんだ。

花田――わかつた。ぢやその氣持は純粹だな。

瀬古――今更そんなことを……水くさい男だなあ。

花田――ドモ又はどうだ。

戸部――出來たものは皆んないやだ。けれども人のに比べれば、俺のゝ方がいゝと俺は思つてゐる。俺はそれを知つてゐる。

花田――青島の心持はもう聞いた。青島も俺も、自分の仕事を後世に殘して恥かしいとは思はない。俺達は皆んな謂はゞ子供だ。けれども子供がいつでも大人の家來ぢやないからな。

一同――さうだとも。

花田――ぢやいゝか。俺達五人の中一人はこの場合死なゝけれやならないんだ。あとの四人が畫を描きつゞけて行く費用を造り出すための犧牲となつて俺達のグループから消え去らなければならないんだ。

瀬古――おい〳〵花田、お前氣でも違つたのか。僕達は藝術家だよ。殉教者ぢやないよ。

花田――藝術の爲めに殉死するのさ。その位の意氣があつてもいゝだらう。その代り死んだ奴の畫は九頭龍の手で後世まで殘るんだ。
澤本――何んといふ智慧のない計略を貴樣は考へ出したもんだ。そんなことを考へ出した奴は、自分が先きに死ぬがいゝんだ。
花田――俺が死んでいゝかい。……さうだもう一ついふことを忘れてゐたが、死ぬ番にあたつた奴は、その褒美としてともちやんを奥さんにすることが出來るんだ。この大事な條件をいふのを忘れてゐた。おいともちやん……ドモ又、もう描くのをやめろよ……ともちやん、お前頼むから俺達五人の中の誰でもいゝ、お前の氣に入つた人と本當に結婚してくれないか。
とも子――何んですねえ途轍もない。
花田――俺達五人の中に一人、お前の旦那にしてもいゝと思ふのがゐるつてお前いつかのろけてゐたぢやないか。
とも子――それや……それやゐないこともないことよ。
花田――待てよ。「ゐないこともないことよ」といふのは結局、ゐるといふことだね。
とも子――知らないわ。
花田――女が「知らないわ」といつたら、もうしめたもんだ。お前が一人選んだら、俺達あとに殘された四人は、綺麗に未練を捨てゝ、二人が一緒になれるやうに、極力奔走する。成功させるために屹度盡力する。だからお前、本氣になつてこの五人の中から選ぶんだ。そこに行くと俺達ボヘミヤンは自由なものだ。ともちやんだつて、俺達の仲間になつてくれてる以上はボヘミヤンだ。ねえ。さうだらう。構はないから選び給へ。俺達は縱令選にもれても、ストイックのやうに忍ぶから……心配せずに。俺達の方にはともちやんを細君に持つのに反對

する奴は一人もゐまい。どうだ皆んないゝか。よければ「よし」といへ。

一同――よし。

とも子――選んだらどうするの。

花田――そいつが殘る四人の爲めに死なゝければならないんだ。

とも子――冗談もいゝ加減にするものよ、人を馬鹿にして。（涙ぐむ）

花田――なあに、冗談ぢやないさ。わけはない、ころつと死にさへすればいゝんだよ。

戸部――花田、貴樣は殘酷な奴だ。……ともちやんをすぐ寡婦にする……そんな……貴樣。

花田――（初めて思ひついたやうに堪らない程笑ふ）何んだ、貴樣達はともちやんのハスが本當に……

瀨古――死なゝけれやならないんだらう。

花田――死ぬことになるんださ。

瀨古――同じぢやないか。

花田――同じぢやないさ。

青島――花田のいひ方が惡いんだよ。死ぬことになるんぢやない、つまり死んだことにするんだよ。わかつたら。つまり死ぬんぢやない、死んでしまふこと……でもないかな。

花田――つまり、からだ、いゝか、頭を冷靜にしてよく聞け。いゝか。ともちやんに選ばれた奴は實はその選ばれた奴の弟なんだ。いゝか。而してともちやんとその弟とは前から夫婦なんだ。ともちやんは、俺達に理解と同情とを持つてゐて、モデルも傭（やと）へない程貧乏な俺達のためにモデルになつてくれたのだ。いゝか。ところでともちやんのハスの兄貴にあたるのが、本當は俺達五人の仲間の一人で、それがともちやんに戀をして、貧乏

と戀との爲めに業半ばにして死ぬことになるんだ。今度はわかつたらう。……まだ解らないのか……濟度しがたい奴だなあ。ぢや青島、實物でやつて見せるより仕方がない、あれを持ち込まう。

花田と青島、黑布に被はれたる寢棺を擔ぎこむ。

とも子――いや……緣起の悪い……

澤本――全く貴樣はどうかしやしないか。

花田――さあ、ともちやん、俺達の中から一人選んでくれ。俺が引き受けた、お前の旦那は決して死なしはしないから。

とも子――だつてそんな寢棺を持ち込む以上は……

花田――死骸になつてこゝに這入る奴はこれだ。（といひながら、壁にかけられた石膏面を指す）こいつに繪具を塗つてお前の選んだ男の代りに入れゝばいゝんだよ。例へば俺がお前に選ばれたとするね。本當にさうありたいことだが。すると俺は俺の弟となつてお前と夫婦になるんだ。さうしてこいつ（石膏面）が俺の身代りになつてこの棺の中に這入るんだ。

とも子――はゝあ……少し解つて來てよ。

花田――わかつたかい。天才畫家の花田は死んでしまうんだ。本當にもうこの世の中にはゐなくなつてしまうんだ。その代り花田の弟といふのがひよつこり出來上るんだ。それが俺さ。さうしてお前のハスさ。

とも子――はゝあ……大分解つて來てよ。

花田――な。そこに大俗物の九頭龍と、頭の悪い美術好きの成金堂脇左門とが、娘でも連れて這入つて來る。花田の弟になり切つた俺がお前と一緒にこゝにゐて愁歎場を見せるといふ仕組みなんだ。どうだ仙人共もわかつ

たか。花田の弟になる俺は生きて行くが、花田の兄貴なる本當の花田は死んだことにするんだ。ぢやない死ぬことになるんだ。現在死なねばならないんだ。それだから俺は始めから死ぬんだ〳〵といつて聞かせてゐるのに、貴樣達はまるで木偶の坊見たいだからなあ。……ところで俺の弟は、兄貴の志をついで天才畫家になるとしても、兎に角俺が死なねばならぬといふのは悲壯な事實だよ。死にさへすれば、殊に若死さへすれば、大抵の奴は天才になるに決つてゐるんだ。(石膏面を眺めながら)死は如何なる場合に於いても、嚴かな悲しいもんだ。だからかゝる犧牲を拂ふからには、俺がともちやんのハスとして選ばれる位のことが必要になるんだ。

とも子――何もあなたなんかまだ選びはしないことよ。

花田――さうつけ〳〵やり込めるもんぢやないよ、女つてものは。

澤本――俺はもう駄目だ。俺は或る女を戀してゐた。さうして飢ゑが逼つて來た。あゝ俺は死んだ方がいゝ。俺は天才畫家として畫筆を握つたまゝ死にたいよ。

とも子――花田さん、私、死ぬ人を旦那さんにするんぢやないのね。私の旦那さんが死ぬことになるのでせう。

澤本――さうつけ〳〵やり込めるものぢやないよ、女つてものは。

花田――皆んな俺の計略が解つたな。俺達は今俺達の共同の敵なるフィリスティンと戰はねばならぬ時が來た。青島、お前と堂脇との遭遇戰についても簡單に報告しろよ。

青島――僕はかまはず堂脇の家の廣い庭に這入りこんで畫を描いてゐてやつた。さうしたら堂脇がお孃さんを連れて散歩にやつて來た。堂脇はこんな風に歩いて、お孃さんはこんな風に歩いて。さうして俺の脇に突つ立つて畫を描くのをぢつと見てゐたつけが、庭に這入りこんだのを怒ると思ひの外、ふんと感心したやうな鼻息を漏らした。お孃さんまでが「まあ綺麗だこと」と御意遊ばした。僕はしめたと思つて、物をいひ出すつぎ穗に苦

心したが、あんな海千山千の動物には俺の言葉はとてもわからないと思つて默つてゐた。全くあんな怪物の前に行くと薄氣味の悪いもんだね。さうしたら堂脇が案外やさしい聲で「失禮ながらどちらで御勉强です、大層お見事だが」と切り出した。僕は花田に教へられたとほり、自分の畫なんか何んでもないが、昨日死んだ仲間の畫は實に大したものだ、若しそれが世間に出たら、一世を驚かすだらうと、一生懸命になつて吹聽したんだ。いかもの食ひの名人だけあつて堂脇の奴すぐ乘り氣になつた。僕は九頭龍の主人が來て見ることになつてゐるから、何んなら連れ立つておいでなさいといつて飛び出して來た。何しろお孃さんがちか〳〵動物電氣を送るんで、僕はとても長くゐたゝまれなかつた。どうして最も美を憧憬する僕達の世界には、ナチュール・モルトの外に美がとりつかないんだらうかなあ。

瀨古――どうかしてそのお孃さんを描かうぢやないか。

青島――あの人がモデルになつてくれゝば僕はモナ・リザ以上のものを描いて見せるよ、屹度。

瀨古――僕はワットーの精神でそのデカダンの美を見きはめてやる。

青島――見もしないで何をいふんだい。

瀨古――君は藝術家の想像力を……

花田――報告終り。事務第一。さ、皆んな覺悟はいゝか。ともちやん、さあ選んでくれ。

もと子――私……恥かしいわ。

瀨古――お前の無邪氣さでやつちまひ給へ。何、一と言、誰つていつてしまへば、それだけのことだよ。

とも子――ぢや一生懸命で勇氣を出して……けど、私がこれつていつた人は、いやだなんていはないで頂戴ね。でないと、私本當に自殺してよ。

花田――誓ひを立てたんだから皆んな大丈夫だ。

瀨古は自信をもつて歩きまはる。花田は重いものを度々落して自分の方に注意を促がす。澤本は苦痛の表情を强めて同情を牽く。靑島はとも子の前に坐つてぢつとその顏を見ようとする。戸部は畫箱の掃除をはじめる。

とも子――（人々から顏をそむけ）では始めてよ。……花田さん、あなたは才覺があつて畫がお上手だから、いまに立派な畫の會を作つて、その會長さんにでもおなりなさるわ。お嫁にしてもらひたいつて、學問の出來る美しい方が掃いて捨てる程集まつて來てよ屹度。澤本さんは男らしい、正直な生蕃さんね。あなたとは隨分口喧嘩をしましたが、奧さんが出來たら隨分可愛がるでせうね、さうしてお子さんも澤山出來るわ。さうして物干竿におしめが賑やかに並びますわ。靑島さんは花田さんと一緒に會をやつて、屹度偉くなるわ。いまに皆んながあなたの畫を認めて大騷ぎする時が來てよ。さうして堂脇さんとやらが、美しいお孃さんを貰つて下さいつて、先方から頭を下げて來るかも知れないわ。けれどもあんまり浮氣をしちやいけなくつてよ。瀨古さん……あなた若樣ね。きさくで親切で、顏付だつて一番上品で綺麗だし、お友達にはうつてつけな方ね。でもあなた、屹度日本なんかいやだつて外國にでも行つちまうんでせう。お大事にお暮しなさい。戸部さんは吃りで、癇癪持ちで、氣むづかしやね。いつまでたつてもあなたの畫は賣れさうもないことね。けれどもあなたは强がりなくせに變に淋しい方ね。……

戸部――畜生……

とも子――惡口になつたら、許して頂戴。でも私は心から皆さんにお禮しますわ。私見たいながら〳〵した物のわからない人間を、皆さんで可愛がつて下さつたんですもの。お金にはちつともならなかつたけれども、私、何處に行くよりも、こゝに來るのが一番嬉しかつたの。とも〳〵に苦勞しながら、銘々が一番偉いつもりで、

仲よく勉强してゐるのを見てゐると、何んだか知らないが、私時々涙がこぼれつちまひましたわ。……でも私、自分の旦那さんを決めなければならないんだわ。いやになるねえ。私がいゝ人を選んでも、どうか怒らないで頂戴よ。私、これでも身の程をわきまへて選ぶつもりですから……（急に戸部の前にかけ寄り、ぴつたりそこに坐り頭を下げる）戸部さん、私あなたのお内儀さんになります。怒らないで頂戴よ。私あなたのことを思ふと、變に悲しくなつて、泣いちまうんですもの……

戸部――君……冗談をいふない、冗談を……

花田――ともちやん、出來したぞ。全くお前に似合はしい選び方だ。だがドモ又におはちが廻らうとは俺も實は今の今まで思はなかつたよ。ともちやんが戸部一人のものになつて、明日から來なくなると思ふと、急に俺達の上には秋が來たやうだなあ……然しもう何もいふな。皆んなもう何もいふな。勇ましく運命に默從する外はない。さうして戸部とともちやんとの未來を祝福しようぢやないか。

戸部――俺はともちやんをなぐつたことがある。

とも子――えゝ、たしかに二度なぐられてよ。

戸部――それでも、俺のところに來る氣か。

とも子――行きます。その代り、今度こそはなぐられてばかりゐないわ。

瀨古――夫婦喧嘩の仲裁なら僕がしてやるよ。

戸部――餘計な世話だ。

とも子――（同時）餘計なお世話よ。

青島――氣が強くなつたなあ。

花田――それどころぢやない。もうおつゝけ九頭龍等がやつて來る。おい若夫婦、お前達は今日は花形だから忙しいぞ。ともちやん……ぢやない、奥さんは庭にお出でなすつて、お兄さんの棺を飾る花をお集め下さいませんか。ドモ又、お前が描いた畫といふ畫は何んでもかんでも持ち出してサインをしろ。さうして青島、お前一つこの石膏面に繪具を塗つてドモ又の死顔らしくしてくれ。それから澤本と瀨古とは部屋を片付けて……但し畫室らしく片付けろよ。藝術家の尊嚴を失ふ程きちんと片付けちや駄目だよ。美的にそこいらを散らかすのを忘れちやいかんぜ。そこで俺はと……俺はドモ又をドモ又の弟に仕立て上げる役目にまはるから……お前の畫は大抵隣りの部屋にあるんだらう。これはお前んだ。これも〳〵皆んな持つて行かう。

とも子は庭に、戸部と花田別室に入り去る。

青島――こんなアポロの面にいくら繪具をなすりつけたつて、ドモ又の顏にはなりやしないや。も少し獅子鼻ででこぼこのある……まあこれだな、ベトーヹンで間に合はせるんだな。

青島、塗りはじめる。

澤本――あゝ俺はもう駄目だ。興奮が過ぎ去つたら急に叉腹がへつて來た。一體花田の奴餘計なことをしやがる奴だ……あの可憐な自然兒ともちやんも、人妻なんていふ人間じみたものに……あゝ、俺はもう駄目だ。若樣、貴樣勝手に掃除しろ。

瀨古――僕もすつかり悲觀したよ。もとはつていへば青島が惡いんだ。堂脇のお孃さんのモデル事件さへ無ければ、運命はもつと正しい道筋を歩いてゐたんだ。

青島――僕が惡いんぢやない、堂脇のお孃さんが存在してゐたのが惡いんだ。お孃さんの存在が惡いんぢやない、その存在を可能ならしめた堂脇のぢゞいの存在してゐたのが惡いんた。つまり堂脇のぢゞいが僕達の運命

をすつかり狂はしてしまつたんだよ……どうだ少しドモ又に似て來たか……他人の運命を狂はした罪科に對して、堂脇は存分に罰せらるべきだよ。

澤本――さうだとも。何しろ彼奴の金力が美の標準を目茶苦茶にする爲めに使はれてゐたんだ。その爲めに俺達は三度のものも食へない程に飢ゑてしまうんだ。ドモ又が死んで色づけのベトーヹンになる結果に陷つたんだ。ドモ又の命が買ひもどせる位の罰金を出させなけりや、俺達の腹の蟲は納まらないや。

瀨古――さうしてそれが結局堂脇や九頭龍を敎育することになるんだからなあ。いくら高く買はせたつてドモ又の畫は高くはないよ。今度あいつらは生れてはじめて畫といふものを拜むんだ。うんと高く賣りつけてやるんだなあ。

澤本――さうすると、俺達はうんと飯を食つて底力を養ふことが出來るぞ。

靑島――さうだ。

澤本――あゝ早く我等の共同の敵なるフィリスティン共が來るといゝなあ。おい若樣、少し働かう。

二人であらかた畫室を片付ける。花田と戸部とが這入つて來る。戸部は頭を虎斑に刈りこまれて髭を剃り落されてゐる。

花田――諸君、ドモ又の戸部が死んだについて、その令弟が急を聞いて尋ねて來られたんだ。諸君に紹介します。

一同笑ひながら頭を下げる。

戸部――俺……ぢやない、俺の兄貴の死顏を一寸見せてくれ。

靑島――どうだこれで。（石膏面を見せる）

戸部――俺の兄貴は醜男だつたなあ。

花田――醜男はいゝが髭が生えてゐないぢやないか。近所の人が悔みに來るとまづいから、剃り落した髭を植ゑ

てやらう。それから體の方も造らなきや……この棺を隣りに持つていつて……おいドモ又の弟、お前そこで殘つたのにサインをしろ。

戸部を殘し一同退場。戸部しきりとサインをしてゐる。とも子花を持ちて入場。

とも子――(戸部とは氣がつかず次の部屋に行かうとする)あの、御免下さいまし……

戸部――ともちやん……俺だ……俺だ……

とも子――あら……あなた戸部さんぢやなくつて。

戸部――俺は君のハスで……戸部の弟だよ。

とも子――あらさうだわ。まあそれに違ひないわ。戸部さんの弟つて、戸部さんよりは若い方ねえ。

戸部――ともちやん……俺は君に遇つた時から……君が好きだつた。けれども俺は、女なんかに縁はないと思つて……諦めてゐたんだが……

とも子――御免なさいよ。私、はじめてこゝに來た時、あなたなんて、默りこくつた醜男(ぶをとこ)な人、ゐるんだかゐないんだかわからなかつたんですけど、だん〳〵、だんだあん好きになつて來てしまひましたわ。花田さんが私の旦那さんに誰でも選んでいゝつていつた時は、本當は隨分嬉しかつたけれど、あなたは屹度私が嫌ひなんだと思つて隨分心配したわ。

戸部――何しろ俺は幸福だ……俺は自分の藝術の外には、もう何んにも望みはないよ。……俺はもう君をなぐらないよ。

とも子――(嬉しさに涙ぐみつゝ)なぐつてもいゝことよ。いゝから私を可愛がつて下さいね。私も一生懸命であなたを可愛がりますわ。あなたは寶の珠のやうに、可愛がれば可愛がる程光りが出て來る人だつてことを、私ち

やんと知つてゝよ。あなたは泥だらけな寶の珠だわ。

戸部――俺は口がきけないから……思つたことがいへない……

とも子の手を取つて引き寄せようとする。澤本、突然戸を開けて登場。

澤本――おうい、ドモ又……と、あの、貴樣のその上衣をよこせ、貴樣の兄貴に着せるんだから。その代りこれを着ろ……ともちやん花が取れたかい。それか。それをおくれ、棺を飾るんだから……

澤本退場。……戸部とも子寄り添はんとす。別室にて哄笑の聲。二人口惜しさうに離れたところに坐る。

とも子――今夜歸つたら、私すぐお母さんにさういつて、いやでも應でも承知させますわ。で、今度のあなたの名前は……

戸部――俺は何んといふ名前にするかな……

とも子――いゝわ、私の名を上げるから、戸部友又ぢやいけない……それぢやをかしいわね。あのね……あなた又畫かきになるんでせう……

とも子近づかうとする。瀨古登場。

瀨古――ちよつと〳〵。こゝにお前の畫がまだ殘つてゐたから……

戸部――うるさい奴だなあ……

瀨古退場。別室にて哄笑の聲、やがて一同飾りを終つて棺をかついで登場。

花田――早く〳〵……もうやつて來るぞ。棺のこつちにこの椅子をおいて……これをこゝに、おい靑島……それをそつちにやつてくれ……おい皆んな手傳へな……一時間の後には俺達はしこたま御馳走が食へる身分になるんだ。生蕃、そんな及び腰をするなよ、みつともない。……これで大體いゝ……さあ皆んな舞臺よきところに

坐れ。若夫婦はその椅子だ。何しろ俺達は、一人の大事な友人を犠牲に供して飯を食はねばならぬ悲境にあるんだ。ドモ又は俺達五人の仲間から消えてなくなるのだ。ドモ又の弟はその細君のともちやんと旅の空に出かけることになるだらう。俺達のやうに良心を以て眞劍に働く人間がこんな大きな損失を忍ばねばならぬといふのは世にも悲慘なことだ。然し俺達は自分の愛護する藝術のために最後まで戰はねばならない。俺達の主張を成就するためには手段を選んではゐられなくなつたんだ。俺達はこの棺の中に死んで横たはるドモ又の靈にかけて誓ひを立てよう。俺達はこの友人の死に値ひするだけの立派な藝術を生み出すことを誓ふ。

一同――誓ふ。

花田――俺達は力を協せて、九頭龍といふ惡ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者の金嚢から、能ふかぎりの罰金を支拂はせることを誓ふ。

一同――誓ふ。

花田――その爲めには日頃の馬鹿正直を拋つて、巧みに權謀術數を用ふることを誓ふ。

一同――誓ふ。

花田――但し尻尾を出しさうな奴は默つて引つ込んでゐる方がいゝぜ。それでは俺達四人は戸部とともちやんとに最後の告別をしようぢやないか。……戸部、お前のこれまでの藝術は、若くして死んだ天才戸部の藝術として世に殘るだらう。然しそこでお前の生活が中斷するのを俺達はすまなく思ふ。然しその償ひにともちやんを得た以上、不平をいはないでくれ、な。さうしてお前は新たに戸部の弟として新生面を開いてくれ。俺達はそれを待つてゐるから。ぢやさよなら。

一同交る〴〵握手する。

花田――ともちやん、お前は俺達の力だつた、慰めだつた、お母さんだつた、可愛いゝ娘だつた。お前と別れるのは俺達全くつらいや。だからお前の額に一度だけ皆んなで接吻するのを許しておくれ。なあ戸部いゝだらう。

戸部――よし、一度限り許してやる。

花田――ともちやんさよなら。（額に接吻する）

とも子――さよなら花田さん。

澤本――俺はまあやめとく。握手だけしとく。

とも子――さよなら生蕃さん。

靑島――さよなら。（額に接吻する）

とも子――お大事に浮氣屋さん。

瀨古――唇をよくお見せ、あゝあ。（額に接吻する）

とも子――さよなら可愛いゝ若樣。

とも子さすがに感情せまつて泣き出す。

花田――よし。それからドモ又の弟にいふが、不精をしてゐると、頭の毛と髭とが延びて來て、ドモ又にあと戻りする恐れがあるから、今後決して不精髭を生やさないことにしてくれ。

とも子――そんなこと、私がさせときませんわ。

戸外にて戸をたゝく音聞こゆ。

人の聲――えゝ、御免下さいまし、九頭龍で御座いますが、花田さんはおいでゞ御座いませうか。

他の人の聲――私は堂脇ですが……

花田――そら來やがつた。……皆んないゝか大丈夫か……俺達は非常な不幸に遇つたんだぞ。悲しみのどん底にゐるんだぞ。此の際笑ひでもした奴は敵に內通した謀叛人として皆んなで制裁するからさう思へ。九頭龍も堂脇も……今開けます、一寸待つて下さい……九頭龍も堂脇もたまらない俗物だが、政略上向腹(むかつぱら)を立てゝ事をし損じないやうに皆んな誓へ。

一同――誓ふ。

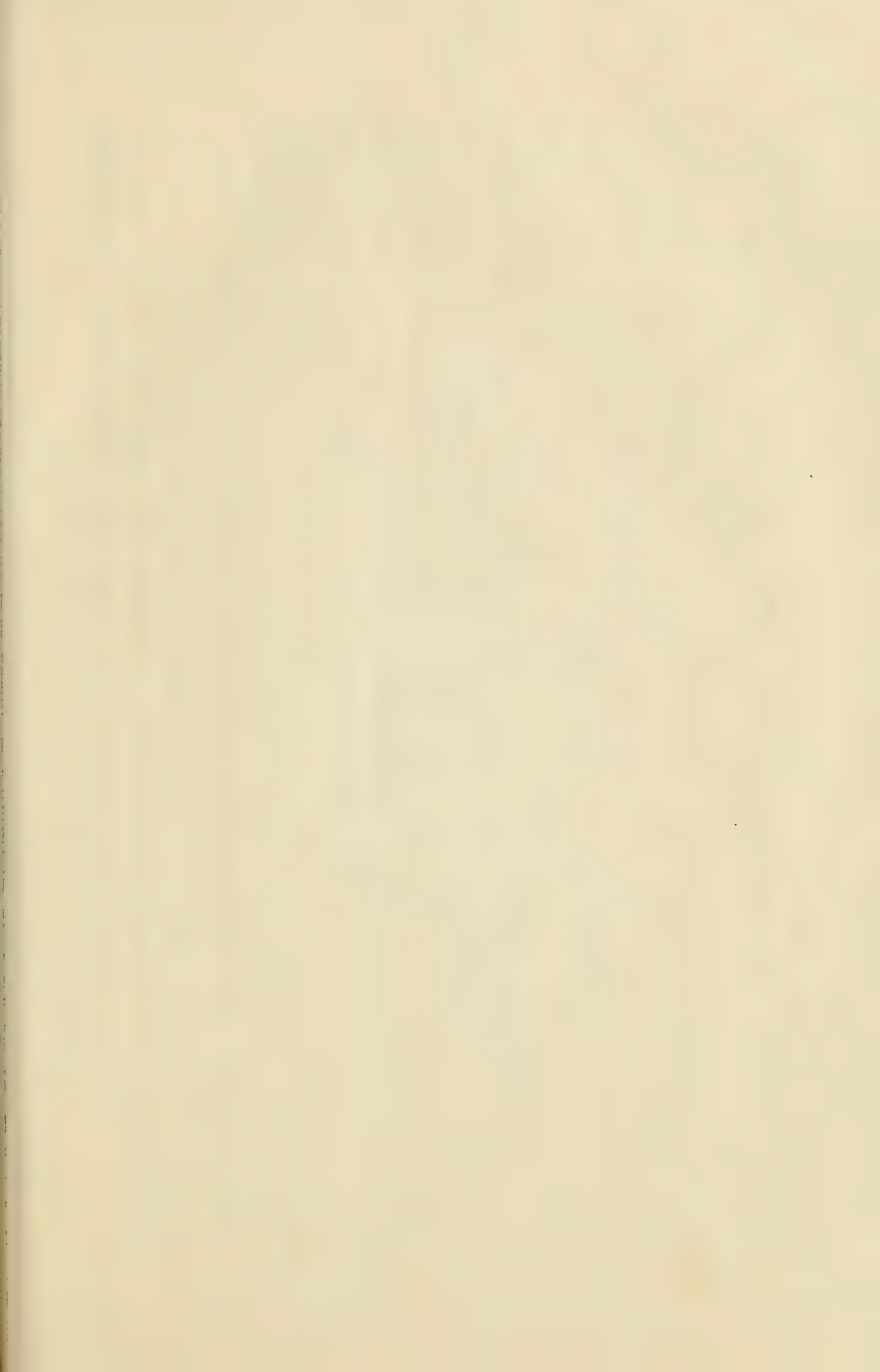
花田――泣ける奴は時々淚をこぼすやうにしろ、いゝか……ぢや開けるぞ。

澤本――花田、ちよつと待て……(茶碗に二杯水を入れて戶部の所に持つて行く)おいドモ又、貴樣の淚をこの中に入れとくぞ。これはともちやんのだ。尻の後ろにやつとけ。慌てゝこぼすな。

花田――しいつ。(觀客の方に向いて笑ふのを制する)ぢや開けるぞ。皆んなしかめつ面(つら)をしてろ。

とも子はさつきから本當に泣いてゐる。戶部、茶碗から水をすくつて眼のふちに塗る。花田、戶を開けに行く。

――幕――

(一九二二年十月、「泉」所載)

御柱（おんばしら）（禁無斷興行）

場所　下總の或る都會の東南半里程を距（へだ）てた或る村の百姓家。

時　安政元年五月九日の朝。

人　龍川平四郎――彫物大工。六十一歳。

嘉助――堂宮大工。四十歳。

龍川久和藏――平四郎の婿養子。三十二歳。

お初（はつ）――平四郎の娘。久和藏の妻。二十七歳

仙太郎――久和藏の息子。八歳

五兵衞――百姓家の主人。五十七歳。

五兵衞の女房――五十七歳。

其の他

風の音。幕靜かに開く。

納屋を兼ねた五兵衞の裏庭の離れ。土間には莚を敷き、半成の木彫、木屑、彫刻用の器具、子供の玩具等。

土間に續きて座敷、その隣に小間。境は古びた障子立て。

久和藏泥まみれになり、疲れた樣子で座敷に腰かけて草鞋を脫いでゐる。お初は土間の片隅で立ちながら泣いてゐる。

行燈に薄く灯がともつて、朝はまだ明けきらぬ。

久和藏――見舞の人がそろ〳〵來るづら。顏洗ひ代りに澁茶でも……お前……お初……へえ泣いたつて追つくもんか……

お初、久和藏には答へず、涙を押し拭つてせつせとそこらを片付けはじめる。久和藏立つて七輪に炭をつぎ足さうとする。

お初――いんね、それは私が今するに、お前はこれを(彫刻物を指し)、その壁際になほしておくれ。一晩中ちつとも眠らなかつたら、五月といふに朝冷えが……お前まだ濡れたまゝだぞな。

二人彫刻物を片付け始める。

寒くはないかえ。

久和藏――何あに。けんど寒いといへば寒いなあ。郷里では御柱の祭もへえ明日といふだが……野郎、嘉助の野郎、妙見樣の罰があたるものかあたらねえものか……己れの猜みからこんな取りかへしもつかねえ大事をしでかしやがつて……俺らあへえ(彫刻物を見やりながら)これをたゝき割りてえよ。

お初――そりやお前、お前の……萬が一にもお前の僻みぢやないかえ。

久和藏――(險しい眼でお初を見やりながら)俺の僻みだ……今もよくいつて聞かしたに、考へても見ろ。下小屋に不寢番を置いて、火元に氣を配るのは大工の衆の役目だで、あの衆が火を間違はねえで、誰が間違ふもんか。殊にも、明日は地鎭祭といふその晩だ。粗相のある筈がねえに……五つ時さがりから火の手が上つてへえ……それもをかしなことだが、火元は一と處や二た處どころではねえ……つけ火だ。つけ火だ。嘉助が、あの嘉助の畜生が(このあたりより久和藏は座敷に、お初は久和藏に着物を着換へさせる)、俺らあ家のおとつさまの評判を猜ん

で仕組んだことだわ。
お初――だけんど……
久和藏――おとつさまが、へえ二年の上も、かうやつて他國の空で難儀をして、やうやく仕上げた宏大もない仕事が、昨夜一晩で他愛もなく灰になつたゞ。俺もおとつさまに負けず骨を折つたつもりだつた。お前の甲斐甲斐しさもへえ一通りではなかつた。それもこれも今は無駄なこんだ。……おらまだ燃えてるづら、半鐘が聞こえるに……
お初――（戸口なる急造の厨の方に行き、七輪をいぢりながら、小間の方に聞耳を立て）おとつさまは眼をお覺しなさつたか知ら、音がするやうだえ。……あれ、まだ向うの空が赤く見えるも何んも。
五兵衛、野菜物を下げて登場。
あれ、家主様濟みましない、一晩中お寢みなさりもせずに、何かと難有う御座ります。
五兵衛――なあに、災難の節はお互ひのこんだよ。親方はよく休んだかなあ。本卦返りといやあ、はあ體を大事にしねえぢや……坊やもまだ眼が覺めねえだね……や、久和藏さん歸つたけえ。
久和藏――やあ家主様、お早う御座ります。
五兵衛――（仕事場の方に廻り脱ぎ捨てた着物に眼をつけ）先づでつかい騷ぎだつたんべ。えらい泥になつたなあ。お前さんとこの彫つたものはちつとは助かつたんべえか。
久和藏――何から何までお世話になります。……（火鉢を持ち出しながら）あの風に煽られたぢやへえ一たまりもないで御座ります。……俺らあ死んだも同然に力が落ちてしまひました。
五兵衛――さうだつぺえともさ。時に……

久和藏――（神棚の下にある小襖間用の透彫二枚を見かへりながら）せめてはと思つて、手輕な奴をあれだけさらひ出しはしたものゝ、大工の衆と違つて、俺らあ家は手不足だで……何せ、かうしてへえ親子ぎりのこんだから……

この會話の間お初、五兵衞に茶をすゝめ、小間の方に近づき隣室の寢息を窺ひ、更らに愁ひを催す。

五兵衞――して大工の衆も鳶の衆も、彫物小屋の方に手傳ひのしつこなしか……はあて……この火事についちや村にも妙な噂が傳はつてゐるだよ。

久和藏――え、どんな噂が……

五兵衞――そりや……一體噂といふものは、はあ藝もねえもんだから聞いたら聞き流しにして貰ふべえ……何んでもはあ、ゆんべの妙見樣の火事てえは怪火だといふだ。たゞの過ちではねえ風だ。……誰となく見てゐたゞが、いかく燃え上つた火の中に、白裝束をした白髮の姿のものがふつと現はれてな……それが見る〳〵火花の中に消えたといふこんだ。妙見樣が怒りをなさつたゞ。もうお宮はどうあつても建つことはねえといつてゐたが……

久和藏――それなら俺もまざ〳〵と見た。白い衣冠束帶のお姿が勿體なくも火の中に消えて行つたゞ。それを見たものは誰れ彼れとなく、へえ膽まで震へ上つたか、恐れをなして遁げ出したゞよ。

五兵衞――はてすさまじいこんだなあ……親方の腕が餘り冴えてゐるで、妬みに思ふ奴がゐたかも知んねえだ。それでなくつて何んであんな處からはあ火事が出べえさ……何しろおつかねえこんだ……やれ〳〵……ぢやまあ久和藏さんもたんとがつかりしねえが分別だあ。何もはあ因緣ごとだかんなあ。……別に何か用は無えかね。

久和藏――へえ俺も歸つてゐますで、なゝ案じなして。……やい〳〵お初、茶呑茶碗がいくつかあるか。

お初――あれ、いくつもなかつたわやれ。

久和藏――それぢや家主樣、ちつと貸して下さりますか。見舞人が來ると思ふで。
五兵衛――安いことだともさ。ぢきに持つて來ますべえよ。
久和藏――忝う御座ります。
お初――（同時に）難有う御座ります。

五兵衛退場。お初入口よりにじり上り行燈の灯を消して片隅によせ、久和藏の眞向うに坐る。

お初――お前、仕事場に火をかけたのは嘉助親方に違ひないと思つてゐますかえ。
久和藏――……
お初――心底からさう思つてゐますかえ。
久和藏――おゝ、さう思ふに不思議があるといふだか。お前はあの野郎に恩でも着せられてゐるづら……
お初――あさましい……お前は……お前は男か……男かえ……男なら何んでおめ〳〵と歸つて來たゞえ。何んで嘉助といふ奴に仕返しはしてくれなかつたゞえ。これが浮世の年貢のなし納めだといつて、おとつさまがかうして仕上げなさつた大事な仕事を……おゝ私は胸が痛むわやれ、むごたらしい……その仕事を灰にし腐つた男に、お前は恨み言一つ云ひ得ずに歸つて來なすつたゞなあ。お前はどの面さげておとつさまにお辭儀しなさるえ。昨晩はおとつさまはこゝにかう坐りきりで、村の衆が見て來たことを、笑つたなり聞いてゐなすつたが、その胸の中を思ひやると、側にゐた私は切なくて、泣かずにはゐられなんだ。……お前……久和藏さ……お前の仕事も煙になつたに、まこと口惜しくはねえかえ。
久和藏――……
お初――お前は恩知らずだえ。七つの歳からこの家に養はれて、仕事の手ほどきからして貰つてゐるに……ほん

とに……

久和藏――俺が男か男でねえか、恩知らずか恩知らずでねえか、見てゐろ。

お初――その高慢をいふ口がありや……

この時子供の叫び聲小間より聞こゆ。お初は、つと立つて小間の障子を開けて見る。

平四郎――（小間の中から）やい〳〵お前等がたんとわめき合ふで仙太郎がうなされるわ。昨夜はおそかつたでまだねむいらに……やあ、よし〳〵何んでもねえだ。ぢつと眠つてろ……やあ、よし〳〵。

お初小間に入る。入れ代りに平四郎寢衣の上に長半纒を羽織りながら登場。久和藏いひ出る言葉もないやうにうづくまる。

久和藏、いつ歸つたな。

久和藏――さつきがた戻りました。

平四郎――御苦勞だつたなあ。すつぱり燒けたか。

久和藏――……

平四郎――さうか……へえ何時(なんどき)だ。曇りだか晴れだか。まだ風は落ちねえな。

久和藏――六つ少し前で御座りますづら……昨晩は少しはお休みなさりましたか。

平四郎――うむ。彼れ是れ……仙太郎が時折り眼をさましてなあ……どれ顏でも洗はづ……

顏を洗ひに立たうとする。お初小間より出て來て、

お初――いんね、そこにおいでなして、今私が水を汲みますに。

お初廚に下りて水を汲みて土間の方に持つて來る。平四郎顏を洗ひ終りて町の方を見ようとする、お初が何んとかして

さうさせまいとするけれども頓着なし。

平四郎――（獨白の如く）ふむ、……まだえらい煙だわやれ、何しろ山のやうな木材だでなあ……や、お袋さまか。お初、家主のお袋さまが茶碗を持つて見えたぞ。お早う御座ります。

五兵衞女房登場。

女房――はあ眼が覺めたゞなあ……お早う御座りますよ。お初さ、こんなものでも間に合ふべえか。

お初――間に合ひますどころか、難有う御座ります。

女房――久和藏さんも歸つたゞね。えらいまあ災難で、嘸や難儀なことだんべえなあ。

平四郎神棚の方に向きながら、

平四郎――お袋様、昨夜お賴み申したお御酒はへえ來ますだか。

お初――それならこゝへ來てゐます。

女房――何んぞまだ用はねえかね。お、用といへば、嘉助親方といふ人が來て、俺らが家で親方の眼を覺ますのを待つてるだあよ。どうすべえなあ。

久和藏――何、嘉助が……

久和藏走り出ようとする。お初思はずそれをとめる。

平四郎――やい〳〵久和藏、手前づれの無分別者に嘉助がてこじろにあふ男かい。引つ込んでゐろ。手前は（土間の中央に長々と置かれたる雲龍の總彫りの虹梁を指し）そこにへたばつてそこの肩の所の仕上げでもするだ。

五兵衞の妻、去りかねてまご〳〵してゐる。

女房――親方、嘉助親方は……

平四郎――來いと申して下さりまし。

五兵衞の妻退場。

（久和藏に向ひ）手前は嘉助が來ても出しやばるぢやねえぞ。俺には俺の分別があるで……假令ほかの仕事は燒けをへても、その虹梁を仕上げてこの土地に殘して行かづ。念入りに仕上げろよ。やい〳〵お初、お御酒を明神樣に（神棚を指す）上げてくれろ。

お初――へえ上げました。

久和藏澁々道具を揃へて仕事にかゝる。

平四郎――さうか。今朝はむしやくしやするで顏洗ひをやるぞ。

平四郎神棚に行き祈念する。お初は朝酒の燗にかゝる。平四郎祈禱を終へてふと久和藏が持ち歸りし彫刻物に眼をつけ、

平四郎――久和藏。

久和藏――へ……

平四郎――これはどうしたゞ。

久和藏――……

平四郎――燒け殘りを拾つて來たゞな。

久和藏――火の中に飛び込んで、それだけは助け出したけんど、手の足りない俺らあとこのこんだで、あとはへえ無殘々々燒け終へたで御座ります。

平四郎――未練がましい奴が……

大工嘉助、岡持ちをさげたる手代を連れ、五兵衞に案内されて登場。

五兵衛——親方お早う御座りますよ。嘉助親方をこゝへお連れ申したから……

お初急ぎ小間の方へ退場。平四郎彫刻物を下に置き坐りたるまゝ。五兵衛手代と共に退場。

嘉助——お免なせえまし。親方。寝ごみに押しかけたやうな仕儀になつちめえやして……

平四郎——ま、お上り。

嘉助座敷に上りよき處に坐る。久和藏不穩。

久和藏、その龍の肩の方が肉が厚いでそこを丹念にはつるだ。（嘉助に向ひ）お早う御座ります。

嘉助——お早う御座いやす。久和藏さんえ、お早う御座いやす、……久和藏さんはまだ仕事を……親方、何から申してよろしいやら、お互ひの災難とはいひながら、こんなことにならうとは、夢の夢にも思はねえことで御座いやした。口惜しいといつたんぢや方圖がつくが、私の胸は方圖なしにかきむしられるやうで御座いやす。お悔みを申しに來てゐて、こんなことをいつちや間抜けじみてゐやせうが、私の心の中もおもひやつて下せえまし。……親方と一緒になつてかうして二年の餘も、誠心（まごゝろ）のありつたけをこめて、江戸職人の名折れになるまいと、夜の目も合はさずに精を出しやした。去年は去年で品川のお臺場普請があるし、今年はまた炎上（えんじやう）した御所の御造營で、第一に人手が引けるなり、西京への御寄進といふんで木場の材木は手つ拂ひになるなり、手違ひから手違ひがつゞきやした。だがかうなつちや私も損得づくぢや御座いやせん。痩腕（やせうで）ながら後々の人に後指をさゝれねえ仕事をしたいと念じ切つてゐやしたが、ふと魔がさしたとでもいふ……さあやつぱり魔がさしたんで御座いやせう、思ひも寄らねえ災難が持ち上つて……私は、親方、生きてる空も無えやうで御座いやす。

平四郎——（不氣味な沈默の後）親方はいくつだな。

嘉助——何んで御座いやす。

平四郞――親方はいくつだといふだ。

嘉助――はて丁度になりやすが、それが……

平四郞――四十かえ。……若いなあ。待てよ、ふむ、すれば亥の年づら。思慮分別のやたらつゝ走る星まはりだわやれ。俺は寅だ。寛政六の六十一で御座ります……生ひ先のへえたんとねえ爺だよ（放笑）……やい〳〵お初、顏洗ひはどうしたゞ。

お初小間より出で來り、嘉助には挨拶もせず厨に行つて燗を見る。

お初――つい忘れてゐて、つき過ぎましたが……

平四郞――構はねえ。

お初燗德利と猪口とを取りそろへて平四郞の處に持つて來る。

これは俺らが獨娘のお初といひますだ。お初、これが江戶の棟梁樣の嘉助親方だわやれ。かしこまつてお辭儀をしろ。

お初父の命に從はず。

親方、氣を惡るくしねえで下されべ。歲は二十七たが甘やかして育てたで、八つになる餓鬼を持ちながら己れが三つ子同樣で御座りますだ。

お初そのまゝ小間に入る。そつと小間と土間との隔ての障子を開け、久和藏をそゝのかして嘉助に害を與へようとする。

嘉助――（辛く憤りを鎭めながら）朝からけづりをおやりなさるなら、心ばかりでは御座いやすが、丁度御見舞にと思つてちよつとばかり肴を持たして來やしたから……

平四郞――それは忝う御座ります。……やい〳〵久和藏、親方からいたゞいた肴をそれ、戶間口にでも出しておお

け。犬でも來て食ふづらに。

久和藏立ちていひつけられた通りにする。

嘉助——(腹にすゑかねて) 親方、それや何んぼ何んでも無體といふもんだ。何か私に意趣(いしゆ)でもあるなら、この場ではつきりさういつて下さいやし。

平四郎——意趣……(笑)それは無えかといへば無えでも無え。……が……それはそれとして、江戸ではこれを朝酒といひなさるやうだが、俺らが在所の諏訪といふ山國では、顏洗ひといひますだ。これで一杯かう(燗徳利に手をかけ) あつゝ……熱いわ。熱過ぎるわ……これは全くお前樣見たやうな酒だわやれ。(放笑)

長半纏の裾を徳利に卷いて酒をつぐ。

嘉助——……

平四郎——先づ毒味(どくみ)もしたに、親方も一杯行かうづ。

嘉助——(苦(にが)り切つて) 憚りながら顏を洗ふに人樣の世話にはなりやせん。

平四郎——さうか、へえ顏は洗つたゞか……頸根つ子も序でに、洗つて來さつしやると世話がなかつたに……

久和藏窃(ひそ)かに手斧を執り上げる。

やい〳〵久和藏、手斧でそこをほつて何にする氣だ。鑿(のみ)で行くだそこは。顏が洗つてあれば俺らが言葉もちつたあ解らづ。……お前は仕事で俺の向うに立つ氣だつたゞな。

嘉助——知れたこつた。お前も俺も同じ伊藤平の下請(う)けだ。信州からぽつと出の彫物大工づれに、江戸の大工がひけを取つて引つ込んでゐられるかい。

平四郎——(放笑)先づ拙(まづ)いながらお前ほどの腕があつたら、物のよしあしは見極めがつく筈だ。……それがお前

の不仕合せになつたゞなあ。意氣込みだけでは仕事の出來るものではねえからな。賤しいながら藝と名のつく仕事をする上は生れ付きといふものが口をきくだぞ……修行が譃はいはせねえだぞ。俺の仕事とお前の仕事とを已れが眼でしつかと見比べるがいゝだ。……やい／＼久和藏、手前は今朝氣でも狂つたか。そんな大鑿をつかつたら、龍の鱗はけし飛ばづ。小鑿で行くだそこは……五分鑿だ。五分鑿だといつたら五分鑿でやれといふに、野郎……（嘉助に向ひ）お前は……

嘉助――そりや、いふまでもない事だ。俺も七つの年から年期を入れて、暑い寒いの辛い味から、鋸、鉋の甘え味まで、この文身同樣に身にしみついてゐるんだ。堂宮にかけちや、廣い江戸でも深川の嘉助で通る男を、お前の見くびりやうは、そりやほぞがちつとばかり外れてゐようぜ。寒天や蕎麥の名所では、臺がたつたばかりで凡くら者が名人と化けられるかは知らないが、憚りながら山のない江戸界隈ぢや通らねえ。

平四郎――お前見たやうな未練者がそんな口をきいてゐたら、犬も尿をひりつけめえまでよ。

嘉助――何んだと……年嵩だと思やこそ、折れて見舞ひに來れば……

久和藏いきなり手斧を取って嘉助に走りかゝらんとす。

平四郎――馬鹿、砥石はこつちには無え、そこの隅だわやい。（久和藏手を下しかねる）見舞ひに來ればではねえ、探りに來ればといふだそこは（放笑）……さう短兵急に氣をいらつちや、お前は壽命を取りにがさづ。孫奴が眼をさますで落着いて貰はうかな。久和藏等も物々しいぞ。……久和藏、村の衆が見舞ひに來るとうるさいに……お初、鼻紙を……やあ、それにも及ぶめえ、その莚に、「忌中だで……」……かうつと……「忌中だで客無用」と書いて戸間口につるしておけ。でつかく書け。

お初――おとつさま緣起でもねえ、忌中だなんて誰が死にましたえ。

平四郎——木曾の義仲が死んだわやれ。

以下の會話の間に久和藏命ぜられるまゝに莚に書いて、お初に手傳はせてそれを奥へ行き木立にかける。

（嘉助に向ひ）ちつたあ氣が落着いたづら。俺が一つ昔話をして聞かせづ。

偖て、俺らが在所に諏訪明神といふ、いやちこな荒神の鎭守がある。（神棚を指し）な、こちらが當國の妙見様で、むかうが諏訪明神だ。こちらの宮造りは久和藏がしたゞ。あちらは俺だ。しつかと拜んでおくがいゝ。……この明神の御本體は建御名方尊といつて、大黒様のお子ぢやげな。その尊がな、仔細あつて信濃國に閉門になられたゞ。閉門といへば、家のぐるりに柵を打ちまはすが定だによつて、それが末代に殘つて、寅の年申の年と、七年目には御柱の祭といふがあるだ。周り五抱へもあらづ立木を切り倒して、八ケ嶽の山中から、郷々のものが引き出すだが、そいつの里引きが丁度今月の明日にあたるわやれ。それを一本づゝ社の四隅にぶつ立てるだ。それが柵の型を傳へたものだといふことだ。信濃國はさういふ國だ。山が高く、雪が深く、人の心も險しいが、一旦腹をするゑて山を出た上は、出たゞけのことはしねえではおかねえ人氣だぞ。

俺らが昔話といふはそれだけだ。

偖て一昨年、下總の妙見神社といつて、由緒の深い御朱印二百石の御社を、江戸から南に類の無え見事なものに建てかへるとて、彫刻一切を引き受けたらと名古屋の棟梁から名指しがあつた時、俺は死物狂ひで、山又山の柵を踏み越えて江戸の空へと轉がり出たゞ。相模の運慶、飛騨の甚五郎には及ばずとも、信濃國ではあばき足らぬこの腕つぷしを、根かぎり試して見づと思ひ立つたゞ。……俺の向鎚にまはる大工といふがお前だつた。俺にとつては不足千萬な生腕だ。……先づさう惡あがきをするものでねえ。……腕のちがひが知りたければも一度眼をするゑてしつかとこれを見たがいゝだ。これを見ても誠頭が下らずば、お前の心はへえ慢心の業病で氣息

の根が絶えるだぞ。

平四郎、久和藏の持ち歸りたる彫刻物を嘉助の前に置く。嘉助始めは輕蔑の態度を示せしが、段々と牽きつけられるやうになつて、それを熟視する。

よつく見ろ……見えたか……手前もそれが見えねえ程のみじめな腕ではねえ筈だ。……それでもまだ頭が下らねえか……口の先きでは何んとでもいへ、手前づれが俺と肩を列べられる大工かさうでねえか、胸に手をあてて思案して見ろ……たはけたこんだわ。末代までも國の寶とならづものを、手前はよくも一晩の中に灰にしたな。（沒義道に嘉助の膝許から彫刻物を奪ひ取る。嘉助その言葉に思はずぎよつとして平四郎を見守る）手前がへえ己れ一人の愚かさから國の寶を滅ぼしたゞぞ。

嘉助――飛んでもねえ。聞き捨てならねえよまひ言をほざく上は、俺にも俺の覺悟がある。老いの繰言と思つて默つて控へてゐれば方圖のねえ。

平四郎――俺の言葉がまだ胸にはこたへねえか。仕事づくで爭ひもし得ねえ畜生はかうしてくれるわ。久和藏、手斧をよこせ。

久和藏逸早く手斧を平四郎に渡し、己れも得物を取り上げる。嘉助も懷ろに手をさし入れて身構へする。平四郎手斧を手にし、やゝ暫く嘉助を睨みつめてゐたが、突然憤りを發して自分の彫刻物を滅多打ちに打つて微塵に碎く。一同思はず固唾を呑む。

仙太郎その物音に眼を覺まし、大聲に泣き出す。お初小間にかけこむ。久和藏その場にくづれて男泣きに泣く。

平四郎――（手斧をがらりと放げ棄て）俺て俺も年を喰つたなあ。愚に返り腐つたわやれ。……久和藏、明日は俺は在所に歸るぞ……

仙太郎母に伴はれて登場。

やれ仙太、眼が覺めたか。（仙太郎を抱き取る）昨夜は火事でおつかなかつたづら。へえ何んでもねえだぞ。案じるぢやねえ。

仙太郎――（碎かれた彫刻物を見て）おぢいさまか、今これを敲き割つたは。俺はへえ驚いたゞえ。

平四郎――うむ、氣にすまねえ仕事は俺はかうして敲き割るだ。……仙太、お前は諏訪に歸りてえ〳〵といつてゐたなあ。

仙太郎――あいよ、おばあさまが皆の歸るを待つてゐるらに。……俺は御柱の祭も見てえだし。

平四郎――げえもねえ。祭は明日だに。諏訪へ行くには兩手の指の上も日がかゝるだ。……さうだ、おばあさまも村の衆も俺ら達を待つてゐるら。明日はへえ歸るぞ。諏訪は今若葉になつて、不如歸が啼きしきつてゐるづら。八ケ嶽の雪もあらかた解けて、山膚が青く見えるぞ。

仙太郎――俺は御柱の祭が見てえだわやれ。

平四郎――はて聞き分けのねえこんだお前は。

仙太郎――だけんどおぢいさまの仕事はへえし終へたゞか。

平四郎――へえ終へたわやれ。

仙太郎――し終へたゞけえ。

平四郎――うん……終へたゞ。

仙太郎――（お初に）し終へたゞなあ、へえ歸るだで……俺は今日おぢいさまの仕事を町に見に行くだ。

久和藏――やい〳〵仙太。俺ら達の彫つたものは、お宮が建つてから飾りつけるだに、お宮は木取りをし終へた

ばつかだで、俺らが家の彫物は大事に下小屋にかくまつてあるだ。

仙太郎――したら、おぢいさまもまだお宮に飾つたを見ねえだな。

平四郎――誰も見ねえだわやれ。

仙太郎――それが見られねえなら、俺は御柱の祭が見てえなあ……

平四郎――よし〳〵。したらおぢいさまが見せてやらづ。久和藏、その虹梁の鼻へ綱を卷けや。仙太、これからな、おぢいさまはへえ仕事はやめて、ゆるりとお前と遊び暮らすだ。へえ元のやうには腹は立てねえぞ。……お前だけを可愛がるとおとなしいおぢいさまになるらよ。嘉助親方、俺も今は、ひとむきに腹を立てた。年を取るとこらへ性が失せるでなあ。……お前樣はさつき魔がさしたといつたが、まつたくだ。人間冥利をぶつ越えた仕事をしたばつかに燒け終へたとおもへば、腹を立てるでもなかつたゞ。

嘉助――親方……平四郎親方……私や今になつて始めて眼が覺めやした。濟まねえことを仕でかしてしまひやした。

仙太郎驚きて平四郎よりお初の膝に移る。

平四郎――眼が覺めたか。

嘉助――えゝ私しや何んといふ人非人だ。わが身の腕の足らねえのは棚に上げて、町の人も村の衆も親方の仕事ばかりに眼をつけるのを腹にすゑかねて、かうして普請が出來上つた上、二人の名前が末代まで列んだら、死んでも死に切れねえ業曝らしだと一圖に思ひこんだその擧句が……何をお隱し申しませう、親方、仕事場一帶に……

平四郎――魔がさしたゞよ、誰の科でもねえわやれ。

嘉助――さういつて安閑としては居られません。私は……

久和藏――したら手前が……

お初――むごい事をし腐る人畜生……

平四郎――（押しへだて）何んの、魔がさしたゞといふによ。……その魔性の奴の可哀さはやれ。……俺はへえかうしたやくざな爺だが、一藝にはまり込んでこの長い年月を苦勞したばつかで、その魔性のものゝ殊勝さがしみ〴〵と胸にこたへますだ。……お前樣の心持も今になると俺にはよつく分る。手前だ、お前だと呼ばれる人間では無え、お前樣は矢張りお前樣だ。……お前樣はまだ生ひ先きが長いだから、念にかけて早まつたことをするではねえぞ。

嘉助――……

消え半鐘の音近く聞こゆ。

平四郎――あれは何づら。

嘉助――おゝ、しめつたな。

久和藏――村でうつた消え半鐘で御座ります。

平四郎――さうか。へえ火事も終へたか。……ほう、風もねえいゝ朝げになつたなあ。……うら〳〵とした景色

だわやれ。

仙太――おとつさま、綱がついたかえ。

お初――この子といへば會釋のねえ。

久和藏――まて〳〵。

五兵衛、嘉助の手下の大工を案内して登場。

大工――こちらで……左樣で……もし、やじやう、こちらですかい。大變だ。

嘉助――(屹となり) 何んだ。

大工――何んだつてやじやう、大事が持ち上つてしまひやした。火事場にとう〳〵人死が出來ちやつたんだ。それも生やさしいんぢやねえ、神主樣が……宮司樣がやじやう……宮司樣が我と進んで火の中に飛び込みなすつたんで御座います。……何んでも眞夜中頃、白裝束の姿のものが火花の中に見え隱れしてゐたのは、やじやうも承知で御座いませう。今から思へばそれが宮司樣だつたんだ。

久和藏――それなら俺もたしかに見た。

大工――おいたはしい、それが眼もあてられねえ姿になつて……

嘉助――それぢや何んだな、火事を出したのを濟まねえ事におもひなすつて、妙見樣にも代官所にも申譯の爲め、我と我が身をその火で燒いて……おしまひなすつたか。

大工――全くそれに違ひねえ。何んでも書置きが殘してあつたんで、大騷ぎになつて、私達も鳶の者も滅多やたらに火の中を尋ね廻つた擧句、骨にならんばかりの死骸を搜しあてたんで御座います。……これは何をおいてもやじやうからも代官所に申し立てねえぢや落度になると思つて、私は取りあへず駈けつけやした。……すぐ歸つておくんなせえ。

嘉助――よし、今行くから待つてゐろ。……今お聞きになつたやうな譯で御座いやす。つく〴〵私は罰あたりだ……私は……

平四郎――出る所に出てその屆けをさつしやれ。早えがいゝ。だがな、お前樣の仕事はこれからだで、夢にも短

氣は出さねえもんだ。火の元は大工衆のあづかりだで、火事を仕でかしたは、何處までもお前樣のあやまちだが、過ちは誰が身の上にもあるものだでなあ。この界隈の衆がどのやうな噂を立てようとも、びくともするではねえ。事が面倒になつたら俺がこゝにひかへてゐるで……お前樣の仕事も念の入つた素晴らしいもんだつたに、それを無殘々々と燒き終へたお前樣の心を思ふと、老いぼれは淚もろいで、貰ひ泣きになり腐りますだ。

嘉助——親方、腸をかきむしられるやうで御座いやす。私は今になつてはもう何も申しません。……若し私が生き延びてゐやしたら、長い眼で見てゐて下さいまし。

平四郎——長生きをさつしやれ、俺は信濃の雪の中からじつくり見てゐるづらに。

嘉助——では御免なさいまし、親方、久和藏さん、ごしんさん。

平四郎——早々とお見舞を忝う御座りました。

久和藏、お初相當の挨拶をする。嘉助及び大工退場。

五兵衛——やれ、親方、(忌中と書いた莚を見やりながら)これははあお前さ、何を書くだ。いたづらにも程があるべえものを。

平四郎——家主樣、俺らが國にな、昔、木曾の義仲といふ荒武者がゐて、信濃の山の中から西京眼がけて猪の子のやうに飛んで出たゞが、力は餘れども武運が拙くて、粟津ケ原の泥田に馬を駈けこまいて、犬死をして退けたゞ。今朝はふと、その昔を今のことのやうに思ひ出したでな、一つは今更めかしい弔ひの心、一つは見舞ひの人のうるさゝにあゝ書いてつるしたで御座ります。(放笑)……偖も、家主樣、俺ら達は永々と御邪魔になりましたが、明日は發つて在所に歸りますに……

五兵衛——それはまたあんまり火急だんべえさ。荷ごをりだけでせえはあ二日三日はかゝるべえに。

平四郎――いんね……

お初――おとつさま、それはお前樣のいつもの惡い癖の短氣ではねえかえ。二年の上も住み慣れゝば、名殘りを申して廻はらにやならぬ人樣も數あるづらに。

平四郎――（激怒を以て）親の心子知らずとは手前のこんだ。俺がこゝに（足で床をふみ）へえ一時でもゐたゝまれると思ふかやい。仕事が終へればへえ、俺は名もない他國のおいぼれ爺だぞ。こちらから暇乞ひしてまはる人樣もありはしねえだ。家主樣よ、「これがまあつひの住家か雪五尺。」信濃國の山猿には、裸身の外にこをる荷物も御座りましねえ。ひよこり〳〵と親子四匹で輕々とした道中をしませうづ

仙太郎――おぢいさま、おとつさまがこれに綱をつけ終へたに、早く御柱を引かづ。俺は待ち遠いわやれ。

平四郎――や、待たしたなあ、（土間に下り）……仙太、こゝは下總ではねえ諏訪の山の中だぞ。あすこに見えるが、あれが（神棚を指し）八ケ嶽、あすこのむかうが木曾飛驒の山又山、こゝからこれまでは諏訪の湖、廣い湖だぞ。そおれ岡谷の村も、下諏訪の宿も見えるら。こゝが神宮寺村の明神樣（壁際の積俵を指さし）このわきにあるが俺ら達が住家だわやれ。今日は御柱をそこへ引くだ。おぢいさまの身のまはりに高々と四本ぶつ立てるだ。……高々と四本ぶつ立てるだ。……仙太は力がえらいで元綱をやれ、おとつさまは裏綱……おぢいさまはへえやくざだでこゝに（綱の中ほどを握る）立たづ。やれ見ろ仙太、在所のものも他國のものも俺らがためにいかいこと綱引きにと集つて來たぞ。さあ皆の衆も綱を取つた。……それ仙太、おぢいさまが木やりをやるぞ。

「お小屋の山のもみの木は里にひかれて神となる」やれえんやらさんのういえ――

仙太郎――（よろこび勇んで）やれえんやらさんのういえ――

久和藏、お初泣きしづむ。五兵衞も貰ひ泣きをしてゐる。

何故に皆の衆は泣くづら。をかしいわやれ。
平四郎――をかしいなあ、それぢや仙太とおぢいさまと二人で引かづ。
仙太郎――やれえんやらさんのういえ――
平四郎――やれえんやらさんのういえ――
虹梁動かず。

――幕――

この戯曲には方言を用ひる必要があつた。藤森成吉、吹田順助、里見弴の諸氏が私の爲めに親切に教へて下さつた。玆に謝意を表する。……作者。

（一九二一年二月「白樺」所載）

斷　橋　（一幕劇）――禁無斷興行――

人物

木部孤笳――三十二歳。
高橋信造――三十歳位。
早月葉子――二十五歳。
倉地三吉――三十四歳位。
呉服行商――六十歳前後。

場所

鎌倉滑川海岸橋。

時

現代――仲秋の午後。

舞臺一面滑川。兩岸に枯れがてな葦が密生し、川は曲りくねつてその間に隱れ、遙に大倉の山なみを見る。二百十日の暴風雨のために破壞した海岸橋、中斷せられたるまゝ高く川の上にかゝる。
木部鍔廣の海水帽を被り、砂に坐して釣竿を垂れてゐる。高橋は砂の斜面に臥ころんでウヰスキーを瓶から口移しにしてゐる。波の遠音。時々松風の音がし、百舌鳥の鋭き聲隔りて聞こゆ。

幕が開いて後暫くの間二人とも無言。

高橋――今日も稻妻がしますかなあ。あれを見てゐると氣が狂ひ出しさうになるが。……かゝりさうですか。

木部――なあに。

高橋――今お話を聞いたばかりでこんなことをお尋ねするのも變ですが、あゝしていゝ奥さんもお子さんもあつて見れば、或る幸福は感じておいでゞせうね。

木部――さあね、十分感じていゝわけでせうね。

沈默。

高橋――（半獨白）鎌倉もこゝ二三日めつきり淋しくなつたなあ。

木部――……

高橋――今の思ひ出話であなた何か考へ込んでいらつしやいますね。

木部――なあに、そんなことはないさ、そんなことはありませんよ。然しなんだなあ、僕の思ひ出話なんかは、あなたから見ると、子供の泣き言位なものですね。

高橋――さうです、事件で論ずればさうです。……けれどもあなたといふものを知つてゐてお話を聞いてゐると、あなたの味はれた苦痛がよくわかるやうです。

木部――僕は三十二にもなつてゐて、いゝ恥曝らしですよ。はゝゝゝ。

高橋――あなたのやうに嘘の出來ない方は人の知らない苦しみをしますね。

木部――そりやあなたのことです。

高橋――浮きが動いてゐるぢやありませんか。

木部――なあに、餌はとうに取られてしまつてゐるんです。

沈默。

木部――高橋さん、あなたはあのことが分つても、やはり奥さん――奥さんといつてはいけないが――女、女といひますよ失禮だが、その女はあなたを愛してゐるんですね。

高橋――……

木部――さうしてあなたもその女を愛せずにはゐられないんですね。

高橋――運命といふんでせうね。運命の詛ひです。私はこのディレンマにかゝつてから、人間の生活といふものがまるで意味のない一ひらめきの稻妻のやうにしか見えませんね。あれは何んにも知らないのだからその筈として、私がです、何もかも知り拔いてゐる私が、何うしてもあれを思ひ切ることが出來ないんですから……木部さん、畜生道です……けれどもそれをどうしようもないんです。酒で一寸のがれをする外に仕樣がないぢやありませんか。……けれどもあなただつて、そのお葉さんといふのを今だに愛していらつしやるんでせう。

木部――確に僕は愛してゐました。六年前のお葉、十九のお葉は愛してゐました。

高橋――戀愛つてものは殘酷な力ですね……それに掴まれたら最後、人生觀まですつかり變りますからねえ。

木部――然しあなたの經驗が凡ての人の經驗と一致するかどうだが……大抵の人はどんな大事件でも器用に茶かして、多々益々辯ずるでせう。

高橋――餘人はどうでもいゝぢやありませんか、木部さん。あなたはどうです。

木部――さう追ひつめられると困るが……恥かしながら僕はあいつを憎むところまではゆきました。一思ひに締め殺せると思ふ位だつたが……然し今ぢやそんな熱もなくなつてね、はゝゝ……女房子供のある身そらで、誘

はれゝば藤澤くんだりまで遊びにも出かけるんだからをかしなもんですよ。嘘の出來るも出來ないもありはしませんや。

沈默。

丁度半年近くこのむかうの砂山に住んでゐたんだが……二人でこゝで一緒に鯊を釣つたりしたもんです。あいつも私も夢の中にとろけこんだやうになつてね……感激でこね上げた二人だつたんだ、今から思ふと。こんな詩を作つたりしましたよ。恥のさらし序でに披露しませうか。

「烏羽玉のやみの命を泣きつるに
　君ゆゑに春の月夜となりにけり
　　うつら〳〵と戀故に
　　樂しき夢を結びつゝ
　　　わかき血潮の……
　　樂しき夢のさめぬ間に
　　　わかき血潮の……」

「わかき血潮の」つと……「若き血潮の老いぬ」でもなしと。出て來ません。忘れつちまひました。兎に角、「とことはの國に入らましあはれ君」

といふのが結句でした。「とことは」がいゝぢやないか。はゝゝ。

高橋——どうしてそんな感激が半年程で……

木部——さあ。それがやつぱりあなたの云ふ運命だつたかも知れませんよ。何しろ僕は實際「樂しき夢のさめぬ

間に」刺しちがへても死にかねないロマンティシストだつたのだから。ところがあいつは處女の中だけは僕に劣らないロマンティシストだつたが、妻になつて見ると當世向きの令夫人らしい生活を欲したのでせうね。僕も悪いにや悪いんです。僕の行く道はお葉のゆく道だと疑はずに思ひこんでゐましたからね。碌々人と交際もしないやうな貧乏詩人ぢややり切れませんや。手つ取り早くそこに見切りをつけた、その見切りのつけかたのすばしこく而かも理窟にかなつてゐるのなぞは見上げたものだと今だに思ひますね。何んですよ、東京に逃げ出す前の晩まで、まるで戀に醉つたおぼこ娘らしい様子をしてゐやがつたが……なあに、あいつは、……女つてものは嘘僞(うそいつはり)の名人なんだ。

高橋――さうでせうか。

木部――あなたの場合はさうではないんですね……そのためにあなたは苦しむし……

高橋――だから私は萬事が運命だと主張するのです。私見たいに逃げ場のない程運命に追ひつめられると、それがよく分ります。稲妻のやうに、ぱつと光つた人生を見せるかと思ふと、そのあとさきは暗闇(くらやみ)です。木部さん、私は人間を愛しましたよ。眞劍に、熱い心で愛したと思ひますよ。けれどもその報酬は暗闇ぢやありませんか。ねえ。何故自殺をしないと仰有るのですか。けれどもねえ、運命に追ひつめられると自殺すら出來なくなります。運命の鬼が巧みに使ふ道具の一つは「惑(まどひ)」です。ところが自殺には決心がいりますからねえ。惑ひのために苦しんでゐる人間に決心は起つてくれないのです。……さうです、唯かうやつて砂の上に寢ころんで、あの大空をながめてうつとりしてゐる間だけが私の身上ですよ。その間だけが胡麻化しにでも自由らしい氣になります。……かうして強いアルコールの力で、私の心臓が段々弱つて……私は自滅するんだらうと思ひますよ。……さうですね、自滅ですね。一氣に面(つら)あてをしようと思つても……運命はさうはさせませんからね。……何

んのために私はこの世に生れて來たんでせう。おゝ何んのために……木部さん、私は苦しい……

　酒を飲む。沈默。

木部——（釣竿で水をはたきながら）然しだねえ、高橋さん、この間あなたから祕密を伺つた時は、僕は氣息がつまる程恐ろしかつたが、考へて見ると、あなたの方がまだ幸福だといへるかも知れませんよ。まあお聞きなさい、かういふ譯です。あなたは幸福な結婚をした。立派な家の養子になつた。ところがあなたの養母と思つたのは本當のお母さんで、あなたの奥さんになつた人は、實はあなたの父ちがひの妹さんだつたのだが……

高橋——今日といふ今日、私は他人の口から私の祕密を聞かされるのです。もうやめて下さい。運命から直接に宣告を受けてゐるやうです。

木部——然しあなたは愛してゐる、さうして愛されてゐる。

高橋——やめて下さい。

木部——今も、かうやつてゐる今も、あなたは愛されてゐるんだ。愛してゐる女に命がけで愛されてゐるんだ。……飲まないといつたが、僕にも飲ませて下さい。（瓶を奪ひ取るやうにして飲む）

高橋——木部さん、それはあなたのお言葉ですか。

木部——なあに、僕の言葉です。……まあいゝさ、そんなことはどうでも。

高橋——あなたは殘酷だ。

木部——どうして。

高橋——愛されるから苦しむ。……愛しないではゐられないから苦しむ。……さうした私をあなたは見ては下さらないのです……見ては下さらない……

木部――高橋さん…… 苦しむ位ならね、僕は愛しもし、愛されもして苦しみたいよ。

高橋――木部さん、……あなたは……私達の愛情は、事實が母とあれとに知れたが最後、この砂で造つた塔のやうに崩れる愛情だつていふことを……

木部――はゝゝ……（高橋の肩をたゝきながら）怒つちやいけない、冗談ですよ。冗談ぢやないが、怒つちやいけませんよ。……見給へ、蟹(かに)までが秋になれば、かたまり合つて暖まらうとしてゐるのだ。くよ／＼したつて始まらないさ。これから僕も毎日酒のお相手をしませう。元來はいく口なんだが、こゝ（肺部を指し）に惡いと醫者がいふものだから、ふいとその口車に乘せられてゐたんです。……なあに……然し全くあなたは……

この少し前から橋の上手に來てゐた老年の呉服行商高みから聲をかける。

呉服商――もし／＼、そこにおいでのお方にお願ひ申しますが、和田塚とかにはどう參りますか、一寸一つ教へていたゞきたう御座いますが。

木部――和田塚？……さあ、その橋が渡れるといゝんだが生憎落ちてゐるし、海際に行つて川を越すか、上の方に上つて琵琶橋を渡るかですね。

呉服商――困りましたなあ。どつちが近いので御座いませうかしら。

木部――そりや海岸の方だ。その代り足を濡らさないぢや……待てよ、舟で渡して上げよう、こつちに下りておいでなさい。

呉服商――やつ、それはどうも……ぢや申し兼ねますがお辭儀をせずと……

呉服商、土堤を下りて來る。木部、半分洲に上げてある小さな田舟を下ろす。

呉服商――どうもこれは……然しお蔭樣で仕合せを致します。
木部――なあに。太物屋さんはどこから？
呉服商――へえ、何あなた、秦野の方からで御座いますが、あんまり商ひがありませんので。
木部――鎌倉ももうありますまい。
呉服商――御意に御座いますよ。……ほい、釣りの御道樂で……。釣りにかけちや手前も眼のない方で御座いましてね。

呉服商と木部と舟に乘る。

呉服商――然し御結構なことで御座います。何か御酒まで御携帶で……
木部――僕等兩人結構と見えますかな。……僕から見るとあなたの方が餘程結構ですよ。
呉服商――恐れ入りましたなこりや……ねつから貧乏暇なしで御座いまして。
木部――貧乏はお互ひ樣として、僕のは貧乏暇ありといふ奴でね、はゝゝゝ……然しお父さんは見たところ苦がなさゝうですね。
呉服商――はい、お蔭さまで來世だけは佛樣にお頼み申して御座いますから……
木部――さうか、さうですか……そりやいゝですねえ。舟が着くから腰をおろして。

舟が對岸に着く。

呉服商――はい〳〵……いやこれはどうも御禮の言葉も御座いません。（高橋に）御免下さいまし難有う御座います。では御機嫌よう。
木部――御機嫌よう。和田塚はこれを行くと左側にありますからね。

呉服商――はい〳〵。

呉服商去る、木部舟をつなぐ。

木部――さて日の暮れない中に二三尾釣り上げるかな……高橋さん。寢込んぢやつたな。

木部、釣の座に戻り、針に餌をつけようとするが容易につかない。やうやくつけて投げこむとすぐ餌を取られてゐる。竿を捨てゝ考へこむ。土堤の上の松風の音がさわやかに聞こえ初める。木部氣がついて立ち上り、高橋に高橋と自分とのインバネスを羽織つてやる。涙ぐむ。さうして考へ込む。ふと土堤の上の人聲に耳傾ける。さうして餌のついてゐない竿を垂れる。

「渡れますともさ」「渡れるものか」「渡れますよ」などいひ合ひながら、早月葉子と倉地三吉とが橋のところに現れる。

葉子――ほら御覽なさい、渡れないぢやありませんか。

倉地――そりやどつちがいふ言葉だつたかな。

葉子――勿論あなたよ（倉地と共に笑ふ）……私だつてこの橋の毀れてゐる位はむかうからわかつてゐましたわ。でもさつき遇つたお爺さんは、こつちの方から來たやうでしたのに。

倉地――俺が渡れぬといつたで、又旋毛を曲げたんか。

葉子――いゝえ。……たゞこゝまで來て見たかつたの……こゝの景色が好きなんですもの。

倉地――ローマンスの澤山ある女はちがつたものだな。

葉子――えゝその通り、……腐つた女見たいに、他愛のないことをいつて、涙ばかしこぼすやうな戀人も持つたのよ。

倉地――さすがはあなただよ。

葉子――だから愛想が盡きたでせう。いゝわねえ、こゝはやつぱり。この欄干からから〻やつて眺めてゐると苦勞も何も忘れてしまひますわ。
倉地――それは結構。だが俺はさつきの話が喉につかへて殘つとるて。
葉子――あの木村のこと？
倉地――あなたは俺の金を心任せに使ふ氣にはなれないんか。
葉子――足りませんもの。
倉地――足りなきや何故いはん。
葉子――だつて木村が亞米利加から送つてよこすからいゝぢやありませんか。
倉地――馬鹿。

沈默。

倉地――木村は葉ちやんに惚れとるんだよ。
葉子――さうして葉子は木村を嫌つてゐるんですわね。
倉地――冗談は措いてくれ……俺は眞劍で云つとるんだ。あなたはまだ俺を疑つとるんだな。後釜にはいつでも木村をなほせるやうに喰ひ殘しをしとるんだらう。
葉子――そんなことありませんわ。
倉地――では何んで今だに手紙のやりとりをしとるんだ。
葉子――お金が欲しいからなの。
倉地――それが惡いと云つとるのが分らないのか…… 俺の顏に泥を塗りこくるやうなものだに。

葉子――何故木村から送らせるのが惡いんです。私故に郵船會社をおひきになつてから、どれ程あなたがお金の苦勞をしていらつしやるか、その位のことぼんやりの私にもわかつてゐます……でもしみつたれたことをするのはあなたもお嫌ひ、私も嫌ひ……私は思ふやうにお金を使つてはゐました。ゐましたけれども心では……笑つちやいやよ……あなたのためなら……さうならどんなことでもしようと思つてしまつたんですもの。それから木村にとう／＼手紙を書きました。お金が足らないと云つて下さればいゝのに……矢張りあなたは私を親身には思つて下さらないのね。

倉地――そんなことを思つとつたのか。馬鹿だなああなたは。御好意は感謝します、全く。然し俺はあなた方姉妹三人位を養ふに事は缺かんよ。……そんな蔭にまはつた心配はせんことにせうや。

葉子――そりや噓です。

沈默。

倉地――全く俺が惡かつたかも知れん。實をいふと一時は全く困り込んだ。……だがあんな噂が立つて、事務長を首になつて見ると、度胸が据つてしまひをつた。人間も潮底にもぐり込むとなると、案外強くなるて。これは今まで默つてゐたがな、それから俺はあの組合を企てたのだ。水先案內の奴等は委しい海圖を自分で作つて持つてゐる。要塞地帶の樣子も玄人以上に知つてゐるで、それを集めにかゝつたのだ。仕向けるところに仕向ければ……思ふやうには行かんが、食ふだけの金には餘りが出るのさ。……謂はゞ俺は賣國奴だ。賣國奴とあなたは關係しとるんだよ。今度はあなたの方で愛想が盡きをつたらう。

葉子――(思はずぎくりとしたが)一寸驚かされはしましたわ……いゝわ、私だつて何んでもしますわ。

倉地――人間並みに見られてゐない俺達が、人間並みに振舞つてゐてたまるかい、なあ。

葉子――わかりました。えゝ、わかつてよ。でもこんな話はやめませうね、折角こんなところに來てゐて……大島が見えますわ、あすこに。あれは海ね。

倉地――仰せの通り。

葉子――あの寒い晩のこと、私が甲板で考へこんでゐた時、あなたが灯をぶら下げて歩いていらしつたでせう。あの時のことを思ひ出しますわ、海を見ると。あの時私は海でなければ聞けないやうな音樂を聞いてゐましたわ。おーい、おーい、おい、おい、おーい……あれは何？

倉地――何んだそれは。

葉子――あの聲。

倉地――どの？

葉子――海の聲よ。

倉地――俺（わし）は永年海の上で暮したが、そんな聲はつひぞ聞かんが……

葉子――さうお。不思議ね。……たしかに聞こえてよその晩に……それは氣味の惡いやうな物凄いやうな……謂はゞね。この世で一緒になれなかつた人達が、幾億萬となく海の底に集まつて、戀しい同士で呼び合つてゐるの。海が荒れると、底の方からぼんやり大きく聞こえて來ましたわ。それは氣味の惡い聲なの。何處かで今でもその聲が聞こえてゐるやうよ。

倉地――あまり罪を造り過ぎるからさ。

葉子――憎らしい。……あら、あすこで誰か釣りをしてゐてよ。……あなた釣りお好き？

倉地――格別好きでもないが……こんなところに引つ込んで暢氣（のんき）にしてゐたら却つて面白いかも知れんて。世の

中が面倒になり腐つた。……あなたはどうだ。
葉子——私……釣りなんぞしたことありませんわ。……今度こゝに來て見ませうか、道具を持つて。
倉地——明日だつていゝ。
葉子——えゝ、いゝわ、二人であすこに坐つて……
倉地——さて出かけるかな。もう日がかげりかけたで、どこにも行かずに宿に歸るとしよう。
葉子——えゝ……さうね……
葉子立ち去りがてに倉地のあとについて退場しようとする。木部突然立ち上つて下から聲をかける。
木部——一寸お待ち下さい。
葉子思はずぎよつとして立ちすくむ。瞬間の後、見事に平常の態度にかへる。木部土堤を攀ぢて橋のところに出る。
木部——(海水帽を少し大袈裟に脱いで)葉子さん不思議なところでお目にかゝりましたね、暫く。
葉子——まあ、こんなひよんなところでお遇ひ申しますとは……私本當に驚いてしまひましたわ。でもまあ全くお珍らしい……こちらの方にお住ひで御座いますの?
木部——住まふといふほどもない、……くすぶり込んでゐますよ、はゝゝゝ。(倉地に向ひ)あんなところからいきなり飛び出して來て變にお思ひでせうが、僕は葉子さんとは古い幼な友達でしてね、これでも元は葉子さんのお宅で色々御世話になつたもんです。申上げる程の名もありません、御覽の通りの奴です。……どうも聲が似てゐるもんだから、何んの氣なしに見上げるとあなたでせう。
倉地——私は倉地といふものです。
木部——さうですか、宜しく。倉地さん、どうでせう、甚だ失禮ですが、葉子さんを五分間ほど貸していたゞき

たいんですが……實は久し振りに二人だけで話したい馬鹿々々しいをかしな話もあるので。
葉子――何んのお話、二人で話すつて。いゝぢや御座いませんか、倉地さんがいらしつたつて。
木部――ところがいけないのですよ、あなたゞけに……
倉地――ぢや丁度いゝ。今、濱におき忘れたステッキを取りに行つて來ますから、ゆつくりお話しなさい。明日の朝と思つとつたが丁度いゝ。

倉地退場。葉子倉地について行かうとするのを木部はげしく眼でとめる。葉子木部と少しく離れて立ち停る。沈默。

木部――あれが、あの噂（うはさ）の事務長ですか。あなたのことは大抵噂や新聞で知つてゐましたよ……お葉さん、全く暫くでしたねえ。
葉子――本當に。この夏はじめ、私があちらに行く前に、横濱行きの汽車の中でお目にかゝりはしましたが……
木部――お互ひに氣まづさから挨拶もしませんでしたね。
葉子――お別れしてから六年、夢のやう……
木部――（たゝみかけて）あれは達者でゐますか。
葉子――（間）えゝ。
木部――（間）さうですか。
葉子――（間）可愛いゝ子になりましたわ。
木部――……

葉子段々木部に近づいて來る。

葉子――私、今日晝頃鎌倉に來たんですの。さうしたらどうしてもこゝがもう一度見たくなつて……私達のゐた

家は取り拂つてしまひましたの？　見えませんことね。……本當に夢のやうですこと。
木部――あなたはあれからも色々な夢を見たでせう、樂しい夢を。
葉子――あなた、さうお思ひになつて？
木部――たゞ聞いて見るのですよ。
葉子――眞面目に聞いて下さいます？……見ました。見ようとあせりました。……けれどあの時のやうな美しい夢はもう見ることが出來ません……私は始終あの頃のことを思ひ出してゐます。こゝであなたと一緒に釣りをしたりしたことなどを……私はどうしてあんなことをしてしまつたんでせう。
木部――さうだ、夢だつたんですね。ところが僕は馬鹿だつたから、それをまことゝ思ひこんでゐたのですよ。さうしてもう一つ、ところがです、そのまことが餘りにたやすく眼の前でがら〱と崩れてしまつたので、僕は實際あわてました。然しまことだと思ひこんでゐた僕の夢を、あなたの夢がさましてくれたのだから……人間は誰も彼も夢から覺めまい〱としてゐるんだが、……覺めて見ると淋しいものですね……あすこを御覽なさい（高橋を指す）、あすこに、ぢかに砂の上に一人臥ころんでゐるでせう、酒に醉ひつぶれて。あれはこの頃の僕の唯一の話相手なんですが……かうした男です。Tといふ名にしておきますよ。Tが生れると間もなく、その父にあたる人が大病に罹りました。ところがその母といふのが、その頃は色盛りの美しい人だつたが、亭主の病氣をそつちのけに男をこしらへて出奔してしまつたのです。
葉子――木部さん、そんな話は今日はおやめにしませうね。
木部――まあ聞いて下さい。……Tの母はその男との間に娘を一人生みました。その中、男は死んだのか、別れたのか、兎に角母といふ人は後家になつて、裕福に横濱で暮らしてゐたのです。然し自分が若い時捨てゝしま

つた亭主のことだけは忘れることが出來ませんでした。年月が經つほどその思ひ出は深まつていつたらしいのです。

葉子――（歎息する）

木部――僕はあてこすりを云つてるのぢやないから、惡く取つちや困りますよ。これからが大事なところなのですから。で、話かはつて、あの人は乳呑兒の時分に、父の親友にあたる人に引き取られて東京に來ました。さうして或る私立の法律學校を卒業した時、はじめて義理の兩親から、貰はれて來たのだと打ち明けられたのです。さうしてその情けで横濱に獨立して法律事務所を持つことになつたのです。ところが暫くする中に、その隣の家の娘と戀に落ちて、色々のいきさつがあつた末、芽出度く結婚することになつたのです。

葉子――もしやその娘といふのが……

木部――さうですよ。餘りばつの合ひ過ぎた因縁話のやうだが、細君にしたその娘といふのが實はTの妹だつたんです、父ちがひの。

葉子――まあこはい……どうしてそれが又……

木部――それがどうして分つたといふとです、三人が一緒に住むやうになつてから、養母のヒステリーが段々激しくなつて、自分を恨んでゐる人の死靈が婿に乘り移つてゐるといひ出すやうになつたのです。Tの顏が初めの亭主に似てゐるのは固より當然ですさ。……それからといふもの、養母は氣違ひのやうに不動の信心に凝り出しました。Tもやがて不審に思ひ出して、父の墓參に生國に歸つた序でに、よく調べて見ると、今お話した恐ろしい事實がすつかり分つてしまつたのださうです。全く運命といふ奴はどんな惡戲をするかも知れたものぢやない。……それからTは惱みはじめたのです。母は母でありながら父の仇にあたるし、妻は妻でありなが

ら現在血を分けた妹なのですからね。

葉子――まあ何んといふ……

木部――それだけならまだいゝんだが……こんな事實が暴露しても、Tは妹を戀人として愛せずにはゐられないといふんです。細君の方でも命がけでTを愛してゐるのださうです。……この恐ろしいディレンマに責められて、あの人はあんなに痩せてしまつたのです。さうしてその生活が根柢から目茶苦茶になつてしまつたのです。

葉子――さうしていまだに……

木部――さうです。凡てを自分一人の胸に納めてゐるんです。Tが段々悒鬱になつて、痩せてゆくのを見ると、細君までが母の迷信にかぶれて、良人とのみ思ひこんでゐるTのために、自分の命をかけがへに死靈の退散を祈つてゐるといふのです。細君も段々やつれて行くさうです。悲慘ぢやありませんか。死靈がどうして退散しませうさ。

葉子――だつて、それをそのまゝにしておくのは罪ですわ。三人とも不仕合せのどん底に落ちていらつしやるばかりですわ。

木部――さうかも知れません。然し事實が打ち明けられても事實は消えはしないのだから。……そのためにあの人はあゝやつて醉ふのです。ウヰスキーの瓶をあすこの砂に埋めておいて、醉ひつぶれるまで人知れずあすこであれを呷るのです。自分の家では酒に醉ふことすら出來ないその境遇を考へて御覽なさい。……それはかりか、一番悲慘なのはTと妹とが互ひに命がけで愛し合つてゐるといふ事實ですよ。

葉子――伺つたゞけでも身の内が震へるやうです……本當に不幸な方たちですのね。

木部――不幸でせう。

葉子――本當に。
木部――可哀さうな男でせう。
葉子――えゝ本當に。
木部――お葉さん、然し、あの男は愛しもし、愛されもしてゐるんです。……お葉さん、あなたの夢だ、さうして私のまことだ、……それがあの男の場合には少しも崩れてはゐないんですよ。Tはどんな苦痛を嘗めてもそれだけは崩すまいとしてゐるのです。……お葉さん、あの男は不幸な、可哀さうな男ですよ。
葉子――木部さん。
木部――何んです。
葉子――さう私を苦しめないで下さい……私は今でも、……今でもあの美しい夢を……
木部――(おつかぶせて)なあに、まことは實は夢だつたんです。美しくとも夢だつたんです。……夢は破れてしまひました。夢なら破れるさ。……同じ夢を二度見る人間は、世界廣しといへども一人もゐますまい。……然し、僕はお蔭で見事に眼が覺めました。……僕の人生觀が立派に出來上りました。何しろ僕は命がけだつたのですからねえ。……暗いものですよ……突きあたりは何もないからつぽですよ。……成る程夢とでもいふんでせうね。
私はあれから落武者です。事業も企てゝ見ました。議員の候補にも立ちました。文壇にも乘り出しました。……然し僕の夢はさめ切つてゐるのだから、何をしても成り立ちやうがありません。何をしたつて駄目ですよ。……今は釣りをしてゐます。半日ぢつとしてあすこに坐つてゐると、よく〳〵馬鹿な小魚が二三尾は引かゝつて來ますよ。

葉子――けれどもそれはあんまり捨て鉢な……あなたはなさらうとさへなされば、何んでもお出來になる筈に。
木部――出來るもんですか……人間に何が出來るもんですか……やがて秋も暮れてゆきますね。
葉子――私、あなたともつとゆつくりお話がしたう御座います。
木部――さあ、それも面白いかな、……靜かな心でね。私はこれでも時折りあなたの幸福を祈つたりしてゐますよ。をかしなものですね。
葉子――木部さん。

葉子取りすがるやうに木部に近づかうとする。木部何氣なしにそれをかはして遠く海の上を指さしながら、

木部――あれが、あすこに見えるでせう、大島が。ぽつんと一つ雲か何かのやうに空に浮いて……あれでゐて、日の具合によつて島の色がさま〴〵に變ります。どうかするとあの頂きから煙がぽーつと立ち上るのが見えたりしますよ。
葉子――あなたは嘸私を恨んでいらつしやいませうね。
木部――さあ、さうした氣持になつたこともあつたかなあ、……然し、今はそれも無くなりました。
葉子――私どうしてもあなたに申上げておきたいことがありますの。何んとかして一度だけ遇つて下さいません？　その中に。私の今ゐるところは……
木部――お會ひしませう、その中に。……その中に……。だがお葉さん、話があると女に云はれた時には、話を期待せずに、抱擁か虚無かを覺悟しろといふ名言がありますよ。
葉子――それはあんまりな仰有り方ですわ。
木部――あんまりか、あんまりでないか……兎に角名言には相違ありますまい。はゝゝゝ……お葉さん、覺めて

しまつた昔の夢なんかは漁(あさ)らないで、いゝ奥さんにおなりなさい。いゝですか。いゝ奥さんになつて下さい。さうして少なくともあなただけは、この世の中を仕合せなものと思へるやうになつて下さい。僕だつて不仕合せな人間よりは、仕合せな人間を見てゐる方が好きです。……僕にも僕だけの覺悟はあります。出しやばつて人眼にかゝるやうなことはしません。……おゝ、倉地さんがあすこからやつて來ます。……いゝですか、あなただけは幸福に暮らして、倉地さんも幸福にしてお上げなさいよ。……これが僕の最後の言葉です。多分もう一生お目にはかゝりますまい。……倉地さん、ステッキはおありでしたか。

倉地出場。

倉地――はあ、ありました。どうかな、お話といふのは片付きましたか。

木部――片付き過ぎて困つてゐたところです。それでは葉子さんをたしかにお返しゝます。

葉子――まるで品物かなんぞのやうですのねえ。

三人笑ふ。

倉地――ではお暇(いとま)しようかな。

木部――まだ日はありますよ。折角だから光明寺の方までいつていらつしやい。あすこに田舟がありますから、僕が一つお二人のために橋渡し、とは行かないが、舟渡しをして上げませう。

葉子――舟がありますの。あら嬉しい。

倉地――歸らうや。

葉子――御面倒序(つい)でに渡していたゞきませうよ。木部さんどうか。

木部――おやすい御用です。

三人土堤を下り、舟に乘る。

倉地――さあ葉子さん、こゝにおいで。舟なら俺(わし)の繩張りだで。

倉地立つたまゝ葉子を抱き支へようとする。葉子怒れる如くそれを拒んで洋傘を力にしやがむ。木部靜かに舟を行(や)る。

倉地――あすこに寢とるのは、あれは誰ですか。

木部――運命論者です。

倉地――何。うんめい

木部――なあに、僕同樣なやくざな男です。醉つぱらつて寢とるんです。

倉地――それはまた暢氣(のんき)ですな。

木部――さつき、こゝを通つて行つた太物(たんもの)屋の爺さんもさういひましたよ。

倉地――全くですものなあ。

木部――全くです。

舟着く。

倉地――や、これはお世話をおかけしました。東京にお出かけのこともあつたらどうぞ。

木部――難有う。その中に。葉子さんそれでは。

葉子――本當に難有う御座いました。ではどうかお大事に。

木部――あなたもお達者に、……この土堤傳ひに川下に行くと海岸に出ますからね、海岸をいらつしやい。その方が靜かでよござんす。……暗くなるから足元に氣をおつけなすつて。

倉地――やあ難有う。

葉子――左樣なら。

木部、舟をかへす。釣道具を片付けてしづかに高橋をおこす。高橋。眠がさめる。

高橋――おゝ、寢ちまつてゐましたか。（欠伸）……大分暗くなりましたね。

木部――稻妻がしはじめましたよ。

高橋――あゝ、今日もこれでやうやく暮れるな。……おや、誰か來ましたね。靴の跡と……こゝには女物らしい草履の跡が……

木部――なあに、今ね、新婚らしい若夫婦がこの上に來て困つてゐたから、渡してやつたんです。そら、あすこの葦のむかうに見えるでせう。

高橋――さうでしたか。成程。ちつとも知らないで寢てゐましたが……大分睦じさうですね。ちがつた世界でも覗くやうですねえ。かう靜かになつた秋の鎌倉を、あゝして步きまはる氣持は暢氣でせうね。……あれであの人達の後ろにも運命の鬼がちやんと見張りをしてゐるんです。私にはそれが見えるが……

木部――高橋さん、僕一つ久しぶりで小說が書いて見たくなりましたよ。

高橋――珍らしく婆婆氣が出ましたね。インスピレーションが來ましたか。……成程、稻妻だ。……（悒鬱になり）私はもう少しこゝにかうしてぢつとしてゐます。

木部――（何となくそはそはしながら）それもいゝが出かけませう。その瓶を持つて、出かけて下さい。こゝはすつかり影つて薄ら寒くなつた。西日の殘つてゐるところに行つて日が暮れるまで飲みませう。……僕が今度は思ひ出話の續きの懺悔話をしますから。

高橋――あなた、今日はそんなに遲くまでつきあつて下さいますか。難有い。……稻妻の奴……

二人支度をして葦の間を分けて退場。

木部――高橋さん、辨慶蟹が澤山ゐるから踏み殺さないやうに。

といふ聲が聞こえる。

舞臺空虛。大倉の山なみの上に集まつた雲の中で稻妻がしきりと光る。

靜かに幕。

（一九二三年一月二十一日夜）
（一九二三年三月、「泉」所載）

小さい夢（摸譯）

―ガルスウォーシー―

人物

Seelchen――山の娘

Lamond――登山者

Felsman――登山案内者

夢の中に現はるゝ人物

The Great Horn

The Cow Horn

The Wine Horn

―山―

みやまはゝこ

石楠花

龍膽

みやまたんぽゝ

―花―

夢の中に現はるゝ聲と影

牛の鈴
山の空氣
伊太利の眺め
煤烟
書物の記事
夜蛾の兒
三人の舞踏せる少女
三人の舞踏せる青年
勞働者の影
勞働によりて造られたるものゝ影
睡死
溺死
花の兒
牧羊者
山羊の兒
山羊神
睡眠の影

第一場

八月の日沒間際。舞臺は登山小屋の一室の體で、卓と腰掛と低い幅廣の窓榻があるばかり。窓の外には夕映の[illegible]夜の色を靜かに白めて行く月の光を浴びた三つの岩がちな峰が聳えて居る。室は石油 lamp が灯つて居て、此山に住む娘で十八になる Seelchen が民謠を鼻歌でうたひながら、洗つた soup 皿と glasses とを戸棚にしまつて居る。しつくり身にあつた黑天鵞絨の上衫の胸を四角に裁つて、其處からみやまたんぽゝ、龍膽、石楠花のやうな薄紅色、青、黃の華やかな handkerchief を覗かせ、みやまはゝこのやうに青白い雪花石膏の連珠を頸にかけ、しやんとした麻布の袖口は肘に達し、裾長の裳は龍膽の青色で美しく着こなされて居る。二 に分けて編んだ髮をぶつちがへにして頭を卷いてある。丁度片付け物をしてしまつた時、外側の戸を敲いて Lamond が這入つて來る。登山者の服裝をした日に燒けた若い美男で、Highlander の使ふ plaid と頭陀袋と氷笻とを持つて居る。

L——今晩は。

S——お晩になりました。

L——私は Lamond と云ふんだが、晩く來て濟まないね。

S——宅でおとまりのお積りですか。

L——どうか。

S——寢臺はみんなふさがつて居て——お氣の毒で御座いますね。母を呼んで參りませう。

L——私は起きぬけに Great Horn に登る積りなんだ。

S——(敬畏の色) Great Horn に！　それは御無理です。

L——兎に角私は登つて見る。

S——Wine Horn か Cow Horn にでもお登りになれば。

L——それはもう登つてしまつたんだ。

S——けれどお危う御座いますよ。ひよつとするとお命にかゝはりませうよ。

L——それは構はない。運だめしだ。

S——それに父は脚を怪我しまして、唯今 Hans Felsman しか案内者は御座いません。

L——あの名うての Felsman かい。

S——(うなづく。かくて歎美の面持に Lamond を見やりながら) あなたが今年この邊の山と云ふ山を殘らずお登りになつた Lamond 様ですか。

L——殘らずと云つても、あの難物だけは殘つて居るんだ。

S——ならお名前は前から伺つて居りました。父の脚が治るまでもう一日お待ちになりましたら。

L——さうは行かない。明日は國に歸らなくつちや。

S——大變なお急ぎでいらつしやいますこと。

L——(Seelchen を見入りながら) Alas!

S——London からお出でになりましたの？　大きな處で御座いませうね。

L——六百萬の人間が居る。

S——まあ！　(暫くして) 私は二度 Cortina へ參りました。

L——お前は年中此處に居るのかい。
S——冬になると谷の方に下ります。
L——どうだ世間が見たくはないか。
S——偶(たま)には。(戸の處に行つてひそやかに呼ぶ) Hans さん! (も一つの戸を指して)あすこには七人獨逸の方(かた)がおやすみになつて居ます。
L——Oh God!
S——どうぞお靜かに。其の方々は日の出を見にいらしつたんです。(Lamond の衣嚢(かくし)から落ちた小本を拾ひ上げながら) 私も色々な本を讀んで見ました。
L——それは英國の名高い詩人が書いたものだ。お前さんはこんな山の中に居て、詩を作つたり瞑想に耽るやうな事はないかい。
S——(靜かにかぶりを振る) 御覽なさいまし。滿月です。
窓際に進みよつて二人で月を眺めながら立つて居ると、ひきしまつた見事な體格の無口の青年が Loden で作つた衣服ではひつて來る。
S——Hans さん。
F——(深味のある聲で) 此方(このかた)か、己れに用がありなさるのは。
S——(敬畏の色) 明日 Great Horn ですつて? (その耳に囁く) そら名高い London の方なの。
F——Great Horn は駄目ですよ。
L——そんな事を言つて、それでお前は名物男の Felsman なのかい。

F――（恐ろしい顏色）朝早く出かけませう。

S――こんな事はまあ何年目でせう。

L――（Plaid と頭陀袋とを窓榻の上に置きながら）此處に寢てもいゝのかね。

S――見て參りませう、若しかすると――（階子を登るために室を出る）

F――（毛布を戸棚から出して窓榻にひろげながら）So!

さうして室外に出ると入れちがへに Seelchen が蠟燭を持つてはひつて來る、

S――寢臺が一つ明いて居りました。これは下が堅う御座います。

L――それはありがたう。が然しこれで澤山だ。

S――どうぞ私の心を無になさらずに。

L――お前の名は何んと云ふの。

S――Seelchen.

L――Little Soul と云ふ意味にあたるんだらう。ぢやお前の心を無にせずに七人の獨逸のお方の處に行つて寢るかな。

S――いゝえ、いゝえ。それには及びませんの。

L――（眞面目臭つて頭を下げながら）ではどうでも宜しいやうに。（行かうとする）

S――あなたのいらしつた町は――世間はよい所で御座いませうね。

L――彼方（むかう）に居ると田舍に來たくなるが、此處に來て見ると又彼方（あつち）がよくなるのさ。

S――（手をにぎり合はせて）まあ私と同んなじだこと――でも私は此處にばかり居りますのです。

L——成程さうだ。お前見たいな人は町には居ない。

S——一度に二ケ所に居る譯にはいきませんのね。(急に)町に行けば芝居もあるし。立派な美術もあるし。——舞踏も——お寺も——汽車も——本にある色んな事も——それから——

L——困窮も。

S——でも町には life が御座います。

L——それから死もあるよ。

S——明日登山がおすみになつたらまた此處にお下りで御座いますか。

L——いゝえ。

S——世間はあなたのもんで御座いますのに、私は何んにも持つては居りません。

L——但し山と Felsman とはお前のものだ。

S——でもパンばかり喰べて居ては倦きてしまひます。

L——(Seelchen を見入りて)私はお前を喰べてしまひたい。

S——所が私はおいしくは御座いません。私は孔だらけの cheese のやうに慾だらけで御座いますから。

L——私はも一度來る。

S——でも明日お山をなされば登りにくい山は此處等にはなくなります。刺戟がなくなればあなたはもうお構(かま)ひつけなさりますまい。

L——O wise little soul!

S——いゝえ私は利口でもなんでも御座いません。こゝが初終中(しよつちう)いたんで居ります。

L――月にあこがれて？

S――はい。（さうして急に）廣い世間にお歸りになつてから私を思ひ出しになる事が御座いますか。

L――（Seelchen の手を取り）廣い世間には此の手のやうな可愛いゝものはないよ。

S――（分別よく）でも廣い世間と云ふ大したものが御座いますわ。

L――お別れに kiss をおさせ。

女は額を前に出す。男は其の頰を kiss してから急に唇にもする。女が身をひくと、

L――惡かつた Little Soul.

S――"That's all right!"

L――（蠟燭を取り上げながら）いゝ夢を御覽。御機嫌よう。

S――（やさしく）御機嫌よう御座います。

F――（外から這入つて來て二人を見やりながら）寒いから明日は天氣でせうよ。

Lamond は見返りがちに階子を登つて行く。Felsman は身をよけて傍を通らせる。

S――（窓榻によりながら）お客は此處では痛いと思つて。

Felsman は女の所に行つて暫く見下して居たが、やがてこゞんで餓ゑたやうに女を kiss する。

S――お前さん怒つて居るの。

男は答へずに lamp を消して奥の部屋に這入つてしまふ。Seelchen は窓から滿月の光を浴びた峰々を眺めて居たが、やがて毛布を引きよせて窓榻の上に横になる。

S――（睡むさうな聲で）あの人たちは私を kiss して――二人とも。（寢てしまふ）

舞臺暗黑になる。

第二場

舞臺は夜でも明けたやうに追々あかるくなる。Seelchen はやはり窓榻の上に臥て居る。やがて毛布から顔と手とを出して身を起しながら、熟睡の衣を夢現のうすい被布に代へる。と小屋の壁は消え失せて女と霧のかゝつた山との間には明け殘つた暗黑があるばかり。其の中山の頂が明るくなるにつれて峰毎に大きな顔のあるのが知れる。

S——まあみんな顔がある。

Wine Horn の顔と云ふのは鬚のない青年の横顔である。Cow Horn のは嚴肅な日に燒けた、猛々しい黑い眼と、黑い鬚とある山の牧羊者である。兩者の間にあるのは Great Horn で、雪の頭髪、bronze にでもありさうな氣高い無鬚の容貌の表情は Jupiter のやうに肉感的な、それで居て強い氣高い、超然とした樣子である。峰々の顔からは、ずつと下の方で、明け殘つた暗黑のすぐ上に、みやまはゝこ、龍膽、みやまたんぽゝ、石楠花の花が、小さな頭を擡げて居る。その頭には、露の玉を置いた花の冠を被つて居る。花が小兒のやうな顔を上げる時には、小さな凛々とした鈴の音が聞こえる。

峰の周圍には青空の外に眼を遮るものはない。

みやまはゝこ——(小さな聲で) 美ましいかい。美ましいかい。美ましいかい。あア。はア。

龍膽。みやまたんぽゝ。石楠花——(鈴を妬ましさうにならしながら) おゝおゝおゝ。

Cow Horn の後ろから牛の鈴と山の空氣との聲が聞こえる。

Clinkel-clink! Clinkel-clink!
山の空氣、山の空氣。

　Wine Horn の後ろからそれに敵對して伊太利の眺め、煤煙、書物の記事の聲が聞こえる。

私は伊太利だ、伊太利。
見なさい——遠くの煤煙を。
書物の記事と云ふものもありますよ。

　皆んな一緒に花の鈴の音につれてやさしく聲を上げる。すると遠くから木魂(こだま)のやうに嘆息が聞こえる。

山の空氣、山の空氣。

　忽ち Cow Horn の峯が口をきゝなれないものゝやうに語りはじめる。

CH——牛の群れと黒褐の羊との間で暮して居るのは私だ。私は沈默であり無變化である。嚴かな山々は私である。私は山の風のやうに狂暴で、淨い牧場のやうにつくろはない落着きを持つて居る。私の眼を見入つて、私だけを愛してくれ。
S——(氣息をつめて) Cow Horn だ。それが Felsman と山とに肩をもつて口をきいて! Cow Horn は私の心の半分だ。

　花は嬉しさうに笑ふ。

CH——私は永遠の山々を歩いて山の雪を飲むんだ。私の眼は燃ゆる葡萄酒の色で其の中に沈鬱が籠もつて居る。牛のつれなき、風のおとなひ、崩れ落ちる岩の響、早瀬の音、其の外の言葉は私には語れぬ。純一な思想、熱い血、強い力——私は重力の權化(ごんげ)である。

S――さうだ、さうだ。私は強いあの人が要る。

牛と鈴と山の空氣と一緒に呼ぶ。

Clinkel-clink! Clinkel-clink!

山の空氣、山の空氣。

CH――Little soul! 私を頼つて私を愛してくれ。星の下で一緒に住まはう。

S――（小さな聲）私は何んだか怖い。

すると急に Wine Horn の峰が若々しい聲で口をきく。

WH――己れは町中を跳り歩くあやかしの火だ。己れはすゞかけの木や栗の木蔭やでくゝと啼く町の家鳩だ。己れが澤山の小さな神々に香をたく所では毎日變化の絶え間がない。己れは純潔な宮殿にも住むし血を湧かす暗い横町にも住まつて居る。群集の中でもまれる生活――明け方の街燈の生活は己れの生活だ。（靜かに）己れは限りのない程戀をするが、一つに執着する馬鹿はしない。何故と云つて見ろ、己れは日光の下で戯れるお前の犢よりすばやいんだからな。

花はすはいい大事と鈴を鳴らして呼ぶ。

犢なら私たちも知つてます。

WH――己れは歡樂の生まれる時死ぬ時のさゞめきを知つて居る。早い車輪の音も知つて居る。己れは男のさもしい誓言も、眞夜中の愛の kiss も知つて居る。己れが居ないぢや Little Soul お前はかつゑて死んじまふぞ。

S――Wine Horn はあのいゝお客様と世間との肩を持つて口をきいて居る。其方へも心が引かれて行く。

WH――己れの持つてる思想は、お前の牧場の花の數よりもつと多いし、風に乘つたお前の鷲よりも飛ぶ力が早

いんだ。己れの飲む酒は憧憬と現實暴露だ。それだからだらけるやうな事は夢にも知らないんだ。

伊太利の眺め、煤烟、書物の記事が諸聲に呼ぶ。

私は伊太利だ、伊太利。
私を見なさい――遠くの煤煙。
私も居るよ、居るよ。

花は苦悶する。

S――(悲しんで) 私の心！　裂けてしまふ。
WH――Little Soul 己れと一緒に町中を駈け歩いて祕密の限りを窺(のぞ)かないか。手をつないで薊(あざみ)の絨毛(わたげ)のやうに飛び歩かう。
みやまたんぽゝ――私の絨毛の方が早く飛びます。
WH――己れはお前に海を見せてやる。
龍膽――私の藍の方が深い色です。
WH――己れはお前の爲めに顔に紅葉を染めぬいて見せる。
石楠花――それなら私の方がずつと上手です。
WH――Little Soul 聞きな。己れの寶石、己れの絹、己れの天鵞絨(びらうど)。
みやまはゝこ――私は天鵞絨よりもつと滑らかです。
WH――(誇りげに) 驚くべき己れの襴繡。
花一同――(悲しげに) そんな物は持つて居ません。

S――Wine Hornは何んでも持つてる。

CH――朧銀の翼を持つた雲は秋のものだ。日の光で燒けたゞれた岩は私のものだ。眞珠より凉しい露も私のものだ。雪の呼吸と香ばしい牧草を仇に敷いては Little Soul お前はしをれてしまふばかりだ。

WH――黒い丁子(ちやうじ)が私の匂ひだ。

花どもは熱心に鈴をならし顏を上げて呼ぶ。

私達だつていゝ香ひがします。

と伊太利の眺め、煤烟、書物の記事がこれに應じて呼ぶ。

私は伊太利だ、伊太利。

私を見なさい――遠くの煤烟。

私も居るよ、私も。

S――(困じ果てゝ)あゝどうすればいゝんだらう。

CH――私は金輪際お前を捨てない。

WH――己れは何度でもお前を捨てゝ見せる。さうして何度も歸つて來てお前を kiss してやるよ。

S――(囁きながら)此の胸が靜まりますやうに。

CH――私と一緒に暖かいたちじやかうさうの上に眠らうではないか。

花はうれしさうに笑ふ。

WH――己れと一緒に鳩の胸毛の床に寢よう。

花は苦悶する。

WH――己れはお前に古い葡萄酒を飲ませてせてやる。

CH――私は新しい牛乳を飲ませる。

WH――己れの歌を一つ聞いて見ろ。

何處かで mandolin の音が聞こえる。

S――（胸を抱いて）私の心は體（からだ）を拔け出ようとする。

CH――私の歌を聞け。

遠くから牧童の草笛の聲が風のまに〳〵聞こえて來る。

S――（耳に兩手を措き添へて）笛だ。あゝ。

CH――私と一緒に居ろ Seelchen！

WH――己れについて來い Seelchen！

CH――私は安定をあげる。

WH――己れは機會をやる。

CH――私は平和をあげる。

WH――己れは變化をやる。

CH――私は寂寥をあげる。

WH――己れは聲をやる。

CH――私は一つの愛をあげる。

WH――己れは澤山やらう。

S——（自分の心を胸からむしり取るやうに） 兩方。兩方。兩方とも私は愛します。——だが兩方とも私は惡(にく)みます。何故私は一度に二ケ所に居られないんだらう。一つしかない心が一つしかない心に裏切りをして居る。心が矛(ほこ)を揚げて、心が盾を取つて。

此の時急に Great Horn の峰が口を開く。

GH——Little Soul お前は兩方を愛するがいゝのだ。又惡(にく)むがいゝのだ。沈默と一緒に山の眠る事もあるし、知識と一緒に大路でをどる事もあらう。兩方を持つがいゝんだ。山の上の日や月に照らされ、町の街(ちまた)の灯にも燒かれるのがお前達小つぽけな蛾の運命だ。どつちもお前には世界とも見え墓とも見えるんだ。お前の心は三つの口の間で吹き爭はれて居る鳥の羽のやうなものだ。然しそれを恐れるには當らない。悲しむとも恐れるには當らない。筏がもやはれたかと思ふと、ほどけて隣りの岸に行く。さうして仕舞には海に出るのだ。音がどうかしてひよつとつかへる。さうして又かすかに震へて行く。然しそれは最後の沈默に急ぐのだ。變化、安靜。機會、安定。純一、多樣。燃えろ——可愛いゝ焰。世界をなめてしまふつもりで燃えろ。仕舞にはお前はわしの所に來なければならぬやうになるのだから。

色々の聲と花の鈴の音が聞こえる。Seelchen は歡喜のあまり聲と影とを抱かうとすると皆んな消えてしまつて深い眠りだけが殘る。

第三場

暗黑な舞臺は再び第二場のやうな夢現の氣持で明るくなる。Seelchen が小さな町のある Piazza の方に手を延ばして居

る。其の町と云ふのは一方にはすゞかけの木の並木があり一方には壁があつて、或る旅館の入口からかすかな光がもれて居る。旅館の上には滿月が皎々とかゝつて居る。Lamp の下に壁によりかゝつて Wine Horn の顏と同樣の顏をした若者が赤い外套を着て mandolin をかきならしながら歌ふ。

Little star soul よ
夜通し寒い野路の限りを
慰め手もなくうろついて歩くんかい——
そんな寒い處に居ないで
こつちにお這入り——
私の此の黑い mandolin を
黃色い月にならして上げるから

旅館から笑ひさゞめく聲と舞踏の音とが聞こえて來る。

S——(囁きながら) これが大きな世間と云ふものだ。

Wine Horn の若者は歌ひ續ける。

綺麗な灰色の夜蛾(ひとりむし)よ
綺麗な蠟燭の灯がもえてると
無氣になつてあたゝまらうとして——
あゝ羽ばたきのいそがしい鳩さん
屹度(きっと)ねー——

私の此の黒い mandolin をひいて上げるから――

眞赤な戀の火をお取りよ。

S――（夢中になつて旅館を見やりながら）皆んなは舞踏をして居るんだ。

さう云つてゐると、兩方から夜蛾の兒等が現はれて一緒になつて羽ばたきしながら、旅館の入口からもれる灯の光を追ふかと思へば、つと傍にそれて又光を追ふ。

S――（手を擴げて）あの夜蛾は本當のだ。羽風がする。

Wine Horn の若者は歌ひ續ける。

私の歌の唇よ

少女（をとめ）の白い胸にいつて

色めかしい耳つこすりをおし

かう云ふやうな燒きつくやうな言葉でさ――

「しつかりとお聞きなさい！

一遍逃がしたら戀は曲者

二度とは歸つて來ませんよ」

Seelchen 若者の方にかけよれば、其の上にともつた灯はかすれて、若者は影となつてしまふ。女は心も亂れて舞ひをどる。夜蛾の兒等に近づくと、それも消えてしまふ。ふと見ると旅館の戸口に Lamond が黑い外套を着て立つて居る。

S――あなたで御座いましたか。

L――私の Little Soul が居ないぢや私は寒い。お出で。（と云ひながら手を延ばす）

S――私は大丈夫で御座いませうか。

L――大丈夫とは何んだい。お前は山に居れば大丈夫だと思ふのかい。

S――一體私は何處に居りますんでせう。

L――町だ。

と微笑みながら入口を指すと、二人づゝ打ち連れてをどりながら影のやうに靜かに青年と少女とが二人づゝ現はれる。一人の少女は白繻子と珠とで裝ひ、一人の青年は黑の天鵞絨で裝つて居、他の少女は襴緞と shawl 他の青年は下着と木綿の下袴とを着て居る。此の二組の男女はまるで違つた世界に住む人のやうに離れて嚴かにをどるのである。

S――(囁く) 山では皆んな一緒にをどります。あの人達は相手を替へないので御座いますか。

L――それは思ひも及ばない事なのだ。片方は金持だし、片方は貧乏だらう。だがあれを御覽。見ると狂熱的にをどり狂ふ一組が現はれる。少女は手足をあらはに燃え立つやうな肌衣を着て頭は紅い花でかざつてゐる。青年は豹の皮を着けて居る。此の二人は互に追ひ合つて居るばかりでは承知せずに、外の少女や青年を追ひかけるので、暫くは大混雜が起つたと思ふと、其の二人は旅館の中に消えてしまつて二組だけ殘るが、これは前と同様互にかけ離れて嚴かにをどりつゞける。

S――(身ぶるひして) 私もあんなをどり方をするやうになるんだらうか。

Wine Horn の若者もう一度 lamp の下に現はれて高く弦をかきならす。Seelchen が其の方に引きつけられて行くと、灯は消えてしまつて青い影が殘るばかりだ。男女の組は旅館の中に隱れて入口は暗くなる。

S――どうか私の見たくないものは見せて下さらないといゝのに。

L――そんなら一緒に來ないがいゝんだ Little Soul.

S――何時でもをどりばかりで御座いますか。

L――さうでもないさ。

家々の窓扉が突然開け放される。旅館の向隣の灯のともつた室にはかち／＼と音のする機械の間に二人の色青ざめた男と一人の女とが居るし、此方隣は鍛鐵場で半裸體の女二人と男一人が鐵鎖を造つて居るのが現はれる。

S――(兩方の光景を見て思はず身を退りながら)何んと云ふ悲しさうな顏をして居るんでせう。――皆んな。一體何を造つて居るので御座います。

暗かつた旅館の入口がまた明るくなつて來て、珠玉を鏤めた金の衣物を着た赭ら顏の滿足さうな男が黄金色の酒を盛つた盃を持つて居るのが見える。但し其の姿の腰から下は朧ろで見えない。

S――これは綺麗で御座います。何んで御座いませう。

L――驕奢と云ふものだ。

S――私には見えませんが何んの上に乘つて居りますの。

姿は見せずに Wine Horn が mandolin をかきならす。

L――それは見ないやうにするのが花だ。

S――歩けないので御座いますか。(Lamond はかぶりを振る)あの人達があの悲しさうな風で造り出すのがこれで御座いますか。

其の時又 mandolin がなり始める。さうして家々の窓扉はしまつて旅館の戸口も暗くなる。

L――そんならお前のほしいのは何んだい。學問なら本が星に屆くほど積み重ねてある。(Seelchen はかぶりをふる)誰も意味の解らない程深い宗教もある。(Seelchen は又かぶりをふる)誰でも把手を廻せばすぐ得られるやう

な淺い宗教もある。何んでもあるよ。

S――眞理も御座いますか。

L――そんな事が解るものか。なら聞かうが、眞理はお前の山羊（やぎ）の居る所にたしかにあるかい。（Seelchen かぶりをふる）それなら何がほしいんだい。

S――life がほしう御座います。

mandolin が急になり出す。

L――（自分の胸を指して）life に行ける道は此處きりだ。

S――でも私はそれを愛して居りません。

L――鳥の羽が飛ぶのは不可解な風を愛するからだらう。夜が明けても珍らしい事がないとお互は佛頂面をするんだ。光にも遇ひ暗にも遇はなければ氣息（いき）も何もつまつてしまふ。ね、解つたらう。生きると云ふのは愛する事。愛すると云ふのは生きる事。つまり驚いて見ると云ふのだ。（女の近づくに從って）愛すると云ふのは崕の際から小さな灰色の花を探し出してそれを取りに這ひ降りるやうなもんだ。所が花には羽根があるから一寸逃げを張る。で又這ひ降りる。花が震へる――と見ると手に殘るのは羽風ばかりだ。そして爬（は）つたり、かじりついたり、飛んだりしても、花は此處にあつたり彼處にあつたりだ――何故と云つて花は夜蛾のやうに逃げまはるのだから、捕へたと思ふのは羽風だ。それでもお前の眼は輝いて、頰はほてつて、氣息（いき）ははずんで來る――あゝ Little Heart（舞臺は暗くなって行く）そして夜になるとね――あたりは靜かになつて薊（あざみ）の絨毛（わたげ）が闇の中に吹き飛ばされる。とお前は白い手を延べてそれを追ひ、香ばしい氣息（いき）でそれをたゞよはせるが、さてそれを手に取る事は出來ないのだ――それでもそれで life は愛すべきものとなるのだ。（男は段々聲を細めて手をさし延ばす）

S——（男の胸にふれながら）さあ参りました。
L——（女を暗い入口の方に導きながら） 已れを愛してくれ。
S——愛します。

mandolin がなつて戸口は夢幻郷のやうに二人を呑んでしまふ。 lamp の灯影に照らされて Wine Horn の若者が又現はれる。 さうして mandolin を靜かに奏でながら歌ひ出す。

暗闇を羽音をたてゝ「時」が飛んでる——
Little Heart や、 それが聞こえるかい。
生々しい戀が生れると老ぼけた戀は死んで行く、
kiss しあつた唇も別れる時があるんだよ。
光陰と云ふこはい蜂——
私の Soul や、 それが見えるかい——
花から花へと涙やね、
おいしい蜜のお酒を飲んでまはるんだよ。
其の聲はやがて熱情の籠もつた聲になる。

低い所でよろ〳〵しながら
「時」の沼地を歩きまはる焔の光
眞黒な魔でも住みさうな泥の中を
私共は氣も狂亂に追つかける——

あやかしの焰其處動くな！
と暗い空を上の方に
黄金色の氣まぐれものはついと消える——
戀と云ふのがさうしたもの。

さう歌つてる間に日は青白くなつて消え、若者を照らす lamp の灯影の外は眞暗になる。でも歌がすむ頃には家々の上に夜が白んで lamp が消えて Wine Horn は影となつてしまふ。やがて旅館の入口から Seelchen が薄寒い夜明けの光の中に出て來る。生活で衰へたやうに顏は蒼ざめ、其の蒼白い顏に對照して睛（ひとみ）は漆のやうに見える。

S——私の心は老いほうけた。

さう云つてると遠くから牛の鈴の音が聞こえて來るので Seelchen が耳を傾けて居ると Lamond が旅館の戸口に現はれる。

L——Little Soul!

S——あなた？　又あなた？

L——己れはまだ珍らしいものを持つて居るんだ。

S——（歎息して）いゝえ。

L——己れは誓つて持つてる。己れは始終變つて居るのだから、お前が倦きる譯はないのだ。

S——お聞きなさい。

牛の鈴の音が又聞こえ出す。

L——（始ましげに）惰眠の音樂だ。お前の life は己れと一緒では悲哀だつたのか。

S——私は何もつまらなかつたとは思つて居ません。

L——お出で。

S——（自分の胸を指して）鳥は飛び倦きましたの。（自分の唇に觸れて）花には露がなくなりました。

L——どうしても行つてしまふのか。

S——御覽なさい。

見ると曙の色がたなびいて、すゞかけの木の所に Cow Horn の牧羊者が山外套を着て立つて居る。

L——何んだ。

S——あの人です。

L——何んにもありやしないぢやないか。（女を強く抱いて）已れはお前に町の不思議を見せてやつた——華やかな不思議も傷ましい不思議も。お互に life も知つた。此の上お前と暮せなければ二人とも死なう。御覽! 其處にあるのが睡死と溺死とだ。

mandolin がなつて薄暗い旅館の戸口から影のやうな睡死と溺死の姿が現はれる。而して物すごい mandolin の調べにつれてをどり近づきながら女を見て微笑んで、又をどりながら遠ざかる。

S——（其の跡を追ひながら）死にませう。二つともなつかしい。

女が旅館の方に行くと Lamond の顔は喜びで見ちがへるやうになる。然し女が戸口に足をかけようとした時、鈴の音と草笛の音とに和して Cow Horn の牧羊者の歌ふ聲が聞こえる。

野の草に、なだれる巖の遠い響に、
鷲のかける故里（ふるさと）の花牧に、

日の光を浴びて草をはむ羊の群れに、
私が半月の色を冠として青白い光の中をさまよふ高山の牧場に、
靜かな空に、薔薇色の曙の物思はしげなさゝやきに、
わが子よ、歸れ！

歌ふ中に日が上る。Seelchen は唇を震はせながら振り向いて手を延ばす。死の影は消え失せる。

S——今參ります。
L——（女の腕を握りながら）行くとは何處に行くのだ。
S——山に行くので御座います。
L——あの變化と不思議とのない山にか。
S——世間から山に這入る變化と不思議は、世間の中に在る變化と不思議より大きう御座います。
L——お前は己れの涙と笑ひと憤怒と抱擁とを忘れたのか。己れはお前を愛して居るのだよ。
S——千度も人を愛して千度も戀を捨てると仰しやつたお言葉はどうなさりました。
L——（惡意を啣んだ皮肉の笑ひ）はゝゝゝ行つちまへ。お前は世間と山とのもてあましものだ。Seelchen. なまじ眼を開けて歩くと魔がさすぞ。

黑い外套だけが殘つて Lamond の姿は地の中へ消えてしまふ。
Seelchen が Cow Horn の牧羊者に近づくと草笛の長い音が聞こえる。さうして牛の鈴、花の鈴、草笛の響が交はつて遠くから聞こえて來る。

第四場

舞臺は霧がゝつた夜明の體でほの明るくなる。Seelchen は青空を劈いて聳える綠の峰に立つて居る。半月が光かすかに中空にかゝつて居る。一人の牧羊者が岩の上に坐つて笛を吹くと、花の兒等は銀白、青、淡紅色、黃金色の肌着を着てをどる。手ん手に持った銘々の色の花で撲ち合ふと鈴がなる。一人づゝぐるりと廻つてをどりながら Seelchen に花をなげつける。Seelchen はそれを唇や眼にあてる。

S——まあ露が。（岩の方に行つて）羊飼ひさん。

然し花は牧羊者を取り圍んで、やがて、をどり退ざると思ふと牧羊者は居なくなる。女が花の方に振り向くと花も居なくなる。霧が段々と晴れて行く。

S——行つてしまつた。（眼をこする。さうしてもう一度岩の方を向いて見ると、腕組をして Felsman が立つて居る）まあお前さん。

F——犢が病氣を治しに來たやうに歸つて來たな。お前をあんなに留めて置いた町はいゝ處かな。

S——つまらなかつたとは思つて居ませんよ。

F——そんなら何故歸つた。

S——倦きたもの。

F——もう私を離れてはならないよ。

S——（あざける樣子で）何んでお前さんは私を引き留める積りだらう。

F――(女を抱いて)かうしてだ。
S――私は變化を覺えたから――今では臆病者ではありませんよ。
F――(不機嫌に)全くお前は變つて來た。眼は凹んで――蒼白い顏をして居る。
S――(やつぱりあざける樣子で)私を引き留めるにお前さん此處には何があるの。
F――太陽がある。
S――日にやく爲めに?
F――空氣もある。
　かすかな風の音がする。
S――寒い思ひをさせる爲めに?
F――沈默もある。
　風の音やむ。
S――さうね。全く寂しいわね。
F――まだある。花がお前に舞踏ををどつて見せる。
　鈴の音につれて花がをどりながら出て來る。其の內一つ〳〵をどりをやめて坐つてうなだれて眠つてしまふ。
S――御覽、花でさへ此處では睡がつて居る。
F――今山羊を呼んで彼奴等の眼をさまさしてやる。
　牧羊者が又岩の上に現はれて坐りながら笛を吹くと、四人の色の黑い、野性の眼をした裸の山羊の脚と、尻尾のある小兒が出て來て、睡つた花の間を彼方此方とをどると、花は眼をさまして飛び上つて逃げる。其の內山羊は銘々花を捕へ

て引き込むと共に笛をやめて岩の上に寂然と倒れてしまふ。

F――私を愛してくれ。

S――お前さんは荒くれ男だ。

F――私を愛してくれ。

S――お前さんは恐ろしい。

F――成程私は可愛いゝ聲は持つて居ない。聞け、これが私の聲だ。（腕を靜かな峰の四方に振り動かして）靜かになつた。夜明けから宵の明星が出るまで凡ては靜寂だ。（手を女の胸に置きながら）だから小鳥の翼も靜かにならなければいかん。

S――（Felsman の眼をさはりながら）お前さんの眼は恐ろしい。それを見ると恐ろしい獸でもうづくまつて居るやうだ。それを見ると遠い感じがします。何時でもそんなに恐ろしいんですか。

F――私の花。お前を見る時は恐ろしい眼はない。

S――（男の手をさはつて）あなたの手は花を摘むには荒らすぎる。（女は男と離れて牧羊者の臥て居る岩の方に行く）御覧、動くものは何んにもない。日だつて經ちはしない。若い衆さん。（牧羊者は動きも答へもしない）すつかり鬱ぎ込んでしまつて。（感情的に）若い衆さん、返事しようとはしないのね。此處では誰も返事なんかしてくれない。

F――（激しい戀慕の樣で）私も返事をしない一人にするのか。

S――お前さん？

舞臺は夕方となつて暗くなる。

御覧なさい、晝間さへ眠りかけて來た。もう夜になりさうだわ。

唾眠の影の姿で灰色の蛛網の衣を着、懶さうに腕を動かしながら現はれて Seelchen の周圍をまはる。

S――お前さん達は私の好きな眠りなんだね。

微笑みながら Felsman に手を延ばすと、Felsman は倒れかゝる其の體を抱く。さうして唾眠の影に取り圍まれながら二人とも消えてしまふ。急に明るくなつた半月の影の外舞臺は暗くなる。其の時岩の上からかの牧羊者の笛が聞こえる。

黄眼でまだらないゝ匂ひの
わしの山羊公!
月星も黄金の日もそよ風も
一緒になつて草ををどらせ
お前の腹をこやすやう。
山の狐奴行きずりに
眠るお前を嗅ぎ出さぬやう。
わしの笛が澄んでひゞいて
甘露の水が見つかるやう。
鷹の奴も乳盗人も
お前のそばには寄りつかぬやう。
晝間は晝間でお前の脚が
焼けた出岩ですべらぬやう。

お月様の下の此の祈り
跳ねながら聞いて下され
pan の神様。

淡い月光の中を山羊神 Pan が過ぎて行く。笛を長く一吹き吹いて牧羊者は默してしまふ。やがて月はかくれて暗闇になる。と怖ろしいまがひの曙の色が出て來る。寢入つた Felsman の側に立ち上る Seelchen の姿が見える。牧羊者は居なくなつてCow Horn の牧羊者が外套を着たまゝで立つて居る。

S——何年私は眠つたらう。私の心は餓ゑて居る。(Cow Horn の牧羊者が其處に立つて居るのを見て)今こそ私は、あなたがすつかりと判りました。あなたの匂ひ、あなたの樣子、あなたの味、あなたの音樂、それがはつきり私の心に刻まれました。私は何時の間にかあなたを通り越してしまつて居ます。(何處かに行きかゝる)

F——(眼をさまして)何處に行くんだ。

S——世界の端まで。

F——(起き上つて引きとめる)私を捨てゝ行つてはならぬ。

女は唯微笑んで居るのに Felsman は不拔其者と爭ふやうに苦しんで居る。

S——お前さん、私は急ぐんだから。

F——私が荒々しく kiss をしたとでも云ふのか。それとも私では面白味がないのか。

S——つまらなかつたとは思つて居ませんよ。

Wine Horn が突然 Cow Horn の前に現はれて mandolin をならす。

F——町の糞音樂！　お前は彼奴の處に歸らうと云ふのだな。(Wine Horn を捕へようとして)見えない。

S――そんな心配には及びません。私はもつと先きに行くんだから。

F――岩間の凮に私を任かして行つてしまふとは心ない。お前の愛がなければ私は死んでしまふ。

S――お氣の毒ですけれども私は行きます。

F――(岩に身を伏せて) 冷たい寒い。

牧羊者の草笛が長く響いて Cow Horn が女の方に手を延ばす。同時に mandolin がなつて Wine Horn も手を延ばす。

Seelchen は心を動かさずに立つて居る。

S――私はどうでも行くんです。やがて夜も明けませう。

默つたまゝで Cow Horn も Wine Horn も顏を被ふ。にせの曙は消え失せて深い夜の色だけが殘る。

第五場

かすかな光がそつと來て Great Horn の雪の頂を照らし Seelchen にも流れかゝる、其の光の道の兩側には影のやうになつて Cow Horn と Wine Horn とが頭を包んで立つて居る。

S――すぐれたお山樣、私が參りました。

Great Horn の峰が遠くから口を開く。其の聲は光の強くなるに從つて太く朗らかになる。

胸の熱を絕やさでもろ〳〵のものを燒かんとし、
凡てをかき抱き、倦んじて、しかも悔ゆる事なく、
信ぜるにも悲しび、疑へるにも勇み、

愛を其の口に味はずして其の胸に味ひ、
智慧を其の腦に汲み入れずして其の胎(はら)に孕み、
歩むにおのが足あるを知りし
小さき焰よ。
汝を弄(もてあそ)びし運命の風はとこしへに默しぬ。
汝の心ひろき生活は今遂げられたり。
光と暗と、變化と休息と、自然と人と、
孤獨にしてたじろがぬ焰よ、
それらの調和は今の汝を培(つちか)ふ價高き油ならず。
か丶る思ひわづらひは生命を生まず。
生きんとや——來れ我れに、暗示に聖壇に！

Seelchen 跪きて頭を垂れる。光は靜かに薄れて遂に暗黑となる

第六場

闇の色が薄れるにつれ、登山小屋の窓を漏れる似而非(にせ)の曙の光で窓榻の上に寢入つた Seelchen の側に立ちながら娘を眺め入る、Lamond と Felsman との姿が見え始める。

F——（女をゆり起しながら）もうぢき夜が明けるんだよ。

女は身動きして唇を動かしながら囁く。

L——眠らして置け、夢でも見て居るんだらう。

Felsman が提灯をかゝげると Seelchen の顔が見える。二人はそつと戸の方に行つて Seelchen が次ぎの言葉を云ふ時外に出て行つてしまふ。

S——(膝をついて身を起し歓喜のあまり手を擴げながら) すぐれたお山様、私が参りました。(漸く眼を覺ましてあたりを見ながらやがて立ち上る) あれ私は小さな夢を見たんだ。

開けたまゝの戸からは曉の色が空に見えて近づいた山羊の鈴の音がほのかに遠ざかる。

——幕——

(一九一二年三月、「白樺」所載)

ホヰットマン詩集

譯者小序（第一輯）

飜譯の困難、殊に藝術的作品飜譯の困難であることは十分に知つてゐる。さうして詩の飜譯に於てその困難は、困難といふ境を越えて不可能であるやうに見える。さうして私は敢てこの無謀な企てをはじめた。それ故私は一つの藝術品としてこの譯詩が受け入れられることを期待しない。殊に私は詩人ではない。言葉を純粹に選別する力を私は授かつてゐない。さういふ人が詩を譯すのは分に過ぎたことのやうでもあるけれども、一面にはその申し開きが出來るやうにも考へる。詩人は他人の言葉、他人の思想を語ることが出來ない。それ故彼は飜譯者であるには嚴密にいふと全く不適當であらねばならぬ。詩界の平信者である私は少くとも或詩人に沒入することが出來る。さうして自分自身の詩的表現力を有しない私は、詩人のそれに即することが出來るらしい。この點を力にして、私は日頃愛誦して措かないホヰットマンの面影をかすかながらにでも、英語を解し得ない讀者に傳へたいと思ひ立つたのだ。それ故この譯詩は原詩のおぼろな影畫に過ぎない。私は唯私の仕事が不完全で拙劣なために、却つて詩人を瀆し、引いては彼を日本の讀書界から遠ざける結果に陷らざらんことを祈るばかりである。

この仕事をするについて、私は富田碎花氏の既成の飜譯を座右においた。必ず種々な點に於て暗示を受けたに相違ない。この事をこゝに明記しておく。白鳥省吾氏の譯は遂に照合する機會を持たなかつた。岩野泡鳴氏にも多少の飜譯があつたと記憶するが、それも參考にはしなかつた。原本は David McKay, Philadelphia の "Leaves of Grass" 一九〇〇年版を主として採用した。

ホヰットマン年譜を編むに際して、久保田正蕣氏が富田氏の譯本に添へられた傳記から三四の事實を引用した。これも謝意を以て明記しておく。

私なりに細心の注意はしたつもりだけれども、思ひちがひや誤譯をしてゐる個所が多いに相違ない。如何(どう)しても不安な所には括弧をして＊印をつけておくが、若し讀過の際、その他の誤謬にも氣附かれた方があつて、是正を惜しまれなかつたら、難有く思ふ。

譯詩の或ものは「新潮」、「大觀」、「明星」、「新家庭」その他の雜誌新聞に投書したものを再錄した。

第二卷にはホヰットマンの最長詩篇なる「自己を歌ふ」(" Song of Myself ")と、詩人に對する私の卑見とを發表したいと思つてゐる。

一九二一、十月七日寒く曇れる夜　　譯　者

譯者小序（第二輯）

この譯詩集の第二卷を公けにすることのかく遲れたのは譯者の怠慢に依るものである。

「牢獄の中の歌手」を除く大部分の詩は
"Leaves of Grass", issued under the editorial supervision of his literary excutors, Doubleday, Page & Co., N. Y.
に據つた。「自己を歌ふ」中に數ケ所未定稿となすべきものがある。若し讀過の際誤謬に氣附かれる方があつて、是正を惜しまれなかつたら難有く思ふ。

譯詩の或るものは既に他の雜誌に掲載した。

「ワルト・ホヰットマン」といふ小さな感想は私の贅語に過ぎない。詩人を歪（ゆが）んで見てゐるかも知れない。そのつもりで讀んでいたゞきたい。

一九二二、一月八日曇りて雨ならんとする夜半　譯者

ワルト・ホヰットマン年譜

一六六〇――この時代に、スコットランド人系なるヂョセフ・ホヰットマンといへる人がロング・アイランド (Long Island) のハンテイングトン (Huntington) に居を定めた。ワルト (Walt) はこの人より七代目の末裔に當る。

生る

一八一九――五月三十日、ワルトは、ロング・アイランドのウエスト・ヒルス (West Hills) に生れた。ロング・アイランドは亞米利加印度人によつてポウマノック (Paumanock) と呼ばれた南北に長い、海沿ひの島で、「長い魚」といふ意味ださうだ。

父はワルター (Walter) といつて大工職、大男で、默つた、屈託顔をした男、然し敬虔な天性と親切な心の持主で、熱烈な說教家エライヤス・ヒックス (Elias Hicks) に傾倒してゐた。

母は娘名をルヰザ・ヴアン・ヴエルソア (Luisa van Velsor) といつて、和蘭から移住して來た家族の家に生れた。「頑丈な沈着な家婦、勇悍な騎者で毎日馬を乘りまはした。」

ワルトには八人の兄弟があつて、その二人目だ。

ヂョース (Josse) ――狂癲を起して死んだ。

ワルト (Walt) ――詩人自身。

女

女

男――夭折した。

アンドリウ・ヂヤクソン (Andrew Jackson)

ヂョーヂ・ワシントン(George Washington) 南北戰爭に參加して傷を被つた弟。
トーマス・ヂェファアーソン(Thomas Jepherson)
エドワード(Edward)――白痴。

四歳

文政二年。
この前年トゥルゲニエフ生る。キーツの「エンデイミオン」、バイロンの「チャイルド・ハロルド」、ショーペンハーワアの「意志及び現識としての世界」等出づ。この年ラスキン、エリオット、ロウエル、クルベー等生る。
一八二〇――ハーバード・スペンサー生る。ラ・マルテーヌの詩集出づ。
一八二一――キーツ、大ナポレオン死す。ドストイエヴスキー、ボードレール生る。
一八二二――シエレー死す。バイロン「ドン・ヂュアン」を完成す。ユーゴー及びハイネ詩集を公けにす。ベトーフエンの「ミサ・ソレムニス」成る。

一八二三――家族と共にロング・アイランドからブルックリン(Brooklyn)に轉住した。ワルトは非常に元氣で、戸外の逍遙や遊戲に熱中したらしい。海岸に出て魚を捕へたり、海鳥の生活を觀察したり、難破船を眼の前に見たり、元始的な印度人が農家の爲めに家畜を放牧してゐるのを見て深い印象を受けたのはこの年あたりから十歳位までの間の事だつたらう。それらの記憶と經驗とは永く詩人の腦裡に刻みつけられてゐて、彼を自然の歌手たらしめた。

ルナン生る。プーシキンの「オネーギン」出づ。モンロー主義の宣言書が發布された。
一八二四――バイロン死す。シャヴアンヌ生る。
一八二七――ベトーフエン及びブレーク死す。ポーの第一詩集出づ。
一八二八――トルストイ、イブセン、ロゼッテイ、メレデイス等生る。
一八二九――ゲーテの「ウヰルヘルム・マイスター」が完成した。
一八三一――スタンダールの「赤と黒」、及びゲーテの「フアウスト」第二部が出た。

十三歳

一八三二――此の年小學校を退學し、爾來一切學校教育なるものを受けなかつた。クラークといふ辯護士の

事務所の給仕となり、又或醫師の家にも傭はれてゐた。さうして遂にロング・アイランド・パトリオット(Long Island Patriot)といふ新聞の植字工となつた。

その頃ワルトが昵近になつた或人が非常にワルトを愛し、且つ讀書の習慣を養ひその便宜を與へてくれた。

ゲーテ、スコット、頼山陽が死んだ。カーライルの「サーター・レザータス」が出た。ビョルンソン及びマネー生る。
一八三三——ブラウニングの「縛せられたプロメシウス」出づ。

十五歳

一八三四——身體の發育が完全で、堂々として既に成人の風があつたといはれてゐる。

ウヰリヤム・モリス生る。
一八三五——ゴーゴリの「タラス・ブルバ」出づ。
一八三六——エマーソンの「自然論」出づ。

十八歳

一八三七——サッフオーク(Suffork)に行き小さな小學校の教師となる。「嚴格ではなかつたが、權威があつた。その態度は眞摯で、女性に對しては內氣で、宗教的な所は何處にもなかつた。」

ヂョン・ヂョンストン(John Johnston)が後年サッフオークを訪れた時、ワルトに教へを受けた一人の男の語る所によれば「彼は教師として强ち失敗だつたとはいへないが、確かに成功でもなかつた。それは彼の性に合はなかつた。彼は教職に出精するより、始終考へたり書いたりしてゐた」云々。

「私が何か後々まで殘るやうなものを書きたいと思ひ立つた最初は、一杯に帆を張つて馳せ行く船を見た時だつた。私はそれを私が見た通りに文字に現はしたいと願つた。」とその頃の出來事を詩人は回想して記してゐる。

スウヰンバーン生る。大鹽平八郎、大阪に亂を起す。

二十歳

一八三九——ハンテイングトンで週刊ロング・アイランダー(Long Islander)を發行した。執筆から、印刷、校正、配達まで獨りでやつて退ける。

二十一歲

一八四〇――ザ・デイリー・オーロラ（The Daily Aurora）といふ新聞が紐育で發刊されるに際し、入つてその記者となる。その頃、ワルトは高帽に細身の杖を携へ、胸釦には花をさしてゐた。後年の詩人の風采とは大きな對照であつたらしい。その頃ポー（Poe）に私淑し、その文體を眞似て小品を書いたが、精練緻巧を極めたその筆致はポーと雁行するに足る程のものだつた。

「詩――題、『幸福であれ。』戸外に出かけ、凡ての美しく完全なるものを見る」……其頃の詩人の備忘錄より。

　ゾラ、ロダン生る。サイモンズ生る。
一八四一――レルモントフ死す。ルノアール生る。エマーソンの論文第一集出づ、谷文晁死す。
この頃の詩人の愛讀書――舊新約聖書、セークスピヤ、オッシアン、ホーマー、エスキユラス、ソフォクレス、ニーベルンゲン古傳說、古代印度の詩歌、ダンテ、スコット等。

一八四二――マラルメ生る。テニソン第三詩集、ブラウニングの「パイド・パイパア」その他出づ。

二十四歲

一八四三――當時全米を席捲した奴隷問題について考へ、屢〻これに對する意見を發表した。その頃書いた"Bloody Money"といふ詩は、その當時の彼の思想とスタイルとを窺ふに足るものだ。

　ヘルデルリン死す。ラスキンの「近世畫家傳」出づ。
一八四四――ヴェルレーヌ及びニーチエ生る。
一八四五――ドストイエヴスキーの「貧しき人々」、ポーの「鴉」其の他、スティルネルの「唯一者とその所有」出づ。

二十七歲

一八四六――ブルックリン・イーグル（Brooklyn Eagle）の記者となる。この年前後十年位の間、彼は紐育の都會生活に多大の興味を寄せ、新しい視角からそれを綿密に觀察した。乘合馬車の御者、渡船の船員、町の女、其の他"Powerful uneducated persons"には限りない親愛の心を寄せた。

一八四七――トゥルゲニエフの「獵人日記」出で始む。ゴンチャロフの「オブローモフ」、エマーソンの「詩集」出づ。

二十九歳

一八四八――中米及び西米に漫遊を試み、遂にニュー・オルレアンス（New Orleans）に行つてクレセント（Crescent）紙の記者となつた。この頃、彼には情人があつて、その人によつて子を擧げたらしい。「若き壯年時代、中年時代、南方に住んでゐた頃の私の生活は、おもしろをかしく肉的なものであつて、疑ひもなく人の非難を受くべきものだつた。結婚はしなかつたが、六人の子を擧げた――二人は死んだ――南部に生活してゐる一人の孫は、時折り私に手紙をよこす――或事情（それは彼等の財産と利益とに關係してゐる）の爲めに、二人は親しい間柄にあることが出來ないでゐる」――アディングトン・サイモンズに後年彼が書き送つた回答から。

一八四九――ポー死す。ストリンドベルヒ、カリエール生る。

三十一歳

一八五〇――紐育に歸り、ブルックリン・フリーマン（Brooklyn Freeman）の記者となる。十五歳で成人の風があつた彼は、三十歳にして頭髮鬚髯共に際立つて白くなつた。この頃から講演者として一生を送らうかと考へたことがあつたが實行しなかつた。

又父の業を繼いで建築業をもした。エマーソンの書いたものを熟讀し出したのもこの頃からであらう。この年の夏「草の葉」中の數篇を草したといはれてゐる。

ウォーズウォース、バルザック死す。モーパッサン、スティヴンソン生る。バルザックの「人類喜劇」出づ。米國メキシコと交戰す。

一八五二――トルストイの「幼年」、「コサック」出づ。ゴーティエの詩集「琺瑯とカメオ」其の他出づ。

三十四歳

一八五三――この頃に至つて詩人の生涯の眞目的がやうやく判然として來たやうに見える。「その大望といふのは、文學的な若しくは詩的な形式によつて、妥協することなく、私自身の肉體的、感情的、道德的、理智的並びに詩的な個性を忠實に言葉に表現しようといふことだつた。……この年代、この土地にあつて、特殊な個性を、今までの如何なる詩人よりも如何なる書物よりももつと確實で普遍的な意味に於て探究しよ

うといふ事だつた。」

ゴッホ生る。
一八五四――コムトの「實證哲學體系」出づ。ラムボー生る。

三十六歲

一八五五――ワルトの生涯に取りても、世界文學の歷史に取りても忘れることの出來ない年。

父が死亡した。

自分の詩集を百部だけ自分で印刷して公けにした。さうしてそれに「草の葉」(Leaves of Grass)と命名した。それには十二の詩が收められ、九十四頁の小册子だつた。この詩集が起した反響は默殺でなければ嘲罵であつた。ホイッテイヤはこれを火中に投じたといはれてゐる。ロウエルに取つては無意味な言葉の排列だつた。ロンドン・クリテイック (London Critic) の如きは「ホヰットマンが藝術に暗い程度は、豚が數學に對すると同樣だ」といつてゐる。詩人の母も弟のヂョーヂも全くこの書を振り向きもしなかつたといつていい。獨りエマーソンのみはその功績を認め、「私は君の偉大なる旅程の劈頭にあたつて挨拶を贈る。然しかくの如き出發をする以上、長い前途が横はる事だらう。私は若しやこの日光が錯覺に過ぎないのではないかと思つて、少しばかり眼をこすつたが、この書物の持つ強い識見は疑ふ餘地のないものであるのを確め得た」云々と書き送つてゐる。詩人は後年この時を回想していつてゐる、「この書が到る所に嵐のやうな憤怒と詰責とを牽き起した時、私はロング・アイランドとペコニック灣の東端にと出かけて行つて、紐育に次のやうな自信ある決意を抱いて歸つて來た。さうしてこの決意は爾後ゆるんだことがない。即ち、私は私の詩の事業を獨特なやり方で押し通し、力の及ぶ限りそれを完成しよう」と。

ヴェルハアレン生る。トゥルゲニエフの「ルデイン」出づ。

三十七歲

一八五六――「草の葉」の第一改訂增版三八四頁。ヘンリー・ソロー (Henry Thoreau) と相識つた。その外ア

ルコット (Alcott)、詩人ブライアント (Bryant) 等とも友達になつた。

ハイネ、スティルネル死す。オスカーワイルド、バーナード・ショウ生る。

三十八歳

一八五七――この年より一八六〇年に至るまで自分の詩を立派に仕上げる爲めに殊に力を盡した。

十月、ハリス將軍に謁し對外通商の急を說いて通商條約を議定した。コムト死す。ボードレールの「惡の華」、フローベルの「マダム・ボヴアリー」出づ。
一八五八――ホーレース・トラウベルがキヤムデンに生れた。詩人の晩年の無二の友であつた。グールモン生る。ウヰリヤム・モリスの詩集、エリオットの「アダム・ビード」等が出た。
一八五九――ベルグソン生る。「ルバイヤット」出づ。

四十一歳

一八六〇――「アダムの子等」(Enfans d' Adam)、カラマス (Calamas) 等二十二の新詠を加へた第三改訂增版が出版された。エマーソン來訪。「アダムの子等」を加へたその書にエマーソンの書簡の一節を揭載したので、エマースンは可なり迷惑したやうに見える。エルドリッヂ(C. W. Eldridge)、オ・コンナー(W. D. O'Conner)バック (Dr. R. M. Bucke) 等と知つた。バックは特色のある詩人の友達であり、且つ詩人の興味ある傳記者として知られてゐる。

リンカーン大統領となる。首府を江戸に移す。五箇條の御誓文。
ショーペンハウエル死す。チェホフ生る。スペンサーの「綜合哲學體系」出づ。

四十二歳

一八六一――第二增版を出してから、此の年までは、詩作を忘れたやうに、退職海員の世話に、沒頭してゐた。

「この日、この時、私は純潔で、完全で、おだやかで、淨い血を持つた雄々しい肉體を持つべく決心した。水と純粹な牛乳の外は凡ての飲料を避け、凡ての油氣の多い肉や晩い夜食を禁ずることによつて、淨化され、清められ、精神化され、力づけられた肉體を」……四月十六日の日記より。さうして彼はこの言明に背かなかつたやうに見える。

四十三歳

> エリザベス・ブラウニング死す。

一八六二――南北戰爭に出征した弟ヂョーヂが戰場で負傷したといふ急報に接し、凡てを抛つて南向した。弟の負傷は幸に重いものではなかつた。然し一度戰場の悲慘な樣子を目擊した彼は、惻隱の情に堪へず、自ら進んでワシントンにあつて病院の看護人となつた。その時の消息は「傷をつゝむ人」(Wound Dresser)に委しく記されてゐる。彼の看護生活は前後二十ヶ月の長きに亙り、その間、病院に訪れたこと六百度、傷病兵を看護すること八萬人から十萬人の間にあつた。その奉仕生活が餘りに激しかつた爲め、さすが健全無比だつた彼の肉體も衰へて來た。

> ソロー死す。ウーランド死す。メターリンク、ハウプトマン生る。ユーゴーの「レ・ミゼラブル」、ルナンの「耶蘇傳」出づ。ビスマーク、プロシアの宰相となる。

四十四歳

一八六三――十月ブルックリンに歸つて母を省した。詩作に歸らうかとの衝動を感じた。十二月再びワシントンに戻つた。

> リンカーンが奴隷廢止令を公布した。

リンカーンがワルトの歩いてゐるのを遠くから見て "Well, he looks like a man" といつたのは此の頃の事だらう。

> ヘッベル、ドラクロア死す。テーヌの「英文學史」出づ。

四十五歳

一八六四――この六月頃から健康を害して中風の氣味になつた。

> ラアサール死す。

四十六歳

一八六五――病院の仕事も以前のやうにはてきぱきとは出來なくなつた。オ・コンナーなどの世話で內務省の印度人局の書記に傭はれ、オ・コンナーの家庭に客となり、或はヂョン・バーロース(John Burroughs)な

どと往來して樂しい日を送つた。ピーター・ドイル（Peter Doyle）と知つたのもこの年のことである。芭蕉の杜國に於けるが如く彼はドイルを愛した。但しドイルは南軍の一兵士で、心が極めて素朴で美しかつた外には、文筆などの嗜みはなかつた。

「草の葉」の著者といふ科で免職された。オ・コンナーがその處置に憤慨して "The Good Grey Poet: A Vindication" を著はした。アシトン（J. H. Ashton）が詩人の爲めに大藏省に書記の位置を得てやつた。年收千六百弗。

四十七歳　一八六六——"Drum Taps" が單行本になつて現はれた。

> イエッ、キップリング、アーサー・シモンズ生る。ワグナーの「トリスタンとイソルデ」、イブセンの「ブランド」出づ。

> 四月十五日リンカーンが暗殺された。

この時ワルトはブルックリンに母を省してゐて、共に悲歎に暮れた。

四十八歳　一八六七——"Drum Taps" を加へた「草の葉」の第三改訂增版が出た。英國に於てもこの詩人を認めるものが漸次增加し、サイモンズ（John Addington Symonds）、ダウデン（Edward Dowden）、スウヰンバーン（Algernon Charles Swinburne）、ロゼッテイ（D. G. Rossetti）等が好意を寄せた。

> ボードレール、テオドル・ルーソーが死んだ。イブセンの「ピヤ・ギント」出づ。

四十九歳　一八六八——ロゼッテイの盡力で「草の葉」の選集が英國で出版された。この年からギルクリスト女史（Mrs. Anne Gilchrist）との文通が始つた。ギルクリスト女史は當時四十二歳の寡婦で亡夫の遺業を繼いでブレーク傳を大成した人だが、ワルトに於て聖書に等しい崇高な思想を語る一個の男性を見出した "An English woman's Estimation of Walt Whitman" を見よ。

詩人はかくの如く諸方からの承認を受けながら、その頃深い孤獨の寂寥に惱んでゐたやうに見える。

明治元年。ゴーリキー、ロマン・ローラン生る。ドストイエヴスキーの「白痴」出づ。
一八六九――ラ・マルテーヌ死す。ヴェルレーヌの「華かな饗宴」、ストリンドベルヒの「自由思想家」出づ。
一八七〇――モリスの「地上樂園」、エマーソンの「社會と孤獨」出づ。

五十二歳

一八七一――テニスン(Alfred Tennyson)から懇切な消息が來た。スウヰンバーンが "Song before Sunrise" なる詩集中に "To Walt Whitman in America" といふ熱情的な讃美の詩を書いてゐる。「印度への旅程」(Passage to India)を加へた詩集第四改訂增版が出た。「民衆の視野」(Democratic Vistas)が公けにされた。
ヂョン・ボロースのホヰットマン評傳(Notes on Walt Whitman)が出た。

ゾラの「ルーゴン・マカール」、ダンテ・ロゼッテイの第一詩集が出た。

五十三歳

一八七二――「自由な翼を張れる強い鳥のやうに」(As a strong Bird on Pinions free)成る。ダートマス學院(Dartmouth College, Hanover)の卒業講演に現はれた。その講演の自畫自讃をワシントンの新聞に豫め投書しておいたが、滑稽なことには沒書になる。

グリルパッツア死す。ニーチエの「悲劇の誕生」出づ。

五十四歳

一八七三――ルドルフ・シュミッド(Rudolf Schmidt)が「民衆の視野」を獨譯したについて、ワルトに寄せた手紙の中に、ビョルンソンが云つたといふ言葉が載せてある。"Walt Whitman makes me a joy as no new man in many years, and in one respect the greatest I ever had" 此年一月二十三日局部的な中風症を發し、第一次の遺書を作つた。職を退いて海岸に靜養する爲め北方への旅に上つたが、費府で病が重つたので、そのまゝ弟のヂョーヂが住んでゐるカムデン(Camden)に行つて、その家に寄寓することになつた。

それ以來カムデンは死に至るまで詩人の幽棲の地となつた。
五月二十三日母が死んだ。
オ・コンナーとの不理解が生じ、ワシントンでの友等は散じ、貧と病とが共に詩人を窮迫したけれども、彼は太陽の如く獨り暖かに心を保つた。
ギルクリスト女史が英國から渡米して世話をしたいと申し出でたがそれを拒んだ。

五十五歲

一八七四――再び詩作に歸つた。"Prayer of Columbus" "Song of the Universal" "Song of the Red Wood Tree" 等。

> トルストイの「アンナ・カレニナ」出づ。
> 岩倉大使等が歐米の視察から歸朝した。

> サイモンズの「伊太利及希臘紀行」が出た。
> 讀賣新聞が新聞紙の嚆矢として發刊された。

五十七歲

一八七六――「草の葉」の第五改訂增版が出た。英國の友、ロゼッテイ、ホウトン、ダウデン、ギルクリスト夫人、カーペンター(Edward Carpenter)、テニスン、ラスキン(John Ruskin)、スコット(Walter Scott)、ゴス(Edmund Gosse)、セインツベリー(Saintsburry)、ブラオン(Madox Brown)等が詩人の窮乏を聞いて醵金してくれた。
ワルトはスタッフォード家と懇親になり、折々その家庭を訪れ、又その近傍なるテインバー・クリーク(Timber Creek)に行つて自然と親んだ。彼の自然との接近はこの頃から復た繁くなつた。ギルクリスト女史が英國から費府に移住して來た。女史の詩人に對する尊敬は戀にまで變つた。さうして結婚を申し出た。けれども詩人はこれを避け、一八七九年女史が歸英の時まで折々その家を訪れて深い友誼的な交際を續けた。

> マラルメ「牧神の晝」、トゥルゲニエフの「處女地」、ワグナーの「ニーベルンゲン・リード」等が出た。

五十八歲　一八七七――五月カーペンターが英國から訪ねて來た。カナダの醫師バックも詩人を訪問した。爾來バックはワルトの綿密な觀察者であり、相談相手であり、旅行の伴侶でもあつた。

クルベー死す。イブセンの「社界の柱石」。

六十歲　一八七九――紐育に行き、リンカーンの追悼講演をなし得る位健康を囘復した。

ドーミエ死す。イブセンの「人形の家」、ストリンドベルヒの「赤い部屋」出づ。

六十一歲　一八八〇――バックの客となりカナダに行く。

エリオット、フローベル死す。

六十二歲　一八八一――四月にボストンに行きロングフエローによつて歡待された。ミレー展覽會を見、「種蒔き」、「水飼ひ」、「農人の休息」、「アンヂェラス」などの傑作に接して感嘆した。四十年にして始めてウエスト・ヒルスを訪れた。又コンコードに行き落日の如きエマーソンと會見した。

ドストイエヴスキー死す。アナトール・フランスの「シルヴエストル・ボナールの罪」出づ。
カーライル死す。大統領ガーフォールド暗殺さる。

十一月、カムデンに歸る。「草の葉」第六改訂增版が出た。

六十三歲　一八八二――ボストンの檢事局が「草の葉」の發賣を州内に於て禁止した。書肆が「一人の女が私を待つてゐる」(A Woman waits for me)「名もなき淫賣婦に」(To a Common Prostitute) を削除したらと勸めたけれども、斷乎として應じなかつた。

エマーソンとロングフエローとが死んだ。

「美しい男、自分自身の上に立脚し、凡てを愛し、凡てを抱擁し、さうして太陽の如く健かで朗らか」……エマーソンを評した詩人の言葉。秋に「自選日記及び雜纂」(Specimen Days and Collect) が出版された。詩人はこの書についてオ・コンナーに送つた消息の中に云つてゐる、「野鴨や雁の習慣を知つてゐるか。さあ、こ

の書物も先づ池の表面をせはしく撫でゝ通つたやうなものだ――私の生活の表面を……本當の廣さは全然觸れられてはゐない。然し平らな小石が飛びはねて行く時、こゝかしこで水面を打つ……そのやうに、少くとも或る生々とした接觸點を殘すにはそれで十分だ」。

六十四歳

> ロゼッテイ、ダーウヰン死す。トルストイの「懺悔」、ニイチエの「欣ばしき智慧」、ワグナーの「パルシファル」出づ。

一八八三――バックの書いたワルトの傳が出た。

> トゥルゲニエフ、ワグナー、カール・マルクス死す。モーパッサンの「女の一生」出づ。

六十五歳

一八八四――一家をミックル街 (Mickle Street) に構へた。

訪問者ヘンリー・アーヴヰング (Henry Irving)、ゴス、アーネスト・リス (Ernest Rys)、カーペンター、チヨン・モーレー(John Morley)、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde)、ウヰリヤム・ケネデー (William S. Kennedy)、ロバート・インガソール (Robert Ingersoll)、ホーレース・トラウベル (Horace Traubel) 等。

六十六歳

一八八五――ギルクリスト夫人逝く。ワルトその子息ハーバートに書を送つていふ「お手紙拜見。今は香ばしく豐かな記憶の外何ものも殘つてはゐない――常に美しい、命のある限り、大地のある限り、今日これ以上の手紙が書けない。私は獨座して考へなければならない」。

> ユーゴー、デユマ死す。
>
> **一八八六**――ローウェル死す。ストリンドベルヒの「結婚生活」出づ。

六十九歳

一八八八――六月病が重つた。遺言狀を作る。「十一月の枝」November Boughs を出す。

> イブセンの「海の夫人」、マラルメの詩集出づ。

七十歳

一八八九――幸ひに病魔は退いたが、彼の歩行はもう自由でない。家事はマリー・デビス夫人 (Mrs. Mary Davis) が司り、世話はワアリー (F. Waren Fritzinger) がこれに當り、黑猫、斑の犬、一羽の鸚鵡とカナ

リヤ島とがその家族だつた。

コンテンポラリー倶樂部（Contemporary Club）でリンカーンに就いて最後の講演をした。

> ブラウニング死す。ニーチェ發狂、ハウプトマンの「日の出前」、ブルヂエの「弟子」出づ。

七十一歲

一八九〇——ヂョン・ヂョンストンが英國から訪ねて來た。その訪問記に當時の詩人の容貌が——多少の誇張はあるが——詳細に述べてある。

> ラスキン死す。トルストイの「クロイツェル・ソナタ」、ワイルドの「ドリヤン・グレー」、フランスの「タイス」、メターリンクの「群盲」等が出た。

七十二歲

一八九一——“Goodly, my Fancy” といふいさゝかの詩集を出す。十二月十七日風邪から肺炎に變症して、病が頓に重くなつた。醫師が危篤を報じた。バック、ボーロース、ハーネッド（T. B. Harned）等が急に來て枕頭に侍した。

> オ・コンナアが死んだ。
> ニーチェの「ツアラストラ如是説」出づ。

七十三歲

一八九二——二月、病が小康を得た時、諸友と最後の告別をした。

三月二十六日、微雨の降りそゝぐ土曜日の午後、トラウベルの手を執つたまゝ靜かに世を去つた。

越えて三月三十日ハーレイ墓地（Harleigh Cemetry）に豫め造つておいた墓に葬られた。

葬式の日は長閑かな春日であつた。駒鳥の初音が林の中に聞こえてゐた。ウヰリヤムス（Francis Howard Williams）が孔子、ゴウタマ、基督、コーラン、イザヤ、聖ヂョン、ゼンド・アヴェスタ及びプラトー等から美しい句を朗讀し、ハーネッド、ブリントン（D. G. Brinton）、バック、インガーソール等が追悼の言葉を述べた。會葬者三千。獨り詩人の愛友ドイルは演說を聞かうともせず、會衆から離れて孑然と草の上に默坐してゐた。

> テニソン死す。ハウプトマンの「織匠」等出づ、明治二十五年。第一回帝國議會召集の後二年。

第一輯

顔

一

舗道の上を彷ふ時、或は田舎の小道を馬で乘りまはす時――見よ、樣々な顔又顔、
友誼的な顔、几帳面な、用心深い、慇懃な、理想家的な顔、
靈的な豫覺的な顔――いつ見ても好ましい普通な情け深い顔、
歌はれたる音樂の顔――法律家、司法官に生れついたやうな、後頭部の頂きが廣い、物々しい顔、
額のふくれた、獵人や漁夫の顔――生粹の市民らしい無髯な色白の顔、
純潔で、大袈裟で、憧憬的で、眼探るやうな藝術家の顔、
うるはしい魂を宿した醜い顔、卑められ、憎まるべき美しい顔、
小兒の神々しい顔、多くの子の母の輝かしい顔、戀の顔、渇仰の顔、
夢見る如き顔、動かぬ巖の如き顔、
善惡共に色にあらはれぬ顔――去勢された顔、
刈込手にその翼を刈り込まれた野性の鷹、
去勢者の革紐と鋏とに遂に打まかされた牡馬。

かく、舗道の上を彷ふ時、或はやむ時なく出入りのある渡船で川を越す時、顔、さうして顔、さうして又顔、

私はそれらを見る、さうしてつぶやくことをせず、凡てに滿足してゐる。

二

それらの顔がその終局の姿だと思つたとしたら、私がそれに滿足してゐられるとあなたは思ふか？
この今の顔は、一人の人間の顔としては餘りに情けない、
或る下劣な寄生蟲が「御免」といひながら——かじりついてゐる、
或る鼻腐れの蛆蟲が、その孔にもぐりこむのを妨げられないのをいゝことにして、かじりついてゐる。

この顔は塵芥を嗅ぎまはる犬の鼻先きだ。
蛇蝎がその口には巣喰つてゐる——私は齒の間から出す激しい氣息のやうな脅喝を聞く。

この顔は極洋のそれよりもなほぞく〳〵と人を寒くする靄だ、
その眠たげな所定めぬ氷山は、流れ行くまゝに嚙み合つて鳴る。

これは苦い草本の顔である——これは催吐劑である——それは名札を附する必要はない、
さうして人間の顔といふよりは、藥劑棚、阿片丁幾、ゴム、或は豚脂を思はせる顔である。

この顔は癲癇だ、その言語なき舌は、この世のものとも思はれぬ叫びを發する、
その血管は頸根まで怒張し、その眼は廻り動いた擧句に白眼だけになる、
その齒は嚙み合ひ、手の平は内側に曲つた指の爪で刺し通される、

その人は十分の意識を持ちながら、泡を吐き、身悶えして、地面の上に打ち倒れる。

あの顏は害鳥や害蟲のために喰はれてゐる、さうしてこの顏は半ば鞘を拂つた殺人者の匕首(あひくち)だ。

この顏は寺守りに贈つた恐るべき內密の金で存在を續けてゐる、
小休(こやみ)なき埋葬の鐘がそこには鳴つてゐる。

三

かくてこれらが人間の實際だ——大きな圓るい地球の上にゐる統領と凡人とだ！

私と同じ人間達の顏容(かほかたち)よ、お前はお前の皺だらけな死色を呈した多數の行進を以て私を欺(あざむ)かうとするのか、
さあ、お前は欺きおほすことが出來まいよ。
私はお前の決して失はれない完全な豐かさを見るから。
私はお前の憔(やつ)れた卑しげな假裝の一皮下を見るから。

思ふまゝに顏をかしげるなり、曲りくねらせろ——魚類や鼠類が前肢を動かし廻はすやうにして、嘲るなら嘲つて見ろ、
私はお前の口網を取去るから、屹度取去つて見せるから。

私は白痴院にゐるものゝ中でも最も汚(きたな)らしい涎くりの白痴の顏を見た、

さうして私は人々が知らないやうな慰藉をそれに對しても持つことが出來た。
私の同胞を虚ろにし、傷けた力について私は知つてゐた。
その同じ力が壞れた住家から塵芥を一掃するために待ち構へてゐるのだ。
さうして私は二十かその倍程の時代の先きを見守るだらう、
さうしてそこに私は、私自身と優劣のない、完全にして損はれない眞の地の支配者とめぐり遇ふだらう。

四

支配者は進出する、さうして更に進出する、
常に暗影を先驅とし――常に行きとゞいた手が後れ勝ちなものを驅り立てつゝ。
支配者のこの顏からは旌旗と軍馬とが現はれ出る――おゝ素晴らしさ！　何が起るかを私は知る、
私は先驅者の高い帽子を見る――私は疾走者の隊が露拂ひをするのを見る、
私は勝利の鼓聲を聞く。

この顏は救助船である、
この顏は威嚴を持つた有髯の顏で、他の人々の些事を心にかけない、
この顏はいつでも食ふによい香ひある果物だ、
健康で眞面目な靑年の顏は凡ての善の約束だ。

これらの顏は、眠つてゐても覺めてゐても、私の言葉を立證する、

彼等は神そのものゝ子孫であるのを示してゐる。

私の言葉に私は責任を持つ、私は除外例を作らない――赤人種でも、白人種でも、黒人種でも凡て神らしいのだ。
各の家には子宮がある――それは數千年の後に現はれ出る。

窓の汚染や龜裂は私を亂しはしない、
丈け高く完全なものが、その後ろに立つて私に手言葉を與へる、
私はそれに約束を讀む、さうして忍耐して待つ。

これは盛り咲きの百合の花の顏だ。
彼女は花園の垣根に倚るしなやかな腰つきの男に話しかける、
「おいで」、彼女は顏赤らめながら呼びおこす、「近くにおいで、しなやかな腰つきの男よ、
私が出來るだけ丈を高くしてあなたに倚りかゝるから、側に立つて、
私を白色の蜜で滿たしておくれ、私の方に折れかゞんでおくれ、
あなたの硬い髯で私をこすつておくれ、それを私の胸や肩にこすりつけておくれ」と。

五

夥多の子供を持つ老いた母の顏！
しつ、靜かに！　私は存分に滿足する！

日曜日の朝、朝霧は靜かにおそくまで、
それは木柵のへりの並木の上に低くかゝり、
並木の下のサヽフラスや、野櫻や、猫いばらの上にもかゝる。

私は富んだ貴夫人等が盛裝して音樂夜會に臨むのを見た、
私は唱歌者達が長々と歌ふのを聞いた、
誰が花のやうな若々しさで、白き水泡、紺靑の水から跳り出たかを聞いた。

見よ、女を！
彼女はフレンド宗徒風の帽子から顏をのぞかせて――その顏は大空よりも更に朗らかに美しい。

百姓家の、日影になつた廣緣に、彼女は肱かけ椅子に倚る、
太陽は丁度年老いたその白髮の上に照る。

彼女のゆたかな上衣はクリーム色のリンネルだ、
その孫息子達は亞麻を作り、その孫娘達はそれを紡絲車にかけて紡む。

歌のやうな大地のとゝのひ！

その完成さへ、哲学の達し得るところではなく、又達しようとの望みすらない。
中分のない人類の母。

大道の歌

一

脚にまかせ、心も輕く、私は大道を濶歩する、
健全に、自由に、世界を眼の前に据ゑて、
私の前の黒褐色の一路は、欲するがまゝに私を遠く導いてゆく。

これから私は幸運を求めない――私が幸運そのものだ、
これからもう私はくよ〳〵しない、躊躇はない、又何者をも要しない、
剛健に飽滿して、私は大道を旅してゆく。

大地――大地は自足してゐる、
私は星座等が更に近くにあるべき必要を見ない、
私はそれらが極めて正しい所にあるのを知る、
それらに屬するものはそれらに滿足してゐるのを知る。

（然かも私は快い重荷を擔ひつゞけてゆく、
男と女とを私は運ぶ——何處に行くのにもそれを運ぶ、
誓つていふ、私には彼等から遁れる術がない、
私は彼等で一杯だ、その代り彼等も私で一杯にしてやる。）

二

汝大道よ、私はお前の上に立つて見廻はして見る！　こゝにあるのがお前の凡てゞはないのだらう、
眼に見えない多くがなほこゝにはあるのだらう。

玆に深遠な攝取の敎訓がある、それは愛憎を絕してゐる、
獸毛のやうな髮毛の黑奴も、極重惡人も、病者も、文盲も退けられはしない、
誕生、醫者への急使、乞食の逍遙、醉ひどれのよろめき、笑ひさゞめく機械工の一團、
若い遁走者、富豪の車馬、めかしや、駈け落ちの男女、
朝市に出る男、葬車、町に運び入れられる家具、町からの歸還者、
それらは通行する——私も亦通行する——如何なるものも通行する——何者も禁制されない、
凡てが攝取される——凡てが私に親しましい。

三

その呼吸によつて私に言葉あらしめる汝、空氣よ！

混亂の中から私に意味を喚び起し、それに形を與へるところの汝、物象よ！
私と萬有とを平等な麗はしいその大雨の中に抱きつゝむ汝、光よ！
路の兩側に不規則な凹みを作つて踏みならされた汝、小徑よ！
お前達は眼に見えない存在で充滿してゐるらしい——お前達は誠に私に親しましい。

汝、旗に飾られた都會の道々！　汝、曲り角の强い力石よ！
汝、渡船よ！　汝、繋船場の平板と木柱よ！　汝、その側面の木材よ！　汝、遠くにある船よ！
汝、家々の列なりよ！　汝、窓をちりばめた家の正面よ！　汝、屋根よ！
汝、玄關と入口よ！　汝、冠石と鐵柵よ！
透明なる玻璃によつてさまざまの物を人の眼にさらす汝、窓よ！
汝、戶よさうして階段よ！　汝、穹窿よ！
汝、限りなき石疊の灰色なる石よ！　汝、踏みへらされた通行場よ！
お前の手近かにあつた凡てのものから、お前は自身に賦與したと思ふが、今その同じものを私にも竊やかに賦與しよう
とする、
生きたもの死んだものを問はず、お前はそれでお前の無感覺らしく見える表面を滿たしたやうだが、それらのものゝ靈
は私にもよく解り、さうして親しむべきものであるだらう。

四

大地は右手にも左手にも擴がり、

その光景は生き、そのどの部分も最上の姿で、
要せられる所に音樂が起り、さうして要せられない所には音樂が止む、
公けの大道の快活な聲―― 大道の華やかな生き〳〵した感覺、
おゝ街道を私は旅する！　おゝ公けの大道！　お前は私にいふか、「私を見捨てゝはいけない。」
お前はいふか、「冒險するな。若しお前が私を見捨てたら、お前は失はれる。」
お前はいふか、「私は既に整頓されたのだ――私は十分に踏みならされ十分に認められてゐる――だから私に膠着しろ」
と。

おゝ公けの大道よ！　私は返答する、私はお前を捨てるのを恐れてはゐない――しかも私はお前を愛するぞよ、
お前は私が私自身を表現するより以上に私を表現する、
お前は私に取つて私の詩以上のものだ。

思ふにあらゆる偉れた行ひは凡て外氣の中に企てられる、さうして凡ての偉大な詩歌も亦、
私はこゝに足を止めてゐては奇蹟をなすことが出來ないやうだ。
(私の判斷力、思想は、これからは外氣の中、大道の上で試みる。)
大道の上で出遇ふものは、何んでも私の氣に入るだらう、さうして私を見るものは誰でも私を好くだらう。
私が眼をとめる人は誰でも幸福だらう。

五

今のこの時から、自由！
今のこの時から私は制約や、空想的な境界線から自らを解放することを命ずる、
どこに行かうと、私は全然的に絶對に私自身の主、
他人にも耳傾け、そのいふ所をよく思ひめぐらし、
立停り、探り求め、受け入れ、熟慮しはするが、
しとやかに、然し拒み難い意志を以て、私は私を捕へんとする桎梏から私自身を奪ひ返すのだ。

私は空間から大氣を吸ひ入れる、
東も西も私のもの、さうして北も南も私のものだ。

私は自分で思つてゐた以上に大きく且つ善い、
凡てのものが美しく見える、
私は男の人にも女の人にも繰り返していひたい、あなたがたは大層ないゝことをしてくれたから、私も同じだけのことをあなたがたにして上げたいと。

私は歩を移すにつれて、私自身の爲めに　又あなたの爲めに獲得してゆく、
私は進みゆくにつれて私自身を男等と女等との中にふり撒いてゆく、
私は新しい喜びと荒々しさとを彼等の中に押しむける、

誰が私を退けようと、私はそれを苦にはしない、
誰かゞ私を迎へ入れるなら、その男の人なり女の人なりは祝福されるだらう、さうして私を祝福するだらう。

六

今一千の完全な男が現はれ出たとしても、それは私には不思議ではない、
今一千の美しい姿の女が現はれ出たとするも、それは私には不思議ではない。

今こそ私は最上の人間がどうして作られるかを知つた、
それは外氣の中にあつて、大地の上に食ひ且つ眠ることによつて作られるのだ。

こゝに偉大な個性的の行爲が働く餘地がある、
偉大な行爲は全人類の心を把摑する、
力と意志との流射は法律を轉倒させ、それに反對する凡ての權威と議論とを悶殺する。

こゝに叡智の試定がある、
叡智は徹底的に學校の中で試定され得るものではない、
叡智はそれを持つてゐる人から持つてゐない人に仕送られ得るものではない、
叡智は魂のもので、立證のしようがない、それ自身がその立證だ、
凡ての程度、凡ての物象、凡ての質價に使用されて、滿足するものだ、
それは事物の實在と不滅、及び事物の優秀を證明する、

事物の外形の流轉の中に、魂の中から叡智を呼び覺すべき何者かゞあるのだ。

かくて私はあらゆる哲學及び宗教を吟味する、
それらは講義室でうまく立證されるかも知れないが、しかも高大な雲の下、野外、流るゝ潮の傍らにあつては立證されないかも知れない。

こゝに實現がある、
こゝに共感する人がある――彼はこゝにあつて、彼の裏(うち)にあるものを實現する。
過去、未來、莊嚴、愛――若しそれらがお前に虚ろなものならば、お前も亦それらに虚ろなものだらう。

凡ての物象の中核のみが養分となる、
お前のために、又私の爲めに外殼を裂き破つてくれる人は何處にゐるのだ、
お前の爲めに、又私の爲めに權謀と束縛とを切り放してくれる人は何處にゐるのだ、

こゝに牽引がある――それは豫め形造られたのではなく――時宜に應じて出來たのだ、
お前が道を行く時、見も知らぬ人に愛せられるとはどんなことだか知つてゐるか。
お前に振り向けられた眼の球の言葉を解することが出來るか。

七

こゝに魂の流射がある、
魂の流射は問題の種を播き乍ら、木の葉に掩はれた門を潜つて內部から流れ出て來る。
このあこがれ心、それは何故だらう、又それと定めがたいこのそゞろ心、それは何故だらう、
何故男の人達女の人達が私の側近く來ると、太陽の光が私の血に漲るのだらう、
何故彼等が私を離れると、私の歡びの長旒は細く垂れ下るのだらう、
何故私がその下を步くごとに、あすこの樹から偉大な、音律的な思想が私の上に降るのだらう、
(思ふに人はあの樹に夏冬をつるしておいて、私がその下を通るとその木の果を落してよこすのだ。)
私が見ず識らずの人とふと取り交はすそのものは何んだ、
御者の側近く坐つてゐる時、その御者と取りかはすそのものは何んだ、
私が行きずりに立ち停つて見る、引網を引く漁師と取り交はすそのものは何んだ、
私が自由に女なり男なりの好意を受入れるのは何がさせる業だ、又私の好意を彼等が受入れるのは何がさせる業だ。

八

魂の流射は幸福だ――こゝに幸福がある、
思ふにそれは外氣の中に遍漫し、常に人を待ちかまへてゐる、
今それが私達にそゝぎ入つた――私達は正しく滿たされた、
こゝに無礙な愛着的な性格は生ずるのだ、
無礙な愛着的な性格こそは男なり女なりを生き〳〵とし、香ひやかにする、
(朝の若草は每日その根から生き〳〵と香ひやかに萠え出るけれども、性格が生き〳〵と香ひやかにそれ自身から萠え出

る姿には及ばない)
無礙な愛着的な性格に向つて老少の差なく愛の汗は流れ出る、
かゝる性格から美や修練を悶殺すべきチャームが蒸餾されて滴り落ちる、
かゝる性格の方に戰慄し熱欲する接觸の悶えが高まる。

九

さあ行かう！　お前が誰であらうと、私と一緒に旅しておいで！
私と一緒に旅する以上、お前は決してお前を倦まさないものを見出すのだ。

大地は決して倦まさない、
大地は一見荒つぽくて、沈默で依體が解らない――自然は凡て一見荒つぽくて依體が解らない　のだ、
失望してはいけない――我慢しろ――十分被はれてはゐるが、そこには神聖なものがある、
誓つていふが、そこには言葉にはいひ盡せない程美しい神聖なものがあるのだ。

さあ行かう！　私達はこゝに停つてはゐられない！
商品の一杯なこれらの店がどれ程心を牽くとも――どれ程この住居が重寶でも、私達はこゝにゐ殘つてゐる譯にはゆかない、
此の港が何程安全でも、そこの水が何程穩かでも、私達は碇を下ろしてゐてはならない。

私達の周圍がどれ程旅人に親切でも、私達はたゞ束の間だけその親切を受けることを許されるのだ。

一〇

さあ行かう！　誘引は更に大きいだらう！
私達は水路もない荒海を航海するのだ、
私達は、風が吹き、波が騷ぎ、ヤンキーの快走船が一杯に帆を張つて走つてゐる遙かな所に行くのだ。

さあ行かう！　力、自由、大地、元素と共に！
健康、不羈、快活、自尊、好奇、
さあ行かう！　凡ての形式から！
貴樣達の形式から、おゝ蝙蝠の眼をした物質主義の僧侶達よ！

無益な死骸が道を塞ぐ――葬りのいとまもない。

さあ行かう！　然し警戒を聞け！
私と一緒に旅するものには最上の血液と、筋骨と、忍耐とが要せられるのだ、
男でも女でも勇氣と健康とを持ち合はさないなら、私の道に來ることは出來ぬ。

若しお前がお前の最上のものを既に浪費してゐるのなら、こゝには來るな、

唯香ひやかな雄々しい肉體を持つたものゝみが來ることが出來るのだ、
病人は駄目だ――酒に耽けるもの、黴毒を病むものはこゝには許されぬのだ。

私と私の仲間とは議論や、比喩や、小歌で說伏し合ふのではない、
私達は自分自身の存在で說伏し合ふのだ。

一一

聞け！　私は眞劍でお前と話す、
私は古びたすべつこい賞與を提供するのではない、然し荒々しい新しい賞與をだ、
その賞與といふのはお前に來るべき毎日をいふのだ。

お前は世にいふ富を積み上げることはしまい、
お前は浪費的な手でお前の得たもの成就したもの凡てを撒き散らすだらう、
お前の眼あてにしてゐた都市に到着するや否や――お前が滿足して腰を落着けるや否や、そこを立去るべく拒みがたい
　招きを受けねばならぬ。
お前は後にゐ殘る人達から皮肉な微笑や嘲罵を浴びせられるだらう、
どれ程切な招きを受けようとも、お前は唯別離の熱い接吻を以て酬ゆる外はない、
お前はお前の方に兩手を擴げて引留めようとする人々の抱擁を許してはならない。

一二

さあ行かう！　偉大なる道伴れ達の方へ！　さうしてその人達に仲間入りするために！
彼等も大道の上にあるのだ！　彼等は敏捷な堂々たる男達だ！　彼等は最も偉大な女達だ！

彼等を妨げるものを乘り越えて――彼等を引きとめるものを振りすてゝ――大となく小となく障碍物をあとにして、乘り越えてゆく、

罪惡を遂げた人も、多くの美德を遂げた人も、
穩かな海を樂しむ人も、嵐の海を樂しむ人も、
多くの船を操つた人も、遠くの道を歩いた人も、
多くの國々の住人、遠い住居の人々、
男を信じ女を信ずる人、都市の觀察者、孤獨な勞役人、
叢、花卉、汀の貝類に足を停めて考へる人、
婚禮の舞踏の舞踏者、花嫁を接吻する人、子供達のやさしい保護者、子を生む人、
叛逆軍の兵士、まだ埋めない墓穴の側に佇む人、死棺を垂れ下ろす人、
季節定めず幾年も旅する人――不思議な月日、それはその前行の月日から現はれ出る、
謂はゞ道伴れを持つて旅する人、その道伴れとは彼自身の種々な一生の姿なのだ、卽ち、
包藏されてまだ實現しない嬰兒期から進み出るもの、
靑春を道伴れに旅するもの、――有髯の强健な成年期を道伴れに旅するもの、

滿ち足りた、無類な、充足した女盛りを道伴れに旅するもの、
男女にかゝはらず、彼等自身の崇高な老年期と共に旅するもの、
老年期、それは宇宙の誇りがな廣さほどに落ち着いて、成長して、廣々とした、
老年期、近づき來る甘美な死の自由さを以て、自由に振舞ふ老年期と共に旅するものも。

一三

さあ行かう！　無始であるが如く、無終である所へ、
晝の彷徨といはず、夜の休息といはず、凡ての經驗を得る爲めに、
旅行の間に、そこに起る凡てのもの、そこに起る晝をも夜をも旅に溶かしこむ爲めに、
更にそれらのものをより高い旅に溶かしこむ爲めに、如何なる所でもお前が達して更にその先に進むことの出來ない所は一つもないのを知る爲めに、
如何に遠い未來であれ、お前がそれに達して更にその先に進むことの出來ない時といふものゝないことを感得する爲めに、
如何なる大道でもお前の爲めに横はり且つ待つてゐない大道はないのを見やり見かへる爲めに、——如何に遠くとも大道はお前の爲めに横はり且つ待つてゐる、
如何なる存在でも、神のでも、その外の存在でも、お前が達し得ない存在はないのを知る爲めに、
如何なる所有物でもお前の所有し得ないものはないのを知る爲めに——勞役せず買收せずして凡てを樂しみ——盛宴だけは除外するが、といつてその一つだも除外することなく、
農人の農園と、富豪の閑莊との最上のものを獲得し、よい夫婦の淸潔な祝福を獲得し、果樹園の果物と花園の花とを獲

得し、
お前が過り行く都會から必要にまかせて獲得し、
お前が出遇つたどこでもの建築物と街路とを後々までも持ち續け、
お前がめぐり遇つた人々の頭腦からはその思ひを――その人々の心臟からはその愛を集め、
お前の愛人を路上の道伴れとし、しかもその愛人を後ろに殘し、
宇宙そのものが一つの大道であり――多くの大道であり――旅行く魂に取つての大道であるのを知る爲めに。

一四

魂は旅して行く、
肉體は魂ほど遠く旅しはしない、
肉體も丁度魂ほど大きな仕事をし、遂に魂に旅させる爲めに離れ去つてゆく。

魂の旅の爲めには凡てのものが離れ去る、
凡ての宗敎、凡ての堅固な物象、藝術、政府、――この地球といはず、凡ての星體の上にありしもの、今あるものは、
宇宙の莊嚴な大道をゆく魂の行列の前には、悉く物蔭、片隅に隱れ去つてしまふ。

宇宙の莊嚴な大道を行く男と女との魂の行進からいふと、他の一切の行進は附屬的に必要な象徵で養分であるに過ぎない。

どこまでも生き〳〵と、どこまでも前方に、
莊嚴に、嚴肅に、悲痛に、隱れて、退けられて、狂ほしく、混亂して、虚弱に、不滿足に、
捨鉢に、誇りがに、愛でたげに、惱ましく、或は人に受け入れられ、或は人に退けられ、
人は行く！　人は行く！　私は人々が行くのを知つてゐる、然し何處に彼等が行くのかを知らない、
けれども彼等が最上へ、——何か偉大なもの丶方へ行くのだとは知つてゐる。

一五

さあ行かう！　お前が誰であらうと！　出ておいで！
お前は家の中に眠つたり、ふざけたりして、逗つてゐてはならない、その家はお前が建てたものでも、お前の爲めに建
　てられたものであつても、
さあ行かう！　暗い籠居から！
反抗したところが無駄なことだ——私は凡てを知つてゐる、さうしてそれを發くのだ。

見よ、餘の人と同樣に醜惡なお前の中に、
人々の笑ひと、舞踏と、馳走と、食事との中に、
衣裝や裝飾品の內部に、洗ひたて丶撫でつけた顏の裏側に、
見よ、祕密な、沈默した厭忌と絕望とを。

如何なる良人も、妻も、友も告白の聽手たる信用をおくことが出來ない、

第二の我、卽ち各人の複己が、告白すべきことをこそ〳〵と祕密にして暮してゐる、
都會の街路を姿もなく言葉もなく、客間では禮裝正しく慇懃に、
汽車の中でも、汽船の中でも、公衆の集會の中でも禮儀正しく慇懃に、
男と女とが銘々の家庭に歸つても、食卓でも、寢室でも、何處でも、
氣のきいた身なりをして、顏付はにこやかに、姿勢はしやんとして、しかも胸骨の下には死を、頭骨の下には地獄を、
禮服と手袋とに身を裝ひ、リボンと造花とに身を飾り、
習慣には見事にばつを合せながら、第二の我については片句をも發しない。
顧みて他はいひながら、然し第二の我そのものについては決して。

一六

さあ行かう！　苦鬪をし、奮戰をして、
既に名ざされた目的は復た取消すことが出來ないのだ。

過去に於ての苦鬪は成功したか、
何が成功したか、お前がか、お前の國民がか、自然がか、
今、よく私を理解してくれ——凡そ成功の結果から、その事柄が何んであれ、更に大なる苦鬪を必要とする何事かゞ生れ出るにちがひないのは、物事の本質に備はつてゐることなのだ。

私の招きは戰鬪への招きだ——私は本氣で叛逆を敎唆する、

私と一緒に行くその人は、滿足に武裝して行かねばならぬ、
私と一緒に行くその人は、足らはぬ勝ちな糧食と、貧困と、怒れる敵と、反り忠とに度々遇ふのだ。

一七

さあ行かう！　大道は私達の前にある！
そこは安全だ――私は步いて見たのだ――私のこの足が十分に試みたのだ。

さあ行かう！　躊躇するな！
書かないまゝに紙なぞは机の上に置いておけ、書物は本棚に開かずにしまひこめ！
工具は工場に、金は儲けずにほつたらかしておけ、
學校にも近づくな、敎師の言葉には耳を藉すな！
僧侶には講壇から勝手に說敎をさせろ！　狀師には法廷で勝手に論じさせ、法官には勝手に法をひねくらせておけ！

わが子よ！　私はお前に私の手を與へる！
金よりは少し貴い私の愛をお前に與へる！
說敎や法令の代りに私はお前に私自身を與へる！
お前もお前自身を私にくれないか、さうして一緒に旅に出ないか、生きてゐる限り、お互にしつかり依賴し合ひながら。

ブルックリン渡船場を橫ぎりて

一

眼の下の潮の流れ！　私はお前をまともに眺め見る、
西にある雲！　半晌の後に沈むべき太陽！　私はお前をまともに眺め見る。

普段どほりな服裝をした男女の群！　あなた方は何んと不思議に私の眼に映るよ！
渡船場を、幾百又幾百と船越えして家路に就く、そのあなた方は、自分で想像する以上に私に取つては不思議だ、
さうして何年かの後に、岸から岸へと渡つて行く人達、その人達は自分が想像する以上それを默想する私に取つては不思議だ。

二

凡ての「物」及び凡ての「時」からの形なき榮養、
單純な、目のつんだ、脈絡のある計畫――私自身はそれから分立して、凡ての人が分立して、しかもその計畫の一部分、
過去にあつた凡ての似寄り、さうして未來にあるべきそれ、
榮光は私の細微な視象にも聽音にも飾り玉の如く繋がり――街頭の路上にも、渡船場の行きかひにも、
潮は疾く流れて、私と共に遠く漂ひ去りつゝ、
私の後に現はれ出る人々、その人々と私とを繫ぐ因緣、

その人々の必然さ――その人々の生命、愛慾、視る力、聽く力。

その人々も渡船場の木戸をくゞり、岸から岸へと船越えするだらう、
その人々も潮の流れを眺め見るだらう、
その人々もマンハッタンを北に西に船の行くのを見、ブルックリンの丘陵を南と東に見やるだらう、
その人々は大きな小さな島々をも見るだらう、
五十年の後、人々は渡船の時、それらのものを見るだらう、半晌の後に沈むべき日の光で、
百年の後、さうしてなほ數十百年の後、他の人々がそれらのものを見るだらう、
日沒、滿ち來る上げ潮、海へと流れ歸る干潮を樂しみ見るだらう。

三

「時」も「處」も妨げにはならない――距りは妨げにはならない、
或時代の男よ女よ、さうして更に幾時代も後の男と女よ、私はあなた方と一緒にゐる、
私は私自身を放射する――私は又歸つて行く――私はあなた方と一緒にゐる。さうして凡てを知つてゐる。

あなた方が空と海とを眺めて感ずる、その通りを私も感じたのだ、
あなた方の誰もが雜閙する群衆の一人である、そのやうに私も群衆の一人だつたのだ、
あなた方が河の喜びとその輝かしい流れとによつて生氣を取り返す、そのやうに私も生氣を取り返したのだ、
あなた方が立つて欄に倚り、しかも速かな、水の流れと共に急ぎ流れる、そのやうに私も立つて、しかも急ぎ流れたの

だ、

あなた方が、無數の檣と、込み合つて立つ蒸汽船の煙突とを見やる、そのやうに私も見やつたのだ。

私も亦幾度となく、半晌の後に沈むべき日をうけて、この河を船越えした、
私は十二月の海鳥を見やつた――彼等が大空に高く、その胴體を微動させながら、翼は延したまゝ飛び流れるのを見た、
黄色い光がきら〳〵とその鳥類の背をかゞやかし、その餘の部分を深い陰影の中においたのを見た。

私はゆるやかに描かれる輪を見た、さうしてそれが南の方へと遠ざかつてゆくのを、
私も亦夏の空の水に落ち映るのを見た、
陽の光の水にひく反射でこの眼はまぶしくされた、
日にかゞやく水の中に、私の頭の形が映つて、それから遠心的に麗はしい光輪の放射されるのを見た、
南、西南の丘々に晴れ霞のいざよふのを見た、
紫に彩られた鱗雲となつて水蒸氣の流れるのを見た、
灣の下の方を眺めやつて、入船の數々にも注意を向けた、
その近づくのを、さうしてその上に私の親しましい人々のゐるのを見た、
大小の帆船の白布の帆を見た――錨を下ろした船をも見た、
帆綱に倚つて働く水夫、横桁にまたがつていそしむ水夫、
丸い帆柱、ふらり〳〵と揺れる船體、蛇體のやうな細々とした長旒、

活動する大小の汽艇、水先案内所にゐる水先案内者、
船のあとに殘る白い澪路、船輪のいそがしく震へを帶びた囘轉、
各國の船旗、日沒時にそれを取卸ろす樣、
海扇形の夕波の穗、〔すくひあげた盃〕*光に戲れる波頭、
おぼろ／＼になりゆく陸續き、船渠の傍らなる灰色花崗石の倉庫の壁、
河の上には影まつた群れ、だるま船の側に、繫ひ合つた大きな曳舟蒸汽船——乾し草を積んだ舟、おそく還つた艀船、
もよりの岸には、煉鐵所の煙突から出る火が物々しく燃えて夜を催ほし、
狂暴な紅と黄との火光に反映して、黑影のひらめきが、家々の頂、町々の峽に放げかけられてゐる、それを私は見たのだ。

四

これら、さうしてその他の凡ては、私に取つても、あなた方に取つてと同じだつた、
私はこのことをあなた方に告げる爲めに、一瞬時、私自身を放射する——私はまた歸つて行く。

私は殊にこの町々を愛した、
私は殊にこの重々しく、流れ早き河を愛した、
私の見た男女は凡て私に親しましいものだつた、
その他の人々も同様だ——私が豫見するが如くに、私を囘想する他の人々、
（時はやがて來るだらう、縱令私はこの日この夜、こゝに足を停めてしまふとしても）

五

何んだ、それなら、お互ひの隔りは？
お互ひの間にはさまる何十年、何百年のその隔りが何になる？

それが何んであらうと、妨げにはならない——距りは妨げにはならない、さうして「處」も妨げにはならない。

六

私も亦生きた——豐かな丘陵を持つたブルックリンは私のものだ、
私も亦マンハッタンの町々を訪ひ、その岸邊の水に身を浸した、
私も亦、不思議な思ひがけない疑問が心を搖がすのを感じた、
白晝群集する人々の間にあつて、その疑問は私を襲つた、
夜おそく家路に就く時、或は寢床に横はる時、その疑問は私を襲つた。

黑い暗翳の蔽ひかゝるのはあなた方の上ばかりではない、
その暗翳は黑く私の上にも蔽ひかゝつたのだ、
私がなし遂げた最上のものも、疑はしく甲斐ないものに見えた、
私の偉大な思想、と自分で思つたものも、眞實にやくざなものではなかつたか？　人々の哂ひに値するものではなかつたか？

七

惡が何んであるかを知つてゐるのはあなたばかりではない、
惡が何んであるかを知つてゐた彼は私だ、
私も亦自己矛盾といふ古い謎に迷ひ入つたのだ、
無駄口をきゝ、赤面し、怨言を連ね、僞り、盜み、恨みを抱き、
僞りのたくらみ、憤怒、淫心、口にもし得ない熱した欲念を持つてゐた、
旋毛曲りで、から威張りで、慾深かで、淺薄で、惡賢くて、臆病で、害心のあるものだつた。

猿も、蛇も、豚も、私の心の中に缺けてはゐなかつた、
欺瞞の眼付、出鱈目な言葉、好色の思ひ、それも缺けてはゐなかつた、
拒絶、憎惡、延滯、卑陋、怠惰、それらの一つも缺けてはゐなかつた。

八

けれども私は、人なつこく誇り高いマンハッタンの住民だつた!
私が近づき或は過るのを見ると、若い人々は高い朗らかな聲を擧げて、最も親密な名で私を呼んだ、
立ち停る時、私の頭は彼等の腕を感じ、座につく時、私に對して彼等の肉體の無頓着な倚りかゝりを感じた、
街の中、渡船の上、集會の席で、一語を交はす機會さへなかつたが、私は愛する者の數多くを見出した、
私は他の人々と同じ生活を生きて、誰でもする笑ひ、齒がみ、眠り、

俳優や女優に思ひ出されるやうな役目を演じた、
誰でもが演ずる役目、それは私達が思ふまゝになし得られる、思ふまゝに大きくでも、
思ふまゝに小さくでも、又は大小を同時に兼ねてゞも。

九

更に私はあなた方に近づかう、
どんな思ひをあなた方が私に對して持たうとも、それだけの思ひを私もあなた方に對して持つてゐた——私は豫めそれを貯へてゐた、
あなた方が生れる遙か以前から、私は長く眞面目にあなた方のことを考へてゐたのだ。

何を私が身にしみ〲と感ぜねばならなかつたかを誰が知り得よう?
私がこの事を樂しみ味つてゐるのを誰が知り得よう?
あなた方は私を見ないにもかゝはらず、私は今あなた方を見てゐるのだ、それを誰が知り得よう。—
あなた方ばかりではない、私ばかりではない、
少數の民族だけではない、いくらかの時代だけでもない、若干の世紀だけでもない、
凡ての人が時宜にかなつた流射から、凡てのものに共通な中心から來たのであり、來るのであり、來ることであらう。
さうしてそれが全體の一分子となるのだ、
あらゆるものが指し示す、——最微なものも、最大なものも、——

ある必要な被膜が凡てを包圍する、さうして魂をも適當な時期の來るまで包圍する。

一〇

今、檣の林立するわがマンハッタン以上に、
わが河、わが日沒、海扇形の上げ潮の波の穗、
胴體を微動しながら翔りゆく海鷗、薄暮の光の中にある乾草船、さうしておそく還つて來た艀船、それ以上に素晴らしく驚くべき盛觀が他にあり得るかを私は訝かる、
如何なる神が、私の手を握り、さうして私が近づくや、逸早く高い聲で最も親しい名で私を呼びかける、あの好ましい聲の持主に及び得るかを私は訝かる、
私の顏を見入る男や女に私を結びつけると因緣、それ以外に如何なるものが更に微妙であるかを私は訝かる、
その因緣こそは、今、私をあなた方に融かし込み、私の意味するところをあなた方にそゝぎ入れるのだ。

お互ひに理解したね、さうではないか？
特別な説明もせず、私が約束したものをあなた方は受け入れなかつたか？
學問が教へ得ないもの——説教が成就し得ないもの、それが今成就される、さうではないか？
讀書では到底現はれ得なかつたもの、それが私一個によつて現はれ出る、さうではないか？

一一

流れよ、河よ！　上げ潮と共に滿ち、干潮と共に退け！

戲れ行け、海扇形の冠を持つた波頭（なみがしら）、
華やかな落日の雲！　お前の榮光もて私をひた濡らせ！　或は私の後に來る幾時代もの男と女とを、
岸から岸へと船越えせよ、往來の無數の群れよ！
直立せよマンハッタンの高き檣！　起ち上れ、美しきブルックリンの丘、
鼓動せよ、且つ迷ひ且つ訝かる頭腦よ！　問ひと答へとを連發せよ！
こゝといはず、彼處といはず、無盡劫な解決の流れをせき止めよ！
人なつこく饑ゑたる眼よ、家の中、町、集會の席を熟視せよ、
呼び響かせよ、若き人々の聲よ！　高々と美しく、最も親密な名で私を呼べ！
生きよ、なじみ深い生命よ！　俳優や女優に思ひ出されるやうな役目を演じろ！　その人の思ひのまゝに、大きくもなり小さくもなるその役目を！
思へ、この詩を口ずさむ人々よ、私が人知れずあなた方を見守つてはゐないかを、
河沿ひの欄よ、何心なくそれに倚りかゝり、しかも疾き流れと共に急ぎゆく人々を堅固に支へよ、
翔りゆけ海鳥よ！　横ざまに、又は大空高く大きな輪を描いて翔（かけ）り飛べ、
夏の空を映せる水よ！　お前のその空色を、見おろす人の眼が受け入れるまで、大事にそれを保つてゐろ、
麗はしい光輪よ、日に照らされた水の中に映る私の頭の形、又は凡ての人の頭の形のまはりに放射しろ。
近づいて來い船よ、灣の口から！　行き交（か）ひせよ、白帆の船よ、小船よ、艀船（はしけ）よ、
飜れ各國の船旗！　日沒には型の如く取り卸されろ、
煉鐵所の煙突よ、お前の火を高々と燃え上らせろ！　暗い影を夜に投げろ！　紅い光、黄色い光を家々の頂（いただき）にかゞやかせ、

現象よ、今、さうして今から、お前が何んであるかを指し示せ、
汝、必要な被膜、魂を堅く包圍しつゞけろ、
私の爲めに、私の肉體のまはりには、あなた方の爲めに、あなた方の肉體のまはりには、最も神聖な香料をかゝげつるせ、
榮えよ町々よ！　お前の船荷とお前の裝ひを現はせ、豐かにも滿ち足りた河よ、
何者もより靈的であり得ぬ存在よ、擴大せよ、
何者もより永續的であり得ぬ物象よ、その立場を守れよ。

一二

私達はお前並びに凡てのものゝ上に降る——私達はお前のすべてを捕へる、
忠實なる固體と液體、お前によつてのみ私達は魂を實現する、
お前を緣にして、色も、形も、位置も、莊嚴さも、神々しさも、
お前を緣にして、凡ての證明と比較、さうして私達自身の凡ての示唆と決定。

お前は待つてゐた、お前は常に待つてゐる、物いひ得ぬ美しい使はれ者よ！　新發智(しんぼち)よ！
私達は遂にお前を自由な感覺で受け入れ、これからは飽くことを知るまい、
最早お前は私達をたぶらかし得まい、私達に抵抗することが出來まい、
私達はお前を役に立てる、さうしてお前を放棄しない——私達はとことはにお前を心の中に移し植ゑる、
私達はお前を計量しはしない——私達はお前を愛する——お前の中にも亦完全さが備つてゐるのだ。

お前は永遠に對してお前の役目を準備する、
大なり、小なり、お前は魂に對してお前の役目を準備する。

ワルト・ホヰットマンの警告

諸州の凡てに、或はその一つに、或は諸州の都市に、――「强く抵抗せよ、服從するな」
一度無條件の服從をしたら、一度奴隸になり切つたら、
一度奴隸になり切つたら、この地上の如何なる國民も、州も、都市も、二度と自由を取り返すことは斷じて出來ないのだから。

結局私は何んだ

結局私は一人の子供ではないか、自分自身の名前の響きを繰り返し、繰り返して喜んでゐる、
私は離れて立つてそれを聞く――いつまでも倦きない、
あなたも亦あなたの名を、
あなたの名前の響きには、二つ三つ以上の發音はないと思つてはゐなかつたのか。

私の手を握る君が誰であらうと

私の手を握る君が誰であらうと、
この一大事を忽ぜにしては何の甲斐もない、
君が更に私を試みる前によく云つて聽かすが、
私は君が想像するやうなものではない、遙かに違つたものだ。

私の追隨者であらうとするとその人は何者だ？
自ら進んで私の愛慾の的とならうとするその人は何物だ？

そこに行く道は疑はしい――結果は怪しい、ひよつとすると破滅だ、
君は他の總てを捨て去らなければなるまい――私だけが君の唯一無二の神たらんと求めるだらうから、
しかも君の求道は久しきに亙り且つ苦しいだらう、
君が今までに築いた人生觀の凡て、君の周圍の人々との凡ての調和を、共にかなぐり捨てなければならないだらうから。
だから今の中に、これ以上の苦しい思ひをする前に、私を放れ給へ――君の手を私の肩から放し給へ、
私を卸してくれ給へ、さうして君の行くべき道に向つてこゝを去り給へ。

でなければ、そつと、試みに、大空の下の或る森蔭か、岩の蔭か、
何となれば屋根のかゝつた家屋の中には私は姿を現はさないから――若しくは人の集る所にも、――さうして書齋の中
　では私は啞か、はにかみ屋か、まだ生れ出ぬものか、死んだものゝやうに無爲だから、
然し多分は屹度、高い丘の上で君と共に、――誰か他の人が數里の彼方から思ひもかけず近づいて來ないやうに、それ

を見極めておいて、
或は多分屹度、航路の間に、若しくは海の汀で、若しくは何處かの島の中で、
そこで私の唇を接することを許すだらう、
仲間同志の接吻を、或は花婿としての接吻を、
何んとなれば私は花婿だから、さうして仲間だから。

若しくは君の望みとなら、私を君の衣物の中にたくし入れて、
君の心臓の鼓動を感じ、君を抱擁の中におくことが出來るやうにして、
君が大地大海に旅立つ時に私を伴ひ給へ、
かくて單に君に觸れるだけで私は滿足し、十分に思ふ、
さうしてかく君に觸れながら、私は靜かに眠つて永久に運ばれて行きたい。

然しこれらの諸頁を君は危險を冒さずに學ぶことは出來ぬ、
何んとなればこれらの諸頁と私とを君は理解し得ないだらうから、
彼等は先づ君から避け遁げるだらう、さうしてその後にも亦、――私はたしかに君から逃げ遂せるだらう、
君が確かに私を引捕へたと思ふに相違ない時、見よ！
君は既に君から逃げてしまつた私を見出すだらう。

何んとなればこの本に含めてあることを書く爲めにこの詩集は書かれたのではないから、

或はこれを讀んで君がその意味を知悉する譯には行かないから、
又私を尊敬して、誇らしげに私を讃美する人が、最もよく私を知つてゐる人ではないのだから、
又私の愛に潤はうとする人が(極少數の外は)成功する譯ではないのだから、
私の詩はいゝことばかりをしはしない——同樣な惡いこと、ひよつとするとそれ以上の惡いことをするのだから、
何んとなれば君が幾度も探り當てたと思つては、探りあてそこねたそのもの——私が暗示したそのものなしには、凡てが何んの役にも立たないから。
だから私を離れ給へ、さうして君の行くべき道に向つてこゝを去り給へ。

日の入りに私が聞く時に

日の入りに、私の名が乾杯と共に國民議場に於て讃へられたと聞いた時、やがて來た夜に於ても私は幸福ではなかつた、
或は又、私が大酒盛りをした時でも、私の企てが成就した時でも、やはり私は幸福ではなかつた、
然し、曉方に申分のない健康で、寢床から起き上り、恢復した元氣で、歌ひながら、熟し切つた秋の大空を吸ひ込んだ時、
十五日目の月が光を失つて西に傾き、遂に朝の光の中に隱れ去るのを見た時、
たゞ一人、海沿ひを彷ひ歩き、裸になつて、笑ひながら涼しい水の中に跳りこみ、さうして太陽の昇るのを仰いだ時、
さうして、私の愛人なる親しい友が私の許に來つゝあるのを考へた時、おゝ、その時私は幸福だつた、
おゝ、その時一つの呼吸もより甘かつた、——さうしてその一日私の食事は普段以上に私をよく養つた——さうして素晴らしい日が快く過ぎた、

さうして次の日が同じ歡びで來た——さうしてその日の夕方私の友は來た、
さうしてその夜、凡てのものが靜まり返つた中に、私は水が引きつゞいて汀に打ち上げる音を靜かに聞いた、
私は液體と砂礫とが相擊つさゞめきを聞いた、恰も私を祝する爲め、私に向けられた私語(さゝやき)のやうに、
何故なら私が嚴しく愛する一人が、ひえ〲とした夜、同じ夜着にくるまつて私の側に横はり、
靜かさの中に、秋らしい月光のもとに、彼の顏は私の方に倚りかゝり、
さうしてその腕は輕く私の胸のまはりに卷かれてゐたから——さうしてその夜こそ私は幸福だつた。

私は攻擊されてゐるのを聞く

私は制度を破壞せんと求めてゐると攻擊されてゐるのを聞く、
然し私は制度に賛成するものでも反對するものでもない、
（私と制度とに何んのかゝはりがあらうぞ——又その破壞に何んのかゝはりがあらうぞ？）
私はたゞマンハッタンに、及び內地と海沿ひとを問はず諸州の凡ての都市に、
畑と森に、水を切つて往來する大小の船の上に、
建物も、規約も、委員も、理窟もなく、
同志仲間の親密な愛の制度を建てようとするばかりだ。

私は坐して眺めやる

私は坐して、世の凡ての哀愁、凡ての壓迫、凡ての汚辱を眺めやる、
私は若い男等が自らに對して、苦悶し、なし遂げた行爲を悔いて、竊かにすゝり泣くのを聞く、
私は貧しい生活に於て、生みの子達に虐待される母が、見向きもせられず、瘦せ衰へ、絶望して死んでゆくのを見る、
私は良人に虐待せられる妻を見、――たくらみもて若い婦人を誘惑する男を見る、
私は嫉妬や、酬はれない戀の爲めの苦惱、それが祕やかになされるのを注意する――私はこれらの姿を地上に見る、
私は戰鬪、疾病、虐政の働らきを見――殉教者と囚人とを見る、
私は海上の饑餓を觀察する――殘りの人々の生命をつなぐ爲めに誰が殺さるべきかと鬮をひく水夫達を觀察する、
私は勞働者や、貧乏人やの上に、又黑奴やそれに類したものゝ上に、倨傲な人々によつて投げられる侮蔑や輕視やを觀察する、
これらの凡て――果てしもなきこれらの醜陋及び苦楚を私は坐して眺めやり、
見、聞き、さうして默す。

おゝ常に生きつゝ常に死につゝ

おゝ常に生きつゝ――常に死につゝ！
おゝ私の埋葬――過去とさうして現在との！
おゝ私の埋葬、私がうつそ身で、誇らしく、いつものやうに濶歩する間に！
おゝ私の埋葬、永年私であつたものが今死んで（私はそれを悲しまない――私は滿足する）
おゝ私のつぎの亡骸から私を解放するために、その亡骸を捨てたところをふり返つて私は眺めながら！

前方に進んで（おゝ生きつゝ！　常に生きつゝ）さうして亡骸を後ろに見棄てるために。

假象に對する怖ろしき疑ひについて

假象に對する怖ろしき疑ひについて、
結局は不確定だ――私達は迷はされてゐるのだといふことについて、
人のいふ信賴も希望も要するに虛構だといふことについて、
人のいふ墓の彼方の存續もたゞ美しい作り話に過ぎないといふことについて、
私が感得する所謂事象――畜類、植物、人類、丘陵、かゞやき流れる水、
晝の空、夜の空――色彩、運命、形體――人のいふこれらのものは（それらのものゝあるのは疑ひなくとも）單に幻影で、實在する何かはまだ知られてゐない。
（それらのものはあまりに屢〻それらのものから拔け出して、私を自失させ、私を馬鹿にするかと思はれるが！
あまりに屢〻私はそれらのものゝ些かをも知らず、如何なる人もそれを知らないとおもはされるが）
それらのものが、私の現在の立場から見て、私に現はれる姿は（現在さう現はれてゐても）――全くちがつた見方によれば、それらのものがどんな形にどんな風に現はれてゐるか知れたものではないのだが、
――私には、それらのもの、及びそれらの類ひのものは、不思議にも私の愛人や親しい友あるが爲めに解決される、
私の愛する友が私と共に旅し、又は私の手を取つたまゝ長く坐つてゐる時に、
その時、私は嘗て語らなかつた、又語るべからざる叡智によつて滿たされる――私は沈默する――私はそれ以上のものを要しない。

私は假象の問題に答へることも、墓のかなたの存續について考へることも出來ないが、
私は平氣で歩きもし停りもする――私は滿足する、
私の手を握つてゐる彼が遺憾なく私を滿足させるから。

私はルイジアナで一本の槲の木の育つのを見た

私はルイジアナで一本の槲の木の育つのを見た。
全く孤獨にその木は立つて、枝からは苔がさがつてゐた、
一人の伴侶もなくそこに槲は育つて、言葉の如く、歡ばしげな暗綠の葉を吐いてゐた、
さうしてそれは節くれ立つて、誇りがで、巖丈で、私自身を見る思ひをさせた、
けれども槲はそこに孤獨に立つて、近くには伴侶もなく、愛人もなく、言葉の如く、歡ばしげな葉を吐くことが出來る
　のかと私は不思議だ――何故なら私にはそれが出來ないと知つてゐるから、
さうして私は幾枚かの葉のついた一枝を折り取つてそれに小さな苔をからみつけ、
持つて歸つて――部屋の中の眼のとゞくところに置いて見た、
それは私自身の愛する友等の思ひ出の爲めだとおもふ必要はなかつた、
(何故なら私は近頃その友等の上の外は考へてゐないと信ずるから)
それでもその枝は私に不思議な思ひ出として殘つてゐる、――それは私に男々しい愛を考へさせるから、
しかもあの槲の木はルイジアナの渺茫とした平地の上に、孤獨で、輝き、

近くには伴侶も愛人もなくて、生ある限り、言葉の如く、歡ばしげな葉を吐くけれども、
私には何んとしてもその眞似は出來ない。

炬火

わが西北にあたる或る汀の眞夜中に、漁夫の一群が見つめながら立つてゐる、
漁夫等の前に擴がる湖のかなたには、他の漁夫等がゐて鮭を突いてゐる、
獨木舟(まるきぶね)、おぼろに影めいた一物、それが黝ずんだ水を横切つて動いてゆく、
燃えさかつた炬火をその舳首(へさき)にかゝげながら。

この瞬間あこがれの物思はしき

この瞬間、あこがれの、物思はしき、
よその土地にも他の人がゐて、あこがれて、物思はしげであるやうに私には思へる、
獨逸にも、伊太利にも、佛蘭西にも、西班牙にも、見渡せばそれらの人を見付け出すことが出來るやうに思へる——或は更に、更に遠く、支那にも、露西亞にも、印度にも——異邦の言葉を語りながら、
若し私がそれ等の人々を知ることが出來たなら自國の人に對してと同樣に、その人々に思ひ寄るにちがひないと思へる、
私達は兄弟であり愛人であるに相違ないのだ、
彼等と共にあるのは幸福であるに相違ないのだ。

既にありしものと共に

一

既にありしものと共に、
父等及び母等と共に、過去の堆積と共に、
若しそれがなかつたら、今日の私が存在しなかつたそのものと共に、
埃及、印度、フェニシヤ、希臘及び羅馬と共に、
ケルト人、スカデナヴヰヤ人、亞刺比亞人及びサキソン人と共に、
太古の海上の冒險――法律、工職、戰爭、羈旅と共に、
詩人、豫言者、神話、古傳、神託とに共に、
奴隷の賣り渡しと共に――情熱家と共に――叙情詩家、十字軍の兵士及び修道僧と共に、
私達がこの新大陸に來る前の古い大陸と共に、
そこに衰へ行きつゝある王國及諸王と共に、
衰へ行きつゝある宗派及び僧侶と共に、
私達の現在の大きな海岸から眺めやる、かの小さな海岸と共に、
前へと〱進みつゝ現代を生み出した過去の無量の年所と共に、
あなたと私とは到達し――亞米利加も到達して今年をなしてゐる、
今年！　それは來るべき無量の年所を更に未來に繰り出しつゝ。

二

おゝ然しそれは年所ではない――それは私であり――それはあなたである、
私達は凡ての法則と共鳴し、凡ての既にありしものと共鳴する、
私達は豫言者であり、神託であり、修道僧であり、騎士である――私達は易々とそれらを包含する、さうしてそれ以上を、
私達は無始にして無終な時のたゞ中に立つ――私達は善と惡とのたゞ中に立つ、
凡てのものは私達の周圍で振り動く――そこには光と共に闇がある、
太陽そのものすらが私達の周圍に振り動き、その衞星等も亦振り動く、
その太陽、そのまた太陽も、凡て私達の周圍に振り動く。
私（引き裂かれ、かき亂されて、これらの亂雜な年月のたゞ中にゐるけれども）
私はその凡てのものを知り、凡てのものであり、凡てのものを信じてゐる、
私は物質が眞實であると信ずる、精神が眞實であると信ずる――私は如何なる部分をも卻（しりぞ）けない。

私がどれかの部分を忘れたといふのか、
誰であれ、何物であれ、私の所に來るなら、私は遂にはそれを見分けて見せるだらう。

私はアッシリヤ、支那、テゥトン國、ヘブライ國を尊敬する、
私は凡ての學說、古傳、神、半神を受け入れる、
私は古い傳說、聖書、系圖は一として眞でないものはないと知る。

私は凡ての過去の日はさうなければならぬやうにあつたのだと主張する、
さうしてそれがあつた以上によくあることは出來なかつたと、
さうして今日といふ日もそれがあるべきやうにあることを――さうして亞米利加といふ國も亦、
さうして今日も、亞米利加も、彼等がある以上によくあることは出來ないと。

三

米國諸州の名に於て、さうしてあなたと私との名に於て、過去、
さうして米國諸州の名に於て、さうしてあなたと私との名に於て、現在。

私は過去が偉大であつたと知る、さうして未來が偉大であるだらうと知る、
さうして過去と未來とは神祕的に現在に於て交叉すると知る、
（私が代表する彼――普通な平民――の爲めに、さうして若しあなたがその人なら、あなたの爲めに）
私のある所、或はあなたのある所、この現在に凡ての時代凡ての人種の中心があり、
さうして私達に取つて、凡ての人種、凡ての時代から現はれ、又は現はれ來るべきもの皆の意味があると私は知る。

創造の法則

創造の法則、
力ある藝術家と統領との爲めの――生氣に充ちた教師等の爲めの、さうして米國の立派な文士の爲めの、

氣高き學者の爲めの——さうしてやがて來るべき音樂家の爲めの。

凡ては世界の總和とその煮つまつた眞實とをよしとせねばならぬ、
これ以上に著しい主題はない——凡ての仕事はこの神聖な幽遠な法則を證例するだらう。

如何なるものが創造だと君は思ふのか、
自由に行動して、優越者の存在を認めないことの外に、魂を滿足する何ものがあると思ふか、
男も女も神に等しいものだ、それを色々に暗示する外に私は君に何物をも暗示し得ないのだ、
君自身よりも神聖な神はありやうはない、
さうしてこれこそは最も古い最も新しい神話が共に最後に意味するものなのだ、
さうして君であれ誰であれ、この法則に從つて創造を成就せねばならないのだ。

搖り動きやまぬ搖籃から

一

搖り動きやまぬ搖籃（ゆりかご）から、
歌の主なる物まね鳥の喉から、
九月の眞夜中から、
野の果てに續く荒れた砂濱を、床を拔け出た子供が、素頭の素脚で、唯獨り彷（さまよ）つた、

降りそゝぐ月の光の下、
生きてゐるものゝやうに交りあひ、もつれあふ神祕的な影の戲れの中、
茨、懸鈎子の繁みから、
私に歌を歌つた鳥の思ひ出から、
哀れな兄弟よ、お前の思ひ出から——私が聞いたお前の歌の氣まぐれな調子から、
晩く昇つて來て、涙にしめつてゐるかのやうににじんだ黃色い半月の下から、
かしこ透明な霧の中の心痛と愛慾との前曲から、その前曲に對する私の心からの感應から(それは死ぬまで續くだらう)
無數にそれから牽き起された言葉から、
如何なる言葉よりも强く美しいその言葉から、
さういふものから、——今、昔の場所を又訪れてそれらを見聞きするにつれ、
海鳥の群れが、さゝ鳴いて、空に翔り私の上を舞ひゆくにつれ、
その昔に歸り、——凡てがのがれ去らぬ中大急ぎで、
一人の男——しかもこの涙から見ればもとのまゝの子供にかへつた、
私は、砂の上に身を橫へ、打ち寄せる波を見やりながら、
痛みと喜びとの歌手、現在と未來とのつなぎてなる私は、
凡ての示唆を捨てることなく取り上げながら、しかも速かにそれらを乘り越えつゝ、回想の歌を歌はうか。

二

ある時、ポウマノックで、

丁度雪が解けた頃、――ライラックの香りが空にたゞよひ、さうして五月の草が萠えはじめた頃、その砂濱の或る茨の
　叢に、
アラバマからの二羽の旅鳥――その二羽は一緒に、
さうして彼等の巣、さうして褐色の斑を持つた四つの薄綠の卵、
さうして毎日雄鳥は、あちこちと手近かな所を、
さうして毎日雌鳥は、巣にかゞまつて、默つて、くり〳〵とした眼で、
さうして毎日、珍らし盛りの子供なる私は、決して彼等に近寄らず、決して彼等を妨げず、
注意深く覗き見しつゝ、鳥の生活を呑み込みつゝ、鳥の心を思ひやりつゝ。

三

「かゞやけ、かゞやけ、かゞやけ、
お前のぬくみをそゝぎ下せ、偉大な太陽よ！
私達がその光に浴する間――私達ふたりが一緒に。

ふたりが一緒に！
風が南から吹かうとも、風が北から吹かうとも、
夜が白く明けようとも、日が黑く暮れようとも、
故鄕、故鄕の山や川がどうあらうとも、
いつでも歌ひつゞけ、時をえらぶまい、

私達ふたりが一緒にゐる間は」

四

けれども突然、
殺されでもしたのか、雄鳥には解らないが、
或る朝雌鳥は巣にかゞまつてはゐなかつた、
その午後にも歸つては來なかつた、その次にも、
さうして復(また)とは姿を見せなくなつた。

さうしてそれからといふもの、一夏中、海原の響きの中に、
さうして夜は、晴れ渡つた滿月の光の下に、
しはがれた聲する波のさしひきの間に、
或は日の中は茨の繁みから繁みのひまを飛びかけりながら、
ちら〳〵と私は見、私は聞いた、獨り取り殘された雄鳥の聲と姿を、
今はひとり取り殘されたアラバマからのその旅鳥、

五

「吹け、吹け、吹け、
吹きおこせ、海の風よ、ポウマノックの汀沿ひを、

お前が私の伴侶を吹きおこすまで私は待つ、さうして待つ。」

六

さうだ、星がきら／＼とかゞやき出でた時、
長い夜もすがら、海苔のからんだ杭の先きに、疊み寄せる波にすれ／＼になる程低く、
獨りぼつちの歌手は物思はしげにうづくまつた――見るものゝ涙をさそひつゝ。

彼はその伴侶に呼びかけた、
彼のそゝぎ出した或る心の意味を私は何人にもまさつて知つてゐる。

さうだ、私の兄弟よ、私は知つてゐる。
餘人はさうはしないかも知れない――然し私は凡ての歌聲を大事に貯へた、
何故なら一度、さうして一度たらず、ひそやかに海岸の方に彷ひ下り、
默して、月の光を避け、私自身を物影にまぎらせ、
或る時はおぼろな姿、反響、物の聲、物の形をその種類に從つて思ひ起し、
小休なくつき上げる波頭の白い指先きを思ひ起しながら、
一人の子供なる、素脚の私は、髮の毛を風になぶらせつゝ、
長く／＼耳傾けたから。

七

「なだめる、なだめる、なだめる！
一つの波に近く後ろの波が來てなだめる、
さうして又後ろの波が、かき抱き打ち重なりながら、どの波も寄り添つて、
けれども私の愛するものは私をなだめてはくれない、——なだめてはくれない。

低く月がかゝつてゐる、それはおそく昇つたのだ、
おゝそれは物うげに動く——おゝ私は思ふ、月もまた愛になやむのだ、——愛に。

おゝ物狂ほしく海が押し寄せる、濱に押し寄せる、
愛すればこそ、——愛すればこそ。

おゝ夜よ！　私の愛する者があすこの波間に、羽ばたきしてゐるのではないか？
あすこの白いものゝ中に見える小さな黒いあれは何んだ？

聲高に、聲高に、聲高に！
聲高に私はお前に呼びかける、私の愛する者よ！
高く鋭く私は波の上に私の聲をはり上げる、
確かにお前はこゝにゐるのが誰だか、こゝにゐるのが、——知つてゐる筈だ。

低く傾きかけた月よ！

お前の黄橙色の中にあるあの小黑い點は何んだ？
おゝそれは姿だ、私の伴侶の姿だ！
おゝ月よ！　この上彼女を私から距てないでくれ。

大地、大地、大地よ！
どちらを向いて見ても、お前は私に伴侶を返してくれることが出來さうに私には思へるが――お前がさうしてやらうと
　さへ思つてくれゝば、
何故なら、どちらを向いて見ても、朧ろげながら彼女の姿が眼に映るやうに私には思へてならないから。

おゝ現はれ出る星々よ！
ひよつとすると私が待ち望むその者も、お前達の一つと共に現はれ出るのではないだらうか。

おゝこの喉、この震へる喉！
大氣の中を更に鋭く響き渡れ、
森を貫け、大地を貫け！
どこかでお前を捕へようと耳欹てゝゐるのが、私の待ち望むその者にちがひないから。

歌ひ放て、曲を！
こゝでは淋しい――夜の曲を！
取り殘された愛の曲を！　死の曲を！

黄色くうすれ行く物悲しいあの月の下の曲を！
おゝあの月の下の、――その月はほと〳〵今海のかなたに落ちこまうとしてゐる！
おゝ捨鉢な絶望の曲。

だが靜かに！　調子を低めて、
靜かに！　幽かにさゝやくだけにして、
さうしてお前も暫らく休んでくれないか、しはがれた聲に立ち騒ぐ海よ、
何故なら何處かで私は伴侶の答へる聲を聞いたやうに確かに思ふから、
聞きとれぬ程の――私は靜かにして、靜かにそれを聞きとらなければならない、
けれど靜かにばかりはしてゐられない、彼女がすぐに私の所に來ることが出來ぬかも知れないから。

こちらだ、私の愛する者よ！
こゝに私はゐるのだ、こゝに！
いゝ程にかう押し低めた聲で私はお前に居所を告げるぞ
この物やさしい呼び聲はお前への爲めだ、私の愛するものよ、お前への爲めだ、
あらぬ方におびき寄せられるなよ！
あれは風の口笛だ――私の聲ではない、
あれは飛沫(しぶき)のさゝめきさゝめく音だ。
それらは私の聲の影に過ぎない。

おゝ暗闇！　おゝ無駄な骨折り！
おゝ私は心が痛む、心が悲しむ。

海に落ち沈まうとする月のまはりの樺色の暈よ！
砕けて海に散るその光よ！
おゝこの喉！　おゝすゝり泣く喉よ？
おゝ凡てよ――さうして私は夜もすがら甲斐もなく、甲斐もなく歌ひつゞけて。

それでも私は囁き、囁きつゞける？
おゝ囁きよ――囁きそのものが何とは知らず私に歌をさゝやき續けさせるのだ。

おゝ過ぎし日！　おゝ命？　おゝ歡びの歌！
大空の中に――森蔭に――野の上に、
愛した！　愛した！　愛した！　愛した！　愛した！
けれど私の愛はもはや、もはや私と一緒にはゐない！
ふたりが一緒に、――それは昔のことだ。」

八

悲曲は衰へて行く、
他の凡てが續き行く中に――星々はかゞやき、
風は吹き過ぎ――鳥の聲は絶えず響き互り、
怒りのうめき聲を擧げて、老いていらだゝしい母は、
灰色にさゞめくポウマノックの汀の砂にうめきつゞけ、
黄色くにじみ摘がつた半月は傾き沈んで、海面（うなづら）に觸れようとし、
我を忘れた子供は――その素脚を波に、その髮の毛を風になぶらせながら、
長く心の中に閉ぢこめられてゐた愛が今解き放たれて、遂にかき亂れほとばしりながら、
悲曲の意味を、その耳その魂は速かに捕へながら、
今まで知らなかつた涙がその頬を流れ傳ひながら、
對話を――トリオを――各が語りながら、
低音を――老いていらだゝしい母が絶えず叫びながら、
子供の魂に、ある溺れ沈んだ祕密の波音もて、物うげに調子を合せながら、愛慾の詩人にならうとするその子供の疑ひに。

九

魔か鳥か！（と子供の魂はいつた、）
お前の歌はお前の伴侶に對してなのか？　それとも主（おも）に私への爲めなのか？
何故ならその時子供だつた私には舌の用は封じられてゐたが、
今私はお前を聞いた、

今忽然として私は何んの爲めに私が生れたのかを知つた——私は眼覺めた、
さうして旣に一千の歌手が——お前のよりも更に朗らかに聲高く、物悲しい一千の歌が、一千の囀りの響きが私の心の
　中に命を得て現はれた、
さうしてそれは再び滅びない。

おゝ汝孤獨なる歌手、たゞ獨り歌ひつゝ——私を誘ひ出した。
おゝ孤獨なる私、耳欹てつゝ——決して私はお前を永久に傳へることをやめまい、
決して私は遁げかくれしまい、決して人眞似はしまい、
決して滿たされざる愛の叫びを私から失はせまい、
再び私は自分が平和な子供であることを許すまい、以前に、夜に、かしこ
海のほとりで、黃色く物うげな月の下にゐたやうな、
そこで現はれ出た使者——火、心の衷(うち)の甘き地獄、
知られざる欲求、私の運命。

おゝ私に手がゝりを與へよ！（それは夜、どこかこゝいらに見えがくれしてゐる）
おゝ私がこれだけ持つのなら、それ以上をも持たしてくれ！
おゝひと言！　おゝ私の運命は何んだ！（この後は私の運命は渾沌ではないかとおそれる）
おゝ歡び、懼れ、轉渦、人間の姿、あらゆるものゝ姿が、私のまはりに墓からの如く現はれ出るよ！
おゝ幻影！　お前は大地と大海との凡てを包む！

おゝ朧ろ故にお前が私に向つてほゝゑんでゐるのか、眉をひそめてゐるのか知ることが出來ぬ、
おゝ影よ、たゞ一眼、ひと言! おゝ極愛さるゝ者よ!
おゝ汝、親しましい女と男との幻影!
さあたゞひと言(私はそれを征服するのだから)
凡てに立ちまさつた最後の言葉、
意味深く、それがいひ送られた——何?——私は耳欹てる、
お前はそれをさゝやくのか、さうして前からさゝやき續けてゐたのか、汝、海の波よ!
それはお前の潤へる縁(ふち)、しめつた砂から來るのか。

それに答へながら、海は、
ためらひもせず、せきもせず、
夜もすがら私にさゝやきつゞけ、さうして日の出前には明らかに、
私に聲低く響やさしく「死」といふ言葉をつぶやいた、
さうして又「死」を——絶えず、絶えず、絶えず「死」を、
その波のつぶやきの調べやさしさ、鳥のやうでもなく、又私のめざめた子供心のやうでもなく、
けれども內密に私の爲めのやうに徐ろに近づき、私の脚もとにさゞめき、
そこからひそやかに耳根に這ひ寄り、やはらかく私の全身を包んでいふ、
「寂滅」、「寂滅」、「寂滅」、「寂滅」、「寂滅」。

それを私は忘れない、
さうして私の暗い魔でもあり兄弟であるものゝ歌に溶ける、
彼はそれを月の光の下にポウマノックの濱邊で私の爲めに歌つた、」
氣隨にそれに應ずる無數の歌は、
その時眼覺めた私自身の歌だ、
さうしてその鍵となつたのは、波から送られた言葉、
最も麗はしい歌の言葉、及び凡ての歌、
かの力強くもやさしい言葉、それは私の脚に這ひよつて、
海が私に囁いたのだ。

十字架にかけられた彼に

あなたの靈に私の靈を、愛する兄弟よ、
多くの人があなたの名を量りしらべてしかもあなたを理解し得ないでも氣にするな、
私はあなたの名を量りしらべはしない、けれども私はあなたを理解する、（私の外にもさういふ人はある）
喜びを以て私はあなたを擇び分ける、おゝ私の道伴れよ、さうしてあなたに挨拶を贈る、
さうしてあなたと共にある人々にも、前の人にもあとの人にも――さうしてこれから現はれるその人々にも、
私達は殘らず一緒に働き、同じ責任と同じ傳說とを傳へ移すのだから。
私達の數は少ない、けれども、同等で、處と時とにかけかまひなく、

凡ての大陸と凡ての族閥とを包含し——凡ての神學を許し、
人の同情者であり、理解者であり、共鳴者であり、
沈默して論爭と主張との間を行くが、論爭者をも、主張された事柄をも退けはしない、
私達は罵詈雜言を聞かされる——私達は四方から反目や、嫉視や、非難やに押し寄せられる、
それらのものは、私達を取り圍む爲めに、容赦なく寄り迫つて來る、
しかも私達は全地球の上を、束縛されることなく自由に歩いて、思ふまゝに旅しつゞけ、遂に消し難い足跡をあらゆる
　時代の上に印しつけよう、
遂に私達は、男と女との凡てが、人種などの差別なく、未來永劫、私達があるやうに兄弟であり愛人であるといふこと
　を、あらゆる時代に滿ち溢れさせよう。

汝、法廷の審判に立てる極重惡人よ

汝、法廷の審判(さばき)に立てる極重惡人よ、
汝、獄舍にある囚人よ——汝、鐵鎖につながれ手錠をはめられて、宣告にあつた暗殺者よ、
私を見ろ、私もまた審判を受け、牢獄にあるものではないか、
私も同じく殘虐で惡魔のやうで、手頸も腕も鐵の鎖につながれてゐるではないか？
汝、步道をうろつく淫賣婦、或は部屋の中で無恥を極める淫賣婦、
お前を私以上に無恥だと呼ばうとする私は果して何者だ。

おゝ賚むべき者！
私はそれを認める――私は自分をむき出しにする！
（おゝ讃美者よ！　私を讃美するな！　私に祝辭を送るな！　あなた方は私を縮み上らせる、
私はあなた方のしないことをしてゐる――私はあなた方の知らないことを知つてゐる）

この肋骨の內部に私は穢れ屛息して潜んでゐる、
平氣らしく見えるこの顏の蔭に、地獄の潮は絕えず湍つてゐる、
淫慾と邪惡とを私は退けない、
私は犯罪者と共にあつて燃えるやうな愛を覺える、
私もその仲間だと私は感ずる――私自身が罪囚であり漁淫であるからだ。
さうして私はこれから彼を退けることをしまい――私は如何して自分自身を退け得ようぞ。

名もない淫賣婦に

落ち着いて――私に對しては、寬いでおいで――私はワルト・ホヰットマン、自然があるやうに自由で快活だ、
太陽があなたを見放さない中は、私もあなたを見放しにはしない、
水があなたの爲めに輝くのを拒み、さうして木の葉があなたの爲めにひらめくのを拒まない間は、私の言葉もあなたの爲めに輝きひらめくことを拒みはしない。

わが娘よ、私はあなたと一つの約束をしよう——さうして私はあなたが私に會ふことの出來るだけの準備をするやうに命じよう、
さうして私が來るまでにあなたが忍耐強く、さうして完全になつてゐるやうに命じよう、
それまで、あなたが私を忘れぬやうに、私は意味ある眼付であなたに挨拶を送る。

見も知らぬ人に

行きずりに過ふ見も知らぬ人よ！　どれ程慕はしげに私があなたを見てゐるかをあなたは知るまい、
あなたこそ私が求めてゐた彼であり、求めてゐた彼女であるのに違ひない（さうした考へが夢のやうに私には起る）私は確かにどこかであなたと歡びの生を生きたのだ、
お互が、こだはりなく、愛情に滿ちて、清淨に、熟し切つてふと行きちがつた時、凡ては思ひ出される、
あなたは、私と一緒に成長した私の少年であり、私の愛人であつたのだ。
私はあなたと共に食ひ、共に眠り、——あなたの肉體はあなたのみのものでなくなり、又私の肉體は私のみのものでなくなつたのだ、
あなたは、あなたの眼、顏、肉の喜びをお互が行きあふ時に私に與へる——あなたもその代り、私の鬚、胸、手から取り收める、
私はあなたに物をいひかけることは出來ない——然し私が獨りで坐つてゐる時、又は自分だけ夜眼覺めた時、あなたを

考へることが出來るのだ、
私は待つてゐなければならない——私は屹度又あなたに遇ふことを疑はない、
だからあなたを見失つてしまはないやうに、私は氣をつけようよ。

あなたに

見も知らぬ人よ、あなたが行きずりに、私に遇つて、話しかけようと望むなら、話しかけて惡い譯が何處にあらう、
又私があなたに話しかけて惡い譯が何處にあらう。

さゝげもの

一千の完全な男と女とが現はれる、
その各〻のまはりには、友達の群れが集る、さうして快活な幼年と靑春とが、さゝげものを持つて、

私が觀察をはじめる時

私が觀察をはじめる時、第一步は私を殊の外喜ばした。
單なる事實、意識——これらの形態——運動の力、
いと小さな蟲、又は動物——觸覺——視力——愛、
最初の一步で私は殊の外驚き且つ喜ばされた、

で、私は歩き出すや否や、更に遠く行く心もなく、そこに長くとゞまり彷つて、有頂天にそれを歌ふのだ。

敵ではない私に入寇するのは

敵ではない、私に入寇するのは——敵の爲めに私の誇りが傷けられる恐れはない、
けれども私が身も世もなくこがれ寄る戀人達——見よ、彼等は私を征服する！
見よ武裝もなく、賴りも絕え、力盡きて、
思ひ切り卑劣にも、彼等の前に地面の砂を嚙む私を。

大統領リンカーン追頌歌

一

咲き殘りのライラックが戸口の庭に匂ひ、
夜空の西にたくましい星が沈み果てた時、
私は歎き悲んだ——さうして返り來る春毎に、歎き悲しみつゞけるだらう。

おゝ年毎に返る春よ！　春はいつでも三つのものを齎らして來る、
時をたがへず咲き出づるライラック、西の夜空に沈む星、
さうして私の愛する彼の思ひ出。

二

おゝかゞやかしく西に沈む星！
おゝ夜の影！　おゝ物思はしく涙ぐましい夜！
おゝ姿をひそめた逞ましい星！　おゝその星を隠した深い闇！
おゝ私を力なく虐げる手！　おゝ便りない私の魂！
おゝ魂の自由を閉ざして私を取りまく無情の雲よ。

三

石灰で塗り白められた板塀のほとり、古い百姓家の戸口の庭に、
高々と生ひ繁つてライラックの木叢は立つ、ハート形の濃綠の葉、
空向きに、先きぼそりな、香の高いやさしい花、
一葉毎にその葉は奇蹟、――前庭のその木叢から、
やさしい色の花房と、ハート形の濃綠の葉の、
その一枝を、花もろともに私は折る。

四

人里遠い沼地の物蔭にかくれて、
鳥一つ忍び／＼に歌を唄ふ、

孤獨な鶫、
その隱者は群れを離れ、ひとりにかへり、
たゞひとりにて歌を唄ふ。

血を吐くまでの歌!
生命から死ののがれ出る歌――(何故とならいとしい小鳥よ
若しお前が唄ふ力を授からなかつたら、お前は死ぬにちがひないのだから)

五

春になつた大地の胸の上を、街の中、
小道、老いたる森の間(そこには菫が地の中からのぞき出て、灰色の岩地を彩つてゐる)
小道の右左の曠野の草の中を――眼路遠い草野を過りながら、
黑褐の畑の中、一粒ごとにその褒衣から萠え出でた黃金の穗波の麥畑を過りながら、
果樹園の中に、白く薄紅く咲きほころぶ林檎の木立を過りながら、
亡骸の休らふべき墓場を目ざして、
夜となく晝となく、一つの死棺は運ばれてゆく。

六

小道を過り、市道を過つて、

晝といはず夜といはず、大地を黝める叢雲の下を
卷きそばめた旗の群れ、喪章に蔽はれた町、
面紗した女等の如き各州の弔意、
長くうねり行く人の列、夜の篝火、
數知れずともされた炬火、沈默した人々の顏、帽被せる頭の海、
到着を待つ停車場、到着する死棺、さうして思ひ沈んだ人々の顏、
夜空にひゞく挽歌、强くおごそかに高まる多くの歌聲、
死棺のめぐりにそゝがれる悲しげな挽歌のひゞき、
灯の暗い寺院、をのゝくオルガン、それらの間をわれらの死棺は過ぎてゆく、
鳴りひゞき、鳴りひゞく弔ひの鐘の音の中を
いつくしくも過ぎてゆく死棺よ、いざ、
私はこのライラックの一枝を贈らうよ。

七

(たゞあなた、あなた一人にばかりではない、
花と綠の枝とをあらゆる死棺に捧げるのだ、
朝のやうに生き〱と――かく私はあなたの爲めに歌を唄はうとするのだ、おゝすこやかにも神々しい死よ。
薔薇の花束で被はれて、

おゝ死よ！　薔薇と早咲きの百合の花とであなたを飾らうか、
さりながら今はそれにもまして春を魁(さきが)けて咲くライラックで、
ゆたかに私は折る、木叢からその枝を折る、
手にあまるばかり齎らしてあなたの爲めにふりかける、
あなたの爲めに、さうしてあなたの凡ての棺の爲めに、おゝ死よ！）

八

大空を西に渡りゆく星よ、
一月(ひとつき)の前、二人がさまよひ歩いた時のお前の思ひを今こそ私は知り得た、
神祕に宵み渡つた夜空の下を處定めず二人してさまよつた時、
澄みわたつた夜のかげの中をふたりしてさまよつた時、
私の方にうつむいて、夜毎、物いひたげなお前を見やつた時、
私の側近く降らんとばかり空低くお前が傾いた時、（餘の星々はそを眺めやるばかりだつたが）
ふたりおごそかな夜と共にさまよひ歩いた時（故わかず私は眠らずに）
更け行く夜空の西の果てに沈むにつけて、物悲しげだつたお前を見やつた時、
寒く澄み渡つたそよ風そよぐ岡の上に立ち、
お前が空を過(よぎ)つて、夜の闇の底に失はれ行くのを見やつた時、
悲しみの星なるお前の終りが來て、夜の底に沈みかくれたやうに、私の魂も悶えのために打ち沈み果てたその時、お前
の思ひを始めて知り得たぞよ。

唄へかしこなる沼地に！

九

おゝやさしいためらひがちな歌手よ！　その歌もその招きも私は聞くが、
私は聞くが、私はやがて行く、私は納得してゐる、
さりながら暫くはこゝに停らう——輝く星が引きとめるから、
訣（わか）れゆく友なる星が私を捕へて引きとめるから。

一〇

おゝかしこ、なつかしき死者のためにどう歌はうぞ。
今は世にない偉大にもやさしいその魂の爲めに私の歌をどう飾らうぞ、
世になつかしい彼の墓に何の香を薫（くゆ）らさうぞ。

東から吹き、西から吹き、
東の海、西の海から吹き送られて、曠原に相逢ふ海の風、
それにこの胸からの歌を添へて、
なつかしい彼の墓を薫らさうか。

一一

おゝ部屋の壁には何を飾らう、

壁にかける畫に何を選ばう、
なつかしい彼の葬堂のそのために。

闌な春、農園、家庭、
四月の頃の入り日、ほのかにかゞやく靑い煙、
遠空を爛らかして、華やかに、たゆたはしげに沈みゆく太陽の黄金の氾濫、
足許に生き／＼と萠ゆる可憐な草葉、若綠に繁り合ふ木々の梢、
遠方の流れ、その面のこゝかしこに風ぐもりした靜かな水、
川岸に沿うて連なる丘、空に浮き出た地平線の數々、及び影、
手近かにある町、そのこみ合つた人家、夥多の烟突、
生活のさま／＼、工場、さうして家路を急ぐ工人。

一二

見よ、この國土を、肉に徹し靈に徹して、
偉なるかなマンハッタン、その尖塔と、輝き急ぐ潮と船、
豐かにも趣多い大地、日の光に濕ふ南方と北方の諸州——オハヨーの岸邊、ひらめき流れるミゾリー河、
牧草と穀草とに被はれて、眼路遠く連り亙る大草野。
見よ、物を物ともせで、落ちつき拂つた無類の太陽を、

吹きそめるそよ風の中に、藤色に明けゆく曙を、
しとやかに生れ出た限りなき慈悲光を、
凡てを光被する奇蹟——成就の眞晝を、
甘々しく近づく夕暮れを、——待たれた夜空とさうしてその星を、
すべてを照らしてわが町々の上に、人と大地とをかき抱きながら。

一三

唄へ、いとしい同胞よ——お前の鄙びた歌をうたへ。
甘い愁ひをこめて、人の心をうつその歌を聲高く。

おゝ滑らかさ、自由さ、さうして情けのこまやかさ！
私の魂を解き放しかきむしる！　おゝ素晴らしい歌手よ！
お前の歌だけだ私の耳傾けるのは——けれども星が私を引きとめる、（然しやがてそれも離れ去るだらう）
けれどもライラックがその鋭い香で私を引きとめる。

一四

今陽の光の中にあつて、眺めやる時、
夕暮れの殘りの光に照らされた春の野良、種播きの備へする農夫、
沼湖と森林とに飾られたわが鄕土の大きなひとりでの景色、

(颶、嵐の吹きすさんだ後の)神々しくも淨らかな美、
速かに暮れゆく午後の圓やかな大空、子供等と女との聲、
流れ動く海の潮――その上を船がどう走るかを私は見る、
豐かさを伴つて近づく夏、勞働にきほひ立つ野良、
無數な人家の一つ〳〵、日々のなりはひと食事などの輕い仕事の營まれる所、
人波の寄せ返し、群がり集る市街の道、それらを眺めやつた時――見よ！　その時その場に、
凡てのもの丶上に降り、凡てのものと混り、私をも共にくるめて、
雲は現はれた、長く尾を引く暗い影が現はれた、
さうしてそれは死だ、その思ひ出だ、さうしてそれは死の聖なる智慧だ。

一五

謂はゞ死の智慧を私の右手に歩ませつゝ、
さうして死の思ひ出を左手に近々と歩ませつゝ、
さうして謂はゞ友等の手を取るごとく二人の間にゐて、
默して受け入れる夜の闇の中に私は自分をまぎらせた、
沼の汀、小暗い小道、
沈默の中にいつくしい檜と物淋しい松の木立を眼ざして。
その時人見しりする小鳥は私のみを受け入れた、

私に親しましい朽葉色の小鳥は私達三人の道伴れを受け入れた、
さうして死の歌を、なつかしい彼への詩を小鳥は唄つた。

深く隱れた物蔭から、
香ひやかな檜、しづまりかへつて物淋しい松の木立から、
その小鳥の歌は漂ひ出た。

歌のチャームは私を狂ほしくした、
夜の闇に、手を取る如く道伴れと共にある時、
かくて私の衷なる聲は小鳥の歌と調べを合せた。

一六

——死の歌——

「來い、可憐ななつかしい死よ、
大地の限りを、隈もなく、しめやかな足どりで近づき、近づく、
晝にも、夜にも、凡ての人に、各の人に、
早かれ、おそかれ、思ひやりのやさしい死よ。

不可思議のこの宇宙は讃むべきかな、

その生、その喜び、諸の珍らしい物象と智慧、
又その愛、香はしき愛――さりながら、さらに〳〵讃むべきかな、
冷靜に、凡てを捲きこむ、死の確實な抱擁のその手は。

靜かな足どりで小やみなく近づいて來る淋しき母よ、
心からあなたの爲めに歡迎の歌をとなへた人はまだ一人もないといふのか、
それなら私が歌はう――私は凡てにまさつてあなたの榮えをたゝへよう、
あなたが必ず來べきものなら、過たず來て下さいと歌ひ出でよう。

近づけ力強い救ひ主！
それが運命なら――あなたが人々をかき抱く時、私は喜んでその死者を歌はう、
愛に滿ちて流れ漂ふあなたの大海原に溶けこんで、
あなたの法樂の洪水に有頂天になつたその死者を歌はうよ、おゝ死よ。

あなたに喜びの夜曲を、
又舞踏な挨拶と共に申し出る――部屋の裝飾と饗宴も亦、
若しくは廣やかな大地の眺め、若しくは高く擴がる大空、
若しくは生活、若しくは園圃、若しくは大きな物思はしげな夜、その凡てはあなたに適はしい。

若しくは星々に護られた靜かな夜、

若しくは海の汀、私の聞き慣れたあの皺がれた波の聲、
若しくは私の魂はあなたに振り向く、おゝ限りもなく偉大な、面紗(かほおほひ)深き夜よ、
さうして肉體は感謝してあなたの膝に丸く巣喰ふ。

梢の上から私は歌を空に漂はす、
紆(うね)り動く波を越えて――無數の園圃と荒漠たる大草野とを越えて、
建てこんだ凡ての市街と、群衆に埋まる繋船場と道路とを越えて、
私は、おゝ死よ、この歌を、喜び勇んで喜び勇んで、空遠く漂はさう。」

一七

私の魂の調べに合せて、
朽葉色の小鳥の高く強く歌ふ、
その節は、夜空の限りに擴がり滿ちて、いつくしく澄み渡り、

小暗い松と檜との木立に聲高く、
沼水の香と生氣ある濕ひの中にほがらかに、
そして私は道伴(づ)れと共に夜の蔭に。

物見る力眼を離れて、
幻影(まぼろし)の長きつらなり開け渡る。

一八

眼のはづれに私は軍隊を見る、
音なき夢の如くに幾百の軍旗を見る、
戰亂の煙の中を、彈丸に貫かれた幾百の軍旗を私は見る、
煙の中をかしこゝに運ばれ、破れ、血に塗れ、
やがて竿に殘る破れ布の幾ひら（凡ては沈默の中に）
さうして折れはじける旗竿。

私は見る戰死の骸を、骸の千百を、
さうして雨にさらされた若人の白骨を、私はそれらを見る、
戰場の露と消えた兵士等の破壞の堆積の數々を見る、
けれどもそれらは世の人の見るところとは異るのを見た、
死者は自らは全く休息に入つた──彼等は苦しんではゐない、
生あるものが後に殘り苦しむのだ──母が苦しむのだ、
さうして妻と子と、思ひ出に沈む友とが苦しむのだ、
さうしてあとに殘つた軍隊が苦しむのだ。

一九

幻影を過ぎ去り、夜を過ぎ去り、
手をほどいて道伴れを過ぎ去り、
隱者なる小鳥の歌、その歌に合はす私の魂の歌を過ぎ去り、
（私の魂の歌、勝利の歌、死ののがれ出る歌、しかも變化極りなく、
ある時は低くすゝり泣き、しかもその節は澄み渡つて、高く低く夜空に漲り、
悲しげに打ち沈みて、聲もかすかに、警めの如く、しかも再び歡喜に破裂し、
大地を被ひ、空の限りを滿しつゝ
かの夜の物蔭に聞き得たる力强き歌聲にも似て、）
ハート形の葉をつけたライラックよ、お前をも見棄てゝ過ぎ去りつゝ、
春ごとに咲きかへり、戶口の前庭に咲くお前を見棄てゝ、
お前に向つての歌をつぐみ、
さうして西方に面をむけて相交はりしお前を見ることもやめる、
おゝ夜空に銀の光を放つわがかゞやかしい友よ。

二〇

しかも私は凡て、その夜の收穫のどれをも捨てない、
歌、かの朽葉色の小鳥の驚くべき歌、
さうしてそれに合唱する歌、私の魂から呼び出された反響、
愁ひに滿ちた面もちして、かゞやきながら沈み果てた星、

高く生ひ茂るライラック、さてはむせるばかりの香を吐くその花、
小鳥の招きに近づきつゝ私の手を取つた握手の友、
私の道伴れ、さうして私は二人の間に、かくてそれらの凡ての記憶を、私はわがなつかしい死者のために貯へておく、
この郷土のこの時代に生きた最も香はしく、最も賢明な魂の爲めに、——さうしてこの詩を彼の懷しい思ひ出の爲めに、
ライラックよ、星よ、小鳥よ、私の魂の歌と共に、
かしこなる松の香ふ所、さうして檜の木立のほの暗い所に。

聖なる死の囁き

聖なる死の囁き、それがさゝやかれるのを私は聽く、
夜の脣のざれ言葉——絹ずれを思はせる合唱、
徐ろに登り近づく跫音——神祕なそよ風、軟かく聲低く送られる。
（それともあれは涙の漣か？　人間の涙の漫々たる海原の）

ふり仰ぐかなたに、私はありありと叢雲を見る、
愛しげに、しづやかに捲きちゞみ、聲もなくのびひろがり、交り合ふ、
時折り、おぼろに、悲しい遠方の星が、
現はれ、又——隱れながら。

（寧ろ或る分娩——或るおごそかな不死の誕生か、
眼にはさだかならぬ國境を、
或る魂は、今——越えてゆく）

群衆——その海原のさかまく波間から

一

群衆——その海原のさかまく波間から、一しづくの水がしめやかに私に來て、
さゝやくには、「私はあなたを愛します、私はやがて死にます、
あなたを見、あなたに觸れたいばかりに、私は遠い旅を續けまし　、
あなたに遇つた上でなければ私は死ねません、
若し遇はずに死んだなら、あなたとは永久にはぐれてしまふでせうから。」

二

「今二人は遇つた、二人は見交はした、二人は安全だ。
安堵して海にお歸り、愛する者よ、
私も亦その海原の一しづくだ——二人はさうかけ隔つた間ではない、
御覽、この大きな輪廻を——凡ての聯貫、それは何たる完全さだらう！
けれども今あなたと私との間を大海が容赦なく隔てゝゐる、
謂はゞ一と時、私達は離れ〴〵にされてゐる——だがいつまでも離れ〴〵にされてはゐない。

あせらずにおいで――暫くの間――
毎日、日の沈む時、愛する者よ、私はあなたへの愛のため、
大空と、大海原と、大地とに親しみの挨拶を送つてゐるのだから。」

畑から來なよお父

一

畑から來なよお父、ペートから手紙が來たから、
表戸に來なよお母、――兄さんの手紙が來たから。

二

見よ、それは秋だ、
見よ、綠は黑ずみ、黃は更に黃に、紅は更に紅く、
樹々がオハイオ州の村々を冷え〴〵と住みよくさせて、その葉はそよとの風にもひらめいてゐる、
熟れた林檎は果樹園に、葡萄は蜘蛛手の蔓莖に垂れ下り、
（蔓に垂れ下つた葡萄の香りがきこえるだらう、おそまきに蜂が來て羽音をたてゝゐる。蕎麥の匂ひがきこえるだらう）
凡ての上には、見よ、雨あがりの大空が透明な落ち着きをもつて、素晴らしい雲を浮べてゐる、
大空の下にも亦、凡てが落ち着いて、美しく――野や畑は豊かに實つてゐる。

野良は見渡すかぎり豐作だ、
然し、今、その畑から父が――娘に呼び立てられてやつて來た、
入口の方に母が――取るものも取りあへず表戸にやつて來た。

大急ぎで母は來たが――何か不吉らしい、その脚は震へてゐる、
髮の亂れもなでつけず、被物をとゝのへる暇もなく。

慌てゝ封を切る、
おゝこれは息子の手蹟ではない、それだのにその名が認めてある、
誰が息子の代筆をしたものか――おゝ打摧かれた母の魂！
その眼の前で物が泳ぐ――暗闇がひしめく――母は大事な字だけを拾ふ、
文句も切れ〲「銃丸が胸を貫き」、「騎兵の衝突戰」、「病院に運ばれ」
「目下危險なれど、やがて恢復可致候。」

三

あゝ、今は、私には唯一人の姿ぎり、
潤澤な豐かなオハイオ、町々もある、野良もあるが、痛しく顏は蒼ざめて、前後を忘れ、氣も絶え〲に、戶の握手に、
　倚りかゝる一人の姿きり、

「さう歎くなよお母」、(年頃になつたばかりの娘が涙のひまからかういふ傍らには 稚い妹達が口もきかずに悄れはてゝ
縺れ寄る)
「ね、大事なお母、手紙にはペートはぢき快くなると書いてある。」

四

哀れ、その若者は決して快くはならないのだ、(あの雄々しい、ひたむきな魂は、この世の中を去るのが定なのだらう。)
親や妹達が古屋の戸口に立ちすくんでゐる間に、若者は旣に死んでゐる、
一人の息子は死んでゐる。

けれども母は氣を取りなほさなければならぬ、瘦せた姿を黒の喪服につゝんで、
晝は碌々食べもせず——さうして夜にはむらな眠りやうをして、眼さめがちに、
眞夜中に夢が破れると、泣きながらたつた一つの深い願ひを願ふのだ、
「おゝ、誰も知らぬ間においとまが出來ることなら——この世からいつの間にかのがれ出て、おいとまして、
あと追ひかけて、死んだ息子と一緒になることが出來たら」と。

和睦

凡ての上に言葉、大空のやうに美しい！
戰爭とその虐殺の行爲は、年所と共に失せ亡びるに違ひない、

「死」と「夜」との姉妹の手はこの汚れた世界を絶えず竊に洗ひ去り、又洗ひ去る……美しさ……何んとなれば私の敵は斃れたから――私同樣に神聖な一人の人が死んだから、
私は彼が顏蒼ざめ、動かずに、死棺の中に橫はるのを見――そこに近寄る、
私は身をかゞめ、さうして死棺の中のその蒼ざめた顏に私の唇を輕く觸れる。

淚

淚！　淚！　淚！
夜、寂寞の中……淚よ、
白い汀に流れては、砂に吸ひ込まれてゆく淚――一つの星も出てゐない――眞暗な物淋しさ、
頭を包んだ彼の眼から洩れる濕つた淚――おゝその亡靈は何者だ――暗闇の中で淚を流すその異形は何者だ。
瀧なす淚――おゝ泣く淚――息も絕えぐ\に泣き叫ぶその痛苦、
おゝ嵐、形相すさまじく、海沿ひを吹きまくく、おゝ物凄い夜の嵐――颪！　おゝそのはげしさ！　ゆゝしさ！
おゝ影よ――晝の間は、沈着な顏付をして、規則正しい步みで、威儀をつくろつた影よ。
夜が來て、人を離れて孤獨になると、おゝその時の淚の海、
淚の！　淚の！　淚の！

船の上、その舳首に

船の上、その舳首に、
年若き舵取り、心して舵をひく。
海岸の霧の中に一つの鐘淋しく鳴りひゞきつゝ、
海原の鐘――おゝ警めの鐘、その響波にゆられて、

おゝ汝はまことにもまことなる警めを送る、海礁のほとりに鳴りひゞく鐘よ、
鳴りひゞきつゝ、鳴りひゞきつゝ、船を難破の地點から戒めるために。

されば心たくましく、おゝ舵取り、お前は鐘の警めに應ずる、
舳は轉はす――荷積みした船は、進路をかへて、灰色の帆のもとに馳せて去る、
美しく氣高き船は、價高き富を積みて、華やかに安らかに馳せて去る、
さりながらおゝ船よ、不壞の船よ！　船の上なる船よ！
おゝ肉の船――魂の船――そは帆走りつゝ……帆走りつゝ。

別れに臨みて讀者に

今、親愛なる讀者よ、私をあなたの顔のところに抱き上げよ！
お互に暫く別れなければならない、私の唇からこの接吻を取れ、
あなたが誰であらうと、私は特別にこの接吻をあなたに贈る、

「長いのを」――では又過ふ折りを待ち望まう。

鼓聲

蹶起し、激怒し、
私は警鼓を打ち、容赦のない戰を促がさうと思つた、
然しすぐ私の指はいふことを聞かなくなつた、私の首は垂れた、さうして私は思ひ斷つて
負傷者の傍らに坐してそれを慰め、或は默して死者を見守つた。

神

無限――萬有についての思索、
爾はわが神。
私を待ち望むに飽くことなく、未だ現はれざれども必ず來るべき、
神々しい戀人、完全なる友人、
爾はわが神。
公明にして多能、美にして豐か、愛情に滿ち肉體は健か、さうして靈に微妙なる爾、――完成されたる人！
爾はわが神。

おゝ死――（生が既にその任を果し終へた後）
天上の宮殿を開き、そこに人を導くもの、
爾はわが神。

私が見、感じ、知る限りの最大最上のもの凡て、
（そは沈滞せる束縛を破つて――おゝ汝、魂、汝を自由にする）
爾はわが神

若しくは汝、常に進みやまぬ不壞(ふゑ)の道、
凡ての偉大なる觀念、人類の夢想、
私の魂よ、汝を高め解放する凡てのもの、
凡ての雄々しさ、思ひ入れる情熱的行爲、
爾はわが神。

若しくは時間、若しくは空間、
地球の神々しさ神祕さ、若しくは私が眼に見且つ渇仰する私自身の姿、若しくは他の人の見事な姿、若しくは耀灼たる
　太陽、若しくは夜天の星斗、
爾はわが神。

喜べ、船子よ、喜べよ

喜べ！　船子よ――喜べよ！
（魂にまで喜んで、死に臨んで、私は叫ぶ）
私達の生は閉ぢた――私達の生は始つた。
長い、長い繫船を私達は見棄てるのだ、」
船はとう〳〵自由だ――彼女は飛ぶ！
彼女は速かに岸から遠ざかる、
喜べ、船子よ――喜べよ。

最後の祈禱

とう〳〵……しめやかに、
巖丈な備へある家の壁から、
嚙み合つた錠前の束縛から――閉鎖した戸の構へから……私を運び移せ。

音もなく私をすべり出させよ。
「柔和」の鍵で錠前をはづし――さゝやきの聲で

戸を開け、おゝ魂よ。

しめやかに、……氣をせかずに！
（お前の束縛はきびしい、おゝ可壞(かゑ)の肉よ！
お前の束縛はきびしい、おゝ愛慾よ。）

冬の蒸汽機關車に

爾を歌はう！
吹きまく嵐、今のやうな――雪――暮れ行く冬のたそがれの中にある爾を！
鎧に身つくろひした爾を、爾の規則正しい烈しい鼓動を、さうして爾の鋭い脈搏を、
黒い筒形の五體、金色(こんじき)の黄銅、銀光の鋼(はがね)、
重々しい側槓、併行した接條、それは爾の側部で旋回し、馳せちがふ、
爾の旋律、或る時は高まりつゝ喘ぎ叫び、――或る時は距たるにつれて細まつてゆく、
突出した逞しい前燈は車頭にかゞやき、
長くたなびく蒸汽の靑白い長旒(ながはた)はさゝやかな紫を含み、
黒々と重げな煙の雲は煙突から湧き立ち湧き立つ、
爾の骨組の嚴丈さ――旋條と瓣膜――細かく震へる車輪のまたゝき、
後ろに連なる一列の客車は、從順に快活に爾に隨ひ、

はやてにも日和にも、迅くとも、おそくとも、小やみなく馳せてゆく、
「近代」の典型！　激動と精力との象徴！　大陸の脈搏！
せめては一度、來たつて詩神に事へて歌に溶けよ、私が今爾を見やるそのまゝに、
嵐、さうして歯向ふ陣風、さうして降りしきる雪の中を、
晝間は、爾の警戒をその鐘に鳴りひゞかせつゝ、
夜には又、沈默の闇に目印の燈をひらめかしつゝ。

おめき叫ぶ美よ！
私の歌の中をひた走れ、爾の律なき音樂を集め、爾の燈を闇にひらめかし、
耳を劈く爾の汽笛もて狂ひ笑ひ、地震の如く轟く爾　反響に凡てのものを揺りさましつゝ！
爾自身の律は完全だ、爾自身の軌道は絶えて謬られない、
（女々しい竪琴、滑らかなピアノの甘々しい諧音ではない爾のは）
爾のをたけびは打ち震ひて巖や岡の木魂を呼びつゝ、
果て知らぬ草原を越え——湖の數々をよぎつて
無邊際の大空に、自由に、快活に、力強くもそゝぎ出されるそれなのだ。

牛ならし

人氣遠い北の方、平和にも牧歌的なその土地に、

この歌の主なる名高い牛ならし、私の友なる百姓は住んでゐる、
人々は三歳四歳のしたゝかものを馴らしてもらひにつれて來る、
世に珍らしい荒牛を引き受けて、彼は易々と馴らし手なづける、
恐れもなく、鞭も持たず、庭の中をむづかり歩む若い牡牛に彼は近づいてゆく、
牡牛は眼を怒らし、いら〳〵しながらその頭を空ざまにもたげてゐるが、
しかも御覧！　程なく牛の怒は納まる――見るまに牛ならしはその牛を手なづけてしまふ、
御覧！　そのもよりの農家には、老いたる若き百頭からの牡牛――しかもそれを殘らず、馴らしつけた男といふのは彼だ、

牛共は彼を見知つて――どれもこれも彼になづいてゐる、
御覧！　或る奴は見事な畜生だ――雄々しいその姿！
或る奴は佾色――或る奴は斑――一頭は白い毛が脊筋を流れて――或る奴は虎斑、
或る奴は廣く立ちはだかつた角を持ち（上等種の證據だ）――御覽！　かゞやかしいその毛なみを、
御覽、二頭ばかりは額に星があり――御覽、肥えたその胴體と幅廣い尻つきを、
御覽、四足の上にゆるぎも見せず、しやんと立つ樣子を――御覽、あの素晴らしい悧巧さうな眼を、
御覽、牛共があの牛ならしを見守る樣を――彼奴等は彼が側にゐるのを願つてゐる――行き過ぎたのを見送る彼奴等、
何んといふ慕しげな表情だ！　彼が彼奴等から離れると何んといふ賴りなげな樣子を見せる事ぞ。
――私は驚く、彼奴等には一體彼がどう映つてゐるのか、（書物も、政治も、詩もそこにはない――凡てがない）
白狀するが、私は全く彼の魅力が妬ましい――無口な無學なその私の友、
田舍の片隅で生活してゐる彼を百頭の牡牛が慕つてゐるのだ、

人氣遠い北の方、平和にも牧歌的なその土地に。

私が書物を讀む時

私が有名な傳記を讀む時、
さうしてこれが(と自問自答する)著者が一人の人間の傳記と呼ぶところのものなのか？
さうしてそのやうに、誰かゞ、私が世を去つた後、私の傳記を書くことだらう？
(恰も誰かゞ私の生活のちよつぴりでも本當に知つてゐたかのやうに。
所が屢〻考へることだが、私自身すら自分の本當の生涯を完全に知つてはゐないといつていゝのだ、唯僅かばかりの暗示
——僅かばかりの散漫な、かすかな示唆、
それを私は、私の用途の爲めに、こゝに書き記さうとするだけだのに。)

私が自分の頭を君の膝におく時、仲間よ

私が自分の頭を君の膝におく時、仲間よ
嘗てなした懺悔を私は繰り返す——大空の下にあつて、君に云つたところのものを私は繰り返す、
私は自分が落ち着かない爲め、他人をもさうするのを知つてゐる、
私は自分の言葉が兇器で、危害に滿ち、死毒に滿ちてゐるのを知つてゐる、
(實に私はまがひもなく一箇の戰士だ、

あすこに劍銃を持つてゐるあの男や、赤筋のついたあの砲兵などゝは少し質が違ふのだ)
何故なら、私は平和、安泰、及び凡て定められた法則に對して、それを打ち壞すために齒向ふからだ、
凡てのものが私を受け入れてゐたとしたら、私はさうでもなかつたらうが、凡てのものが私を拒むが故に、私の決心は
益〻堅くなるのだ。
昔でも今でも、私は經驗や、警告や、大多數や、侮蔑などに頓着してはゐない、
地獄と稱せられるものゝ威脅などは私に取つては無きに等しい、
又天國と稱せられるものゝいざなひの如きは私に取つては無きに等しい、
……愛する仲間よ！　私は君を私と共に促し立てたし、今も促しつゝあるが、我々の行きつく先が何であるかは私自身
にも見當がついてゐず、
或は我々が勝利を得るのか、又は全然粉碎され打ち負されるのか、それも知らないと懺悔するぞよ。

自分の魂に

發足が近づくにつれて、
時が逼つて來るにつれて、影が――お前から雲が――私のまだ知らない、先の世の怖れが來て、私を暗くする。

私は出で立つだらう。
私は諸の州を横行するだらう――然し何處を何時まで旅行するか、それは自分でも判らない、
恐らくは間もなく、私が歌ひつゝゆく或る日か或る晩に、私の聲はいきなりやむにちがひない。

おゝ魂！
凡てはこんなことになつてしまふだけなのだらうか、
日の光の下に遠く見まはす私の眼の働き、
女性と取りかはすたとしへなき愛、
大空の下にある私のよろこび——マンハッタンの逍遙、
私が遇ひ得たやむ時なき好意——若き人達の私に與へる不思議な愛着、
私の祕やかな回想——一人旅の間に私が吸ひ込んだ風景、星々、動物、雷鳴、雨雲、粗野で、無智で、氣まゝな私の口
　からの言葉、——數多い私の過失と放恣、
別れ際に友の唇が私の唇に與へた輕い接觸、
歩道や畑の上に私が殘した足跡、
それらは私の新たな發足にあたつて、こんなことになつてしまふだけなのだらうか、
この私の新たな發足にあたつて——しかもそれで十分だ、おゝ魂よ、
おゝ魂よ、お前と私とはむき出しに姿を現はした——それで十分だ。

第二輯

自己を歌ふ

一

私は今自己を披露し、自己を歌ふ、
さうして、私の衣はまたあなたの衣であるだらう、
何故といつて、私に屬する凡ての原子は、等しくあなたにも屬するのだから。

さまよひがてらに私は私の魂を誘ひ出す、
夏草の穗を眺めながら、欲するがまゝに私は倚りかゝり、又はさまよひ歩く。

私の言葉、私の血のあらゆるしたゝり、それはこの大地と大空とから造られた、
こゝに私は兩親から生れ、兩親は更に兩親から生れ、その兩親は又更に兩親から生れ、
完全な健康にあつて、今三十七歳なる私は始める、
死に至るまで不休であらんことを望みながら。

教義と流派とを無視し、
そのあるがまゝに任せて、しかもそれを忘れることなく、暫くそれらから退き、

私は善惡にかゝはらず自己に卽する、さうして思ふがまゝに物を言はう、
本然のエネルギーによる無拘束の自然。

二

家々も部屋々々も香料に滿ち、棚の凡ても香料にあふれてゐる、
私はその薰りをかぎ、それを知り又それを好む、
そのしたゝりもまた私を醉はさうとするが、私はさうはさせまい。

大氣は香料でもなく、そのしたゝりの味ひもなく、全く香ひがない、
それは永久に私の口に適し、私はそれを熱愛する、
私は森のわきの土堤に行つて、裝ひを解き眞裸かになるだらう、
私は大氣と觸れ合ふ時有頂天になる。

私自身の氣息のけむり、
反響、さゞめき、ひそやかな囁き（女萎、馬利筋、木の叉と這ひ蔓）、
私の呼吸、心臟の鼓動、私の肺に流動する血と空氣、
綠葉と枯れ葉との香ひ、又汀と暗色なる海礁の、又收穫小屋なる牧草の香ひ、
風のまに〳〵たゞよひ去る私の大聲の言葉の響き、そこばくの輕い接吻、そこばくの抱擁、腕のかき抱き、
みづ〳〵しい枝のたわむ時、樹木に現はれる影と光との戯れ、
孤獨のよろこび、群衆にもまれるよろこび、或は野の上、岡のすそのよろこび、
健康の感じ、眞晝の小歌、寢床を出て太陽を迎へる時の私の歌。

あなたは千エーカーを大したものと思ふか？　地球そのものを大したものと思ふか？
讀書家とならう爲めにあなたは永年努力したといふのか？
あなたは詩歌の本義に通ずることに誇りを感じてゐるといふのか？
今日さうして今夜、私と一緒にゐなさい、さうしたら、あなたは凡ての詩歌の源を自分のものになし得るだらう、
あなたは地球と太陽との精髓を自分のものになし得るだらう（しかもそこには幾十萬の太陽がまだ殘されてゐる）、
あなたは最早物事を人傳てに受け取るやうなことはしなくなるだらう、或は死んだ人の眼を通じて物を見たり、書物の
　中の幻影で自分を養ふやうなことはしなくなるだらう、
あなたはまた私の眼を通じて物を見たり、私の手からそれを受け取るやうなこともしまい、
あなたは自ら四方に耳傾け、あなた自身から物事を濾し取るだらう。

三

私は人がいやさきといやはてとの物語をするのを聞いたが、
私はいやさきやいやはての話はしない。

今にまさつた發端はどこにもありはしない、
今よりも若きもの、今よりも老いたるものは何處にもありはしない、
今に優つて完全なものは將來にも來ないだらう、
今の外には天國も地獄もありはしない。

促進、さうして促進、さうして又促進、

常住に創造しつゝゆく世界の促進、
未分の中から等位が對立して進み出る、常に實質と增進、常に陰陽、
常に纏着せる同似――常に特殊――常に繁榮する生命。

それをくだ〴〵しく說く必要はない――有智も無智も等しくその事實を感じてゐる。

最も確實なものゝ如くに確實に（垂直に屹立し、しつかりと繫ぎ合はされ、梁に括（くゝ）られた柱のやうに）、
又は感高く、生氣に滿ちた馬のやうに健やかに、私とこの神祕とは、手をつなぎ合せて、こゝに、立つ。

汚れなく香（かぐ）はしいのは私の魂だ、さうして汚れなく香はしいのは私の魂ならざる凡てのものだ。

一つを缺く時兩方は缺ける、さうして見えざるものは見ゆるものによつて證明される、
見ゆるものがまたやがては見えざるものとなり、證明を受ける番にまはるまで。

最上のものを現はし、それを最惡なものから切り放ちながら、時代から時代は苦しむ、
けれども私は、事物の完全な順應と均衡とを知るが故に、人のあげつらふ時私は默す、さうして水に浴しながら自分自
　身を嘆美する。

私に屬する凡ての機關と機能とを私は歡迎する、さうして汚れなく眞心ある凡ての人のそれを、
そのいさゝかも、そのいさゝかのその又いさゝかも蔑（さげす）むべきではない、さうして如何なる部分も同樣に私には親ましい。

私は滿ち足つてゐる——私は見、踊り、笑ひ、且つ歌ふ、
かじりついてまで愛してくれるものが、夜もすがら私の床に添ひ寢して、夜のひきあけに跫音を盜んで去り行く時、
家中に滿ち溢れる程、白い手拭で蔽はれた籃を殘してゆく時、
私は私が受け入れること及び實現することを延引して自分の眼を疑ふだらうか、
私の眼が道路の上を遠く見送り、
さうして見極めたところを細かく私に示し、
一人だけの確實な値打ちと二人の確實な値打ちとを示し、その兩者のいづれが勝るかを示した時に。

四

散歩するもの、質問する者達が私を取り圍む、
私の會ひ得た人々、若い頃の生活、私の住つてゐた町、都市、或は國の私に與へた感化、
最近の日々、發見、發明、會合、古き、新しき著者、
私の食事、衣服、交遊、風體、挨拶、負債、
私の愛する男又は女のほんとうの又は見せかけの無關心、
私の家族の一人又は私自身の病氣、又は惡行、又は持ち金の消失と缺乏、又は悒鬱、又は得意、
戰爭、兄弟相喰むいまいましさ、はつきりしない報道の不安、節々の出來事、これらのもの凡ては夜となく晝となくに
　來て、又私から離れ去る、
けれども凡ては「私」そのものではない。

それらの押し寄せまきかへすものから離れて私といふものは立つてゐる、
面白がつて、落ち着いて、憐れみながら、手をつかねて、取り亂さずに立つてゐる、
見おろし、直立し、或は或る觸れがたい倚りものに腕を賴み、
橫に頭をねぢまげて眺めながら、物珍らしげに次ぎに起るものを待つ、
勝負の中に又はその後に何が起るかを期待もて見守つてゐる。

自分の生涯の過去に、私が語學者や論爭者と霧の中を藻がき進んだ頃を回顧する、
私は嘲弄も議論もしない、私は目擊しつゝ待つ。

五

私はお前に信賴する、私の魂よ、魂ではない私の他の部分もお前に對して自卑するやうなことではならない、
さうしてお前も他に對して自卑するやうなことではならない。

私と共に草の上をさまよへ――お前の喉から栓を取り除け、
私の求めるのは、言葉でも、音樂でも、韻律でもない、愛顧でもなければ小言でもない、――たとへ、それが最上のものであつたとて、
私の望むのは、なだめのみだ、押ししづめたお前の聲のさゝやきのみだ。

思ひ出す、澄み渡つた或る夏の朝に、二人が臥ころんでゐた時、
お前は頭を橫すぢかひに私の腰のあたりに置いて、

徐ろにそれを私の體の上で動かし、
私の肋骨から被ひ物を取り除き、むき出しになつた私の心臟にお前の舌をさし入れ、
更にお前は私の鬚に觸れ、遂に私の足を抱いたね。

その時、忽ち私のまはりには平和と智慧とが擴がつたが、それは地上の凡ての技巧と論議とを超越してゐた、
さうして神の手は私自身の約束であることを知り、
さうして神の靈は私自身の兄弟であることを知り、
さうして凡そこの世に生れた凡ての男は私の兄弟、凡ての女は私の姉妹であり戀人であり、
さうして萬有の土臺骨(どだいぼね)は愛であり、
さうして野にあつて、且つ榮え且つ萎む草葉は限りもなく、
さうして草蔭の小さな巣に住む赤蟻、
さうして蝕れた垣の蘚の痂(かさぶた)、盛り石、接骨木(にはとこ)、毛蕊花、山牛蒡も亦限りないことを知つた。

六

一人のをさな子が草を手一杯持つて來て、「これは何んだ」といつた、
私は如何(どう)してそのをさな子に答へることが出來よう？　をさな子が知らないと同様に、私も知つてはゐないのだから。
思ふにそれは、繁りゆく草葉で織りなされた、私の性情を現はす旗印だらうか。

或は思ふにそれは神のハンカチなのだ、
香ひ高き記念の贈物として、わざと神の手から落されたのだ、
その隅の一つには持主の名が記してある、
それを見付けた私達が、誰のものだといひあてられるやうに。

或は思ふに、草は草自身が一人のをさな子だ、植物の世界に生れ出た乳のみ子だ。

或は思ふに、それは誰にでも通じる形象文字で、
熱帶にも寒帶にも同じく萠え出で、
白人の間にも黑人の間にも成長し、
カヌック、チュカホー、議員、奴隸　そのいづれにも私は等しく與へ、そのいづれからも私は等しく受け取る。

更に又それは、刈られずに生ひ茂る、墓場の美しい鬚とも見える、
大事にかけて私はお前を手に觸れよう、卷きくねつた草の葉よ、
ことによると、お前は若い男達の胸から萠え出でゝ來たのかも知れない、
若しその男達を知ることが出來たら、私は彼等を愛したらう、
ことによると、お前は老いたる人々から來たのかも知れない、或は生れると間もなく、母の膝から取り去られた乳のみ
　子から來たのかも知れない、
さうしてそれはまた母の膝でもある。

この草は老いたる母達の白い頭から來たにしては餘りに黑いし、
老いたる男達の色なき鬚にしては黑ずみ過ぎてゐる、
薄紅い口蓋から來たにしても黑い。

おゝ、兎も角、私は語られたる數多くの言葉を思ひ知る、
さうしてそれらが無意味に口蓋から發せられたのではないのを知る。

世を去つた若い男と女とについての示唆を解きあかすことが出來たならと私は思ふ、
老いた男と母とについての示唆、又生れると間もなく、母の膝から取り去られた乳のみ子達の示唆を。

若き男達と老いた男達とがどうなつたかとあなたは思ふ、
又女達とその子等とはどうなつたかとあなたは思ふ。

彼等は生きてゐる、さうして何處かにゐて健かだ、
微細な萠芽も、實際死といふものゝないのを示してゐる、
さうして、あつたとしたところが、それは生命を生み出す。さうして最後に生命を妨げようと待つやうなことはない、
さうして生命が出現する瞬間に死は無くなる。

凡てのものは前方にさうして外方に進出する、何者も崩れはしない、
さうして死とは、假初(かりそめ)めに想像されてゐるものとは違つて、遙かに幸福だ。

七

生れるのは幸福だと想像する人があるか？

私は直ちにその人に告げよう、死ぬのも同樣に幸福なことだ、さうして私はそれを知つてゐる。
私は死者と共に死の門を潛り、產湯(うぶゆ)をつかつた乳のみ子と共に生の門を潛つた、さうして私は自分の帽子と長靴との間
　だけに包括されてゐるやうな男ではない。
さうして私は色々な物象を追求した、一として同じものはない、さうしてどれもいゝ、
大地もいゝ、星もいゝ、さうしてそれに屬する凡てがいゝ。

私は大地でもなければ、それに屬するものでもない、
私は民衆の友であり伴侶である、彼等も亦私と同じく不滅で神祕だ、
（人は如何に不滅であるかを知らないが、私はそれを知つてゐる。）

凡てはそれ自身の爲めであつて、それ自身のものだ、私の爲めの男であり女である、
私の爲めに、若さを知つた人々、さうして女を愛するものを、
私の爲めに、誇り高き男、侮蔑によつていかに傷くかを感ずる男を、

私の爲めに、情人とさうして老女を、私の爲めに母達を、さうして母のまた母達を、
私の爲めに、微笑んだことのある唇を、涙したことのある眼を、
私の爲めに、子供達を、さうして子供を生むところの人々を。

衣を脱げ！　お前は私に取つては罪もなく、役立たずでもなく、無視されてもゐない、
精巧であらうが、粗末であらうが、其の衣物を透して果してどうあるかを私は見極める、
さうしてその周圍に、執念く、倦くことなく、まつはりついて、決して拂ひ捨てられはしないだらう。

八

みどり子が搖籃の中で眠つてゐる、
私はうすものをかゝげ永い間眺めやる、さうして靜かに手もて蠅を追ひ拂ふ、
少年と顏赤らめたる少女とが、木立の多い岡の上へと歩みをそらす、
私は頂きから覗いてそれを見てゐる。
自殺者が寢臺の血まみれになつた床の上でのたうち廻る、
私は髮ふり亂した屍を目擊する、ピストルが何處に落ちたかに氣をつける。

舗道の饒舌、荷車の車輪、靴底の音、散策者の話聲、
重々しい乘合馬車、拇指を立てゝ客をすゝめる御者、花崗石の地床の上に鳴る蹄鐵の音、
雪橇、鈴の音、大聲の冗談、雪合戰、

人氣者に浴せかける歡呼、激昂した暴徒の憤怒、
病院に運ばれる病人を乘せた擔架の被布のひらめき、
仇同志の遭遇、突然の罵詈、打撲と昏倒、
昂奮した群衆、その群衆のたゞ中に進み入らうとする勳章をつけた巡査、
無數の反響を吸ひ入れまた吐き出す無感情の石ころ、
日射病にかゝり或は發作を起して倒れた、食ひ過ぎたもの、或は饑ゑに迫つたものゝ叫きの聲の凡て、
急いで家に歸りさうして産氣づいた女達の叫び聲のすべて、
或はなほ聞こえ、或は既に聞こえずなつた言葉のかぎり、禮節の爲めに押しひしやげられた叫喚のかぎり、
犯罪者の捕縛、嘲弄、色じかけ、その承諾、唇をそらしての拒絶、
私はそれらに氣を配る、或はそれらの幻影と反響とに氣を配る――私はそこに來る、さうしてそこを離れ去る。

九

田舍の收穫小屋の大きな戸は物待ち顏に廣く開かれてゐる、
收穫時の枯れ草はのろ〳〵と挽かれる車に積み乘せられてゐる、
透明な光は、灰蒼色と綠とのまじり合つたその上に戯れ、
雙腕(もろうで)に抱へられた草は幾抱へもたわゝな草の山に置きそへられる。

私はそこにある、助力する、草の山の上にあつて背のびする、
私はそれのやはらかく揺れるのを感じた、片方の脚を他の脚の上に休らはせながら、

私は横桁から飛び降りて、苜蓿とティモシーとを摑む、
さうしてそこにでんぐりかへり、藁屑と髪の毛とを纏れさす。

一〇

唯ひとり、遠く荒野と山嶽とに私は狩り暮らす、
自分の身輕さと上機嫌とに驚いてさまよひながら、
夕暮近くになつて、夜を過すべき安全な地點を選び、
火をつくつて新たに殺した獲物を焙り、
獵犬と獵銃とをひきよせて、寄せ集めた木の葉の上で眠りに入る。

米國風の快走船が小さな横帆を張りひろげ、光と飛沫とを散らして走る、
私の眼は陸地を見守り、その舳首にかゞまり、或は喜びに滿ちて甲板に叫ぶ。

船頭と貝掘りとは早起きして私の所に立ち寄つてくれた、
私はズボンを長靴にたくしこみ、出かけて行つて愉快に時を過した、
あなたもその日は雜炊鍋の側に來てゐるとよかつたのに。

私は遙かな西方で、野天の下に行はれた獵師の結婚式を見た、花嫁は赤人種の娘だつた、
娘の父と父の友達とは胡坐をかいて、默つて煙草をくゆらしながら近くに居列らんだ、彼等はその足に皮鞋をはき、そ

の肩からは大きな厚い毛布を羽織つた。
土堤の上をゆるやかに歩む獵師、彼は重に皮で身を裝ひ、その潤澤な鬚と卷毛とは頸を守り、花嫁をその腕にかき抱いた。
花嫁は長い睫毛を持ち、その頭には被りものなく、癖のない粗い髮毛は、色盛りな肢體を流れて足までもとゞいてゐた。

逃げ出した奴隷が私の家に來て戸外に立ち停つた。
積み薪の小枝の折れるので彼の動作を私は聞きつけた。
打ち開いた臺所の觀音開きの戸の隙から私は彼が弱り果てゝよろめくのを見た、
丸太の上に腰かけた彼の所に行つて私は彼を家の中に招じ入れた、さうして安全を保證した、
さうして水を水槽に滿たし、汗になつた體と、擦傷を受けた脚を洗はした、
私のに續く部屋を與へ、さうして淸い荒布の衣物を供した、
さうして今でも彼の眼球の廻旋とぎごちなさとを思ひ出すことが出來る、
さうしてその頸と足頸の擦傷に膏藥を貼つたのを思ひ出すことが出來る、
彼が健康を囘復して北の方に發足するまでには一週間私のところに滯在した、
食卓では彼を私の次ぎの座にすゑた、私の銃は部屋の隅に立てかけてあつた。

一一

二十八人の若者が海岸で水と戲れてゐる、
二十八人の若者、さうして凡てが睦じく、

二十八年の女らしい生涯、さうして凡てが物淋しく。

女は岸の高みに美しい家を持つてゐる、
美しい女は、豐かに身を裝つて、窓の鎧扉の後ろに隱れてゐる。

どの若者を女は一番好くのだらう、
あゝ、中でも一番氣取らないのが女には美しいのだ。

どこにおいでゞすか、貴女よ、私はあなたを見てゐますよ。
あなたはあすこの水の中を跳ねまはりながら、しかもあなたの部屋の中にひそんでゐる。

跳りながら、笑ひながら、第二十九人目の游泳者が海沿ひをやつて來る
他の人々は彼女を見なかつたが、彼女は若者達を見、それを愛してゐる。

若者達の髭は濡れてかゞやき、滴りは又その長い髮をも流れ下つた、
小さな小河がその五體を走り過ぎた。

眼に見えない一つの手も亦彼等の五體を走り過ぎた、
その手は震へながら、彼等の頭から、肋骨から走り過ぎた。

若者達は浮き寢をする、その白き腹部は太陽の方にふくれ上る、彼等は誰がそれをしつかりとかき抱くかを尋ねない、
誰が曲線を描いてしなだれかゝりながら、彼等に口を接し、凭れてゐるかに氣がつかない、
彼等は飛沫を以て誰をひた濡れにしてゐるかを思はない。

一二

屠殺業の若者が殺生する時の着物を脫ぐ、或は市場の畜舍でナイフを研ぐ、
私は彼の達者口や、云ひまぎらしや、しやべり負けを樂しみながらそこを彷ふ。

鍛冶屋達が薄汚れた毛胸を揃へて金砧を取りかこむ、
銘々は大鎚を持つてゐる、皆んな出揃つて、火は熱氣を漲らす。

燃えがらの散らばつた戸口の所で私は彼等の動作に注意する、
彼等の腰のしなやかなくねりは雄々しい腕と調子を合はせる、
肩よりも高く大鎚は振り上げられる、そろ／＼と肩よりも高く、しつかりと肩よりも高く、
彼等はせかない、銘々はこゝぞといふところを打つ。

一三

ニグロがしつかりと四頭立ての馬の手綱を握る、轅き荷は縛り上げられた鐵鎖の下に搖らぐ、

石工場の長い荷馬車を御するニグロ、彼は一つの脚を綱切れに賴んで丈け高くしつかりと身構へする、
その藍色の肌衣は豐かな頸と胸とを現はし、腰帶の外に垂れてゐる、
その眼ざしは落ち着き拂つて威嚴を持ち、帽子の鍔を額の所で後ろにはねてゐる、
太陽の光は彼の縮れた髮と鬚とに落ち、磨き上げた完成な五體の黑さをかゞやかす。

私はこの畫にしたいやうな大男を見てそれを愛する、私はそこに停つてはゐない、
私も亦荷車と共に行くのだ。

私の裏にある生の愛撫者、それは私の動き行くどこにでも、前方にも後方にも振り向き、
そつぱうにある壁龕や、つまらぬ曲り角にも振り向き、一人の人をも、一つの物をも見はぐることなく、
凡てのものを私自身の爲め、又この歌の爲めに吸收する。

軛と鎖とを鳴らし、或は木蔭に足だまりする牡牛等、お前の眼の中に表はさうとしてゐるのは何んだ？
それは私が生涯に讀んだ凡ての印刷物よりも更に以上に私には見える。

一日がゝりの遙かな散歩の道すがら、私の跫音は森の牡鴨と牝鴨とを驚かす、
彼等は一氣に飛び立つ、彼等は靜々と輪を描きながら舞ふ。

私はそれらの自由な目論見を信賴する、

さうして私の衷(うら)に戯れる赤、黄、白を承認する、
さうして緑や、紫や、簇生する冠を有意味に考へる、
さうして彼女が或る他のものでないが故にといふ理由で龜を値打ちのないものとは思はない、
さうして森の中のかけす鳥は嘗て全音階の稽古はしないが、しかも十分美しく私の爲めに歌ひさへづる、
さうして栗毛馬の姿は私の愚かさを恥ぢ入らしめる。

一四

鵞鳥の牡が冷え〴〵する夜頃を彼の群れを率ゐて飛ぶ、
ヤーホンクと彼は啼く、さうして私を招くが如くにその聲を送る、
聞いた風な人間はそれを無意味と思ふかも知れないが、私はつく〴〵と耳傾けて、
かしこ、冬空のかなたに、その目的とその重みとを見出すのだ。

鋭い蹄を持つた北方の麋、家屋の鉢巻きの上にゐる猫、四十雀、プレイアリー・ドッグ、
鼻打ちならす牝豚の乳房にすがりつく一胎(はら)ぶりの小豚、
七面鳥の雛、さうして半ば翼を擴げた親鳥、
私は彼等の中に、私の中に、不變な同じ法則を見るのだ、
大地の上に印する私の足跡は數多くの愛を涌かす、
その愛はそれを語らんとする私の最善の努力を笑殺する。
生長してやまない戸外の姿に私は有頂天になる、

家畜の間に生活する人、或は大洋や森林のうつり香を持つ人、
船舶を造る人、若しくは操る人、或は斧や大鎚を使ひまはす人、或は馬を御する人、
私は何週間も續けさまに、彼等と共に食ひ共に眠ることが出來る。

最も平凡なもの、最も安直なもの、最も手近かなもの、最も見やすいものが私だ、
進んで機會を摑まんとし、大きな儲けの爲めに消費するものは私だ、
第一着に私を受け入れようとする人に私自身を授けるために私は裝ひをする、
私の好意に對して大空の降臨するのを望みなどはしない、
私は自分自身を氣まゝ勝手に振りまくのだ。

一五

朗らかな中音歌手が、オルガンの備へられてゐる高欄で歌ふ、
左官は壁を塗り立てる、その荒鏝の舌は險しく上に撫で上げられる時、口笛のやうな音を立てる、
結婚した、若しくは未婚の子弟が感謝祭の晩餐の爲め家路に馬車を驅る、
水先案内者が(キング・ピン)を握る、彼は逞しい腕の力で船を一方に傾ける、
船頭が捕鯨船に身づくろひして立ち、投鎗と漁扠とを用意する、
野鴨の獵師が靜かな注意深い大股で歩く、
執事が祭壇に手を十字に組んで受職する、
機織りの女工が大車輪のうなりに合せて且つ退き且つ進む、

百姓が日曜日の散步の道すがら、圍ひのそばに立ち停り、燕麥やライ麥を眺めやる、
狂人が狂癲と確められて遂に病院へと連れられてゆく、
(彼は決して今までのやうに母の寢室の小寢臺の上に眠ることはあるまい。)
灰色の頭と憔れた顎とを有つた日雇印刷工は活字盤の所で働いてゐる、
嚙み煙草を口の中にまろばしながら、その眼は原稿紙の上にかすみながら落ちる。

畸形の四肢が手術臺の上に結びつけられてゐる、
切り放されたものが物恐ろしく桶の中へと落ちる、
白人の血を餘計交へた黑人の女が競賣臺の上で賣られる、泥醉者が酒場のストーブの所でうなづいてゐる、
機械職人は袖をまくり上げ、巡査は受持區域を步き廻はり、門衞は通行者を注目する、
若者が運送馬車を御してゆく(私は彼を知らないが彼を愛する)、
混血兒が競走に勝敗を決するため輕い靴の紐を結ぶ、
西方の七面鳥狩りが老若の人々をひきよせ、或る者は小銃に身を凭せ、或る者は木材の上に憩ふ、
群衆の中から銃手が進み出で、位置を定めて立ち、銃の覘ひを定める。
新來の移住者の群れが波止場や船堤に群がる、
獸毛のやうな髮毛の頭が砂糖黍の畑を耕やしてゐる、監督者の鞍の上からの監視を浴びながら、
喇叭が舞踏室に鳴る、紳士等は踊り相手を求めて走り、相手同志は挨拶の腰をかゞめる、
若者が眠りもやらず杉板の屋根裏の小部屋に臥つて、音樂のやうな雨に耳傾ける、
ウルヴェリン人はヒウロン湖に貢ぎする谿河のほとりに係蹄をしかける、

銅色の番婦は、黄色の笹緣した衣物に身を包んで、皮鞋とガラス球の袋とを賣物にし、
美術鑑賞家は瞼を半ば閉ぢて横眼をつかひながら展覽會場を覗き歩く、
波止場人夫が船を繋ぶ間に、板橋は上陸の客の爲めに投げられる、
妹は束絲を兩手にかゝげ、姉はそれを絲の球に卷き上げる、さうして時折りほつれに遇ふと手をやすめる、
一週間位前に初子を生んだ今年妻は健康の囘復と共に幸福を感じ、
淸々しい髮を持つたヤンキーの娘はミシン仕事をしたり、工場や工房で働き、
敷瓦師は二つ把手の撞槌によりかゝり、探訪者の鉛筆は手帳の上を速かに走り、看板屋は藍や金の文字を描き出す、
運河の勞働者は曳船道を踏みしめて行き、計算係は事務机で勘定し、靴屋は縫絲に蠟をひく、
指揮者は樂隊に對して棒を振り、演奏者はこれに從ふ、
子供は洗禮され、改宗者は始めての告白をなし、
競走船は灣内に散在して、競走は始められる、(白い帆が輝やきわたるよ)
牧畜者は家畜の群れを見守つてはぐれようとするものに戒めを浚る、
小商人は背の荷の爲めに汗し(買ひ人はほした錢を爭つてゐる)、
花嫁は白衣の皺をのしてゐる、さうして時計の秒針は徐ろに動いてゆく、
阿片常用者は頭をぎこちなげにして倚りかゝり、唇は僅か開かれたまゝ、
淫賣婦はそのショールを引ずり、その帽子は吹出物のした、すわりの惡い頸のところで跳ね動く、
群衆は彼女のはしたない罵詈口を聞いて笑ひ、男等は眼くばせして嘲笑する、
(悲慘な！ 私はあなたの罵詈口にも笑ふまい、嘲笑もすまい。)
閣議を開いた大統領は偉大なる閣僚達によつて圍まれてゐる、

三人の老夫人が腕をからみ合せて廣場の上を重々しげに歩いてゆく、
漁船の舟子達が船艙に幾重ねにもひよう鰈を積み上げる、
ミゾリーの人々が荷物や家畜を引き具して平原を横切つてゆく、
車掌は賃銀を集めるために釣錢で音立てながら列車の中を歩きまはる、
板張職人は床板を張り、ブリキ屋は屋根をブリキで葺き、石工は漆喰ひを求め、
一列になつて背負ひ箱を擔ひながら勞働者は前へ〳〵と歩く。

季節は移りかはり、無數の群衆は集る、それは七月四日の獨立祭だ（大小砲銃のあらんかぎりの祝聲）、
季節は移りかはり、耕やすものは耕やし、刈るものは刈り、さうして冬の收穫は大地にまろぶ、
湖の上遠いところには、魚突きに出た漁夫が、氷に穿つた孔のそばで見張りながら待つてゐる、
開拓地のほとりに隙間もなく立つ切り株、それを借用人が斧で深く切り込んでゐる、
扁底舟の舟子は夕暮れかけて、白楊胡桃のほとりを漕ぎ急ぐ、
洗熊の獵師はレッド河の流域、テネシー河によつて排水される地方、アルカンサス河のほとりを横ぎつて歩きまはる、
チャタフーチー、アルタマホウの湖上にかゝる闇の中に炬火はかゞやく、
家長等はその息子、孫、曾孫たちを自分の周圍に集めて夕餉につく、
アボデイー（日乾煉瓦で造つた粗末な家）の壁の內、麻布のテントの中には、終日の獵を終へた獵人や獵師が眠る、
都會も眠り、田園も眠る、
生きたものも死んだものも彼等の時の來るまで眠る、
老いたる良人もその妻のほとりに、若き良人もその妻のほとりに眠る。

凡てこれらは内向して私に來り、私は外向してそれらに行く、
さうしてこれらを成すところのものは多かれ少なかれ私それ自身だ、
さうしてこれらの一つ又は凡てから私は私自身の歌を織り成すのだ。

一六

私は老いたるもの若きものに屬し、賢きそれと共に愚かなものに屬する、
他人には無頓着に、しかも他人に留意して、
父性であると共に母性、成人であると共に小兒、
粗雜な原料によつて創られ、さうして精微な原料によつて創られ、
夥多の國民中の一つの國民、最小でもかまはない最大でもかまはない、
北方人であるかと思ふと南方人、無頓着でしかも親切な農人として、私はかしこオコーニー河のほとりに住む、
商賣の爲めにはいつでも出かけて行くヤンキーだ、私の關節は地上第一にしなやかな關節だ、地上第一に屈強な關節だ、
ケンタッキーの住民は私の鹿革の脚絆を穿つて谿間やエルクホルンを跋渉し、ルキジヤナ又はジオルジアの住民もさうする、
湖、入江、又は海沿ひに住む舟人も私だ、私はフージャだ、バッヂャーだ、バッキイだ。
カナダ風の雪鞋にも草叢の中にも手慣れてゐる、或は遠くニューファウンド・ランドの消防夫等とも親しみがある、
滑氷船の群れとも親密で、他のものと共に帆走り又は舵を取る、
ヴァマウントの丘陵の上にあつても、メインの森林の中にあつても家にゐると同樣だ、

カリフォルニヤ人の仲間だ、自由な西北州人の仲間だ（彼等の肥大な體軀を愛しながら）、
筏師と炭坑夫との仲間であり、握手を交はし飲食に親しむもの凡ての仲間だ、
最も單純なものゝ弟子、最も思慮あるものゝ導師、
手はじめの新發智、しかも幾多の春秋を經來つた巧者、
凡ての人種と階級とに屬し、凡ての地位と宗敎とに屬し、
一人の百姓であり、器械工であり、藝術家であり、紳士であり、船乘りであり、クエカー宗徒であり、
囚人であり、間夫であり、碌でなしであり、法律家であり、醫師であり、僧侶である。

私は自分の多趣多樣に勝るものに反抗する、
大氣を呼吸するがなほ多くを私の後ろに殘す、
しかも私は空威張りをしない、その分を守つてゐる。
蛾と魚の卵とはその分を守つてゐる、
（見ることの出來るかゞやく恒星と、見ることの出來ぬ暗黑な恒星とはその分を守つてゐる、
觸れ得るものもその分を守り、觸れ得ぬものもその分を守つてゐる。）

一七

これらはあらゆる時代あらゆる邦々のあらゆる人々の思念で、私によつて創建されたものではない、
若しもこれらが私のものである程度にあなたのものでなかつたら、それはあつて甲斐のないものだ、無きに等しい、
若しもこれらが謎であり、謎を解くことでなかつたら、それは何でもない、
若しもこれらが遠いものであると同樣に近いものでなかつたら、それは何ものでもない。

これは土と水とのある處にはどこでも育ち上がる草だ。
これは地球の面に漂ひ漲るあり來りの空氣だ。

一八

强烈な音樂と共に私は來る、私のコロネットと私の太皷と共に、
私は認められたる勝利者ばかりの爲めに進行曲を奏するのではない、私は打ち敗かされて殺された人々の爲めにも進行曲を奏する。

あなたは勝利を占めるのは立派なことだと聞かされたか、
私は同時にいふ、失脚するのも立派なことだ、戰鬪は勝つた時だけが戰鬪ではない、敗けた時も戰鬪だ。

私は死者の爲めに皷を打ち且つ敲く、
私は死者の爲めに聲高く華やかに歌口を吹く。

失脚した人々の爲めに歡呼！
又戰艦を沈沒せしめた人々の爲めに、
船のみならず自ら海に溺れ死んだ人々の爲めに、
戰爭に敗北した凡ての將軍の爲めに、打ち負かされた英雄の爲めに、
世に知られた最も偉大な英雄と同等な世に知らない無數の英雄の爲めに。

一九

これは平等に配膳された食事である、これはひとりでの饑ゑに對しての食事である、
正義の人に對してと同樣に邪惡の人に對しての食事だ、私は凡ての人と約束をした、
私はたゞの一人の人と雖も輕視され除外されるのを欲しない、
外妾も、食客も、盜賊もこゝに招かれる、
厚い唇の奴隷も、梅毒病者も招かれる、
それらの人々と他の人々との間に差別は何もおかれないだらう。

これは內氣な手の平の握りしめだ、これは髮毛からたゞよひ出る匂ひだ、
これはあなたに對する私の唇の接觸だ、憬れの囁きだ、
これは私の顏に映し出された久遠の深さと高さとだ、
これは私自身の物思はしい浸潤だ、さうして同時に迸出だ。

私に何か解しがたい目論見があるとあなたは思ふか、
さう、それはある、何故なら四月の霖雨にもそれはあるから、さうして岩石の側面の雲母にもそれはあるから。

あなたは私が人を驚かすつもりでゐると思ふか、
眞晝の光は驚かすか、明け方の森の木の間にさゝ鳴く上鶲は驚かすか、

それら以上に私は人を驚かしてゐるだらうか。

今こそ私は密かにものを語らう、
それを誰にでも語らないかも知れない、然しあなたにこそ語らう。

二〇

そこに行くのは誰だ、物欲しげに、作法もなく、奇怪にも裸形な、
如何なれば私は食するところの肉から力を搾り取り得るのか。

一體人とは何んだ、私とは何んだ、あなたとは何んだ。

私が自分のものだとして印づけるものをあなたはあなた自身のもので覆へすだらう、
でなければ、私に耳傾けるのは徒らに時を空費するのだ。

月々は虚ろで大地は泥土塵芥だと、
世界中に泣言をいふ人に對して泣言はいはない。

小言をはざいたり、病人の散藥を包みこむやうなこと、それにばつを合せるのは私のかゝり合つたことではない、
家にゐようと外にゐようと、被りたい時には私は帽子を被る。

私には新願をこめる必要はない、私には恭しくしたり威儀をつくらふ必要はない、
地層を穿鑿して微細を究め、學者に相談し、綿密に計量して見て、
私は自分の骨にからみついてゐる脂肪以上に美しいものを見出すことが出來ない。

民衆の凡ての中に私は私自身を見る、民衆は決して私以上でも、又僅に以下でもない、
私が自分についていふ長所短所はそのまゝ民衆のそれである、
さうして私は知る、私は内には充ち、外には健かだ、
宇宙の事物は湊合して常に私の爲めに流れる、
凡てのものは私の爲めに書かれてゐる、さうして私は誤たずその意味を捕へねばならぬ。

私は自分が不滅なのを知る、
私の軌道は大工のコンパス位で自由にされるものでないのを知つてゐる。
私は又、子供がいたづらにする暗中の火の輪のやうに、たやすく消えるものでないのを知つてゐる。

私は自分の莊嚴を知つてゐる、
私は自家辯護をしたり、人の理解を苦心するやうな馬鹿はしない、
私は自然の律が決して申譯などしないのを心得てゐる、
（かういつたとて、結局私は建築用の水準器以上に驕慢な振舞ひをしてゐるのではないつもりだ。）

私はありのまゝに存在する――それで澤山だ、誰もが私に頓着しないからといつて、私は平氣だ、又誰も彼もが頓着す
　るからといつて、私は平氣だ。
そんなものより遙かに大きな一つの世界が私に注意してゐる――それは私自身だ、
さうして私は今、自己を實現しようとも、千年萬年を待たねばならぬとも、
何れにも私は等しく滿足してゐるだらう、
私の足がゝりは花崗岩に枘できびしく嵌めこまれてゐる、
私は人の所謂壞廢なるものを笑ひ退ける、
さうして私は時の廣大さを知つてゐる。

二一

私は肉の詩人である、さうして魂の詩人である。

天國の歡喜は私と共にある、さうして地獄の苦惱も私と共にある、
前者はこれを私の上に接木して增大する――後者を私は新しい言葉に飜譯する。

私は男性を歌ふ詩人であると同時に女性を歌ふ詩人だ、
さうして私はいふ、男性を稟けると同樣に女性を稟けるのは偉大なことだ、
さうして私はいふ、人の母たる以上に偉大なことは外にない。

私は增長又は矜持の歌を唱へるものだ、

私達は小つぽけな謙遜や回避を十分になし盡した、
物の大きさは單に發達に過ぎないといふことを私は示す。

あなたは凡ての人を追ひ越したか、あなたは大統領なのか、
それは些細なことだ——民衆は一人殘らずそこに達して、なほその先に進み出るだらう。

私は更けゆく物やさしい夜と共に歩むところの彼だ、
私は半ば夜によつて捕へられた大地と大海とに對して呼びかける。

近寄れ、胸をあけはだけた夜よ、ぴつたりと近寄れ、力ある滋味に豐かな夜よ、
南風吹く夜よ、數少ない大きな星に飾られた夜よ、
靜かに頭まねきする夜よ、狂ほしくも裸形な夜よ。

ほゝ笑め、おゝそよ風涼しく淫らげな大地よ！
眠りに入つた、しなやかな樹木を持つ大地よ！
沈み行く落日の大地よ、霧を頂いた山々の大地よ！
かすかに靑みがゝつた、淸々しい滿月の光を浴びた大地よ！
河の流れを色分けする影と日向との大地よ！
私の爲めに更に輝き、更に朗らかな、眞珠色の雲を持つ大地よ！

かびろく振り動く肘を持つた大地よ、豐潤な林檎の花咲く大地よ！
ほゝ笑め、今こそお前の愛人が來るのだから。

惜しみなく、お前は私に愛を與へた、それ故私も亦お前に愛を與へる。
おゝ言葉にあまるこの熱狂した愛を！

侵入者が私をしつかりと捕へすくめる、さうして私もそれを捕へすくめる、
私達はお互ひに、花聟と花嫁とが互ひを痛め合ふやうに痛め合ふ。

二二

汝大海よ、私はお前にも自分を打ち任かす――
私はお前が何を欲するかを思ひあてる、
私は海岸から、折りまげて人まねきするお前の指を見やる、
私に觸れることなしにはお前は退き去るのを拒む、それを私は信ずる、
私達は一度は一緒にならなければならない――私は衣類を脱ぐ――私を陸影の見えないところに急いで連れ出せ、
軟かい夜着を私に着せ、大濤の中に私を搖すつてまどろませてくれ、
愛慾のしぶきを私に跳ねなげろ――私はそれに必ず報いるから。

渺茫たる大汪波の海原よ、

廣やかな、間歇的な呼吸を呼吸する大海よ、
生命の涙の海よ、掘り起されないけれども、常に準備された墓場なる海よ、
嵐の呻きとなり誘導者となるもの、氣まぐれな、あでやかな海よ、
お前と私とは素質が同じだ——私はその一面に似、全岡にも似てゐる。

流入と流出とを私は共にする、憎惡と親和との讃美者だ、
互ひの腕に倚つて眠るところの愛人たちの讃美者だ。

私は同情を立證するものだ、
（私は家の中にある品物の表を作つて、それを保持する家をぬかす譯には行かない。）

私は善の詩人であるばかりでなく、又惡の詩人であるのを辭するものではない。

德と惡德とについて彼れ是れいふのは何んだ、
惡も私を推進し惡の改革も私を推進する、私は平然としてゐる、
私の步くのはアラ探しの爲めでもなく、排斥する爲めでもない、
私は凡て生ひ出たものゝ根に水かふ。

あなたは停止しない懷胎から腺病の發するのを恐れたか、

あなたは大自然の法則が計算しなほされ更正さるべきだと想像してゐたのか。

私は一方に平衡を見、又他の一方に平衡を見る、
溫和な敎義も不拔の敎義と同じく堅固に役に立つ、
現前の思想と行爲とは私達の起床であり鹿島立ちだ。

この瞬間は過去幾千萬年を超えて私にやつて來た、
その瞬間即ち今よりも更によきものは一つもない。

何が過去に於て適合し、何が今日に適合するかは怪しむに足らないことだ、
常に〳〵怪しむべきは、卑劣な人間即ち瀆神者が存在し得るといふことだ。

二三

長い時代々々の言葉の盡きせぬ啓現よ、
さうして私の言葉は近代の言葉だ、「共々に」といふ言葉だ。

決して他を妨げない信實の言葉だ、
今でも、これから後でも、その言葉は私に取つて變りがない、私は絕對的に「時間」を受け入れる。
それのみは缺點がない、それのみが凡てのものを圓滿にして完成する、

かの神祕的な迷はしげな驚異のみが凡てを完成する。

私は現實を受け入れて、敢て疑ひを插まない。
徹頭徹尾唯物主義を結びつけながら。

實驗科學萬歲、正確な探究よ、榮え長かれ！
檜とライラックの枝とを交ぜた萬年草を持つて來い、
これは辭書編纂者だ、これは化學者だ、この人は古代カロトッシの文典を作つた、
この海乘り達は危險な未知の海上に船を乘り出した、
これは地理學者だ、この人は外科用ナイフを持つて働く、さうしてこれは數學者だ。

諸君よ、第一の名譽は常にあなたの上に！
あなたの事實は有用だ、しかもそれは私の住家ではない、
私はそこから這入りはするが、私の住家の構へ內に行つてしまふのだ。
《以下四行不明。乞教示》

二四

私はワルト・ホヰットマン、一つの宇宙、偉大なるマンハッタンの息子、
放漫で、多肉で、性慾的で、食ひ、飲み、且つ生み、

殉情の人ではなく――女性に超越もせず、又女性を卻けもせず、
羞恥なきが如く不恥でもない。

戸の錠前をはづせ！
蝶番ひから戸そのものをはづせ！

誰であれ、人間を卑しめるものは私を卑しめてゐるのだ、
何事であれ、なされたこと云はれたことは私にさしひゞく。

私を通じて流射は流れ出で流れ出で――私を通じて潮流と示唆とは流れ出で流れ出でる。

私は原始的な合言葉を語る――私はデモクラシーのしるしを與へる、
誓言する、私は相對の立場でその相對物を持ち得ざる何物をも受け入れない。

私を通じて啞默した諸々の聲々が、
長い代々の獄囚と奴隷等の聲々が、
賣女と不具者の聲々が、
病めるものと絕望せるものとの聲々が、さうして竊盜と侏儒達との聲々が、
無劫の準備と蓄積との聲々が、

諸々の星を繋ぐ鎖——女の胎と男の根との聲々が、
他のものによつて踏み躙られた人々の權利の要求の聲々が、
しみつたれた、平凡な、魯鈍な、侮蔑に値する人の聲々が、
空中の靄、糞使の球を丸める羽蟲の聲々が。

私を通じて禁ぜられた聲々が、
性と淫慾との聲々が——面紗された聲々、さうして私はその面紗を取り除く、
不淨なもの丶聲々、それは私によつて淨化され變容する。

私は口に指をあてがつて噤むことをしない、
私は頭腦と心臟とに對してなすやうに、腹部をもやさしく保つ、
性交は私に取つて、花が不潔でないのに等しい。

私は性慾と口腹の慾とを尊重する、
見ること、聞くこと、觸れることは奇蹟だ、さうして私のどの部分もどこの附屬物も奇蹟だ。

私の內部も外部も共に神聖だ、さうして私が觸れ、或は觸れられた私の部分を共に神聖にする。
腋の下の匂ひ、それは祈禱にまさつて芳ばしい匂ひだ、
この頭は敎會よりも、聖典よりも、凡ての信條よりも以上のものだ。

若し私が他に勝つて一つのものを崇拜するとするなら、それは全體であると一部分であるとを問はず、私の肉體だ、
半透明な私の模型、それはお前であるだらう、
物蔭にある墓石と休息所はお前であるだらう、
逞しい男らしい犂の刃よ、それはお前であるだらう、
私の耕作に從事するものは何んでもお前であるだらう、
汝、私の濃厚な血液よ、お前の乳のやうな流れは私の生命の青白き搾汁だ、
他の胸をかき抱く胸、それはお前であるだらう、
私の頭腦、それはお前の超理的な旋渦であるだらう、
洗はれた菖蒲の根よ、人怯ぢする鷸鳥よ、取り護られた同じやうな卵の巣よ、それはお前であるであらう、
乾草のやうにこんがらかつた頭髮、髭、腕、それはお前であるであらう、
砂糖楓からしたゝる樹液、男性的な麥の纖維、それはお前であるであらう、
寛大なる太陽、それはお前であるであらう、
私の顏を輝かし又は曇らす蒸發氣、それはお前であるであらう。
汝、汗ばんだ小流れよ露よ、それはお前であるであらう、
やはらかく擽るやうな生殖器を私にこすりつける風よ、それはお前であるであらう、
廣濶な雄々しい耕作地、樫の生枝、うねりくねつた私の徑路の散策を愛する人々よ、それはお前であるであらう、
私の握つたことのある手、私の接吻したことのある顏、私の苟も觸れたことのある人間、それはお前であるであらう。
私は自分自身に魂を奪はれる、それほど存分な私があつて、さうして十分に濃密だ、

凡ての瞬間に如何なることが起らうと私は喜びで身ぶるひする、
私はどんなに私の足首が屈折するかを云ひ現はすことが出來ない、同樣に、幽な願望でもその原因が何處から來るのか
　いふことが出來ない、
同樣に、友情を退けるその原因も、又友情を回復するその原因も。

玄關の階段を私が登るといふこと、そんなことが出來るのかと考へる爲めに私は立ち停る。
私の窓際の朝顏は形而上學の書物にまさつて私を滿足する。
黎明を見やるといふこと！
かすかな光が宏大もない透明な暗闇を追ひ退ける、
大氣は私の味覺に甘く感ぜられる。

無邪氣な戲れの如く運動する地球を支へる力は音もなく高まり、生々と溢れ出で、
高みにも低みにも斜線狀に奔騰する。

私の見得ない或ものがその男根を空ざまに向け、
輝かしい液體の洪水を空一杯に溢れさす。

大地は大空によつて引きとゞめられる、兩者の結合の日毎のをさまり、
その瞬間、私の頭上に東方からの挑戰が襲ひかゝる、

侮辱的な嘲罵、果してお前は勝者たるを得るか！

二五

眼もくらむばかり素晴らしい日の出は、直ちに私を殺戮したことだらう、
若しも私が常に／＼私自身から日の出を送り出すことが出來なかつたら。

私達も亦太陽の如くに眼もくらむばかり素晴らしく高揚する、
おゝ我が魂よ、私達は東明の朝すゞと靜けさとの中に私達自身を見出すのだ。

私の聲は私の眼の達し得ない所に向つてゆく、私の舌のひとひねりで私は大千世界を卷き包む。

言葉は私の徹視の力と劣りがない、それはそれ自身を判斷する以上の力を持つ、
それは絶えず私を鞭撻し皮肉な調子でいふ、
「ワルト、お前は十分包有してゐる、何故それをぶちまけないのだ」と。

さあ來い、私はもう馬鹿にされてはゐないから、お前はどうものを云はうかと考へ過ぎてゐる、
おゝ言葉よ、お前の內部に芽生えがどんなに包まれてゐるかを知らないのか、
闇の中にあつて待ち、霜によつて護られて、
土壤は私の豫言的な叫びに應じて退き去り、

私は凡ての原理を正位におく爲めにその後ろに自分を横たへ、
私の生氣ある部分なる私の知識、それは萬物の意義なる「幸福」と調和を保ちながら、
「幸福」――（私の言葉を聞いたものは男であれ女であれ、今日唯今その幸福を求めて發足しろ。）

私の究極の價値を私はあなたに拒む、私がまことに何であるかを私は人に傳へるのを拒む、
世界を卷き包むとも、私を卷き包まうとは試みるな、
單にあなた方に眼を向けたゞけで、あなたの中核も小賢かしいものをも最も優れたものをも押しこめるのだ。

文字も言葉も私をいひ現はしはしない、
私をいひ現はすあらゆるものを私は自分の顏に持ち歩いてゐる。
一默したゞけで私は懷疑論者を面喰はせて見せる。

二六

今私は耳傾けるだけをしよう、
聽き得たところでこの歌を豐かにし、その響きを歌に貢ぎさせるために。

私は聞く、鳥の妙へな歌聲を、麥の成長するさゝやきを、焰の饒舌を、私の食物をたぎらせる小薪のはぜる音を、
私は聞く、私の好む響きを、人間の響きを、
私は聞く、凡ての響きが共に流れ、相交はり、融け合ひ、追ひ合ふのを、

都會の中のさゞめき、都會から起るさゞめき、晝と夜との物音、
話好きな若者達が親友へ話しかける聲々、食事中の勞働者の高笑ひ、
仲たがひのした友の間の怒りの低聲、病人のかすかな言葉の調子、
机にかたく手をかけて、蒼白い唇から死の宣告を傳へる裁判官、
波止場にもやはれた船から荷を卸す仲仕のかけ聲、錨をまき上げる人達の復唱、
半鐘の響き、火事の叫び、警鈴をならし紅燈をかゝげて走せ過ぎる蒸氣喞筒車と水管車とのをたけび、
二列になつて進む協會の行列の先頭に奏でる靜かな行進曲、
（彼等は或る柩を護りに行くのだ、旗竿の先を黒布で包んで。）

私は聞く、ヴァイオリンセロを（それは若きもの ゝ心の訴へだ）、
私は聞く、有鍵コルネットを、それは急がしく私の耳へと辷り入る、
それは私の胸から腹に物狂ほしくも甘々しい痛みを捲き起す。

私は聞く合唱を、それはグランドオペラだ、
おゝこれこそは音樂だ――これこそは私の心に叶ふ。

創世の如く偉大にも新鮮なテノールが私の心に滿ちる、
歌手のつぶらに開いた口から私は存分にそゝがれ滿たされる。

私は聞く、洗練されたソプラノを（彼女にそぐつた見事な藝術）、
オーケストラは天王星が飛行するよりも更にかびろく私を飛行させる、
それは私自身ですら思ひ設けなかつた熱情を私から摑み出す、
それは私を海上に送り出す、私は裸足で足ぶみし、兩脚は物うげな波に嘗められる、
私は烈しく怒つた霰に鞭打たれ氣息がつまる、
蜜のやうなモルフヒネの中に浸されて、私の氣管は假死にまで縊られる、
さうして遂に、私達が存在と呼ぶ謎のまた謎を感じ得るやうに支へ上げられる。

二七

兎に角形體を備へるといふこと、それは何だ、
（めぐりめぐつて私達、私達の凡ては行く、さうして必ず形體へと歸つて來る。）
若し何ものも更に發展する要素を持たぬとしたら、かたくなゝ殼の中にゐる蛤で澤山だらう。

私の持つのはかたくなゝ殼ではない、
私が動いて行かうが、止つてゐようが、私は體中にその時々の指導者を持つてゐる、
その指導者は凡ての物象を捕へ、私を通して無害にそれを導いてゆく。

たゞ單に私は指を動かし、押へ、感知する、さうして幸福だ、
私自身を私以外の誰かに接觸させることは堪へ得られぬほどのよろこびだ。

二八

これは單なる接觸か？　身ぶるひさせるまでに新しい本性を覺えさせるこれは、
焰と精氣とが私の血管の爲めに突進し、
私の末梢は私に逆らつてそれらを助力すべく延び集まり、
私の肉と血とは私自身とけぢめのつかなくなつたそのものを襲ふために電光を發し、
あらゆる點から、淫蕩な刺戟物は私の四肢を强直し、
私の心臟の乳房から拒まれた滴りをもしぼり取り、
私に對して思ふまゝに振舞ひ、拒絕を無みし、
たくらめるが如く私から最上のものを掠奪し、
私の衣類のボタンを外し、裸かな腰をかき抱き、
當惑した私に陽の光と放牧地との靜けさを浴せかけ、
無遠慮にも他の凡ての感覺を拂ひのけ、
それらは接觸の賄賂を以て他の感覺と交換し、私の尖端に來つて摩擦する、
何んの思ひやりもない、私の力が竭き果てようと、私が怒りを催さうと頓着しない、
それらの周圍の群れをも暫くの享樂に引き入れ、
かくて凡ては頂地に立つために力を合せて私を困らせる。

哨兵は私の他の凡ての部分を見棄てゝしまふ、

さうして赤き掠奪者に對して私を無援にする、
彼等は凡て頂地に來て見物し、私に反いた助力をする。

私は裏切者によつて棄て去られる、
私は狂ふが如く語り、己れを忘れる、誰でもない私そのものが最大の裏切者だ、
私は自身先づ頂地に急いだのだ、私自身の手が私をそこに運んだのだ。

汝、狂惡なる接觸よ、お前は何をしようといふのだ、私の氣息は喉につまる、
お前の水門を押し開けろ、お前はあまりといへばあまりな奴だ。

二九

愛慾にきそひ立つ盲目な接觸よ、鞘にかくれ、頭巾に包まれて、しかも鋭い歯を持つた接觸よ、
私から離れるのがお前をそれほど痛がらせるのか。

到着によつて跡づけられた離別、永久の債務に對する永久の償却、
豐かに降りしきる雨、さうしてその後の更に豐かな償ひ。

若芽が萠え出でゝ相むらがる、さうして生々と繁茂して邊石のほとりに立つ、
成熟してかゞやかしい、發揮された男性の風景。

三〇

凡ての眞理は凡てのもの丶中に潜んでゐる、
眞理はその出現を急ぎもせず拒みもしない、
それは外科醫の産科用鋏子を必要としない、
取るに足らぬものも私にとつては如何なるものとも同樣に大きい、
（接觸以下又は以上なものが何處にある）
理論や說教は人を肯かせない、
濕りをもつた夜氣はより深く私の魂に沁みる。

（凡ての男女にそれ自身を證明するものがそれだ、誰もが否定しないそのもの丶みがそれだ。

一瞬時及び私の一つの滴りが私の頭腦を決定する、
私は信ずる、濕つた土くれが愛人同志ともなり光明ともなるだらう、
さうして要約の又要約が男なり女なりの食物だ、
さうして絕頂とそこにある花が、男女が互ひの間に持つ感情そのものだ、
さうしてそれらはその教訓から無限に派生して遂に萬有創造を導き出し、
さうしてあらゆるものが私達を喜ばし、私達はまたそれらを喜ばす。

三一

私は信ずる、草の一葉は星々の運行の作用以下ではない、
さうして小蟻も同樣に完全だ、さうして砂の一粒も鷦鷯（みそさゞい）の卵も、
さうして青蛙は最高のものに取つても傑作であり得る、
さうして這ひからむ懸鉤子も天堂の廣間を飾るに足る、
さうして私の手の小つぽけな番ひも凡ての機械を見下し得る、
さうして押しひしやげた頭をして草喰む牝牛は如何なる彫像にも勝つてゐる、
さうして一匹の小鼠は無數の背信者をたじろがす程の不可思議だ。

私は片麻岩や、石炭や、根のつながつた苔や、果物や、穀物や、菜根と組合はさつてゐるのを發見する、
私の全身は四足獸や鳥類を以て塗りかためられてゐる、
さうして確かに私の後方にあるものから遠く離れてはゐるが、
欲する時にはいつでもそれを呼びもどすことが出來るのだ、
あせることも物恥ぢすることも無駄だ、
私の近づくのを拒んで火成岩がその古い火熱を放射しても無駄だ、
マストドンがそれ自身の粉碎した遺骨の下に隱れ去つても無駄だ、
種々の物象が遠く離れて立ち、思ひ／＼の外形に身づくろひしても無駄だ、
大洋が空洞の中に身をちゞめさうして怪物が底深く潛んでも無駄だ、

黑鳶が大空にゐどころを定めても無駄だ、
蛇が蔓草や倒れ木の間を這ひのがれても無駄だ、
麋が森の小徑遠く逃げのびても無駄だ、
鋭利な嘴を持つうみすゞめがラブラアドアの北遙かに翔つても無駄だ、
私はすばしこくそのあとにつゞく、私は崖の裂け目の中の巣にまでも登つてゆく。

三二

思ふに私は野獸となつてそれと共に生活することが出來さうだ、彼等はそれほど落ち着き拂つて自分に滿足してゐる、
私は立ち止つて永く／＼彼等を見守つてゐる。

彼等はその境遇にやきもきしたり泣きべそをかいたりはしない、
彼等は暗闇の中に眼をさまして自分の罪をなげきながら横はるやうなことはしない、
彼等は神に對する義務の討議などをして私を嘔吐せしめるやうなことはしない、
ひとりとして不滿足なものはない――ひとりとして所有慾の爲めに氣を狂はせるものはない、
ひとりとして他の前に跪くものはない――數千年も前に生きてゐた同種類のものに對しても、
ひとりとして、地球のどこに行つても、恭しくしたり、馬鹿稼ぎをするやうなものはない。

かくて彼等は私との關係を示す、さうして私はそれを受け入れる、
彼等は私に私の思ひ出を齎らす――彼等はその所有をもつて明かにその思ひ出を示す。

彼等がどこからその思ひ出を得たか私は知らない、
私も亦無劫の前にその境を經て來て、謬つてその思ひ出を取り落したのかも知れない、
私自身はその時も今も永久に動き進みつゝ、
常に、さうして速かに、無限であること、凡ての種類を含んでゐること、さうしてそれに類した思ひ出とを、より
　多く集め且つ示しつゝ、
私の思ひ出の送り手を度外視はしないが、
こゝに私の愛する一人を探し出し、兄弟のよしみを以て共に行く。

潑剌として私の愛撫に應へる一頭の牡馬の素晴らしい美しさ、
頭は額のところに高く、耳の間に廣く、
四肢は水々しく澤を持ち、尾は長く地を拂ひ、
眼はよい程に離れ合つて、したゝかものらしい光を放ち——耳は見事に形どられて思ふまゝに動く。

私の踵が彼の胴を抱く時、その鼻孔は廣がり、
思ふまゝ駈け廻らせてもとの地點に歸る時、その見事な四肢は歡びもて震へる。

私は然しお前を唯暫しのみ用ひて、やがて捨てるのだ、牡馬よ、
お前の步度に頼む必要は私にはない、私自身がそれよりも早く走り得るのだから、

たゞ佇立してゐる時でも坐つてゐる時でも、私は苦もなくお前を駈けぬけるのだから。

三二

空間と時間！　今こそ私は私の摸索してゐたものがまことだと知り得た、
草の上を彷ひ歩いた時、摸索してゐたもの、
唯ひとり寢床に横はつてゐた時、摸索してゐたもの、
さうして又薄れゆく曉の星の下に摸索してゐたものが。

私の繋索や底荷は無くなつた、私の肱は波の間に休らつてゐる、
私は山嶺の緣を攀ぢ、私の掌は大陸を被ふ、
私は私の幻想と連れだつ。

都會の正方形の家の傍ら、――木樵と共に宿る丸太小屋の中、
通行錢を徵收する道路の轍の跡に從つて、水無しの谷間や小川の川床に沿うて、
葱畑の除草をしながら、胡蘿蔔や防風草のうねを耕やしながら、草原を横切り、森の中に小徑を切り開きながら、
試掘しながら、金鑛を掘り出しながら、新しく購つた樹木を環狀に脫皮しながら、
熱砂に踝まで埋めて燒かれる思ひをしながら、淺い河を引き舟して下りながら、
或は豹が頭上の樹枝をあちこちと歩くところ、麋が獵師に向つて狂暴にふり向くところ、
がら／＼蛇が岩の上に長々と臥そべつて日向ぼつこをするところ、川獺が魚を捕へ喰んでゐるところ、

鰐魚が吹出物だらけのからだをして沼河のほとりに眠つてゐるところ、
黒熊が草の根や蜂蜜を求め歩いてゐるところ、河狸がその橈のやうな尾で泥をなすりつけてゐるところ、
生長する砂糖蔗のうへ、黄色く花咲く綿の木のうへ、濕つた低地にある稻田のうへ、
屋根の高い百姓家のうへ(そこには海扇形にそりかへつた屋根板があつて雨どひの中から細々と草が抽き出してゐる)、
西部地方の柿の樹のうへ、長い葉を持つた玉蜀黍のうへ、靑い花の細々とした亞麻草のうへ、
白くまた樺色な蕎麥のうへ(羽蟲や甲蟲がその外の蟲と共にそこにゐる)、
そよ風の來る每に漣を立てゝ影をおくライ麥の薄黑い綠のうへ、
注意深く身構へて巖がゝつた低い出鼻をたよつて山越えしつゝ、
草に埋もれた小徑を歩み、木藪の葉の間を穿ち進みつゝ、
森と麥畑との間にあつて、ほがらかに鳴く鶉、
蝙蝠の飛びまはる七月の夕暮、暗闇の中にぽたりと落ちる螢、
老樹の根から湧き立つて牧草地に流れてゆく小川、
烈しくその背皮をふるひ動かして蠅を逐ひ拂ふ家畜、
臺所につるしてあるチーズの搾り嚢、圍爐裡の石疊にまたがる薪架、梁から花綵のやうにたれ下る蛛の絲、
打ちおろす返鎚、風を切つてシリンダーを囘轉する印刷機、
その肋骨の中で恐ろしい激情もて鼓動する人間の心臟、
高く浮揚する梨形の風船(その中には私も浮揚して沈着に下界を眺めてゐる)、
滑索でたぐられる救命艦、凹んだ砂におかれた薄綠の卵を孵化する陽熱、
その子と共に游ぎ決してそれを捨てない牝鯨、

煙の長旌(ながはた)を長く後ろざまに殘す汽船、
黒い木の削(そ)ぎ片のやうな鰭を現はして水を切る鮫、
不知の海潮に乘つて行く半ば燒けた裝帆船、
貝殼は水にひたつた甲板に生じ、死者はその下にあつて朽ちつゝある、
聯隊の先頭にあたつて擔はれる星章の多い軍旗、長々と横はる島を經て近づくマンハツタン、
私の顏を越えて面被の如く朧なしてかゝるナイヤガラの下、
戸口の階段の上、戸外にある堅木の乘馬用踏臺の上、
競馬場の上、或は遠足や小踊を樂しみ、或はよいベースボールのゲームを樂しみ、
口汚たない罵りや、思ふまゝなあてこすりや、野蠻な舞踏や、飲酒やどよめきやで賑はふ女ぬきの祝宴、
蔦色の甘いかたまりを味つたり、稈莖で釀したてを吸ふサイダー釀造場、
そこにある赤い果實の一つ〳〵に接吻を送りたいやうな林檎の脫皮、
人員點呼にも、濱の園遊會にも、親しい友の寄り合ひにも、玉蜀黍の脫苞會にも、家の建て上げにも、
ものまね鳥がやさしい喉啼きや、囀啼きや、叫びや泣き聲をひゞかせるところ、
牧草堆が牧棲小屋の中に積まれるところ、乾燥した莖が散亂してゐるところ、種用の牡牛が小屋の中で待つてゐるところ、
種牛がその男性の業を果たすべく進み出るところ、種馬が牝馬に、牡鷄が牝鷄の上に乘り重なるところ、
犢が草ばむところ、鵞鳥がこせ〳〵した擧動で餌をあさるところ、
目路遙かにもさび亙つた大草原に夕陽の影が長まつてゆくところ、
遠く近く數平方哩の大きさに群がつて野牛の歩きまはるところ、

蜂鳥が見えがくれして飛ぶところ、壽命の長い白鳥が頸をうねらせるところ、
笑ひ鷗が人に似た笑ひを笑ひつゝ波打際を掠め飛ぶところ、
生え延びた庭園の草むらに半ば隱された灰白のベンチの上、蜜蜂の巢箱のならぶところ、
その頭をもたげ、地上に輪がたちになつて頸に縞のある鷓鴣がならぶところ、
アーチ形の墓場の門を潜つて葬式の棺が送られるところ、
垂氷の垂れ下つた樹木を持つた雪の荒地に冬の狼が吠えきそふところ、
眞夜中沼地のほとりに來て黃色いとさかを持つた鶴が小蟹をあさるところ、
游泳者や潜水者の飛沫が暑い午後に凉味を送るところ、
井戶のほとりの胡桃樹の枝頭に螽蟖がその淋しい歌笛をかなでるところ、
銀の葉脉を持つた葉に被はれたシトロンや胡瓜の畑を越えて、
獸類が鹽氣を甞めに來る場所や蜜柑園を越えて、或は圓錐形をなした樅の木の下で、
體操場を越えて、窓掖をおろした酒場を越えて、事務所或は公會堂を越えて、
同國人に喜びを感じ、異邦人に喜びを感じ、新しきものにも古きものにも喜びを感じ、
美しい女と同樣にあたり前な女にも喜びを感じ、
ボンネットを取り去り滑かにものいふ時、クエカー宗の女の人にも喜びを感じ、
石灰で塗り白めた教會の合唱の調子にも喜びを感じ、
汗みどろになつて眞劍に說教するメソディストの牧師にも喜びを感じ、天幕傳道會にも心から感激し、
午前全體をブロードウェーの飾り窓を眺めくらし、その厚い板ガラスに押しひしやげるまで鼻先きをつきつけ、
その午後は雲を打ち仰ぎながら、或は小道の上、海の汀沿ひを步み暮し、

私の左右の手を二人の友達の脇にまいて、さうして私は二人の眞中に、
日に燒けた沈默な草刈りの童と家に歸り(夕ぐれを彼は馬に乘つて私のあとに)、
人里遠く野獸の足跡或は皮鞋のあとをしらべ、
病院の床の傍らにあつて熱になやむ病人にレモネードをあてがつてやり、
寂寞の中に、棺に納められた死骸により添つて、燭火もてそれを熟視し、
小商ひと冒險のためにあらゆる港に航し、
誰にもゆづらず氣早やに夢中で近代人の群に交つてあせり歩き、
憎惡するものに對して怒りに燃え、刺し殺しても悔いぬまで狂暴となり、
眞夜中、わが裏庭にたゞ獨りゐて、我を忘れて遠く思ひを馳せ、
美しくもやさしい「神」の道伴れして古いユダヤの丘陵をさまよひ、
空間を馳せめぐり、大空と星々との間を馳せめぐり、
七つの衛星と宏大なその軌道(その直徑に於て八十萬哩)との間を馳せめぐり、
他のものと同じく火の球を放射しつゝ長く尾をひく彗星の間を馳せめぐり、
滿月なる母をその胎の中に宿す三日月といふ幼兒を持ち運び、
暴れ狂ひつゝ、享樂しつゝ、計畫しつゝ、愛溺しつゝ、警戒しつゝ、
取り戻しつゝ滿たしつゝ、現はれつゝ隱れつゝ、
夜となく晝となく私はかゝる道を歩むのだ。

私は諸天の果樹園を訪づれてそのみのりを見る、

成熟した無數を見る、さうして未成熟な無數を見る。

私は流動し搖容する魂の如くに飛びめぐる、
私の道は測鉛のとゞかぬ下を走つてゐる。

私は物質的であると非物質的であるとにかゝはらずわがものにする、
如何なる守衞も私を禁錮し得ない、如何なる法則も私を防ぎ得ない。

私はたゞ暫しのみ錨を下ろす。
私の報知船は絶えず航行し去り絶えず囘答を齎らして來る。

私は極地生の毛皮や海豹を獵りしに出かける、鋭い石突きの杖もてはざまを飛び越える、青白くさゝくれた危い氷塊に
　取りつきながら。

私は前檣樓に登る、
私は夜深く鳥の巢に自分のゐどころを構へる、
私は極氷洋を航海する、そこは十分に明るい、
澄み切つた空氣を通して私は驚くべき美を探りまはる、
宏大もない氷塊が私を過ぎてゆき、又私がそれを過ぎてゆく、眺望は眼に見ゆるかぎり朗かだ、

雪に被はれた山嶺が遙かなところに見える、私はそれに向つて私の空想を送る、
私達はやがてその戰鬪に加はるべき戰場に近づいてゆく、
私達は大きな陣地の前衞を忍び〳〵に警戒しつゝ過ぎてゆく、
或は私達は、どこかの大きな廢都に場末から這入り込んでゆく、
その町數や崩れた建物の數は地球の上の凡ての都會を合したよりも更に大きい。

私は自由な仲間だ、私は侵入軍のたき火のそばで露營する、
私は花婿を寢床から驅り出して、自ら花嫁と枕を共にする、
私は夜もすがら私の腿と唇とに彼女を引きよせる。

私の聲は妻の聲だ、階段の手欄によつての叫び聲だ、
彼等は溺れて水の滴(したゝ)る良人の死體を擔ぎ上げる。

私は勇者の大きな心持を知つてゐる、
ありとあらゆる時代の勇氣を知つてゐる、
いかに小船の船長が、嵐にゆられ死に脅かされ、舵を失つて人々のむらがり騷ぐ難破船を見出し、
近々とより近づき、一インチも身じろぎせず、一ときも心をゆるがせにせず、
板の面に大きく白墨で「安心しろ、俺達はあなたを見棄てはしないから」と書き、
難破船の人々と共に苦しみ、その人々と密接し、――さうしてそれを放拋しようとはしなかつたか、

いかに彼等がとう〳〵濡れそぼつた人々を救助したか、
衣紋もくづれて取り亂した婦人達がその墓場なる難破船から救ひ上げられた時、どんな顏をしたか、
聲も立て得ず、老人のやうな顏になつた小兒や、助け出された病人や、口の鋭い、髭も剃らない荒くれ男達が、どんな
　顏をしてゐたか、……

その凡てを私は瞰み下す――いゝ味だ――私はそれが好きだ――それは私のものになる、
私は一人の男だ――私が苦しんだのだ――私がそこにゐたのだ。

殉教者の矜持と冷靜さ、
魔女として火あぶりの刑罰を受ける母、それを眺め入る彼女の子達、
犬に驅り立てられた奴隷が疾走に疲れはてゝ垣根に身を寄せ、喘ぎ、汗にまみれてゐる、
激痛が針のやうにその脚、その頸を刺す――惨らしい猪彈や小彈、
その人々を私は感ずる、さうして私はその人々だ。

私は驅り立てられる奴隷だ、私は犬に嚙みつかれて顏をゆがめる、
地獄と絕望とは私の上にある、はた〳〵と射手は發砲する、
私は垣根の欄を摑み握る、私の黑血は皮膚の汗にうすめられて地に滴たる、
私は雜草と石くれとの間に打倒れる、
騎者はいやがる馬に拍車をあてゝ私の身近かを乘りまはし、

遠くなつた私の耳に雜言を投げ、鞭の柄で激しく私の頭からかけてなぐりつける。

苦惱は私の着がへの一つだ、
私は傷いた人にどんな心持がすると尋ねる要はない、――私自身がその傷いた人となる、
杖によつて眺めやる時、その痛みはまざ〳〵と私に感ぜられるのだ。

私は肋骨を摧かれて散々になつた消防夫だ、
崩れ落ちた壁がその荒廢の中に私を葬る、
私は熱氣と煙とを吸ひ込む、――私は仲間のけたゝましい呼び聲を聞く、
私は彼等の鶴嘴やシャベルの鋭い音を、失ひかけた意識の中に聞く、
彼等は梁を取り除く、――さうして大事に私を擔ひ出す。

私は眞紅なシャツのまゝで夜氣の中に横たはる――限もない靜けさは私への爲めだ、
結局苦痛もなく私は横たはつてゐる、弱りはてゝはゐるがさうみじめではない、
私のまはりにある顏は凡て白く美しい――その頭は防火頭巾を脱いでゐる、
跪いてゐる群集は炬火の光の中にうすれてゆく。

距りにあるもの、死んだものが甦(よみがへ)つて來る、
彼等は日時計のやうに時を示し、或は私の手のやうに動き移る、――私が時計そのものだ。

私は老年の砲手だ――一つ攻城の時の話をしようか。
私は再びその場にゐるのだ。

再び皷手の早打ちの太皷の音、
再び攻めかけるカノン砲、臼砲、曲射砲、
再びそれに應じて敵の打ち出すカノン砲。

私も參加する――私は凡てを見且つ聞く、
叫び、罵り、雄たけび――的中した發射　對する喝采、
紅い滴りを殘しながら、靜かに通りすぎる死傷車、
間に合せの修繕をしながら、破損の個所を尋ね歩く工人、
裂け破れた屋根から落ちて來る擲彈――末廣がりの炸裂、
四肢といはず、頭といはず、石材といはず、木材といはず、鐵といはず、高く空中にけし飛ばされるその物音。
再びわが瀕死の指揮官の唇から漏れるうめき――彼は無性にその手をふり動かす、
彼は、血まみれの中から喘ぎ〳〵いふ、「俺にかまつてゐるな――かまへ――堡壘を。」

三四

こゝに一つ、幼ない時テキサスにあつて私が知り得たところを話さうか、
(私はアラモの陥落の話をするのではない、
アラモの陥落を談り得るものは一人も助からなかつた。
百五十人といふ人が今もアラモにあつて沈黙する死者なのだから。)
それは四百と十二人の若者が冷酷極まる虐殺に遇つたその物語だ。

退却しながら、彼等は行李を胸墻に代へて方陣を作つた、
彼等の九倍も人數の多い包圍軍から九百の生命を彼等はその前にかたづけてゐた、
彼等の隊長は傷き、その彈藥は盡き果てた、
彼等は名譽ある降伏の條件を得、文書と印とを受け取つた上で、その武器を解き、捕虜として歸還した。

彼等は騎馬隊の仲間の誇りだつた。
乘馬と、射擊と、歌と、食慾と、戀事にかけては無敵で、
こせ〳〵しないで、氣隨で、寬大で、勇敢で、美男で、誇り高くさうして人好きのする、
髭の多い、日にやけた人々で、寬潤な獵服をまとひ、
一人として三十を越したのはゐなかつた。

第二月曜日の朝、彼等は幾團(いくかたま)りかになつて引き出されて虐殺された——それはうらゝかな初夏のことだつた、
その仕事は五時頃から始つて八時に終つた。

一人として跪けとの命令に從つたものはなかつた、
或る者は無益ながら狂氣のやうに突進を試みた——或る者は勢ひ猛にまじろぎもせず立つてゐた、
數人は頭部や胸部を射ぬかれて立ちどころに倒れた——生者も死者も諸共に横はつた、
片輪にされたもの、斬りさいなまれたものは泥土の中にのたうつた——殘りの受刑者は彼等を目撃したのだ、
或る者は半死半生のまゝ匍匐して遁れようと試みた、それらの人は銃劍で他愛なくしとめられ、或は銃床で打ちのめされた、
十七にもならない一少年は殺害者に摑みかゝつたが、更に二人の殺害者がその一人を救ひに來た、
さうして三人ともその少年の血にまみれて滅多殺しにされた。

十一時に死體の燒棄てがはじまつた、
これが四百と十二人の若者の虐殺の物語である。

三五

あなたは古風な海戰の話を聞きたいと思ふか、
月と星との光の下で誰が勝利者であつたかを知りたいと思ふか、
船乘りであつた私の祖母の父が私に話した物語を語らうか。

全く俺達の敵は船にかけてはしれものだつた(と彼は語り出した)。

彼等は佛頂面な英國生れのしたゝか者で――類のない頑固さ、生眞面目さ、あとにも先きにもあんなのはあるまい、」
暗らみゆく夕暮れ方を、すさまじい勢で、俺達を縱射しながら近づいて來た。

俺達は彼奴に逼り寄つた――檣桁は互ひにからまり合ひ――大砲は觸れ合つた、
こちらの船長は手を動かして指揮をした。

俺達は十八封度もあらうといふ大彈を吃水の下に受けた、
こちらの下甲板では二門の大きな砲が第一發で粉々に破裂して、まはりにゐた者どもを殺しておいて、天井をぶち拔いて吹き上げた。

日沒時の戰鬪、夜陰の戰鬪、
夜がまはつて十時、滿月がのぼり切つた頃、浸水は度を增す五尺が程といふ報告だ、
指揮官は舷尾に閉ぢこめておいた捕虜を放つて自分の始末を自分でさせた。

火藥庫への往復は步哨がついて禁止した、
見慣れない顏が數多く出て來たので、全く氣がゆるせなくなつてしまつたのだ。

俺達の乘つてゐる巡邏船は火を失した、
助命を求めたらといふ奴も出來た、

艦旗がやられはしないか、さうして敗け戰になつたのではないかと。
ところが俺は暢氣に笑つてゐた、俺の小つぽけな船長の聲が聞こえたからだ、
彼は落ち着きはらつて叫ぶ「俺達は打撃を與へてはゐない、こつちの戰爭仕事は始つたばかりだぞ」と。

大砲は三門が役にたつだけだつた、
一門は船長自身が敵の主檣眼がけて指揮してゐた、
榴彈と散彈とをしこたま備へた二門は彼の小銃を沈默させて、その甲板を一掃した。

檣樓、殊に主檣の檣樓だけがこの小砲臺の砲火を援助した、
さうして戰爭の間雄々しくも持ちこたへた。

氣息をつく暇もない、
浸水は喞筒位では間に合はず――火災は火藥庫の方へと喰ひこんでゆく。

喞筒の一つが射ぬかれた――段々と船は沈むなと誰も彼も思ひはじめた。

落ち着きはらつて小柄な船長は立つ、
少しも騷がず――その聲は高くもなく低くもなく、その眼は宣戰の燈火よりも一層强い光を俺達に與へた。
眞夜中近く、あの月の光の下で、彼奴等はとう〳〵俺達に降伏した。

三六

遠く、靜かに、深夜はひろがつてゐる、
二つの大きな空ろ船が動きもせずに闇の胸の上に、
打ち貫かれた俺達の船はそろ〳〵と沈みながら——俺達が征服した船へ乘りかへる準備の中に、
後甲板に立つ船長は、白布のやうに蒼ざめた顏で冷然と命令を下してゐる、
その側には、船長室の給仕だつた少年の死骸、
長い白髮と、大事に捲きちゞらせた鬚を持つた一人の老船員の死顏、
ある限りの手を盡した甲斐もなく、火焔は高みにも低みにも明滅し、
まだ仕事に堪へる二三の士官の嗄がれた聲、
積み重つた目茶苦茶な死骸、あちこちに散らばつた死骸——檣や上甲板にはたゝきつけられた人肉の切れつぱし、
綱の斷片、繩のかたまり、波になだめられてのかすかな船のゆらぎ、
眞黑な無情な大砲、火藥包のつかひかす、强い香り、海風のやさしい微動、海沿ひにある蘆類や野の香ひ、生き殘つた
　人々に言ひ殘される遺言の言葉、
外科醫のナイフの鋭い響き、その鋸の刃のはぎしり、フイーズ、クラック、流れ出る血汐の瀧つせ、短い無殘な叫び、
さうして長く、鈍く、細り行くうめき、こんな鹽梅だつた——取りかへしのつかないことだつた。

三七

貴樣、怠け散らしてゐる看守共、貴樣の武器に氣をくばれ、

無理に戸を押し開けて彼等は群がつて來る、私は夢中だ。
私は犯罪者や苦惱する者の凡ての狀態を體驗する、
他の人と同じ形で牢獄にゐる私自身を見る、
さうして鈍い絕え間ない痛苦を感ずる。

私の爲めに四人の看守は短銃を肩にして警戒をする、
朝につれ出されて夜々幽閉されるのは私だ。

手錠をかけられた暴動者が牢獄に步むところには、私も亦その人と手錠を連ね、その傍らにあつて牢獄を步む、
(私はそこにあつて最もしほたれて最も沈默する一人だ、さうして引きつゝた私の唇には憂愁が宿る。)

若者が竊盜犯で捕縛されたところには、私は必ず出かけて行つて裁判を受け宣告を聞く。

虎疫にかゝつたものが最後の呼吸をして橫はつてゐるところには、私も最後の呼吸をして橫はつてゐる、
私の顏は蒼白く、――私の筋肉はよれねぢれ――人々は私を避け遠ざける。

乞ひ求める者は私に於て彼等自身を體現し、私は彼等に自身を體現する、
私は帽子をさし出し、恥かしげに坐して乞ひ求める。

三八

十分だ！　十分だ！　十分だ！
何かしら私は血迷つてゐた、後ろに退がれ、
締めつけられた私の頭、眠り、夢、痴呆のかなたに少しばかりの休みを與へてくれ、
私はいつもの誤謬に陥りかけてゐたのを發見する。

私が罵るものや蔑むものを忘れることが出來たらなあ、
私が下りやまぬ涙を忘れ、大頭棒や鐵鎚の打擊を忘れることが出來たらなあ、
私が別な眼で私自身の磔刑や血に染まつた冠りものを見ることが出來たらなあ。

今私は思ひ出す、
私は滞らした斷片を拾ひ上げる、
岩の墓はその中に、或はどの墓の中にも、任かされてあつたものを増加する、
死屍は起ち上り、深傷は癒やされ、つめものは私から離れてゆく。

私は至上の力を以て力づけられて隊をなして進み出る、平等な無終の行列の一つとして、
私達は奥地にも海岸にもゆく、さうして凡ての境界を乘り越す、
私達の敏速な布令は全地球の上に赴き、

私達の帽子にかざす花は幾千年かけて咲き出たものだ。

選ばれたるものよ、私はあなたに挨拶する、進み出られよ、
あなたの註釋を續けよ、あなたの質疑を續けよ。

三九

友誼深くわだかまりのない蠻人、彼は何人(なんぴと)だ、
彼は文明の到來を待つてゐるのか、或はそれを乘り越えて咀嚼してゐるのか。

彼は戶外で育てられた西南洲の人なのか、彼はカナダ人なのか、
彼れはミシシッピー地方の人なのか、アイオアか、オレゴンか、カリフォルニヤか、
山獄地方か、大草原の生活か、森林生活か、或は海から來た船員か。

彼が何處に行かうと、凡ての男女は彼を受け入れ彼を所望する、
彼等は彼が彼等を好み、彼等に觸れ、彼等に語り、彼等と共にあらんことを所望する。

飛雪の如く掟てなき振舞ひ、草の如く單純な言葉、櫛(くしけづ)らぬ頭、笑ひ、純朴さ、
徐ろに運ぶ脚、ありきたりな顏容、ありきたりな態度と放射、
それらは彼の指先きから新しい形で滴り、

それらは彼の身體と呼吸の匂の中に浮游し、彼の瞥視から飛び出して來る。

四〇

燿かしい太陽の光よ、私はそれに浴する必要はない――光被せよ、
お前は單に表面だけを照らさうとする、私は表面といはず深みにも這入り込むのだ。

地球よ、お前は私の手から何ものをか求めてゐるやうに見える、
いへ、昔ながらの地瘤、お前は何を要するのだ。

男よ、或は女よ、どれ程あなたを好いてゐるかを私は告げたいと思ふ、けれどもそれは言葉に餘る、
又何が私の衷にあり、何があなたの衷にあるかを告げたいと思ふ、けれどもそれは言葉に餘る、
又私の抱いてゐるあの憬れ――晝夜をわかたぬ私の動悸を告げたいと思ふが……

見よ、私は談義はしない、又小つぽけな慈善もしない、
私が與へる時には私自身を與へるのだ。

そこに、力萎えて、膝節のゆるんだあなたよ、
襟卷で包んだあなたの口を開けろ、私があなたの內部に元氣を吹きこんでやるから、
掌を開け、さうして衣囊の垂れをあげろ、
私は拒まれてはゐない――私は迫る――私は分與し得るものを潤澤に貯へてゐる、

さうして私のものはどんなのでもそれを授ける。

私はあなたが誰であるかを問はない、それは私には大切なことではない、
あなたは何事をもなし得ない、何ものでもあり得ない、然し私が意欲する以上は、あなたをひつくるめて意欲するのだ。

綿畑の勞働者或は便所の掃除人の方に私は倚りかゝつてゆく、
彼の右の頰に私は親しい接吻を與へる、
さうして私の心の奧で、決して彼を見棄てまいと誓ふ。

子を生むに適した女達に私は更に肥つて更に元氣のよい子種を植ゑつける、
(私はこの日際立つて豪放な共和國の要素を注ぎこみつゝあるのだ。)

臨終の人があつたら誰彼を問はずそこに私は駈けつけて戶の握り手をひねる、
寢臺のすその方に夜着を折りかへす、
醫師と僧侶とをかへらしてしまふ。

私は下りゆく人をひつつかむ、さうして強烈な意志を以て彼を引き上げる、
おゝ失望するものよ、こゝに私の頸があるぞ、
神かけて！　あなたは下つて行つてはいけない、

あなたの全身の重みをかけて、いゝから私にぶらさがれ。

私は宏大もない氣息を以てあなたを膨らがしてやる――私はあなたを浮び上らせる、
武裝した軍勢を以てこの家の凡ての部屋を充ち滿たせる、
私を愛する人々、墳墓を無視する人々で。

眠れ、私と彼等とは夜もすがら守護をするから、
疑ふな――死はあなたの上に指もおくことをなし得ないだらうから、
私はあなたを抱擁する、さうしてこれからはあなたを私一人のものにする、
さうしてあなたが朝になつて起き出ると、私のいつたことが、いつた通りになつてゐるのを知るだらう。

四一

仰向けになつて片息をつく病人に救助を齎らすものは私だ、
さうして雄々しく屹立する人々に對しても私はなほ必要な助力を送るのだ。

私は宇宙について如何いふことが云はれたかを聞いた、
幾千年にかけてそれを聞き又それを聞いた、
詮じつめたところ、それは中庸を得るといふことだつた――然しそれだけだらうか。

增大しつゝ應用しつゝ私は來る、
物慣れて注意深い行商をしよつぱなから高値で打ち敗かしながら、
自らヱホバの正確な面積を計りながら、
クロノスや、その息子のヂユスや、そのまた息子のハーキユリースを石版印刷にしながら、
オリシス、イシス、ベーラス、ブラマ、ブダの下圖を買ひながら、
私のポートフォリオの中にマニトをとぢつけずにおき、一枚の紙の上にはアラアを、印刷して十字像を、
オーディンと恐ろしい顏のメキシトリとその他の偶像や畫像と共に、
それらのものを凡て一錢もかけ値のない相當な値打ちで計り、
それらのものが生きてゐて、銘々にかなつた仕事をし遂げたことを許し、
(以下二行不明、乞敎示)

私自身の裏によりよきものを滿たす爲めに、走り描きの神のスケッチを受け入れ、私の逢ふ男又は女にも自由にそれを
　授け與へ、
家を建てつゝある大工の中に神に等しいもの、或はそれ以上のものを發見し、
袖をまくり上げて、木槌や鑿を振ふ彼の爲めにより高い要求を尤もとし、
特別な天啓なるものに故障もつけず、私の手の甲にあるちゞれた細毛或はその一本の毛をも如何なる天啓にも劣らない
　不思議なものと考へつゝ。
蒸汽喞筒と繩梯子に倚る若者等は私の眼には古への戰ひに於ける神々以下ではなく、
彼等の聲が崩壞の激音の中にも際立つて響くのに注意し、

彼等の頑丈な肢體が炭になる程燒け進んだ木ずりを突きぬけ、その白い額が火焔の中でも傷けられず安全なのに注意する。
如何なる人の爲めにも仲裁する機械工の細君、その胸に赤坊が倚りついて乳を飮んでゐる傍らには、
シャツの胸を開けひろげた三人の强健な天使によつて用ひられ、一列になつて音を立てながら收穫する大鎌、
赤毛で齒なみの惡い馬丁は過去と未來との罪の償ひをし、
その所有物の全部を賣り、その兄弟の爲めに辯護人を賴む爲めに徒歩で旅し、貨幣贋造の科で裁かれる間も兄弟の側を離れない、
私の身のまはりの平方ロッドに存分に散布されたもの丶凡て、それでも平方ロッドは滿たされてはゐない、
牡牛や羽蟲は嘗て半分ほども十分に崇拜されてはゐない、
糞尿や塵芥は夢想されてゐたよりも更に嘆美すべきものだ、
超自然といふことも驚くには足らない、私自身が最高者の一人たる時がやがて來る、
最上者と同様の善事を同様に偉大になすであらう時が私の爲めに用意されてゐる、
私の睾丸にかけて！ 既に一箇の創造者となり、
今こ丶に私自身を捕捉しがたい影の子宮の中に置く。

四二

群衆の眞たゞ中の叫び、
私自身の聲、遠く達し決定的に朗らかな。

來れ、私の子達よ、
來れ、私の少年達と少女達、私の婦達、家族と身内のもの達、
今演伎者はその神經を働かす、彼は彼の衷なる小笛にその序曲を奏し終つたのだ。

氣樂に書かれありのすさびに觸れられた絃よ――私はお前のクライマックスと終曲との單調な調子を感ずる。

私の頭は私の頸の上に廻轉する、
音樂は奏で出されろ、然しオルガンからではない、
人々は私の周圍にゐる、然し彼等は私の家庭のものではない。

常に堅固な浮沈のない大地、
常に喰らふもの及び飲むもの、常に日出ならびに日沒、常に大氣と小休みなき潮、
常に私自身と私の隣人、生き〳〵として、人の惡い、現實の、
常に昔ながらの解きがたい疑問、常に荊に傷けれた拇指、渇望と渇欲との呼氣、
常に人の氣に逆らふものゝ怒號の聲、私達が狡猾な奴の隱れ場を見出してそれを連れて來るまで續くところの、
常に愛、常にすゝり泣く生命の液體、
常に顎の下の繃帶、常に死の柩臺。

こゝかしこには、頭腦が言葉どほりに取り上げる口腹の慾を滿たさんが爲めに、小錢を眼の先きに描きながら歩きまは

り、
入場券を買つたり、受けたり、賣つたりしながら、饗宴には一度も足を踏み入れず、
多くのものは汗をかき、地を耕やし、穀物の實をふるひ、さうしてその代償として藁屑を受け、
少數のものは懷ろ手で所有し、しかも彼等は絶えず小麥を要求する。

これは都會だ、さうして私はその市民の一人だ、
他の人に興味あらしめるものは私をも興がらせる、例へば政治、戰爭、市場、新聞、學校、
市長と市會、銀行、關稅、汽船、工場、倉庫、商店、不動産と動産。

夥しい小さな矮人が燕尾服にカラーを着けて跳ねまはる、
私は彼等が何ものであるかゞ解つてゐる（彼等はたしかに蟲けらでも蚤でもない）、
私は私の複製であるものを承認する、最も弱いもの、最も淺薄なものが私について廻つてゐる、
私のいふことと爲すことは彼等も持つてゐる、
私の心に醸（かも）されるあらゆる思想は彼等の心にも醸されてゐる。

私は完全に私の自分勝手なのを知つてゐる、
私の雜食的な詩句を知りさうして少しでもそれを隱し立てして書いてはならぬのだ。

印刷され製本されたこの書物——然し印刷屋と印刷所の小僧とは？
上手に撮（と）れた寫眞——然しお前に近く腕に抱かれた細君或は友達は？

鐵で裝はれ、砲塔に大砲を持つた黑色の船——然し船長と機關士との勇氣は？
家の內には皿類や、道具や、家具——然し主人夫人、及び彼等の眼の監視は？
かしこなる大空——しかもこゝ或は隣家、或は往來の向側の家は？
歷史の中の聖者の賢人——しかもあなた自身は？
說教、教條、神學——しかし不測なる人間の頭腦は？
さうして道理とは何、愛とは何、さうして生命とは何ものだ？

四三

僧侶よ、時と處とを選ばず、私はあなたを輕蔑しはしない、
私の信仰は最大の信仰であり最小の信仰である、
古代と近代との敬神を併せ、さうして古代と近代との信仰の間にある、
五千年の後再びこの地球の上に現はれることを信じ、
神託による應答を期待し、神々を崇め、太陽を禮拜し、
最初に眼に觸れた岩や木株から偶像神を造り、魔術の輪の中で杖もて祈禱を行ひ、
喇嘛僧や波羅門僧が偶像の爲めに獻燈する時それを手傳ひ、
生殖器崇拜の行列に加はつて市中を舞ひ歩き、
赤脚仙(ジムノソフヒト)となり森林の中にあつて熱中莊嚴し、
髑髏杯から蜜柑酒を酌み、シスタラやヴェダを讃嘆し、コーランをも心にとゞめ、
石片や小刀から滴つた凝血もて點綴された蕃神殿を歩み、蛇皮鼓をたゝき、

四福音書を受け入れ、十字架にかけられた彼を受け入れてその神性をたしかに認め、
彌撒に跪き、淸教徒の祈禱に立ち上り、或は忍耐して食堂の椅子に坐り、
狂氣じみた危機にあつて放言し泡を吹き、或は死ねるが如く靈の私を起ち上らせるのを待ち、
舖道と大地の上を眺め渡し、或は舖道と大地の外を眺め渡し、
輪廻の輪廻を取り結ぶものに私は屬するのだ。

かの求心的で又遠心的なる群團の一つを私は廻轉させ、さうして旅立つ前に命令を殘しておく人のやうに語る。

遲鈍にして擯斥されるところの懷疑者、
移り氣、不機嫌、氣欝、憤怒、氣取り、落膽、不信仰、
私はお前達のどれをも知つてゐる、私は苛責と疑惑と絕望と不信心の海原を知つてゐる。

何と鰈（かれひ）が飛び跳ねるよ、
痙攣と血潮の噴出に伴つて何と彼等が電光の如く急激に身をちゞめるよ。

平和あれ、懷疑者と不機嫌な鬱氣やみの血みどろな鰈よ、
私は誰にも劣らずあなた達の中に位置を占めるのだ、
過去はあなた達をも私をも凡ての人をも押し出した、それは全く同樣だ、
さうして未だ試みられず、後試みらるべきものは、あなた達にとつても、私にとつても、凡ての人に取つても、それは全

く同樣だ。

私は今後でなければ試みられないものが何んであるかを知らない、
然し私は、その機が來れば十分に役に立ち、さうして失敗に終らないのを知つてゐる。

過ぎ去るものは凡て商量される、止るものは凡て商量される、一人といへどもそれに漏れることは出來ない。

死んで葬られた青年も商量されずにはゐない、
死んでその男の側に葬られた若い女も、
戸の隙間から覗いたと思ふと姿を隱してそのまゝ再び影を見せなくなつた嬰兒も、
目あてもなく生活し、それを水腫よりも更に苦痛に感じてゐる老人も、
ラム酒と惡疾の爲めさいなまれて貧民院にあるその人も、
虐殺され或は難破した無數の人々も、さうして人間の屑と云はれる野蠻なクプー人も、
食物をすべり込ませる爲めに口を開いたまゝ浮き漂ふアミーバも、
地球の中のいかなるものも、或は地球の最も古い墓の下にあるいかなるものも、
幾萬の天體にあるいかなるものも、或は天體に棲息する無數のものも、
現在も、或はありとあらゆる最微の無用物も商量されないものはない。

四四

今こそ自身を說明すべき時が來た――さあ起ち上がらう。

私は既知の事柄をかなぐり捨てる、
さうして私と一緒に凡ての男女を未知の境へ送り出す。

時計は瞬間を指し示す――然しながら永遠は何を指し示すと思ふか。

私達は既に業に無限の冬と夏とを使ひ盡した、しかもその先に無限の夏冬があり、
その先にもたほそれの無限がある。

誕生と共に私達は豐滿と多趣とを稟けた、
他の誕生は更に豐滿と多趣とを齎らすだらう。

私は一つのものをより偉大で、一つのものをより劣小だと呼ぶことをしない、
その時と處とを得たものはいかなるものとも同等である。

人類はあなたに對して殺伐で嫉妬深かつたか、わが兄弟姉妹よ、
私はそれをお氣の毒に思ふ、人類は私に對しては殺伐でも嫉妬深くもなかつた、
凡てが私には柔和だつた――私はくよくよしながら勘定はしてゐない。
(私と嗟嘆とは何のかゝはりがあらうぞ。)

私は成就されたものゝいやはてゞあり、さうして現はれ來るべきものゝいやさきである。

私の脚は階梯の頂點の又頂點を踏む、
一階毎に一群の時代が、幾階かの間に數群の時代が、
その凡て下にあるものを私は確かに旅して來、しかもなほ登りに登る。

階を登るごとに背後に殘した幻影は首を伏せる、
遙か下方にあたつて、私は絕大な最初の無を見る――あすこにさへ私がゐたのを私は知つてゐる。
私は人に現はれずに常に待つてゐた、さうして昏睡の霧の裡に眠つてゐた、
さうして私の時の熟するのを待つた、さうして毒氣を吐く炭素からは害を被らずにゐた。

長い間私は强く抱きすくめられてゐた――長い、長い間。

私の爲めの準備は宏大もないものだつた、
私を介抱した腕は忠實で叮嚀だつた。

快活な舟子のやうに、ひた漕ぎに漕いで、久遠の「時間」は私の搖籃を船渡しした、
私に餘地をつくる爲めに星々はその軌道をまげて動いた、
さうして私を抱くべきものを物色する爲めの光を送つてよこした。

私が母から生れ出る前、永い時代が私を導いた、
私の胚種は決して生氣を失はなかつた——何者もそれを壓倒することが出來なかつた。

私の胚種の爲めに星雲は一つの球體に凝結し、
地層は徐ろに時をかけて他の地層の上に積み重なり、
廣大な植物はそれに滋養分を供給し、
巨大な原始動物はそれをその口に運んで、大事にかけて地上においた。

凡ての力が私を完成しよろこばす爲めに止む時なく用ひられたのだ、
さうしてこの地點に、今こそ私は私の健全な魂と共に立つのだ。

四五

おゝ靑春のかけ橋よ、絶えず推進する彈力よ、
おゝ成年よ、落ちついて、華やかで、さうして充實した。

私の愛人達は私を息づまらせる、
私の脣に叢がり、私の皮膚の氣孔に密集し、
街頭や公會堂で私に身をすり寄せ、夜には裸體で私に來り、
晝には、河岸の岩からオーイと叫びかけ、私の頭上に搖り動きさゞめき合ひ、

花床や、葡萄の木蔭や、入り組んだ下草から私の名を呼び、
私の生活の各瞬間をかゞやかし、
やさしいなだめの接吻で私の身體を接吻し、
しとやかに彼等の心臟から手一杯を取り出してそれを私のものとして與へる。

莊嚴に現はれ出る老年期、おゝ死に近づきゆく齡の好もしく名狀しがたい優美さ。

あらゆる狀態は單にそれ自身を宣明するばかりでなく、その後に發生するもの、又はそれ自身から發生するものを宣明する、
さうして暗黑なかの寂滅も他の凡てと同樣に宣明する。

夜、天窓を開いて、私は遠く散布する星彙を見る、
私が出來るだけ高く見きはめるに從つて增加するその凡てのものも、更に遠い星彙の外緣に觸れるに過ぎないのだ。

廣く更に廣く星彙は擴がり、擴大し、常に擴大し、
外方に更に外方に、さうして永遠に外方に。

わが太陽は彼の太陽を有し、その周圍を從順に囘旋する、
彼はその仲間と更に勝れた軌道の群れとを繫ぎ結ぶ。

さうしてより偉大な彙群が現はれ、その中にあつては最大の彙群と思はれたものも點の如く小さい。

そこには止度（とめど）はない、決して止度はあり得ない、
若し私と、あなたと、星々と、さうして星々の內外にある凡てのものとが、この瞬間に色彩もない浮游物に還元したとしても、結局それは詮ないことだ、
私達は必ず私達が今立つてゐるやうなものを再び創（つく）り出すだらうから、
さうして必ず以前通りの遠さまで進むから、それからまた遠く更に遠く。

無限といつてもいゝ面積、それにもまさる大きさの平方リーグも宇宙のかけ橋を危くし、又はそれを不安にさせることは出來ない、
それらのものも部分に過ぎない、單なる一部分に過ぎないのだから。

思ひきり遠く眺めて見ても、その外になほ無限な空間がある、
思ひきり多く數へて見ても、そのまはりにはなほ無限の時間がある。

私の密會の場所は定められてゐる、それは確かなことだ、
天帝はそこにゐるだらう、さうして完全な關係を彼に對して造り得た私が來るのを待つてゐるだらう、
偉大なる「仲間」、私が憬（あこが）れてゐるまことの愛人はそこにゐるだらう。」

四六

私は私が最上の時間と空間とに住むのを知る、而して決して私を知り拔いた人は嘗てなく、而して決してないのを知る。

私は不休の旅を旅するものだ(來て聞けよ、凡ての人よ)、
私の目印は雨除け外套と、堅固な靴と、森の中から切り出した節杖だ、
私の友は一人として私の椅子にくつろいで坐ることが出來ない、
私には椅子もない、敎會もない、哲學もない、
私はいかなる人をも饗宴と圖書館と取引所とに連れてゆかない、
けれども讀者の男なり女なりの凡てを一つの丘の上に連れてゆく、
私の左の手を腰のあたりに卷きそへながら、
私の右の手を大陸の風光と大道とを指しながら。

私も、又いかなる他の人もあなたの爲めにその道を旅することは出來ない、
あなた自らでそれを旅しなければならない。

それは遠くはない、そこに行き着くことが出來る、
恐らくあなたは生れると共にその途上にあつてそのことを知らなかつたのだ、
恐らく大道は陸の上、水の上、到るところにあるだらう。

あなたの衣類を羽織れ愛する息子よ、さうして私は私のを羽織るだらう、さうして連れ立つて急ぎ進まうではないか、
驚異すべき都會や自由な國々を進み行くまゝに誘ひ伴はう。

若しあなたが疲れたら、私に二人分の荷をよこせ、さうしてあなたの手のひらを私の腰にあづけろ、
さうしてそのうちには、あなたが私に對して同じ勤めを果すはた時が來るだらう、
私達が發足した以上は、決して再び横になりはしないのだから。

この日黎明前、私は丘の上に登り、諸天を仰ぎ見て、
私の靈に云つた、「私達がこれらの諸天、及びその中にある凡てのものゝ喜びと智慧とを抱有することが出來たら、その
　時私達は飽き足り滿ち足るだらうか。」
私の靈は云つた、「否、私達がその高所を夷らたひらかにするや否や、それを過ぎ越えて更に躍進するのみだ」と。

あなたも亦私に問ひかける、さうして私はそれを聞く、
私は答へよう、私はそれに答へることが出來ないと――あなたは自身で答へなければならないのだ。

暫くそこに坐れ、愛する息子よ、
こゝにビスケットがあるから食へ、さうしてこゝに飲む爲めに牛乳もある。
然しあなたが眠り、さうして快い衣服で活氣づくや否や、私はあなたに「さよなら」の接吻を與へる、さうしてこゝか
　ら出發せよとあなたの爲めに門を開くのだ。

十分長く、あなたはさげすむべき夢を見續けてゐた、

今私はあなたの眼から眼脂を洗ひおとす、
あなたは光の眩惑と、あなたの生活の各瞬間とに慣れなければならない。
長い間、あなたは岸邊の木材につかまつて、恐る〳〵水を渉つてゐた、
今私はあなたが勇悍な游泳者であることを要求する、
海のたゞ中に飛びこんで、再び浮き上つて、頭で私に合圖をし、叫び聲を揚げ、から〳〵と笑ひながら髮ふり亂して。

四七

私は運動家の敎師だ、
私の傍にあつて私のより更に廣い胸をあらはにして見せるものは、私自身の胸の廣さを證明してゐるものだ、
敎師を撥無する爲めに私のスタイルに從つて學習したものは私のスタイルを最も尊敬するものだ。

私の愛する少年、その人は他から力を引き出して成年になるのではない、然しながら彼自身の權利によつてだ、
迎合や恐怖の故に有德たらんよりは寧ろ不德である人だ、
彼の愛人を愛し、彼の燒肉を嗜み、
報いられない戀や輕侮や、鋭い刃物の傷よりも彼を痛め、
乘馬にも、戰鬪にも、射擊にも、航海にも、第一人者で、歌も歌ひ、バンヂョウも彈じ、
石鹼を塗りこくる奴等の凡てよりも、切り傷や、髭や、疱痕でぶつ〳〵になつた顏を好み、
太陽を避けるやうな奴等よりも十分日燒けのしたのを好むその人だ。

私は私からはぐれ去れと敎へるが、誰が私からはぐれ去ることが出來よう、
あなたが誰であらうとたつた今から私はそのあとをつける、
あなたが私を理解しない限りは私の言葉はあなたの耳をむづつかせる。

以上のことを一弗を得んが爲めに云ふのではない、或は舟を待つまの時間つぶしに云ふのでもない、
(あなた自身が私同様のことをいつてゐるのだ、私はあなたの舌の役目をしてゐるのだ、
あなたの口の中にとぢられてゐたもの、それが私にあつてほごれ始めたのだ。)

私は誓ふ、私は二度と再び家の中で愛や死を語らないだらう、
さうして私は誓ふ、私は決して私自身を飜譯することをしないだらう、外氣の中にあつて窃かに私と止まる男或は女の
外には。

若しあなたが私を理解しようと思つたら、高みの上から岸邊に行け、
眼の先きの蚋は一つの解說となる、波の一しづく或は動搖は鍵になる、
大槌や、車や、手鋸やは私の言葉に合力する。

日よけをした部屋や學校は私と交渉を持つ譯には行かない
亂暴者や小さな小兒の方が遙かに交渉を持つ。

若い機械工は最も私に近いものだ、彼はよく私を知つてゐる、
斧と水甕とを携へてゐる木樵は一日中でも私を手放さない、
畑を耕やしてゐる若い農夫は私の聲の響きを快く感ずる、
帆走る船の中には私の言葉も帆走り、私は漁夫や水夫と共にあつて彼等を愛する。

宿營し或は進軍する兵士は私のものだ、
戰鬪の起りさうな前の晩に多くの人は私を求める、さうして私はその人々に無駄をさせない、
その嚴肅な夜に（それが彼等に取つての最後の夜かも知れない）私を知つてゐる人々は私を求める。

獵師がたゞ一人毛布に包まれて眠つてゐる時、私は顏をその顏にすり附ける、
私のことを考へてゐる御者は、彼の荷馬車の動搖を心にかけない、
若き及び老いたる母は私を理解する、
娘と妻とは暫く針の手を休めて自分が何所にゐるのかを忘れ、
彼等と凡ての人とは私が彼等に語つたところを思ひ起す。

四八

私は魂が肉體以上のものではないと云つた、
さうして私はいふ肉體も亦魂以上のものではないと、
さうしていかなるものも、神すらも、一人のものに取つては彼自身より偉大ではない、

また彼の行程を同情なくして歩くものは、經帷子を着て彼自身の葬式に歩いてゆくものだ、
また私であれあなたであれ、十錢だけも懷中しないで土地を選り取りに買ふことが出來る、
また一眼見ること、植木鉢の中の荳を示すこと、それだけで凡ての時代の學問を見返すことが出來る、
また如何なる商賣であれ仕事であれ、若者が從事して英雄となり得ないものはない、
また廻轉する宇宙の轂となり得ない程やくざなものは一つとしてない、
さうして私は凡ての男と女とにいふ、千萬の宇宙の前にもあなたの魂を落ち着き拂つて冷靜に保てよと。

さうして私は人類にいふ、神といふものを不思議がるには及ばないと、
何故ならいかなるものにも不思議がる私が神といふものを不思議がつてはゐないのだから、
（どんなに言葉に綾をかけても、私が「神」と「死」とについて如何に平靜でゐられるかを說きあかすことは出來ない。）

私は事々物々に神を聽き神を見る、しかも露ほども彼を理解してはゐない、
或は私自身以上に不思議なものが果してあるかをも知るに苦しむ。
何んで私が今日見るよりもよりよく神を見る必要があらう、
私は二十四時間中の各の時間に、又各の瞬間に神を垣間見る、
男達や女達の顏の中に私は神を見、鏡に映る私自身の顏に神を見る、
私は神からの手紙が街頭に落してあるのを見出す、さうしてその凡ては神の名によつてサインされてゐる、
私はその手紙があるところにそのまゝ捨てゝおく、何處なら私が何故に行かうと、誤たず他の手紙が常に〳〵現はれるのを知つてゐるから。

四九

汝死よ、定命といふ情け容赦のない老婆よ、お前が私をおびえさゝうとしても無駄なことだ。

ひるむことなく產科醫は彼の仕事に取りかゝる、
私は名手が壓し、受け、支へるのを見る、
私は巧妙にも柔軟な表戸の閾に凭れかゝる、
さうして出口に意をとゞめ、さうして放釋と脫出とに意をとゞめる。

さうして汝死屍については、私はお前を恰好な肥料だと考へるが、然しその考へは私をいま／＼しくはさせない。
私は甘い香ひもて成長する白薔薇のかをりを嗅ぐ、
私は木の葉の唇に觸れる、又メロンのつや／＼した胸に觸れる。

さうして汝生命については、私はお前が多くの死の遺物に相違ないと思ふ、
(疑ひもなく、私はこれまで一萬度も自分が死んでゐるのだ)。

おゝ天の星々よ、私はお前がそこでさゝやいてゐるのを聞く、
おゝ恒星よ――おゝ墓場の草よ――おゝ不休の變形と進捗、
若しもお前が何ものかをいはなかつたら、如何して私が何ものかをいひ得ようぞ。

秋の森林の中に橫はる濁つた溜り水について、
木がらし吹く夕暮の絕壁を下つて行く日について、
搖り動け、晝間と暮れ方との火花よ、――堆肥の中に朽ちてゆく黑い樹枝の上に搖り動け、
冬枯れの梢のうめき悲しむ亂語にまで搖り動け。

私は月から高揚し、私は夜から高揚する、
私は蒼ざめた微光が反映された午後の日の目だと思ひあてる、
さうして偉大な或は劣弱な生れ子から堅固なもの中心的なものへと開展するのだ。

五〇

さういふものが私の裏にある――私はそれが何んであるかを知らない――然しそれが私の裏にあるのを知つてゐる。

ねぢあげられ汗みどろになり――さうして私の肉體は穩やかにも靜かになる、
私は眠る――私は永く眠る。

私はそれを知らない――それには名は無い――それは語られざる言葉である。
それはいかなる字書にも言葉にも象徵の中にもない。

私を乘せて囘旋する地球より以上の何物かをそれは囘旋してゐる、

それにとつては創造は友達だ、その抱擁が私を眼ざましたのだ。

恐らく私は更に語るのがいゝのだらう。輪廓圖よ！　私は私の兄弟姉妹の爲めに訴へる。

解つたかあなた方は、おゝ私の兄弟姉妹よ、
それは渾沌でもない死でもない――それは形體であり、統一であり、計畫である――それは永遠の命である――それは
　幸福である。

五一

過去と現在とは萎へる――私はそれらを滿たし又虛ろにした、
さうして未來なる次ぎの褶を充たしに行くだらう。

そこにゐる聞き手よ、何をあなたは私に打ち明けようとするのだ、
薄暮が近づくのを私は感じはじめたのだから、私の顏を見入れ、
(隱し立てせずに語れ――聞いてゐる人は外にはゐない、さうして私はなほ一分だけとゞまつてゐるのだから。)

私は自己に矛盾してゐるか、
それでも結構だ、私は自己矛盾者だ、
(私は大きい――私は多を包含する。)

私は自分に近い人々の方に自分を集注する——私は戸口の石のところで待つてゐる。
誰が一日の勤勞を終へ、誰が逸早く食事を濟ませたか、
私と一緒に歩かうと望むのは誰だ。

私が立ち去る前、あなたは私に語らないか、それとももう間に合はないのを思ひ知らうとするのか。

五二

まだら斑の鷹が私のそばを飛び翔りながら、私を責め詰じる——彼は私の無駄口と躊躇とをつぶやき立てる。

私も亦少しだつて飼ひならされてはない——私も亦不可解な人間だ、
私は私の野蠻な叫びを世界の屋根の上から響かせるのだ。

晝の餘光が私の爲めにさすらひ殘つてゐる、
その餘光は休らひに入つて後の私の姿繪を、何者にも增して正確に、蔭になりゆく曠野の上に投げる、
その餘光は私を霧と夕闇とに誘ひこむ。

私は大氣の如くに姿を消す——私は私の白髮を馳せ去る太陽に向つてふり散らす、
私は自分の肉體を渦潮に溶かし込み、さうしてそれをレースのやうな破片にして漂はす。

私は私自身を塵にゆだねよう、さうして私の愛する草となつて現はれ出よう、
あなたがまた私を求めたいとたら、あなたの靴の下を探すがいゝ。

あなたには私か何者であり如何するつもりだつたかゞ解るまい、
解らないでもいゝ、私はあなたの爲めに健康を持ち來たさう、さうしてあなたの血を淨めて力を與へよう。

一度私を捕へそこねたとて失望してはいけない、
こゝで尋ねあぐねたらかしこを尋ねて見るがいゝ、
私はあなたを待つて、必ずどこかにゐるのだから。

嚴かにもやさしいオルガンのパイプよ、私はお前の音を聞いた

前の日曜日の朝、寺を過つた時、嚴かにもやさしいオルガンのパイプよ、私はお前の音を聞いた、
秋の風よ――薄暮の森を彷うた時、空高く、お前の悲しげな長いいぶきを私は聞いた。
私はオペラで歌はれた完全な伊太利風なテノールを聞いた――四部合唱の中にソペラノの聲を聞いた。
……私の愛するものゝ心臓よ――お前をも私は聞いた、私の頸に巻かれた腕を傳つてかすかにさゝやくお前を、

お前の鼓動を、凡てが靜まりかへつた昨夜、私の耳もとに小さな鈴をふり鳴らすかと。

この合肥

一

最も安全だと思ふところにゐながら私の心は驚かされる、
私の愛する靜かな林から私は身じろぎする、
私はもう散步の足を放牧地には向けないだらう、
私の愛人なる大海とあひゞきする爲めに衣を私の肉體から解き放さうとはしないだらう、
他の肉に觸れて私の力を新たにする、さういふ氣持で私の肉を大地と觸れ合はすことはしないだらう、

大地が絕えて病まないとは一體どうしたことなのだ、
春每に榮え出るものよ、お前はどうして生き／＼しいのだ、
菜草、菜根、果樹、禾穀の血よ、どうしてお前は健康を齎らすのだ、
人間はお前の裏に、絕えず腐爛した死骸をおしつけはしないのか、
凡ての陸地が酸敗した死によつてやむ時なく攻めつけられてはゐないのか、
彼等の亡骸をお前は何處に始末したのだ、
長い歲月の間に現はれ出たあの飮んだくれや大食ひの人々を、
かの凡ての汚れた飮料や食物をお前はどこに片付けたのだ、

今、お前の上にその一とひらをすら私は見出なさい――それとも私はあざむかれてゐるのか、
私は自分の大犂をとつて畦間を掘るだらう――私は鍬をもつて草生え地を耕し、その土を覆へすだらう、
私は誓つて腐つて肉片の或るものをさらけ出すだらう。

二

見よこの合肥を、よくそれを見よ、
恐らくその各〻の部分は嘗て病めるもの〻部分をなしてゐたのだが――しかも見よ、
春には草が大曠野を被うて茂り、
菜園に播かれた豆は音もなくその殼を破り出で、
纖細な葱の穗は空ざまに鋭く延び、
林檎の蕾はその枝に鈴なりにほころび、
復活した麥はその墓から生靑い顏色で現はれ、
生々の色が柳と桑との樹肌に眼ざめ、
雄鳥は朝となく暮となく歌ひさゞめき、さうして雌鳥は巢につきはじめ、
庭鳥の雛は殼を破つて現はれ、
獸類の子も現はれる――犢は牝牛から生れいで、駒は牝馬から、
小さな土の高まりからは、馬鈴薯の濃綠の葉がまめやかに生ひ立ち、
小さな土の高まりからは玉蜀黍の黃色な莖が生ひ立ち――ライラックは前庭に花さき、
夏の生氣は酸敗した死の凡ての層を越えて無邪氣にもまた誇りがだ。

何んといふ魔術だらう、
あらゆる空氣の流れが毒氣を含んでゐないといふこと、
私に愛を迫るあの海の透明な綠の色彩がごまかしではないといふこと、
その海の舌で私の五體を隈もなく嘗めさせても安全だといふこと、
その海の中に蓄積されてゐる疫病の害を私が被らないといふこと、
凡てのものがどこからどこまで淸淨だといふこと、
井戸からの涼しい飮料の味が無類だといふこと、
黑いいちごがみづ〳〵しく味よいこと、
林檎園の林檎、蜜柑園の蜜柑――瓜、葡萄、桃、杏のいづれもが私に毒でないといふこと、
私が草生に身をゆだねても更に病にはかゝらぬといふこと、
しかもその草の一葉々々は、嘗て傳染力の强い病氣であつたところのものから生ひ出て來たのに。

三

私はこの大地におびえ驚くばかりだ、それは沈着で忍耐强い、
それはかくばかりの腐敗の中から、かくばかりの香はしいものを生ひ立たす、
無數の病死體に攻められながら、些かの被害もなく、不壞にその軸のまはりに廻轉する、
かくばかり浸み徹つた毒氣の中から、かくばかり素晴らしい空氣をしぼり出す、
かくばかり何事も知らぬげに、それは年ごとに宏大もない潤澤な收穫を新たにする、

それは人間にかくばかり神聖な材料を惠み與へる、さうして最後に人間からのかくばかりなかたみを平氣で受け入れる。

おもひ

服從、信頼、結合について、
高きに立つて私が眺めわたす時、人間の大きな群れが、人間といふものを信じない人々の指導に從つて行くのを見るの
　は痛ましさの限りだ。

美女

女、坐つた女、歩きまはる女――或るものは老い、或るものは若い。
若いのは美しい――然し老いたのは若いのよりも更に美しい。

今、生の盛りに

今、生の盛りに、健やかに、人眼に觸れて、
わが合衆國の第八十三年、四十歳なる私は、
一世紀の後、或は數十世紀の後、
まだ生れ出ぬあなたを求めてこれらの詩を。

あなたがこれらの詩を讀む時、人眼に觸れてゐた私は人眼から隱れ去るのだ。

今、あなたこそは健やかに、人眼に觸れて、私の詩を實現し私を尋ね求める、
若し私があなたと一緒にゐて、あなたの仲間となつたら、いかに幸ひだらうと空想しながら。
私はあなたと一緒にゐるのだ、さうお思ひ(私があなたと一緒にゐるのは、恐らく十分に確かなことだから)。

屢〻、ひそかに私の近づくあなたよ

おゝあなたよ、屢〻、ひそやかに、あなたのゐるところに私は近づく、あなたと一緒にゐたい爲めに、
私があなたの傍らにあつて歩む時、あるは側近く座を占める時、あるは部屋を同じくしてゐる時、
人知れぬ電火があなたの爲めに私の衷に閃(ひらめ)いてゐるのをあなたはよも知るまい。

時たま私の愛するものに對して

時たま私の愛するものに對して、私は憤りに滿たされる、私は報はれない愛を浪費してゐるのではないかと思ふから、
然し今私は思ふ、世に報はれない愛はない――かうかあゝか兎に角返報はたしかだ。
(私は一人の人を心から愛した、さうして私の愛は報はれなかつた、
然しそれあるが爲めに、私はこれらの詩をば書き得たのだ。)

私に似た大地

私に似た大地.
お前はいかにも無感情に、飽き足りて圓味を持つて見えるが、
今私はそれがお前の凡てだとは思はない、
私は今推測する、お前には何か激烈なものがあつて、何時爆發するかも分らない。
何故なら一人の勇者が私に牽きつけられ――さうして私が彼に牽きつけられたから。

然し彼に對して、私の心には何か激烈な恐ろしいものがあつて、いつ爆發するかもわからない、
私はそれを言葉で表現するのを敢へてし得ない――この詩の中にも敢へてし得ない。

博名を知り得た時

英雄が高名を博したのを知り、偉大なる將軍の戰勝を知り得た時、私はその將軍を羨む心はなかつた、
大統領がその椅子にあるのも、富豪がその大厦にあるのも、私は羨む心がなかつた。
然し愛する人達の友情について聞いた時、その友情がどんなものであつたか、
生涯の間、艱難と誹謗との中に、長く〳〵變ることなく、
青年期にも、中年期にも、老年期にも、如何に彼等が貞節であり、愛情に滿ち忠實であつたかを聞いた時、
その時私は考へこんでしまふ――私は苦々しい羨望の念に滿たされて、急いでそこを立ち去つてゆく。

私達二人の若者は互ひに相倚りながら

私達二人の若者は互ひに相倚りながら、
一人は他を決して見捨てることなく、
大道の上を遍ねく逍遙し――南と北とに散策を擅まゝにし、
力を樂しみ、――肘を延ばし――指を噛み合せ、
不敵に武裝し――食ひ、飲み、眠り、愛し、
私達自身の律ての外の律てを顧みず――航海しつゝ、戰鬪しつゝ、掠奪しつゝ、强迫しつゝ、
守錢奴と、卑僕と、僧侶とを脅かし――大氣を呼吸し、淨水を飲み、草原の上、海岸のほとりに舞踏し、
町々を侵略し、安佚を輕蔑し、法令を愚弄し、弱さを追ひ退け、
私達の入寇を完うするのだ。

私は愛慾にもだえるその人だ

私は愛慾にもだえるその人だ、
大地は相牽かぬか、あらゆるものはもだえつゝ、あらゆるものと相牽かぬか、
それだから私の肉體も、凡ての逢ひ得たもの、凡ての知り得たものと。

女の歌手に

さあこの贈物をお受け、
私はこれを或る英雄、或る雄辯家、或る司令官の爲めに蓄へてゐた、
古來の大義の爲めに、民衆の進步と自由との爲めに、私の魂の事業の爲めに、働いてくれる人にと蓄へてゐた。

然し今私は自分の蓄へてゐたものが、誰にも劣ることなくあなたに屬するものだと私は知つたのだ。

一人の弟子に

改造が要望せられるか、さうしてそれがあなたによつてなされるのか、
改造が宏大なものであればあるほど、それを成就する爲めのあなたの個性も宏大でなければならない。

あなたよ、兩眼、血液、淸らかに香ばしい皮膚がどれほど役に立つかを考へないか、
あなたが群衆の中に步み入るとき、欲求と支配との空氣があなたと共にしみ入り、誰もがあなたの個性によつて印象を受ける、そのやうな肉體と魂を持つといふことが、どれ程役に立つかを考へないか。

おゝ磁力、どこまでも肉、
行け、私の愛するもの、若し要せらるゝなら餘事を抛つて、この日この時、豪氣、眞實、自敬、決斷、矜持にあなたを養へ、

あなたの個性を堅固に打ち建てるまで休むな。

臨終の人に

あなたへの使命を果す爲めに、他の凡ての人の中からあなただけを選び上げる、
あなたは今死ぬのだ——他の人々は何んとでもいへ、私はいひ紛らすことは出來ない、
私はありのまゝで容赦がないのだ、然し私はあなたを愛する——あなたはもう遁れる術がない。

やさしく私は右の手をあなたの上におく——あなたはかすかにそれを感ずるだらう、
私はつべこべ云はない——私は自分の頭をかしげ近づける、さうして半ばそれをつゝむ、
私は靜かに坐る、——私はどこまでも忠實である、
私は看護人以上、親以上だ、隣人以上だ、
永生を持つた靈肉の上に於て、あなた自身であるものゝほかの凡てから私はあなたを自由にする、あなたは必ず遁れ出
　るだらう、だから、
あなたがあとに殘してゆく遺骸は、謂はゞ排泄物に過ぎないだらう。

思ひ設けぬところから太陽が輝き入る、
强い思ひと自信とがあなたに滿ちる——あなたは微笑んでゐる、
私があなたの病氣なのを忘れてゐるやうに、あなたは自分の病氣なのを忘れる、

あなたは蔑嘲を顧みない――あなたは歎き泣く友等を意としない――私があなたの傍らにゐるからだ、
私はあなたから他の凡ての人を遠ざける――もう悲しまるべき何ものもない、
私は悲しまない――私はあなたを祝福する。

母と嬰兒

その母の胸に巣喰つて眠つてゐる嬰兒を私は見る、
眠れる母とその嬰兒――氣息をひそめて、私は永く〱二人に見入る。

走者

まつ平らな道路の上を熟練した走者が走る、
彼は瘦せがたで、筋骨が逞しく、肉づきのいゝ脚を持つ、
彼は輕衣に身づくろひし――走るにあたつて前かしぎとなる、
拳を輕く握りながら、肘を少し胴から離して。

忍耐强いしづかな蜘蛛

忍耐强いしづかな蜘蛛、

それがひとり、小さな突角にうづくまり、
身のまはりの大きな空間をはかりしらべ、
體內から絲、絲、また絲をくり出し、
絶えず延べほごし——絶えず休まずひろげてゆくのを私は見る。

さうして汝、おゝわが魂よ、汝の立つところ、
無邊際の空間に取りまかれ、取りまかれながら、
絶えず考慮し、冒險し、突進し、——諸(もろ〳〵)の世界を尋ねてそれを結びつけ、
遂に汝の欲する橋を架け——遂にしなやかな錨をおろし、
遂に汝の投げるいと細き絲で、いづこかを、おゝわが魂よ、たしかに引捕へるよ。

牢獄の中の歌手

一

「おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の樣
　おゝ空恐ろしいおもひ——捕はれの生魂(いきたま)」
牢獄の廣間づたひにこの復唱が響きわたつた、
屋根——上天の頂きにまでそれは高まつた、
そこでは嘗て聞かれなかつた物思はしげにもやさしく強いメロデーとなつて漫々とたゞよひながら、

遠きに立つ監哨、武裝せる看守にも歌は達してその歩みをとゞめながら、
感激と畏れとをもて聽く人皆の血行を押へつけながら。

二

「おゝあはれさ、暗さ、かなしみの身の樣、
　おゝ許せよわれを、幸薄き生魂」

ある冬の日、陽は西に低く傾いてゐたその時、狹い廊下を、その國の偸盜と流賊との間を、
（そこには何百人となく、しをれ顏の殺人者と、惡ざかしい贋造者とが、
牢獄の中の日曜の會堂に集つてゐた——その周圍には看守が大勢、十分武裝して、物々しい眼で警戒しながら）
それは凡て暗く腐敗した腫疱、國民の中の犯罪者の集團、
その間を、一人の「女性」が靜かに落ち着いて、兩手に一人づゝの無邪氣な幼な子を抱きながら歩んで來た、
さうして講壇の上、おのれの側なる腰かけに幼な子を坐らせて、
彼女は先づ樂器もて音律的な低い前奏曲を奏し、
やがて世に類ひない聲を揚げて、
古雅な聖歌を歌ひはじめた。

三

聖　歌

「牢屋の中にこめられた一つの魂が、

叫ぶ、助けよ、おゝ助けよ、さうして彼女の雙手(もうて)をふり動かすが、
その眼はとざされ——その胸は血ばしるも、

ゆるしは來らず、やすらひのなだめも、
おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の樣、
おゝ空おそろしいおもひ、——捕はれの生魂(いきだま)。」

ひまなく彼女の歩む歩み、
おゝ日毎の悶え、夜毎の惱み、あらず、親しましい手、あらず、友の面わ、やさしい心も、ゆるしの聲もなくて。
「おゝあはれさ、暗さ、かなしさの身の樣、
おゝゆるせよわれを、幸薄(さち)き生魂(いきだま)、

この身ではない、罪を犯したのは、
あさはかなこの肉の體が破滅の首輪、
雄々しく長くさゝへはしたものゝ、
肉には勝ち得ぬこの身は弱いもの。

おゝ命、命はない、かなしみが苦しい、
おゝ打ち敗れて、無視されて燃える魂。」

（なつかしい牢獄の中の魂よ、堪へ忍べ、
暫く――やがていつかはゆるしが近づく、
あなたを自由にし、あなたを家に歸らせる爲めに、
神々しいゆるし手、「死」があなたに、

もう囚はれの身ではない――恥ぢもない、かなしみもない、
去り行け、神に自由を許された一つの魂。）

四

獄手はもだした。
おだやかに澄んだその眼が、上向きになつた凡ての顔の上にかゞやいた、
不思議な牢獄の中の顔の海――さま〴〵に異つた顔、惡ざかしい顔、殘虐な顔、刀痕のある顔、美しい顔、
かくて女性は立ち上り、狹い廊下を、人々の間を過ぎ去つた、
その上衣は沈默の中にさや〳〵と鳴つて人々に輕く觸れながら、
彼女は幼な子達と共におぼろ闇に消えて行つた。

五

囚人の上にも、武裝した看守の上にも、彼等凡てが身動きをはじめる前に、
（囚人は牢獄を忘れ、看守は彈ごめした短銃を）沈默と靜止との不思議な瞬間が來た、

深い、半ば押しつぶしたすゝり泣き、涙にまで動かされて面を伏せた悪人の聲、
若者のせはしい呼吸と共に、故屋の記憶、
子守歌を歌ふ母の聲、姉妹の心くばり、幸福な幼年時代、
長く閉ぢこめられてゐた心はそれらの思ひ出にゆるぎ立つた、
――不思議な瞬間だ――けれどもその後、淋しい夜、多くの人に、そこにあつた多くの人に永年の後――臨終の際にも
――悲しい復唱――その調子、その聲、その言葉が、
再び歌はれる――いつくしく落ち着いた「女性」は狹い廊下を歩み、
又も泣くやうなメロデーを牢獄の中の歌手は歌ふのだ。
「おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の樣、
おゝ空恐ろしいおもみ、――捕はれの生魂。」

ワルト・ホヰットマン

私は彼を一個のローファー（Loafer）だと呼んだことがある。しかしこれは勿論私の造語ではない。一八四〇年十一月の「ロングアイランド・デモクラット」に彼はローファーを讃美する一文を掲げてゐる。「どれほど私はローファーを愛してゐるか。あらゆる人類の中で、かの純眞な、生得不變のローファーに比べ得るものを見ない」、「私に汝の落ち着き拂つた、堅實な懶惰の子を與へよ」。世間一般のローファーに對する侮蔑を見返す爲めに、ローファーが相集つて一國を創立する空想をも彼は描いてゐる。成熟の晩かつた彼が二十九の年に書いたその一文には、宗教的な匂ひさへ漂ふほど感傷的ではあるが、その背後には彼の本質が輝いてゐる。「私がローファーと呼ぶのは何か。ローファーといへばローファーだ」。さうもいつてゐる。ローファーとは怠けもの〻ことだ。約束の出來ない人間、誓ふことをしない人間だ。主義と節度とを所有しない人間だ。彼は働き甲斐のある人々から齒痒ゆがられる。彼は自分の欲することしかしない。外から强ひられることを極端に厭ふ。彼は國家社會の建設に與らない。けれどもファナティックの外には誰もが彼を憎み得ないだらう。而して彼は何事もなさなかつたか。人類の生活が始つて以來、人貌を有する他の動物としてのみ存續したか。或はさうかも知れない。さうならば自然は殊の外寛大だ。

彼といふのはワルト・ホヰットマンのことだ。

彼は十三の時以後學校なるもの〻門をくゞらなかつた。それは彼にはい〻ことだつた。十五の時に肉體的には既に十分成熟して一人の大人を思はせたが、その心は祕藏の寶玉のやうに容易に大氣に曝らされなかつた。彼は唯吸收することだけを知つてゐたやうに見える。しかもそれは初めは都會を吸收せずに元始的な自然を好んで吸收したのだ。彼はロング・アイランドの海沿ひや田園をその唯一の伴侶として、草木の如く自然に育つた。彼の性格の基本的の基礎はそこ

に大根を張つたのだ。後年彼はいかに種々なる人間生活の諸相に當面したらう。しかもそれを表現する彼の言葉の後ろには、大自然の中に悠遊するパンの懶惰な姿が滲み出る。結局太陽の光と離れ住むことの出來ない自然、結局自分の制約以外のものには絶えず反抗して倦むことのない自然、默つて憎み叫んで愛する自然、それ自身以外には誰にも本當に理解され得ない自然、それが死に至るまで彼の基調をなしてゐた。

「今のこの時から、自由！
今のこの時から私は制約や、空想的な境界線から自らを解放することを命ずる、
どこに行かうと、私は全然的に絶對的に私自身の主、
他人にも耳傾け、そのいふところをよく思ひめぐらし、
立ち停り、探り求め、受け入れ、熟慮しはするが、
しとやかに、然し拒み難い意志を以て、私は私を捕へんとする桎梏から私自身を奪ひかへすのだ。」

さうだ。彼は常に自分を自分自身にまで奪ひかへす男だつた。それにも拘らず、彼は常に詩人たる自分から離れてさまよひ出ようとした。新聞記者として立身しようといふ欲望は可なり強く、又講演者として生活しようとしたこともあつた。小學校の教員となつたのは恐らく彼の貧困がさせた業だらう。教師としての彼は「決して失敗ではなかつたが、斷じて成功ではなかつた。」新聞記者としても、講演者としても、要せられたる思慮の慧敏と才智とを所有してゐなかつた。彼の心の水の比重は極めて重い。そこに投ぜられた事象は長い時間を經なければその底には達し得なかつた。彼はまた政客たらんと企てたこともあつた。タムマニー・ホールの爲めに畫策して、ブルックリンに於ける政爭の或る重要な役目を演じようとしたこともあつた。けれどもそれらの凡ての目論見は幸にして彼の傾向とそりを合はさなかつた。唯かゝる彼の徒弟生活に於て、彼に著しく役立つたものは都會の生活にもぐり込んだことだつた。

近代の都會、それはエヂプトに金字塔があり、希臘にアテネの殿堂があるやうなものではないか。私達の文明が他の

文明によつて置きかへられる時代は遠からざる未來に來るだらう。私達の文明が一つの廢墟になつた時、奇異な傳說となつて殘るものは近代的都會の追憶ではなからうか。そこに行はれた施設と生活、その生活の歡びと悲しみ、及びそれが反映する特殊な餘光は、誰かによつて完全に購下せらるべきだつた。果して都會の歌手は數多く輩出した、けれども、昔の宮廷の詩人が田園を見て歌つたと同樣の空想で、都會を歌ふのを恥ぢた人が幾人あつたらうか。或るものはその美のみを讚美したかも知れない。或るものはその醜ばかりを呪咀したかも知れない。然しながら都會をその全體に於て掌握したものゝ數は決して多いといふことが出來ないだらう。ホヰットマンは少くも、古い意味の都會から私達の都會に移住することの出來た一人だつた。彼は自然に投入すると同じ熱意と度胸とを以て、都會の生活にまぎれ込んだ。渡船の上、乘合馬車の中、敎會、社交俱樂部、劇場、オペラ・ハウス、酒場、孤兒院、監獄、法廷、公衆浴場、博覽會、講演、音樂、……都會的火事……「どこであれ、人間の生活が絕大な塊りになつて動きつゝあるところには、必ず彼がゐてそれを感じ且つ吸收してゐた。」彼は都會に於ても devine average（神々しい平人民）がいかに彼等自身をその特殊な生活に適合させてゐるかを見たのだ。

彼が田園にあつて活きたのは十七から二十二まで、ニュー・ヨークとブルックリンとにゐて都會に接したのが二十二から二十九まで。

彼は或る時はフロックコートを着、トップ・ハットを被り、胸に花をつけて細身の杖を携へることを忘れなかつた。然しそれは、彼が直ちに自分で發見した如く、彼には不似合ひだつた。彼が心を許し接し得るのは Powerful uneducated Persons だつた。渡船の水夫の誰れ彼れ、乘合馬車の御者の誰れ彼れ、その名は死前の彼の記憶にも膠着して離れなかつた。

遺存してゐる文書によれば、彼は十九の年頃より詩を發表し始めたやうに見える。彼のそれらの詩中に現はれる姿は感傷的で悒鬱だつた。それは凡ての靑年にあり勝ちのものだらう。生に對する何とはなき不安、死に對する朧げな憧れ、

やりどころなき愛の悶え、
「凡ては互ひの苦を持つてゐる、老年は死をおそれる、
青春のなやみは誇りと欲念、
さうして心の痛み、その胸の中には、
熱高き情炎。」

さういつた傾きのものだ。死も亦彼の詩題にふさはしかつた。西行法師と同様に、彼は死を人なき自然の一隅に選んだ。

「誇りがにも華やかなる堂にありて、
悲しみの涙、友の歎きにかこまれつゝ、
われは、終りの時せまりて、
このうつそ身をかいやるを恥づ。
……………… …… …… ……
日の目まさに閉ぢなん頃
こひ願はくばわが死の床
擔ひ出だせよ空の清きところ
草香ひ茂り木むら嚴かに震ふそこ。

休らひのしゞま心をやはらげ
見上ぐるにいや高き木末は

草生の土によき影をなげ
凉しくあらんそこにわれは。
…………………………
われは人の近きにあるを願はず、
されど日の光の沈みゆくかはたれ
このうつし世に別れを告げて、かならず
よみぢにいなん――たゞひとりわれ」

かゝる詩は彼の心の聲ではない。凡ての青年がその捕へ得ざる幻影の上に築き上げる蜃氣樓だ。
而して彼は二十九の年まで恐らく戀を知る機會を持たなかつた。戀といふ煉金術は、彼を更に早く詩人にしてゐたかも知れなかつた。あの雄々しい强健な體軀と、徐ろにではあるけれども心の奥底にまで感じこむ熱情とは、彼を一人の戀人にさすには十分であつたらう。唯彼は貧しかつた。父業の建築請負で生計を立てゝゐた。而して自分自身を見出さなかつた彼は、人に對して不必要に臆病だつたやうに見える。
「幸薄きわが愛欲はまだ見ぬ人にこがれ寄る」と悲しく歌ひながら、まだ見ぬ人を見窮めようとはしなかつた。同時に愛欲の鎖はローファーなる彼には重過ぎたかも知れない。戀愛はやがて生涯を繋縛して解放しない家庭生活を豫想する。この豫想は彼にとつては由々しい警戒であつたらう。それ故に彼は不思議な空隙を胸に感じつゝも、美しい夢を瞑想の中に描くのを選んだかも知れない。彼はその代り同性の交誼に對する熱烈な實行者であり讃美者であつた。『カラマス篇』一篇は、實にこの男らしい熱情の衝搏の記念碑である。"Camerado" と彼は同性の友に呼びかけた。あの言葉の意味と響きとは特異だ。あの一語の中に新しい友情の定義が藏されてゐる。これに反して彼の戀愛歌のいかに非人格的であるよ。彼はその『アダムの子等』に於て戀愛の赤裸々なる當體を披瀝した。ニュー・ヨークの生活に於て、彼は公娼制度

が如何なる慘害を人間の生活に及ぼすかを見て、賣娼制度取締りの爲めに叫んだ。かゝる事實が或は彼をして性慾詩を敢てせしめた動機になつたのではないだらうか。彼は健全なる性交のみが人類の未來に正しい約束をなすものであり、從つてそれを高調するのは當然であるのみならず當爲でなければならぬと感じたらう。然しその詩篇にすら、二三のものを除く外には、極めて抽象的な表現を求め得るに過ぎない。

生れてから二十九年の淸潔な徒弟生活、それは彼のやうな境地にあるものに取つては、寧ろ珍らしい生活であつたといつていゝ。彼は三十にして頭髮が既に白くなつたけれども、その心臟は小皺一つなく張り切つてゐた。而して南方ニュー・オルレアンス市からの招致を受けてクレッセント紙の記者となる爲めに一人の弟を伴つて南に下つた。

彼は元來奴隷廢止運動の熱情家だつた。彼の詩 "Blood-Money" はこの熱情を紙面にたゝきつけてある。南方は奴隷制度擁護の本陣だ。そこで彼が如何なる程度に自分の主張を徹底したかそれは知られてゐない。然し恐らく彼を最も牽きつけたものは、そこの温暖な氣候と南歐の血を多量に交へた人々の生活とだつたらう。彼の太陽、少年時代ロング・アイランドの空を仰いで、その胸の中に深く吸ひこんだ太陽の光が、内外から彼を操りはじめたのだ。恥づかしげに眉をしかめて、手持無沙汰らしくあたりを見まはす彼の可憐な姿が私の眼には映る。彼は三月に行つた。而して突然五月にそこを去り、中部諸州を旅行して北部に歸つた。彼は固より借金を綺麗にする爲めの出稼ぎにそこに行つたのだけれども、その退去のあまりに速急だつたのには謂れがなければならない。

恐らくこゝで彼は始めて戀を知つたのだ。彼の晩年のカムデンの生活に於て、屢々トラウベルにその時代の生活の告白をなす約束をしたにもかゝはらず、遂にそれを果さなかつた。或る傳記者のいふところによれば、その躊躇は彼自身の爲めではなく、對者に個人的の累を及ぼさんことを恐れたものらしい。それ故彼の情人は既婚の婦人だつたらうと想像されてゐる。彼はたゞ探りよることの出來ない暗示として次ぎの言葉をサイモンズに告げてゐる。

「若き壯年時代、中年時代、南方に住んでゐた頃の私の生活は、おもしろをかしく肉的なものであつて、疑ひもなく世

の非難を受くべきものだつた。結婚はしなかつたが、六人の子を擧げた。――二人は死んだ――南部に生活してゐる一人の孫は、時折り私に手紙をよこす――或る事情（それは彼等の財産と利益とに關係してゐる）の爲めに、二人は親しい間柄であることが出來ないでゐる。」

けれども彼の詩集の全部を通じて、父親としての彼の喜びと歎きとは全く窺ふことが出來ない。彼はそれ程自分を晦ますことの出來る詩人だつたらうか。それ故に又或る傳記者は、六人の子を擧げたといふ彼の告白を不思議な詩人のハルシネーションの一つに考へようともしてゐる。

三ケ月にして突然そこを去つた彼には、痛ましい事情が潜在してゐたのではなかつたか。『搖り動きやまぬ搖籃から』を讀むものは、そこに迸り出た激越な感傷の裏に或る手蔓を見出し得ないであらうか。

詩人が戀の味を知るのは虎の子が血の味を知つたに等しい。彼が再びニュー・ヨークに歸つて新聞記者と建築請負との業務に從事するに至つた後、その本然の氣稟ははじめて萌え出ではじめた。彼の表現は在來の舊套を脫してはじめて彼自身のものとなつて來た。三十四歲の時、彼はその手帳の中にかう書いてゐる。

「その大望といふのは、文學的な若しくは詩的な形式によつて、妥協することなく、私自身の肉體的、感情的、道德的、理智的、並びに詩的な個性を忠實に言葉に表現しようといふことだ――この年代、この土地にあつて、特殊な個性を今までの如何なる詩人よりも、如何なる書物よりも、更に確實で普遍的な意味に於て探究しようといふことだつた。」

この言葉は一つの立派な宣言である。彼はその中に近代人たる彼自身を的確に摑んでゐる。彼は永遠の爲めに書かうとはしなかつた。彼は永遠を書かうとはしなかつた。彼は第十九世紀の亞米利加に生れ、彼にのみ許されたる生活環境にある彼自身を、赤裸々に表現することを唯一の心がけとした。彼は時代と場所との如何なる接會點にもしつくりあてはまり得る彼を創立しようとするよりも、定められたる環境にあつて、思ふ存分に育ち上り、その育ち上つた自分を誰もが表現し得ないやうに的確に、特殊に、譃僞りなく表現しようと決心をしたのだ。而してその決心の關はる範圍に於て

遺憾なく成就したのだ。それ故に彼はコスモポリタンであると同時に地方的であり、超越的であると同時に僻見的であり、人であると同時に擬ふ方なき一個のホヰットマンだ。彼は遂に理想主義の幽靈たることから彼自身を救つた。概念の奴隷たることから彼自身を解放した。人々は恐らくこの詩人の地方的であり僻見的であり餘りにホヰットマンであるのに躓くかも知れない。然し私は彼のこの明かな標示にその詩の特徴を見る。それは無限の大空を背景とした一つの星座の莊嚴と微妙とを聯想させる。彼の傍らにあつては、バイロンもシェレーも、ブレークさへも影薄き理想の燐光に過ぎない。

一八五五年彼の三十六歳は彼に取つても文學そのものに取つても忘れ得べからぬ年であつた。不思議な、これといつて何を仕でかしたともない、家族のものにも依體のわからなかつた、大男のローファーはこの年に十二の詩を收めた九十四頁の小詩集を世に提供した。『草の葉』(Leaves of Grass) がそれである。ポーマノックの汀沿ひに、ブルックリンの喧騒の中に、南方及び西方諸州の放浪の旅の中に、彼が蓄へ來たつた一見無統一な平凡な生活及びそれに對する特殊な整頓法と省察、その詮じつまつたものがこの詩集だつた。彼はその當時亞米利加人に、彼等の用ひなれた言葉と、彼等に本質的なリズムと、彼等を裏書きする感情とを以て話しかけたのであつたけれども、それは恐らく彼等に取つて餘りに近か過ぎたのであらう。彼等にはそれが彼等の詩であることが判らなかつた。彼等はやはり、前時代の言葉が彼等の詩だと思ひこんでゐたらしく見える。詩集は讀者を得なかつたのみならず、侮蔑を以て報いられた。

然し彼はそれを恐れなかつたやうに見える。何故なら彼は彼の見出した道が唯一の道であるのを明かに感知してゐたから。而して彼は神經衰弱者のやうに躁急ではなかつたから。彼はもう堂々と歩く。彼は凡ての人に好意を持つ。彼は何物にも拘束されないローファーの自由を以て、彼の時代の信仰の開基であるのを知り拔いてゐた。七十に垂んとして彼の書いた囘想は、實にその當時の彼の心だつたらう。

「私は溫和な推賞の言葉も、大きな金錢上の報酬も、或は現存の流派や習俗の承認をも期待してはゐなかつた。成就か

半成か知らないが、私の仕事の全體に對する慰藉となるものは、私の裏にある魂以外の影響に少しも累はされることなく、私らしく私の云はんとすることを云ひ盡し、而してそれを見當ちがひをせずに書き記した點にある。――その價値如何は時が定めるだらう。」

「詩としての『草の葉』の背景に私は習俗的な主題の凡てを拒んだ。持ち合せの修飾はしなかつた。戀と戰との取つときの構想、舊世界の詩に現はれる稀代の人物、そんなものはない。云ひ得べくんば、單に美化の爲めにしたといふものは更にない――傳說、神話、ローマンス、麗句、韻律、そんなものはない。然しながら新たに成熟しつゝある十九世紀の人類生活、普遍的なそれ、而して殊に、現在の合衆國に於ける多數の事例と業績との凡て」

これであつたのだ。彼はかゝる主題が他國人によつて無視せられ、他の時代によつて棄却せられるのを顧る暇がなかつた。そこに云ひ得べくんば彼の弱點はある。然しそこに云ひ得べくんば彼の力はある。彼は明かに一つの時代と一個の人間とを時間と空間との交叉點に浮彫りにしたのだ。

仕事場を持つた彼は本當の生活らしい生活に這入つて行つた。生活に實驗的といふことがあつてはならぬ。そこからは本當は何ものも生れては來ない。然しながら從來の彼の生活は、結果に於て、實驗的といふことが出來ないとするなら少くとも經驗的であつた。彼の意識の中には、何ものにか役立たせる爲めに生活を導くといふやうなところが無いではなかつたらう。大きな意味の徒弟生活は彼の何所かに膠着してゐたやうに見える。然しながら彼は今生活そのものに這入り込んだ。生活に這入り込むこと、それは如何に難事であるよ。凡ての技術に於て玄人となるのはまだ達し易い。然しながら生活に於て玄人となるのは生死を賭しての冒險である。動ともするとミイラ採りがミイラになるべき危險な境地だ。そこには十分の智慧と決意と果斷とが要望される。多くの人はそこに這入り込むと同時に自分自身を見失つてしまふ。況んや生活の玄人となつてしかも清淨な素人の美點を失はぬこと、それは妻となつて處女性を死ぬまで失はぬ女性の稀れなるが如く稀れだ。彼は然しかゝる離れ業の名人だつた。彼は結局本質的なローファーだつたのだ。四十二

の時、彼はかう書きつけて自分に云ひ聞かせた。
「この日、この時、私は純潔で、完全で、おだやかな血液を持つた雄々しい肉體の所有者であるべく決心した。水と純粹の牛乳の外は凡ての飲料を避け、凡ての油氣の多い肉や晩い夜食を禁ずることによつて、淨化され、聖別され、精神化され、力づけられた肉體を……四月十六日」
肉體からはじめてその陣容をとゝのへた彼はやはり彼らしいと私は思ふ。それによつて私は彼の心臟の武者ぶるひを感ずることが出來る。

彼の生涯が人知れずかゝる曲折を描いて廻旋する間に、その祖國は彼に無上の舞臺を提供した。米國は世界の環視の中に、一つの飛躍をなすべく、餘儀なくされたのだ。如何なる經濟的事情がその背後にあつたにせよ、彼女は人類的正義を意識して解剖刀を自分の横腹の腫物に擬せねばならなくなつた。リンカーンはその主治醫として選まれた。北方の人道主義者達が叫んでやまなかつた奴隷廢止の實行が戰爭の形に於て結果されたのだ。米國は最後の結合をなす爲めに先づ分離しなければならなかつた。彼は戰爭に參加した弟の負傷を聞いて、萬事を放擲して南方に向つたが、一度戰爭の悲慘を見るや更に萬事を放擲して傷病者の看護に從事した。彼はそこに母であり、兄であり、友であつた。そのゆるやかな粗野な親切は暗い病院の寢臺の列の上に日光の如く暖かつた。彼も亦暖められた。彼の看護生活は二十ヶ月の長きに亙り、六百度病院を訪れ、八萬から十萬の間に達する傷病兵に接したのだ。而してさすがに健全無比だつたその肉體も打撃を受けて一部的の不隨を起すに至つた。

ワシントンに於て彼はオ・コンナー、ボロース其他の知己を得てゐた爲め、內務省附きの書記に採用されて、兎に角定收入を得ることが出來た。それは彼に取つての一つの安全な繫船だつた。役所のストーブと燈火とを利用して夜晩まで讀書し得る樂しさを、如何に自慢らしく彼はその母に書き送つたか。オ・コンナー夫婦も彼にとつてはよきサマリヤ人であつて、彼はその家に寄寓して樂しい朝夕を過ごすことが出來た。彼がピーター・ドイルと知つたのもこの頃のこ

とであらう。或る日ボロースを訪れた歸りの電車は夜になつて雨だつた。彼は客といつては自分一人だけの電車の中で、車掌をしてゐたこの男と近付きになつたのだ。ドイルは南軍の兵士で負傷して捕虜になつたアイルランド人だつた。ドイルは無學で詩などは勿論解らない男だつたらしい。けれどもその暖かい質朴な心臓は直ちに彼を引きつけてしまつたらしい。彼は死にまでドイルをペート〳〵といつていつくしんだ。

この上なく平和な彼は『草の葉』の著者である爲めに內務省から罷免された。オ・コンナーがその事實に憤激して彼の爲めに辯護の評傳を書いた。彼に對するまとまつた辯護の聲は恐らくこれを以て嚆矢とするだらう。彼はまた友人の世話で大藏省に職を得た。得なければならなかつた程彼の詩集は賣れなかつたのだ。

彼の四十七の時彼の親愛の的なるリンカーンは戰亂の凡ての血を負うて犧牲の如く屠られた。而してその屍の上に新らしい米國の生活は建設せられはじめた。彼はそれらの凡ての印象を『鼓聲』(Drum-taps)と『自選日記』(Specimendays in America) とに傾注した。果して奴隸廢止が戰爭によつて遂げられるかを彼は迷つたことがあつたが、而して南軍の威勢は一時彼を迷はせるに十分であつたが、遂に北軍の勝利が達成せられるに及んで、彼は流血の償ひが辛うじて遂げられたのを感ぜずにはゐられなかつた。彼は確かに或る昻奮にあつた。彼は聲を大にして世界の歡びの爲めに叫んだ。

然しながら彼のかゝる昻奮の蔭には、彼の一身に取つての悲劇が人知れず演ぜられてゐたのだ。オ・コンナー夫人の回想記によれば、彼が四十五の年(卽ち一部的の不隨性に襲はれた年)、彼は一人の女性を知つた。而してその女性が彼に與へた友情的な手紙が、不圖その良人の手に落ちた。良人は憤怒と嫉妬から衆人稠座の中でホヰットマンを詰責した。その女性に對して愛敬を感じてゐたホヰットマンは、この事實があつて後深く彼女に同情した。彼はこの事件をオ・コンナー夫人に告げて「若し彼女が妻でなかつたならば立どころに彼女と結婚するだらう」といつた位だつた。『アダムの子等』の中にある「群衆――その海原のさかまく波間から」(第一卷參照)なる詩は、この女性にあてゝ彼の歌つたものと考へられてゐる。

彼はこの「白皙で鳶色の眼と髮毛とを持ち、やさしく柔和な、いかにも女らしい小肥りな女性」に對して、長い間心の中に深い苦悶を味つたやうに見える。その爲めに彼は己れの愛着的な性情を詛ひさへもした。この苦惱は多分彼の四十九の頃まで持ち續けたらしい。その頃の手記、

「譃つぱちな子供じみた自己僞瞞、實際對者には存在せず、自分にばかり存在してゐたものを空想し、悉く自己に溺れて僞瞞を重ねたこと、而してその私の弱點——私の最大の弱所缺點を注意せよ。けれども常に16（こゝにはP字が記されてそれが抹殺されてこの數字に取り代へられてゐる）に對しては親しみの氣持と態度とを持て。然しもう彼女を追ふな。」

「冷靜な、溫和な、（感情を表はすよりは）變りのない態度——貧しい人に與へよ——誰にでも合力せよ——犯罪者と愚かものとの卑しい人々全體に對して寛大であれ——しかし少しく語れ——言ひ譯をするな——祕密を漏らすな——洒落をいつたり、言葉に綾をかけたりするな。或は諷刺的な挿話をするな。（普通の場合には）論爭せず、理窟をいふな。」

七〇年七月十五日」

「七月十七日

何んとしてもかんとしても私自身（と私の動靜）をこの不斷の絕大な（而して絕大な）動亂から引き放すのは大切なことだ。」

「今、この時からもう動搖しまい（或は）（一字缺）しまい。今後は決して（如何なる事情があらうとも決して）彼女を見まい、彼女に會ふまい、彼女に話しなり云ひ開きなりをしまい——生きる限り、今から、いかなる會見もしまい。

「彼の感情その他は、彼の愛慾、友情などが酬いられようとも、酬いられまいとも、それに關係なく彼の中に完い。自然に於ける完全な樹や花のやうに、彼は生長し彼は花咲く。――それが讃嘆の眼で眺められようと、全く人知れぬ荒野や森林の中にあらうとも。

彼の同體である大地はそれ自身の中に完全で、隱れたる目的に對して生命と力とを溢發する生長の凡ての過程を包有してゐる。」

「愛着的な性情を押へつけろ。」

「それは多すぎる――命をさいなむばかりだ」

「この病的な、熱烈な、均り合ひのとれぬ愛着性といふ奴め。」

私はこれらの言葉に附加する必要を見ない。

唯忠實な彼の研究者なるエモリー・ホロウェー（Emory Holloway）のホヰットマンの戀愛關係に對する意見を附加しておく。

『「これらから私の考へるところによれば、ホヰットマンは夫婦關係を結ぶのは彼に幸するものだとは考へ得なかつた程、彼の自由を愛してゐた。若し彼が苟も結婚してゐたら彼に取つての大きな誤謬であつたらう。彼は屢〻私に云つて聞かせた。彼は妻を持つ人々を羨みはしないが、その子供達のあるのを羨むと云々』（オ・コンナー夫人の言葉）このホヰットマンの信據するに足る戀愛の事實から讀者は次ぎのことを注意するに難くあるまい。それは彼がその情人として既婚の女性を選んでゐるといふことだ。かゝる婦人又はかゝる婦人の幾人かによつて彼が子供を擧げたとするなら、彼がサイモンズになした告白の謎のやうな言葉が明瞭になつて來る。それはかういふことだ。この悲劇的な三角關係の當事者達は、事件にかゝはりのない子供の法律上、社會上、及び財産上の利益の爲めに、彼等自身の個人

的感情を犧牲にして、事件を祕密に葬ることに一致したらうといふことだ。」

彼の女性に對する態度がこのやうであつたとすると、それは從來の結婚制度、家族制度に對する由々しい威脅だといはなければならない。さりながら、それは從來支持された制度に對する威脅であるが故に惡であり得ねばならぬか。これは問題である。その解決の將來に殘さるべき重い問題である。男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される時のやがて到來するのを私は豫感せずにはゐられない。而して私としては要求せずにはゐられない。この要求には何かの機會に於て更にいひ及ぶことがあるだらうと思ふ。

ホヰットマンが潛らねばならなかつた內外の大きな事件殊にその悲戀は、彼にとつて優れた多數の詩の母胎をなした。一八六四より一八七〇前後の諸作を讀むものは、その中に釀された豐醇な詩味に打たれずにはゐられまい。彼の價値は段々認められ始めて國內にも英國にも多くの才能ある契合者を見出すに至つたけれども、彼は底深い孤獨の寂寥の中にあつたのだ。

五十四歲の時、正月に局部的な中風症を發し、遺書を作製したといはれてゐる。この永久に若い詩人にも、あの物さびしい晚夏の風が、しめやかに吹きはじめたのだ。彼は自分の職務を捨て、ワシントンの胸友達と袂を別つて、北方の海岸に轉地べく旅程にのぼつたが、フヒラデルフヒヤで病が急に重つたので、そのまゝ弟の住んでゐるカムデンに行つてその家に身をおいた。その當時のカムデンは、無力なものや、嫌はれものや、隱棲者が隱れにゆくやうな小さな町だつた。

貧と病と老境とが彼に迫つた。然し大きな彼の心は靜かに雄々しくそれ等を受け取つて震へなかつた。以前から彼の詩を讀んで天啓の如く傾倒してゐたアン・ギルクリスト女史は、彼の淋しい孤獨の生活を知つて英國から移住して來て結婚したいと申出たけれどもも彼はそれをも靜かに拒んだ。彼はその唯一の所有なる自由を固く擁護したのだ。彼の自由は年を經るに從つて益々光輝を增した。それは段々神々しい自然を附加して來た。彼はその同體なる大地の方へと近附

いて行つた。而してそこから、一層深いところからその力は湧きはじめた。淸澄な、大きな、凡てのものを暖かくじつと包みこむやうな力が彼に光輝を加へた。『コロンバスの祈禱』、『宇宙的』といふやうな詩は五十五の時の所產だ。心から彼を慰めるものも亦彼の周圍に集つた。ギルクリスト女史は遂にフヒラデルフヒヤに居を構へて、彼の時々の訪問に氣持のよい團欒を提供し、テインバー・クリークなるスタッフォード家も亦彼の爲めに門の戶を喜んで開いた。而して、それらにも增して彼を惹きつけたものはその幼なじみの自然だつた。トラウベルとの談話に於て、彼は絕えず自然からの交渉を綿密に告白してゐる。

彼が六十三の時、彼の詩の最初の承認者であり、同時に兄の如き友であつたエマソンが死んだ。

「美しい男、自分自身の上に立脚し、凡てを愛し、凡てを抱擁し、而して太陽の如く健かで朗らかだ。」

と彼はその友を回想してゐるが、それはそのまゝ彼の肖像畫であらねばならぬ。

六十五の時、この稀代のローファーも自分の巢をミックル街に構へた。而して一八九二年、彼が七十三の三月廿六日微雨の午後に靜かに死を死んだ。

私はこの短かい彼の小傳を書きながら考へてゐる。私の眼の前には、ゆるんだ輪廓の、微笑を絕たない、放牧時代の父長じみた大きな一人の男がアキンボをして見下ろしてゐる。私は彼に見下ろされることによつて何んの怖れも感じない。却つて或る心强さを感じる。彼は十九世紀に生きてゐた亞米利加人だ。然しながら、二十世紀の日本の私の机の前に立つのを見ても彼は全然不似合ではない。悠久な人類の生活の間に一人の彼が現はれたといふのはいゝ。全然彼の現はれ出ないのを考へるのは、やはり私を淋しくさせる。私は彼が『草の葉』の第一版を世に問うた頃と覺しい肖像畫が好きだ。軟かい緣廣の帽子をやゝ斜めにかしげて、その庇の蔭に、その眼は少し細められてゐる——それは彼の眼に觸れるものゝ角々しさを削り取らうとするやうに。その眼は大きくはない。然し、美しい曲線を以て、小さな澄んだ池があるやうに皮膚によつて圍まれてゐる。その鼻の線は豐かで力强い。偏固さをすら語つてゐないではない。口は短い

鬚と楔形の髯とで圍まれてゐる。この口こそは彼を異教徒にするものに相違ない。それはさして大きくはないが見れば見る程肉感的だ。一味の淫らささへ持つてゐる。これが彼の顏を卑俗にすると同時に抵抗し難く親しみ易くする。その喉は堅固で形よい。それが男らしい肉付の肩にすわりよく乘つてゐる。雪白のシャツの胸をはだけて輕くアキンボをして立つてゐる。(さうだ、彼だ、今筆執りつゝある私の前に立つてゐるのは。)何といつてもそれは無類に見事な一つの男の典型だ。いつでも靜かに、いつでも深く、見えをしないで、凡てを受け入れながら嘗て自分を失はず、一歩々々大地を踏みしめて、この大男は自然に老いながら大道を遙か遠く旅してゆく。

完きを一人の人に期するところから錯誤は生ずる。彼の弱點を見出すことは極めて容易なことだ。何故なら彼位自分の弱點について無頓着な男はなかつたから。彼の詩が缺點に滿ちてゐるといつたところが、恐らく彼は喜んでうなづくだらう。然し彼がなし遂げた出發點をつくるにあたつて、彼以下の缺點ですまし得る人が何人あるかを考へて見ようではないか。彼は凡ての詩人がしたやうに、極めて單純なバラードの形式に於て作詩し始めた。それから彼は怯づ〳〵とスタンザを用ゆる長詩へと乘り出した。然しその韻律はトライメーター及びテトラメーターのアイアンビック形式を出でなかつた。然し彼は更に進んだ。韻律を全く捨てはしなかつたけれども無韻詩の方へと進んで行つた。彼はそれらの仕事に於て漸次自由な力を振ふに至つた。その時代の彼の詩の或るものゝ如きは、ビクトリヤ詩宗の誰に比しても、さして遜色のないものといふことが出來るだらう。けれども彼は更に一歩進み出た。而して彼に特有な主題を自家案出の不規則な形に於て表現しようと試みた。それは然し失敗に近い結果を招かねばやまなかつた。彼の內部の生活が明らかに彼自身を生み出してはゐなかつたから。そこに彼の詩の混亂時代があつた。その詩は寒く形式に整つて內容に亂れたり、內容に熟して形式に敗れたりした。しかも彼は徐ろに然し絕間なくそれを鍊へに鍊へた。在來の表現の凡ての形式から退かねばならぬことを餘儀なくされた。何故なら彼の不斷の鍛鍊によつて、彼の特異な個性が全く特異な表現を必要にするに至つたから。彼の態度は定まつた。その態度に特有のリズムが生じて來た。彼の感情を存分にいひ現はす

べき行の長さが生じて來た。それは大地から草木が生ずるやうに自然に彼の個性から生じて來た。かくて新たなる世界は、新たなる一つの詩を持つに至つたのだ。而してかゝる表現を餘儀なくした彼の個性が暗い生活から生活の釀造槽の中で、如何に調合せられ如何に醱酵したかを思ふがいゝ。

彼の弱所と缺點とを指摘するのは可能でまた當然せらるべきことだ。然しながらその詩形が詩人の好奇心から生れ出たといふ人があるなら、その人は人間の生活に潜んで働いてゐるリズムを感知し得ない無能力者だといふ外はあるまい。

彼はローファーであつた。彼の律法は彼の中にあつた。環境からは彼の生活を以て切り取つたそのもの丶外に彼の賴むものはなかつた。從つて彼は外界の規約と制度とに對して價値を否定しないとしても、極微な價値より許さなかつた。定理定説は彼に取つては死物に等しかつた。幼兒の如き素朴さを以て、彼は憚らず自分の要求を公言する。世慣れた人人の耳にはその聲は餘り時と所とを辨へない叫喚の如く聞こえたらう。然しその聲の中に震動しつゝある感情の力は、遂には頑なゝ心をも動かすと私は思つてゐる。彼は生れたまゝに育ち、育つたまゝに老い、老いたまゝに死んだ。

彼はいつでも現在に生きた。餘りに現在に生きた。現在の凡てを易々と受け入れた。それ故に人は彼の生涯を以て堆積はあつても成長のない生涯だつたといふ。或はさうかも知れない。彼は徹底的に現在に終始したが故に、それを批判すべき準繩を持たなかつたやうに見える。時代の不滿に注意してゐないではなかつた。然し彼は主義の人があるやうに、それに對して執拗な執着の態度に出でなかつたが故に、時代の不合理の一つをだに實際に提唱し矯正するところが無かつたともいへる。

けれどもそれを成就し得る人は自ら別に存するだらう。彼はもつと素朴な信賴的な態度を以て人間に向つたやうに見える。唯彼は凡てのローファーがさうであるやうに、自分自身をば決して曖昧なところにおくことはしなかつた。然り然り否々は常に彼の自然の發露だつた。自分の享有せんとする自由を必ず他に許すことを忘れなかつた。

彼はかくて先行者を有せず、從つて追隨者を退けた。彼の追隨者たらんとするものは、その瞬間に彼を見失つたであ

らう。彼は自由の中に住む人間の可能性がどこまで行き得るかを彼自身に於て表現したのだ。

然しもう私は彼を離れて行かう。彼の時代には、彼がなければならなかつた。而して今の時代には、それにふさはしい詩人が要求されてゐる。人は常に生きつゝ常に死につゝ、あらねばならぬ。而して常に死につゝ、生きつゝあらねばならぬ。

彼をして彼の道を行かしめよ。それを妨げるな。私達は私達の道を行かう。彼をしてそれを妨げしめるな。

—第四巻 了—

昭和四年七月十二日印刷
昭和四年七月十五日發行

非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番